

青森県埋蔵文化財調査報告書第101集

沖附(2)遺跡

昭和60年度

青森県教育委員会

沖附(2)遺跡発掘調査報告書正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|-----|-------|---|------------------------------------|
| 例言 | 23行 | 栗村和弘 | 栗村知弘 |
| 12 | 2行 | 上尾駄(2) | 上尾駟(2) |
| 15 | 15行 | グリッドとした | グリッド名とした。 |
| 16 | 25行 | 実測する。 | 実測した。 |
| 17 | 20行 | 運般して | 運搬して |
| 18 | 16行 | (2)遺物分類基準 | 2 遺物分類基準 |
| 20 | 29行 | 丸味 | 丸み |
| 21 | 第8図 | E P- 136 | E D- 136 |
| 22 | 26行 | L R・R L・L R・R L | L R, R L, L R・R L |
| 23 | 第9図 | (注記脱落) | 2. 床直 |
| 33 | 第16図 | E P- 146 | E D- 146 |
| 35 | 18行 | 短径2.1m ² で床面積は3.63m ² | 短径(2.1m)で床面積は(3.63m ²) |
| 40 | 第20図 | E a- 142 | E A- 142 |
| 41 | 第21図 | E G- 143 | E Q- 143 |
| 43 | 28行 | 7.55m ² | (7.55m ²) |
| 45 | 第23図 | (グリッド名脱落) | E R- 142 |
| 48 | 第25図 | (グリッド名脱落) | E O- 143 |
| 65 | 第44図 | (グリッド名脱落) | E C- 149 |
| 65 | 第45図 | (グリッド名脱落) | E O- 150まで1.4m |
| 73 | 第54図 | No.58 P-41 | No.58 4層P-41 |
| 82 | 第66図 | (グリッド名脱落) | E C- 134 |
| 85 | 第71図 | (セクション図番号脱落) | B |
| 88 | 第76図 | (セクション図番号脱落) | 3 |
| 89 | 第77図 | (拓影図番号脱落) | 11・12 |
| 91 | 第80図 | (セクション図番号脱落) | 1 |
| 92 | 第83図 | (セクション図番号脱落) | 7 |
| 109 | 第107図 | (第10号焼土状遺構グリッド名脱落) | D X- 126まで2m |
| 109 | 第107図 | (第11号焼土状遺構グリッド名脱落) | D W- 120まで2m |
| 112 | 第110図 | () | (56.175m) |
| 121 | 3行 | 第120～123図 | 第120～122図 |
| 162 | 4行 | 磨製石斧・磨石 | 磨製石斧・打製石斧・磨石 |
| 203 | 11行 | 小型・中型・大型住居跡と | (小型・中型)と大型住居跡の |
| 224 | 27行 | 土器と余市式土器群 | 土器の余市式土器群 |
| 227 | 第181図 | (拓影図番号脱落) | 第26図-2・第9図-1・第128図-68 |

青森県埋蔵文化財調査報告書第101集

沖 附(2) 遺 跡

- むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書 -

昭 和 60 年 度

青 森 県 教 育 委 員 会

序

むつ小川原開発予定地域内には、縄文時代から歴史時代に至るまで、数多くの遺跡が発見されております。青森県教育委員会は、開発に先立ち、これらの遺跡の記録保存のため、昭和46年から継続的に調査を進めてまいりました。

昭和59年度は、同開発予定地域内に所在する沖附(2)遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代後期を中心とする多くの遺物を伴う遺跡であることが明らかになりました。

本報告書は、その結果を集録したものであります。限られた時間内での作成でありますので充分とは申せませんが、本書が地方史研究や文化財保護に寄与することができれば幸いに存じます。

最後に、本書の刊行に当たり、発掘調査から報告書作成まで、多大な御協力をいただいた関係各位に対しまして、心から感謝の意を表します。

昭和61年3月

青森県教育委員会

教育長 本 間 茂 夫

例 言

- 1 本書は、昭和59年度に実施したむつ小川原開発事業に係る青森県上北郡六ヶ所村沖附に所在する沖附2遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 執筆者の氏名は、依頼原稿は文頭に記載してあるがその他は文末に記してある。なお、第2章第2節検出遺構と出土遺物の項は、遺構調査担当者と執筆担当者が協議して語句の統一をはかった。
- 3 遺構番号は、原則として現地で種類別に確認した番号を採用したが、欠番、改称もある。
- 4 挿図図版の縮尺は、それぞれスケールを付けて統一をはかった。写真図版は、一部任意の縮尺がある。
- 5 挿図図版及び表中の略号、凡例等は、各項の注に記載したが、遺構、遺物の実測図などでは次の略称、記号を使用した。また、本文中の()内数字は、推定値を示す。

| | | | | | |
|-------|----|------|----|--------|---|
| 竪穴住居跡 | 住 | ピット | 土 | 溝状ピット | T |
| 焼土状遺構 | 焼 | 配石遺構 | 配石 | 埋設土器遺構 | 埋 |
| 縄文土器 | P、 | 石器・礫 | S、 | | |
- 6 試料の同定、分析は、下記の方々に依頼した。

| | | |
|-------|------------------|------|
| 石材の種類 | 青森県立八戸高等学校教諭 | 松山力 |
| 地質・地形 | 青森県立木造高等学校稲垣分校教諭 | 山口義伸 |
- 7 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の諸氏から御教示を得た(敬称、所属機関名略、50音別)

秋元信夫、石岡憲雄、石附喜三郎、石本省三、市川金丸、稲野裕介、岩見誠夫、宇田川洋、上野佳也、江坂輝弥、遠藤香澄、小井川和夫、大沼忠春、大野憲司、小笠原忠久、小笠原好彦、小田野哲憲、葛西 励、加藤邦雄、菊池徹夫、木村英明、工藤竹久、久保泰、熊谷常正、栗村和弘、桑原滋郎、小林 克、小林達雄、近藤義郎、西連寺健、桜井清彦、桜田 隆、高橋 潤、橘 善光、千代 肇、中村五郎、野村 崇、林 謙作、羽賀憲二、船木義勝、藤田亮一、藤沼邦彦、藤村東男、藤本英夫、誉田 実、宮 宏明、村木 淳、横山英介、渡辺 誠。
- 8 引用参考文献は、頁末と巻末に収めた。本書に引用した文献は、著者名(編、発行者名)と刊行西暦年で示した。(例、青森：1986)。
- 9 青森県教育委員会から刊行した埋蔵文化財調査報告書は、「県埋文」と省略して刊行番号(集)と刊行西暦年で記載した(例、県埋文 集：1986)。ほかにもこれに準じたものがある。

目 次

| | |
|--|--|
| <p>序</p> <p>例 言</p> <p>第 章 調査に至る経過 1</p> <p> 第 1 節 調査に至る経過 1</p> <p> 第 2 節 調 査 要 項 1</p> <p>第 章 遺跡の概観 3</p> <p> 第 1 節 自然環境 3</p> <p> 1 沖附(2)遺跡周辺の地形・地質 3</p> <p> 2 基本層序 6</p> <p> 第 2 節 周辺の遺跡 8</p> <p>第 章 調査の方法と経過 15</p> <p> 第 1 節 調査の方法 15</p> <p> 第 2 節 調査の経過 16</p> <p>第 章 検出遺構と出土遺物 18</p> <p> 第 1 節 概 要 18</p> <p> 1 概 要 18</p> <p> 2 遺物分類基準 18</p> <p> 第 2 節 検出遺構と出土遺物 20</p> <p> 1 竪穴住居跡 20</p> <p> 2 ピット 59</p> <p> 3 焼土状遺構 106</p> <p> 4 配石遺構 112</p> | <p> 5 埋設土器遺構 115</p> <p> 6 溝状ピット 117</p> <p>第 3 節 遺構外出土遺物 121</p> <p> 1 縄文土器 121</p> <p> 2 土製品 160</p> <p> 3 石器、石製品 162</p> <p>第 章 考察とまとめ 202</p> <p> 第 1 節 検出遺構 202</p> <p> 1 竪穴住居跡 202</p> <p> 2 ピット 205</p> <p> 3 配石遺構 213</p> <p> 4 溝状ピット 214</p> <p> 第 2 節 出土遺物 218</p> <p> 1 縄文土器 218</p> <p> (1) 第 群土器 218</p> <p> (2) 第 群土器 219</p> <p> (3) 第 群土器 219</p> <p> 2 土製品 228</p> <p> 3 石器・石製品 228</p> <p> 第 3 節 ま と め 230</p> <p>参考引用文献 232</p> |
|--|--|

挿 図 目 次

| | |
|--|--|
| <p>第 1 図 沖附(2)遺跡周辺の地形分類図 4</p> <p>第 2 図 各遺跡内の土層模式柱状図 5</p> <p>第 3 図 遺跡内の層序及び模式断面図 6</p> <p>第 4 図 遺跡内の層序実測図 7</p> <p>第 5 図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 ... 9</p> <p>第 6 図 遺跡の地形と遺構全体図(袋入) ... 13</p> | <p>第 7 図 整理作業工程図 17</p> <p>第 8 図 第 1 号竪穴住居跡実測図 21</p> <p>第 9 図 第 1 号竪穴住居跡出土土器石器実測 図 23</p> <p>第 10 図 第 1 号竪穴住居跡出土土器拓影図(1) 24</p> |
|--|--|

| | | | | |
|------|--------------------|------|----------------------|----|
| 第11図 | 第1号竪穴住居跡出土土器拓影図(2) | 第36図 | 第15号ピット実測図 | 61 |
| |25 | 第37図 | 第15号ピット出土土器拓影図 | 61 |
| 第12図 | 第2号竪穴住居跡実測図 | 第38図 | 第16号ピット実測図 | 62 |
| 第13図 | 第2号竪穴住居跡出土土器実測・拓影図 | 第39図 | 第16号ピット出土土器拓影図 | 62 |
| |29 | 第40図 | 第18号ピット実測図・土器拓影図 | 62 |
| 第14図 | 第2号竪穴住居跡出土土器拓影図 | 第41図 | 第20号ピット実測図 | 63 |
| | 30 | 第42図 | 第20号ピット出土遺物実測・拓影図 | 63 |
| 第15図 | 第2号竪穴住居跡出土土器拓影図 | |63 | |
| | 31 | 第43図 | 第20号ピット出度石器実測図 | 64 |
| 第16図 | 第3号竪穴住居跡実測図 | 第44図 | 第21号ピット実測図・土器拓影図 | 65 |
| |33 | 第45図 | 第22号ピット実測図 | 65 |
| 第17図 | 第3号竪穴住居跡出土遺物実測・拓影図 | 第46図 | 第23号ピット実測図 | 66 |
| |34 | 第47図 | 第23号ピット出土土器実測・拓影図 | 67 |
| 第18図 | 第4号竪穴住居跡実測図 | |67 | |
| |36 | 第48図 | 第23号ピット出土土器拓影図 | 68 |
| 第19図 | 第4号竪穴住居跡出土遺物実測・拓影図 | 第49図 | 第24号ピット実測図・出土土器実測拓影図 | 69 |
| |38 | |69 | |
| 第20図 | 第5号竪穴住居跡実測図(1) | 第50図 | 第24号ピット出土土器拓影図 | 70 |
| |40 | 第51図 | 第25・26号ピット実測図 | 71 |
| 第21図 | 第5号竪穴住居跡実測図(2) | 第52図 | 第27号ピット実測図 | 71 |
| |41 | 第53図 | 第28号ピット実測図 | 72 |
| 第22図 | 第5号竪穴住居跡出土遺物実測・拓影図 | 第54図 | 第28号ピット出土土器実測図 | 73 |
| |42 | 第55図 | 第28号ピット出土土器拓影図(1) | 74 |
| 第23図 | 第6号竪穴住居跡実測図 | 第56図 | 第28号ピット出土土器拓影図(2) | 75 |
| |45 | 第57図 | 第29号ピット実測図・出土土器拓影図 | 76 |
| 第24図 | 第6号竪穴住居跡出土土器実測図 | |76 | |
| | 46 | 第58図 | 第30号ピット実測図 | 76 |
| 第25図 | 第7号竪穴住居跡実測図 | 第59図 | 第31号ピット実測図 | 77 |
| |48 | 第60図 | 第31号ピット出土土器拓影図 | 78 |
| 第26図 | 第7号竪穴住居跡出土遺物実測・拓影図 | 第61図 | 第32号ピット実測図 | 79 |
| |49 | 第62図 | 第32号ピット出土土器実測図 | 79 |
| 第27図 | 第8号竪穴住居跡実測図 | 第63図 | 第32号ピット出土土器拓影図 | 80 |
| |51 | |80 | |
| 第28図 | 第8号竪穴住居跡出土土器拓影図 | | | |
| | 52 | | | |
| 第29図 | 第9号竪穴住居跡実測図 | | | |
| |54 | | | |
| 第30図 | 第9号竪穴住居跡出土遺物実測・拓影図 | | | |
| |56 | | | |
| 第31図 | 第10号竪穴住居跡実測図 | | | |
| |57 | | | |
| 第32図 | 第10号竪穴住居跡出土土器拓影図 | | | |
| | 58 | | | |
| 第33図 | 第10・11号ピット実測図 | | | |
| |59 | | | |
| 第34図 | 第12号ピット実測図 | | | |
| |60 | | | |
| 第35図 | 第12号ピット出土土製品実測図 | | | |
| |60 | | | |

| | | | | | |
|------|-------------------|---------|-------|-------------------|----------|
| 第64図 | 第35号ピット実測図 |81 | 第94図 | 第61号ピット実測図 |99 |
| 第65図 | 第35号ピット出土土器拓影図 | ...81 | 第95図 | 第61号ピット出土土器実測・拓影図 |99 |
| 第66図 | 第37号ピット実測図 |82 | | | |
| 第67図 | 第38号ピット実測図 |82 | 第96図 | 第62号ピット実測図 |100 |
| 第68図 | 第38号ピット出土土器拓影図 |83 | 第97図 | 第63号ピット実測図 |101 |
| 第69図 | 第39・40号ピット実測図 |84 | 第98図 | 第64号ピット実測図 |101 |
| 第70図 | 第39・40号ピット出土土器拓影図 | 84 | 第99図 | 第65号ピット実測図 |102 |
| 第71図 | 第41号ピット実測図 |85 | 第100図 | 第66号ピット実測図 |102 |
| 第72図 | 第42号ピット実測図 |86 | 第101図 | 第67号ピット実測図 |103 |
| 第73図 | 第43・47号ピット実測図 |86 | 第102図 | 第68号ピット実測図 |104 |
| 第74図 | 第43号ピット出土土器拓影図 |87 | 第103図 | 第68号ピット出土土器拓影図 | ...104 |
| 第75図 | 第44号ピット実測図 |88 | 第104図 | 第69号ピット実測図 |105 |
| 第76図 | 第45・50号ピット実測図 |88 | 第105図 | 第69号ピット出土土器拓影図 | ...105 |
| 第77図 | 第45号ピット出土土器拓影図 |89 | 第106図 | 焼土状遺構実測図(1) |108 |
| 第78図 | 第45・50号ピット出土土器拓影図 | 90 | 第107図 | 焼土状遺構実測図(2) |109 |
| 第79図 | 第46号ピット実測図 |90 | 第108図 | 焼土状遺構実測図(3) |110 |
| 第80図 | 第48号ピット実測図 |91 | 第109図 | 焼土状遺構出土遺物実測・拓影図 | 111 |
| 第81図 | 第51号ピット実測図 |92 | 第110図 | 第1号配石遺構実測図 |112 |
| 第82図 | 第51号ピット出土土器拓影図 |92 | 第111図 | 第2号配石遺構実測図 |113 |
| 第83図 | 第52号ピット実測図 |92 | 第112図 | 第2号配石遺構北側出土土器拓影 |114 |
| 第84図 | 第52号ピット出土土器拓影図 |93 | | | |
| 第85図 | 第53号ピット実測図 |93 | 第113図 | 埋設土器遺構実測図 |116 |
| 第86図 | 第53号ピット出土遺物実測・拓影図 |94 | 第114図 | 埋設土器遺構出土土器実測図 | ...116 |
| 第87図 | 第54号ピット実測図 |94 | 第115図 | 第1号溝状ピット実測図 |117 |
| 第88図 | 第55号ピット実測図・出土土器拓影 |95 | 第116図 | 第1号溝状ピット出土遺物実測・ |117 |
| | 図 | | | 影図 | |
| 第89図 | 第56・57号ピット実測図 |96 | 第117図 | 第2号溝状ピット実測図 |118 |
| 第90図 | 第56号ピット出土土器拓影図 |96 | 第118図 | 第4号溝状ピット実測図 |119 |
| 第91図 | 第58号ピット実測図 |97 | 第119図 | 第5号溝状ピット実測図 |120 |
| 第92図 | 第59号ピット実測図 |98 | 第120図 | 第・群土器出土分布図 |121 |
| 第93図 | 第60号ピット実測図 |98 | 第121図 | 第群土器実測・拓影図 |123 |
| | | | 第122図 | 第・群土器拓影図 |124 |

| | | | | | |
|-------|--------------|----------|-------|---------------|----------|
| 第123図 | 第 群土器出土分布図 |125 | 第154図 | 石器実測図(4) |180 |
| 第124図 | 第 群土器実測図(1) |134 | 第155図 | 石器実測図(5) |181 |
| 第125図 | 第 群土器実測図(2) |135 | 第156図 | 石器実測図(6) |182 |
| 第126図 | 第 群土器実測図(3) |136 | 第157図 | 石器実測図(7) |183 |
| 第127図 | 第 群土器実測図(4) |137 | 第158図 | 石器実測図(8) |184 |
| 第128図 | 第 群土器実測図(5) |138 | 第159図 | 石器実測図(9) |185 |
| 第129図 | 第 群土器実測図(6) |139 | 第160図 | 石器実測図(10) |186 |
| 第130図 | 第 群土器実測図(7) |140 | 第161図 | 石器実測図(11) |187 |
| 第131図 | 第 群土器実測図(8) |141 | 第162図 | 石器実測図(12) |188 |
| 第132図 | 第 群土器実測図(9) |142 | 第163図 | 石器実測図(13) |189 |
| 第133図 | 第 群土器拓影図(1) |143 | 第164図 | 石器実測図(14) |190 |
| 第134図 | 第 群土器拓影図(2) |144 | 第165図 | 石器実測図(15) |191 |
| 第135図 | 第 群土器拓影図(3) |145 | 第166図 | 石器実測図(16) |192 |
| 第136図 | 第 群土器拓影図(4) |146 | 第167図 | 石器実測図(17) |193 |
| 第137図 | 第 群土器拓影図(5) |147 | 第168図 | 石器実測図(18) |194 |
| 第138図 | 第 群土器拓影図(6) |148 | 第169図 | 石器実測図(19) |195 |
| 第139図 | 第 群土器拓影図(7) |149 | 第170図 | 石器実測図(20) |196 |
| 第140図 | 第 群土器拓影図(8) |150 | 第171図 | 石器実測図(21) |197 |
| 第141図 | 第 群土器拓影図(9) |151 | 第172図 | 石器実測図(22) |198 |
| 第142図 | 第 群土器拓影図(10) |152 | 第173図 | 石器実測図(23) |199 |
| 第143図 | 第 群土器拓影図(11) |153 | 第174図 | 石器実測図(24) |200 |
| 第144図 | 第 群土器拓影図(12) |154 | 第175図 | 石器実測図(25) |201 |
| 第145図 | 第 群土器拓影図(13) |155 | 第176図 | 住居跡規模比較図 |202 |
| 第146図 | 第 群土器拓影図(14) |156 | 第177図 | 出土土器セット図 |220 |
| 第147図 | 第 群土器拓影図(15) |157 | 第178図 | 切断蓋付土器プロフィール |221 |
| 第148図 | 第 群土器拓影図(16) |158 | 第179図 | 第 群土器展開模式図(1) |225 |
| 第149図 | 狩猟文土器実測・投影図 |159 | 第180図 | 第 群土器展開模式図(2) |226 |
| 第150図 | 土製品実測図 |160 | 第181図 | 第 群土器文様拓影図 |227 |
| 第151図 | 石器実測図(1) |177 | 第182図 | 石器分布図 |229 |
| 第152図 | 石器実測図(2) |178 | 第183図 | 石器組成グラフ図 |229 |
| 第153図 | 石器実測図(3) |179 | | | |

表 目 次

| | |
|--|--|
| <p>第1表 むつ小川原開発事業関係報告書等一 覧表10</p> <p>第2表 周辺の遺跡地名表11</p> <p>第3表 竪穴住居跡出土石器観察表58</p> <p>第4表 第20号ピット出土石器観察表64</p> <p>第5表 第53号ピット出土石器観察表94</p> <p>第6表 焼土状遺構計測表107</p> <p>第7表 焼土状遺構出土石器観察表107</p> | <p>第8表 円盤状土製品観察表160</p> <p>第9表 遺構外出土石器観察表167</p> <p>第10表 縄文時代竪穴住居跡一覧表204</p> <p>第11表 ピット計測表208</p> <p>第12表 溝状ピット計測表215</p> <p>第13表 青森県溝状ピット出土遺跡一覧表215</p> <p>第14表 付録 青森県教育委員会埋蔵文化 財関係刊行物一覧表234</p> |
|--|--|

写 真 図 版 目 次

| | |
|--|--|
| <p>写真1 遺跡近景(1).....241</p> <p>写真2 遺跡近景(2).....242</p> <p>写真3 E G - 135ライン土層堆積状況 ...243</p> <p>写真4 遺構外遺物出土状況244</p> <p>写真5 縄文時代竪穴住居跡(1).....245</p> <p>写真6 縄文時代竪穴住居跡(2).....246</p> <p>写真7 縄文時代竪穴住居跡(3).....247</p> <p>写真8 縄文時代竪穴住居跡(4).....248</p> <p>写真9 縄文時代竪穴住居跡(5).....249</p> <p>写真10 縄文時代竪穴住居跡(6).....250</p> <p>写真11 第11号～第21号ピット(1).....251</p> <p>写真12 第22号～第26号ピット(2).....252</p> <p>写真13 第26号～第30号ピット(3).....253</p> <p>写真14 第31号～第40号ピット(4).....254</p> <p>写真15 第41号～第46号ピット(5).....255</p> <p>写真16 第46号～第53号ピット(6).....256</p> <p>写真17 第54号～第59号ピット(7).....257</p> <p>写真18 第60号～第63号ピット(8).....258</p> <p>写真19 第64号～第69号ピット(9).....259</p> <p>写真20 焼土状遺構(1).....260</p> | <p>写真21 焼土遺構(2).....261</p> <p>写真22 第1、2号配石遺構262</p> <p>写真23 埋設土器遺構263</p> <p>写真24 第1号～5号溝状ピット264</p> <p>写真25 遺構内出土土器(1).....265</p> <p>写真26 遺構内出土土器(2).....266</p> <p>写真27 遺構内出土土器(3).....267</p> <p>写真28 遺構内出土土器(4).....268</p> <p>写真29 遺構内出土土器(5).....269</p> <p>写真30 遺構内出土土器(6).....270</p> <p>写真31 遺構内出土土器(7).....271</p> <p>写真32 ピット出土遺物・遺構外出土土製品272</p> <p>写真33 ピット出土遺物(2).....273</p> <p>写真34 ピット出度遺物(3).....274</p> <p>写真35 ピット・配石遺構出土遺物278</p> <p>写真36 第・群土器276</p> <p>写真37 第群土器(1).....277</p> <p>写真38 第群土器(2).....278</p> <p>写真39 第・群土器279</p> |
|--|--|

| | | | | | |
|------|----------|-----|------|--------|-----|
| 写真40 | 第 群土器(3) | 280 | 写真46 | 石 器(4) | 286 |
| 写真41 | 第 群土器(4) | 281 | 写真47 | 石 器(5) | 287 |
| 写真42 | 第 群土器(5) | 282 | 写真48 | 石 器(6) | 288 |
| 写真43 | 石 器(1) | 283 | 写真49 | 石 器(7) | 289 |
| 写真44 | 石 器(2) | 284 | 写真50 | 石 器(8) | 290 |
| 写真45 | 石 器(3) | 285 | | | |

第 章 調査に至る経過

第 1 節 調査に至る経過

昭和44年度に発表された新全国総合開発計画で本県のむつ小川原地域は、その有力な候補地となった。同年、「陸奥湾、小川原湖地域の開発」の計画が青森県から発表された。その後、昭和46年度には、「むつ小川原地域開発構想の概要」の第一次基本計画が発表された。同時に青森県教育委員会では、開発に伴って破壊の恐れのある遺跡の所在や範囲を確認するため、分布・試掘調査を実施してその成果の概要を発表してきた。

昭和49年には、むつ小川原開発第二次基本計画の骨子が発表され、幹線道路を含む工業基地利用図が公表された。昭和52年3月、むつ小川原開発第二次基本計画に係る環境影響評価報告書（環境アセスメント）が住民に示され、同年8月閣議了解となったことをうけて開発は本格的に着工の見通しとなった。

以来、この開発事業に係るむつ小川原開発株式会社所有地内の発掘調査は、昭和49、50年に実施した新住区建設に伴う千歳（13）遺跡を初めとして、昭和54、55年には石油国家備蓄基地建設に伴うパイプライン敷設に係る表館、発茶沢の両遺跡、昭和56、57年の石油備蓄基地消火用水確保に係る弥栄平（2）遺跡、昭和58年には、むつ小川原開発工業用地予定地内に所在する大石平遺跡の調査が実施された。

昭和58年11月、むつ小川原開発株式会社から、むつ小川原開発工業用地予定地内に所在する大石平、沖附（1）の両遺跡とともに本遺跡の発掘調査の依頼があった。そこで、青森県教育委員会では同年11月発掘調査依頼を受託する旨回答し、調査計画に組み入れ、昭和59年4月から同年10月まで、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当して実施することになった。

（工藤）

第 2 節 調査要項

1 調査目的

むつ小川原開発事業に先立ち、当該地域に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

2 調査期間

昭和59年5月7日から同年10月31日まで

3 遺跡名及び所在地

沖附（2）遺跡、青森県上北郡六ヶ所村大字尾駸字沖附4の10

4 調査対象面積

10,000㎡

5 調査委託者

むつ小川原開発株式会社

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

六ヶ所村 上北教育事務所

9 調査参加者

| | | |
|-------|-------|----------------|
| 調査指導員 | 村越 潔 | 弘前大学教育学部教授 |
| 調査協力員 | 田中 澄 | 六ヶ所村教育委員会教育長 |
| 調査員 | 小山 陽造 | 八戸工業高等専門学校教授 |
| | 滝沢 幸長 | 八戸市文化財審議会委員 |
| | 佐藤 巧 | 県立郷土館学芸員 |
| | 山口 義伸 | 県立木造高等学校稲垣分校教諭 |

青森県埋蔵文化財調査センター

| | | |
|--------|-----------------------------|--------------------------|
| 所長 | 工藤 泰典 | (現 青森県地方労働委員会事務局総務課長) |
| " | 三橋 時男 | (昭和60年4月 青森県教育庁財務課副参事から) |
| 次長 | 須藤 昭二 | |
| 総務課長 | 館浦 善清 | |
| 調査第三課長 | 工藤 泰博 | |
| 主任主査 | 北林八洲晴 | (調査担当者) |
| 主査 | 成田 滋彦 | (調査担当者) |
| 調査補助員 | 野村和弘、成田 悟、鈴木ひとみ、蝦名久美子、五十嵐留理 | |

(工藤)

第 章 遺跡の概観

第 1 節 自然環境

1 沖附(2)遺跡周辺の地形・地質

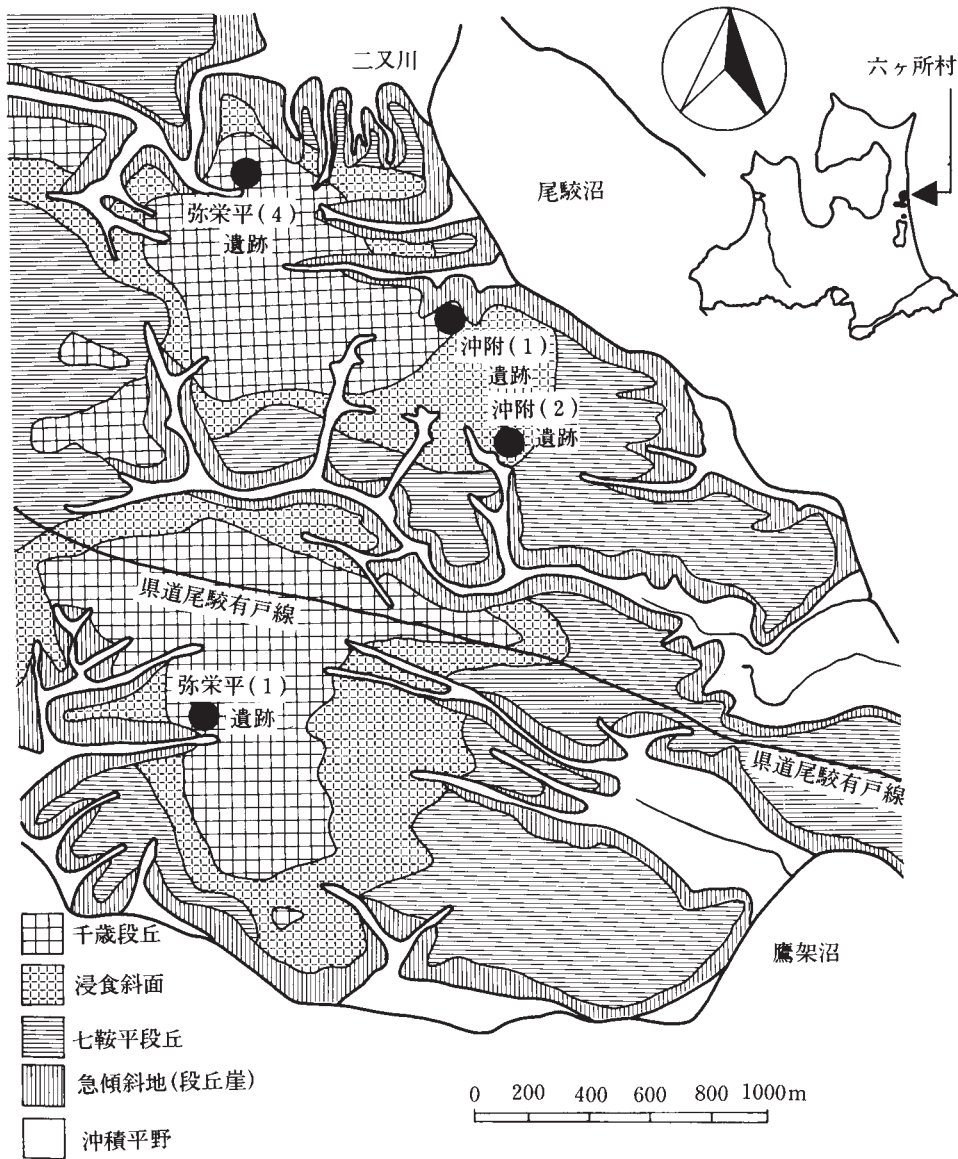
山 口 義 伸

地 形

上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側であって、この附近には北方から、尾駮沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。太平洋沿岸にはこれらの湖沼を閉塞するような形で、天ヶ森砂丘が、現汀線に沿ってほぼ南北方向に約200mの幅で分布し、さらに内陸側には標高が約5～23mにも及ぶ古砂丘が同じく南北方向に約200～300m、尾駮沼と鷹架沼との間では約800mの幅で分布している。現在、古砂丘は松林となっていて、防砂林の役割を果たしている。また、この付近には海岸段丘の発達も顕著であって、上位から吹越烏帽子段丘（標高100～140m）、長者久保段丘（標高90～130m）、千歳段丘（標高60～100m）、七鞍平段丘（標高12～50m）の4段丘が確認できる。これらの段丘のうち、本遺跡が立地しているのは千歳段丘から下位の七鞍平段丘へ連続する浸食斜面上である。

本遺跡は約4km内陸側の、尾駮沼南方約400m地点に立地している。この付近は、北方にほぼ東流して尾駮沼に注ぐ二又川がある。南方には、ほぼ東西方向に走る県道尾駮・有戸線に沿って、その北方200～400mを東流する中規模な浸食谷があって尾駮沼に注いでいる。この両浸食谷にはさまれた南北の幅は約1,500mである。東方は尾駮沼に臨む段丘崖であり、南北両端も浸食谷に臨む段丘崖となっていて、いずれも急峻である。この地域は、やや西よりのところにほぼ円形状の千歳段丘が小丘状に分布し、その東方には浸食斜面および七鞍平段丘が舌状に張り出すように分布している。また、上述の両浸食谷の、段丘面に谷頭をもつ小規模な支流がいくつかあって、多少起伏に富む地形ではあるが、全体的には南北方向に緩やかに起伏する地形であって、東方にも緩傾斜している。（第1図）

本遺跡は、標高47～56mの千歳段丘から下位の七鞍平段丘へ連続する浸食斜面上に立地している。本遺跡から北西方に約400m離れて沖附(1)遺跡がある。この間に比高差約5mの東西方向に長円形な凹地状の湿地帯があり、南側には、本地域南方を東流して尾駮沼に注ぐ浸食谷の、浸食斜面に谷頭をもち、ほぼ南流している支流があって、その支流の浸食作用によって南方への急斜面となっている。このため、本遺跡の遺構は馬の背状の鞍部から南斜面にかけて分布している。



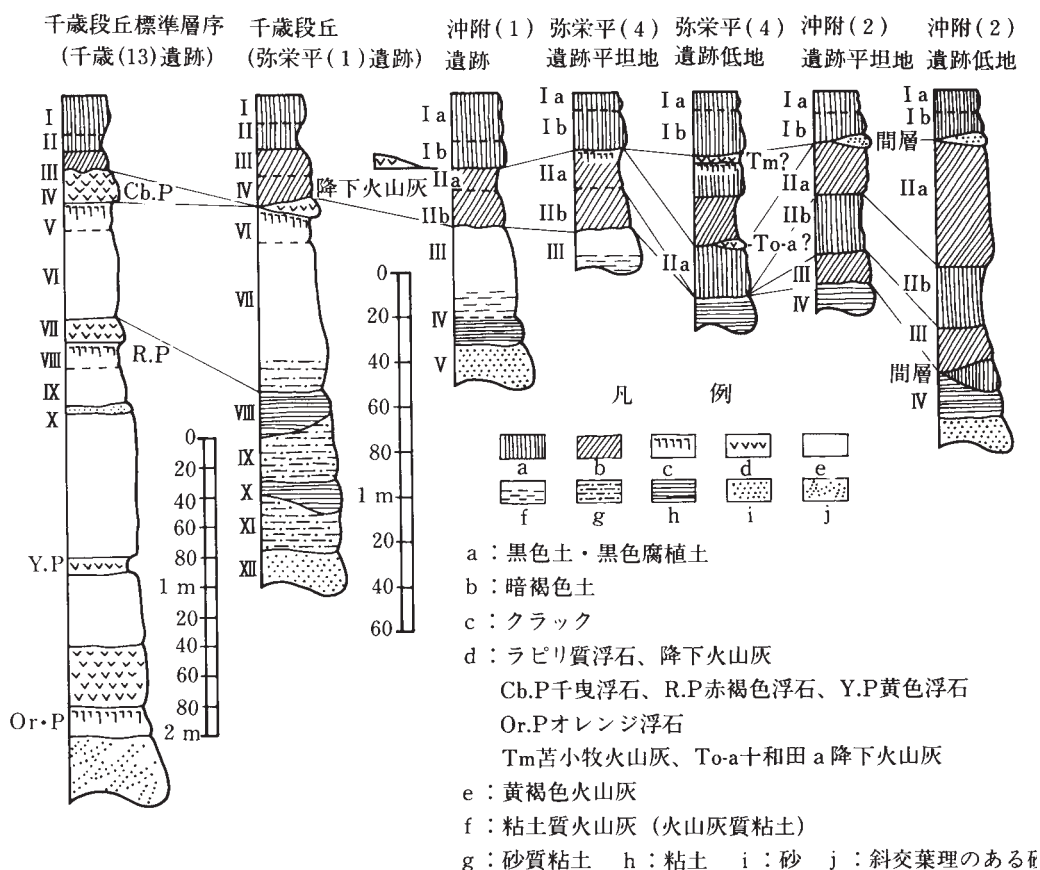
第1図 沖附(2)遺跡周辺の地形分類図

地 質

下北半島の頸部を構成している地質のうち、基盤をなす地層は新第三系中新統の泊安山岩類及び鷹架層である。また、本地域に最も広く分布する地層は新第三系鮮新統の浜田層及び第四系下部洪積統の野辺地層である。新第三系中新統の泊安山岩類は安山岩質角礫岩及び同質集塊岩からなっていて、本遺跡北方の老部川に臨む段丘崖にみられるが、主に本地域北方の山岳地

に広く分布している。中新統の鷹架層は主として塊状のシルト質砂岩からなり、泊安山岩類の上部と指交関係にあって鷹架沼を中心にほぼ南北に分布している。新第三系鮮新統の浜田層は塊状無層理の砂質シルト岩と砂岩との互層からなり、下位の中新統を不整合におおっていて、本地域に広く分布している。また、第四系下部洪積統の野辺地層は全体的に砂とシルトの互層からなり、下位の新第三系を不整合におおい、ほぼ水平に堆積していて、一般に段丘構成層におおわれている。

千歳段丘の段丘構成層については、千歳(13)遺跡の立地する。本段丘の比較的標高の高い所では斜交葉理の発達した砂層(野辺地層)に不整合に本段丘構成層としての茶褐色及び黄褐色の粘土質火山灰層(層厚約300cm)が堆積しているが、千歳段丘の比較的標高の低い所及び本遺跡の立地する浸食斜面においては段丘構成層の堆積状況がわるく、下位より塊状で淘汰不良の中～粗粒砂層、火山灰質の砂質粘土層、そして粘土質の黄褐色火山灰層(砂の混入や腐植化の進行等により二次的な風成堆積状況を示す)の順で堆積している。なお、本遺跡及び周辺遺跡内の基本層序及びその対比については第2図に示した。



第2図 各遺跡内の層序模式柱状図

2 遺跡の基本層序

本遺跡内の基本層序と模式断面については第3図に示した。各層の概要は次のとおりである。

a層 暗黒褐色土層(10cm) 表土あるいは耕作土。沖附(1)、弥栄平(4)の各遺跡の a層 に対比される。草根を多量に含んでいて、全体的にしまりがなくソフトな感じである。鞍部の平坦地においては下位 b層とともに耕作によって攪乱されていて、火山灰質粘土をブロック状に混入したり、また、層全体が硬くてもろい感じである。

b層 黒色腐植質土層(10cm) 沖附(1)、弥栄平(4)の各遺跡の b層 に対比される。草根を含み、粘性・湿性が多少あり、硬さもある。全体的に格子状の割れ目が発達していて、 a層と区分できる。なお、乾くと灰黒色に変色する。斜面においては、平坦地よりも一層粘土質であり湿性も充分である。

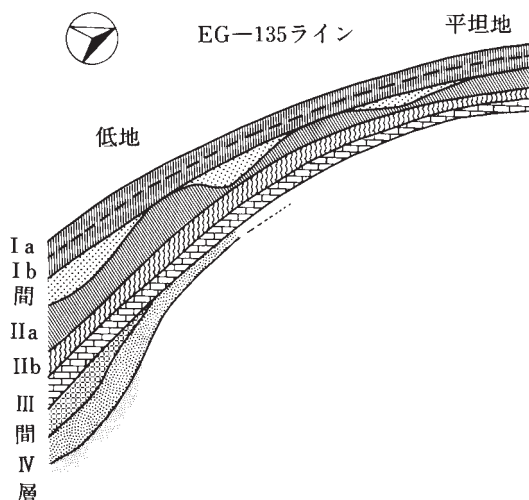
間層 暗茶褐色火山灰質土層(0~10cm) b層の下位にレンズ状に挿入している。層全体がソフトな感じがして、多少砂質となっている。斜面から低地にかけては約10cmの厚さをもって、帯状に分布して黒褐色を呈する。

a層 暗褐色土層(20~60cm) 沖附(1)、弥栄平(4)の各遺跡の a層 に対比される。土壌化の進行している漸移層で、最上部に縦のクラック(crack)が発達している。全体的に粘性・湿性があり、しまっている。乾くと灰褐色に変色し、格子状の割れ目が発達する。なお、斜面から低地にかけては黒色腐植質土となり粘土質である。

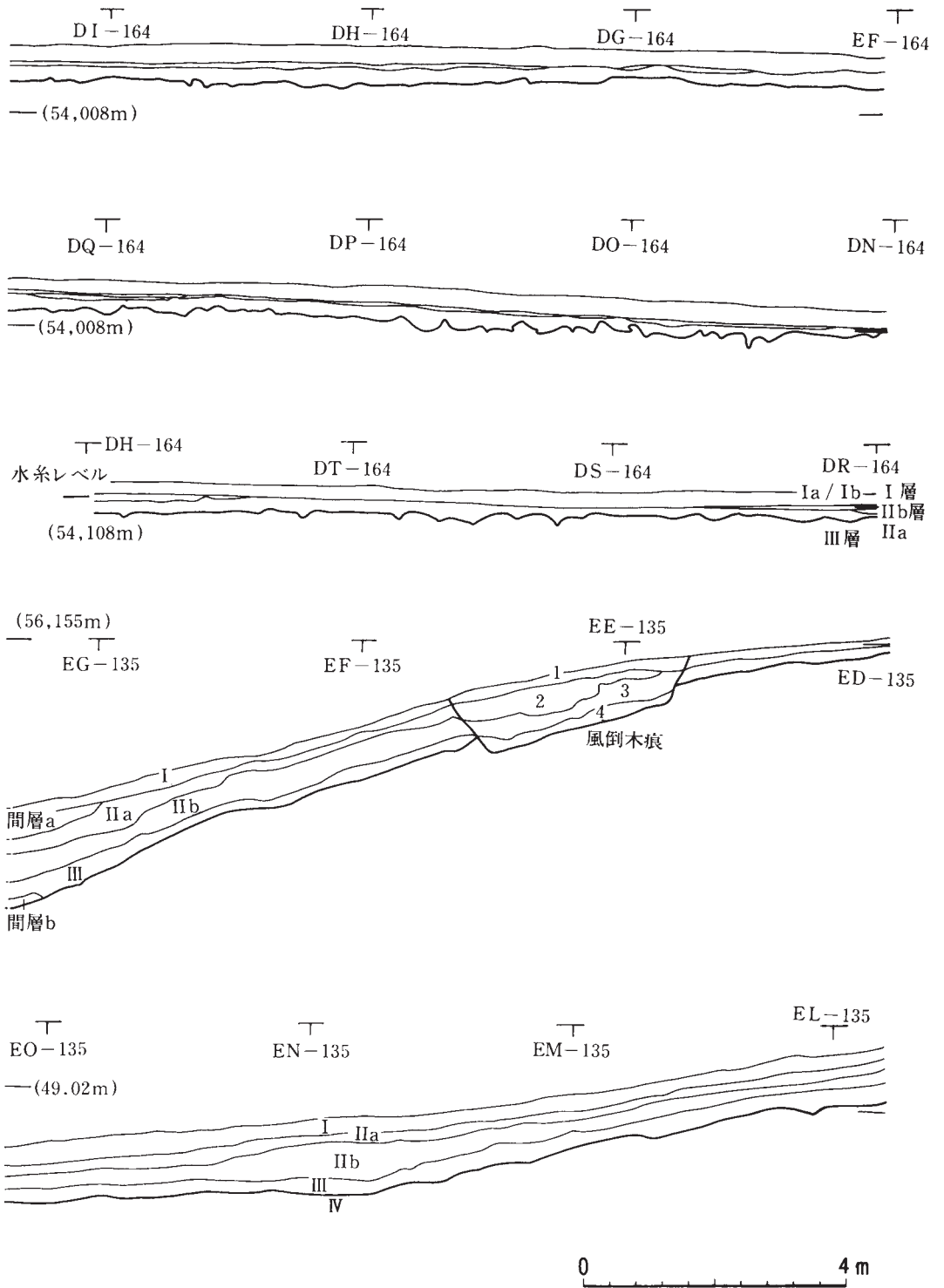
b層 黒褐色腐植質土層(20~30cm) 沖附(1)、弥栄平(4)の各遺跡の b層 に対比される。上位の a層に酷似していて、より腐植質である。斜面から低地にかけては a層と同様に黒色腐植質土になるため層区分は困難である。ただ a層と b層の境界付近に黒褐色で粘土質の砂がブロック状に挿入したり、あるいは a層が格子状の割れ目が発達するのに対して b層は割れ目の発達がなく、表面がなめらかであったりすることから、かろうじて層区分できる状況である。

層 黒褐色土層(20cm) 腐植質であり、全体的に粘土質である。ブロック状に砂質粘土を含む。低地においては、ややしまりのある砂質粘土に変化する。

間層 黒色泥炭質土層(0~10cm) 低地にのみ分布し、やや砂質である。



第3図 遺跡内の層序及び模式断面図



第4図 遺跡内層序実測図

層 暗褐色火山灰質粘土層（20cm） 鞍部の平坦地では火山灰質粘土であるが、斜面から低地にかけては砂質粘土に変化し、下位に中～粗砂が分布している。

以上のことから、本遺跡内が浸食斜面のしかも浸食作用による馬の背状の鞍部から斜面にかけて立地しているため、黄褐色火山灰の分布はみられず、すべて黒色～黒褐色の腐植質土だけである。ただ、EG-135ラインの風倒木痕からは上下2枚の降下火山灰層が確認された（第3図）。いずれもb層より下位に位置するものと考えられる。上位層は灰褐色火山灰で、下位層は青灰色火山灰である。本遺跡北方に位置する沖附(1)遺跡でも上下2枚の降下火山灰が確認され、本遺跡に分布する火山灰と同様な特徴をもっていて、いずれも平安時代の竪穴住居跡と密接な関係がある。このことから、上位層は苫小牧火山灰、下位層は十和田a降下火山灰と考えられる。

なお、本遺跡内から出土する遺物は縄文時代のもので、b層下位からa層にかけて縄文時代後期、b層から前期初頭の土器が出土している。

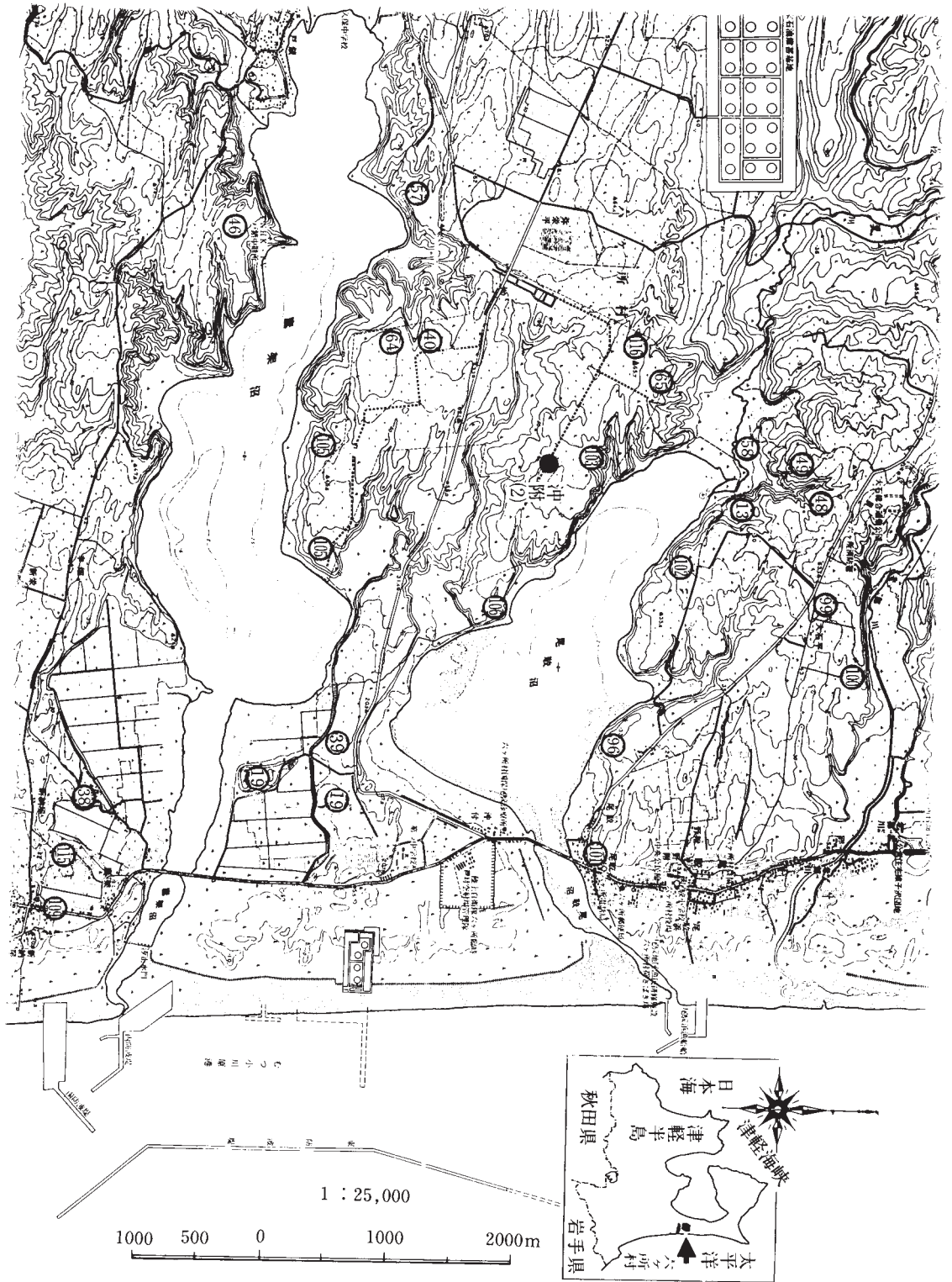
参考文献

- 町田、新井、森脇 1981 科学 V01.51. 9
三辻、松山、山本、高林 1983 古文化財教育報告 12
青森県教育委員会 1976 千歳13遺跡発掘調査報告書（県埋文27集）
" 1982 発茶沢遺跡 "（" 67集）
" 1983 鶉窪遺跡 "（" 76集）
" 1985 大石平遺跡 "（" 90集）

第2節 周辺の遺跡

現在のところ、六ヶ所村には125箇所以上の遺跡が分布して、昭和46年度の分布調査以降試掘、発掘調査が毎年実施され、その概報、報告書の刊行冊数は25冊になる見込みである（第1表参照）。そしてこの冊数は青森県教育委員会から刊行された埋蔵文化財調査報告書の約25%にあたる。ここではそれらの報告書のすべてについて記述する紙幅がないため、それらの主な遺跡を図表化して第5図と第2表に示した。遺跡の時代は、縄文時代各期、弥生時代、（続縄文時代）平安時代、中世、近世と多くの時代にわたっているが、今のところ旧石器時代から縄文時代草創期の間および古墳から奈良時代までの単独遺跡は未発見となっている。

本遺跡では、縄文時代前期、中期、中期末～後期初頭の縄文土器が出土したことから、村内では周辺の遺跡のなかでもとりわけ表館、発茶沢、弥栄平(1)(2)、沖附(1)、大石平、富ノ沢、鷹架、上尾駈、家ノ前などの諸遺跡と結びつきが深いと考えられる。（北林）



第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (六ヶ所村管内図を引用)

第1表 むつ小川原開発事業関係報告書等一覧表

| 番号 | 調査年度 | 刊行年 | 刊行番号(集) | 報告書名 | 遺跡名・備考 |
|----|-------|-----|---------|------------------------------------|--|
| 1 | 46 | 48 | 1 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査報告書 | 六ヶ所村遺跡番号1～65と同じ |
| 2 | 47 | 48 | 3 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 表館(1)、発茶沢(1)、原原種農場(1)→弥栄平(1)に変更 |
| 3 | 48 | 49 | 9 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 弥栄平(3)、発茶沢(2)、富ノ沢(2) |
| 4 | 48 | 49 | 10 | むつ小川原開発に伴う新住区予定地域内埋蔵文化財分布試掘調査報告書 | 千歳(2)、千歳(7)、千歳(13) |
| 5 | 49 | 49 | 18 | むつ小川原開発に伴う新住区予定地域内千歳遺跡(13)発掘調査略報 | |
| 6 | 49 | 50 | 24 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 睦栄(1)、発茶沢(3)、大石平、富の沢(2) |
| 7 | 49,50 | 51 | 27 | 千歳遺跡(13)発掘調査報告書 | (むつ小川原・新住区関係) |
| 8 | 50 | 51 | 28 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 弥栄平(2)、弥栄平(4)、新納屋(1) |
| 9 | 51 | 52 | 36 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 幸畑(1)、幸畑(4)、幸畑(6) |
| 10 | 52 | 53 | 42 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 表館(1)、105号、弥栄平、室ノ久保(3)、鷹架沼窪穴、新納屋(2)、幸畑(3) |
| 11 | 53 | 54 | 48 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 102号→上尾駈(2)、家の前→同(1)、103号→沖附(1)、104号→沖附(2) |
| 12 | 53 | 54 | 50 | むつ小川原臨港道路に係る埋蔵文化財発掘事前調査報告書 | 発茶沢(1)、表館(2) |
| 13 | 54 | 56 | 61 | 表館遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 14 | 54 | 56 | 62 | 新納屋遺跡(2) | (むつ小川原関係) |
| 15 | 54 | 56 | 63 | 鷹架遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 16 | 54,55 | 57 | 67 | 発茶沢遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 17 | 57 | 59 | 81 | 弥栄平(2)遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 18 | 58 | 60 | 90 | 大石平遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 19 | 58 | 60 | 91 | 表館遺跡Ⅱ | (むつ小川原関係) |
| 20 | 56,57 | 60 | 94 | 国道388号線(鷹架大橋)橋梁整備事業に係る埋蔵文化財試掘調査報告書 | 幸畑(7)、鷹架沼窪穴、弥栄平(1)・(3)遺跡(文化課、昭和56、57年調査) |
| 21 | 60 | 61 | 96 | 発茶沢遺跡発掘調査報告書 | (むつ小川原関係) |
| 22 | 59 | 61 | 97 | 大石平(1)(2)遺跡発掘調査報告書 | (むつ小川原関係) |
| 23 | 59 | 61 | 98 | 弥栄平(1)遺跡発掘調査報告書 | (むつ小川原道路関係) |
| 24 | 59 | 61 | 100 | 沖附(1)遺跡発掘調査報告書 | (むつ小川原関係) |
| 25 | 59 | 61 | 101 | 沖附(2)遺跡発掘調査報告書 | (むつ小川原関係) |
| 26 | 60 | 62 | | 弥栄平(4)遺跡 | (むつ小川原関係) |

第2表 周辺の遺跡地名表

| 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 立地 | 地目 | 時代・時期 | 遺構・遺物 | 報告書番号・備考 |
|------|--------|----------------|----|-------|------------------------|--|------------------------------|
| 13 | 上尾駁(1) | 尾駁字上尾駁 | 台地 | 畑山林 | 縄文(前・後) | 縄文土器、石器 | 1集、60年試掘 |
| 19 | 表館 | 鷹架字発茶沢 | 台地 | 畑山林 | 縄文(早～後) 弥生 平安 | 住居跡(縄文・平安)、溝状ピット、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、製塩土器、鉄製品、土製品 師 | 1、3、42 61、91集 |
| 38 | 鷹架貝塚 | 鷹架字道ノ下 | 台地 | 山林畑 | 縄文(晩)世 近 | 縄文土器、陶器、貝殻 | 1集 |
| 39 | 発茶沢(1) | 鷹架字発茶沢 | 台地 | 山林畑 | 縄文(早～後) 弥生 平安 | 住居跡(縄文・平安)、土壇、溝状ピット、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、陶器、旧石器、石器、鉄製品、土製品、石製品 | 1、3、9 24、50、67 集 |
| 40 | 弥栄平(1) | 尾駁字表館 | 台地 | 畑山林 | 縄文(中・後) | 住居跡群、縄文土器、甕棺土器、人骨(女)石器、貝殻、土壇墓、配石遺構 | 1、3、94 98集 |
| 48 | 富ノ沢(1) | 尾駁字上尾駁 | 台地 | 畑 | 同上 | 住居跡、縄文土器、石器、石製品、土製品 | 1、9集 |
| 49 | 富ノ沢(2) | 同上 | 台地 | 山林 | 同上 | 縄文土器、石器 | 1、24集 |
| 57 | 弥栄平(2) | 尾駁字表館2・29 | 台地 | 畑原野 | 縄文(後)世 弥生 平安 | 住居跡(縄文)、配石遺構、土壇、縄文土器、石器、弥生土器、土師器 | 1、42、81 集(旧弥栄平) |
| 58 | 尾駁沼西岸 | 尾駁字上尾駁 | 低地 | 水田原野 | 縄文 | 縄文土器 | 1集 |
| 64 | 弥栄平(3) | 尾駁字表館 | 台地 | 畑原野 | 縄文(早～後) | 住居跡、土壇、縄文土器、石器 | 1、24、28 94集(旧弥栄平(2)) |
| 65 | 弥栄平(4) | 尾駁字上尾駁 | 台地 | 畑山林 | 縄文(後) 弥生・続 縄文、平安 | 住居跡、方形土壇(平安)、石棺墓(縄文)縄文土器、石器、弥生・続縄文土器、土師器、須恵器、鉄製品、石製品、鉄滓 | 1、9、24 28集(旧弥栄平(3))、60年発掘 |
| 96 | 家ノ前 | 尾駁字家ノ前4の1 | 台地 | 畑山林 | 縄文(早～晩)弥生、平安 | 住居跡、土壇、縄文土器、石器、弥生土器土師器、須恵器 | 48集 |
| 99 | 大石平(1) | 尾駁字野附569,604ほか | 台地 | 畑原野 | 縄文(早～晩) 弥生 | 縄文一住居跡、土壇、溝状ピット、焼土、屋外炉、配石遺構、柱穴跡、土器、石器、石製品、土製品、弥生一住居跡、竪穴遺構土壇、焼土、埋設土器遺構、弥生土器 | 24、90、97 集 60年(第3次)発掘 |
| 100 | 大石平(2) | 尾駁字野附 | 台地 | 畑荒地山林 | 縄文(早・後) | 縄文土器、石器、配石遺構、 | 24、90、97 集 |
| 101 | 尾駁(1) | 尾駁字野附 | 台地 | 宅地 | 縄文(晩) | 縄文土器 | 24集 |

| 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 立地 | 地目 | 時代・時期 | 遺構・遺物 | 報告書番号・備考 |
|------|--------|-----------------|----|---------|--------------------------|---|---------------------------|
| 102 | 上尾駄(2) | 尾駁字上尾駄 269ほか | 台地 | 畑 山林 | 縄文(早 前・後) 弥生 平安 | 住居跡(縄文・平安)、配石遺構、土壙 縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵 器、土製品、鉄製品、石製品、鉄滓 | 48集 60年発掘 (旧102号遺跡) |
| 103 | 沖附(1) | 尾駁字沖附 4の10 | 台地 | 畑 山林 | 縄文(後) 弥生 平安 | 住居跡(縄文・平安)、土壙(縄文、平安) 縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵 器、土製品、石製品、鉄製品 | 48集(試掘) 100集 |
| 104 | 沖附(2) | 尾駁字沖附 | 台地 | 畑 山林 | 縄文(前 中・後) | 住居跡、土壙、溝状ピット、配石遺構、埋 設土器、縄文土器、石器、石製品、土製品 | 48、101集 |
| 105 | 発茶沢(2) | 鷹架字発茶沢 2の14 | 台地 | 畑 山林 | 縄文(早・ 中・後) 平安 | 土壙、縄文土器、石器、土師器 | 48集 |
| 106 | 沖附(3) | 尾駁字沖附 | 台地 | 山林 | | | (旧106号遺跡) |
| 109 | 新納屋(2) | 鷹架字道ノ下89 | 台地 | 畑 | 縄文(早・後) | 住居跡、土壙、縄文土器、石器 | 42、62集 |
| 115 | 鷹架 | 鷹架字道ノ下58/15 | 台地 | 畑 | 縄文(早 前・後) | 土壙墓、土壙、縄文土器、石器 | 63集 |

第 章 調査の方法と経過

第 1 節 調査の方法

1 ^{グリッド} 調査区の設定

調査予定地は、旧農林省馬鈴薯原原種農場内の圃場、防風林などであることから、従来、六ヶ所村で実施してきた調査方法を準用することにした。また、昭和53年度に本遺跡（当時104号遺跡）と隣接の沖附（1）遺跡（当時103号遺跡）は、ともに試掘調査され（県埋文48集：1979）本年も同時に着手されることもあって、両遺跡の調査区は共用できるように設定することで担当者間の合意ができていた。調査区は、まず本遺跡の東側に設定して、それを沖附（1）遺跡へ延長していった。

調査区は、旧圃場の南北線を利用して任意に設定した。旧圃場の南北線は地図上の真北から25度東へ偏向している。南北線の任意の2点を結んで南北方向の基準線を定め、これに直交するラインを東西方向の基準線とし、これらの基準線を4m毎に区切って杭を打ち、両遺跡全体に4m四方の調査区を設置できるようにした。しかし、実際上は16m毎に1本の割合いで基準杭を打ち、必要に応じて四分割した。グリッド名を付けるため東西軸に算用数字、南北軸には2字合わせたアルファベット（AA、DZなど）を配置して、縦横を組み合わせグリッドとした。東西軸の西端（沖附（1）遺跡）が^{ゼロ}0、東へ向けて1、2、3……（算用数字）南北軸の北端をAAにして南に向けてAB、AC、……、BA、BB、……（アルファベット）を配した。具体的なグリッド名は、各グリッドの北西隅の杭から採った。ちなみに、本遺跡の調査区は、東西軸が100～173（292m）、南北軸がDF～EY（176m）の範囲内にある。

2 発掘調査の方法

基本的にはグリッド法と分層発掘法を併用した。具体的には4m四方のグリッド設定、表土の粗掘り、遺構の確認、遺物の検出、遺構精査実測、遺物の記録、取り上げ、写真撮影などを順次繰り返して調査区を拡張する方法をとった。

粗掘り - 原則として作業員3人一組みにして4m×16m（64m²）の調査区を担当する。その際ベテランの組を先行させ、現場の様子を把握する。遺構、遺物の出かたによって全面的な調査に移行する。

遺物 - 出土量がある程度まとまった段階で分布図、微細図を作り、写真を撮って遺物の種類別に遺物カードを付けてビニール袋に入れる。遺構内、遺構外とも、同じ手順である。

遺構 - 確認写真をとり種別毎に通し番号を付ける。2分法か4分法によって土層観察用断面

を残して掘り下げる。遺物が出土した場合は必要に応じて微細図をとり、土層断面を実測し写真を撮って完掘した。実測図は20分の1か10分の1の縮尺で、土層の判別には「標準土色帖」を使用する。精査の結果、遺構と判断できない落ち込みは没にした（欠番となる）。

基本層序 - 堆積状況を観察して記録するため、人為的な攪乱、耕作などのない場所を適宜選定してセクションベルトを設け実測した。基本土層の注記は、山口調査員が担当した。

写真撮影 - 35ミリ版のカメラを2台併用して、カラーリバーサルとモノクロのフィルムを使用した。撮影前に遺跡名、遺構・グリッド名、撮影方向、年月日などを記入した小黒板を撮ってフィルムの整理、貼付を容易にできるようにした。写真は、全景、近景、進行状況、出土状況、確認、細部、完掘など天候に応じて適時撮影した。

自然科学応用の調査が必要な場合は、それぞれの専門家、機関に依頼できるように手配した。

（北林）

第2節 調査の経過

発掘調査は、昭和59年5月7日から同年10月31日まで実施した。当初の予定では4月16日が開始日であったが、豪雪のため雪だけが遅れて延期となったものである。調査の準備は、全員が手分けして担当した。

調査区の設定と粗掘りは、調査地区の北東隅に位置するDF - 164～172、DZ - 164～173のグリッド杭を結ぶ範囲から開始した。現地は圃場で、粗掘りは相当なスピードで進行したが遺物はほとんど出土しない。落ち込みも数箇所確認したが抜根跡のようである。

5月下旬、粗掘りはEC - 151グリッド付近に移り、EAラインを中心として基準杭を西側防風林に向けて拡張した。この付近は昭和53年度の試掘調査では遺構、遺物が発見されたところである。遺構、遺物が次々に現れるが、圃場内出土の遺物はトラクターによって完全に攪伴され、細片化している。雨天の日が多くなる。

6月初旬、調査地区を東西に走っている農道の南側斜面と防風林内にテストトレンチを設けたところ、南側斜面から縄文時代前期初頭の丸底となる土器片がかなりまとまって出土したので、確認した遺構の精査とともに手分けして実測する。粗掘りは試掘先行の組をつくり、様子を探りながら進めた。この頃の粗掘り面積は、5,376²m、出土遺物はダンボール箱で24箱である。

7月初旬は雨模様の天気続き、時々マムシも出現する。7月20日、県内及び東北地方に梅雨明け宣言が出て、セミが鳴き出し夏日に入る。粗掘り面積8,500²m、竪穴住居跡4軒（完了2軒）、ピット32基（28基完了）、溝状ピット2基（完了）、焼土状遺構6基（完了）となる。

8月に入って真夏日も続くようになり、粗掘りは農道南側斜面、西側防風林内及びその西側に分散して行う。また、基本土層観察用溝をEE - 135～E - 135グリッドの東側に設けて深

掘りをする。8月13日からお盆休みに入り現場の作業は中断する。

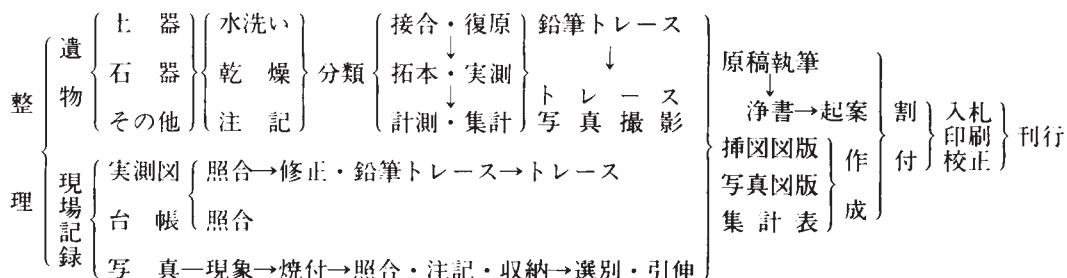
8月20日 調査再開。プレハブの西側に位置するDS-122~128、EB122~128グリッドを中心に遺構精査、遺物の実測、取り上げを始める。この西側防風林内の遺物は、トラクターの被害を受けていない良好な保存状況となっている。

8月末近くになって、むつ小川原開発事業に係る発掘調査の調査工程について打ち合わせを行なったところ、沖附(1)遺跡の東側が本遺跡の北側に延びて、それらも本年度中に調査を終了することになり、本遺跡の調査と併行しながら、沖附(1)遺跡の一部を発掘することになった。そこで一部の調査補助員と作業員を沖附(1)遺跡の発掘準備に振り分けて、基準杭の延長、立木処理、笹刈りなどを行う。沖附(1)遺跡は平安時代の竪穴住居群(集落跡)で住居跡は埋もれきらないまま凹地状になっているため、遺構の確認は容易である。

9月に入って、沖附(2)遺跡の調査と併行して沖附(1)遺跡第29号竪穴住居跡の精査に着手する。沖附(2)遺跡では農道の南側斜面の粗掘りに移り、第5~9号竪穴住居跡、第2号配石、第68、69号ピットなどの落ち込みを確認して、精査、実測、遺物の取り上げなどを繰り返して調査を進めた。沖附(1)遺跡では、笹刈り、立木処理、粗掘りの範囲を拡大して、竪穴住居跡3軒、各種ピット12基(縄文、平安)、埋設土器遺構2基(縄文)などの落ち込みを確認して、次々に完掘して調査を続行し、その粗掘り面積は約3,000㎡となる。

10月20日 沖附(2)遺跡の調査を終了して、全員が沖附(1)遺跡東側に移動して精査に当たる。沖附(2)遺跡の粗掘り面積は16,188㎡ほどになる。10月30日こちらの発掘調査も事故なく無事終了する。その後、作業員休息所の解体、出土遺物、消耗品の梱包などを手分けして行い、翌31日器材、遺物などをトラックで運搬して現場の作業は終了した。

現地での発掘調査が終了後、本報告書が刊行されるまで、次のような内容と工程で整理作業が行われた。



(北林)

第7図 整理作業工程図

第 章 検出遺構と出土遺物

第 1 節 概 要

1 概 要

沖附(2)遺跡の発掘調査で検出した遺構と出土した遺物は、次のとおりである。

検出した遺構は、竪穴住居跡10軒、ピット52基、焼土状遺構18基、溝状ピット 4 基、配石遺構 2 基、埋設土器遺構 1 基、計87である。竪穴住居跡に伴出した土器は、縄文時代後期前半の型式に編年されている。なお、本書では土壇、小竪穴状遺構で溝状ピット以外のものをピットとした。

出土遺物は、縄文土器62箱、石器類51箱、その他土壌サンプル等 2 箱、計115箱である。

縄文土器は、後期前半の類が主流を占めている。そのほか縄文前期初頭、中期初頭の土器が少量出土した。これらの出土土器でおよその器形を実測できるところまで復原した土器は約60個である。

石器、石製品は、石鏃、石錐、石筥、石匕、不定形石器、磨製石斧、打製石斧、磨石、^{すり} 敲石^{たたき}、^{くぼみ}凹石、砥石、礫石器、石皿、円盤状石製品、有孔石製品などが遺構内外から341点出土した。

土製品は、円盤状土製品 7、その他 1、計 8 点出土した。(北林)

(2) 遺物分類基準

ア 土 器

本遺跡から出土した土器の時期は、縄文時代前・中・後期である。遺物の記載は遺構内・遺構外ごとに行い、土器の分類は下記のように行った。

第 群土器(縄文時代前期)

- 1 類 早稲田 6 類・長七谷地 群に相当するもの
- 2 類 芦野 群・表館式に相当するもの
- 3 類 1・2 類のいずれかに相当するもの

第 群土器(縄文時代中期)

- 1 類 円筒土器上層 a 式に相当するもの

第 群土器(縄文時代後期)

本群土器は、文様施文・器形の差異から 1 類から10類までに分類した。

- 1 類 コ状文様を基本としているもの
- 2 類 渦巻文様を基本としているもの

- 3類 口縁部文様帯のみのもの
- 4類 体部文様帯のみのもの
- 5類 底部のみのもの
- 6類 無文研磨土器
- 7類 赤色顔料塗布土器
- 8類 撚糸圧痕・縄文・絡糸体を施文しているもの
- 9類 切断蓋付土器
- 10類 縄文地に沈線を施文しているもの

イ 石器

本遺跡からは、石鏃、石錐（ドリル）、石篋、石匕、不定形石器、磨製石斧、打製石斧、磨石、磨・敲・凹石類、敲石、礫器、石核、砥石・石皿類、円盤状石製品、有孔石製品が出土した。石器は種類ごとに下記のように分類した。

第 群石器（剥片石器）

- | | |
|------------|----------|
| A類 石鏃 | D類 石匕 |
| B類 石錐（ドリル） | E類 不定形石器 |
| C類 石篋 | |

第 群石器（礫石器）

- | | |
|------------|-----------|
| F類 磨製石斧 | J類 敲石 |
| G類 打製石斧 | K類 礫器 |
| H類 磨石 | L類 石核 |
| I類 磨・敲・凹石類 | M類 砥石・石皿類 |

第 群石器（石製品）

- N類 円盤状石製品
- O類 有孔石製品

石器観察表の石材の項目には、下記の略号を用いた。

- | | | | | | |
|------|-------|--------|--------|---------|------|
| A玉髓 | B珪質頁岩 | C緑石頁岩 | D輝緑凝灰岩 | E凝灰岩 | F頁岩 |
| G砂岩 | Hチャート | I安山岩 | J流文岩 | K輝緑岩 | L閃緑岩 |
| M花崗岩 | N石英斑岩 | O花崗閃緑岩 | P翡翠 | （成田(滋)） | |

第 2 節 検出遺構と出土遺物

1 竪穴住居跡 (第 8 ~ 32 図)

縄文時代の竪穴住居跡は 10 軒検出した。竪穴住居跡は、調査地区の西側に第 4 号住居跡から南側の第 6 号住居跡にかけて孤状に配置している。

第 1 号竪穴住居跡 (第 8 ~ 11 図)

〔位置と確認〕

本住居跡は、調査地区の中央部で E D - 135、136 グリッドの急斜面に位置している。第 a 層を精査中に多量の土器と円形の黒褐色土の落ち込みを確認した。

〔重複〕

認められなかった。

〔平面形・規模〕

平面形は、南側が斜面上に位置しているために、住居跡のプランを確認できず、推定ラインとなっているが、東・西側がやや不整な円形を呈する。規模は、長径 (3.1m) ・短径 2.9m で床面積は (7.28m²) である。

〔壁・床面〕

壁は、東・西・北壁が住居跡の上端から床面にかけて傾斜しており、堅緻なつくりである。南壁は不明である。壁高は東壁 30cm、西壁 24cm、北壁 40cm である。

床面は、北側から南側にかけてやや傾斜している。また、炉の周辺は固いがほかは軟弱なつくりである。

〔柱 穴〕

pit は 6 個検出した。pit の位置は pit 1 ~ 5 が東側から北側にかけての壁寄りに位置し、pit 6 が炉の西側に位置している。これらの pit は位置等から柱穴と思われる。

pit 1 円形 (19 × 27cm) 深さ 9 cm pit 2 楕円形 (23 × 18cm) 深さ 6 cm

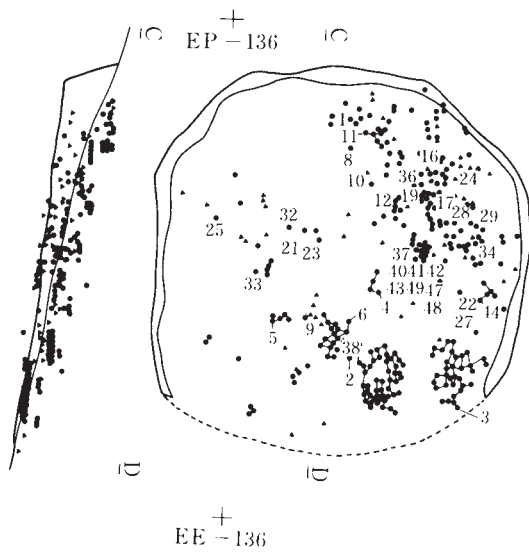
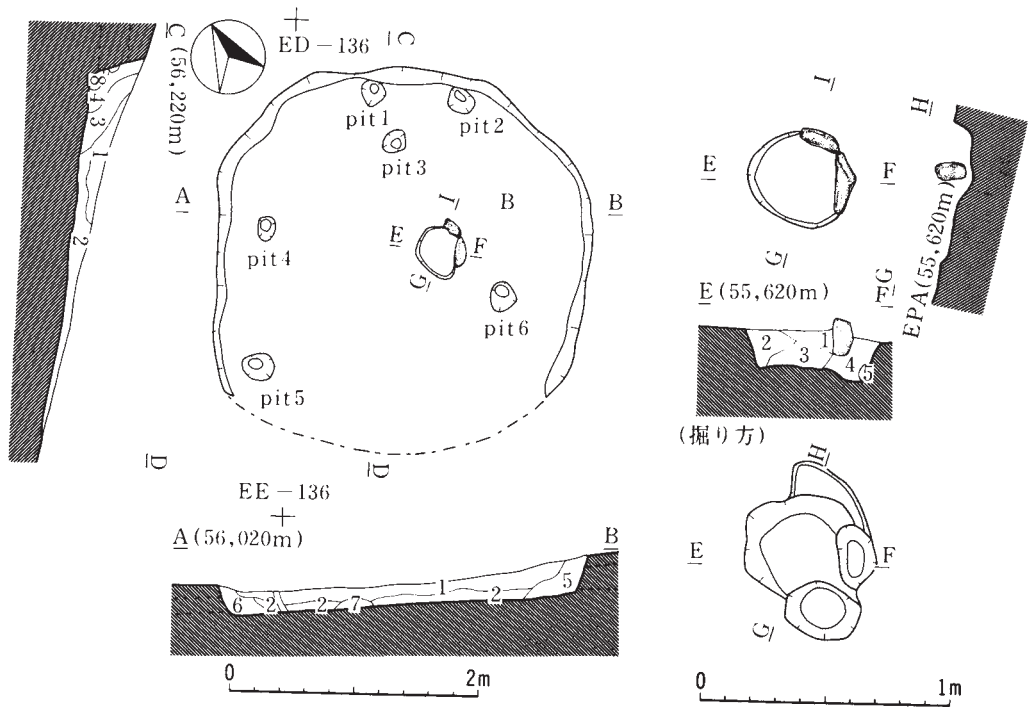
pit 3 不整形 (20 × 18cm) 深さ 12cm pit 4 楕円形 (20 × 14cm) 深さ 4 cm

pit 5 楕円形 (26 × 21cm) 深さ 16cm pit 6 不整形 (23 × 20cm) 深さ 6 cm

柱穴は床面から浅く、また、柱痕も確認できなかった。

〔炉〕

炉は、住居跡のほぼ中央部に位置し、長径 43cm ・短径 40cm で、ほぼ円形を呈する。炉石は、丸味をもった安山岩を使用し、東側に 2 個連続して検出したが、形態から石組炉と思われる。炉の堆積土は 3 層に分層できた。第 1 層の下面は火熱面である。また、炉の掘り方も検出している。



住居跡上層注記

住居

- 1層 黒褐色 (10Y R 5/2) ローム粒子を全体に混入、炭化物若干含む、粘性あり、しまりなし
- 2層 暗褐色 (10Y R 3/4) ローム粒混入、ローム小ブロック、炭化物含む、粘性、しまりあり
- 3層 暗褐色 (10Y R 3/4) ローム粒混入、炭化物少量含む、粘性、しまりあり
- 4層 褐色 (10Y R 4) ローム粒、小ロームブロックを多量に含む、粘性、しまりあり
- 5層 暗褐色 (10Y R 3/4) 黒褐色土がブロック状に混入、粘性、しまりあり
- 6層 暗褐色 (10Y R 3/4) 黄褐色土粒混入、炭化物若干含む、粘性、しまりあり
- 7層 暗褐色 (10Y R 3/4) 焼土粒が全面に混入、炭化物若干含む、粘性、しまりあり
- 8層 明黄褐色 (10Y R 6) 褐色土混入、粘性あり、しまりなし

砂土層注記

- 1層 黒褐色 (10Y R 3/4) 焼土粒、炭化物少量含む、ロームブロック混入、粘性、しまりあり
- 2層 褐色 (10Y R 5/6) 黒褐色土がまだら状に混入、焼土粒少量含む、粘性あり、しまりややあり
- 3層 褐色 (10Y R 5/6) 焼土が小ブロック状に混入、粘性、ややしまりあり
- 4層 褐色 (10Y R 5/6) 暗褐色土混入、炭化物少量含む、粘性、しまりややあり
- 5層 明黄褐色 (10Y R 6) 若干の小砂粒を含む、粘性あり、しまりなし

第 8 図 第 1 号 竪穴 住居跡 実測図

〔堆積土〕

住居跡の堆積土は7層に分層できた。堆積土の観察から自然堆積と思われる。

〔その他の付属施設〕

検出できなかった。

〔出土遺物〕(第9～11図)

遺物を平面的分布から観察すると、特に住居跡の西側に多く分布している。本遺跡の住居跡群の中で最も多く遺物が出土した住居跡である。床面・床直からは、深鉢形土器(1・5)・壺形土器(2)・鉢形土器(8)の計4点がセットで出土した。

(覆土中出土遺物)第9図 - 3・4・6・7・9、第10図 - 11～28、第11図 - 29～37

第9図 - 3 土器は、口頸部から体部下半にかけて残存する深鉢形土器である。文様区画帯は、口頸部文様帯に等間隔に縦位に区画し、体部には二段の文様区画帯がみられ区画帯の内部に連続した弧状の文様を原体RLを用い磨消縄文を構成している。

第9図 - 4 土器は、口頸部が若干内反し波状口縁を呈する深鉢形土器である。波状口縁はやや鋭利な突起で、突起の下部についての沈線を施文している。文様区画帯は、口頸部文様帯に横位の沈線を巡らして区画帯を構成し、区画帯の内部は無文であり、体部文様帯に縦位方向に展開する蛇行の磨消縄文で原、体RLを使用し一部回転を変えて施文している。器外面にスス状炭化物の付着が多く焼成は不良である。

第9図 - 6 土器は、折り返し口縁を有する粗製の鉢形土器である。形状は、口頸部が若干くびれた体部上半がやや張り出しあげ底を呈する。折り返し口縁部にはLR・体部にRLを施文し、2種の原体を施し、器外面にスス状炭化物が付着しており焼成は良好である。

第9図 - 7 底辺部から体部下半にかけての深鉢形土器で、縄文RLを施文している。

磨消縄文を施文している土器は、卵形文様が主体(11)、横位文様(19・20・23)、コ状文様(35)がみられる。地文縄文の土器(29)は、波状口縁で斜位に沈線を施文している。沈線を施文している土器は焼成は良好でコ状のモチーフである。(12)は、口頸部破片で折り返し口縁と一条の粘土紐を巡らしており、粘土紐の側縁に沈線をなぞっている。(33)は、縦位方向に網目状燃糸文を施文しているものである。縄文の原体には、LR・RL・LR・RL組み合わせたもの3種がみられRLが主体を占める。

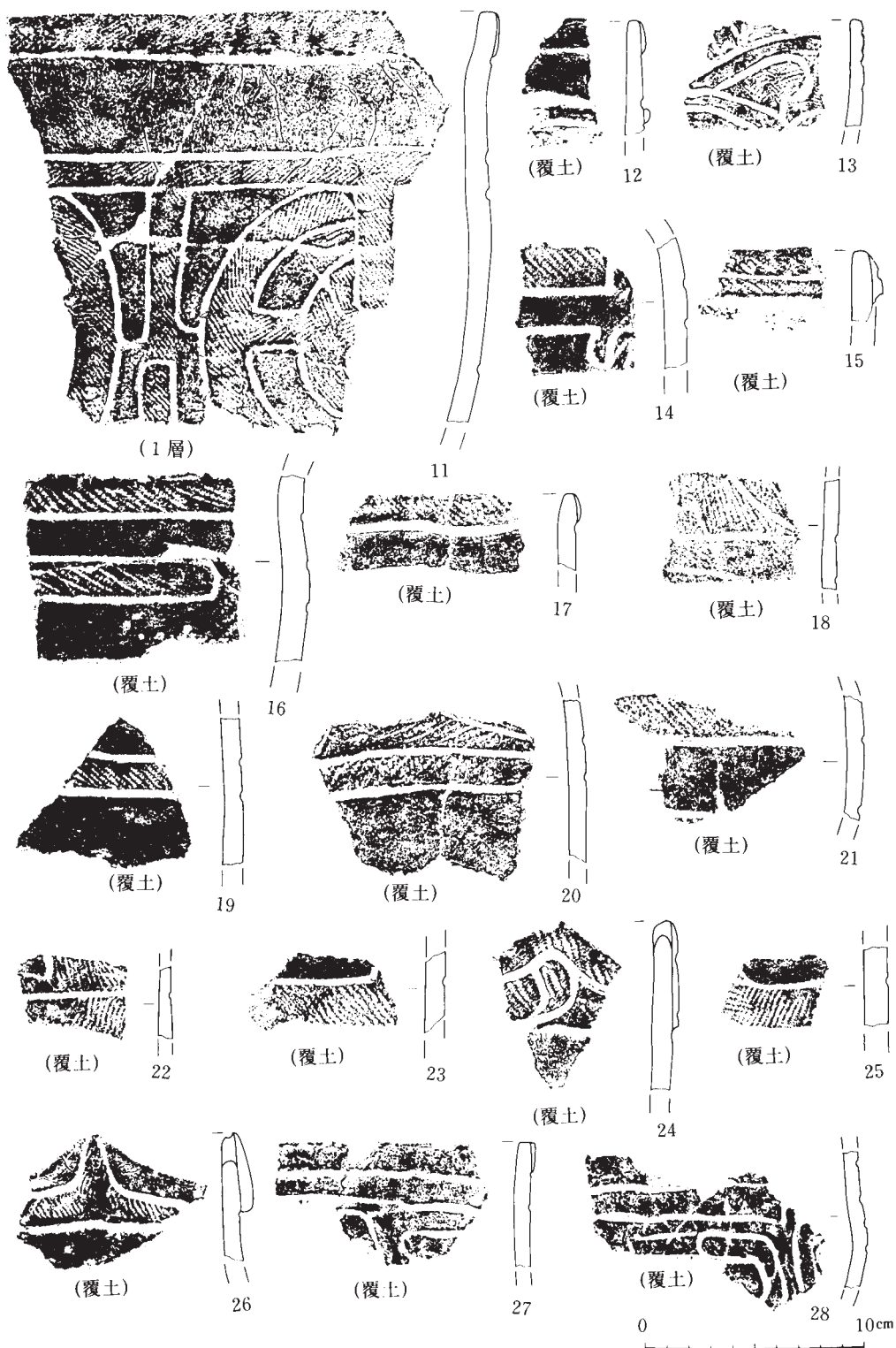
第9図 - 10 両面に丁寧な剥離調整を行なっている石篋である。

(床面・床直出土遺物)第9図 - 1・2・5・8、第11図 - 38～49

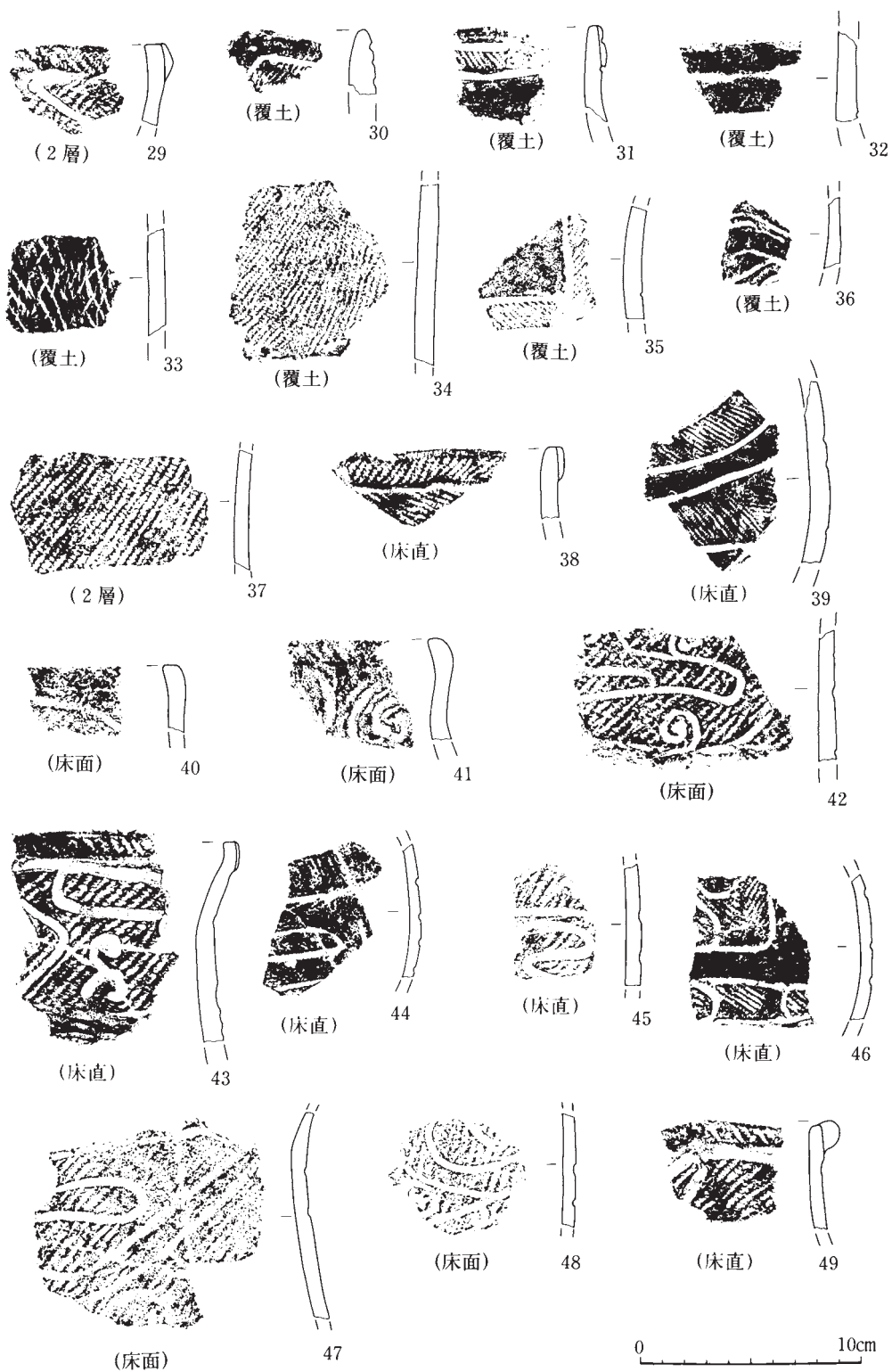
第9図 - 1 土器は、波状口縁を有し口頸部がくびれる深鉢形土器である。口頸部文様帯と体部文様帯の二つの文様区画帯を有し口頸部文様帯は横位方向に構成し無文帯である。体部文様帯は、体部下半に区画帯を設け区画帯の内部四つに区画し、コ状の磨消縄文を施文している。



第9図 第1号竖穴住居跡出土遺物実測図



第10图 第1号竖穴住居迹出土土器拓影图(1)



第11图 第1号竖穴住居迹出土土器拓影图(2)

縄文の原体はR Lを使用し底辺部寄りに縄文を施文している。

第9図 - 2 口頸部が欠損しているが、体部下半に最大値を持つ壺形土器である。口頸部文様帯には、2条の隆起帯を巡らし、隆起帯の上面に3個の橋状把手を配置している。体部文様帯は、体部下半に隆起帯を巡らし区画帯を構成し、区画帯内部は橋状把手の下部から縦位に区画帯を構成して三つの文様区画帯を設け、コ状の連続文様を施文している。

第9図 - 5 口頸部がやや内反する粗製の深鉢形土器である。折り返し口縁を有し、折り返し口頸部にL R・折り返し口縁の下部にR Lを施文し、器外面にスス状炭化物の付着が多く、焼成は不良である。

等9図 - 8 底面から体部下半にかけて残存する深鉢形土器である。器外面に縄文R Lを施文し、底面部寄りには指ナデ調整を行っており、底面に網代痕がみられる。

(38)は、折り返し口縁を有し折り返し口縁部にL R・下部にR Lを施文し器外面にスス状炭化物の付着がみられる。(39・44・46)は磨消縄文を施文している。文様は、39が弧状に(44・46)が横位方向に展開し、縄文R Lを用いて施文している。(40～43・45・47～49)の土器は、地文縄文に沈線で施文しているもので、(49)は波状口縁を呈し波頂部に粘土紐を貼りつけている。文様は渦巻文様を基本としており、(41・48)のようにゆるやかな渦巻文様と小さい渦巻文様がみられる。

第9図 - 9 側縁及び刃部に荒い剥離調整を行ない、頭部に自然面を残す小型打製石斧である。

第2号竪穴住居跡(第12～15図)

〔位置と確認〕

本住居跡は、調査地区の東側でE H - 147グリットの斜面上に位置している。第 a層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

〔重複〕

検出できなかった。

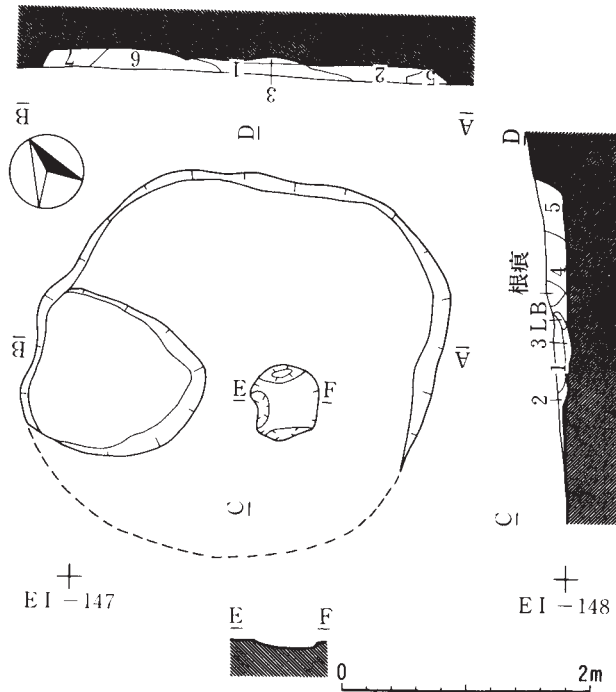
〔平面形・規模〕

平面形は、南側が斜面上に位置しているため、住居跡のプランを確認できず推定プランとなっているが、東・西側がやや直線的な円形を呈する。規模は長径(3.2m)・短径(2.9m)で床面積は(7.48m²)である。

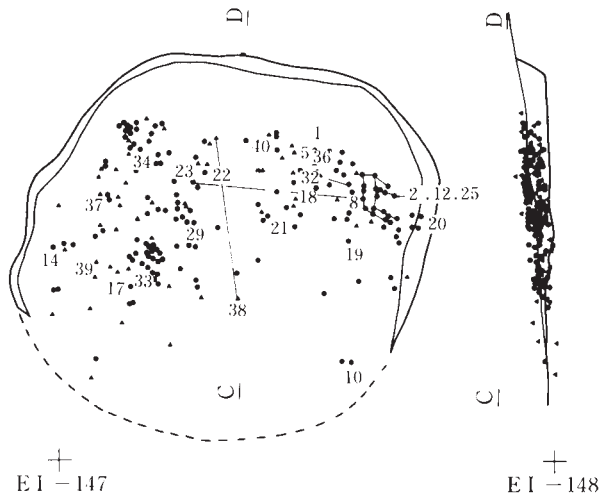
〔壁・床面〕

壁は、全て住居跡の上端から床面にかけて傾斜しており、軟弱なつくりである。壁高は、東壁12cm・西壁14cm・北壁20cmである。

床面は、北側から南側にかけて傾斜しており、東側部分で一段低くなっている。床面は軟弱な構築である。



- 住居跡土層注記
- 1層 黒褐色(10Y R2/3) 黒色土粒、ローム粒混入
粘性あり、しまりなし
 - 2層 暗褐色(10Y R3/4) ローム混入、粘性、しまりあり
 - 3層 暗褐色(10Y R3/4) ロームを多量に混入、粘性、
しまりあり
 - 4層 黒褐色(10Y R2/2) ローム粒・焼土粒混入、
粘性あり、しまりなし
 - 5層 暗褐色(10Y R3/3) 炭化物・ローム混入、
粘性あり、しまりなし
 - 6層 黒褐色(10Y R3/2) ローム粒混入、粘性・しまりあり
 - 7層 暗褐色(10Y R3/3) 焼土粒を含む、粘性・しまりあり



第12図 第2号竪穴住居跡実測図

〔柱 穴〕

検出できなかった。

〔炉〕

炉は、住居跡の中央部から南側にかけて位置し、長径60cm・短径50cmで、全体的に丸みをもつ不整円形である。炉は深さ 5 cmと浅く掘り込まれた地床炉である。炉自体あまり火熱を受けておらず短期間に使用された炉と思われる。

〔堆積土〕

堆積土は 7 層に分層できた。床面付近には炭化物を全体に多く含んでいる。堆積土の観察から自然堆積と思われる。

〔その他の付属施設〕

検出できなかった。

〔出土遺物〕(第13～15図)

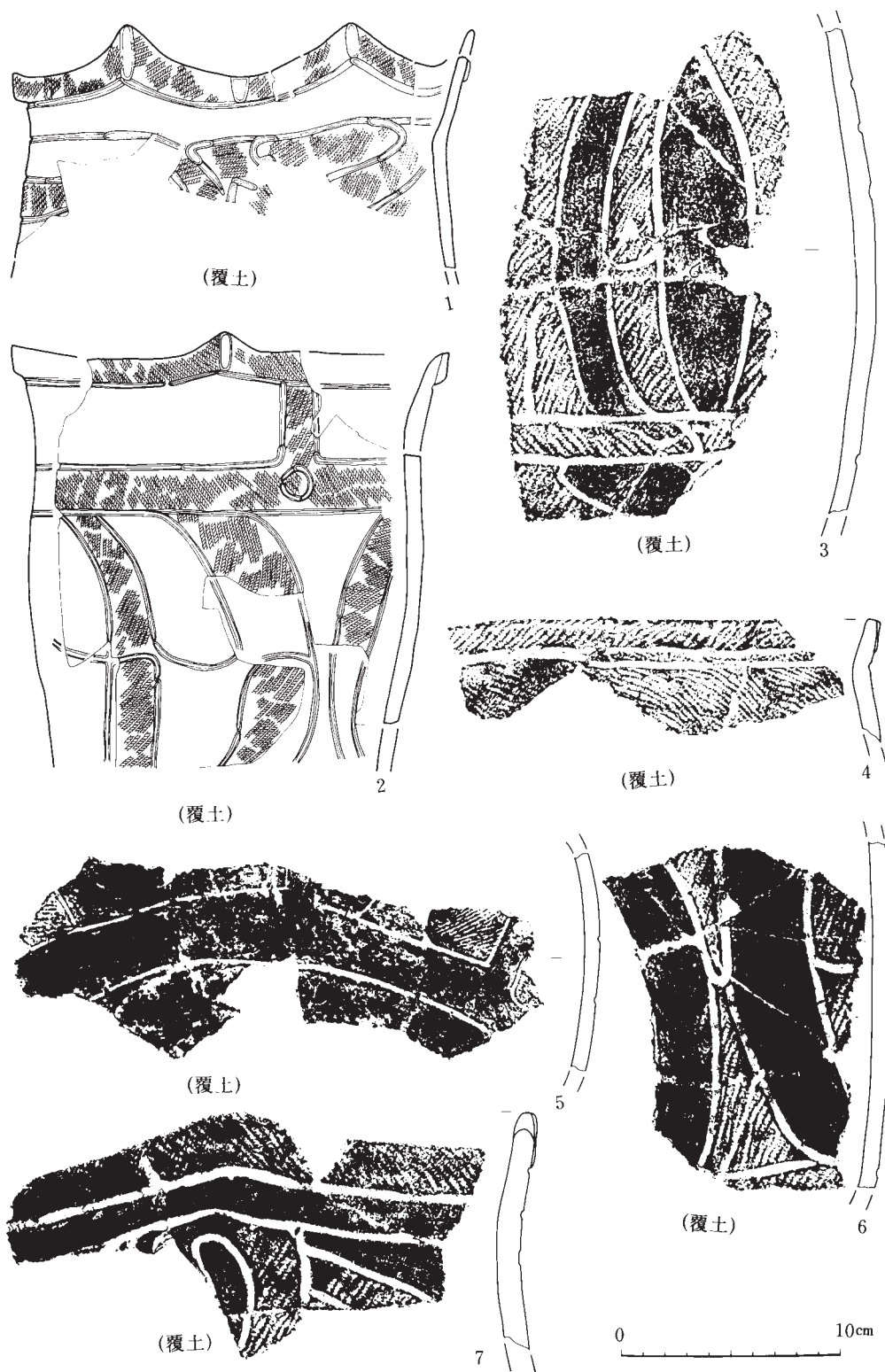
遺物を平面的分布から観察すると、土器・石器・礫ともに住居跡の北側から炉にかけて全体に分布しており、炉の南側では遺物の分布は少ない。床面・床直からの遺物は極端に少なく堆積土中からの出土である。また、土器も小破片が多く出土したが、接合関係をもつものは少なく、堆積土内の遺物を層序で分層できず住居跡内に一括廃棄したものと考えられる。

(覆土中出土遺物)

第13図 - 1 波状口縁を呈する深鉢形土器である。口唇部上面は「」状で平坦を呈する。折り返し口縁部には、波状口縁の頂部と波状口縁の突起部との間に縦位の粘土紐を貼り付けており、更に上面に縄文LRを施文している。口頸文様帯は狭義の無文帯であり、体部文様帯は磨消縄文を横位方向に展開する渦巻の文様モチーフを構成している。原体はLRで焼成は良好である。

第13図 - 2 波状口縁を呈する深鉢形土器である。口唇部上面は(1)同様に「」状で平坦を呈する。折り返し口縁を有し、波状口縁の頂部から垂下した1条の粘土紐を貼り付けている。折り返し口縁には縄文RLを施文している。口頸部文様帯は、等間隔に縦位の区画帯を有する。体部文様帯には、縦位に展開する卵形文様を施文している。縄文の原体は、RLを用いており、体部には回転方向を変えて施文している。

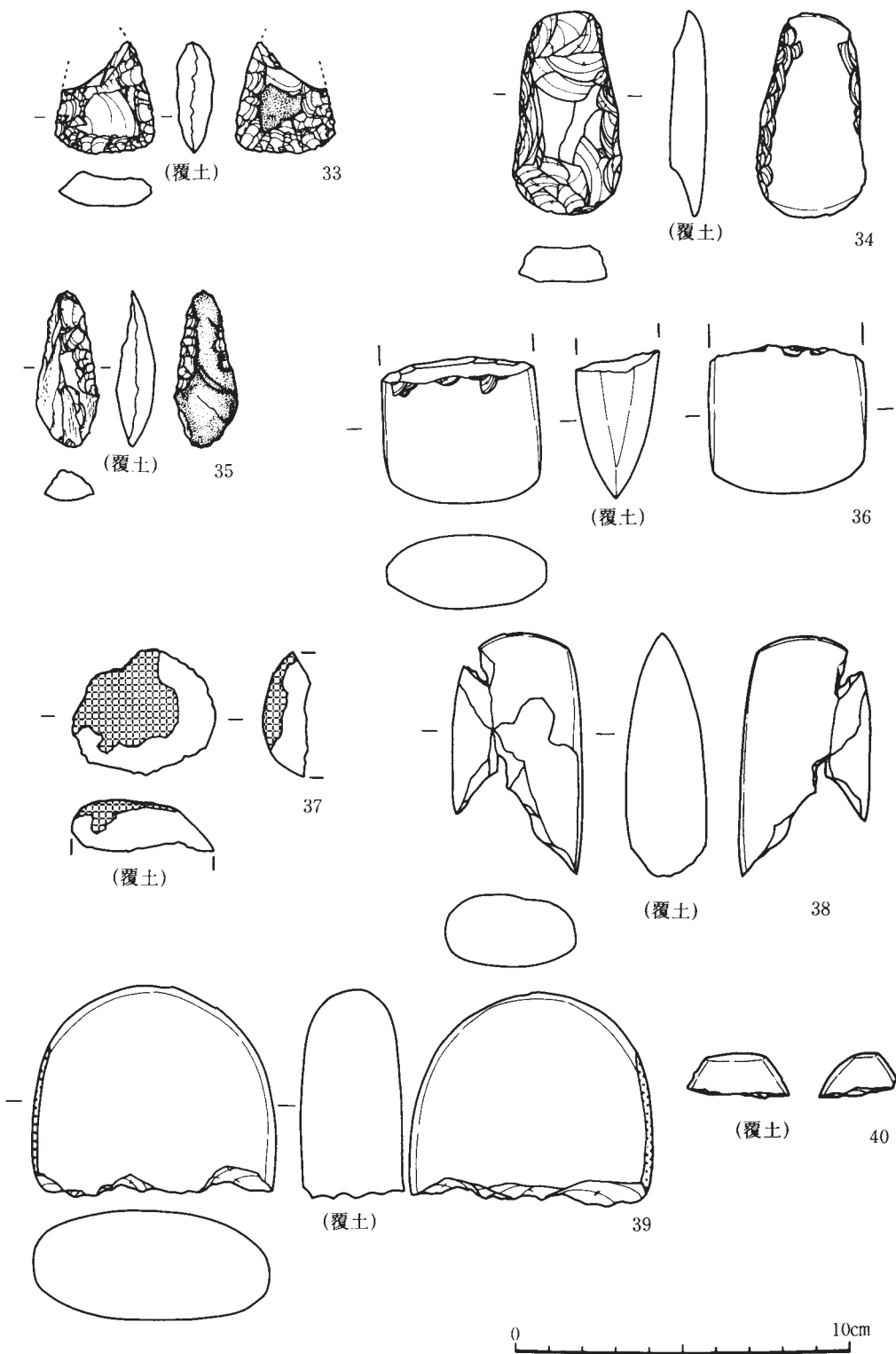
住居跡内から出土した土器の主体を占めるものは、磨消縄文の土器である。文様は、縦位方向に展開する卵形文様で、2の文様をモチーフが多くみられる(3・6・7・31)、一方、縦位と横位文様を組み合わせた方形文様(25・30)も出土しているが量的には少ない。(4・22・27)は、縄文施文後に沈線を施文しており、(4)は横位に、(27)は蛇行した文様を施文している。(8)～(13)は、縄文及び折り返し口縁がみられるものである。縄文の土器は平口縁が主体であるが波状口縁(13)の土器もみられる。(9・11)の折り返し口縁の土器は、折り返し口縁部とその下部とで



第13图 第2号竖穴住居跡出土土器実測・拓影图



第14图 第2号竖穴住居跡出土土器拓影图



第15图 第2号竖穴住居跡出土石器実測図

は縄文の回転方向を変えている。(15・17)は粘土紐を貼り付けており、(15)は折り返し口縁部に縦位に、(17)は波状口縁の突起の下部に円形の粘土紐を貼り付けている。(29)は、器外面に赤色顔料を塗布しており、横位方向に展開する文様モチーフである。縄文の原体には、無節L(28)・単節LR(3・5・6・10・19・20・23・26・27・31)単節RL(15・18・32)と、LRとRLを施文しているもの(4・7～9・11～13・15・22・30)で、特に、折り返し口縁を有する土器には、LRとRLの2種の原体を使用している。

第15図 - 33 石篋の刃部で、両面の剥離調整は丁寧に行われている。

第15図 - 34 小型の打製石斧である。片面の剥離調整で刃部の調整も雑である。

第15図 - 35 楕円形を呈するスクレイパーで、側縁部の剥離調整を密に行い、ほかは丁寧に行われていない。

第15図 - 36・38・40 磨製石斧である。36・38が刃部、40が頭部で端部に敲きの痕跡がみられる。

第15図 - 37 敲石の一部分で、石質にチャートを用いている。

第15図 - 39 楕円形を呈する磨石の一部分で、側面にスリの痕跡がみられる。

第3号竪穴住居跡(第16～17図)

〔位置と確認〕

本遺構は、調査地区東側の台地斜面上で調査区EF-145・146グリッドに位置している。基本層序第b層を精査中に黒褐色の落ち込みを確認した。

〔重複〕

認められなかった。

〔平面形・規模〕

南側が斜面に位置するため、全体の平面形は確認できず、推定ラインとなっている。他の残存部から形態を推定すると全体的に丸みをもつ円形のプランである。規模は、長径(3.3m)・短径3.2mで床面積は(6.31)m²である。

〔壁・床面〕

壁は上端から床面にかけてゆるやかに傾斜しており、軟弱なつくりである。壁高は、東壁13cm・西壁14cm・北壁20cmである。

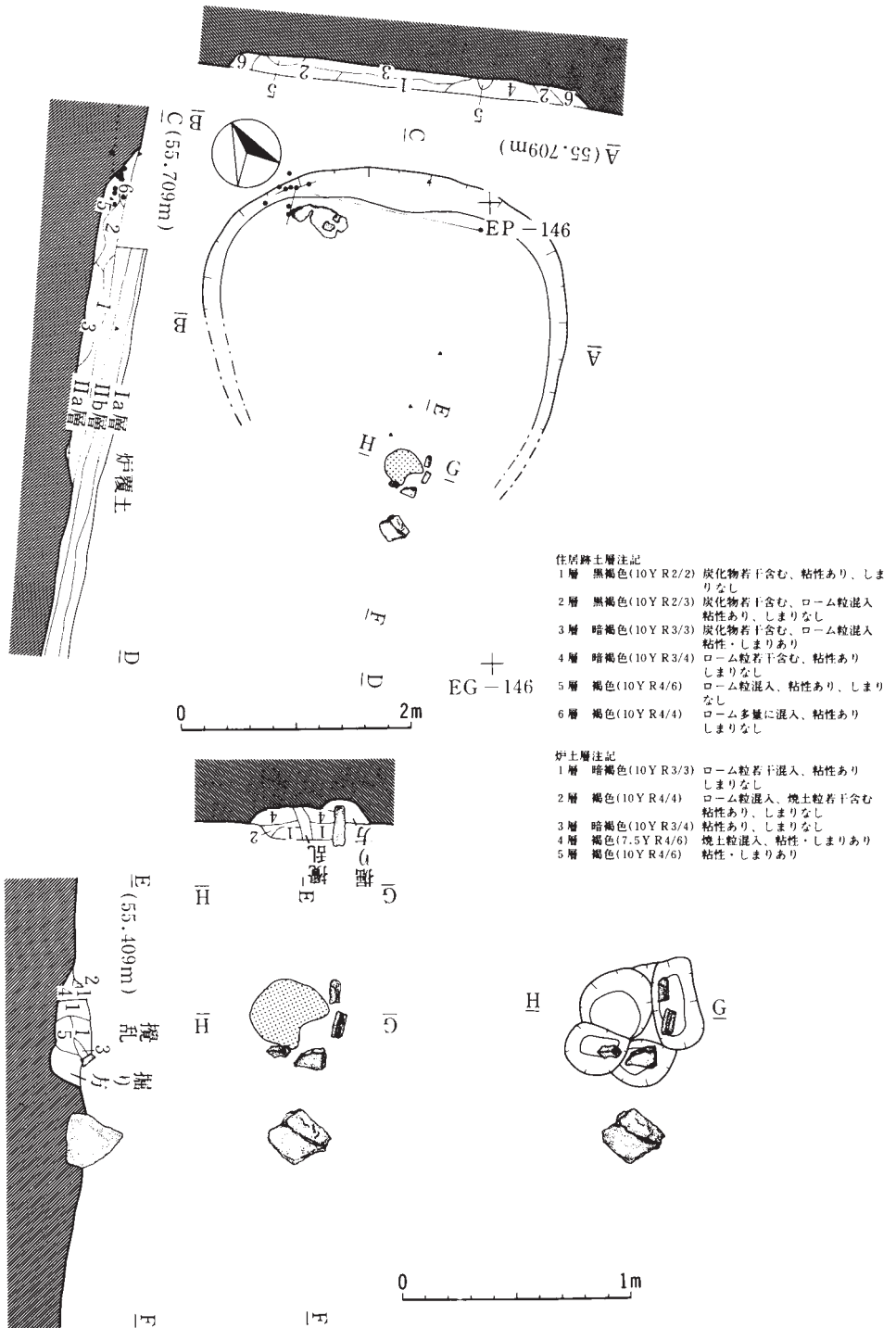
床面は、北側から南側にかけて傾斜しており、貼り床面は検出されず軟弱な構築である。

〔柱穴〕

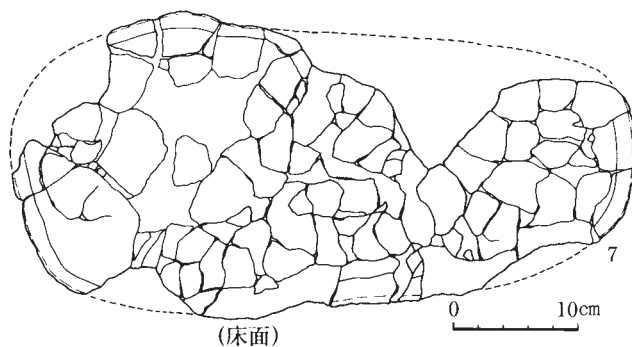
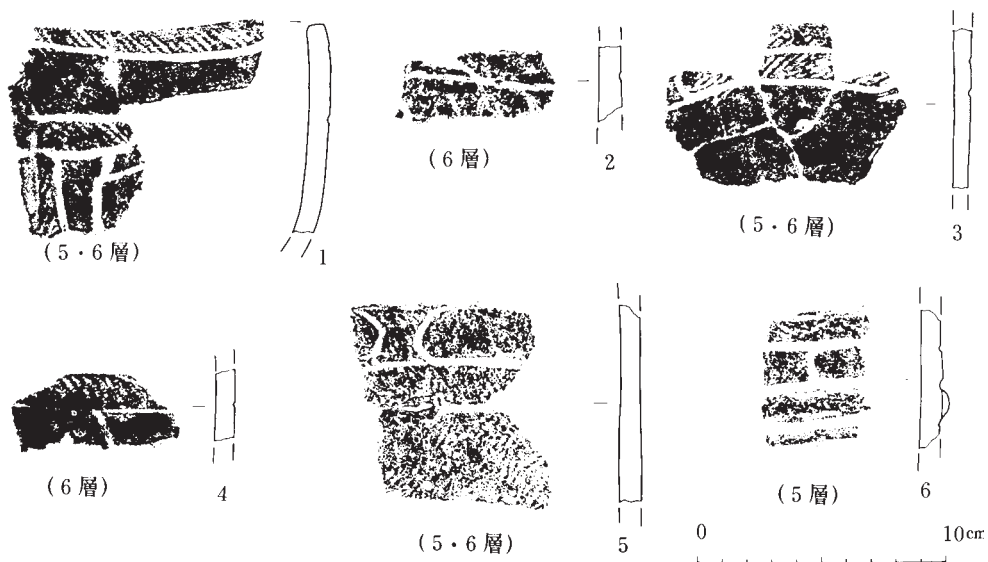
検出できなかった。

〔炉〕

炉は住居跡の南壁寄りに位置している。炉石は角ばった安山岩を使用しており、4個の炉石



第16図 第3号竪穴住居跡実測図



第17図 第3号竪穴住居跡出土遺物実測・拓影図

を半円形に配置している。形態から石組炉である。規模は長径42cm・短径34cmである。また、炉の掘り方を有する。

〔その他の付属施設〕

検出できなかった。

〔堆積土〕

堆積土は6層に分層できた。堆積土の観察から自然堆積と思われる。

〔出土遺物〕第17図

遺物を平面的分布から観察すると北壁寄りの一部分に集中しており、北壁寄りの床面からは大型なシルト岩の石皿が出土した。しかし、住居跡からの出土遺物は極端に少ない。

(覆土中出土遺物) 第17図 - 1 ~ 6

(1 ~ 5) は磨消縄文を施文している土器である。(1) は波状口縁を呈し、口唇部が口状の深鉢形土器で、カギ状の文様モチーフである。(2 ~ 5) は、横位方向に展開する文様モチーフで、(3・5) 沈線間に弧状の文様を施文している。縄文の原体は、(3・5) がL R、(1・4) がR Lを用いている。(6) は横位の粘土紐と沈線を組み合わせた文様モチーフで、焼成は不良である。

(床面・床直出土遺物) 第17図 - 7

床面からは1点の石皿が出土したのみである。大きさは、長径49cm、短径24cmで、表面は平坦で周縁が一段と盛り上がっている。凝灰岩の石皿で非常にもろく日常用の石皿として使用したのではなく祭祀用に用いた可能性が考えられる。

第4号竪穴住居跡 (第18・19図)

〔位置と確認〕

本遺構は、調査地区西側で台地平坦面のE F - 126・127グリッドに位置している。基本層序第b層を精査中に黒褐色の落ち込みを確認した。

〔重複〕

住居跡の北側が第35号ピットと切り合っており、重複関係は第35号ピットが新しい。

〔平面形・規模〕

平面形は、北側が切られているため、残存部から推定すると不整形ぎみの円形である。規模は、長径2.4m・短径2.1mで、床面積は3.63m²と推定される。

〔壁・床面〕

壁は、不明な北壁を除くと、すべて上端から床面にかけてなだらかに傾斜している。また、壁はすべて軟弱なつくりである。壁高は、西壁8cm・南壁10cm・北壁6cmである。

床面はほぼ平坦である。炉の周辺は堅緻であるが、他の部分は軟弱な構築である。

〔柱穴〕

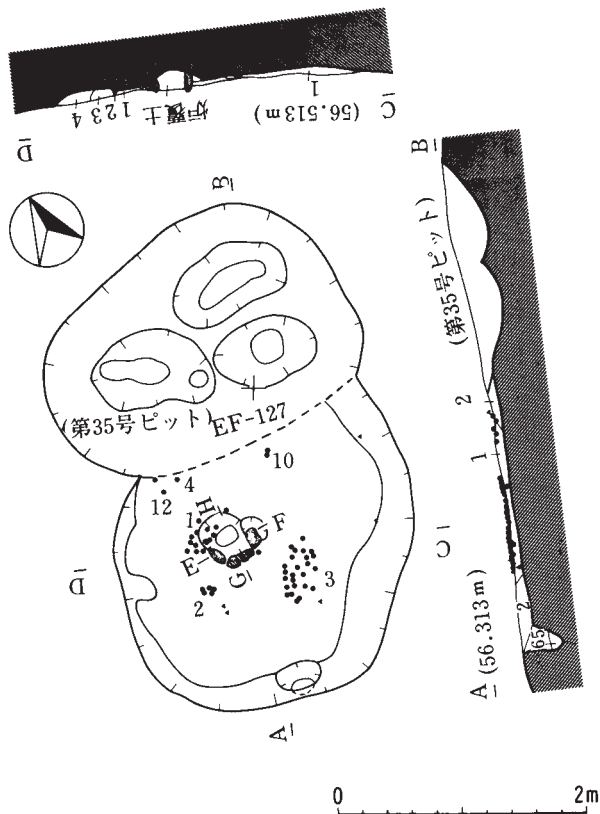
pitは、南壁寄りに1個位置する。形態は楕円形で長径36cm・短径12cm・床面からの深さ34cmである。

〔炉〕

炉は住居跡のほぼ中央に位置している。炉は丸みのある安山岩を使用し、コの字状に配置した石組炉である。規模は長径46cm・短径42cmである。炉の堆積土は、5層に分層でき第4層上面が炉の火熱面である。炉の掘り方を有する。

〔その他の付属施設〕

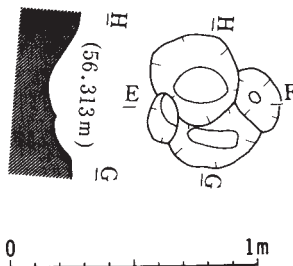
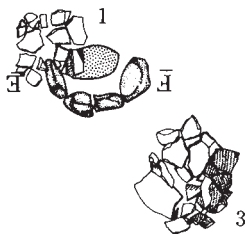
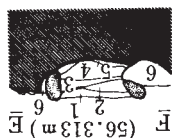
検出できなかった。



+

EG-127

- 住居跡土層注記
- 第1層 黒褐色 (10YR%) 炭化物を含む、粘性、しまりあり
 - 第2層 暗褐色 (10YR%) 炭化物を含む、ローム若干混入、粘性、しまりあり
 - 第3層 黒褐色 (10YR%) 炭化物を含み、黒色ブロック土混入、粘性、しまりあり
 - 第4層 暗褐色 (10YR%) ローム、黒色土粒混入、粘性、しまりあり
 - 第5層 黒褐色 (10YR%) 炭化物、ローム粒を含む、粘性あり、しまりなし
 - 第6層 暗褐色 (10YR%) 炭化物を含み、ロームブロック混入、粘性あり、しまりなし



- 炉土層注記
- 第1層 黒褐色 (10YR%) 黒色土粒、暗褐色土ブロック混入、粘性あり、しまりなし
 - 第2層 褐色 (10YR%) 黒色土粒、ローム粒混入、粘性、しまりあり
 - 第3層 赤褐色 (5YR%) 焼土粒を含む、粘性、しまりあり
 - 第4層 赤褐色 (5YR%) 焼土層、粘性あり、しまりなし
 - 第5層 褐色 (7.5YR%) 焼土粒を含む、粘性あり、しまりなし
 - 第6層 暗褐色 (10YR%) 黒色土粒、焼土粒混入、粘性、しまりあり

第18図 第4号竪穴住居跡実測図

〔堆積土〕

住居跡の堆積土は5層に分層したが、住居跡の堆積土が薄いため、自然・人為堆積なのかどうかは判断できなかった。

〔出土遺物〕(第19図)

遺物を平面的分布から観察すると、炉を中心として南側に多く遺物が分布する。堆積土は10cmと薄く、遺物はすべて床直の出土である。これらのことから、出土した土器は同一の時期と考えられる。住居跡内からは、深鉢形土器2点、鉢形土器1点の良好なセット関係で出土した住居跡である。また、石器は出土しなかった。

(床面・床直出土遺物)

第19図 - 1 波状口縁で口頸部が内反し、胴部上半がやや張り出す深鉢形土器である。文様区画帯は、口頸部文様区画帯と胴部文様区画帯に分離している。口頸部文様区画帯は、折り返し口縁を呈し、縄文LRを施文した狭義の文様区画帯で無文帯である。胴部文様区画帯は、胴部上半と下半に横位の文様区画帯を構成しており、区画帯の内部に渦巻文様を4単位で構成している。器外面にはスス状炭化物の付着が多く、底辺部は二次火熱のため剥落が著しい。

第19図 - 2 口頸部が若干くびれ、胴部下半が張り出す鉢形土器である。文様区画帯は口唇部寄りと胴部下半に粘土紐を用いて区画帯を構成し、更に粘土紐を用いて縦位に区画し文様帯を構成している。文様は縦位及び斜位を組み合わせた放射状のモチーフである。縄文の原体にはRLを使用し、焼成は良好である。

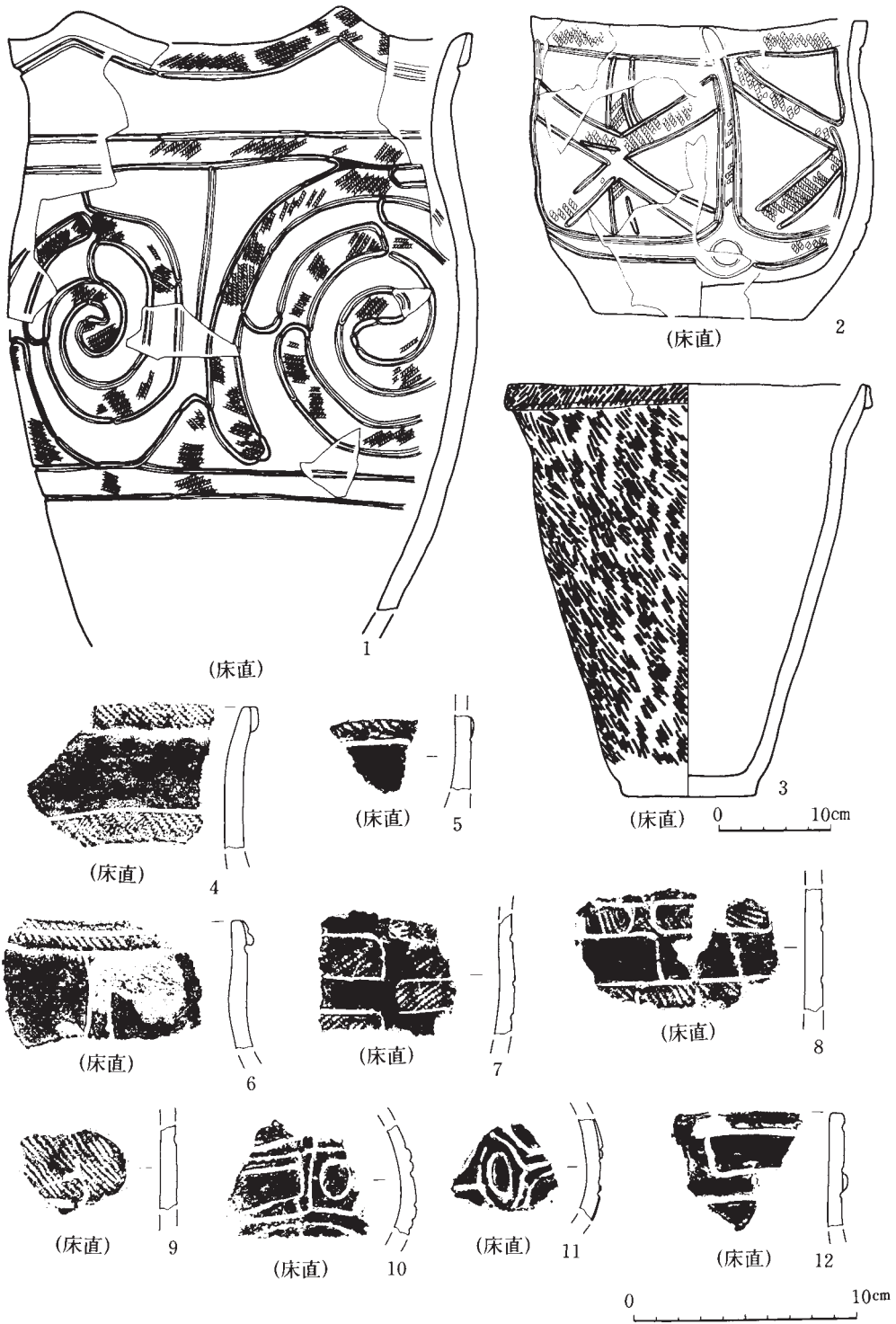
第19図 - 3 口頸部が内反する深鉢形土器で、口唇部は平坦で、口縁は折り返し口縁を呈する。文様は縄文のみで原体にLRを使用し、折り返し口縁部には横位方向に、他は縦位方向に原体を施文している。底辺部は、ヘラ状工具を用いて横位方向にナデ調整を行っており、器外面にスス状炭化物が付着しているが焼成は良好である。

(4~6)は、折り返し口縁の深鉢形土器で、口唇部は□状で平坦である。(4)は口頸部文様帯は無文帯であるが(6)は口頸部文様帯に縦位の沈線を施文している。いずれも原体にRLを用いている。(7)は原体にLR、(8)はRLを用いた磨消縄文の土器で横位方向に沈線を施文し、沈線間に縦位及び弧状に区画している。焼成は不良でスス状炭化物の付着が多い。(10・11)は、形状から判断すると壺形土器と思われる。文様は、粘土紐を円形状と横位に貼り付け、その後に沈線を施文している。(12)は、赤色顔料を塗布している。土器で、焼成は良好である。粘土紐と沈線を組み合わせた文様モチーフである。

第5号竪穴住居跡(第20~22図)

〔位置と確認〕

本遺構は、調査地区南側の緩斜面でEO・EP・EQ-142・143グリッドに位置しており、



第19图 第4号竖穴住居跡(出土)土器実測・拓影图

第 a 層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。北側約 1 m に第 7 号竪穴住居跡・南側約 2 m に第 6 号竪穴住居跡・西側約 9.5 m に第 9 号竪穴住居跡が位置している。

〔重複〕

住居跡の南側部分は風倒木によって切られている。

〔平面形・規模〕

平面形は、全体的に丸みをもつ円形を呈する。規模は、長径 6.6 m ・短径 6.6 m で床面積は 32.91 m² である。本遺跡から検出した住居跡の中で最大の規模を有する。

〔壁・床面〕

壁は、東壁が上端から床面に掛けて傾斜しているが、他の壁はすべて垂直であり、壁の構築は堅緻なつくりである。器高は、東壁 37 cm ・西壁 36 cm ・南壁 30 cm ・北壁 45 cm である。

床面は、ほぼ平坦であるが軟弱な構築である。

〔柱 穴〕

pit は 6 個検出した。pit の位置は、住居跡の内側から約 1 m 内に配置している。pit 3 と pit 5 では柱痕を確認できた。柱穴の堆積土は、色調が褐色で炭化物少量と、ロームブロックを含んでいる。6 個の pit は、住居跡に伴う柱穴と思われる。

pit 1 円形 (46 × 35 cm) 深さ 36 cm pit 2 方形 (28 × 25 cm) 深さ 35 cm

pit 3 円形 (39 × 36 cm) 深さ 31 cm pit 4 円形 (38 × 36 cm) 深さ 32 cm

pit 5 方形 (43 × 32 cm) 深さ 24 cm pit 6 円形 (30 × 28 cm) 深さ 10 cm

〔炉〕

本住居跡からは炉を 2 基検出した。炉の位置は、第 1 号炉がほぼ中央部に位置し、第 2 号炉は第 1 号炉から約 1 m 南側に位置している。

第 1 号炉は、長径 83 cm ・短径 81 cm で、ほぼ円形を呈する。炉石は出土せず 8 個の礫の抜き取り痕を検出している。抜き取り痕の配置から石囲炉と思われる。炉の堆積土は 3 層に分層でき、第 3 層上面が火熱面である。

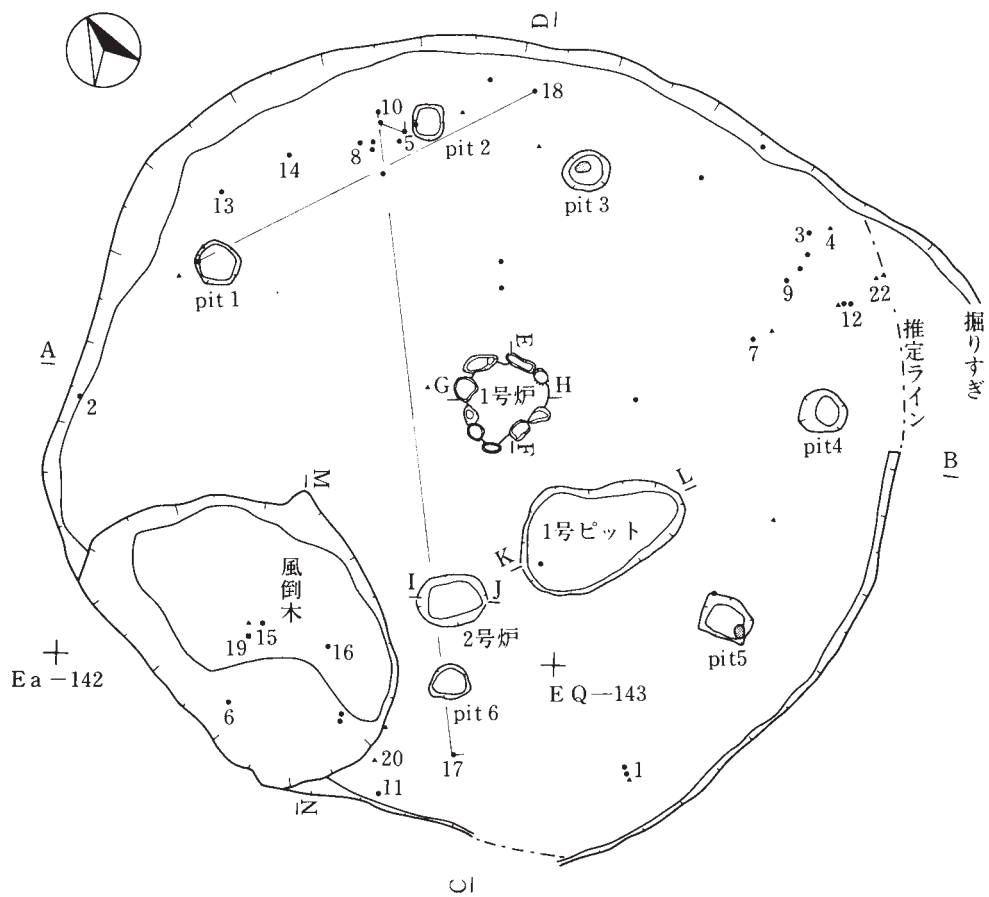
第 2 号炉は、長径 58 cm ・短径 44 cm で、ほぼ楕円形を呈する地床炉である。炉の堆積土は、4 層に分層でき、第 1 ・ 2 層の下面が火熱面である。

〔堆積土〕

堆積土は 7 層に分層できた。第 3 ・ 4 ・ 5 ・ 7 層が壁寄りに堆積し、第 1 ・ 2 層が住居跡のほぼ中央部に堆積している。堆積土の観察から自然堆積と思われる。

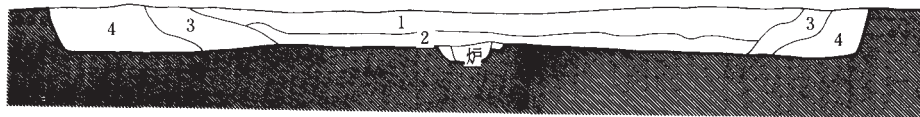
〔その他の付属施設〕

第 1 ・ 2 号炉の西側に長径 140 cm ・短径 79 cm の北側がえぐられた不整形を呈するピットを検出した。用途・性格に関しては不明である。



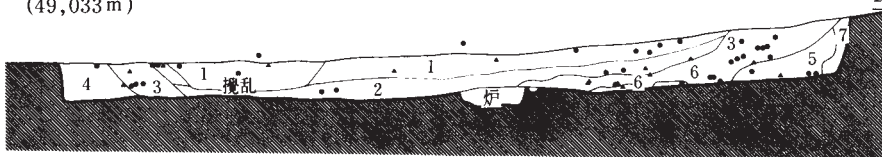
A
(49,033 m)

B



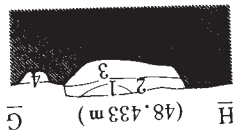
C
(49,033 m)

D

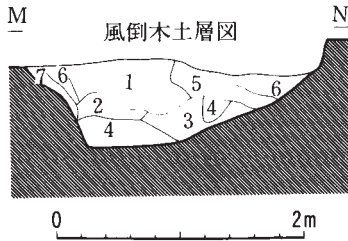
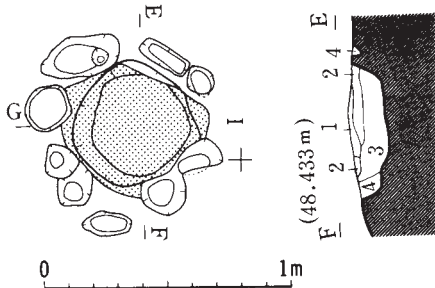


0 2m

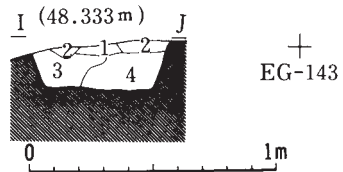
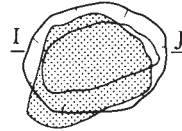
第20図 第5号竖穴住居跡実測図(1)



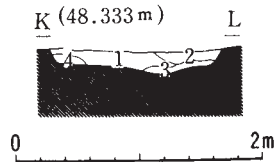
第1号炉



第2号炉



第1号ピット土層図



- 住居跡土層注記
- 1層 黒褐色 (10Y R%) パミス・焼土粒若干・炭化物を少量含む、粘性・しまりあり
 - 2層 黒褐色 (10Y R%) 黄褐色土がブロック状に多量に混入粘性・しまりあり
 - 3層 暗褐色 (10Y R%) 炭化物少量・ローム粒・黄褐色土少ブロックを含む黒褐色土混入、粘性・しまりあり
 - 4層 褐色 (10Y R%) 黄褐色土を多量に含む、粘性・しまりあり
 - 5層 暗褐色 (10Y R%) 炭化物を少量含む、粘性・しまりあり
 - 6層 明黄褐色 (10Y R%) 褐色土混入、粘性・しまりなし
 - 7層 黄褐色 (10Y R%) 明黄褐色土がまだら状に混入、粘性・しまりなし

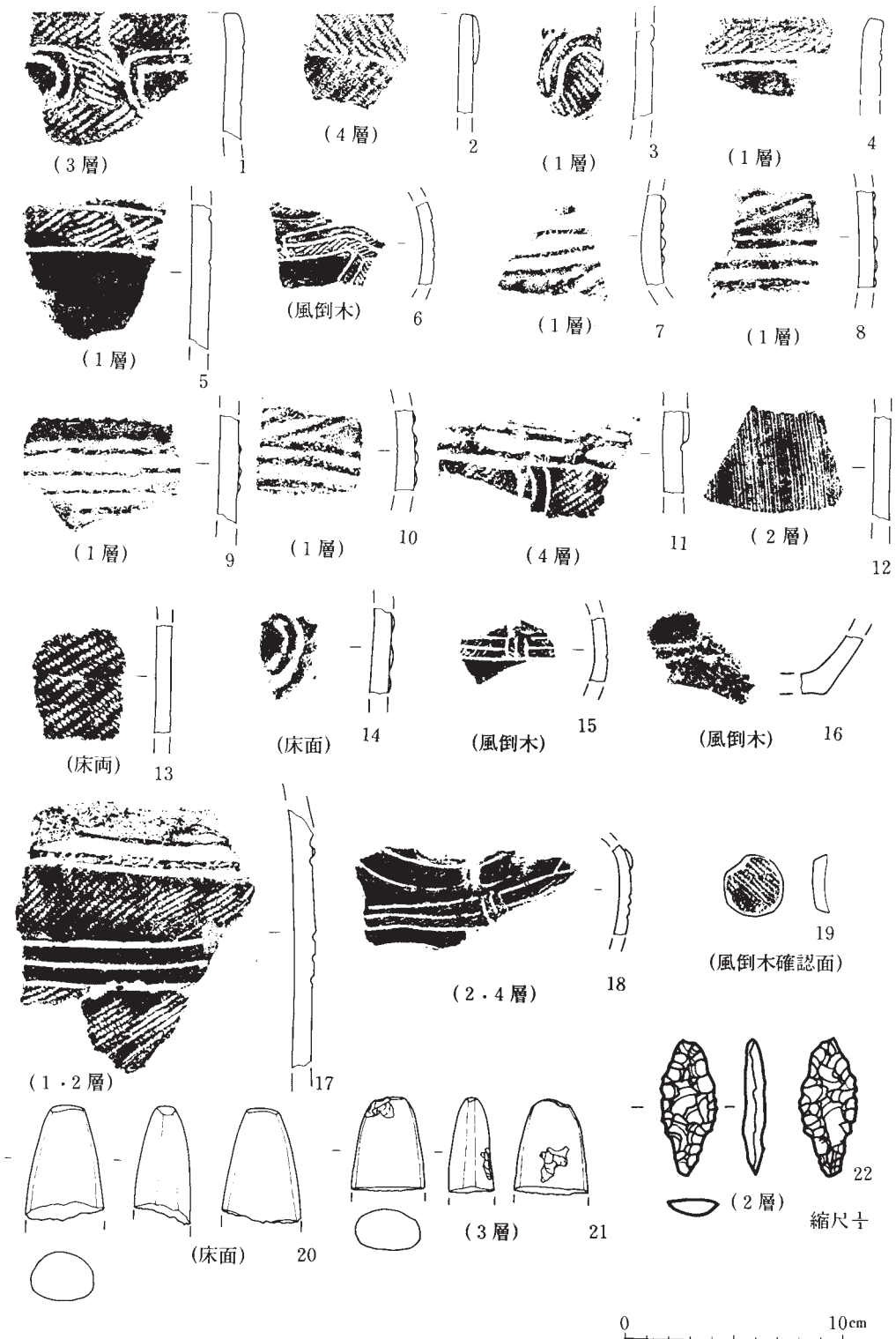
- 1号炉土層注記
- 1層 明黄褐色 (10Y R%) 焼土粒・炭化物を少量含む、黄褐色土混入、粘性あり・しまりなし
 - 2層 赤褐色 (5Y R%) 灰床面 粘性なし・しまりあり
 - 3層 褐色 (10Y R%) 焼土粒・炭化物を含む、粘性あり・しまりなし
 - 4層 暗褐色 (10Y R%) ローム粒少量・炭化物を若干含む、粘性あり・しまりなし

- 2号炉土層注記
- 1層 暗褐色 (10Y R%) 炭化物少量・焼土粒・焼土ブロックを含む、粘性・しまりあり
 - 2層 明黄褐色 (5Y R%) 暗褐色土若干混入、粘性なし・しまりなし
 - 3層 暗褐色 (10Y R%) 焼土粒・炭化物少量、粘性あり・しまりなし
 - 4層 褐色 (10Y R%) ローム粒多量・炭化物・焼土粒を若干含む、粘性・しまりあり

- 第1号ピット土層注記
- 1層 暗褐色 (10Y R%) 黄褐色土が小ブロック状に混入、粘性あり・しまりなし
 - 2層 褐色 (10Y R%) 焼土がブロック状に混入、暗褐色土混入、粘性・しまりあり
 - 3層 明黄褐色 (10Y R%) 全体的に明るい色調を呈する、粘性・しまりなし
 - 4層 明黄褐色 (10Y R%) 暗褐色土がブロック状に混入、粘性・しまりなし

- 風倒木土層注記
- 1層 明黄褐色 (10Y R%) 混入物を含まない、粘性なし・しまりあり
 - 2層 黒褐色 (10Y R%) 黄褐色土ブロックを多量に含む、粘性あり・しまりなし
 - 3層 黄褐色 (10Y R%) 暗褐色土混入、粘性・しまりあり
 - 4層 明黄褐色 (10Y R%) 黒褐色土混入、粘性あり・しまりなし
 - 5層 黄褐色 (10Y R%) 暗褐色土がブロック状に混入、粘性・しまりあり
 - 6層 暗褐色 (10Y R%) 黄褐色土が小ブロックで混入、炭化物を若干含む、粘性あり・しまりなし
 - 7層 黄褐色 (10Y R%) 暗褐色土が多量に混入、粘性・しまりあり

第21図 第5号竪穴住居跡実測図(2)



第22図 第5号竖穴住居跡出土遺物実測・拓影図

〔出土遺物〕(第22図)

出土遺物を平面的分布から観察すると、住居跡の壁寄りに分布しており、特に、北壁寄りの堆積土中に多い。しかし、床面・床直からの出土は少なく、全体的に遺物の密度は薄い。

(17・18)の接合関係をみると住居跡内の約4m離れた地点で接合しており、住居跡の埋没の際に混入した土器が多い。

(覆土中出土遺物) 第22図 - 1～12・15～19・21・22

(1・4)は口唇部が丸みをもつ深鉢形土器である。縄文を施文後に沈線と捺糸圧痕を用いて施文している。(1)はLRとRLを用いて羽状縄文を構成し、コ状の文様モチーフである。(3・5・6・15・18)は、磨消縄文を施文しており、(6・15・18)は同一破片の壺形土器と思われる。(3)は曲線状の文様構成、他は横位方向を主体とした文様構成で、縄文の原体には(3)がLR他はRLを使用している。(7～11)は、粘土紐を貼り付けており、(7～10)は同一破片と思われる。(7～10)は、粘土紐を横位及び斜位に貼り付け、(11)は粘土紐の下部に磨消縄文を施文している。(12)は縦位方向のみの条痕のみで、スス状炭化物が付着している。

(19)は、縄文のみを施文した円盤状土製品で、焼成は不良である。

(21)は、磨製石斧の頭部破片で、端部及び裏面に敲きの痕跡がみられる。(22)は有柄石鏃である。

(床面・床直出土遺物) 第22図 - 13・14・20

(13)は粗製の深鉢形土器で、縄文LRを施文し、(14)は粘土紐を弧状に張り付けており、器外面にスス状炭化物の付着がみられる。

(20)は、磨製石斧の頭部破片で、端部にスリがみられる。

第6号竪穴住居跡(第23・24図)

〔位置と確認〕

本遺跡は、調査地区の南側で台地平坦面のEQ・ER-141・142グリッドに位置し、第b層を精査中に暗褐色の落ち込みを確認した。北側約2mに第5号竪穴住居跡が位置している。

〔重複〕

本住居跡は、第68号ピットと切り合っている。重複関係は本住居跡が新しい。

〔平面形・規模〕

平面形は、東・北側が不明であるが、残存部から推定すると全体的に丸みをもつ円形の形態を呈する。規模は、長径3.7m・短径3.5mで床面積は7.55m²である。

〔壁・床面〕

壁は、すべて上端から床面にかけて傾斜しており、堅緻なつくりである。壁高は、西壁25cm・南壁28cmである。

床面は、ほぼ平坦で、全体に貼り床を呈し、かたく堅緻な構築である。

〔柱 穴〕

pitは 5 個検出した。pitの位置は、壁寄りにほぼ等間隔に配置しているが西側からはpitを確認できなかった。pitからは柱痕及び遺物は出土しなかった。配置から柱穴と思われる。

pit 1円形 (25×25cm) 深さ22cm pit 2円形 (15×15cm) 深さ11cm
pit 3円形 (23×23cm) 深さ22cm pit 4楕円形 (24×13cm) 深さ20cm
pit 5円形 (28×24cm) 深さ17cm

〔炉〕

炉は住居跡のほぼ中央部からやや南側に位置している。長径105cm・短径72cmで 8 個の炉石の抜き取り痕を確認した。抜き取り痕の配置から石囲炉と思われる。炉の堆積土は 4 層に分層できた。

〔堆積土〕

堆積土は 7 層に分層でき、堆積土の観察から自然堆積と思われる。

〔その他の付属施設〕

認められなかった。

〔出土遺物〕(第24図)

出土遺物を平面的分布から観察すると、壁寄りには分布密度が薄く、炉を中心として北側に多く分布している。床面・床直からの出土はみられず、堆積土中から細片が多く出土した。接合関係は、住居内の全体で接合しており、住居跡が埋没する際に土器を廃棄したものと考えられる。

(覆土中出土遺物)

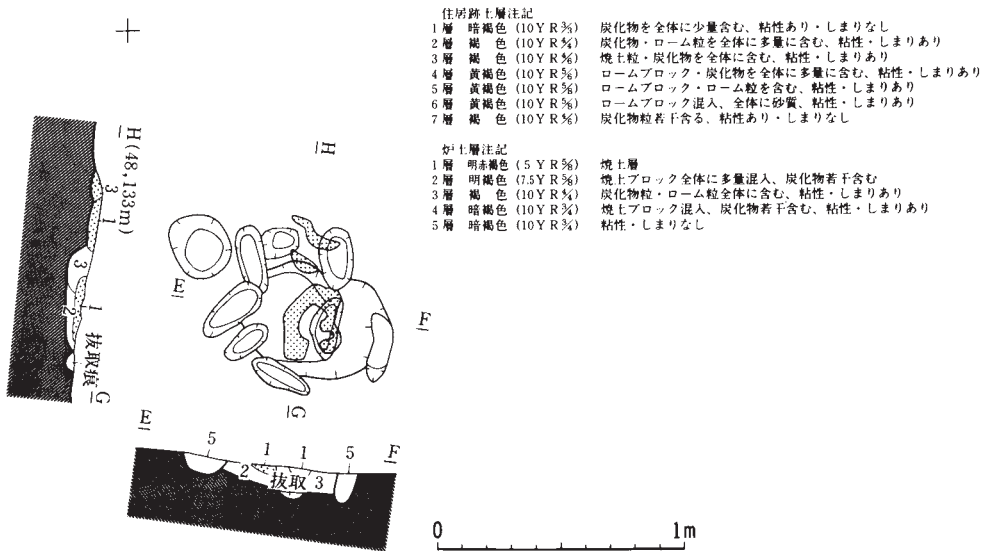
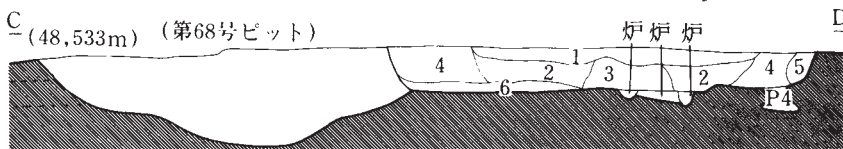
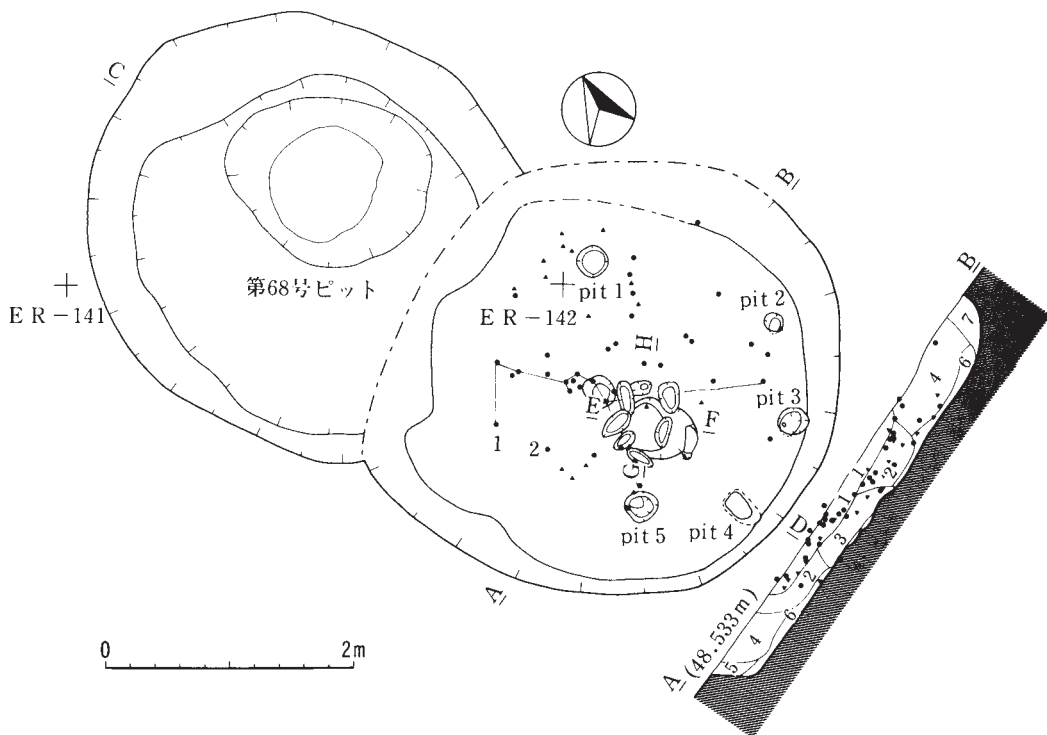
第24図 - 1 胴部上半から下半部にかけての深鉢形土器である。文様区画帯には粘土紐を使用し、胴部上半と下半に横位の区画帯を構成している。横位区画帯の内部には更に縦位で区画し、七つの区画帯を構成している。区画帯の内部には、弧状を縦位方向に施文し中央部に円形の刺突を連続に施文している。施文手順は、粘土紐 縄文 沈線 磨消で、磨消技法は、それほどいいに行なわれていない。

第24図 - 2 底部から胴部にかけての鉢形土器である。文様は、単節 R L を縦位方向に回転して縄文を施文している。底辺部は指でナデており、無文帯を構成し、器外面にスス状の炭化物が付着している。

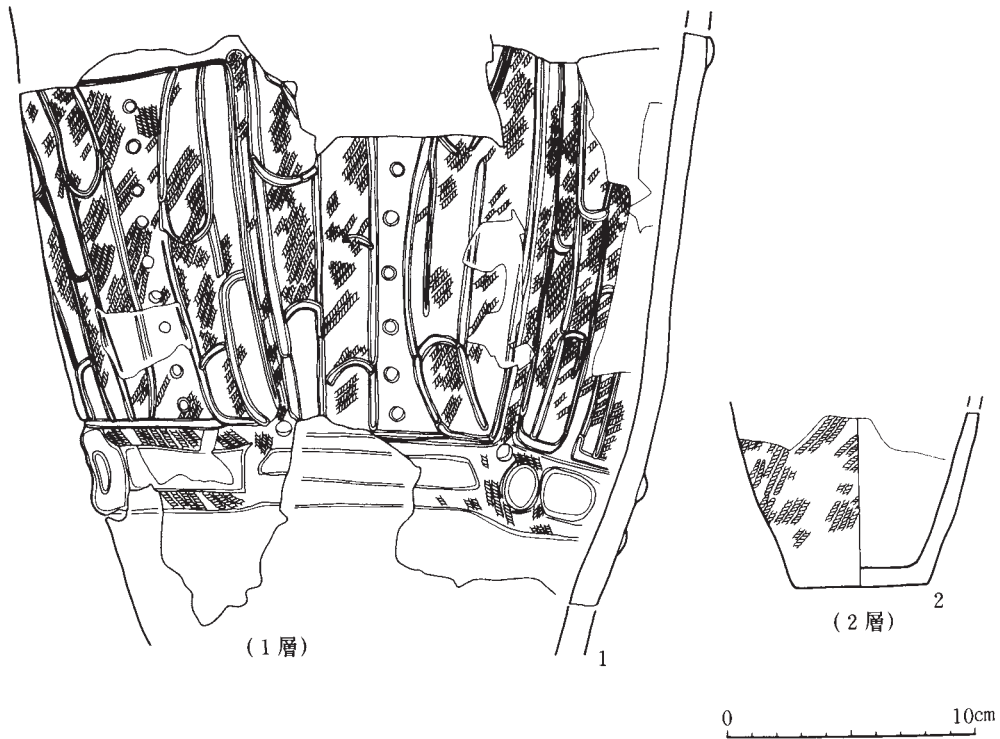
第 7 号竪穴住居跡 (第25・26図)

〔位置と確認〕

本遺構は、調査地区南側斜面の E N・E O - 143グリッドに位置し、基本層序第 b 層を精査中に楕円形の落ち込みを確認した。北側約 5 m に第 8 号竪穴住居跡・南側約 1 m に第 5 号竪穴



第23図 第6号竪穴住居跡実測図



第24図 第6号竪穴住居跡出土土器実測図

住居跡が位置している。

〔重複〕

認められなかった。

〔平面形・規模〕

平面形は、東西に最大径をもつ楕円形を呈する。規模は、長径3.75m・短径2.86mで床面積は8.08m²である。

〔壁・床面〕

壁は、すべて住居跡の上端から床面にかけて傾斜している。壁高は、東壁10cm・西壁10cm・南壁7cm・北壁20cmである。

床面は、住居跡の中央部から東側にかけて堅緻な貼り床部分が存在している。また、住居跡の中央部分に長径1.7m・短径1.2mのほぼ方形を呈する浅い落ち込み部分が存在する。

〔柱穴〕

本住居跡からはpitを4個検出した。pitの位置は、pit1・3・4が南壁寄りにpit2が北壁寄りに位置している。pit1～4の堆積土は、暗褐色土で少量の炭化物とロームブロック

が混入している。pit 1 の覆土から土器が 1 片出土した。pit から柱痕は確認できなかったが形態から柱穴と思われる。

pit 1 方形 (36 × 31cm) 深さ 24cm pit 2 円形 (25 × 23cm) 深さ 26cm
pit 3 楕円形 (23 × 17cm) 深さ 19cm pit 4 楕円形 (33 × 22cm) 深さ 26cm

〔炉〕

炉は、住居跡の中央部から南壁寄りに位置している。規模は、長径 71cm・短径 56cm のほぼ円形を呈する地床炉である。壁は南壁がなだらかに傾斜しているが、他はほぼ垂直を呈している。底面は軟弱で凹凸が著しい。火熱面は第 1・3 層の下面である。炉内の第 1 層中から、深鉢形土器が横位の状態で出土している。

〔堆積土〕

堆積土は 6 層に分層することができた。堆積土の観察から自然堆積土と思われる。

〔その他の付属施設〕

認められなかった。

〔出土遺物〕(第 26 図)

出土遺物を平面的分布から観察すると、全体に壁寄りにまばらに分布しているが、特に西側の壁寄りに多く位置している。また、炉には横位状態で深鉢形土器が出土した。土器の接合関係は、炉内の接合土器を除くと(2)の第 4 層中のみでの接合である。

(覆土中出土遺物) 第 26 図 - 2 ~ 4・6 ~ 12・18

(第 26 図 - 2) 本土器は胴部下半が張り出す切断蓋付土器である。文様は、口頸部と胴部に横位の沈線を巡らして文様区画帯を構成し、コ状の連続文様を施文している。胴部張り出し部には突起がみられ、突起部には貫通孔がみられる。胎土に細砂粒を多く含み焼成は不良である。

(3) は磨消縄文の土器で、V 字状の文様構成で焼成は良好である。(8) は横位の沈線を巡らした後に弧状の文様を施文しており、(10) は無文で焼成は不良である。他は縄文のみを施文しておりスス状炭化物の付着が多く、焼成が不良な土器が多い。

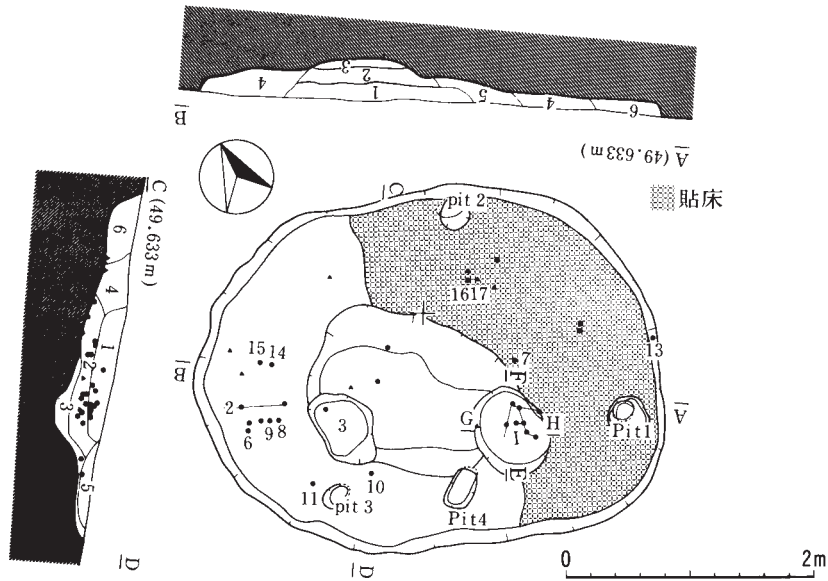
縄文の原体には、(3・11) が R L を用いており他は L R である。

(18) は、両側縁部にすりがみられる凝灰岩の石製品で、岩版の可能性が高い。

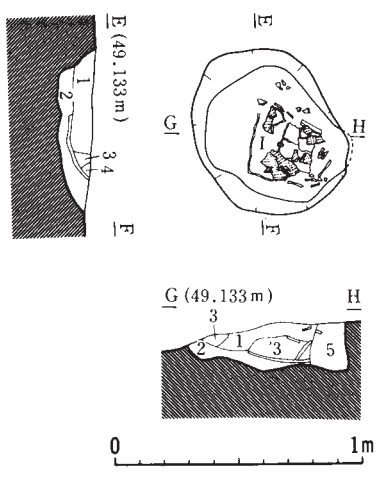
(床面・床直出土遺物) 第 26 図 - 1・5・13 ~ 17

第 26 図 - 1 体部のみ残存する深鉢形土器である。文様は器外面に単節 R L を使用し全面に施文しており、体部上半部に 2 個対の補修孔がみられる。二次火熱を受けているため器外面の剥落は著しい。

(13) は粘土紐を横位に貼り付けたものである。(16・18) は鉢形土器の底部破片で、(16) の底面には網代痕がみられる。(5) は口縁部破片で鉢形を呈し器外面にスス状炭化物の付着がみられ、焼



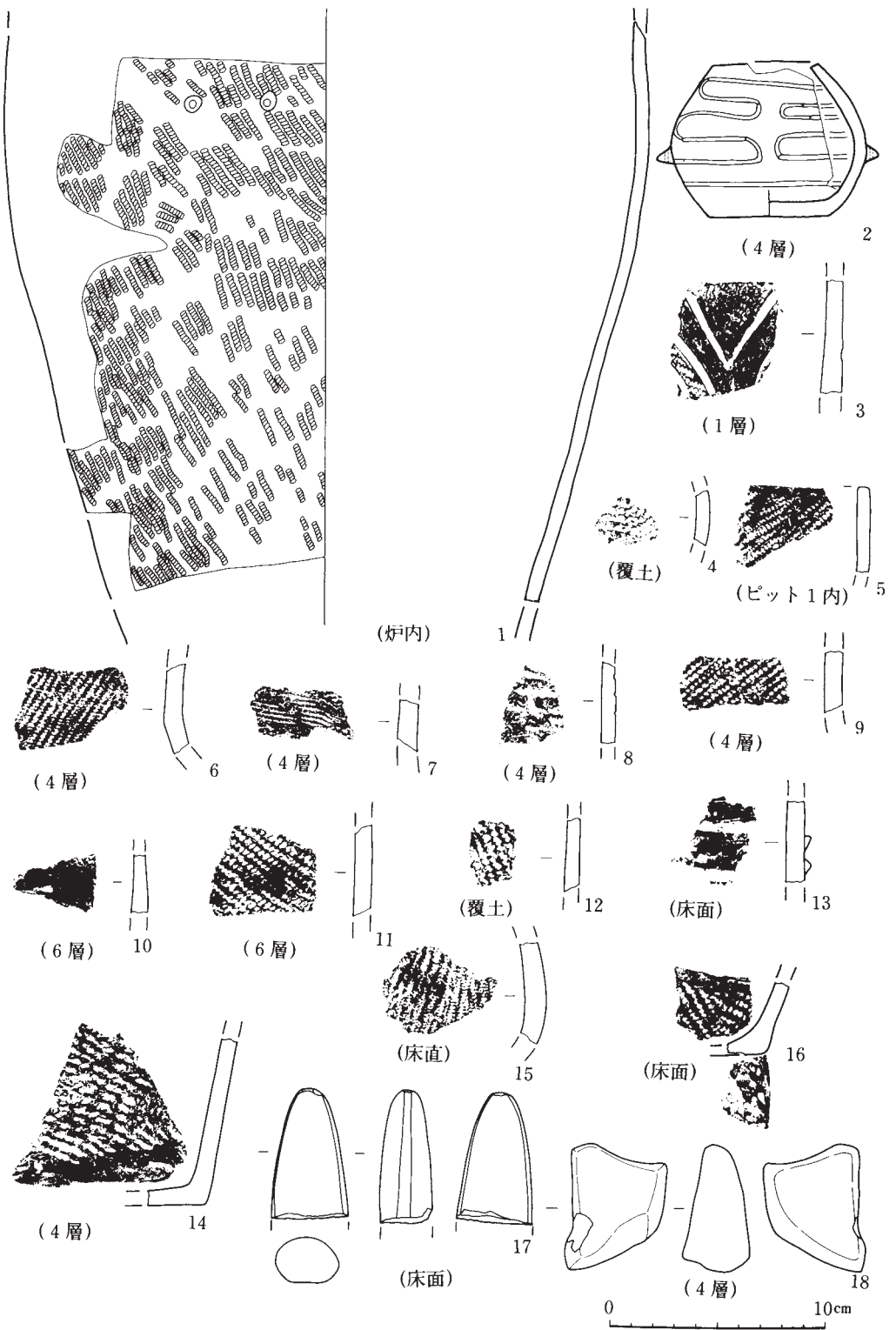
EO-143



- 住居跡土層注記
- 1層 黒褐色 (10Y R%) 炭化物を多量・ローム粒を少量含む、粘性あり・しまりなし
 - 2層 暗褐色 (10Y R%) 炭化物を若干含む、ローム粒が混入、粘性・しまりあり
 - 3層 褐色 (10Y R%) 暗褐色土混入、炭化物若干含む、粘性・しまりあり
 - 4層 暗褐色 (10Y R%) 炭化物・ローム粒少量含む、粘性・しまりあり
 - 5層 暗褐色 (10Y R%) 炭化物・ローム粒・パミスを若干含む、粘性・しまりあり
 - 6層 褐色 (10Y R%) ローム粒・小ロームブロックを含む、粘性・しまりあり

- #7層注記
- 1層 暗褐色 (10Y R%) 焼土粒・炭化物を少量含む、粘性あり・しまりなし
 - 2層 褐色 (10Y R%) 炭化物若干含む、黄褐色土混入、粘性あり・しまりなし
 - 3層 赤褐色 (2.5Y R%) 黄褐色土混入、粘性なし・しまりあり
 - 4層 黒褐色 (10Y R%) 焼土・炭化物若干含む、粘性あり・しまりなし
 - 5層 褐色 (10Y R%) 焼土粒若干含む、黄褐色土混入、粘性あり・しまりなし

第25図 第7号竪穴住居跡実測図



第26図 第7号竖穴住居跡出土遺物実測・拓影図

成は不良である。

縄文の原体は、(5)がLR、(15、16)がRL、(14)が無節のRを用いている。

(17)は、磨製石斧の頭部の破片で、両側縁部に若干スリの痕跡が認められる。

第8号竪穴住居跡(第27・28図)

〔位置と確認〕

本遺構は、調査地区南側で台地緩斜面に設置したE・L・E・M-142・143グリッドに位置しており、第a層を精査中に黒褐色の落ち込みを確認した。南側約5mに第7号竪穴住居跡が存在する。

〔重複〕

認められなかった。

〔平面形・規模〕

平面形は、北側が張り出し他が丸みをもつ楕円形を呈する。規模は、長径4.7m・短径3.7mで床面積は10.44m²である。

〔壁・床面〕

壁は、上端から床面にかけてなだらかに傾斜しており、軟弱なつくりである。壁高は、東壁25cm・西壁10cm・南壁10cm・北壁40cmである。

床面は、ほぼ平坦で、炉の北側に一部貼り床がみられ、他は軟弱な構築である。

〔柱穴〕

pitは3個検出した。北側の壁寄りにpit1、南側の壁寄りにpit2・3が位置している。pitの配置等から柱穴と思われる。

pit1……円形(28×27cm)深さ17cm pit2……円形(31×30cm)深さ24cm

pit3……楕円形(35×34cm)深さ20cm

〔炉〕

炉は住居跡の南壁寄りに位置しており、規模は長径76cm・短径71cmである。炉は7個の炉石の抜き取り痕を検出した。抜き取り痕の配置から、石囲炉の形態を呈すると思われる。炉の堆積土は4層に分層でき、第2層下面が火熱面である。

〔堆積土〕

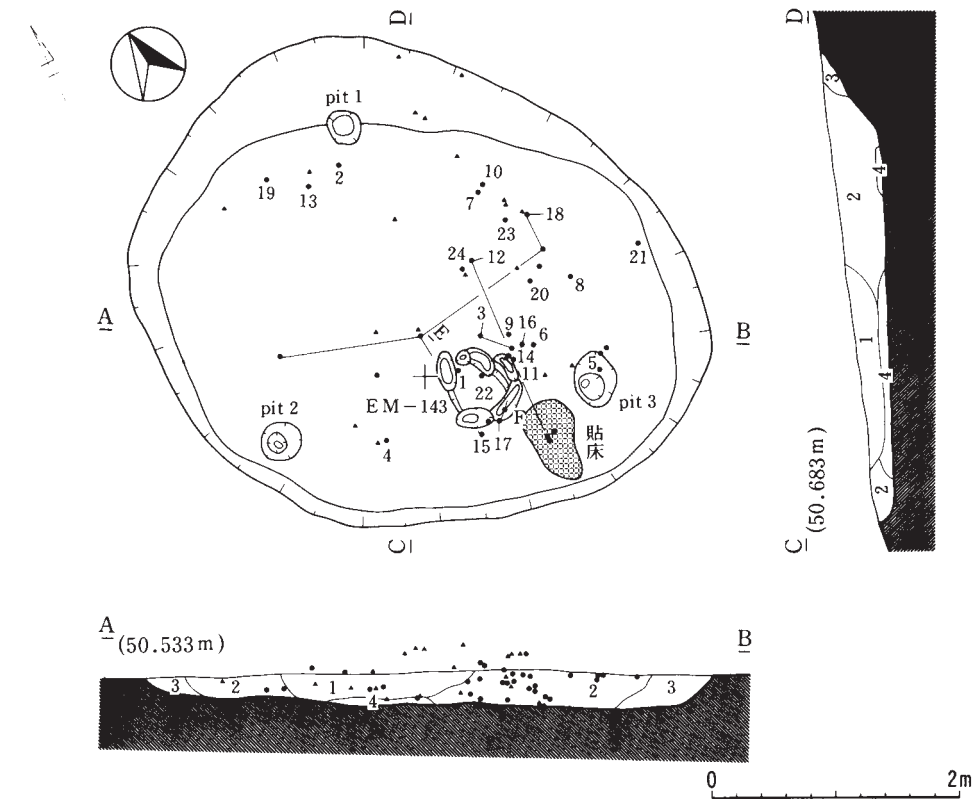
本住居跡の堆積土は4層に分層できた。堆積土の観察から自然堆積と思われる。

〔その他の付属施設〕

認められなかった。

〔出土遺物〕(第28図)

遺物の平面的分布は、南側を中心としてまばらに分布しており、西側の分布は薄い。第2層

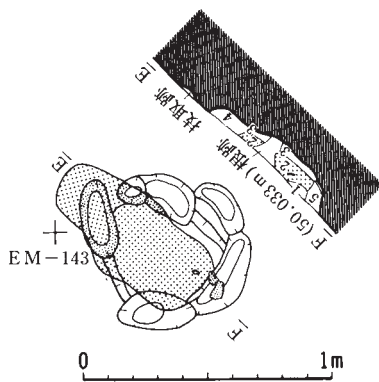


住居跡土層注記

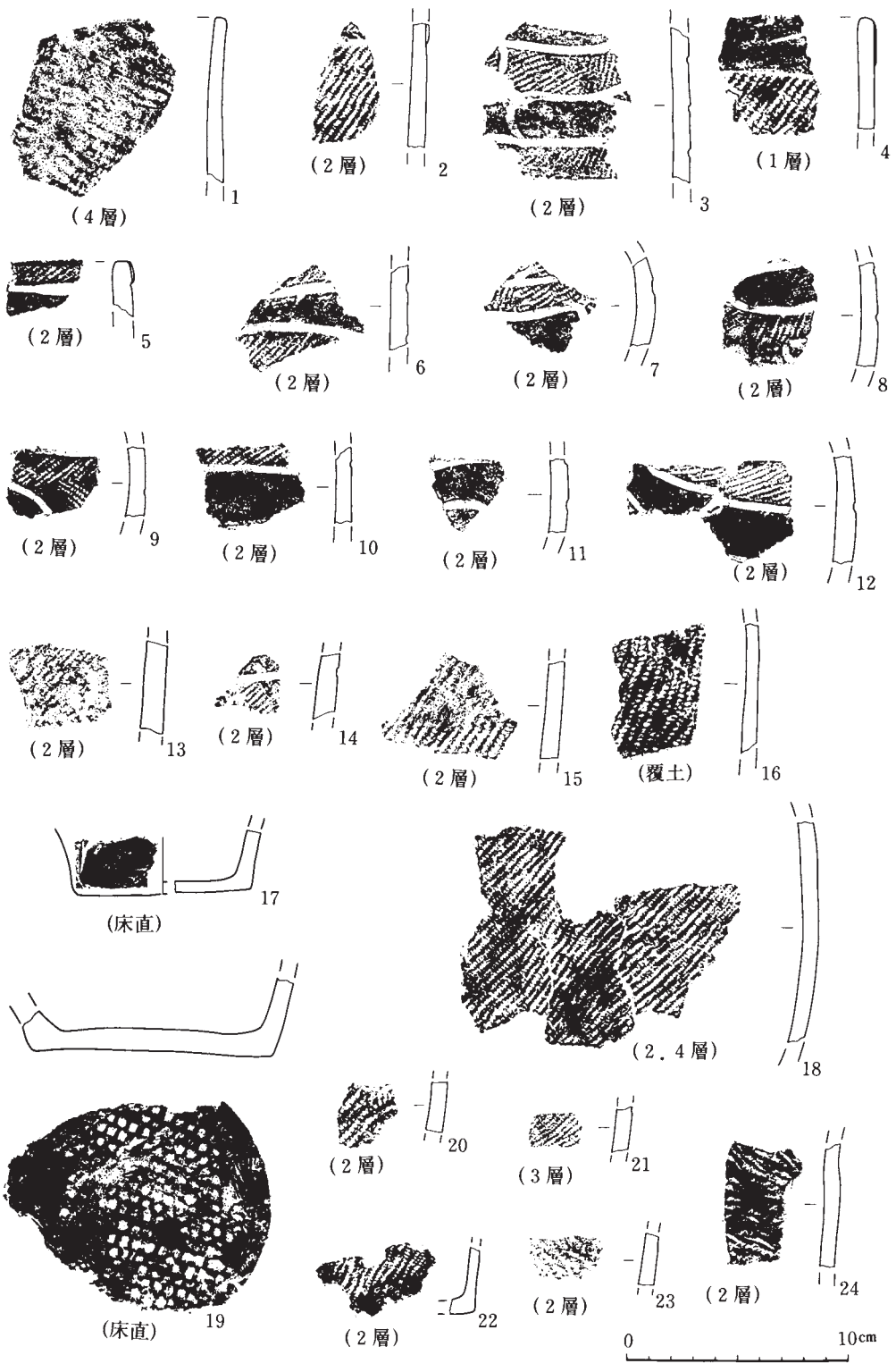
- | | |
|-----------------|-----------------------------|
| 1層 黒褐色 (10Y R%) | 炭化物粒・ローム粒全体に少量混入、粘性あり・しまりなし |
| 2層 暗褐色 (10Y R%) | ローム粒全体に多量に含む、粘性・しまりあり |
| 3層 褐色 (10Y R%) | 褐色土・ローム層の混合層、粘性・しまりあり |
| 4層 黄褐色 (10Y R%) | 粘性・しまりあり |

炉土層注記

- | | |
|-----------------|----------------------------|
| 1層 黄褐色 (10Y R%) | 粘性・しまりあり |
| 2層 明赤褐色 (5Y R%) | 焼土層 (火床面) しまりあり |
| 3層 褐色 (10Y R%) | 焼土粒若干含む、粘性・しまりあり |
| 4層 褐色 (10Y R%) | ロームブロックと焼土粒若干混入、粘性なし・しまりあり |
| 5層 暗褐色 (10Y R%) | 粘性・しまりなし (採取後) |



第27図 第8号竪穴住居跡実測図



第28图 第8号竖穴住居跡出土土器拓影图

から多く出土している。

本住居跡からは土器破片のみ出土し、完形及び復原可能土器は出土しなかった。石器は、礫・チップが出土したのみで石器は出土しなかった。接合関係は、覆土中の接合が多く、(18)の土器は住居跡内に散在しており、接合した資料である。垂直的分布をみると、第2層の確認面から第4層内において接合している。これらの接合関係から、住居跡が埋没する際に土器を廃棄したと考えられる。

(覆土中出土遺物) 第28図 - 2・16・18・20~24

(2・4・5)は折り返し口縁を有する土器である。(4)は折り返し口縁部を無文化しているが、(5)は折り返し口縁部にLRの縄文を施文している。(3・6~9)は磨消縄文を施文している土器である。文様構成は、横位方向に展開する渦巻文様と思われるが小破片のため全体の文様構成は判然としない。(16~18・20~24)は、縄文のみを施文している土器で、深鉢・鉢形の破片と思われる。一般に焼成は不良で、スス状炭化物の付着が多い。

縄文の原体はLRが主体を占める。他には(8)のRL・(9)のRLとLRを用いて羽状化したものや、(24)の無節のRもみられる。

(床面・床直出土遺物) 第28図 - 1・17・19

床面に遺物はみられず、床直から出土した遺物は極端に少ない。

(1)は、粗製の深鉢形土器であり縄文RLを施文している。焼成は不良で、器外面にスス状炭化物が付着している。(17・19)は深鉢形土器の底部破片である。(17)は焼成が良好な土器で、(19)の底面には網代痕がみられる。

第9号竪穴住居跡(第29・30図)

〔位置と確認〕

本遺構は、調査地区南側の傾斜面で調査区EN・EO-138・139グリッドに位置している。第b層を精査中に落ち込みを確認した。

〔重複〕

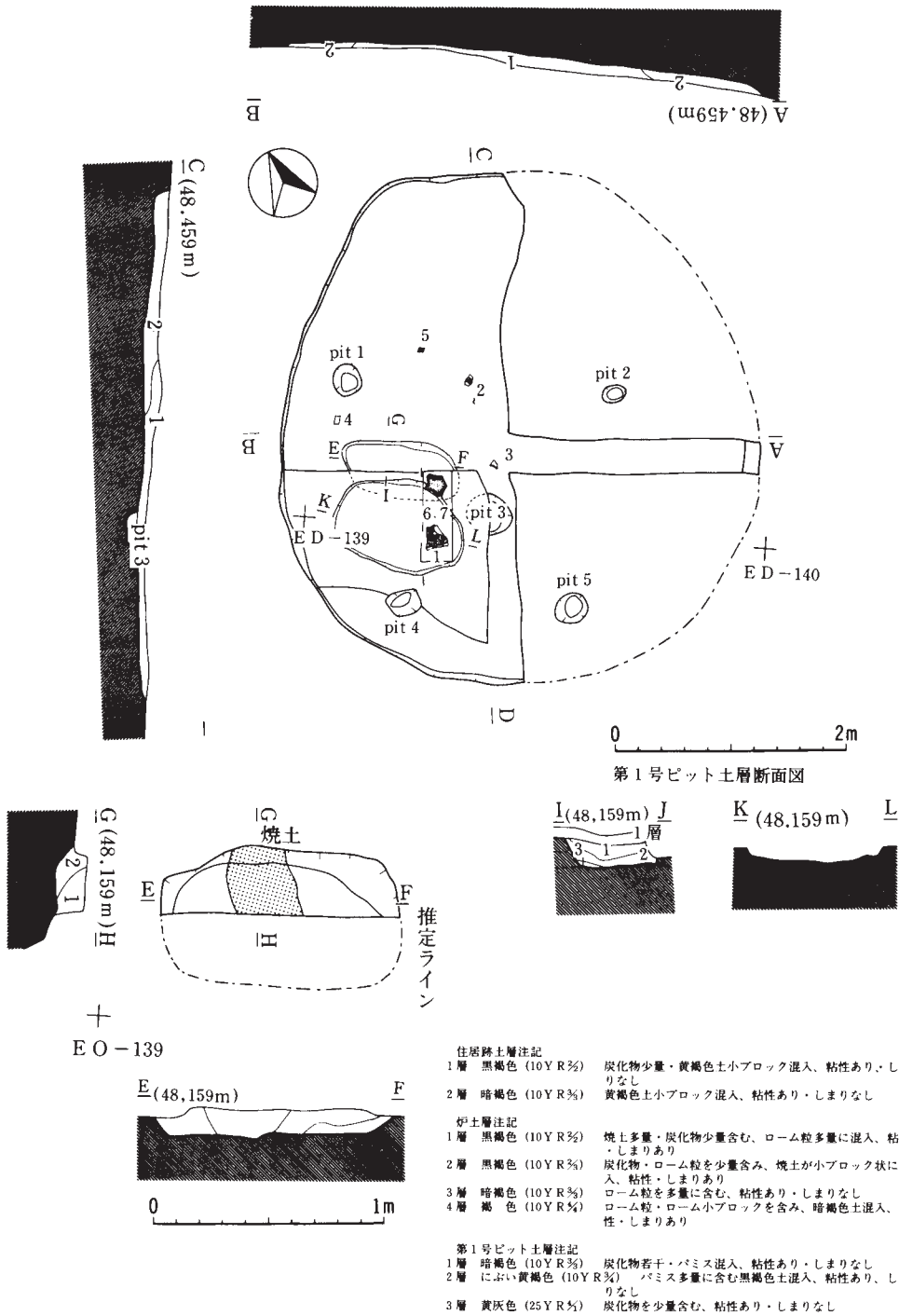
認められなかった。

〔平面形・規模〕

平面形は、推定ラインとなっている。残存部から推定すると全体的に丸みをもつ円形の形態を呈する。規模は、長径4.4m・短径(4.1m)で床面積は(14.51m²)である。

〔壁・床面〕

壁は、北壁が垂直に立ち上がり、他の壁は上端から床面にかけて傾斜している。壁はすべて軟弱なつくりである。壁高は、東壁7cm・西壁5cm・南壁5cm・北壁12cmである。



第29図 第9号竪穴住居跡実測図

床面は、北東側から南西側に傾斜しており、全体的に軟弱な構築である。

〔柱 穴〕

pitは5個検出した。pitの位置は、pit3が炉の東側にpit1・2が北側にpit4・5が南側に位置している。

pit1楕円形 (27×23cm) 深さ10cm pit2楕円形 (18×16cm) 深さ22cm
pit3円形 ((39)×35cm) 深さ9cm pit4方形 (26×22cm) 深さ13cm
pit5円形 (30×26cm) 深さ11cm

〔炉〕

炉は住居跡の中央部から西寄りに位置している。形態は、残存部から推定すると、長径102cm・短径(28cm)の楕円形の地床炉である。

〔堆積土〕

堆積土は2層に分層できたが、薄い堆積のため自然・人為堆積なのかどうかは判断できなかった。

〔その他の付属施設〕

炉の南側には、長径115cm・短径67cmの楕円形のピットを検出した。炉との切り合いは不明で、ピット内から、遺物は出土しなかった。

〔出土遺物〕(第30図)

本住居跡は、遺物の出土状況は、炉を中心に西側に多い。遺物は、すべて床直及び覆土からの出土であり、床面からの出土はみられなかった。しかし、住居跡の覆土が10cm内外と薄く本住居跡に伴う同一時期のものと思われる。

(第30図 - 1) 器形はくびれ部をもたない鉢形土器である。口縁部は折り返し口縁を有する。文様は、無節(L)を用い、折り返し口縁部には横位方向に、体部には縦位方向に施文しており、底辺部には横位方向にナデ調整を行なっている。器内外面にはスス状炭化物の付着が多い。

(第30図 - 2) 器形は胴部下半が張り出す小型壺形土器である。口縁部には対象に貫通孔がみられる。口頸部と胴部に文様区画帯を構成し、区画帯の内部には縦位の渦巻文様を2単位施文している。器外面には赤色塗料を塗布している。

(3~7)は粗製の深鉢形土器である。原体は3が(LR)、(4・5)が(RL)を用いており、(6)は無節である。焼成は不良で、スス状炭化物の付着がみられる。

(8)は、石器分類の類(磨+敲)で、側面の一方にスリがみられ、表・裏面に敲きの痕跡がみられる。

第10号竪穴住居跡(旧番号第3号焼土状遺構) 第31・32図

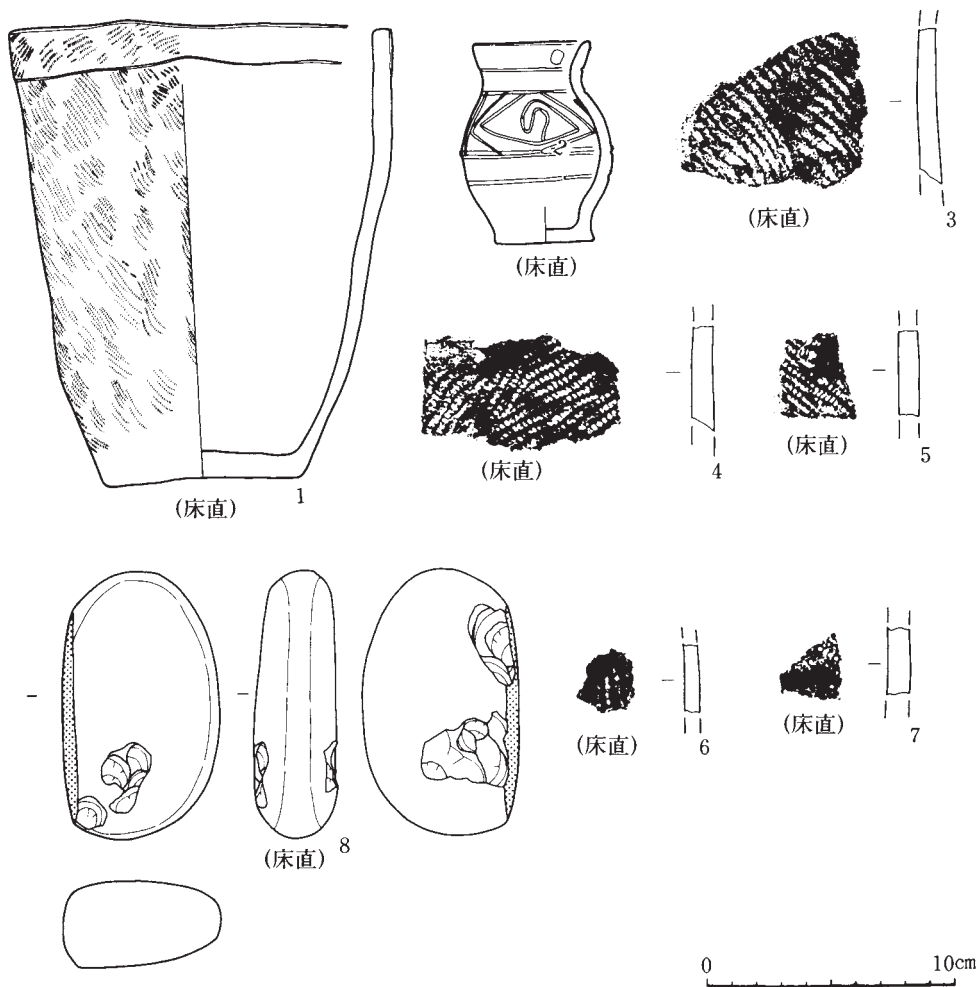
〔位置と確認〕

本遺構は、調査地区南側のEJ-149グリッドに位置している。道路上に位置し第1層まで掘

乱をうけており、この面で炉だけを確認した。炉の形態等から住居跡に伴う炉と思われるため、住居跡の項目に入れて記載する。

〔炉〕

炉は、1個の丸みをもつ安山岩を南側に配置し、周縁に4個の礫の抜き取り痕を検出した。



第30図 第9号竪穴住居跡出土遺物実測・拓影図

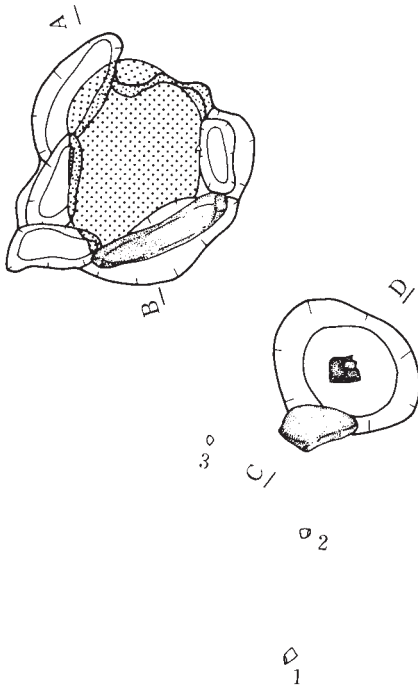
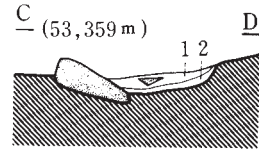
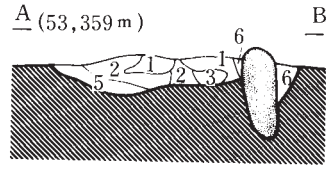
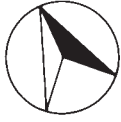
礫と抜き取り痕の配置等から石囲炉の形態と思われる。炉の規模は、長径70cm・短径65cmである。炉の堆積は5層に分層できた。

〔その他の付属施設〕

炉の南側約27cmの位置に長径43cm・短径32cmの円形のピットを検出した。遺物は、西壁寄りから礫が1個出土したのみである。

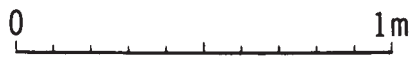
+

EJ-149



- 炉土層注記
- 1層 におい黄褐色 (10Y R 5%) 焼土粒を多量に含み、炭化物混入
 - 2層 明赤褐色 (5Y R 5%) 焼土層、しまりあり
 - 3層 黄褐色 (10Y R 5%) ロームブロック・焼土ブロック混入
 - 4層 暗褐色 (10Y R 3%) 焼土粒・ロームブロック・ローム粒、混入
 - 5層 におい黄褐色 (10Y R 5%) ロームブロック・焼土・黒色土粒混入
 - 6層 褐色 (10Y R 5%) ローム粒混入

- ピット土層注記
- 1層 におい黄褐色 (10Y R 5%) ローム粒混入
 - 2層 黄褐色 (10Y R 5%) 黒色土粒混入



第31図 第10号竪穴住居跡実測図

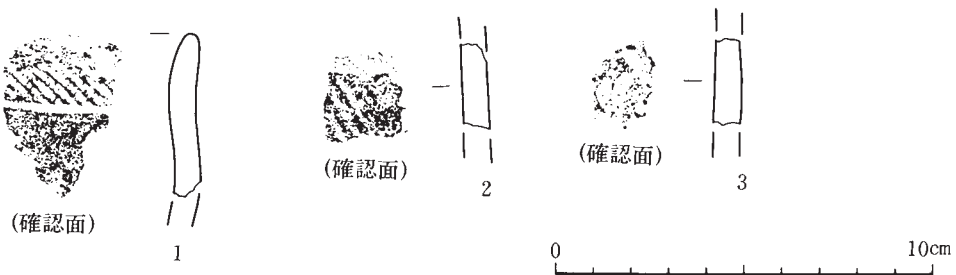
〔出土遺物〕第32図

炉内からは遺物は出土しなかった。また、炉とピットの南側から土器が3片出土したが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。

(1)は、口頸部破片であり深鉢形を呈すると思われる。口頸部のくびれ部に横位の文様区画帯を構成しており、原体にR Lを使用している。(2・3)は、小破片のため器形は判断できない。

(2)にはスス状炭化物が付着しており原体はL Rである。

(成田滋彦)



第32図 第10号竪穴住居跡出土土器拓影図

第3表 竪穴住居跡出土石器観察表

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|---------|--------|------|------|------|--------|----|----|-----|
| 第9図-10 | 1 H覆土 | 40 | 20 | 12 | 11.0 | A | C | |
| 第9図-9 | 1 H床直 | 47 | 17 | 7 | 9.4 | F | G | |
| 第15図-33 | 2 H覆土 | 33 | 30 | 11 | (10.0) | B | C | 欠 損 |
| 第15図-35 | 2 H覆土 | 47 | 18 | 11 | 7.7 | F | E | |
| 第15図-34 | 2 H覆土 | 61 | 31 | 11 | 29.0 | F | G | |
| 第15図-36 | 2 H覆土 | 43 | 46 | 25 | 67.0 | L | J | 欠 損 |
| 第15図-37 | 2 H覆土 | 35 | 42 | 15 | 26.0 | H | F | 欠 損 |
| 第15図-39 | 2 H覆土 | 61 | 73 | 33 | 246.0 | I | H | 欠 損 |
| 第15図-38 | 2 H覆土 | 72 | 39 | 23 | (73.0) | L | F | 欠 損 |
| 第15図-40 | 2 H覆土 | 13 | 31 | 23 | (10.0) | L | G | 欠 損 |
| 第17図-7 | 3 H床面 | 50 | 24 | 不明 | 不明 | E | M | |
| 第22図-7 | 5 H 2層 | 20 | 8 | 3 | 0.6 | M | A | |
| 第22図-20 | 5 H床直 | 52 | 35 | 25 | (60.0) | M | H | 欠 損 |
| 第22図-21 | 5 H 3層 | 43 | 33 | 21 | (40.0) | M | H | 欠 損 |
| 第26図-17 | 7 H床面 | 61 | 36 | 23 | 76.0 | L | F | 欠 損 |
| 第26図-18 | 7 H 4層 | 59 | 43 | 32 | 35.0 | E | N | |
| 第30図-8 | 9 H床面 | 126 | 63 | 34 | 370.0 | E | I | |

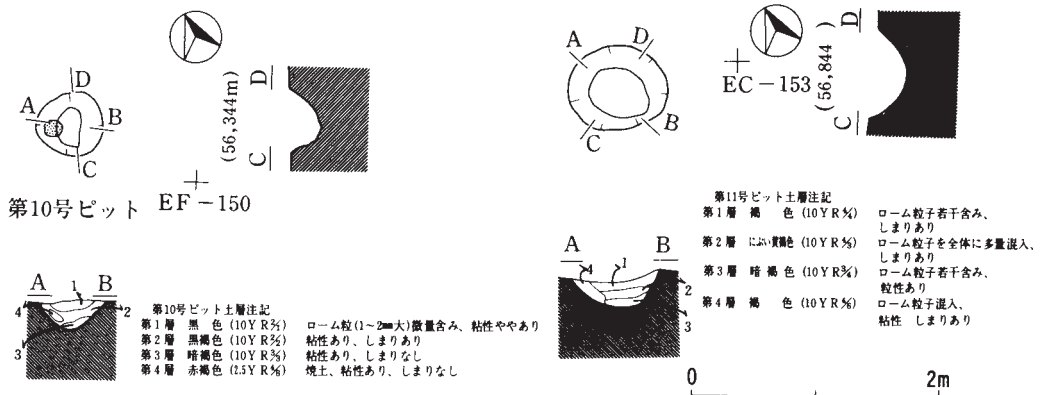
2 ピット

(1) 第10号ピット (第33図、第11表、写真11)

位置・確認 調査地区の東側にある圃場と防風林(松林)の境いに位置する E E - 149 グリッドの第 a 層上面で黒色土の落ち込みを確認した。この付近の標高は約56mである。南側にある湧水の流れる沢と北側の低地の間に挟まれた丘陵上に立地して、西を除いた三方に緩傾斜している。この遺構の周囲には、3、4 m 離れて第18号、第23号フラスコ状ピット、第24号大型ピットなどが分布している。

形状・規模 開口部は円形に近いが、坑底部は南北に長い楕円形である。断面は、凸レンズ状で、壁、坑底部は第 a 層を掘り込んでいるためか共に軟弱である。開口部径52×54cm 坑底部径20×30cm、壁高(深さ、以下同じ)22cmである。

覆土・遺物 覆土は、4層に区分した。第1層、黒色土、第2層以下、黒褐色、暗褐色焼土がレンズ状に堆積している。出土遺物はない。(野村、北林)



第33図 第10・11号ピット実測図

(2) 第11号ピット (第33図、第11表、写真11)

位置・確認 調査地区の東側に位置する E B・E C - 152グリッドの第 b 層で落ち込みを確認した。標高56.7mで、周辺には第1号溝状ピット、第12、13、15号ピットなどが分布している。

形状・規模 開口部、坑底部とも不整楕円形で、断面は凸レンズ状である。壁、坑底面は、第 b 層から第 a 層にかけて掘り込まれている。壁は軟弱で、坑底面はしまりが乏しい。開口部径80×67cm、坑底部径50×40cm、壁高30cmの規模である。

覆土・遺物 覆土は、4層に区分した。いずれの層にもローム粒を含むが、第1層以下褐色、泥い黄褐色、暗褐色、褐色の土層が堆積し、自然堆積と認めた。遺物は出土しなかった。(鈴木、北林)

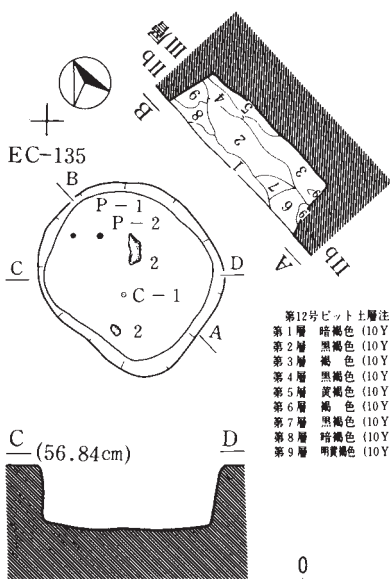
(3) 第12号ピット (第34図、第11表、写真11)

位置・確認 調査地区の東端に位置するEC - 153グリッドの第 b 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。標高約56mの台地上に立地して、周辺には第11、15号ピット、第1号溝状ピットなどが分布している。

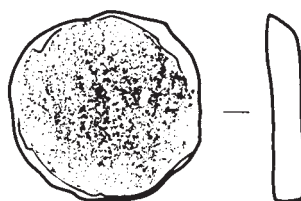
形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも隅丸長方形に近い楕円形である。断面は、壁面が垂直に近く、坑底部も多少の起伏はあるが水平に近いバット (vat、写真の現像液などを入れる容器) 状である。壁、坑底面は、第 b ~ 層を掘り下げ、全体として均整のとれたピットである。開口部径145×133cm、坑底部径127×115cm、壁高45cmの規模である。

覆土・遺物 覆土は、9層に区分した。第2、3、7層には若干の炭化物が混入して、第1層暗褐色、以下黒褐色、褐色、黒褐色、黄褐色、褐色、黒褐色、暗褐色、明黄色の土層を確認した。出土遺物は、第2層から円盤状土製品1点 (第35図) 第3、4層から縄文土器の細片各1点、3層から自然礫2点である。縄文土器は、第 群に分類している土器である。

(蝦名、北林)



第34図 第12号ピット実測図



(第12号ピット2層C-1)

(観察表は第8表参照)

第12号ピット土層注記

| | | |
|-----|----------------|-------------------------|
| 第1層 | 暗褐色 (10YR 3/5) | ローム粒子若干混入、粘性・しまりあり |
| 第2層 | 黒褐色 (10YR 2/5) | 炭化物若干含む、ローム粒子が全体にまばらに混入 |
| 第3層 | 褐色 (10YR 4/5) | ロームアロック、粒子多量混入、炭化物若干混入 |
| 第4層 | 黒褐色 (10YR 2/5) | ローム粒子を多量に含む、粘性あり、しまりなし |
| 第5層 | 黄褐色 (10YR 5/5) | 黒褐色土が塊状混入、粘性あり、しまりなし |
| 第6層 | 褐色 (10YR 4/5) | 黄褐色粘土・粒子全体に混入、粘性・しまりあり |
| 第7層 | 黒褐色 (10YR 2/5) | 黄褐色粘土がブロック状に混入、炭化物若干含む |
| 第8層 | 暗褐色 (10YR 3/5) | ローム粒子少量混入、炭化物若干含む |
| 第9層 | 明黄色 (10YR 8/5) | 黒褐色土がブロック状に若干混入、粘性あり |



第35図 第12号出土土製品実測図

(4) 第15号ピット (第36図、第11表、写真11)

位置・確認 調査地区の東部に位置するEB - 154グリッドの第 b 層で暗褐色の落ち込みを確認した。この付近は圃場内で北に緩傾斜し、標高は56.5mである。周辺の遺構は西側にのみ分布して、第11~13号ピット、第1号溝状ピットなどがある。

形状・規模 平面プランは、開口部がほぼ東西に長軸がある楕円形であるが、坑底部は

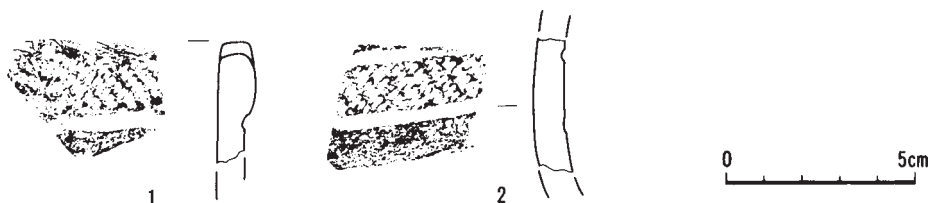
南北に長い楕円形で、断面は実測地点によって漏斗状あるいは円筒状となっている。壁、坑底面は、第 b ~ 層を掘り下げているため堅緻なつくりで、覆土の確認は容易であった。規模は、開口部径62×37cm、坑底部径24×13cm、壁高38cmである。

覆土・遺物 覆土は、5層に区分した。第1層は暗褐色、第2～5層は褐色で、第2、3層にはローム粒が混入して、また、第4層にはロームブロックが混じっている。自然堆積と思われる。遺物は、縄文土器片（第37図）が2点、覆土3層から出土した。同一個体の土器片であろう。縄文土器片は、第 群に分類している土器である。 （野村、北林）



第15号ピット土層注記
 第1層 暗褐色 (10Y R%) 粘性なし、しまりややあり
 第2層 褐色 (10Y R%) ローム粒子が少量 混入、粘性なし、しまりあり
 第3層 褐色 (10Y R%) ローム粒子が若干 混入、粘性ややあり、しまりなし
 第4層 褐色 (10Y R%) ロームブロック多量混入、粘性あり、しまりなし
 第5層 褐色 (10Y R%) 粘性あり、しまりなし

第36図 第15号ピット実測図



第37図 第15号ピット出土土器拓影図

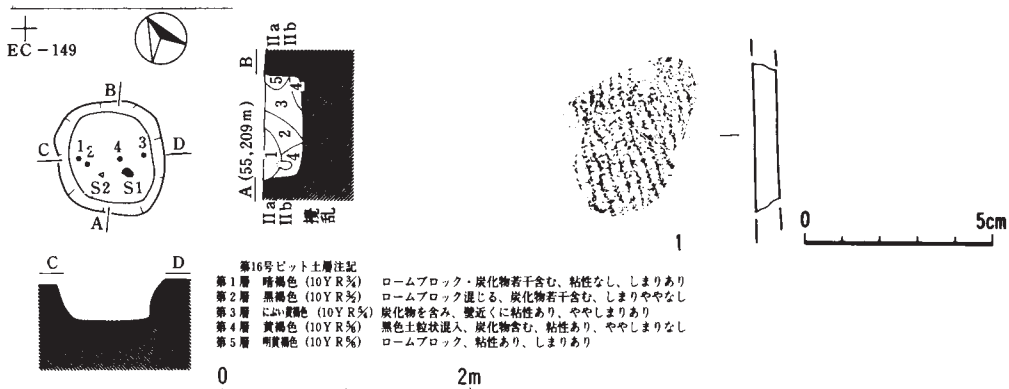
(5) 第16号ピット（第38図、第11表、写真11）

位置・確認 調査地区東端に位置する E C - 149グリッドの第 a層で暗褐色土の落ち込みを確認した。確認地点の標高は55.2m、北向きの斜面上に立地して、周辺から第17、19、21号ピット、第1号溝状ピットなどを検出している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも長軸が南北にある不整な楕円形である。壁、坑底部は、第 a層から第 b層を掘り下げて構築している。東壁は緩やかな立ち上がりであるが、その他の壁面はほぼ垂直に近い掘り方で、断面はバット状である。規模は、開口部径90×86cm、坑底部径73×64cm、壁高28～32cmである。

覆土・遺物 覆土は、5層に区分し、覆土には全体に多少の差はあるが炭化物が微量含まれている。土層は、第1層暗褐色、以下黒褐色、にぶい黄褐色、黄褐色、明黄褐色である。遺物は、縄文土器片4点（第39図）、すり石、礫各1点が出土した。土器は、第 群土器である。

（蝦名、北林）



第38図 第16号ピット実測図

第39図 第16号ピット出土土器拓影

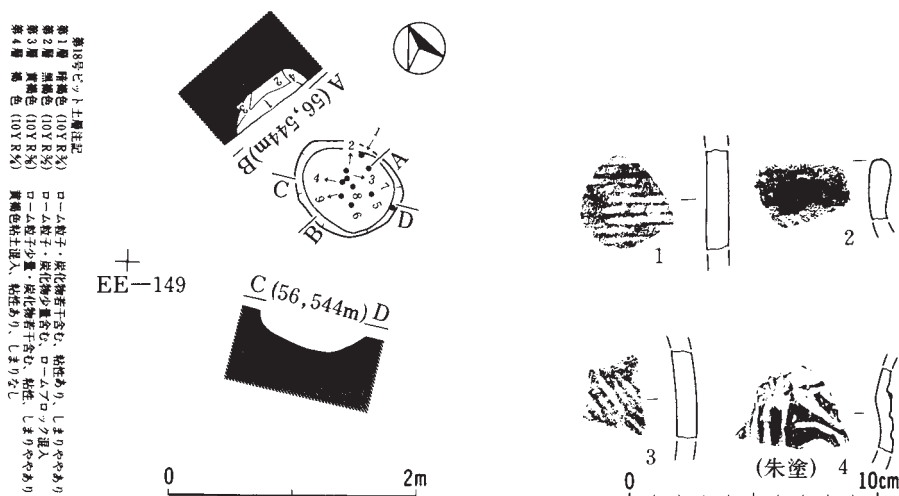
(6) 第18号ピット (第40図、第11表、写真11)

位置・確認 調査地区東側に位置する E D - 149グリッドの第 a層で暗褐色土の落ち込みを確認した。標高56.5mの台地上に立地して、西以外の三方に傾斜している。周辺では第10、17、19、22号ピットなどを検出している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも長軸が東西方向にある不整な楕円形である。壁、坑底部は、第 a層から第 b層を掘り下げて構築してあった。ピットの断面は、凸レンズ状態で、開口部径90×75cm、坑底部径75×65cm、壁高20cmの規模である。

覆土・遺物 覆土は、4層に区分した。第4層以外の土層にはいずれも炭化物を含み、第1層暗褐色、以下黒褐色、黄褐色、褐色の土層が堆積していた。遺物は、縄文土器片が9点出土した。2点は覆土第2層から、ほかは第1層から出土したが、いずれも第 群土器の破片である (第40図)。

(成田(滋)、北林)



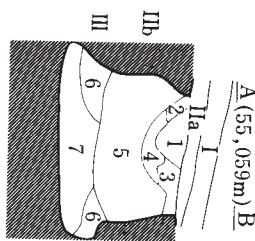
第40図 第18号ピット実測・土器拓影

(7) 第20号ピット(第41図、第11表、写真11)

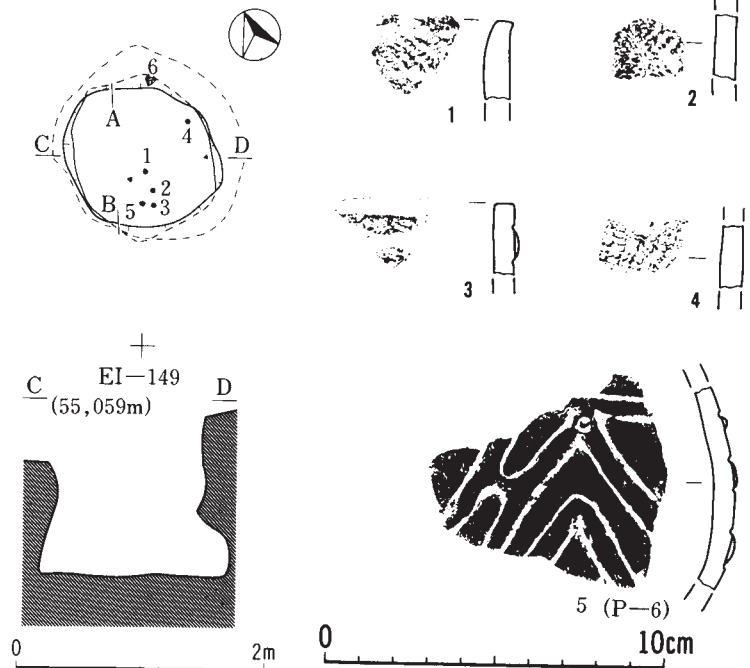
位置・確認 本遺跡の東部に設置されたE H - 148・149グリッドの第 a層上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。現地の標高は55mで、圃場の防風林となつて、南に傾斜している。本遺構の周辺では第23~26号ピット、第2号住居跡、第3号焼土(住居跡に伴う炉)などを検出している。

形状・規模 傾斜地に立地しているためか開口部は南北に長軸がある楕円形となっているが、本来は円形とみられる。壁、坑底部は、第 b層から掘り下げられ、第 a層に達している。断面は、坑底部から内傾しながら立ち上がり、壁面の中端から開口部に向かって外反する、いわゆるフラスコ状である。開口部径125×115cm、坑底部径160×140cm、壁高130~90cmの規模である。

覆土・遺物 覆土は7層に区分した。第1層黒褐色土で炭化物が少量混じる。第2層暗褐色、以下黒褐色、暗褐色、暗褐色、黄褐色、黒褐色の覆土が認められた。覆土の上部は、自然堆積とみられるが、下部は人為的に埋め戻した可能性もある。遺物は、縄文土器片6点、石鏃1点、礫1点である。石鏃は第3層、朱塗り土器は第7層(坑底面)に包含されていたが、その他の遺物はピット上部の覆土から出土したため時期決定の資料となり得るか判然としない。しかし縄文土器片はいずれも第 群土器である(第42・43図、第4表)。(野村、北林)

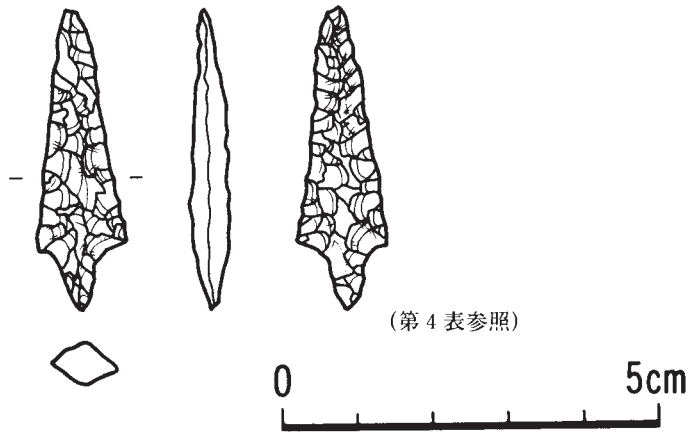


- 第20号ピット土層注記
- 第1層 暗褐色(10Y R 2/3) 若干第3層土混入、炭化物少量混入、粘性あり、しまりなし
 - 第2層 暗褐色(10Y R 2/3) 粘性あり、しまりなし
 - 第3層 暗褐色(10Y R 2/3) 下部なし
 - 第4層 暗褐色(10Y R 2/3) 粘性あり、しまりややあり
 - 第5層 暗褐色(10Y R 2/3) ロー土質土を少量混入、粘性あり、下部なし
 - 第6層 黄褐色(10Y R 3/3) 粘性あり、しまりなし
 - 第7層 黒褐色(10Y R 2/3) 褐色土(70%)混入、粘性あり、しまりなし
 - ロー土質土を少量混入、粘性あり、しまりなし
 - 褐色土(70%)混入、粘性あり、しまりなし
 - ロー土質土を少量混入、粘性あり、しまりなし



第41図 第20号ピット実測図

第42図 第20号ピット出土遺物実測拓影図



第43図 第20号ピット出土石器実測図

第4表 第20号ピット出土石器観察表

| 番号 | 挿 番 号 | 写 真 号 | 名称 | 出土位置 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備 考 |
|----|-------------|-------------|----|----------|------|-----|------|-----|----|----|-----|
| 1 | 第43図 | | 石鎌 | 77±3層S-1 | 40 | 12 | 5 | 1.6 | A | A | |

(8) 第21号ピット (第44図、第11表、写真11)

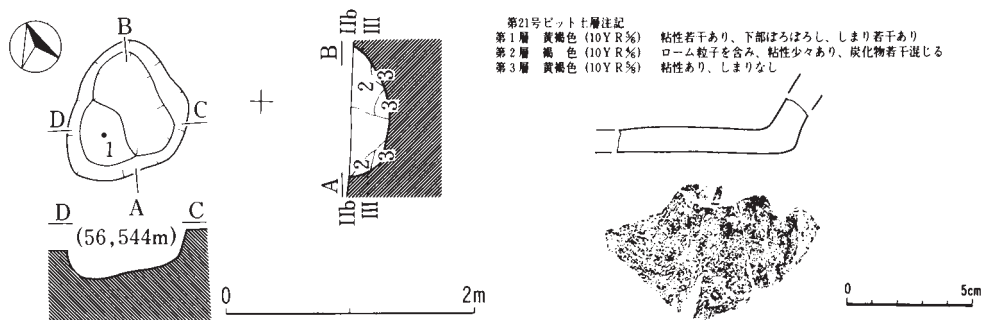
位置・確認 調査地区の東側に位置するEB・EC-148グリッドの第b層で落ち込みを確認した。遺構は標高56.5mの台地に立地して、表土は圃場であった。周辺には第16、17、19、30号ピット、第1号溝状ピットなどが分布している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも南北に長い不整な楕円形である。壁、坑底部は、第b層から第c層にかけて掘り下げて構築している。断面は、凸レンズ状であるが、坑底部西側は一段低く、全体に不均整である。規模は、開口部径115×95cm、坑底部径88×74cm、壁高は32cmである。

覆土・遺物 覆土は、3層に区分した。第1、3層は黄褐色土、第2層は褐色土で炭化物が若干混じっている。遺物は、確認面から縄文土器片が2点出土した。同一個体の底部片であるが、第c群土器に含まれる。
(蝦名、北林)

(9) 第22号ピット (第45図、第11表、写真12)

位置・確認 調査地区の南東端に位置するEN-149・150グリッドの第a層で浅黄色をした火山灰の落ち込みを確認した。現地の標高は50.5mで、東西に走る農道よりも低い地点にあって、北から南に緩傾斜している。周辺の遺構は、第3号焼土(住居に伴う炉跡)、第2号

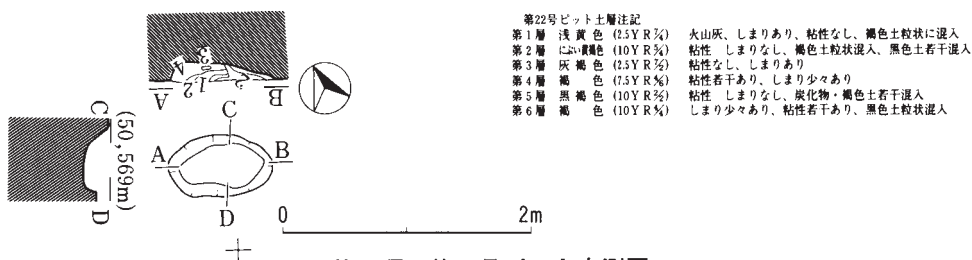


第44図 第21号ピット実測・土器拓影図

配石だけで、遺物の出土量も少ない。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも東西に長い楕円形である。壁、坑底部は第 a ~ b層を利用してあり、軟弱なつくりとなっている。断面は凸レンズ状である。規模は、開口部径83×53cm、坑底部径68×32cm、壁高16cmである。

覆土・遺物 覆土は、6層に区分した。第1層浅黄色、第2層以下、にぶい黄褐色、灰黄色、褐色、黒褐色、褐色の覆土が堆積していた。第1、3層は降下火山灰で、第5層には炭化物が若干混入している。遺物は出土しなかった。(成田悟、北林)



第45図 第22号ピット実測図

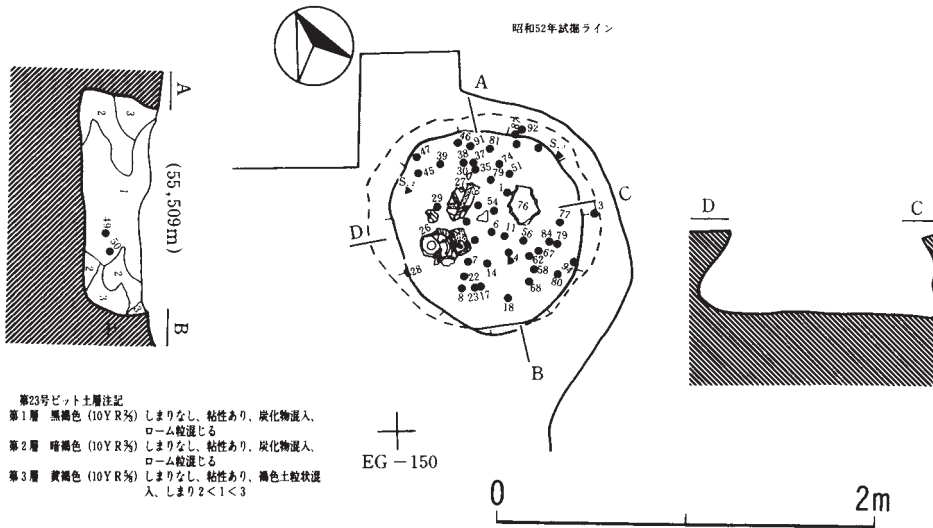
(10) 第23号ピット (第46図、第11表、写真12)

位置・確認 調査地区の東寄りに位置する E F - 149・150グリッドの第 層で落ち込みを確認した。昭和52年度の試掘調査 (県埋文48集: 1979) の際、A - 18トレンチで落ち込みを確認して、その北東コーナーを拡張して検出した土壌と同一ピットで、試掘後埋め戻してあった。現場は標高54.5mの防風林内であって、北から南に緩く傾斜した斜面の中腹に立地している。周辺には第10、24~26号ピットなどが分布している。

形状・規模 試掘調査の際はピットの上半部を精査しているが、ここでは両者の結果を組み合わせる。平面プランは、開口部径坑底部とも不整な円形である。断面は、いわゆるフラスコ状のタイプである。ピットは第 a層から掘り込まれ、坑底面は第 層に達している。規模は、開口部径95×90cm、坑底部径120×110cm、推定壁高86cmである。

覆土・遺物 覆土は、7層に区分した。第1層黒褐色、第2、3層暗褐色、第4層黄褐

色（以上試掘第1～4層）第5層黒褐色、第6層暗褐色、第7層黄褐色（発掘第1～3層）で、ある。遺物は、主に第2～5層から出土した。試掘調査でも相当量の土器が出土し復原された土器や朱塗り土器が認められたが、発掘調査でも同様の土器が出土した。出土した縄文土器片は93点で、復原した土器2個、朱塗り土器17片、礫4個（第47、48図）に分けられる。縄文土器は、第 群土器で占められる。（成田悟、北林）



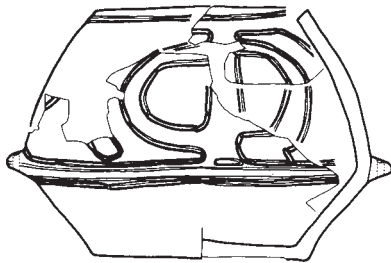
第46図 第23号ピット実測図

(1) 第24号ピット（第49図、第11表、写真12）

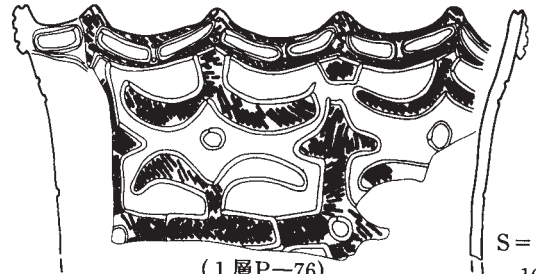
位置・確認 調査地区の東寄りに位置するE F・E G - 149グリッドの第 a層で落ち込みを確認した。標高53.6mの南に向けて緩傾斜した斜面上に立地して、現状の地目は山林（防風林）である。昭和52年度の試掘調査の際、A - 18トレンチが設定されたところに該当する。周辺では第2、3号住居跡、第10、23、25、26号ピットなどを検出している。

形状・規模 ピットの東側は試掘調査のA - 18トレンチ設定によって掘り下げられてあった。（遺構のプランは明示されていない（第48集））平面プランの東側は、不明であるが、開口部、坑底部とも南北に長い楕円形とみられる。壁、坑底面は、第 a層から第 層を掘り下げて構築され、坑底部は堅固である。坑底部には小ピットは付設されていない。検出した壁の立ち上がりは緩やかで、断面は竪穴住居跡状である。開口部径267×(230)cm、坑底部径240×(200)cm、壁高35～10cmの規模がある（()内は推定値、以下同じ）。

覆土・遺物 覆土は、6層に区分した。すべての覆土には炭化物が若干量混入しているほか、第2、6層には焼土も混じる。第1層暗褐色、以下褐色、黄褐色、黄褐色、黒褐色、褐色の覆土が認められた。遺物は、復原可能な一括破片（第49図）を含めて37点の縄文土器片と礫が10点余り出土した。なお、A - 18トレンチ（3×4m）の第 ～ 層からも相当量の遺物

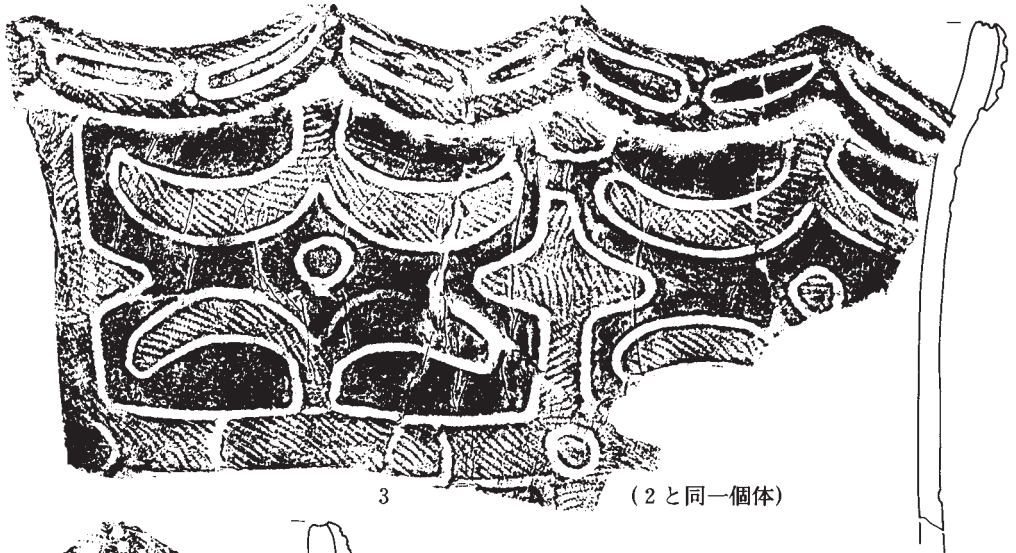


1 (1層P-25)

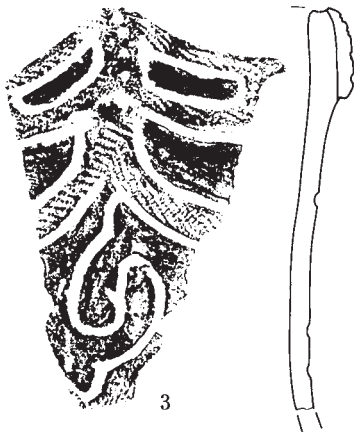


(1層P-76)

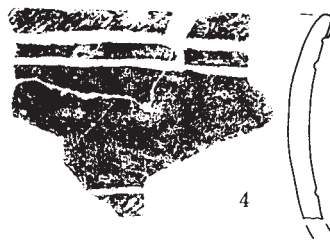
S=1/2
10cm



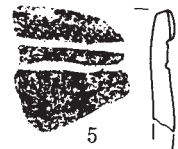
3 (2と同一個体)



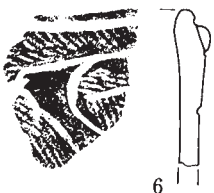
3



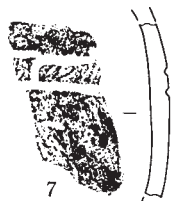
4



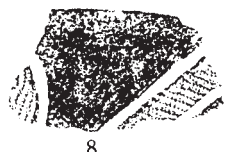
5



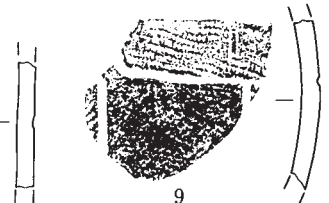
6



7



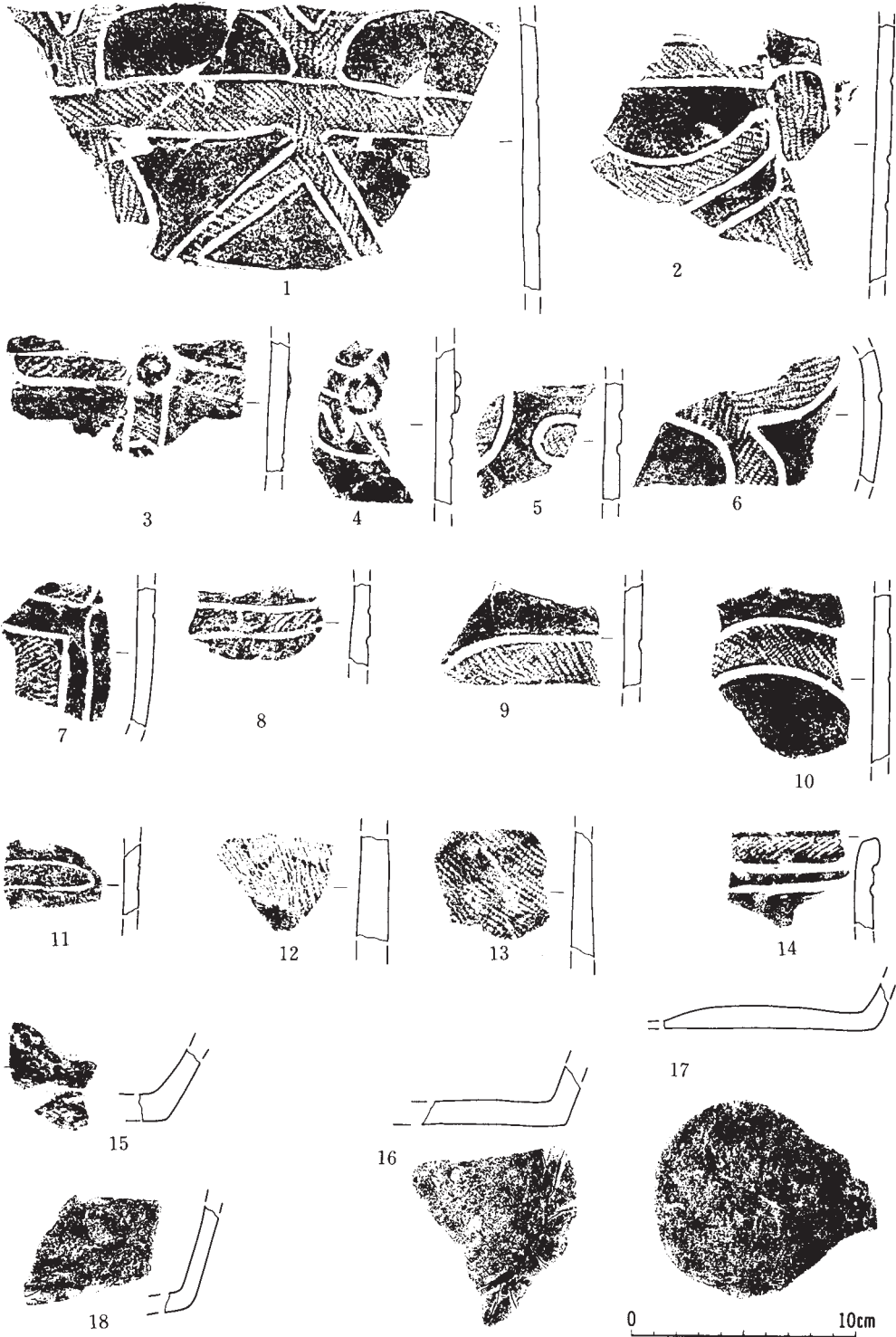
8



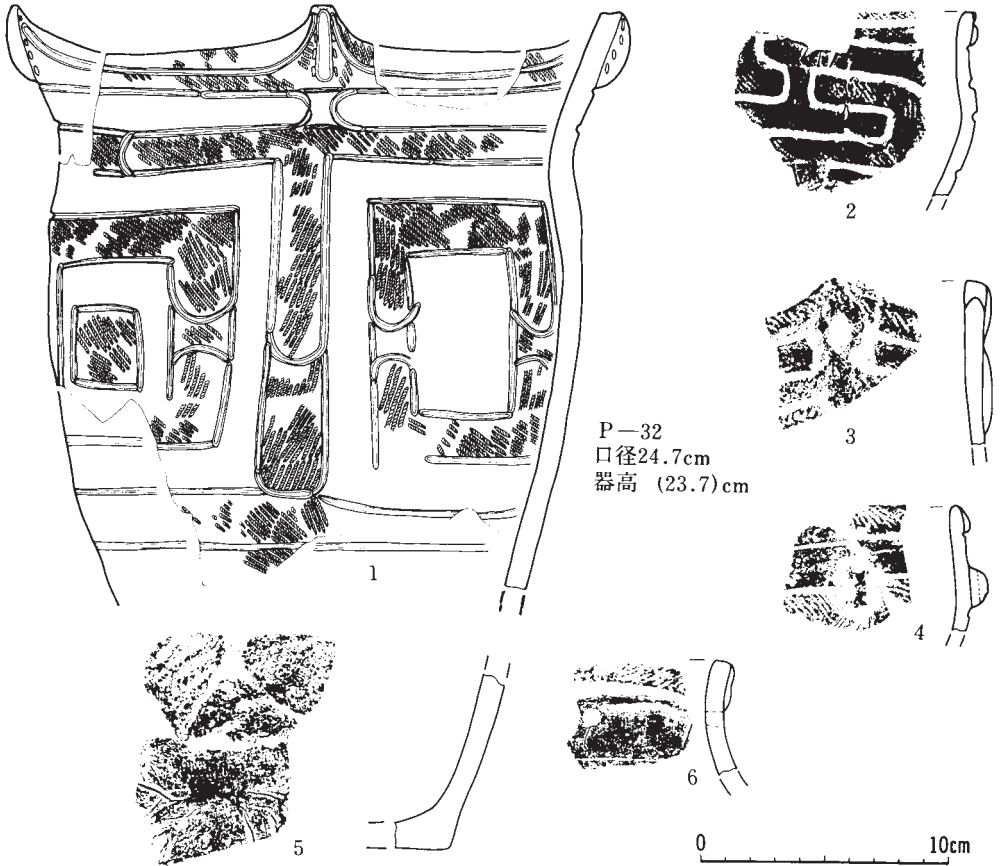
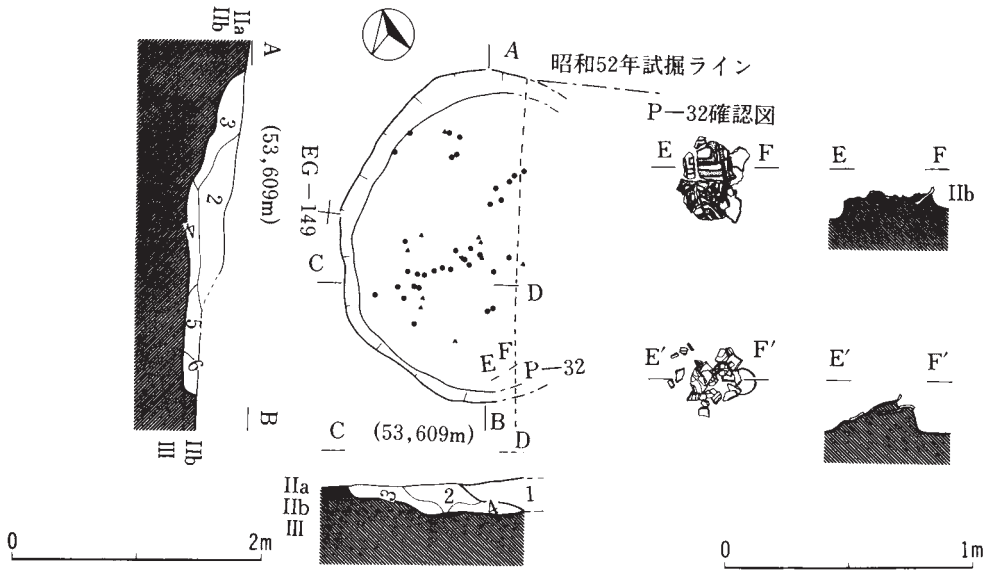
9

0 10cm

第47図 第23号ピット出土土器実測拓影図



第48図 第23号ピット出土土器拓影図



第49図 第24号ピット実測図・出土土器実測拓影図

が出土した。縄文土器は、第 群土器に含まれるものである。

(蝦名、北林)



第50図 第24号ピット出土土器拓影図 0 10cm

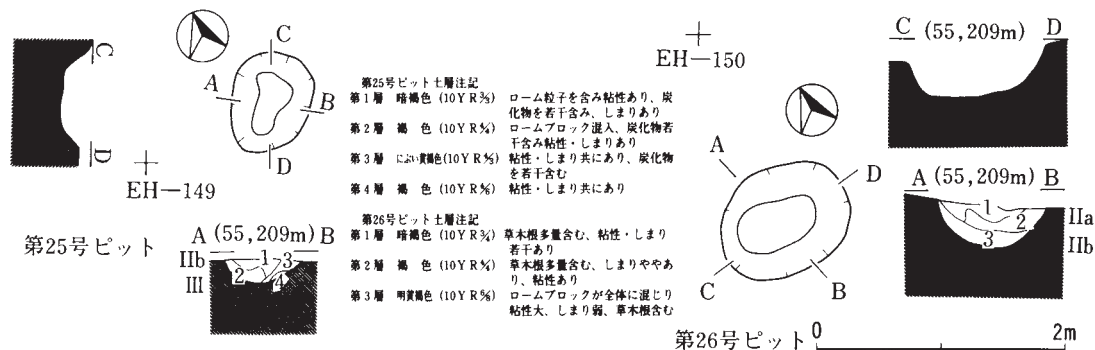
(12) 第25号ピット (第51図、第11表、写真12)

位置・確認 調査地区の東寄りに位置する DG - 149グリッド第 b層で落ち込みを確認した。標高55.2mの緩斜面上に立地して、周辺から第2、3号住居跡、第3号焼土(住居跡に伴う炉) 第23、24、20、26号ピットなどを検出している。

形状・規模 平面プランは、南北方向に長い楕円形で、壁、坑底面は、第 b層から第層を掘り下げて構築しているが、全体に軟弱で断面は凸レンズ状である。規模は、開口口径

80×70cm、坑底部径50×25cm、壁高21cmである。

覆土・遺物 覆土は、4層に区分した。第1層と第2層には炭化物が混じり、第1層暗褐色、褐色、にぶい黄褐色、褐色の覆土が自然堆積していた。遺物は、確認面から縄文土器片が1点出土した。(蝦名、北林)



第51図 第25・26号ピット実測図

(13) 第26号ピット (第51図、第11表、写真12、13)

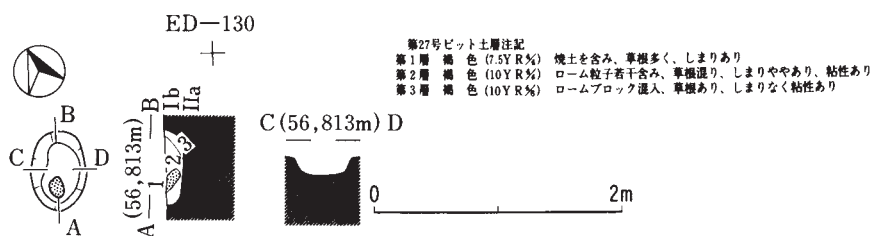
位置・確認 調査地区の東側に位置するEH-150グリッドの第a層で落ち込みを確認した。南に向けた緩斜面の中腹に立地して、標高は55.2mほどである。周辺には第2号住居跡、第3号焼土、第20、23~25号ピットが分布している。

形状・規模 平面プランは、東西方向に長軸がある楕円形である。壁、坑底面は、第a層から第b層を掘り込んで構築しているためか、全体に軟弱なピットである。断面は凸レンズ状である。規模は、開口部径110×88cm、坑底部径70×40cm、壁高35~22cmである。

覆土・遺物 覆土は3層に区分した。第1層暗褐色土、第2層褐色土、第3層明黄褐色土である。遺物は出土しなかった。(鈴木、北林)

(14) 第27号ピット (第52図、第11表、写真13.9)

位置・確認 調査地区の中央からやや西寄りに位置するED-129グリッドの第b層上面で径17cmほどの焼土を確認した。標高56.7mの台地上に立地して、周辺から第31、33、36号ピット、第4号焼土を検出している。



第52図 第27号ピット実測図

形状・規模 平面プランは、南北方向に長軸がある楕円形である。壁、坑底面は、第 b 層から第 a 層を掘り下げて構築してある。壁高は 8 ~ 15cm と浅く、断面は凸レンズ状である。開口部径 65 × 45cm、坑底部径 44 × 24cm の規模がある。

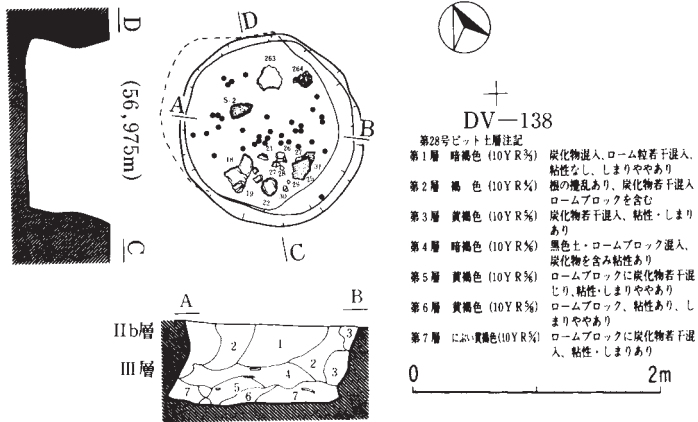
覆土・遺物 覆土は 3 層に区分した。第 1 層褐色土で焼土を含み、第 2、3 層も褐色土で、自然堆積である。遺物は出土しなかった。 (鈴木、北林)

(15) 第 28 号ピット (第 53 図、第 11 表、写真 13)

位置・確認 調査地区中央部北寄りに位置する DU・DV - 137 グリッド第 b 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。標高 56.9m の北に傾斜した台地上に立地して、周辺から第 29、45、50 号ピット (フラスコ状) を検出している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部ともほぼ円形で、壁、坑底部は第 b 層から第 a 層にかけて掘り込んで構築され、全体に堅固である。断面は、多少不均整であるがフラスコ状である。規模は、開口部径 151 × 143cm、坑底部径 150 × 130cm、壁高 65 × 61cm である。

覆土・遺物 覆土は、7 層に区分した。覆土全体に炭化物、ロームブロックが含まれている。第 1 層暗褐色、以下褐色、黄褐色、暗褐色、黄褐色、黄褐色、にぶい黄褐色の覆土が堆積している。遺物は各覆土に包含されていたが、第 4 ~ 7 層からの出土が多く、縄文土器片 289 点を数える。また、第 2 層から完形切断蓋付土器 (第 54 図が横位の状態で出土した。そのほか、碟が数個出土した。縄文土器は、第 群土器である (第 55、56 図)。 (蝦名、北林)



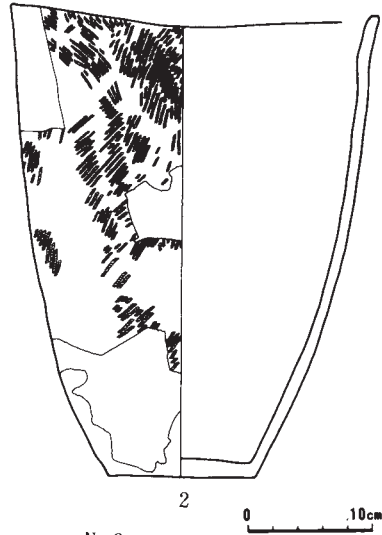
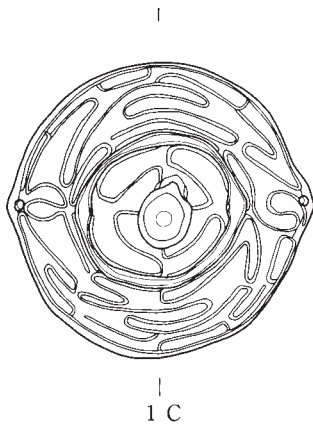
第 53 図 第 28 号ピット実測図

(16) 第 29 号ピット (第 57 図、第 11 表、写真 13)

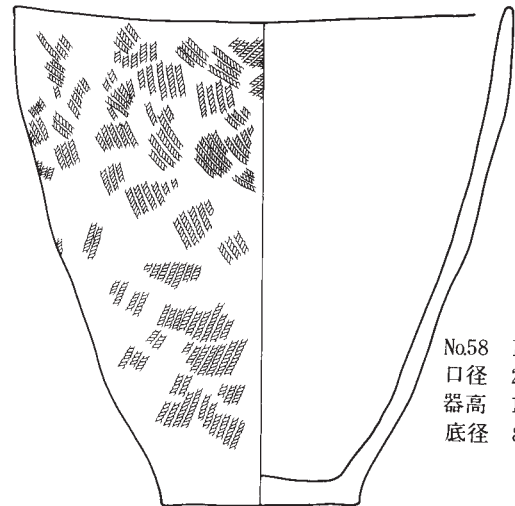
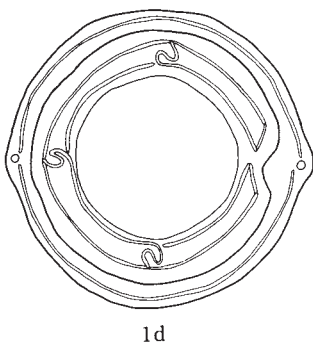
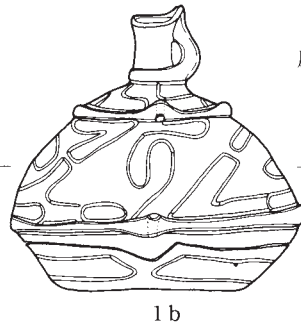
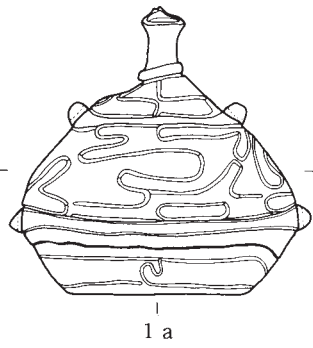
位置・確認 調査地区中央部北寄りに位置する DU - 136・137 グリッドの第 b 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。北に傾斜した台地上に立地して、標高は 56.9m である。本遺構の周辺では、第 28、42、45、50 号ピットを検出している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも円形で、壁、坑底部は第 b 層から第 a 層にかけて構築され、堅固である。断面は、多少の凹凸は認められるがフラスコ状である。規模は、開口部径 146 × 145cm、坑底部径 170 × 160cm、壁高 92 ~ 85cm である。

覆土・遺物 覆土は、5 層に区分した。第 1、2 層黒褐色土、第 3 層暗褐色土、第 4 層



No.9
2層 P-97
口径29.8cm 器高36.1cm
底径12.05cm

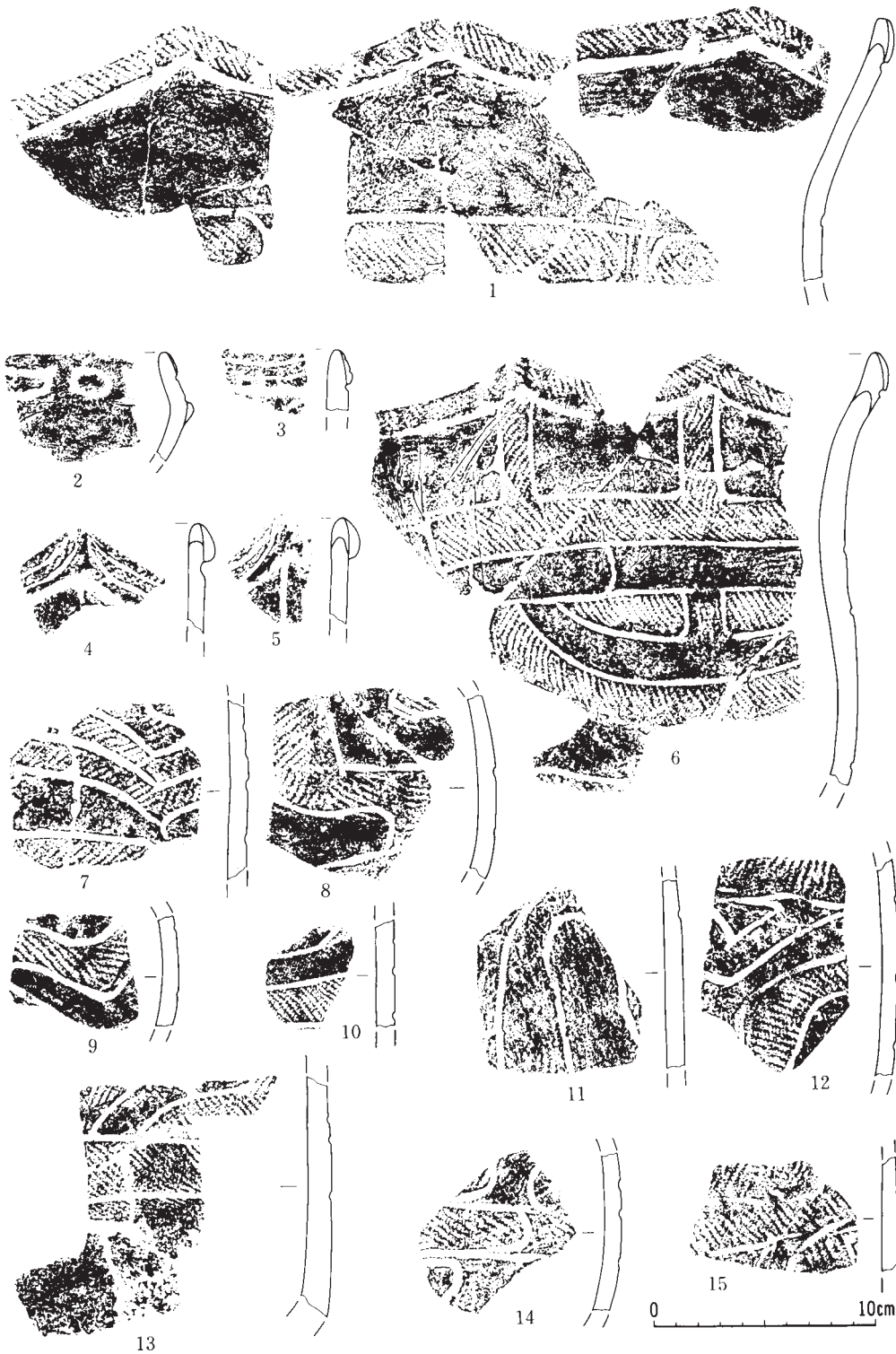


No.58 P-41
口径 20.2cm
器高 19.4cm
底径 8.0cm



1 a 切断蓋付（壺形）土器
No.4 2層 P-265
口径1.6×2.0cm 最大胴径12.2cm
器高11.5cm 底径 7.2cm

第54図 第28号ピット出土土器実測図

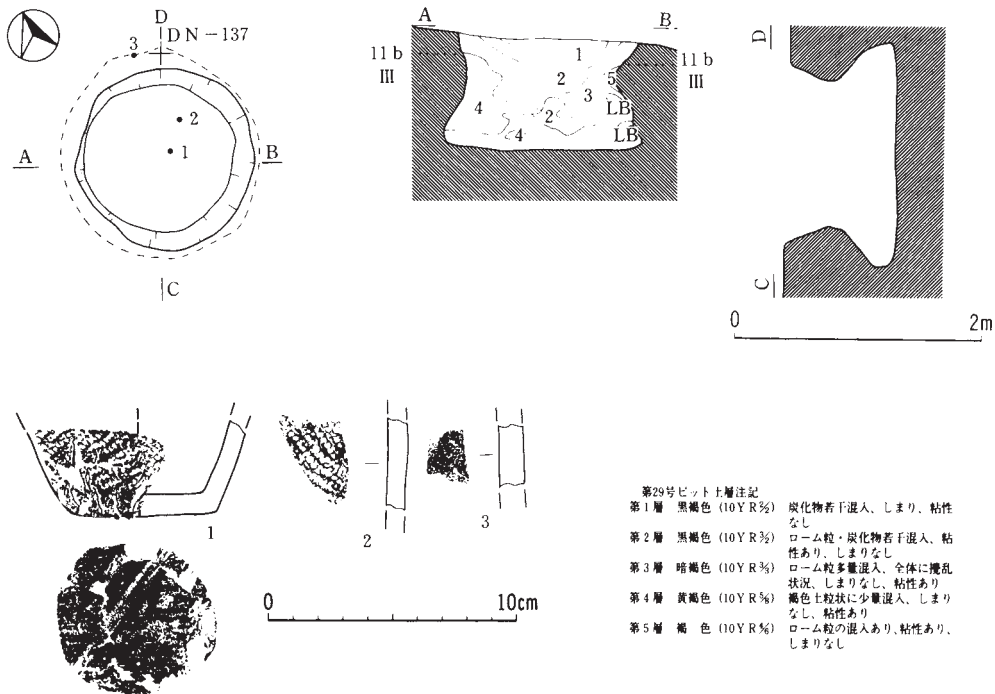


第55図 第28号ピット出土土器拓影図



第56図 第28号ピット出土土器拓影図

黄褐色土、第5層褐色土である。炭化物は、第1、2層から若干出土した。また、第2層以下の覆土は、人為的に埋め戻した可能性がある。遺物は、第 群に分類される縄文土器片が3点（第57図）出土しただけである。（成田悟、北林）

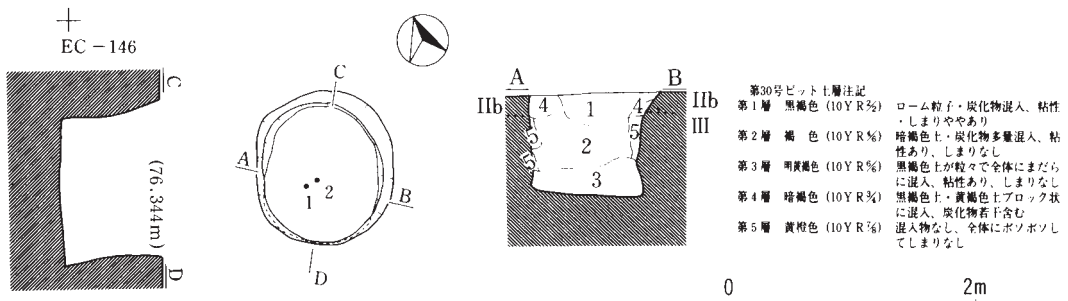


第57図 第29号ピット実測図・出土土器拓影図

(17) 第30号ピット (第58図、第11表、写真13)

位置・確認 調査地区中央からやや東寄りに位置する EC - 146グリッド第 b層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。西以外の三方向へ傾斜した台地上に立地して、その標高はおよそ56.3mである。本遺構の周辺には第1号埋設土器遺構、第21号ピット、第3号住居跡などが分布している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも円形で、開口部径122×108cm、坑底部径107×90cmをはかる。壁、坑底部は、第b層から第Ⅲ層にかけて掘り込まれており、堅固なつくりである。断面は、典型的ではないがフラスコ状で、壁高は80cmである。



第58図 第30号ピット実測図

覆土・遺物 覆土は5層に区分した。第1、2、4層には炭化物が混入している。第1層黒褐色土、以下褐色土、明黄褐色土、暗褐色土、黄褐色土が堆積しているが、人為的埋め戻しの可能性がある。遺物は、縄文土器片2点で、1、2層から出土した。(成田(滋) 北林)

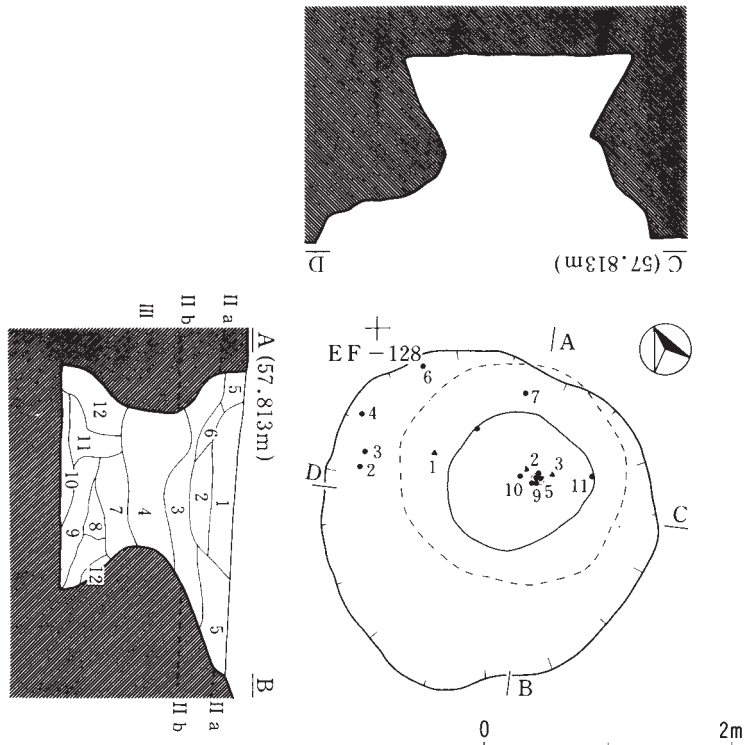
(18) 第31号ピット(第59図、第11表、写真14)

位置・確認 調査地区のほぼ中央に位置するEF-127・128グリッド第a層で黒褐色土の落ち込みを確認した。南に傾斜した斜面上に立地して、その標高は57.8mである。本遺構の周囲には、第4号住居跡、第35号ピットなどが分布している。

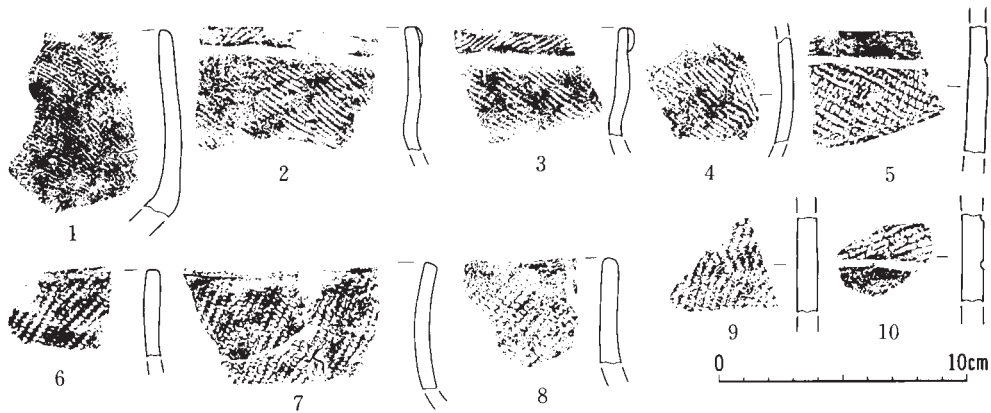
形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも不整な円形で、開口部径270×267cm中端径120×110cm、坑底部径135×105cmをはかる。壁、坑底部は、第a層から第層に構築され、断面はフラスコ状で150cmの壁高がある。

覆土・遺物 覆土は13層に区分した。第1、2、9層が黒褐色土、第3、10、11層黄褐色土、第4、12層明黄褐色土、第5、6、8層暗褐色土、第7、13層褐色土である。第1、7、8、9、11、13層には炭化物が混入している。遺物は、縄文土器片14点、礫3点が出土した。覆土第9～11層(ピット下部)には縄文土器片3点、礫2点が含まれ、縄文土器は第群土器に分類される(第60図)。(成田(滋) 北林)

- 第31号ピット土層注記
- 第1層 黒褐色(10YR 3%) ローム粒子少量、炭化物若干含む、粘性・しまりあり
 - 第2層 黒褐色(10YR 3%) ローム粒子1層より多い、細砂粒若干混入、粘性・しまりあり
 - 第3層 黄褐色(10YR 5%) 暗褐色土が少量に塊状に混入、粘性あり・しまりなし
 - 第4層 明黄褐色(10YR 7%) 暗褐色土が若干混入して全体にボソボソしてしまり、粘性なし
 - 第5層 暗褐色(10YR 3%) ローム粒子が全体に混入、黒褐色土を若干含む、粘性少々あり
 - 第6層 暗褐色(10YR 3%) ローム粒子を多量、ロームブロック少量含む、粘性あり
 - 第7層 褐色(10YR 5%) ローム粒子を多量、炭化物少量含む、ロームブロック多量含む
 - 第8層 暗褐色(10YR 3%) 炭化物若干、ローム粒、黒褐色土を全体に多量混入、粘性あり
 - 第9層 黒褐色(10YR 3%) 炭化物が全体に混入、ローム粒少量・粘性あり・しまりなし
 - 第10層 黄褐色(10YR 5%) 暗褐色土が塊状に混入、粘性あり、しまりなし
 - 第11層 黄褐色(10YR 5%) 暗褐色土が塊状に混入、炭化物やや多量含む、粘性あり
 - 第12層 明黄褐色(10YR 7%) 暗褐色土が少々混じり、全体的にボソボソして粘性・しまりなし
 - 第13層 褐色(10YR 5%) 炭化物・細砂粒、暗褐色土少々混入、粘性・しまりあり



第59図 第31号ピット実測図



第60図 第31号ピット出土土器拓影図

(19) 第32号ピット (第61図、第11表、写真14)

位置・確認 調査地区中央のやや西寄りに位置するEF-142グリッド第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。標高は58.0mで南に傾斜した斜面上に立地している。

本遺構の周辺には、第4号住居跡、第31、35号ピットが分布している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも円形で、開口部径137×132cm、坑底部径170×160cmである。壁、坑底部は、第 a 層から第 層にかけて構築され、堅固な作りである。断面は、坑底部から内傾しながら立ち上がる、いわゆるフラスコ状で、壁高は90～82cmである。

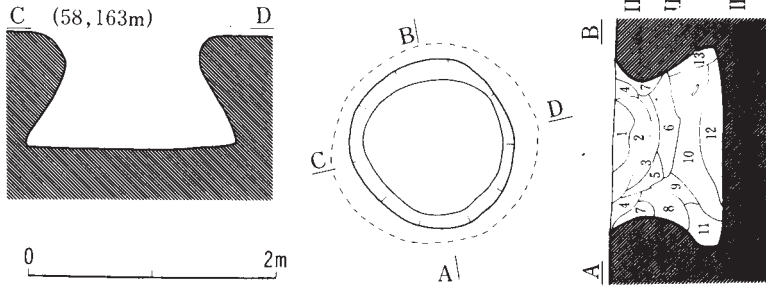
覆土・遺物 覆土は、13層に区分した。覆土全体に炭化物、焼土、ローム粒を含み、自然堆積である。第1、6層黒褐色土、第2、4、5、10層暗褐色土、第3、9層褐色土、第7層明黄褐色土、第8、12層にぶい黄褐色土、第11、13層黄褐色土。遺物は、覆土全体に包含され、縄文土器片134点、円盤状土製品1点、礫7点、炭化材1点などが出土した。第6、8、10層からは特に大型土器片が多量に出土した(第62、63図)。これらの縄文土器は、本書で第 群土器としたグループに含まれる。
(鈴木、北林)

(20) 第35号ピット (第64図、第11表、写真14)

位置・確認 調査地区中央からやや西寄りに位置するEF-127グリッド杭直下にあるピットで、第 b 層で落ち込みを確認した。ピットの南側は、第4号住居跡と重複して、住居跡を切っている。このピットは第4号住居跡、第32号、31号ピットと共に松林に囲まれ(防風林)、南に傾斜した斜面上に立地し、その標高は56.5mである。

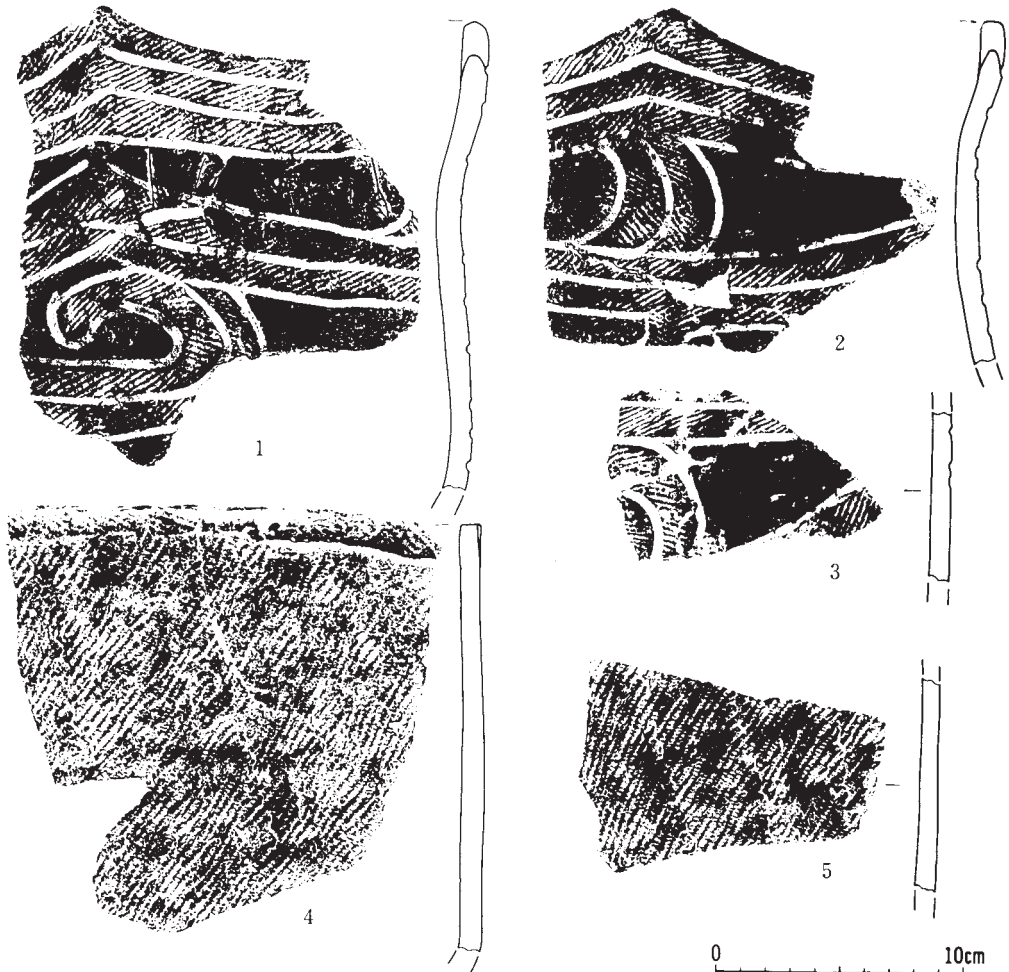
形状・規模 開口部の平面プランは、東西に長軸のある楕円形で、250×(170)cmと推定できるが、坑底部は3個の浅い小ピットに分かれている。これらの小ピットは、いずれも大きいピットの開口部と同方向に長軸がある。大小のピットは、第 b 層から第 層を掘り下げてあ

EF-124

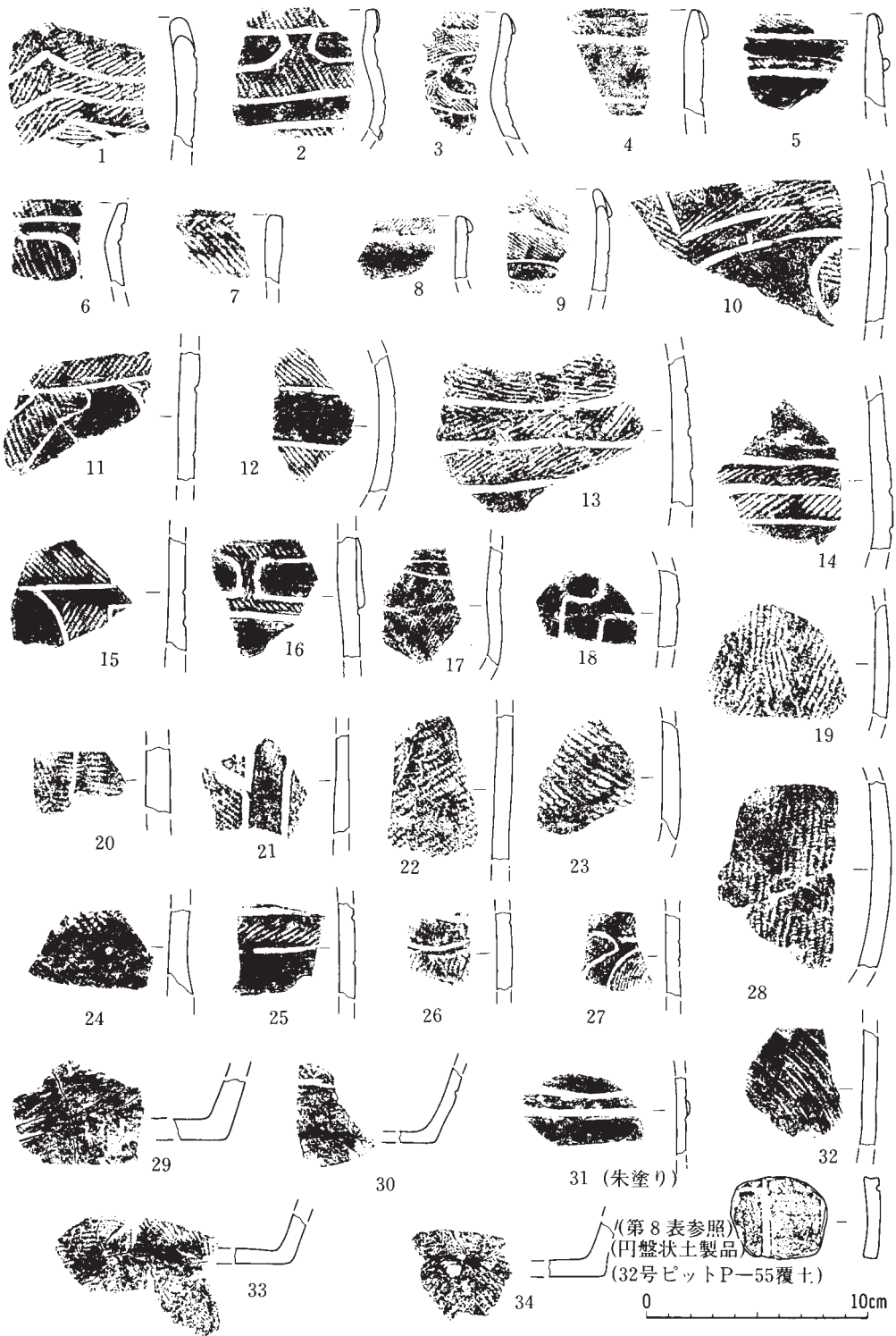


第61図 第32号ピット実測図

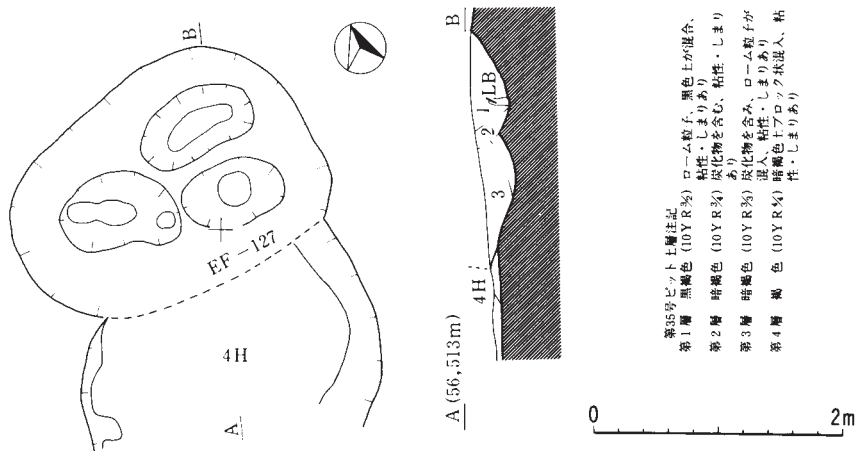
第32号ピット土層注記
 第1層 黒褐色(10YR5%) 炭化材全体に混入、草屑混入、しまり、粘性あり
 第2層 暗褐色(10YR5%) 炭化材多量に全体的に混じる、ローム粒子少量混入
 第3層 暗褐色(10YR5%) ロームアロワック、炭化物少量混入、粘性、しまりあり
 第4層 暗褐色(10YR5%) 炭化物少量混入、ローム粒子若干含む、しまりなく
 粘性あり
 第5層 暗褐色(10YR5%) 炭化物、ローム粒子若干含む、しまりなく、粘性あり
 第6層 暗褐色(10YR5%) 炭化物全体に少量混入、粘土少量混入
 第7層 明黄褐色(10YR6%) 彎曲の剥落したもの、ローム層、しまりややあり
 第8層 暗褐色(10YR5%) 炭化物を含んだローム層に褐色土が混じった層
 第9層 暗褐色(10YR5%) 炭化物、ローム粒子が混じりしまり、粘性あり
 第10層 暗褐色(10YR5%) 火葬土器片を含む、炭化物、ローム、粘土、褐色土
 全体に混入
 第11層 黄褐色(10YR6%) 褐色土、赤土に混じり、しまりなく、粘性大
 第12層 暗褐色(10YR5%) ローム層に少量の黒褐色土が混じり、しまりなく、粘性大
 炭化物混入
 第13層 黄褐色(10YR6%) ローム層に少量の黒褐色土が混じり、しまりなく、粘性大



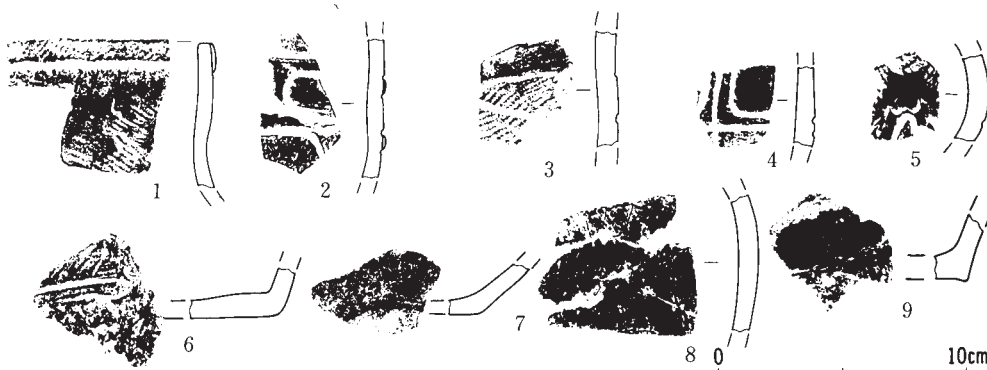
第62図 第32号ピット出土土器拓影図



第63図 第32号ピット出土土器拓影図



第64図 第35号ピット実測図



第65図 第35号ピット出土土器拓影図

るが、ピットのつくりは全体に軟弱で、地山との区別が明確でない箇所もある。3個の小ピットを西、北、南の順にA、B、Cと仮称すると、Aピットの開口部径98×60cm、坑底部径56×13cm、Bピットの開口部径98×50cm、同坑底部径62×18cm、また、Cピットの開口部の径は85×55cm、同坑底部径26×24cmである。断面は、大小のピットとも凸レンズ状で、壁高は約30cmである。なお、BピットとCピットも重複しているが、前者が後者よりも新しい。

覆土・遺物 覆土は4層に区分した。第1層黒褐色土、第2、3層暗褐色土、第4層褐色土である。第4層を除き炭化物が混入しているが自然堆積とみられる。遺物は、縄文土器片50点(第65図)、礫12点が出土した。縄文土器は第 群に分類され、朱塗り(赤色顔料塗付)土器片4点を含む。

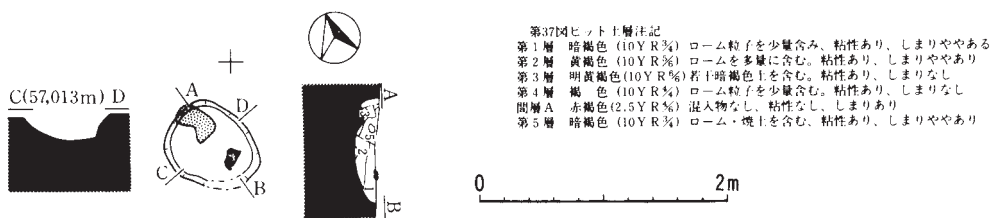
(野村、北林)

(21) 第37号ピット(第66図、第11表、写真40)

位置・確認 調査地区のほぼ中央に位置するE C - 133・134グリッドの第 a層上面で礫、焼土とともに落ち込みを確認した。南と東に傾斜した台地上に立地し、標高は57.0mである。周辺には第1号住居跡、第1号配石遺構、第39、40号ピットが分布している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも南北に長い楕円形で、開口部径78×64cm、坑底部径65×56cmである。壁、坑底部は第 a 層から第 b 層に掘り込まれている。断面は凸レンズ状で壁高19cmである。

覆土・遺物 覆土は、5層と間層に区分した。第1層暗褐色土、以下黄褐色土、明黄褐色土、褐色土、間層、赤褐色土である。5層に火熱をうけた焼土が混じる。遺物は加工・使用痕のあるものは出土していないが、確認面(第1層)から礫が出土した。(成田(滋)、北林)



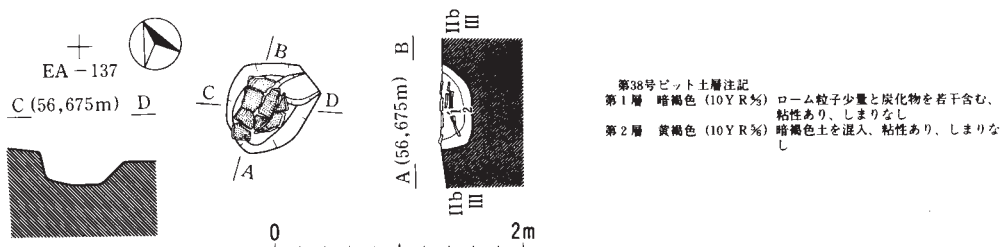
第66図 第37号ピット実測図

(22) 第38号ピット(第67図、第11表、写真14)

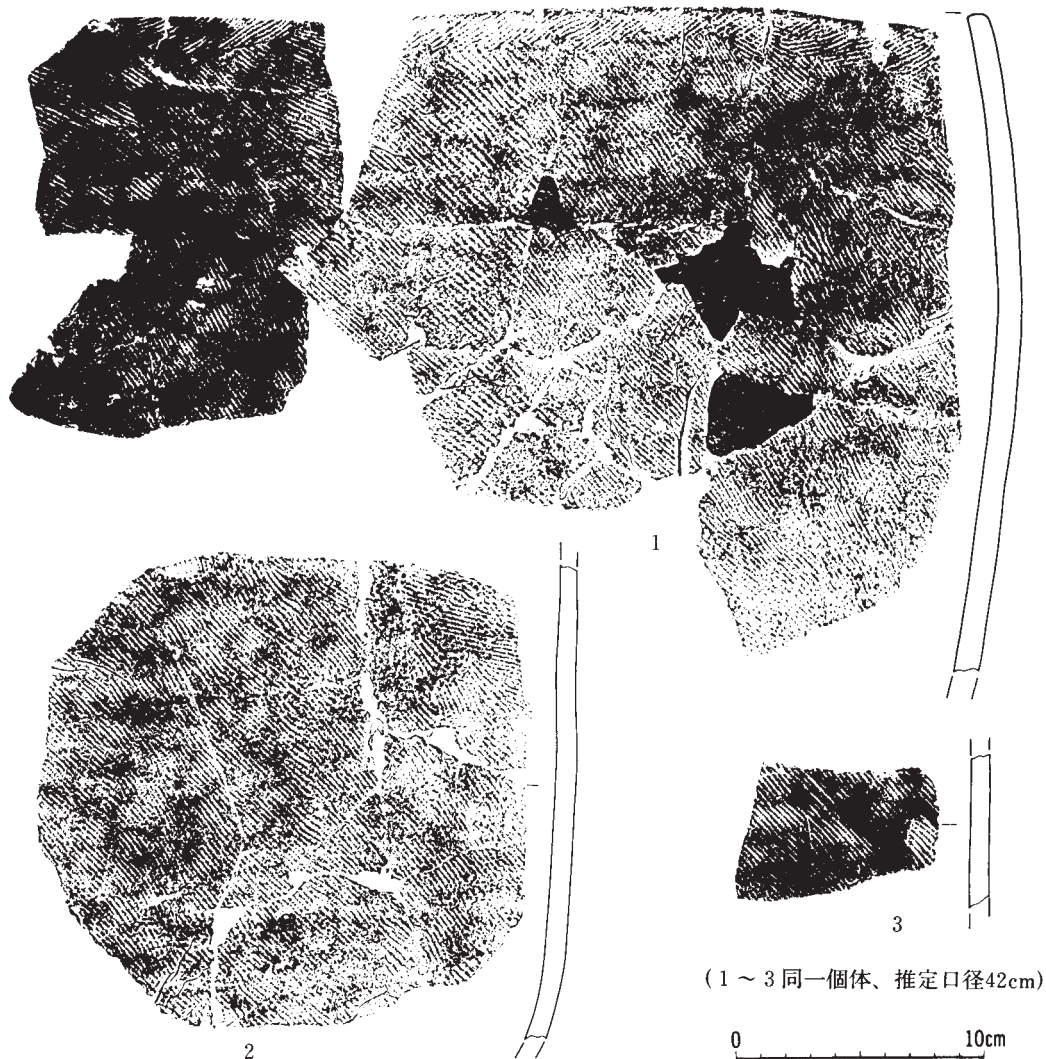
位置・確認 調査地区の中央からやや東寄りに位置する E A - 137グリッドの第 b 層で落ち込みと縄文土器片を確認した。南と東へ傾斜した台地上に立地し、標高は56.6mを測る。周辺には第7号焼土、第1号配石、第39、40号ピットなどが分布している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも東西方向に長軸がある楕円形で、開口部径80×67cm、坑底部径60×42cmである。壁、坑底部は第 b 層から第 層にかけて掘り込まれているが、開口部はトラクターによって削平された可能性がある。断面は、凸レンズ状で壁高は22cmである。

覆土・遺物 覆土は2層に区分した。第1層暗褐色土、第2層黄褐色土で、第1層には炭化物が混じる。遺物は、同一個体とみられる縄文土器片が十数点出土して一部接合した(第68図)。第 群土器のなかでも粗製に分類される土器である。(成田(滋)、北林)



第67図 第38号ピット実測図



第68図 第38号ピット出土土器拓影図

(23) 第39号ピット (第69図、第11表、写真14)

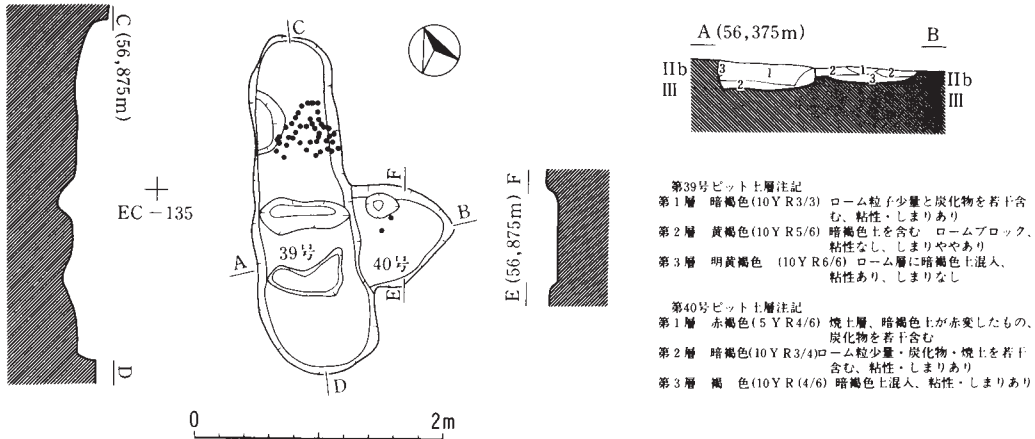
位置・確認 調査地区のほぼ中央に位置するE B・E C - 135グリッドの第 b層で、第40号ピットとともに落ち込みを確認した。南と東へ傾斜した台地上に立地し、標高は56.8mである。周辺には第1号住居跡、第1号配石遺構、第37、38号ピットが分布している。

形状・規模 本遺構は、第40号ピットと重複して、本ピットが第40号ピットを切って新しい。平面プランは、南北に長軸がある長楕円形で、坑底部に2個の小ピットがある。開口部径273×85cm、坑底部径264×52cmである。小ピットは、北側をA、南をBと仮称すると、A、Bピットとも長軸が東西にある不整な楕円形である。A、Bピットの規模は、Aピット開口部径73×18cm、同坑底部径50×7cm、Bピット開口部径60×20cm、同坑底部径53×12cmである。

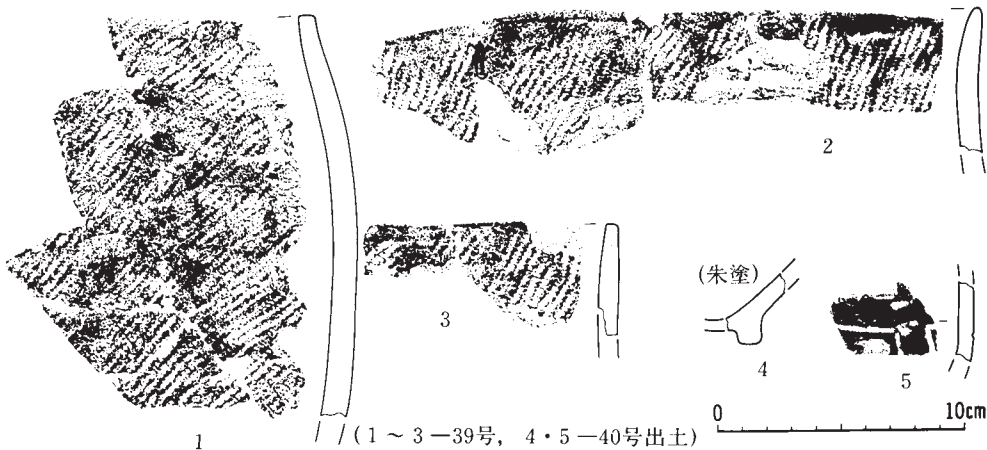
壁、坑底部は、第 b 層から第 層にかけて掘り込まれている。長軸の断面は、凹凸のある船底状、短軸は凸レンズ状である。壁高は、24~36cmで、Aピットが最も高い。

覆土・遺物 覆土は3層に区分した。第1層暗褐色土、第2層黄褐色土、第3層明黄褐色土で、第1層には炭化物が混じる。遺物は、ピット北側の第1、2層から縄文土器片が41点集中的に出土した。同一個体の、しかも縄文のみを施文した破片が多く、接合できた破片もある(第70図)。

(成田(滋) 北林)



第69図 第39・40号ピット実測図



第70図 第39・40号ピット出土土器拓影図

(24) 第40号ピット(第69図、第11表、写真14)

位置・確認 調査地区のほぼ中央に位置するEC - 135グリッドの第 b 層で、第39号ピットと同時に落ち込みを確認した。立地、周辺の遺構などは前出第39号ピットと同様である。

形状・規模 本ピットは第39号ピットと重複して、西側が第40号に切断され、本来の平面プランは不明である。残存部の平面プランは隅丸三角形で、重複以前は東西に長い楕円形で

あった可能性もある。また、坑底部の北壁に接して小ピットを検出している。残存部の規模は、開口部径83×73cm、坑底部径72×67cmである。壁、坑底部は、第 b層から第 層を掘り下げて構築されているが、全体に軟弱である。ピットの断面は凸レンズ状で、壁高は12cmをはかる。坑底部の小ピットは、東西に長い楕円形で開口部径27×18cm、壁高10cmの大きさである。

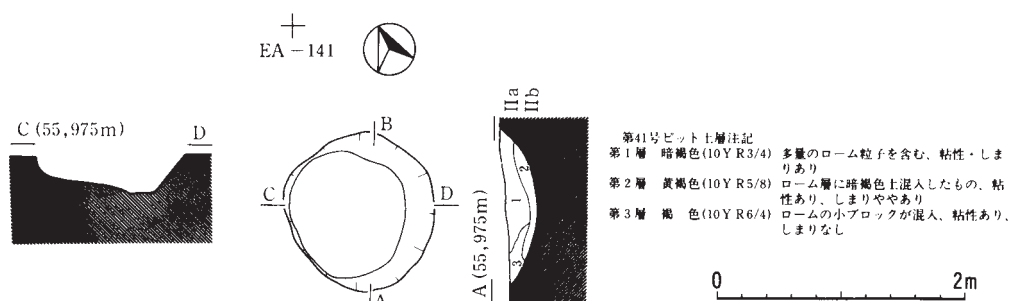
覆土・遺物 覆土は、3層に区分した。第1層赤褐色土、第2層暗褐色土、第3層褐色土である。第1層は焼土で、第2層とともに炭化物が混じる。遺物は、第2、3層から第 群土器の破片が6点出土した(第70図)。(成田(滋)、北林)

(25) 第41号ピット(第71図、第11表、写真15)

位置・確認 調査地区中央から若干東寄りに位置するE A - 141グリッドの第 a層で落ち込みを確認した。標高55.9m、北に傾斜した斜面上に立地している。半径15m以内に遺構は分布していないが、最寄りの遺構は、第38号ピット、第1号配石遺構である。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも円形で、開口部径127×120cm、坑底部径100×94cmの大きさである。壁、坑底部は、第 a層から第 b層に掘り込まれている。断面は凸レンズ状で、31cmの壁高がある。

覆土・遺物 覆土は、第1層暗褐色土、第2層黄褐色土、第3層褐色土の3層に区分した。遺物は、出土しなかった。(成田(滋)、北林)



第71図 第41号ピット実測図

(26) 第42号ピット(第72図、第11表、写真15)

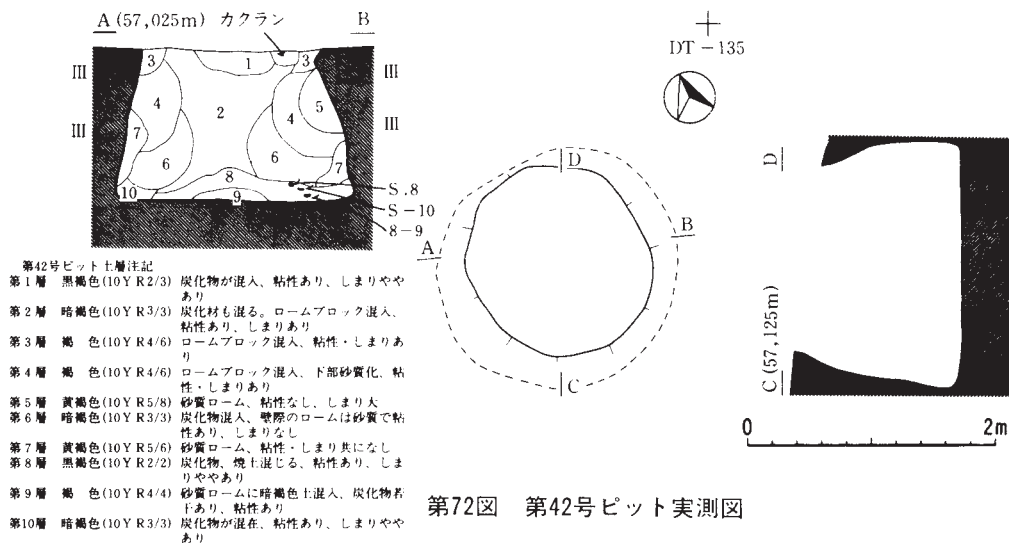
位置・確認 調査地区中央北側に位置するD T - 134グリッド第 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。この付近は、旧圃場で、深耕によって地山(第 層以下)まで削平されたようであるが、標高は57mで、北に傾斜した斜面の中腹に立地している。本ピットの南側には第45、50、29、28号フラスコ状ピット群が分布している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも円形で、開口部径155×140cm、坑底部径200×190cmをはかる。壁、坑底部は、第 層、第 層を掘り下げて構築されているため非常に堅固なピットで、特に坑底部は堅い土層で、覆土との区別は容易である。調査時の断面は梯

形に近いが、開口部は耕作によって削平されたようで、本来はフラスコ状とみられ、その壁高は130~110cmである。

覆土・遺物 覆土は、10層に区分した。混入物、色調に多少の差はあるが、第1、8層黒褐色土、第2、6、10層暗褐色土、第3、4、9層褐色土、第5、7層黄褐色土で、第1、2、6、8~10層には炭化物が混じる。遺物は、縄文土器片49点のほか、礫、剥片などが出土した。出土層位は第8、9層が多く、97%を占め、しかもピットの中心部から出土した遺物が多い。

(野村、北林)

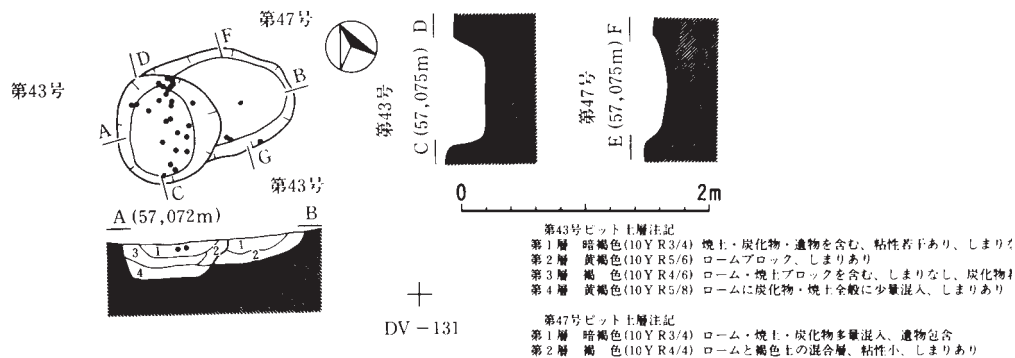


第72図 第42号ピット実測図

(27) 第43号ピット(第73図、第11表、写真15)

位置・確認 調査地区中央北側に位置するDU-130グリッドの第b層で第47号ピットとともに土器片と落ち込みを確認した。北に緩傾斜した斜面の中腹に立地して、標高は56.9mである。周辺には第46、48、49号ピットが分布している。

形状・規模 本ピットは、第47号ピットの西側と重複しているが、本ピットが新しい。

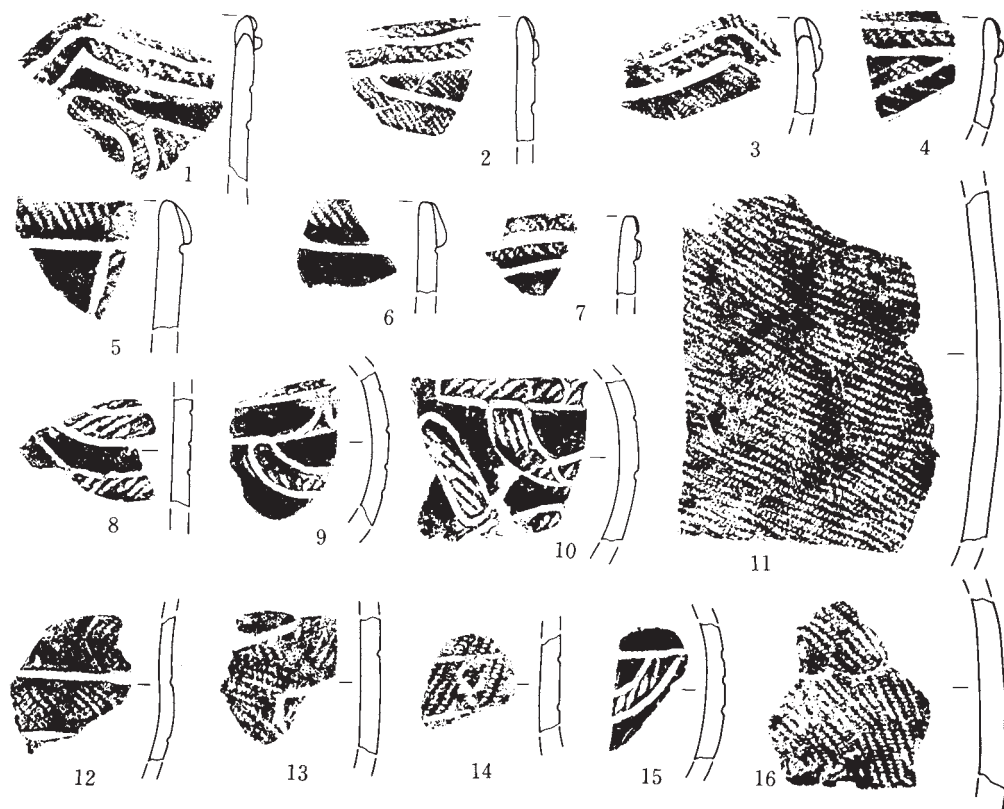


第73図 第43・47号ピット実測図

平面プランは、開口部が円形で、坑底部は南北に長い楕円形である。壁、坑底面は第 b 層から掘り込まれているが、全体に北側へ傾斜して断面は凸レンズ状に近い。開口部径87×83cm、坑底部径70×52cm、壁高29～24cmの規模である。

覆土・遺物 覆土は、4層に区分したが、自然堆積とみられる。第1層は暗褐色土で、焼土、ロームを全体に多量混入し、炭化物も混じるが遺物包含量である。第2、4層黄褐色土、第3層褐色土で焼土、炭化物が混じる。遺物は、縄文土器片が34点出土した(第74図)。

(鈴木、北林)



第74図 第43号ピット出土土器拓影図

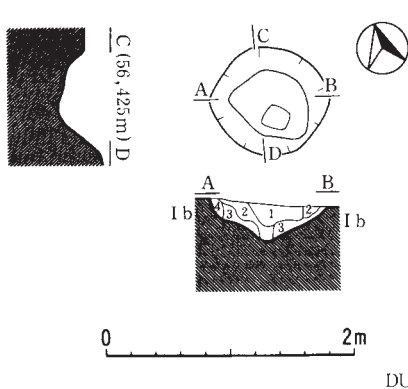
0 10cm

(28) 第44号ピット(第75図、第11表、写真15)

位置・確認 調査地区中央の北側に位置するDT-128グリッド第 b 層で落ち込みを確認した。北向きの斜面に立地して、標高は56.4mである。周辺には第43、46～49、52号ピットが分布している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも不整な円形で、開口部径95×88cm、坑底部径65×50cmの大きさである。壁、坑底部は第 b 層を掘り下げ、壁高は29cmで凸レンズ状の断面を呈する。

覆土・遺物 覆土は、4層に区分した。第1層は炭化物を含み、第2層とともに暗褐色



土、第3層にぶい黄褐色土、第4層黄褐色土である。遺物は出土しなかった。（鈴木、北林）

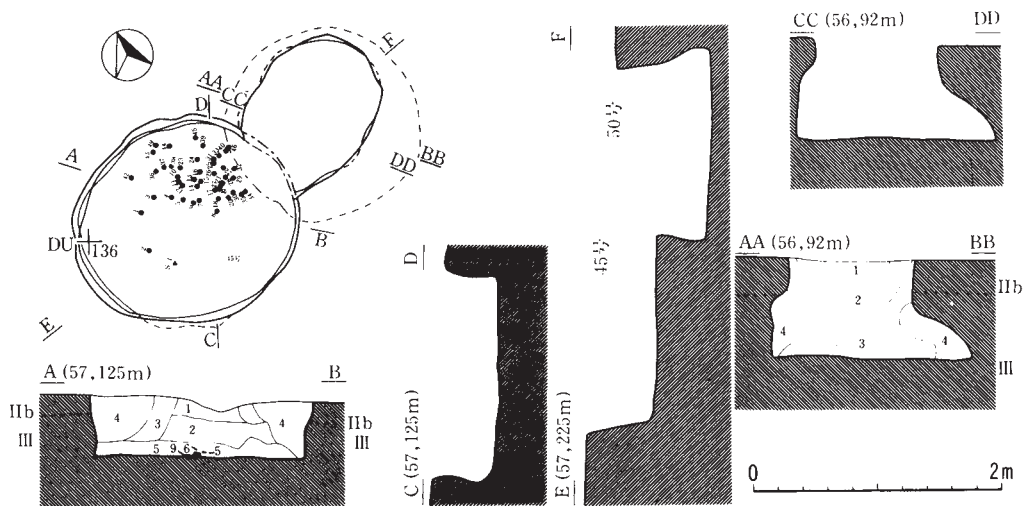
- 第44号ピット土層注記
 第1層 暗褐色(10Y R3/3) 炭化物若干混入、全般的に擾乱、粘性なし、しまりあり
 第2層 暗褐色(10Y R3/4) 局部的に擾乱あり、粘性なし、しまりあり
 第3層 暗褐色(10Y R4/3) ロームブロックに暗褐色土混じる、粘性若干あり、しまりあり
 第4層 黄褐色(10Y R5/6) 粘性若干あり、しまりあり

第75図 第44号ピット実測図

(29) 第45号ピット(第76図、第11表、写真15)

位置・確認 調査地区中央北側に位置するDT・DU-136グリッドの第b層で黒褐色土の落ち込みを確認した。北に傾斜した斜面上に立地して、開口部はトラクターの深耕によって相当削り取られているようであるが、標高は57.1mほどである。周囲には第28、29、42号フラスコ状ピット群が分布し、第50号フラスコ状ピットと重複している。

形状・規模 本遺構は、第50号ピットと切り合っているが、本遺構が第50号ピットを切っている。平面プランは、開口部、坑底部とも円形で、開口部径180×170cm、坑底部径170×165cmである。壁、坑底部は、第b層から第III層にかけて構築されて、堅固なつくりを示している。



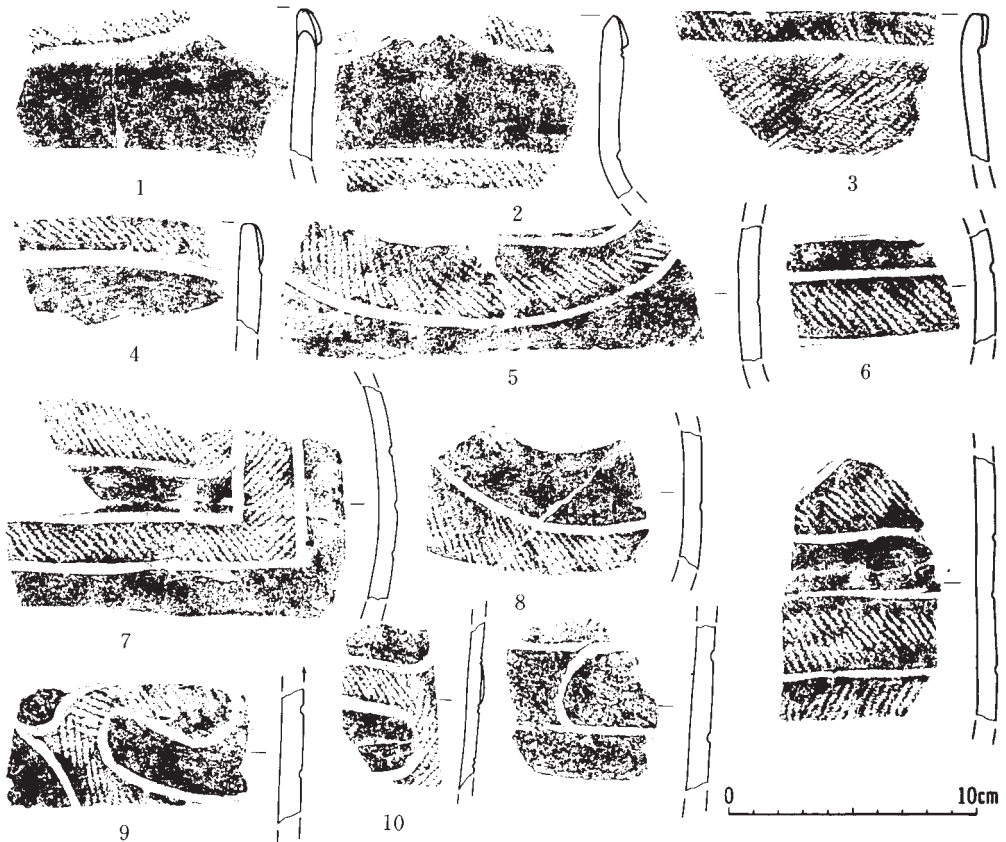
- 第45号ピット土層注記
 第1層 暗褐色(10Y R3/4) ローム粒が全体に混入、粘性なし、しまりあり
 第2層 黒褐色(10Y R3/2) ロームブロックが局部的に混入、粘性なし、しまりあり
 第3層 褐色(10Y R4/4) ロームブロック・粒子・黒色土全体に混入、粘性なし
 第4層 褐色(10Y R4/6) ロームブロック混入、粘性あり、しまりややあり
 第5層 黒褐色(10Y R2/2) 褐色土が斑状に混入、粘性・しまりあり

- 第50号ピット土層注記
 第1層 黒褐色(10Y R3/2) 炭化物若干混入、粘性なし、しまりあり
 第2層 褐色(10Y R4/4) 炭化物・ローム粒子・黒褐色土混入、粘性なし、しまりあり
 第3層 黄褐色(10Y R5/6) 炭化物・ローム粒子・褐色土混入、粘性なし、しまりあり
 第4層 黄褐色(10Y R5/8) ローム・炭化物混入、粘性なし、しまりあり

第76図 第45・50号ピット実測図

る。壁は、坑底部から多少開き気味に立ち上がり、断面はバット状で、壁高50～45cmをはかる。

覆土・遺物 覆土は5層に区分した。第1層暗褐色土、第2、5層黒褐色土、第3、4層褐色土で自然堆積したものとみられる。遺物は、縄文土器片49点、礫1点出土した。土器の79.5%（39点）は第5層に包含していた（第77、78図）。
（五十嵐、北林）



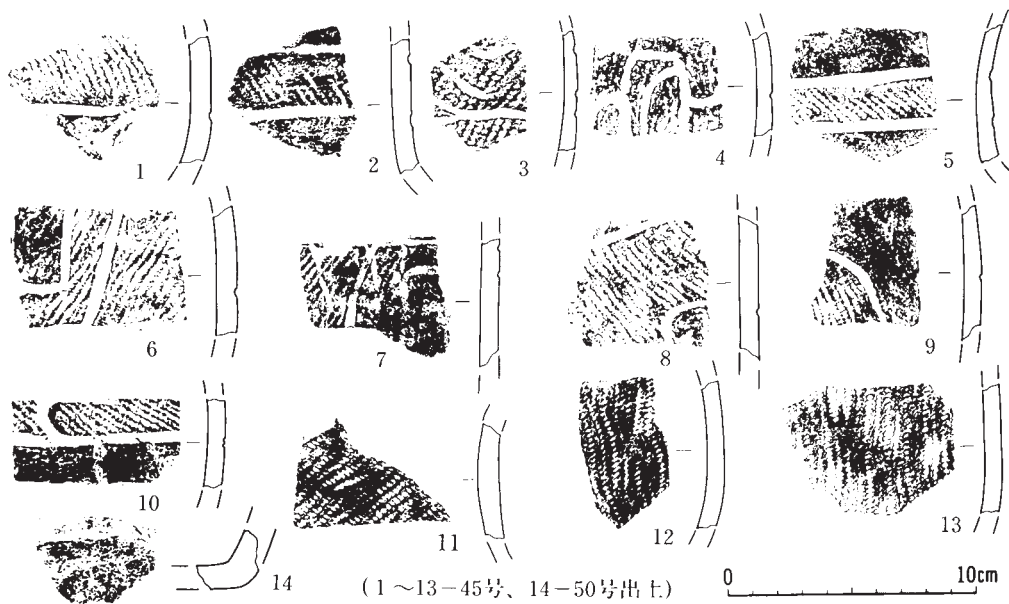
第77図 第45号ピット出土土器拓影図

（30）第46号ピット（第79図、第11表、写真15、16）

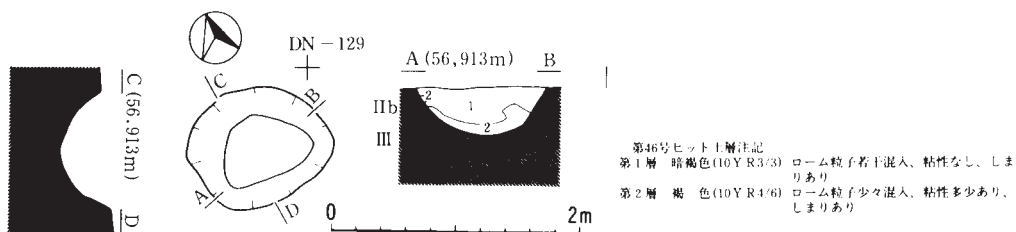
位置・確認 調査地区の中央から北寄りに位置するDU-128グリッドの第b層で暗褐色土の落ち込みを確認した。北向きの斜面上に立地して、標高は56.9mをはかる。周囲には第43、44、47～49、51、52号ピットが分布している。

形状・規模 平面プランは、東西方向に長軸のある楕円形で、開口部径119×98cm、坑底部径71×55cmである。壁、坑底部は、第b層から第c層を掘り下げてつくられているが、軟弱で壁高40cm、断面は凸レンズ状である。

覆土・遺物 覆土は、第1層暗褐色土、第2層褐色土の2層に区分した。遺物はなかった。
（成田悟、北林）



第78図 第45・50号ピット出土土器拓影図



第79図 第46号ピット実測図

(31) 第47号ピット (第73図、第11表、写真16)

位置・確認 調査地区の中央北側に位置するDU-130グリッド第 b層で第43号ピットとともに落ち込みを確認した。遺構の立地、周辺の遺構などは第43号ピットと同様である。

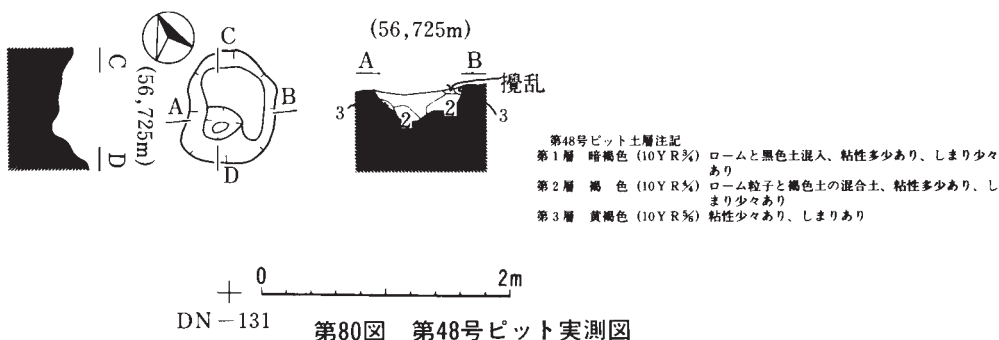
形状・規模 本ピットの西側は、第43号ピットに掘り込まれているが、平面プランは開口部、坑底部とも東西に長軸をもつ楕円形とみられる。壁、坑底部は第 b層を掘り下げ、北側に傾斜して断面は凸レンズ状である。規模は(いずれも残存部)開口部径147×87cm、坑底部径110×70cm、壁高20～14cmである。

覆土・遺物 覆土は、第1層暗褐色土、第2層褐色土の2層に区分した。第1層には多量の焼土と若干の炭化物が混じる。遺物は、第1層から縄文土器片が4点出土した。(鈴木、北林)

(32) 第48号ピット (第80図、第11表、写真16)

位置・確認 調査地区の中央からやや東側に位置するDT-130・131グリッド第 b層で落ち込みを確認した。南から北に緩傾斜した斜面中腹に立地して、標高は56.6mをはかる。周辺から第43、47、49号ピットを検出している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも不整な楕円形であるが、坑底部南壁に



接して径30×25cm、深さ10cmほどの小ピットがある。開口部の径は、90×67cm、坑底部径60×47cm、壁高25～8cmの規模がある。

覆土・遺物 覆土は3層に区分した。第1層暗褐色土、以下褐色土、黄褐色土である。遺物は、縄文土器片2点と礫1点が出土した。(成田悟、北林)

(33) 第50号ピット(第76図、第11表、写真16)

位置・確認 調査地区の中央から北寄りに位置するDT-136グリッド付近の第45号ピットを精査中に落ち込みを確認した。本ピットと第45号ピットは重複して、本ピットの西側が第45号ピットによって切られている。立地、周囲の遺構などは、第45号ピットと同様である。

形状・規模 開口部の平面プランは、東西方向に長軸がある楕円形であるが、坑底部は円形である。壁、坑底部は、第b層から第層をフラスコ状に掘り下げている。開口部径125(推定)×100cm、坑底部径155×153cm、壁高80～75cmは第45号ピットよりも深い。

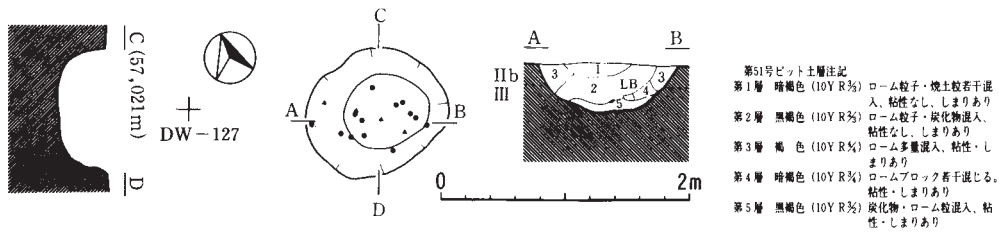
覆土・遺物 覆土は、4層に区分した。第1層黒褐色土、第2層褐色土、第3、4層黄褐色土で、すべての覆土に炭化物が混じり、自然堆積したものとみられる。遺物は、縄文土器片2点(第78図)、礫1点が出土した。(五十嵐、北林)

(34) 第51号ピット(第81図、第11表、写真16)

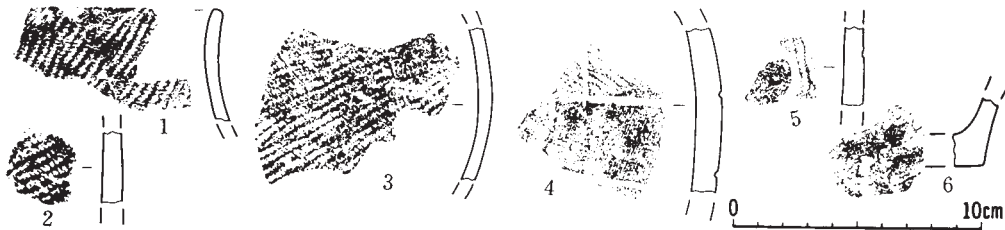
位置・確認 調査地区の中央北側に位置するDV・DW-127グリッドの第b層で暗褐色土の落ち込みを確認した。この付近は南北に形成された防風林(松、柏、笹竹)であるが、地形も北に向かって傾斜して標高は57.0mである。周辺には第46、52、59号ピットなどが分布している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも東西方向に長軸がある楕円形である。壁、坑底部は、第b層から第層を掘り下げた構築してあるが、ピット上部は軟弱で分層し難い。規模は、開口部径110×90cm、坑底部径70×60cm、壁高40cmである。

覆土・遺物 覆土は、5層に区分した。第1、4層暗褐色土、第2、5層黒褐色土、第3層褐色土である。第1層には焼土、第2、5層には炭化物が混じり、自然堆積したものとみられる。遺物は、縄文土器片13点(第82図)、礫類が4点出土した。全面的に分散し、層位では第2層が多い。(野村、北林)



第81図 第51号ピット実測図



第82図 第51号ピット出土土器拓影図

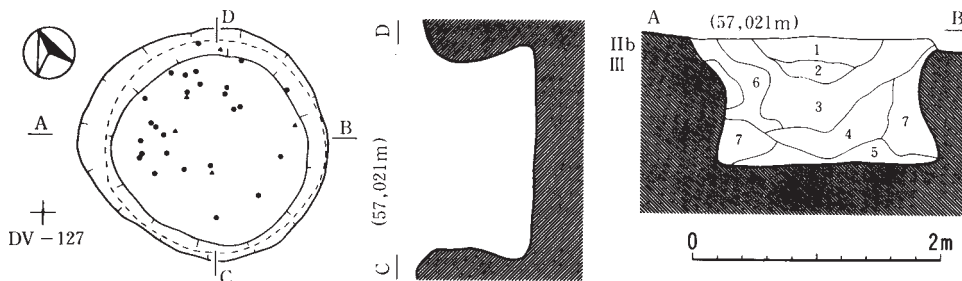
(35) 第52号ピット (第83図、第11表、写真16)

位置・確認 調査地区の中央から北寄りに位置するDU・DV-127グリッド第 b層で丸い黒色土の落ち込みを確認した。北に傾斜した防風林の中に立地して標高57.0mをはかる。本ピットの周囲には、第44、46、51、59号ピットが分布している。

形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも円形で、断面はいわゆるフラスコ状である。壁、坑底部は、第 b層から第 層を掘り込んで構築され、堅固なつくりである。規模は、開口部径202×188cm、坑底部径178×171cm、壁高102～90cmである。

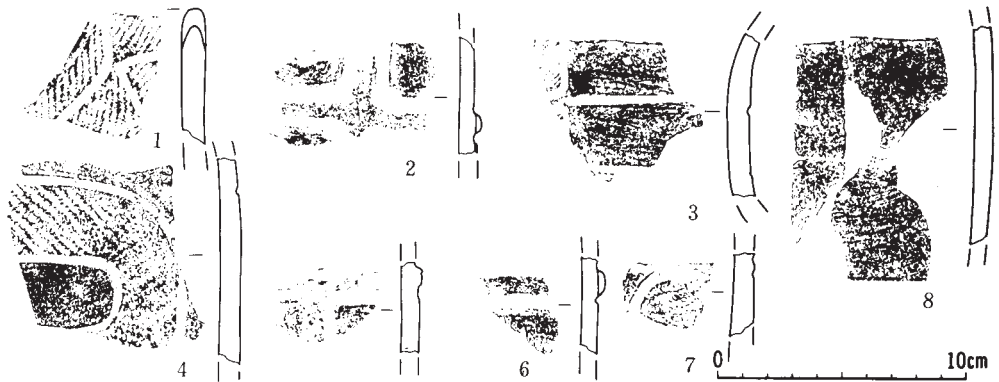
覆土・遺物 覆土は7層に区分した。第1層黒色土、第2～4層黒褐色土、第5、6層暗褐色土、第7層黄褐色土で、第3、4層に若干の炭化物が混じる。自然堆積とみられる。遺物は、縄文土器片27点、礫の類5点が出土した。土器片は、第 群土器に分類されるもの(第84図)である。

(成田悟、北林)



- 第52号ピット土層注記
- 第1層 黒色 (10Y R 2/2) しまり・粘性共なし
 - 第2層 黒褐色 (10Y R 3/2) 褐色土少々混入、しまり・粘性なし
 - 第3層 黒褐色 (10Y R 3/2) 褐色土全体に少量・炭化物微量混入、しまり・粘性若干あり
 - 第4層 黒褐色 (10Y R 3/2) 炭化物・褐色土若干混入、しまりなし、粘性あり
 - 第5層 暗褐色 (10Y R 3/2) ローム粒子全体に混じる、しまりなし、粘性あり
 - 第6層 暗褐色 (10Y R 3/2) ローム粒子全体に混入、しまり少々あり、粘性あり
 - 第7層 黄褐色 (10Y R 5/2) 褐色土混入、しまりなし、粘性あり

第83図 第52号ピット実測図



第84図 第52号ピット出土土器拓影図

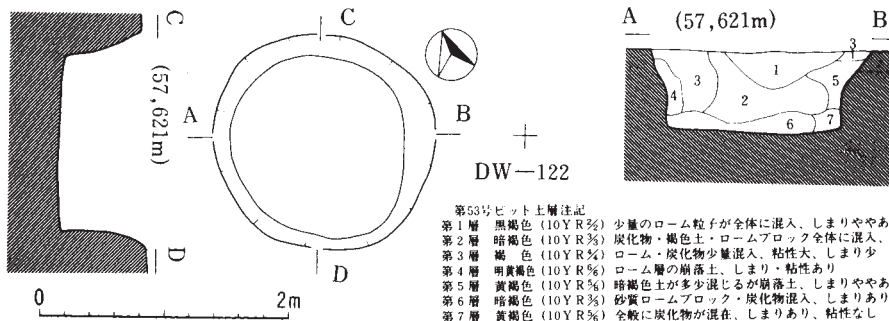
(36) 第53号ピット (第85図、第11表、写真16)

位置・確認 調査地区中央から北西寄りに位置するDV・DW-121グリッドの第 b 層上面で丸い黒褐色土の落ち込みを確認した。北に傾斜した斜面上に立地して、標高37.6mを数える。周辺には第54、56、57号ピットなどが分布している。

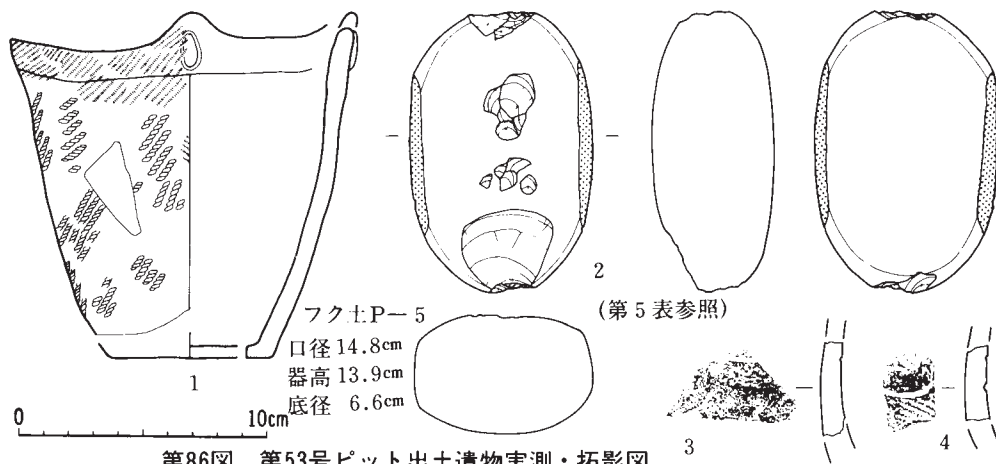
形状・規模 平面プランは、開口部、坑底部とも円形で、開口部径178×172cm、坑底部径152×140cmである。壁、坑底部は、第 b ~ 層を掘り込んでおり、坑底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁の途中から外側に開くようなバッドの断面をしている。覆土の第4、5層はロームの崩落土であり、本来はフラスコ状であった可能性もある。坑底部は平坦で壁く、壁高68~60cmである。

覆土・遺物 覆土は、7層に区分した。自然堆積である。第1層黒褐色土、第2、6層暗褐色土、第3層褐色土、第4層明黄褐色土(ローム)土、第5、7層黄褐色土で、第2、3、6、7層に炭化物が混じる。遺物は、縄文土器片17点で復原できたものがある(第86図)。

その他、敲石1点(第86図、第5表)と礫数点が出土した。縄文土器は、第 群に分類されるものである。
(鈴木、北林)



第85図 第53号ピット実測図



第86図 第53号ピット出土遺物実測・拓影図

第5表 第53号ピット出土石器観察表

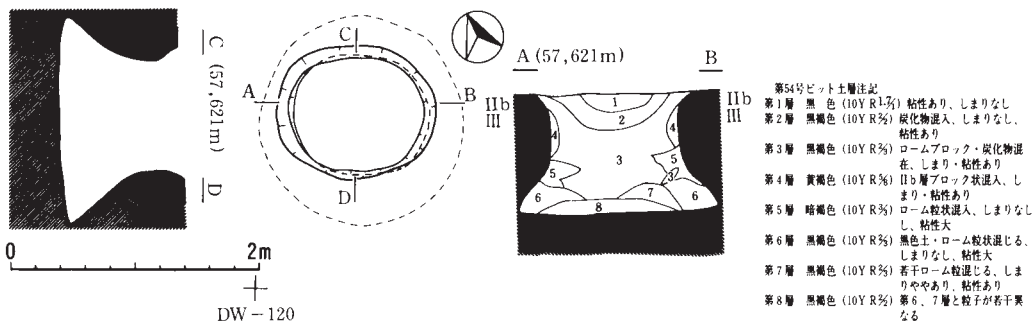
| 番号 | 挿番 | 図号 | 写真番号 | 名称 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重さg | 石質 | 分類 | 備考 |
|----|----|------|------|------|----------|------|------|------|-------|----|----|----|
| 1 | | 第86図 | | たたき石 | フク土: S-3 | 119 | 74 | 48 | 667.0 | I | I | |

(37) 第54号ピット (第87図、第11表、写真17)

位置・確認 調査地区中央北側に位置するDV-120グリッドの第 b層上面で黒色土の落ち込みを確認した。南北に造成された防風林から約8m西側にある平坦地で、標高は57.4mである。付近から検出した遺構は、第53号ピット、第11号焼土状遺構である。

形状・規模 開口部の平面プランは、東西方向に長軸がある楕円形であるが、坑底部は円形である。壁、坑底部は第 b層から第 層を掘り下げてあるため堅固なつくりで、断面はフラスコ状である。規模は、開口部径130×110cm、坑底部径170×160cm、壁高74cmである。

覆土・遺物 覆土は8層に区分した。第1層黒色土、第2、3、6～8層黒褐色土、第4層黄褐色土、第5層暗褐色土で第2、3層には炭化物が混じる。これらの覆土は、自然堆積したものと思われる。遺物は、第8層から縄文土器片が1点出土しただけである。(野村、北林)



第87図 第54号ピット実測図

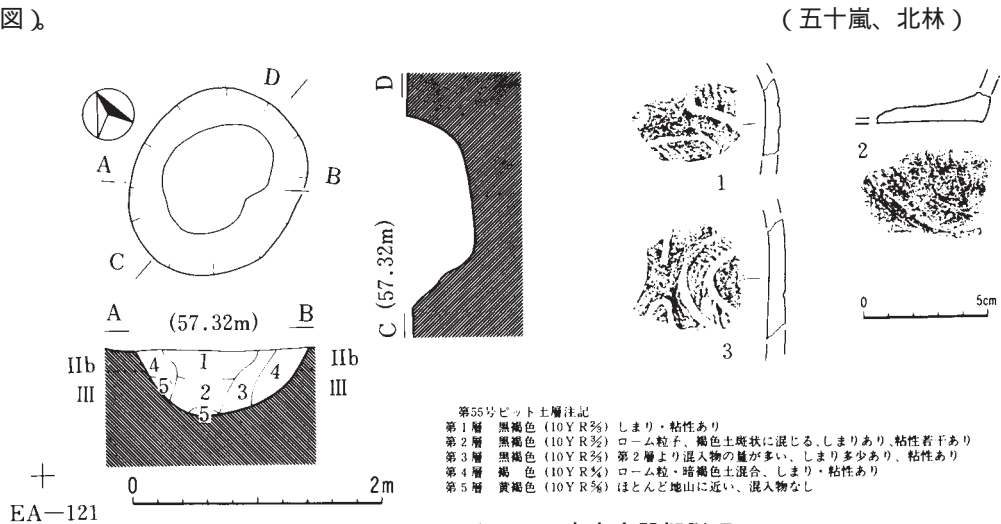
- 第54号ピット土層注記
- 第1層 黒色 (10Y R1%) 粘性あり、しまりなし
 - 第2層 黒褐色 (10Y R%) 炭化物混入、しまりなし、粘性あり
 - 第3層 黒褐色 (10Y R%) ロームブロック・炭化物混在、しまり・粘性あり
 - 第4層 黄褐色 (10Y R%) IIb層ブロック状混入、しまり・粘性あり
 - 第5層 暗褐色 (10Y R%) ローム粒状混入、しまりなし、粘性大
 - 第6層 黒褐色 (10Y R%) 黒色土・ローム粒状混じる、しまりなし、粘性大
 - 第7層 黒褐色 (10Y R%) 若干ローム粒混じる、しまりややあり、粘性あり
 - 第8層 黒褐色 (10Y R%) 第6、7層と粒子が若干異なる

(38) 第55号ピット (第88図、第11表、写真17)

位置・確認 調査地区の西寄りに位置するD Z - 121グリッド第 a層で黒褐色土の落ち込みを確認した。南と北に傾斜した丘陵台地の平坦部に立地してその標高は57.2mである。周囲にある遺構は、第9号焼土状遺構だけで、その他の遺構は10m以上離れている。

形状・規模 平面プランは開口部、坑底部とも東西方向に長軸がある楕円形である。壁、坑底部は、第 a層から第 b層にかけて掘り込まれている。断面は凸レンズ状で、ピット全体のつくりは軟弱である。

覆土・遺物 覆土は、5層に区分した。第1～3層黒褐色土、第4層褐色土、第5層黄褐色土で、自然堆積したものと思われる。遺物は縄文土器片4点が出土しただけである(第88図)。



第88図 第55号ピット実測図・出土土器拓影図

(39) 第56号ピット (第89図、第11表、写真17)

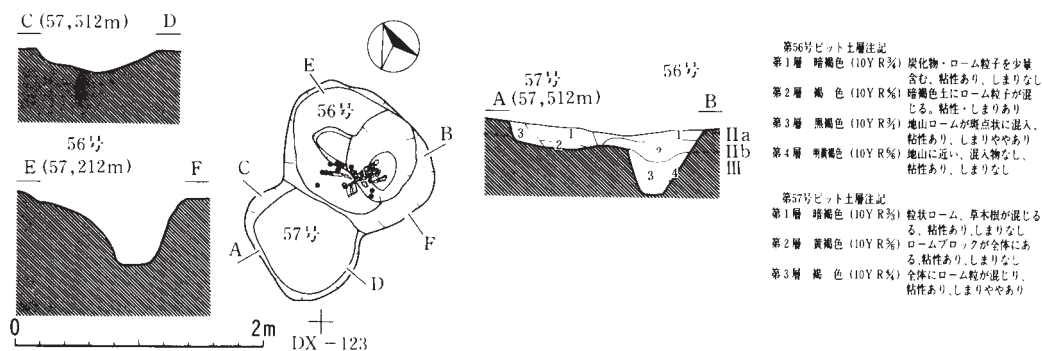
位置・確認 調査地区中央の北寄りに位置するD W - 122・123グリッドの第 a層で第57号ピットとともに暗褐色土の落ち込みを確認した。北と南に向けて傾斜した丘陵台地の平坦部に立地して、その標高は57.5mである。周辺には第53、58号ピット、第8号焼土状遺構などが分布している。

形状・規模 本ピットは第57号ピットと重複してこれを切っている。平面プランは、開口部、坑底部とも楕円形であるが、長軸方向は開口部が南北、坑底部が東西となっている。壁、坑底部は第 a層から掘り下げて第 b層に達しているためか、ピット上部は軟弱であるが坑底部は堅固である。また、断面は漏斗状を呈する。開口部径133×98cm、坑底部径30×23cm、壁高55cmの規模がある。

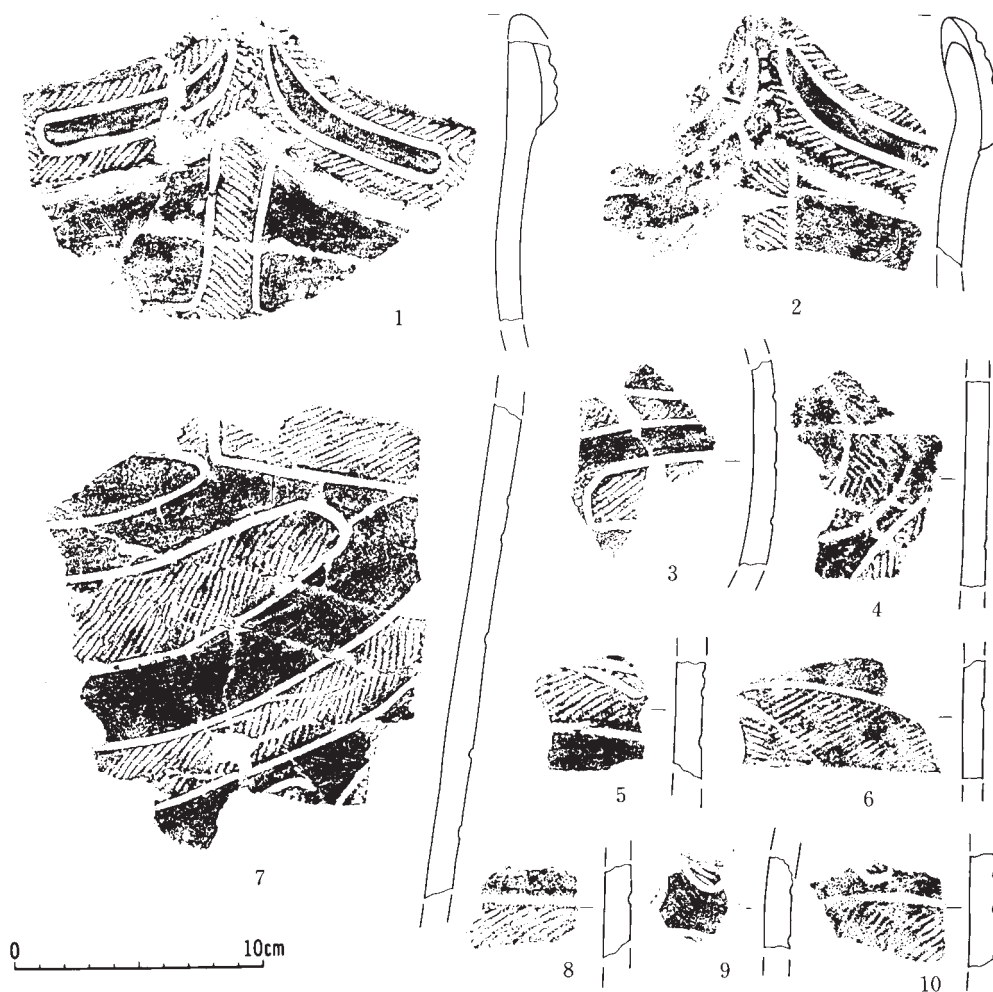
覆土・遺物 覆土は4層に区分した。第1層暗褐色土、第2層褐色土、第3層黒褐色土、

第4層明黄褐色土で、第1層には炭化物が混じる。遺物は、縄文土器片が14点出土した(第90図)。

(成田滋、北林)



第89図 第56・57号ピット実測図



第90図 第56号ピット出土土器拓影図

(40) 第57号ピット (第89図、第11表、写真17)

位置・確認 調査地区中央の北側に位置するDW - 122・123グリッドの第 a層で第56号ピットとともに暗褐色土の落ち込みを確認した。遺構の立地、周辺の遺構などは第56号ピットと同様である。

形状・規模 本ピットの東側は第56号ピットと重複して切られているが、平面プランは開口部、坑底部とも楕円形とみられる。また、壁、坑底部は、第 b層から第 層にかけて構築されているが、断面は凸レンズ状である。規模(残存)は、開口部径100×70cm、坑底部径80×50cm、壁高17cmをはかる。

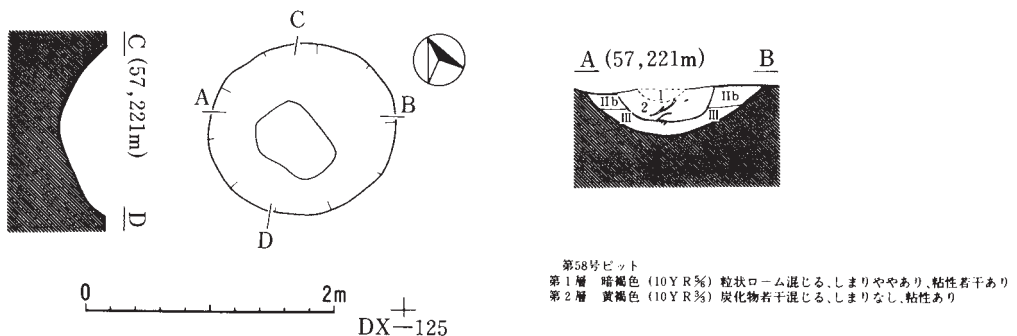
覆土・遺物 覆土は3層に区分した。第1層暗褐色土、第2層黄褐色土、第3層褐色土である。遺物は出土しなかった。(成田滋、北林)

(41) 第58号ピット (第91図、第11表、写真17)

位置・確認 調査地区の中央北側に位置するDW - 124グリッドの第 b層で暗褐色土の落ち込みを確認した。北に傾斜した斜面上に立地して、その標高は57.1mである。周辺には第56、57、59号ピットなどが分布している。

形状・規模 開口部の平面プランは円形であるが、坑底部は南北方向に長軸がある楕円形である。壁、坑底部は第 b層から第 層にかけて掘り込まれて、断面は凸レンズ状である。開口部径152×138cm、坑底部径62×44cm、壁高36cmの規模である。

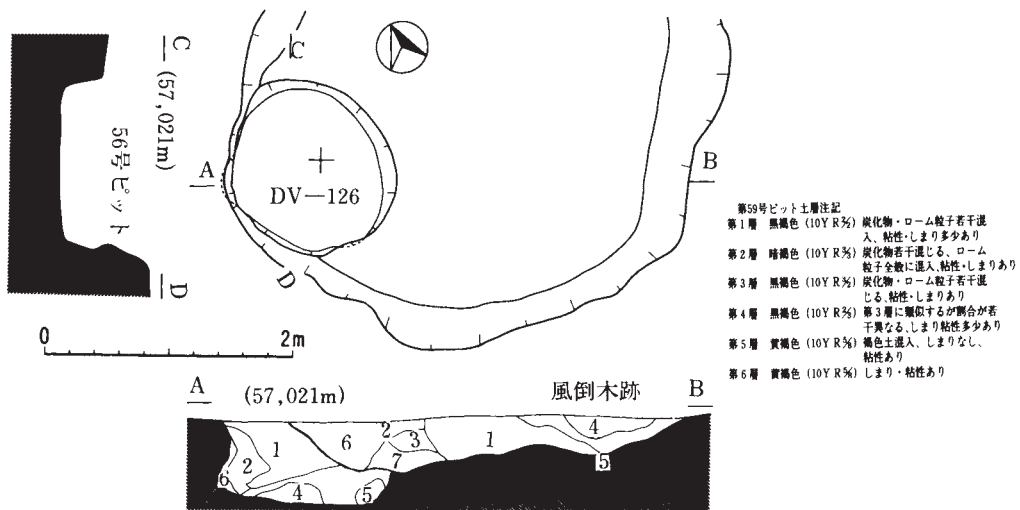
覆土・遺物 覆土は2層に区別した。第1層暗褐色土、第2層黄褐色土で、炭化物が若干混入している。遺物は、縄文土器片23点と礫が出土した。縄文土器は、第 群土器に分類される。(蝦名、北林)



第91図 第58号ピット実測図

(42) 第59号ピット (第92図、第11表、写真17)

位置・確認 調査地区の中央からやや西寄りに位置するDV - 126のグリッド杭直下の第 b層で黒褐色土の落ち込みを確認した。この付近は南北に造成された防風林で、北に傾斜した斜面上に立地し、その標高は56.9mである。



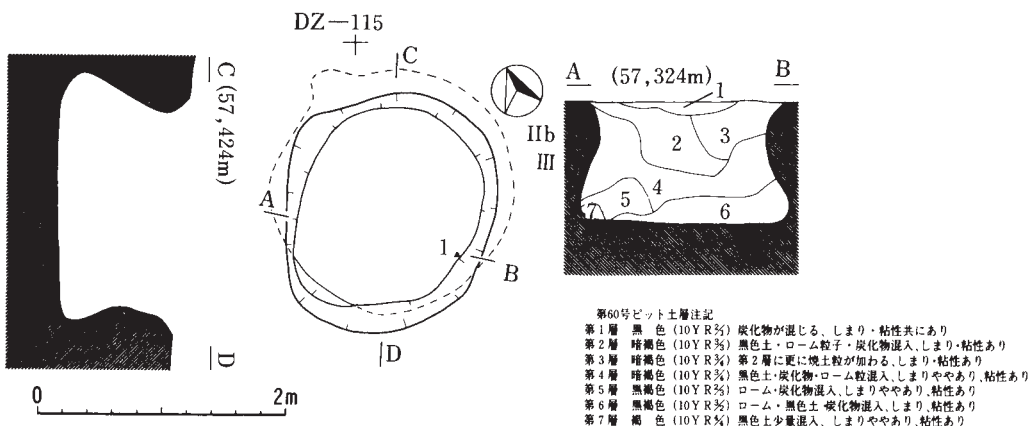
第92図 第59号ピット実測図

形状・規模 本ピットは風倒木跡と重複して、風倒木跡に切られている。開口部の平面プランは、切り合いのため判然としないが円形と推定される。また、坑底部も同様である。壁、坑底部は、第 b 層から第 層を掘り下げて構築され、坑底部は堅固である。断面は、壁の一部が切り合いのため崩壊しているが、フラスコ状とみられる。開口部径 (160) × 150cm、坑底部径135 × 128cm、壁高65cmの規模である。

覆土・遺物 覆土は6層に区分した。第1、3、4層黒褐色土、第2層暗褐色土、第5、6層黄褐色土で、第1～4層に炭化物が混じる。遺物は出土しなかった。(成田悟、北林)

(43) 第60号ピット (第93図、第11表、写真18)

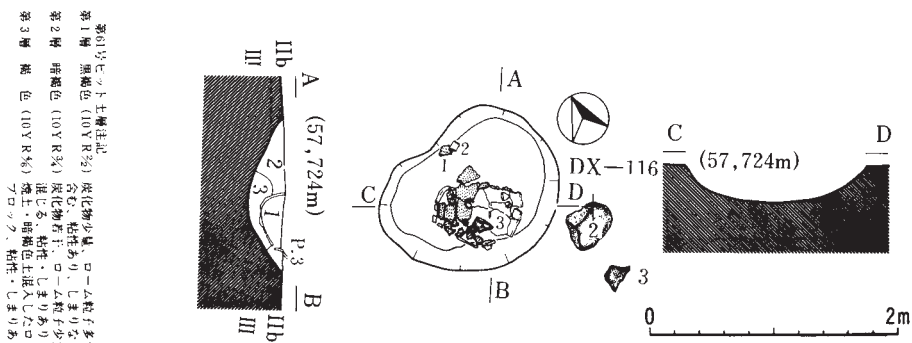
位置・確認 調査地区の西側に位置するDZ - 114・115グリッドの第 b 層で黒色土の落ち込みを確認した。南と北に傾斜した台地の平坦部に立地して、その標高は57.2mである。周辺には第15号焼土状遺構、第4号溝状ピットが分布している。



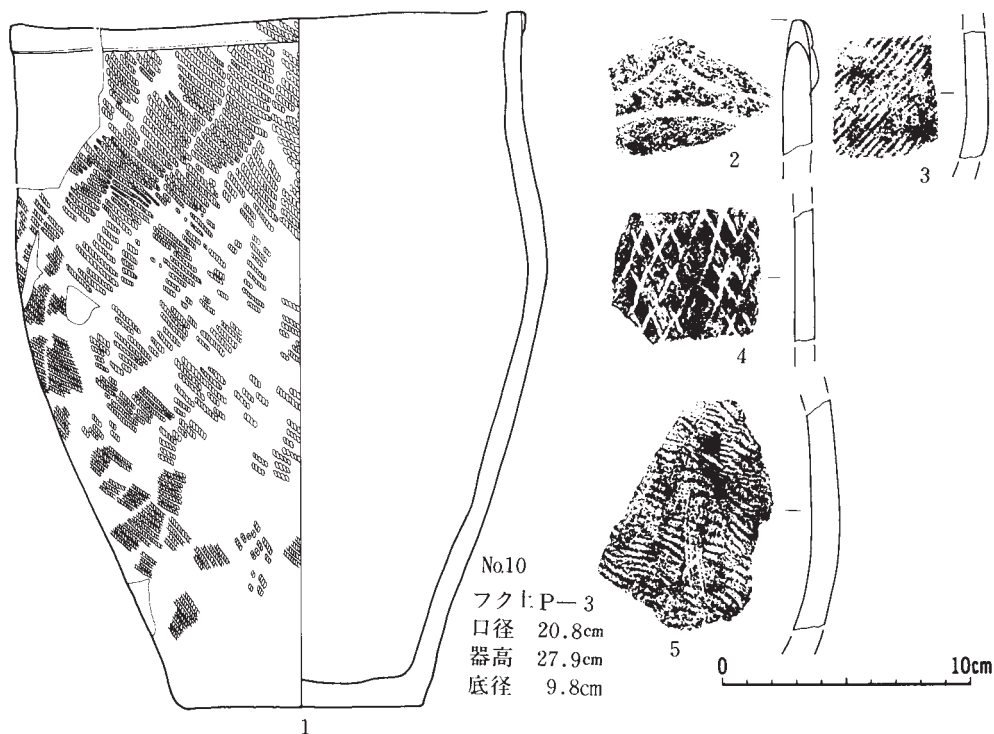
第93図 第60号ピット実測図

形状・規模 開口部の平面プランは、東西に長軸がある楕円形であるが、坑底部のそれは円形である。壁、坑底部は、第 b 層から第 層を掘り下げて構築され、堅固なピットである。断面は、壁の中端を絞ったいわゆるフラスコ状を呈する。規模は、開口部径200×170cm、坑底部径200×190cm、壁高90cmである。

覆土・遺物 覆土は7層に区分した。第1層黒色土、第2～4層暗褐色土、第5、6層黒褐色土、第7層褐色土で、第1、7層以外には炭化物が混じる。遺物は、南東壁よりの第3層から出土した礫1点のみである。 (野村、北林)



第94図 第61号ピット実測図



第95図 第61号ピット出土土器実測図拓影図

(44) 第61ピット (第94図、第11表、写真18)

位置・確認 調査地区の西側に位置するDW・DX - 115グリッドの第 b層で黒褐色土の落ち込みを確認した。北に傾斜した斜面の中腹に立地して、その標高は57.7mである。周辺には第4号溝状ピット、第60号ピットが分布している。

形状・規模 平面プランは、東西方向に長軸がある楕円形である。壁、坑底部は、第 b層から第 層にかけて構築されて、その断面は、凸レンズ状である。規模は、開口部径148×114cm、坑底部径130×90cm、壁高28cmである。

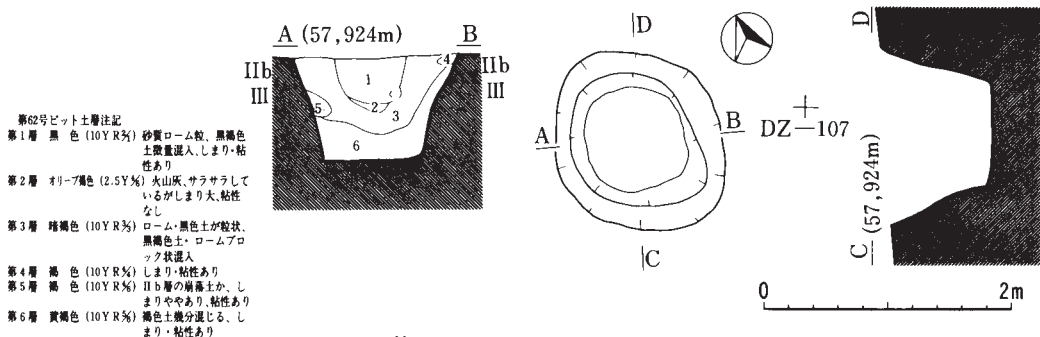
覆土・遺物 覆土は3層に区分した。第1層黒褐色土、第2層暗褐色土、第3層褐色土であるが、覆土全体に炭化物が混じり、また第3層には焼土も混入している。遺物は、復原された縄文土器1個体(第95図)のほか礫が出土した。(成田滋、北林)

(45) 第62号ピット (第96図、第11表、写真18)

位置・確認 調査地区の西側に位置するDY・DZ - 106グリッドの第 b層で黒色土の落ち込みを確認した。この付近は南へ傾斜した圃場で、その標高は57.9mである。周辺には遺構がなく、東方8mに第65号ピット、北西16mに本遺跡最西端の遺構である第64ピットが分布するだけである。

形状・規模 開口部の平面プランは、南北方向に長軸がある楕円形であるが、坑底部のそれは若干角ばった円形である。壁、坑底部は、第 b層から第 層を掘り下げて構築しており堅固である。断面は、坑底部から上部に向かって開く梯形(鉢形)である。規模は、開口部径160×140cm、坑底部径80×80cm、壁高80×90cmである。

覆土・遺物 覆土は6層に区分した。第1層黒色土、第2層オリーブ褐色土(火山灰質)第3層暗褐色土、第4、5層褐色土、第6層黄褐色土である。これらは自然堆積したもののみられる。遺物は出土しなかった。(野村、北林)



第96図 第62号ピット実測図

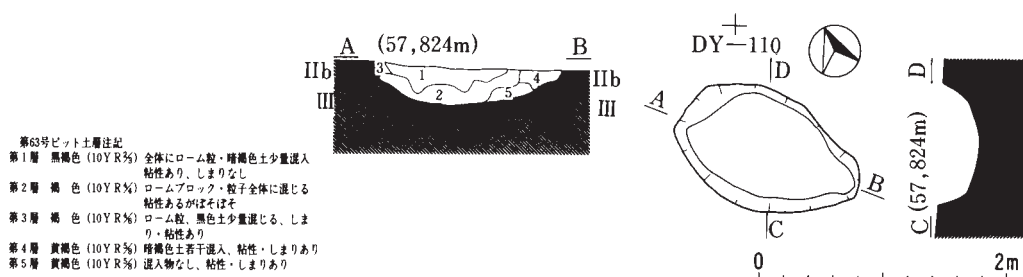
(46) 第63号ピット (第97図、第11表、写真18)

位置・確認 調査地区の西側に位置するDY - 109・110グリッドの第 b層で黒褐色土

の落ち込みを確認した。この付近は北へ傾斜した圃場で、その標高は57.8mである。周辺には第5号溝状ピット、第65号ピットが分布している。

形状・規模 平面プランは、南北方向に長軸がある楕円形で、壁、坑底部が第 b 層から第 層を掘り下げて構築して、その断面は凸レンズ状である。規模は、開口部径155×95cm、坑底部径130×75cm、壁高30～40cmである。

覆土・遺物 覆土は5層に区分した。第1層黒褐色土、第2、3層褐色土、第4、5層黄褐色土で自然堆積したものとみられる。遺物は出土しなかった。(五十嵐、北林)



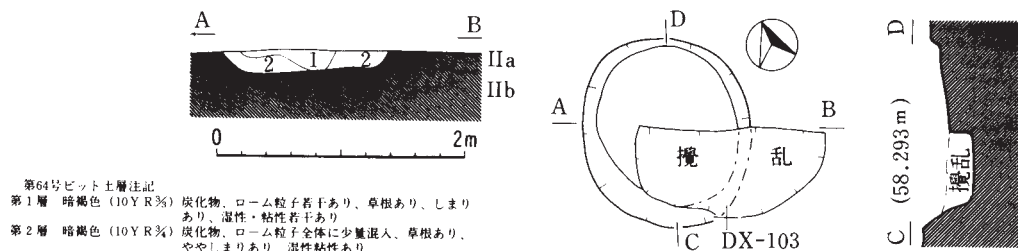
第97図 第63号ピット実測図

(47) 第64号ピット (第98図、第11表、写真19)

位置・確認 調査地区の西側に近いDW - 102・103グリッドの第 a 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。この付近は北向きの傾斜地で、その標高は58.2mである。本遺構の周辺では遺構の検出がなく、最寄りの遺構は第62号ピットで、約16m離れている。

形状・規模 本ピットの南側は攪乱を受けているが、平面プランは開口部、坑底部とも長軸方向が南北にある楕円形とみられる。壁、坑底部は、第 a～b 層を掘り下げてつくられ、壁の立ち上がりは緩やかで、その断面は凸レンズ状である。規模は、開口部径152×134cm、坑底部径130×110cm、壁高16～7cmである。

覆土・遺物 覆土は、2層に区分した。いずれも暗褐色土で炭化物が混入しているが、自然堆積したものとみられる。遺物は出土していない。(鈴木、北林)



第98図 第64号ピット実測図

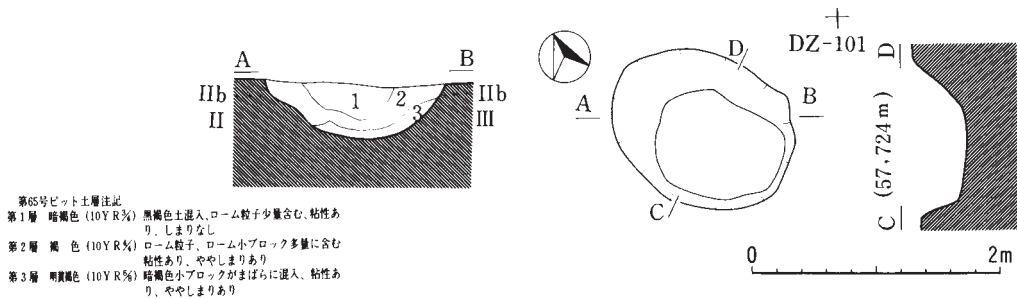
(48) 第65号ピット (第99図、第11表、写真19)

位置・確認 調査地区の西側に位置するD Z - 108グリッドの第 b 層で暗褐色土の落

ち込みを確認した。北と南に傾斜した圃場の平坦部に立地して、その標高は57.6mである。周辺には第63号ピット、第5号溝状ピットが分布している。

形状・規模 平面プランは、南北方向に長軸がある楕円形で、壁、坑底部は第 b 層に掘り込まれ、坑底部からの立ち上がりは緩やかで、その断面は凸レンズ状である。規模は開口部径157×120cm、坑底部径104×78cm、壁高42cmである。

覆土・遺物 覆土は3層に分けた。第1層暗褐色土、第2層褐色土、第3層明黄褐色土である。遺物は、出土しなかった。(成田(滋)、北林)



第99図 第65号ピット実測図

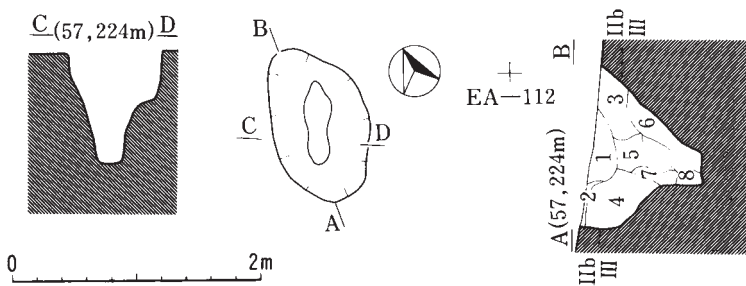
(49) 第66号ピット (第100図、第11表、写真19)

位置・確認 調査地区西側に位置するD Z - 112グリッドの第 b 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。この地点は南に向けて傾斜した圃場で、その標高は57.2mである。近接した遺構は、第4、5号溝状ピット、第60、63号ピットなどであるが、8 m以上離れている。

形状・規模 開口部の平面プランは、南北方向に長軸がある楕円形であるが、断面は不整な漏斗状である。壁、坑底部は、第 b 層から第 層にかけて掘り込まれている。規模は、開口部径130×80cm、坑底部径68×25cm、壁高80～95cmである。

覆土・遺物 覆土は8層に区分した。第1、7、8層暗褐色土、第2、5層褐色土、第3、4層黄褐色土、第6層明黄褐色土で、第1層には焼土、第2～5、7層には炭化物が混じる。いずれも覆土も自然堆積したものとみられる。遺物は、出土しなかった。

(五十嵐、北林)



第100図 第66号ピット実測図

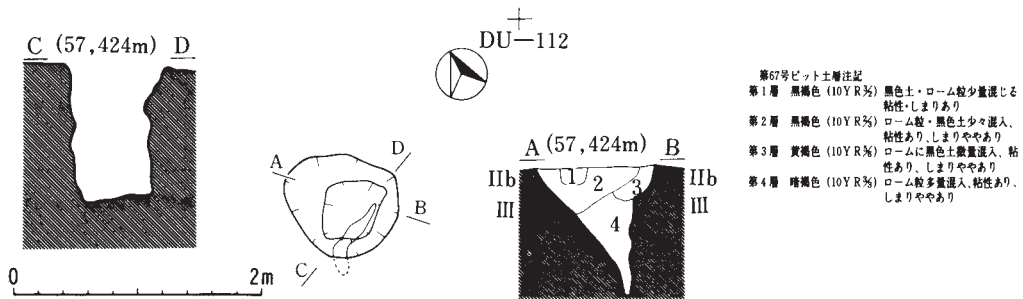
第66号ピット主層注記
 第1層 暗褐色 (10Y R%) ローム土混入、粘性あり、しまりなし
 第2層 褐色 (10Y R%) 炭化物、ローム少量混入、粘性あり、しまりなし
 第3層 黄褐色 (10Y R%) ローム少量混入、粘性あり、しまりなし
 第4層 黄褐色 (10Y R%) 炭化物少量、ローム少量混入、粘性あり、しまりなし
 第5層 褐色 (10Y R%) 炭化物、ローム少量混入、粘性あり、しまりなし
 第6層 明黄褐色 (10Y R%) ローム混入、粘性あり、しまりなし
 第7層 暗褐色 (10Y R%) 炭化物、ローム少量混入、粘性あり、かたい
 第8層 暗褐色 (10Y R%) ローム、暗褐色土状で全体に混じる、ぼろぼろしてしまりなし

(50) 第67号ピット (第101図、第11表、写真19)

位置・確認 調査地区西側の北寄りに位置するDU-111グリッドの第 b層で黒褐色土の落ち込みを確認した。北に傾斜した斜面の中腹に立地して、その標高は57.4mである。周辺の遺構は少なく、第17号焼土状遺構が分布している。

形状・規模 開口部と坑底部の一部は不整な円形と菱形である。壁と坑底部は第 b層に掘り込まれ、北壁が南壁に傾斜して、坑底部の一部は先枯れ状に屈折して根跡の感もある。その断面は円筒状と漏斗状に分かれている。規模は、開口部径93×83cm、坑底部径60×10cm、壁高100～110cmである。

覆土・遺物 覆土は4層に区分した。第1、2層黒褐色土、第3層黄褐色土、第4層暗褐色土である。遺物は出土しなかった。
(五十嵐、北林)



第101図 第67号ピット実測図

(51) 第68号ピット (第102図、第11表、写真19)

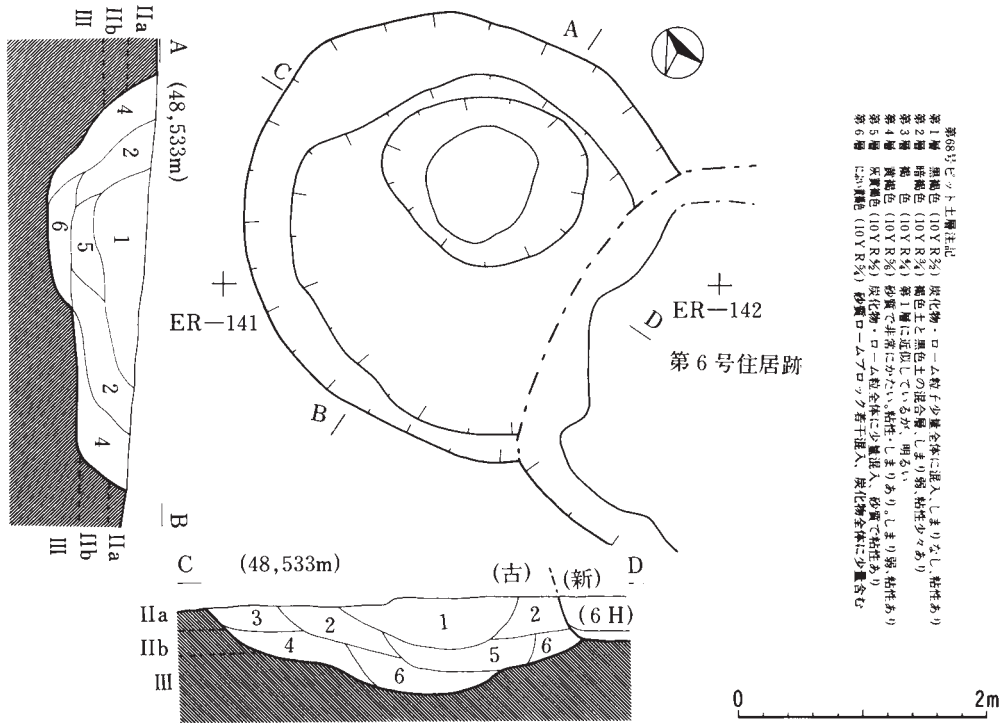
位置・確認 調査地区を東西に横断している農道の南側に位置するEQ・ER-141グリッドの第 a層で暗褐色土の落ち込みを確認した。この地点は、北から南に傾斜した台地がさらに東と西に向けて緩傾斜した台地で、その小平坦面に立地し、その標高は48.5mである。周辺には第5～9号住居跡が集落を形成している。

形状・規模 本ピットは、第6号竪穴住居跡と重複して、その南東部が第6号住居跡によって切られている。切り合いのためその形状は明確でないが、平面プランは南北方向に長軸をもつ円形とみられる。また、坑底部の北東隅にも長軸方向が同じようなピットがある。これらのピット断面は、いずれも凸レンズ状である。壁、坑底部は、第 b層から第 層にかけて掘り込まれて堅固なつくりとなっている。規模は竪穴住居跡と同様で、大型のピットである。開口部径(346)×333cm、坑底部径(290)×264cm、壁高41～84cmである。

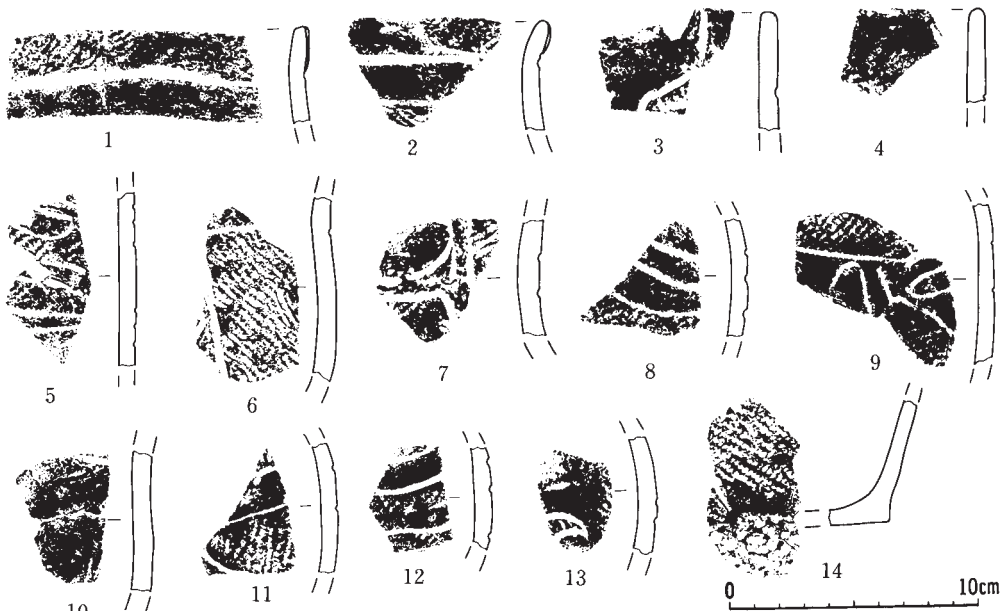
覆土・遺物 覆土は6層に区分した。第1層黒褐色土、第2層暗褐色土、第3層褐褐色土、第4層黄褐色土、第5層灰黄褐色土、第6層にぶい黄褐色土で、第1、5、6層には全体に炭化物が少量づつ混入している。遺物は、縄文土器片27点、礫2点が出土したが、土器片の多く

は第6号住居跡出土の土器と同一個体である(第103図)。

(鈴木、北林)



第102図 第68号ピット実測図



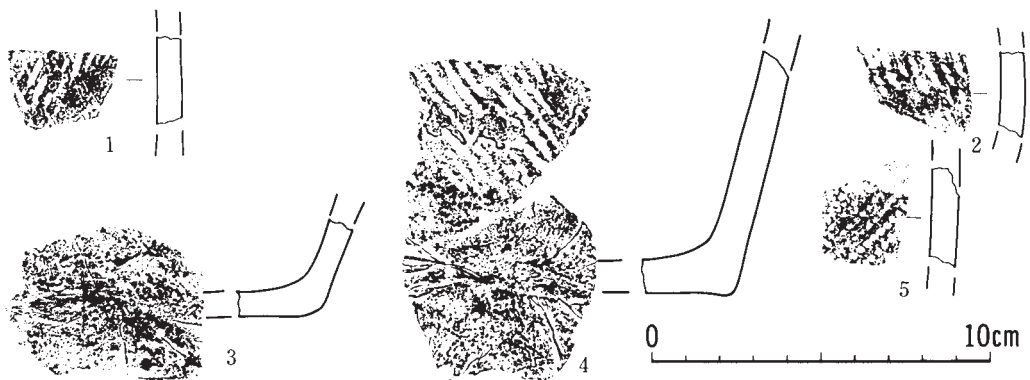
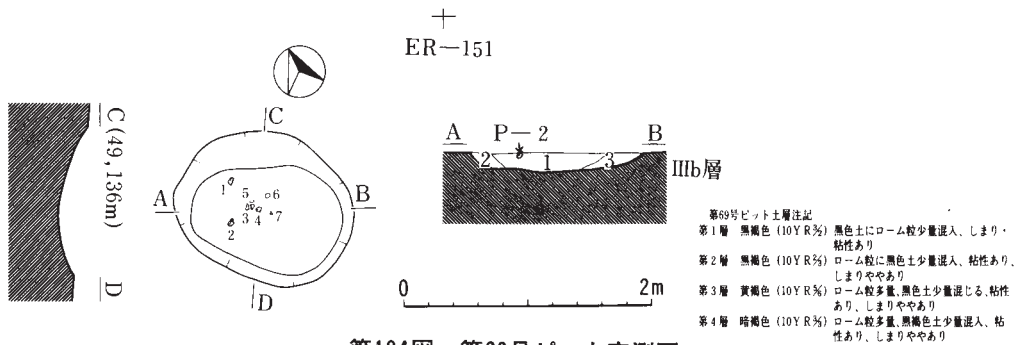
第103図 第68号ピット出土土器拓影図

(52) 第69号ピット (第104図、第11表、写真19)

位置・確認 調査地区南東に位置するER-150グリッドの第 b層で黒褐色土の落ち込みを確認した。南に面した斜面の中腹に立地して、その標高は50.1mである。半径12m以内に遺構は分布していない。比較的近距離にある遺構は、第2号配石、第22号ピットである。

形状・規模 平面プランは、東西方向の長軸がある楕円形で、壁、坑底部は第 b層に掘り込まれ、断面は凸レンズ状である。規模は、開口部径144×117cm、坑底部径120×85cm、壁高14cmである。

覆土・遺物 覆土は3層に区分した。第1、2層黒褐色土、第3層暗褐色土である。遺物は、縄文土器片が7点 (第105図) 出土しただけである。 (成田(滋) 北林)



3 焼土状遺構 (第106~109図) (第6・7表) (写真20・21)

焼土状遺構は、本遺跡から17基検出した。検出位置は、特に西側地区に多く集中していた。住居跡の外側に存在するピットの配置と似ている。

焼土の規模は、第19号焼土状遺構の150cmが最大値であり、ほかは100cm内外である。平面形は、不整形・円形及び楕円形に分かれるが、そのうちの不整形が主体を占める。

断面形は、若干くぼんだ鍋底状を呈する第9・11・12・14・15・16号焼土状遺構と、ピット内に堆積している第1・2・4・6~8・10・13・17~19号焼土状遺構の二通りがみられる。両者ともに底面及び壁は、明瞭な二次火熱を受けていない。焼土の厚さは、第17号焼土で20cmが最高であり、ほかは10cm内外で一般に薄い堆積である。堆積土の特徴は、純粋な焼土層は少なく、炭化物・ローム粒を混入した例が多い。

焼土状遺構から出土した遺物は、縄文時代後期土器と石器磨石1点である。土器は小破片が多い。遺物が出土した遺構は、第4・11・13・14・16~19号焼土状遺構の8基である。出土状況は、覆土の中位から上位にかけて散在して出土しており、覆土に混入したものと思われる。

焼土状遺構の性格及び用途は、ピット内に焼土層がみられる類については、ピットが堆積する段階で混入したと考えられ、ピットの中に入れて肥えた方が妥当と思われる。また、ピットを有さない焼土状遺構については、二次火熱面が弱く一時的に使用した炉及び焚き火跡と考えられる。

(出土遺物) 第109図、第7表

出土遺物に関しては、遺物が出土した8基のうち第17・18号焼土状遺構の土器は細片のため省き、6基について記載する。

第4号焼土状遺構(2)は粗製の深鉢形土器で縦位に網目状撚糸文を施文しており、器外面にスス状炭化物が付着している。

第11号焼土状遺構(3)は、粗製の鉢形土器で小突起を有する。口唇部寄りに貫通孔がみられ器外面に縄文(LR)を施文している。(4)は、底部破片で器内面にスス状炭化物が付着しており、焼成は不良である。石器は、端部のみにすりが見られる磨石である。

第13号焼土状遺構(1)は底部から体部にかけての深鉢形土器である。縄文(RL)を施文し体部に横位方向の文様区画帯を構成している。(5)は底部破片で縄文(LR)を施文している。(6)は縄文(RL)を施文後に沈線を施文している深鉢形土器である。

第14号焼土状遺構(7・8)は器外面に縄文(LR)を施文しており、同一破片と思われる。

第16号焼土状遺構(9)は波状口縁を有する深鉢形土器である。折り返し口縁部には縄文(RL)を施文し、その後に横位の沈線を巡らしており、折り返し口縁の下部に方形の磨消縄文を施文している。

第19号焼土状遺構(10・11)は同一破片である。土器は器厚が薄く焼成は良好であり、縦位の文様を施文している。(成田滋彦)

第6表 焼土状遺構計測表

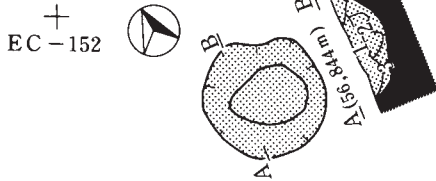
()は現存値 単位:cm

| 番号 | 遺構番号 | グリッド | 長径 | 短径 | 深さ | 形状 | 備考 |
|----|----------|------------|-------|------|----|-------|---------------------|
| 1 | 第1号焼土状遺構 | EC-152 | 50 | 44 | 15 | 円形 | |
| 2 | 第2 " | EE-148 | 58 | 51 | 10 | 不整円形 | |
| 3 | 第4 " | EE-130 | 53 | 44 | 10 | 円形 | 覆土中から土器1片出土 |
| 4 | 第6 " | EC-147 | 56 | 46 | 13 | 不整楕円形 | |
| 5 | 第7 " | EB-137 | 93 | 62 | 25 | 楕円形 | |
| 6 | 第8 " | DW-123 | 80 | 72 | 10 | 不整楕円形 | |
| 7 | 第9 " | EA-120 | (40) | 31 | 4 | 不整形 | |
| 8 | 第10 " | DW-126 | 66 | 60 | 16 | 不整円形 | |
| 9 | 第11 " | DW-119 | 67 | 52 | 10 | 不整方形 | 覆土中から磨石1点・土器1片出土 |
| 10 | 第12 " | DZ-117 | 68 | 65 | 9 | 不整形 | |
| 11 | 第13 " | DW-125 | 80 | 65 | 20 | 楕円形 | 覆土中から土器14片出土 |
| 12 | 第14 " | DZ-116 | 128 | 90 | 17 | 不整形 | 覆土中から土器9片出土 |
| 13 | 第15 " | DZ-115・116 | 75 | 40 | 12 | 不整形 | |
| 14 | 第16 " | DW・X-113 | 57 | 32 | 5 | 不整形 | 周辺から土器1片出土 |
| 15 | 第17 " | DU-110 | (162) | 158 | 50 | 円形 | 風倒木と切り合っており、本遺構が新しい |
| 16 | 第18 " | EP-145 | 71 | 63 | 15 | 円形 | 覆土中から土器2片出土 |
| 17 | 第19 " | EQ-142・143 | (102) | (83) | 15 | 円形 | 覆土中から土器1片出土 |

第7表 焼土状遺構出土石器観察表

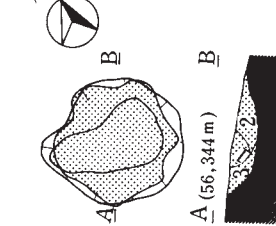
| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|---------|--------------|------|-----|------|------|----|----|----|
| No. 116 | 11号焼土カクニンS-1 | 67 | 24 | 11 | (33) | O | H | 欠損 |

第1号焼土状遺構



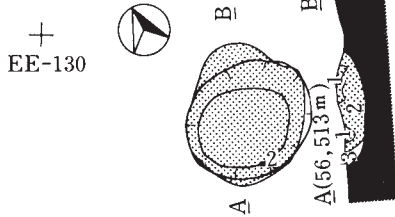
第1号焼土土層注記
 第1層 暗褐色(10YR%) 焼土粒含む、ローム粒混入
 第2層 明褐色(7.5YR%) 焼土粒含む
 第3層 褐色(10YR%) 焼土粒含む

第2号焼土状遺構



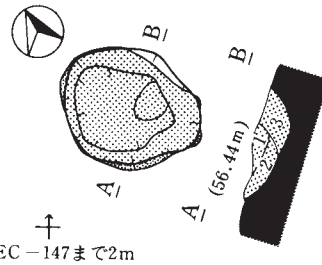
第2号焼土土層注記
 第1層 明赤褐色(5YR%) 焼土層
 第2層 褐色(10YR%) 焼土粒を含む
 第3層 黄褐色(10YR%) ローム粒・焼土粒を含む

第4号焼土状遺構



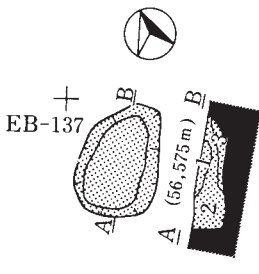
第4号焼土土層注記
 第1層 暗褐色(7.5YR%) 焼土粒を含む
 第2層 明赤褐色(5YR%) 焼土層
 第3層 褐色(10YR%)

第6号焼土状遺構



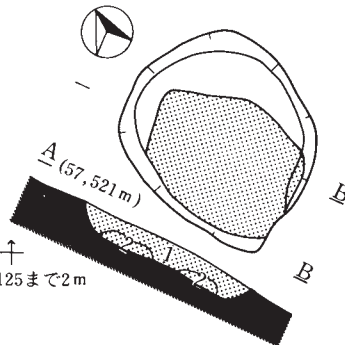
第6号焼土土層注記
 第1層 明褐色(7.5YR%) ローム・焼土粒を含む
 第2層 明赤褐色(5YR%) 焼土粒を含む
 第3層 褐色(7.5YR%) 焼土粒を含み、ロームブロック混入

第7号焼土状遺構



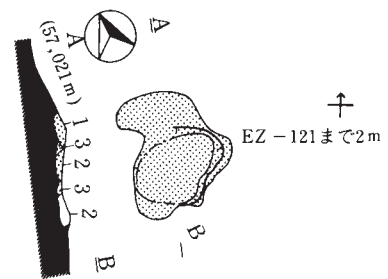
第7号焼土土層注記
 第1層 暗褐色(10YR%) 焼土を多量に含む
 第2層 褐色(10YR%) 焼土粒を含み、ロームブロック混入
 第3層 褐色(10YR%) 焼土粒若干・ロームブロック多量含む

第8号焼土状遺構



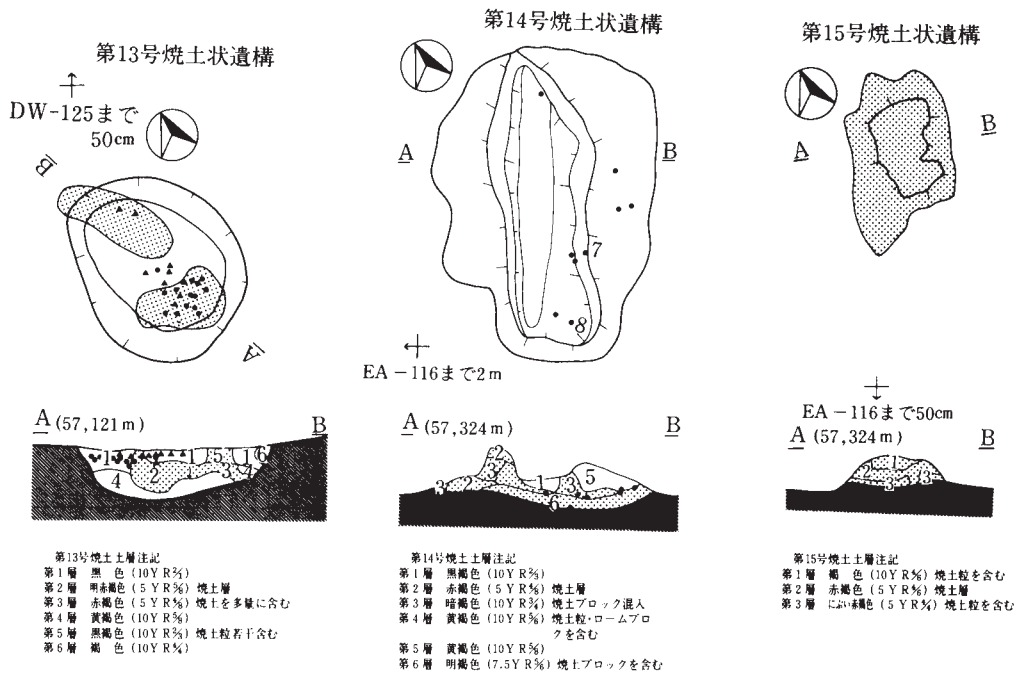
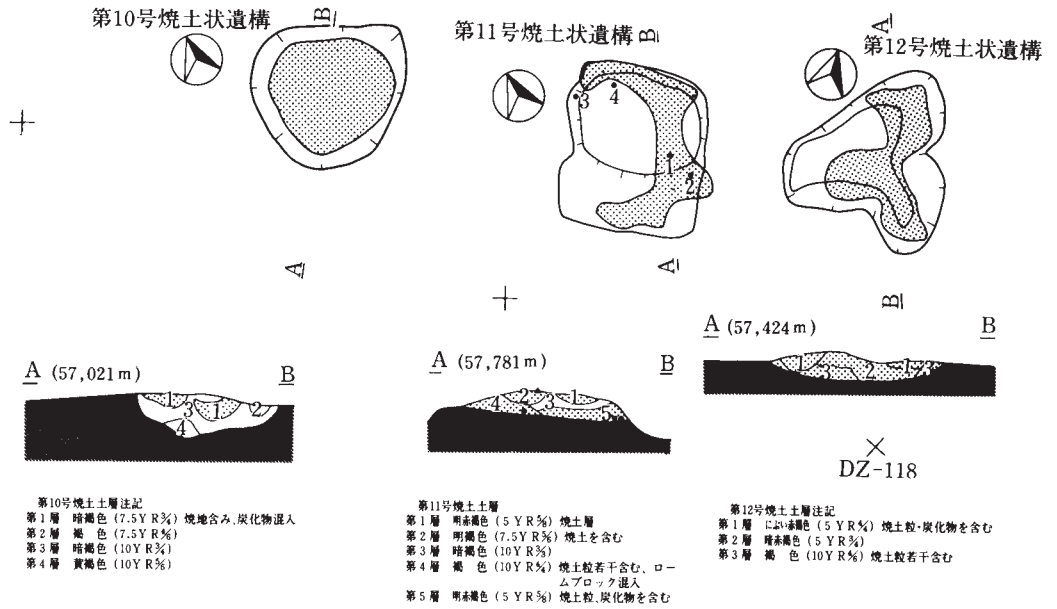
第8号焼土土層注記
 第1層 赤褐色(5YR%) 焼土層
 第2層 黄褐色(10YR%) 焼土粒若干含む

第9号焼土状遺構



第9号焼土土層注記
 第1層 明赤褐色(5YR%) 焼土層
 第2層 赤褐色(5YR%) 焼土層、炭化物少量含む
 第3層 褐色(10YR%) 焼土粒、炭化物少量含む

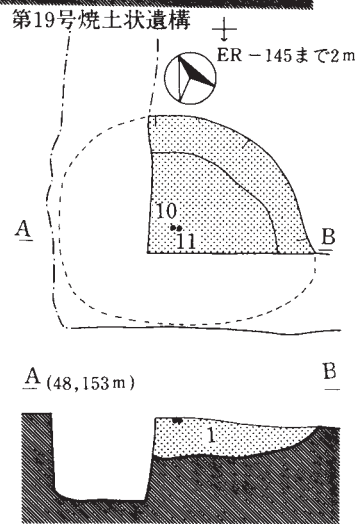
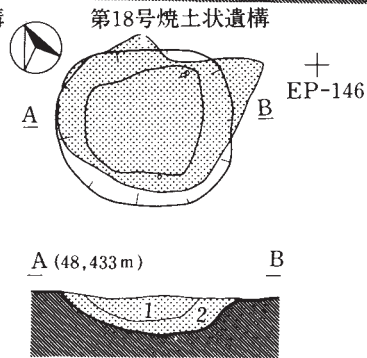
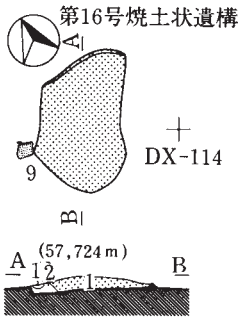
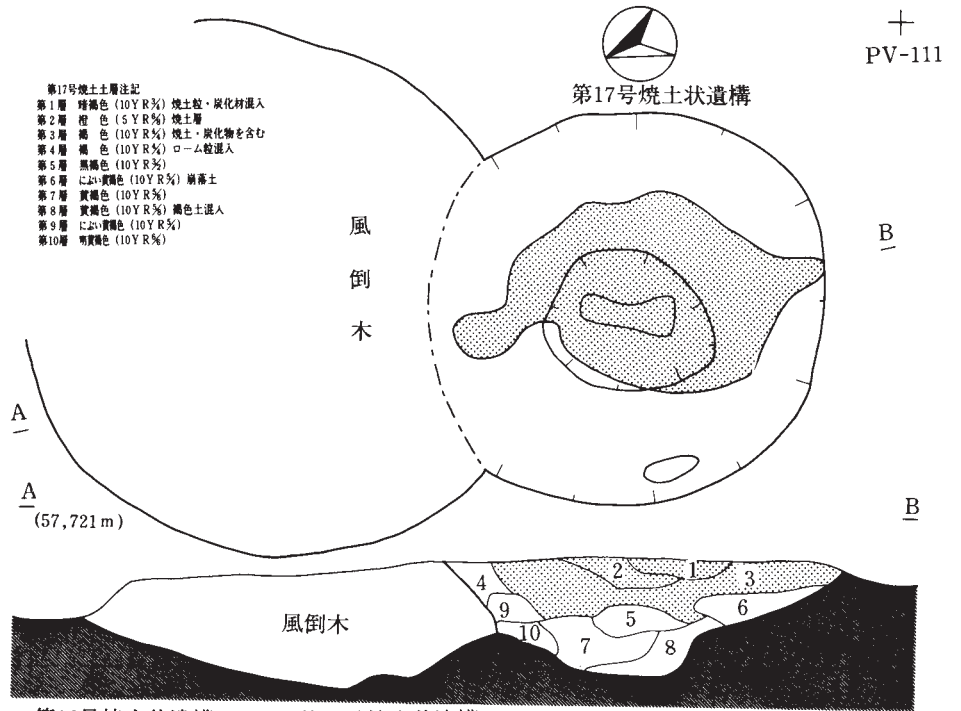
第106図 焼土状遺構実測図(1)



0 1m

第107図 焼土状遺構実測図(2)

+
PV-111



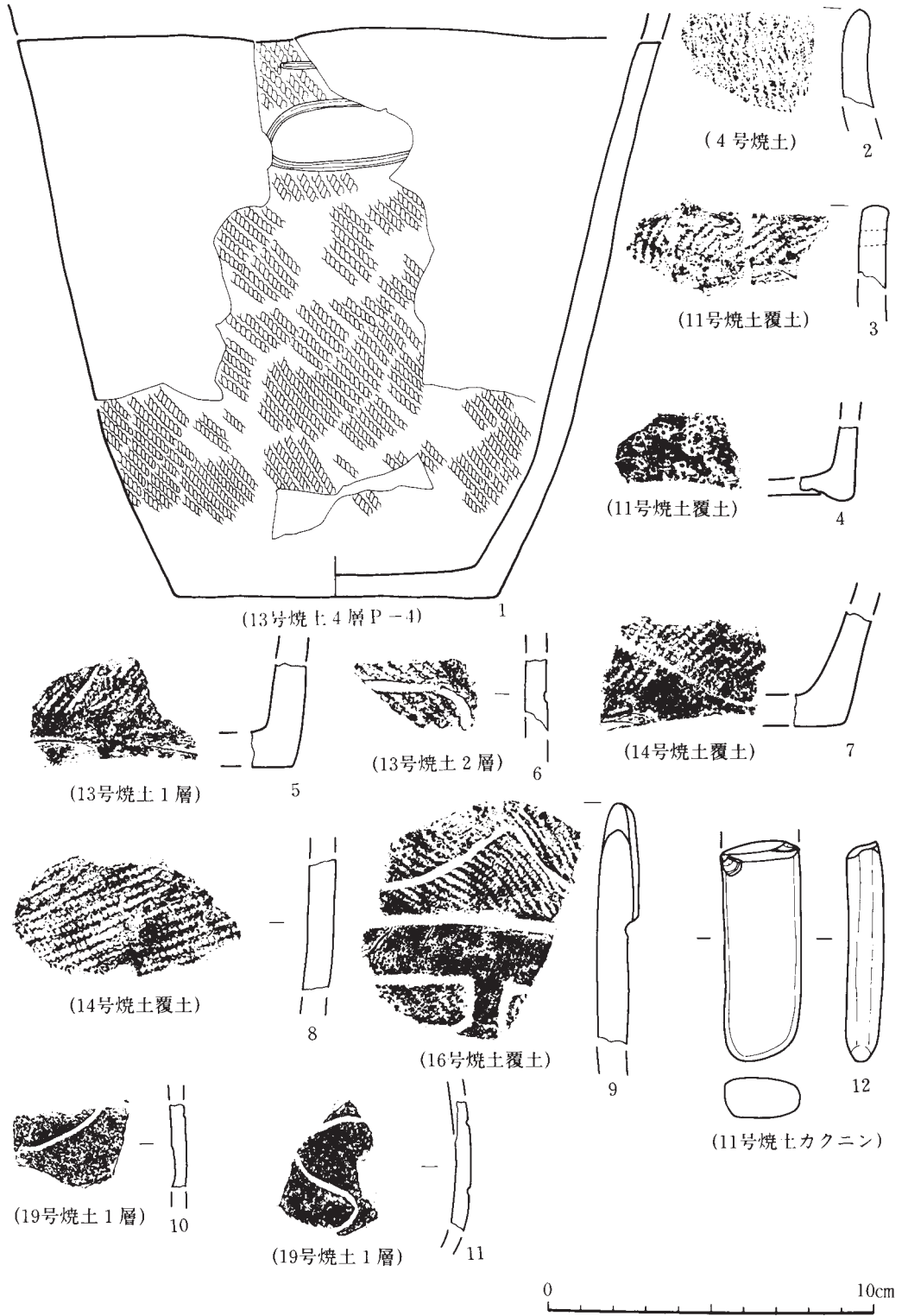
第16号焼土層注記
 第1層 黒褐色 (10 Y R 3%) 焼土粒・焼土ブロックを含み、ロームブロック混入
 第2層 黄褐色 (10 Y R 5%)

第18号焼土層注記
 第1層 赤褐色 (5 Y R 6%) 焼土層
 第2層 黒褐色 (10 Y R 3%) 焼土粒を含む

第19号焼土層注記
 第1層 暗褐色 (10 Y R 3%) 焼土粒・焼土ブロック・炭化物を含む



第108図 焼土状遺構実測図(3)



第109図 焼土状遺構出土遺物実測・拓影図

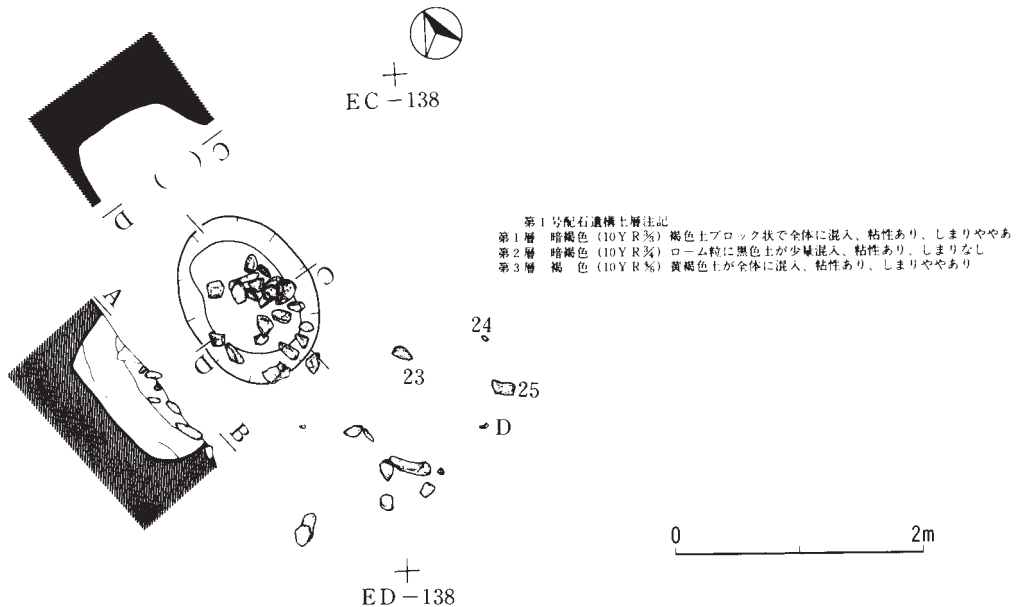
4 配石遺構

(1) 第1号配石遺構 (第110図、写真22)

位置・確認 調査地区のほぼ中央にある南東にひろがる台地は、南にも傾斜している。本遺構は、南斜面上部に位置するEC - 137グリッドの第 b 層上面において、不規則に配置されさ数個の自然礫とその下部に略円形の落ち込みを確認した。遺構の周辺には第1号住居跡、第7号焼土状遺構、第38~41号ピットなどが分布している。

形状・規模・重複 礫は、長径10~20数cmの川原石で、それらの礫はピット上面から覆土第1層中に20固埋まり、その最大径が100×85cmの楕円状をなしている。自然礫は、ピット上面のほかにも南側にも18個ばかり散在していたが、これはトラクターの深耕によって原位置から移動した礫とも考えられる。礫は、シルト質の1点を除く他は安山岩とみられるが、使用痕を有するものは含まれていない。自然礫群(集石部分)下部に構成されたピットは、開口部、坑底部とも南北方向に長軸のある楕円形で、長軸方向はN - 5度 - Wを示している。ピットの断面は、長短軸とも鍋底状である。ピットの規模は、開口部径140×104cm、坑底部径102×52cm、壁高(深さ)48~40cmである。ピットは、第 b 層から第 層に掘り込んで構築しているが、壁面、坑底面とも軟弱である。自然礫群(集石部分)がピット上部に埋まって、1セットの遺構を構成していることから、遺構の重複とは認め難い。

覆土・遺物 覆土は、自然礫を除き3層に区分した。第1層は暗褐色土、以下、暗褐色



第110図 第1号配石遺構実測図

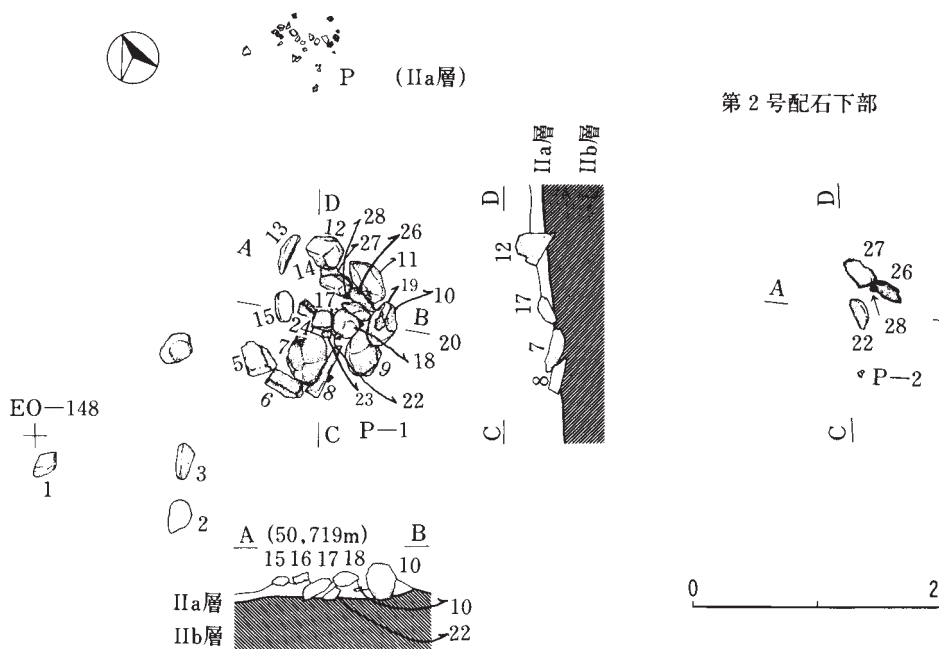
土、褐色土である。遺物は、自然礫以外出土していないため時期は不明であるが、遺構の周辺からは縄文後期土器片が出土している。 (野村、北林)

(2) 第2号配石遺構 (第111図写真22)

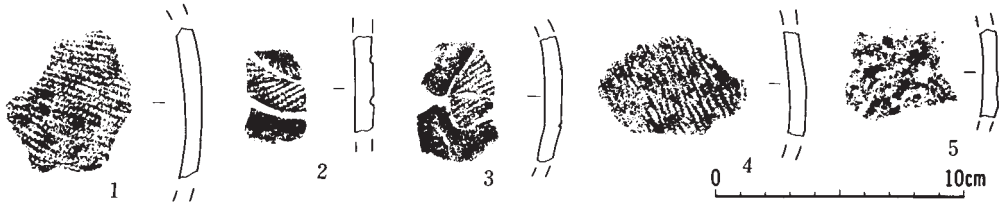
位置・確認 調査地区の南東側に位置するE N - 148グリッドの第 a層上面で礫が集石状に分布していることを確認した。この地点は、調査地区を横断している農道の南側にある傾斜地で山林となっていた。その標高は約50.6mである。本遺跡の周辺には第2、3、5～9号住居跡、第10～26、69号ピットなどが分布している。

形状・規模・重複 礫は長径5～48cmほどの自然礫で、計28個検出した。このうちの24個は、東西110cm、南北130cmの範囲に集中して集石場に重なり合った礫もある。残余の礫は、礫群(集石箇所)から最長距離で170cmほど西方に散在した。礫群は、外側に大きな礫、中央部に小礫を含めて配置したような形跡も認められる。礫のなかには長さ48cm、最大幅10cmの板状角礫が1個混在しているが(S - 8)この板状角礫を中央に立て、その他の礫で支えたような遺構とも考えられるが、礫群の下からピットのような施設は検出できなかった。

覆土・遺物 覆土は、特別なものは認められない。礫はすべて自然堆積した基本土層の第 a層で検出し、礫下部が第 b層に埋もれたものもあったからである。遺物は、礫群中から縄文土器の小破片が1点出土した。その他、縄文後期初頭の土器片が少量北側1.5mの地点から出土した。これらの土器は、本遺構に伴出したか否か、分らない(第112図)(鈴木、北林)



第111図 第2号配石遺構実測図



第112图 第2号配石遺構北側出土土器拓影图

5 埋設土器遺構 (113・114図)(写真23)

埋設土器遺構は、調査地区EC-147グリッドの第 b層で確認し、1基のみ検出した。

埋設土器は、器高26cmの深鉢形土器で、口縁部から上部は耕作のため欠損している。埋設の方法は正立埋設であるが、やや西側に傾いている。掘り方のプランは北側が張り出す不整形円形である。規模は、長径44cm、短径33cm深さ20cmである。土器内からは遺物が出土しなかった。

〔堆積土〕

1層 暗褐色(10YR $\frac{3}{4}$)炭化物少量、ローム粒若干含む。粘性、しまりややあり。(掘り方堆積土)

2層 褐色(10YR $\frac{4}{4}$)炭化物若干、ローム粒多量に含む。粘性、しまりあり。(掘り方堆積土)

3層 暗褐色(10YR $\frac{3}{4}$)ロームブロック、炭化物少量含む。粘性、しまりあり。(土器内堆積土)

4層 黒褐色(10YR $\frac{2}{2}$)炭化物多量、ローム粒若干含む。粘性あり、しまりなし。(土器内堆積土)

土器は粗製の深鉢形土器である。器外面には縄文(RL)を施文しており、底部部は横位方向にミガキをかけている。器内外面にはスス状の炭化物の付着がみられる。色調は褐色で焼成は不良である。

(小 結)

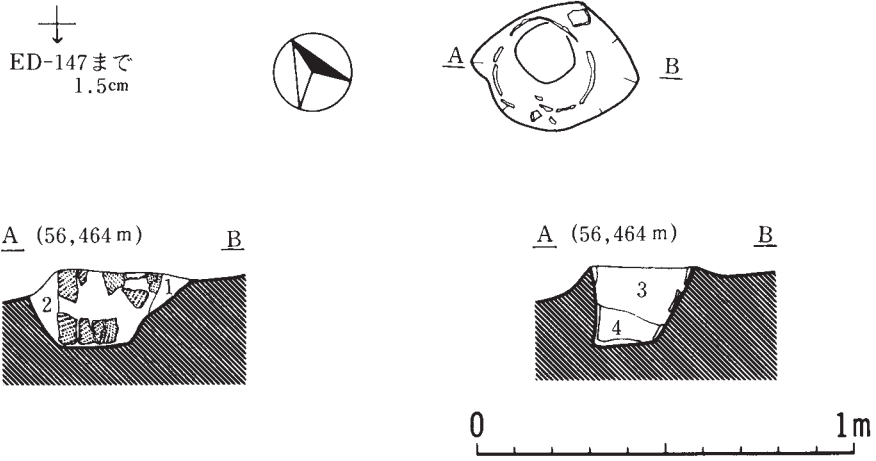
本遺跡から検出した埋設土器の時期は、縄文時代後期初頭～前半にかけて比定される。この時期に比定される埋設土器の本県での類例遺跡は、蛭沢遺跡(葛西:1979)・牛ヶ沢(3)遺跡(県埋文86集^{注(1)}:1984)・弥栄平(1)・大石平(1)遺跡(県埋文90集:1985)である。

検出した埋設土器には、埋設方法として第1に土器と掘り方の大きさをほぼ合わせて埋納しているもの蛭沢・弥栄平(1)遺跡と、第2に土壌内に埋設しているもの大石平(1)^{注(2)}遺跡と二通りの埋設方法がみられ、本遺跡の検出例は前者の埋設方法を用いている。

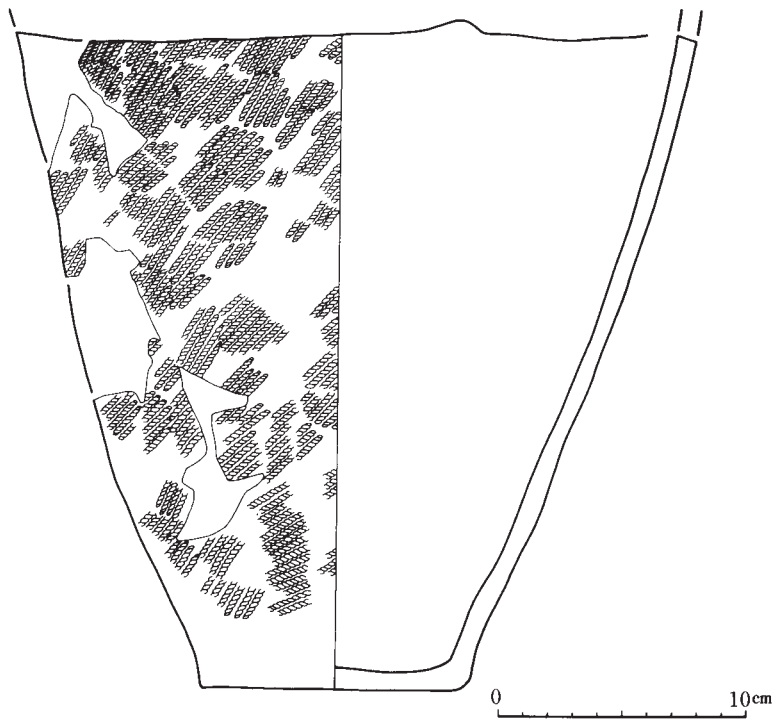
性格及び用途に関しては、蛭沢遺跡で小児用甕棺と考えられているが、本遺跡では土器内に他の遺物が出土しておらず性格及び用途に関しては不明である。一般に縄文時代後期初頭～前半にかけての時期は埋設土器の検出例は少ない。(成田滋彦)

注(1) 青森県埋蔵文化財調査センターが昭和59年度に発掘調査を行い、昭和60年度報告弥栄平(1) 県埋文98集。

注(2) 青森県埋蔵文化財調査センターが行なった第二次調査であり、縄文時代後期の土壌の上部から埋設土器が倒立状態で出土した。昭和60年度報告大石平(1)(2) 県埋文97集。



第113図 第1号埋設土器遺構実測図



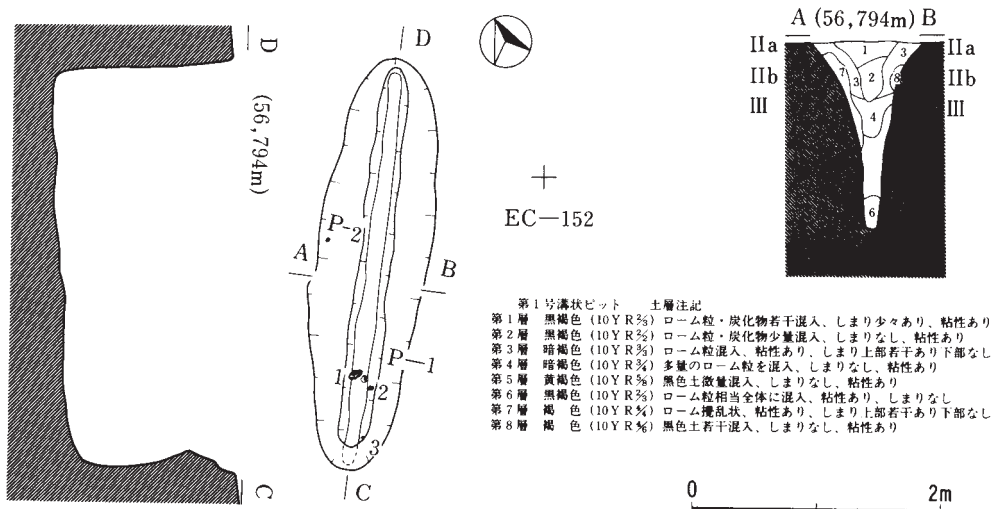
第114図 埋設土器遺構出土器実測図

6 溝状ピット

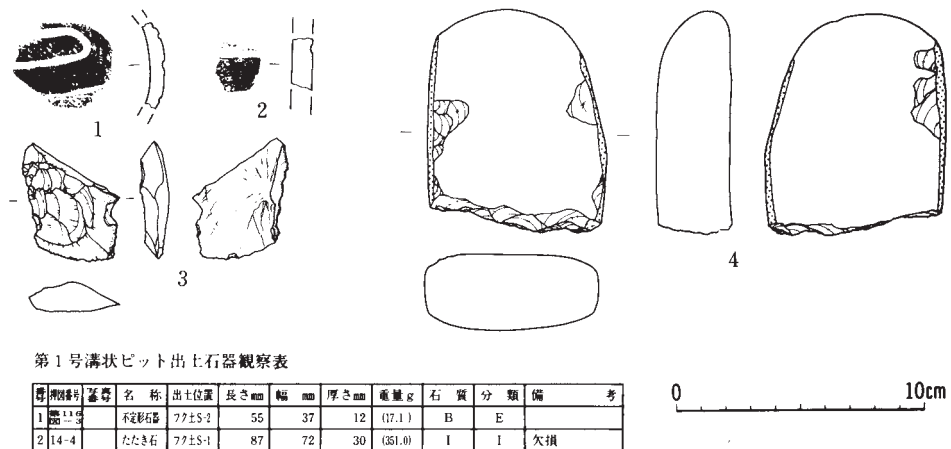
(1) 第1号溝状ピット(第115図、第12表、写真24)

位置・確認 調査地区中央の東側に位置するE B・E C - 151グリッドの第 a層で落ち込みを確認した。このグリッドの周辺は、圃場内でも比較の見通しの良い位置にある。その標高は56.7mである。本遺構の東側には第11~13号(現地番号以下同じ)ピットが、また、西から南側には第2、3号竪穴住居跡、第15~26号ピットなどが分布している。

形状・規模・重複 平面プランは、開口部、坑底部とも南北に細長い楕円形で、長軸方向はN-33度-Eである。長軸方向の断面は、不整な巾着状であるが、短軸方向の断面は、三昧



第115図 第1号溝状ピット実測図



第116図 第1号 溝状ピット出土遺物実測拓影図

線の撥を倒立させたような形状である。規模は、開口部長短径330×30cm、坑底部長短径316×13cm、壁高（深さ）135～150cmである。重複は認められなかった。

覆土・遺物 覆土は、8層に区分した。第1層は、黒褐色土、以下黒褐色土、暗褐色、暗褐色、黄褐色、黒褐色、褐色、褐色の堆積土が認められた。出土遺物は、確認面～第1層から縄文後期土器片1点、第2層からすり石1点がある。ほかに礫2点がある。出土状況からみて、これらの遺物は、いずれもピットの埋没過程で流入したものであろう(第116図)。

(成田悟、北林)

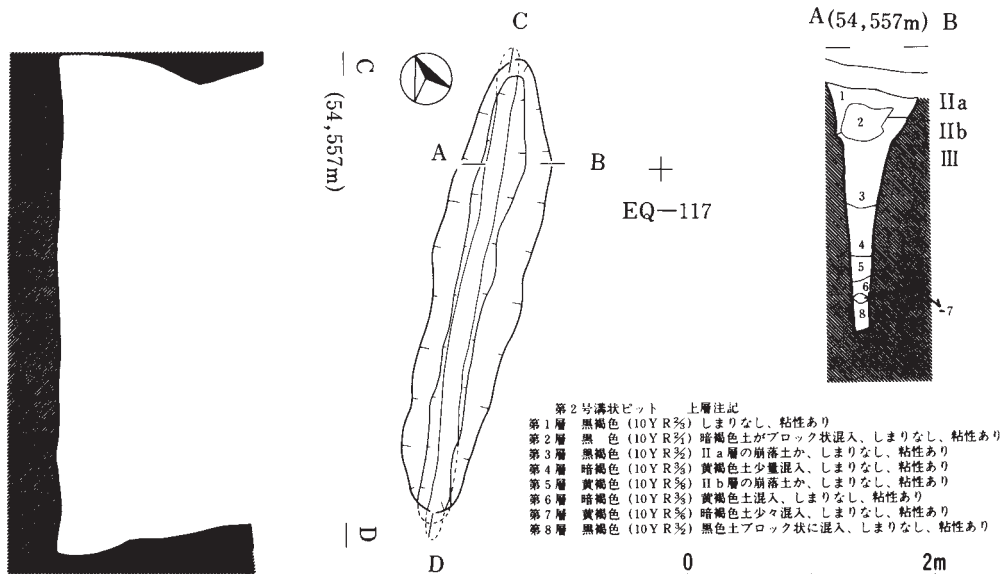
(2) 第2号溝状ピット(第117図、第12表、写真24)

位置・確認 本遺構は、調査地区の南西側に位置するE P・EQ-116グリッドの第a層で落ち込みを確認した。その標高は、54.4mで、溝状ピットのなかでは最も低い標高にある。本遺構の周辺には、遺構の分布はまったく認められない。最も至近距離にある第32号ピットまでの直線距離は約52mである。

形状・規模・重複 平面プランは、開口部、坑底部とも南北方向に細長い楕円形あるいは葉巻状を呈し、長軸方向はN-35度-Eである。長軸方向の断面は、不整な巾着状、また、短軸方向の断面は、三味線の撥状である。規模は、開口部長短径370×76cm、坑底部長短径410×16cm、壁高（深さ）154～164cmである。検出した溝状ピットのなかで、開口部と坑底部の長径は最大である。重複は、認められなかった。

覆土・遺物 覆土は、8層に区分した。第1層は、黒褐色土、以下黒褐色、暗褐色、暗褐色、黄褐色、暗褐色、黄褐色、黒褐色の順に堆積していた。遺物は、出土しなかった。

(野村、北林)



第117図 第2号溝状ピット実測図

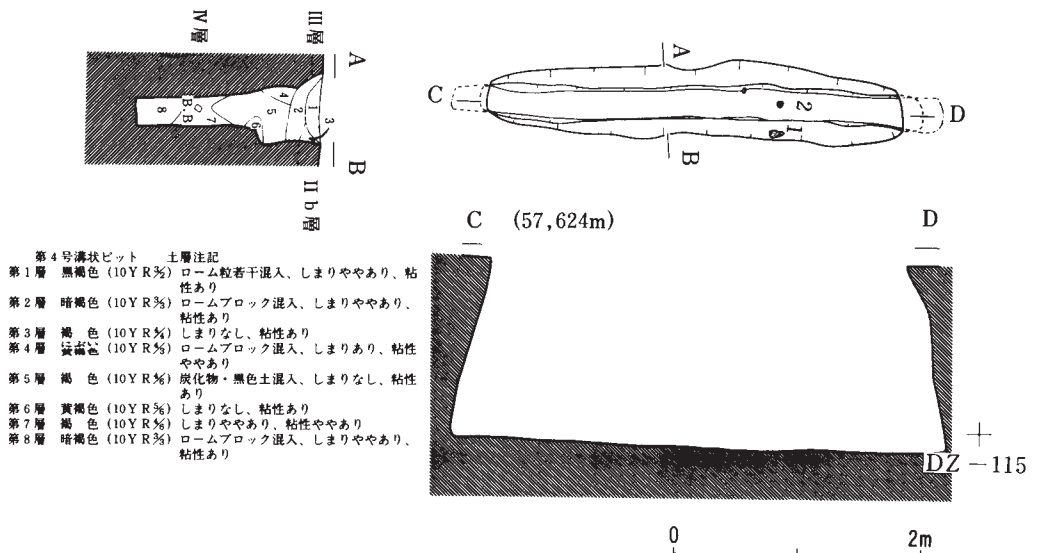
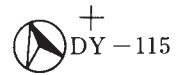
(3) 第4号溝状ピット (第118図、第12表、写真24)

位置・確認 本遺構は、調査地区西側に位置するDY - 114グリッドの第 b 層で落ち込みを確認した。その位置の標高は、57.5mで、西方約11mには第5号溝状ピットが、また、周辺には第60、61、66号ピットなどが分布している。

形状・規模・重複 平面プランは、開口部、坑底部とも東西方向に細長い隅丸長方形あるいは長楕円形で、長軸方向はN - 64度 - Wを示している。長軸方向の断面は梯形に類似しているが、短軸方向の断面は、不整な撥状である。規模は、開口部長短径335×60cm、坑底部長短径396×20cm、壁高(深さ)145~154cmである。他の遺構との重複は認められない。

覆土・遺物 覆土は、8層に区分した。第1層が黒褐色土、以下暗褐色、褐色、にぶい黄褐色、褐色、黄褐色、褐色、暗褐色の土層が認められた。遺物は、確認面と第1層のなかから縄文後期土器片1、礫1が出土した。これらの遺物は、その出土状況から本ピットがほぼ埋没した後に流出したものであろう。

(成田(滋)、北林)

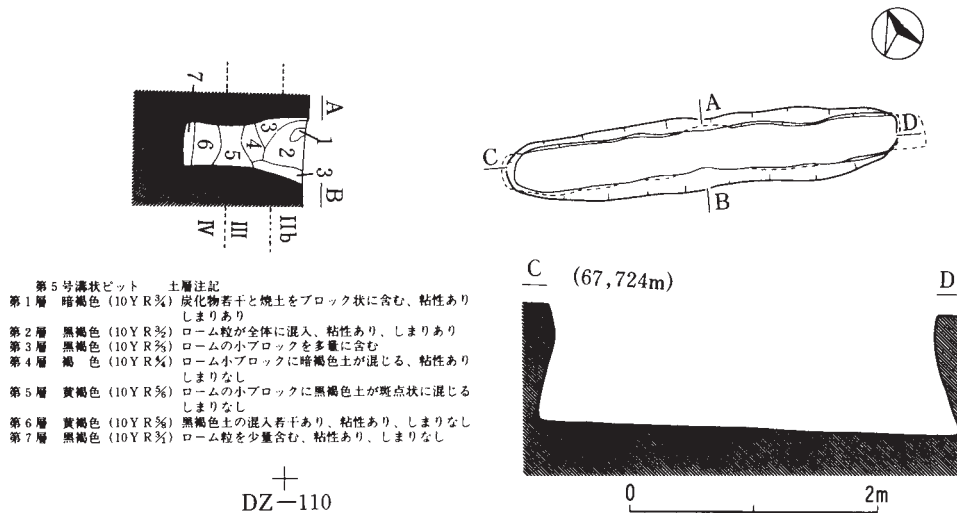


第118図 第4号溝状ピット実測図

(4) 第5号溝状ピット (第119図、第12表、写真24)

位置・確認 本遺構は、調査地区の西側に位置するDY - 110・111グリッドの第 b 層において落ち込みを確認した。およそ57.7mの標高に構築された溝状ピットで、東方には第4号溝状ピットがあるほか、周辺には第60、63、65、66号ピットなどが分布している。

形状・規模・重複 平面プランは、開口部、坑底部とも東西方向に細長い楕円形で、長軸方向はN - 70度 - Wである。長軸方向の断面は、不整な梯形であるが、短軸方向の断面は、



第119図 第5号溝状ピット実測図

不整な撥状である。規模は、開口部長短径315×62cm、坑底部長短径343×31cm、壁高（深さ）95～98cmである。検出した溝状ピットのなかでは壁高が最も低い（浅い）ピットである。遺構の重複は認められなかった。

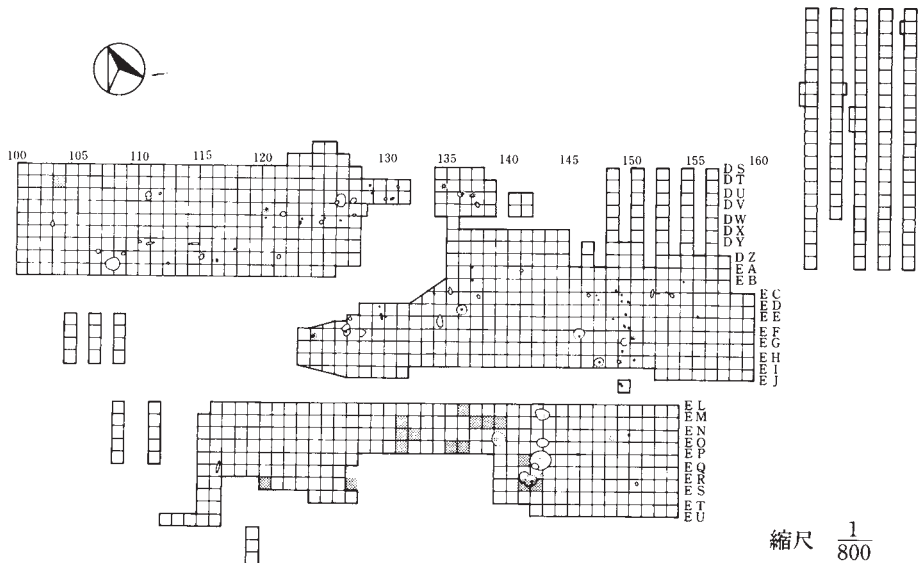
覆土・遺物 覆土は、7層に分けた。第1層は暗褐色土で、炭化物、焼土を若干含み、第2層以下は、黒褐色、黒褐色、褐色、黄褐色、黄褐色、黒褐色の土層が堆積していた。遺物は出土しなかった。
(成田(滋)北林)

第3節 遺構外出土遺物

縄文土器

第 群土器（縄文時代前期）第120～123図

第 群の土器の本遺跡からの出土は、復原可能土器3点・土器破片62片と少ない出土である。出土資料の施文の差異から3類に分類した。第 群土器の出土は、調査地区の南側の斜面に多く分布している。層位は a層と b層から多く出土しているが、南側地区の基本層序は a層と b層の層序の区別が非常に難しく層序の分離と出土土器との関係を把握することはできなかった。1～3類の出土土器の分布状況は、1類が全体に散布しており特にEM-131・ER-127のグリッドから多く出土した。2類はER-127グリッドに多く分布し、3類はEO-135・136グリッドに多く集中している。



第120図 第I・II群土器出土分布図

1類（撚糸圧痕文・縄文・羽状縄文を施文しているもの）1・3・4～23

撚糸圧痕文の土器は4・22である。(4)は口頸部の破片で、O段多条RLを施文後に弧状及び直線状に撚糸圧痕を施文し、(22)は撚糸圧痕を平行に施文している。縄文には、単節・複節・O段多条の原体を用いている。(1)は、器形が丸底を呈する深鉢形である。口唇部は平坦で▽状を呈し、内面の調整はやや荒い。文様は、O段多条LRの原体を用い回転方向を変えて 状の文様を施文している。O段多条の原体を使用している土器は、(5～8・10～14)の土器でLR・RLを使用し斜縄文を構成しているものと、羽状縄文(16～21・23)を施文しているものがみられる。

羽状縄文は、(16~18)の土器でLRとRLの2種の原体を使用するものと、1種の原体を用い回転方向を変えて 状・< 状に構成しており、結束のない羽状縄文である。(3)は、複節を施文している土器で、底部は丸底で、先端部に乳房状突起を有する深鉢形土器である。(9)は単節を施文している。本類は、0段多条の原体の使用頻度は高い。

2 類 (竹管文・ループ文を施文しているもの) 2・24~35

本類で全体の形状を知り得るものは2)の土器である。底辺部から口縁部にかけて外反する鉢形土器で、口唇部は平坦で 冂 状を呈する。文様は、半截竹管を用いており、口頸部文様帯には連続した山形文を構成し、下部に構位方向に10条の竹管文を施文している。竹管文は底面にも用いられている。本類の竹管文は、半截竹管が主体を占めるが、(31)は棒状工具を使用している。回転方向は時計回りが多いが、(29・35)は逆回りである。(26)は、口頸部に3条の竹管文を施文し、下部にループ文を施文しているものである。

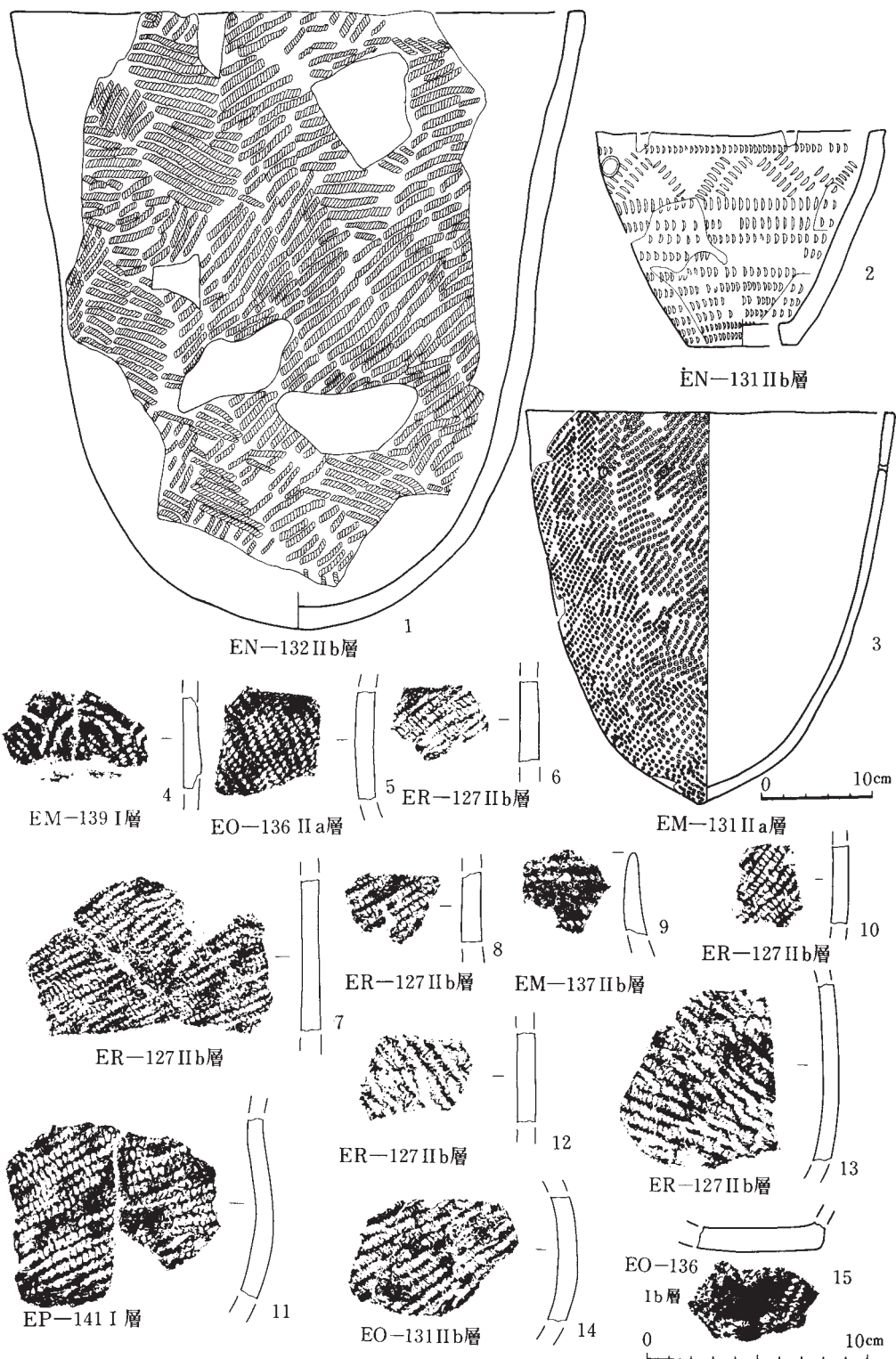
3 類 (綾絡文を用いて施文しているもの) 36~47

本類は、綾絡文を横位方向に施文しているものである。(36・37)は不整綾絡文であり、(40)は綾絡文の上位 字形の撚糸圧痕・(45・46)は綾絡文の間に馬蹄形の撚糸圧痕を連続に施文している。(47)は、底辺部の破片で、薄手の製作で平坦を呈し、底面に綾絡文を施文している。

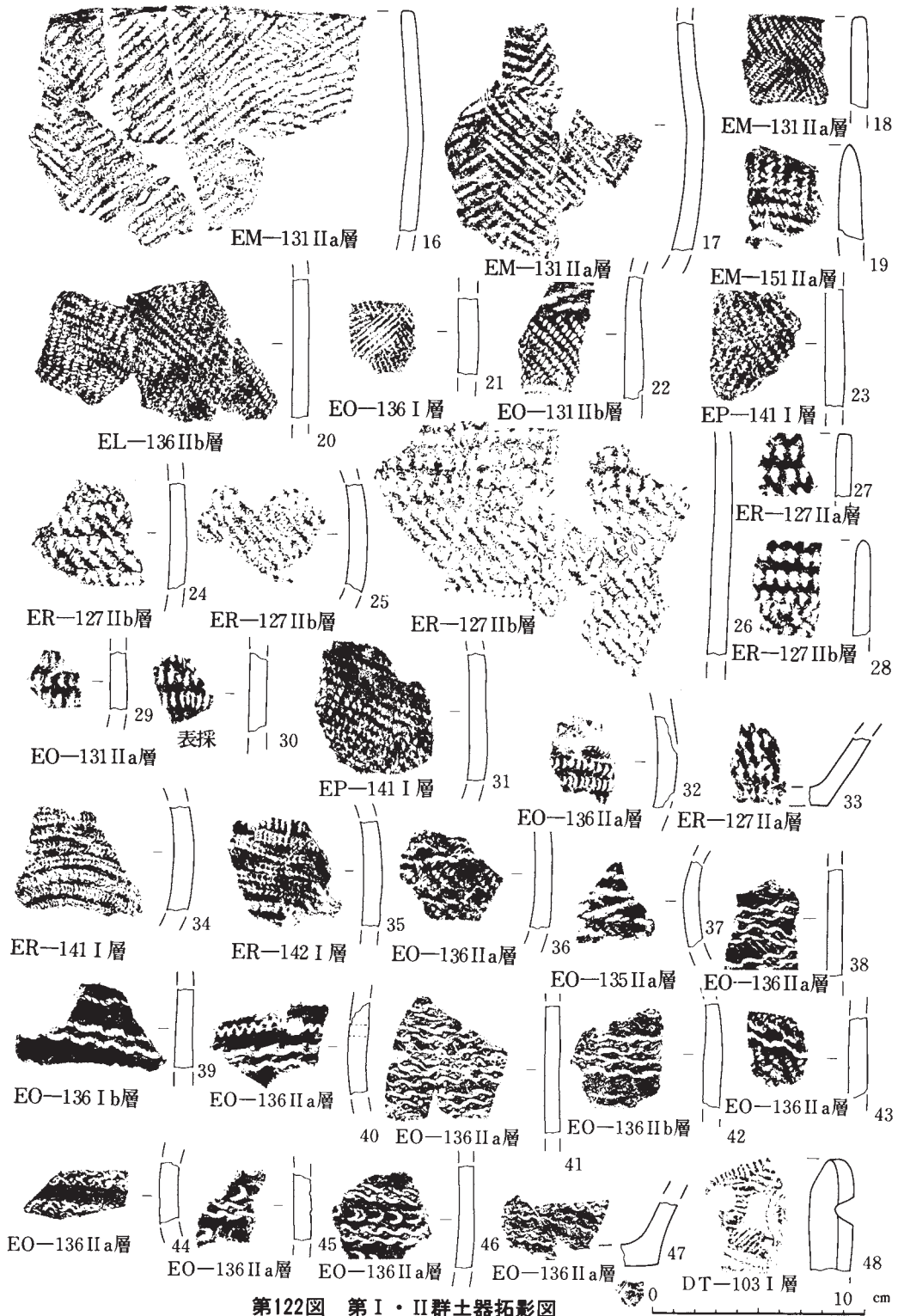
第 群土器 (縄文時代中期) 第122図 - 48

第 群土器は、調査地区の西側でDT - 103グリッドから1片出土したのみである。

器形は、波状口縁を呈する深鉢形土器と思われる。文様は粘土紐を用いて文様構成し、粘土紐の上面に縄文を施文している。また、口唇部寄りに貫通していない円形の小孔がみられる。



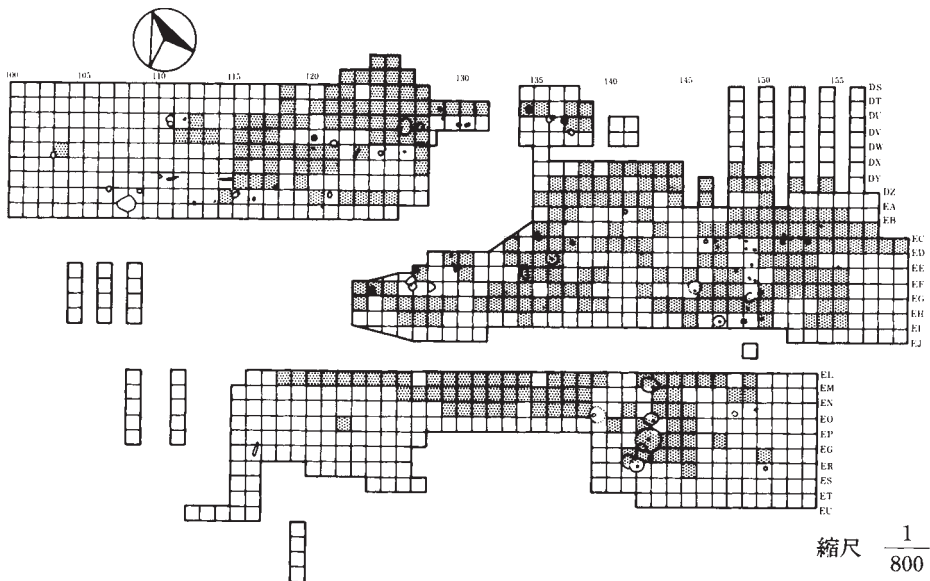
第121図 第I群土器実測・拓影図



第122圖 第I・II群土器拓影圖

第 群土器（縄文時代後期）第123～148図

第 群土器は、本遺跡の主体をなすものである。出土資料の土器施文の差異から1から10類と十類に分類した。第 群土器の出土分布は、調査地区の東、西側の地区を除き全体に散布している。特にDR～DVの122～128グリッド及びECラインから南側のグリッドから多くの土器が出土したが、防風林地に位置するために木根による攪乱が著しくプライマリーな出土状態を示していない。また、ECラインから北側のグリッドは、耕作のために遺物包含層は攪乱されてみられなかった。土器は、第 層から b層にかけての出土であるが、木根による影響で層位と出土土器との関係は把握することができなかった。



第123図 第Ⅲ群土器出土分布図

1類 コ状文様を基本としているもの(第124図 - 49～53、第125図 - 54～58、第133図 - 94～106
第134図～107～122)

完形及び一部欠損している土器(第124図 - 49～53・第125図 - 54～58)

本類は、深鉢形・鉢形・壺形・浅鉢形土器の器形がみられる。深鉢形の形状は、口頸部がくびれて内反し、口唇部寄りが外反する。口縁部は、(54)が平口縁を呈するが、他は波状口縁を呈しており、波状口縁を呈する土器が多い。口縁部の整形は、平坦に整形を行っており断面は□状を呈する。針形土器(50)は、底部から胴部にかけての部位であり、胴部下半がやや張り出す形状である。壺形土器(54・56)は、口頸部が内反し胴部下半が張り出すややずん胴形の形状で平口縁である。口唇部の整形は、深針形土器と類似している。浅鉢形(53)胴部下半に最大値をもち口唇部寄りが内反するずんぐりとした形状である。口唇部の整形は、()形で前記の器形

の口唇部整形と相違する。

文様区画帯は、口頸部文様区画帯と体部文様区画帯に二分されるが、浅鉢形の土器は区画帯が二分されていない。深鉢形土器の口頸部文様区画帯は、口唇部寄りに粘土帯を巡らして折り返し口縁を形成し、体部上半に帯縄文を巡らして区画帯を構成している。折り返し口縁部には、縄文を施文した後に横位の沈線を巡らしているもの(49)と、列点文と楕円形文様を組み合わせたもの(55)、縄文のみのも(57・58)がみられる。区画帯内部は、無文帯なもの(57)長方形文様を横位方向に展開(52・58)、波状口縁を中心として縦位に沈線を施文(49)、渦巻文様を施文(55)がみられる。体部文様区画帯は、体部下半に縄文を用いて区画帯を構成しており、区画帯の内部に更に縦位で区画を用いているもの(55)がみられる。文様は、長方形文(52)、□状文様が横位に展開するもの(49)▽状文様(55)を磨消縄文で施文している。鉢形土器(50)は、体部文様区画帯の下部のみの土器で、全体の文様構成は把握できないが、長方形文様が横位に展開すると思われる。壺形土器は、(54)が口頸部文様区画帯で横位の沈線、体部文様区画帯にやや蛇行ぎみのコ状文を施文している。(56)は長方形文様である。浅鉢形土器(53)は、口唇部寄りから胴部張り出し部に文様区画帯を構成しており、横位方向に展開する□状文様である。体部上半部と下半分に突起を有し貫通孔がみられる。この突起部は、壺形土器(54)にも付着している。

(55)・(58)の土器は、本類のコ状文様の類型からはずれる文様モチーフで、2種の渦巻文様に移行する際の過渡的な土器と思われる。

口縁部・体部破片のもの(第133図 - 94~106・第134図 - 107~122)

口縁部破片で折り返し口縁をもつものは、折り返し口縁部に横位の沈線を巡らすものが多い。特に波状口縁の波形部分には山形状に施文している(97・106)。また、(217)は刺突と長楕円形文の組み合わせである。その他の文様は、粘土紐を貼り付けた後に貫通孔がみられるもの(217)、ボタン状突起の貼り付けがみられるもの(100・102)があり、(102)はボタン状突起に刺突を施文している。文様は、コ状文様を基本としているが、(114・120)の土器のように斜位文様の土器もみられる。

2類 渦巻文様を基本としているもの(第126図 - 59~62・第127図 - 63~65・第128図 - 66~68
・第129図 - 69~74・第134図 - 126~135・第135図 - 136~149)

完形及び一部欠損している土器(第126図 - 59~62・第127図 - 63~65・第128図 - 66~68・第129図 - 69~74)

本類の器形は、深鉢形・鉢形・壺形土器と三つの器種があり深鉢形を主体とする。深鉢形は、口頸部が内反し口唇部寄りが外反する形状で、(59)を除き波状口縁を呈する。壺形土器(64・66)は、口頸部が強く内反し胴部下半が張り出し平口縁を有する。(66)は、4個の橋状把手と有している。鉢形土器(72)は、深鉢形の形状と類似している。

文様区画帯は、口頸部文様区画帯と体部文様区画帯に分離される。深鉢形土器は、口唇部寄りに粘土帯を巡らして折り返し口縁部を形成している。折り返し口縁部には、縄文を施文しているもの(59)、列点と長方形文を組み合わせたもの(62)、粘土紐と沈線を組み合わせたもの(61)、粘土紐を波状の突起下部に縦位に貼り付けているもの(63)などバラエティに富んでいる。一方、折り返し口縁をもたない(67・68)は、横位方向に粘土紐を貼り付けている。口頸部文様区画帯には、無文なもの(61・62)と区画帯内部に縦位方向の文様を施文するもの(63・65)があり、縦位文様は波状口縁の下部に縦位、他の部位に斜位文様を施文している。口頸部文様区画帯の文様は、粘土紐と磨消縄文とでは文様構成に差異がみられる。体部文様区画帯は、体部下半に横位の沈線を巡らして文様区画帯を構成している。区画帯の内部の文様は、卵形に近い渦巻文様を施文している。磨消縄文の土器は、文様区画帯の内部を磨消している例が多いが、(63)は、区画帯内部に縄文を充てんしている。粘土紐を用いている(61・62)の例は、口頸部文様帯と類似の文様を体部文様に用いているもの(67)と、交差状の粘土紐の間に渦巻文様を用いているものがみられる(68)。鉢形土器(72)は、口頸部文様帯が無文で体部文様が卵形の渦巻文様で深鉢形の体部文様と類似している。壺形土器は、口頸部文様帯に横位の粘土紐を巡らしており、その粘土紐に4個の橋状把手を有する。橋状把手には、縄文とボタン状貼り付けが施文されている。体部文様区画帯は、底部寄りに位置する(64)と胴部張り出し部に位置する(66)がある。体部文様は、磨消縄文の渦巻文様で、(66)は、右巻き、左巻きの渦巻文様を組み合わせたものである。

口縁部・体部破片のもの(第133図 - 123~125・第134図 - 126~135・第135図 - 136~149)

磨消縄文の土器は、文様が卵形にちかい渦巻文様が主体であるが、渦巻文様が円形に近いものもみられる(137・146)。また、渦巻文様内に円形の連続の刺突痕がみられるものもみられる(132)と(128・129)は、粘土紐を貼り付けているもので、細い粘土紐を用い上面に縄文を施文している。文様は、波状口縁に卵形文様を用いている。(136)は、無節を使用しているが本類での無節の使用例は少ない。

3 類 口縁部文様帯のみのもの(第136図 - 150~155・第137図 - 156~169・第138図 - 170~187・第139図 - 188~206・第140図 - 207~228・第141図 - 229~247・第142図 - 248~253)

a 折り返し口縁を有するもの(第136図 - 150~155・第137図 - 156~169・第138図 - 170~176)

折り返し口縁を有するものを一括として取り扱った。折り返し口縁部には縄文を施文している。(168・169)は、折り返し口縁部のみの土器であるが、他は折り返し口縁部の下位に一条の横位沈線を施文していることが多く特徴的である。形状は、口頸部が内反し口唇部寄りが外反する深鉢形土器が主体を占め口唇部の整形は平坦で断面形が冂状を呈する土器が多い。

口頸部文様帯は、無文帯のものが多いが、他に波状口縁から垂下する縦位文様(172・173)・帯縄文(156・157・159・162)、粘土紐を横位に貼り付けたもの(160)がみられる。

b 折り返し口縁部に横位の沈線を巡らしているもの。(第138図 - 177 ~ 187・第139図 - 188 ~ 196)

折り返し口縁部には、1ないし2条の沈線を巡らしている。折り返し口縁部の文様手順は、縄文 沈線という文様手順が主体を占めるが、無文帯 沈線のもの(177・179)。縄文 沈線 磨消(178・180・181)のものもみられる。(186)は、波状口縁部を一段盛りあげた所に貫通孔がみられる例である。形状・器形は、前記のaと同様に深鉢形が占める。文様は、無文帯・縦位が主体を占める。(177)は、縦位の渦巻文様を施文している。

c 折り返し口縁部の横位沈線がとぎれるもの。(第139図 - 197 ~ 206)

(198)の土器は、横位沈線の交差点が上下に施文しているものである。(199)は、波状口縁の頂部で横位沈線がとぎれ、その部分が盛りあがっている。(200~205)は、前記の盛りあがりの部分に短い粘土紐を縦位に貼り付けたもので沈線は粘土紐にそって頂部方向に施文している。粘土紐の貼り付けは、(206)にもみられ、頂部に刺突のあるボタン状突起を貼りつけている。形状は、口頸部が内反する深鉢形が主体を占め波状口縁を呈する。口頸部文様帯は、無文・帯 縄文・頂部から縦位に施文するものがみられる。

d 折り返し口縁部に長方形文様を施文するもの。(第140図 - 207 ~ 222)

折り返し口縁部に連続した長方形文様を施文し、長方形文様の間に文様がみられるものは、縦位の文様(214・215)である。列点状の刺突痕がみられる(216)は、刺突痕の下部にボタン状突起がみられる。(219)は、貼り付け部に横位の貫通孔がみられる。本類の土器は、波状口縁を呈する口唇部の頂端面を平坦に整形を行なっているものが多い。

e 粘土紐を多用しているもの。(第140図 - 223 ~ 228)(第141図 - 229 ~ 247)

折り返し口縁部及び口頸部文様帯に粘土紐を多様しているものである。(223・224)は、波状口縁の端部から縦位の粘土紐を貼り付け貫通孔がみられる。(224)は、波状口縁部下位に一条の粘土紐を貼り付けている。(225・226)は、波状口縁の下部に縦位の粘土紐を貼り付け、上面に連続した刺突痕を施文している。このような刺突痕は、口頸部文様帯にもみられ、粘土帯に連続して施文しているもの(227~230)もみられる。ボタン状突起は、波状口縁の折り返し口縁部の下位に貼り付けている例が多く、(237)は、波状口縁に2個対に貼り付けている。ボタン状突起は、上面に指頭と思われる凹みを有する(231~234)。細い粘土紐を用いて口頸部文様帯を構成しているものであり、粘土帯の上面が素文なもので、波状口縁部を中心に縦位に文様を構成しているもの(234)と、粘土紐の上面に縄文を施文し、刺突痕とボタン状突起を組み合わせている(231~233)ものがある。(240)は、形状から判断すると壺形土器を呈すると思われる。横位の粘土紐と沈線を組み合わせた文様で、口頸部のくびれ部に多く粘土紐を貼り付けている。(241~247)は、幅広い粘土帯を用い、口頸部文様帯に貼り付けているものである。前に

記載した細い粘土紐と様相を異にしており、別型式の可能性も考えられる。文様構成は、口頸部文様区画帯に横位を基本として弧状及び縦位に貼り付けており、粘土帯の縁には沈線を施文している。形状は、波状口縁を有する深鉢形土器で波状口縁が \square 形状を呈するものもみられる。

F 折り返し口縁を有さないもの(第142図 - 248 ~ 253)

磨消縄文を用いるものは、口頸部がくびれて内反し口唇部寄りが外反する形状で深鉢形が主体を占める。また、ゆるやかな波形の波状口縁を呈するものが多い。口頸部文様は、横位方向に展開する帯縄文を基本としている。帯縄文間に斜位文様を施文している(251)。器表面に沈線を施文している土器は、口頸部に横位沈線を施文し、沈線間に弧状(255)を施文している。沈線を施文している土器は、焼成は良好である。

4 類 体部文様帯のみのもの(第142図 - 254 ~ 266・第143図 - 267)

本類は、体部文様帯の土器を一括として取り扱った。

磨消縄文を用いる土器は、縦位及び斜位状の文様構成である。(259・260)は、磨消縄文と沈線間に刺突痕がみられる。(263)は、体部の張り出し部に突起を有し貫通孔がみられる。粘土紐を用いて施文する土器には、粘土紐の技法に二通りの方法がみられる。幅広い粘土帯を用い上面が平坦で縄文を施文している(267)と、細い粘土紐で断面が山形状を呈し素文のもの(264~266)があり、素文のものは、(67・68)の深鉢形土器の施文方法と類似している。

5 類 底部のみのもの(第143図 - 268 ~ 276)

本類は、底面に文様を施文しているものである。(268)は、底面の中央と周縁に円を描き中央の円に向かって斜位状の沈線を施文している。(269・276)は、底面に縄文を施文、(271~273)は網代痕・(274)は、木葉状の圧痕・(275・276)は、縦位及び擦痕がみられる。器形は、(268・275)を除き深鉢形土器の底部破片と思われる。

6 類 無文研磨土器(第144図 - 277 ~ 283)

無文研磨の土器は、遺跡内からの出土例は少ない。すべて口縁部破片であり残存部から器形を判断すると、口頸部の内反度が強い(277・278)は壺形、内反度が弱い(279)は深鉢形、口頸部がくびれず口唇部寄りに内反する(280・281)は鉢形を呈すると思われる。口唇部上面の整形は、(277)の上面が平坦で \square 状を呈し器厚が厚いのにに対して他の土器は、器厚が薄く口唇部の断面が \cap 形状を呈する。器内外面の調整は、内外面ともに横位調整が一般的であるが、(277)は裏面が縦位調整を行なっている。焼成は、(283)を除き一般に不良で褐色の色調のものが多い。

7 類 赤色顔料塗布土器(第144図 - 284 ~ 303)

赤色顔料塗布の土器は、口頸部と内反が強く胴部が張り出す形状から壺形の器形を呈するものが多い。赤色顔料の塗布は、器外面に多く特に沈線間に一部付着している程度である。(285)は器内面に塗布している例であるが器内面塗布の例は少ない。一般に焼成は良好でミガキをか

けている土器もみられる。また、(301)の土器は二次火熱を受け一部黒色に変色している。

粘土紐と沈線を組み合わせたもの(285～292)

粘土紐の貼り付けには、口頸部(286・287)や胴部張り出し部(289)に横位方向に貼り付けているもの、横位と縦位を組み合わせて文様区画帯を構成しているもの(284)、短い粘土紐を横位に貼り付けているもの(291)、魚眼状のモチーフのもの(290)がみられる。粘土紐の特徴としては、粘土帯の縁に沈線を施文しており、粘土紐の幅が狭く粘土紐を貼り付けた後に上面をプレスしていることが特徴的である。文様は、コ状文様を施文するものが多く、他に(○)形文様(284)と区画帯内部に渦巻文様(285)もみられる。(292)は、胴部張り出し部に突起を有し、突起部には器外面に接して長径7mmの貫通孔がある。この貫通孔は土器をつり下げる紐通し孔と思われる。

沈線を施文しているもの

沈線は、幅が長径7mmの幅の広いタイプと長径2mmの幅の狭い沈線とに分かれる。文様区画帯は、(296・297)が口頸部の下半にあり、(293)が胴部張り出し部に横位の沈線を巡らして区画帯を構成している。文様構成は、小破片が多く全体を把握できないが破片から判断すると縦位方向に展開する渦巻文様と思われる。

無文のもの(302・303)

形状は、口頸部がやや内反する壺形土器である。口唇部の整形は、()形で器厚が薄い。器内外面の調整は、外面が横位方向・内面が縦位方向の調整を行っており焼成は良好である。

8 類 燃系圧痕・縄文・絡条体を施文しているもの(第129図 - 75・76、第130図 - 77～81、第131図 - 82～85、第132図 - 86～89、第145図 - 304～332、第146図 - 333～359、第147図 - 360～380)

a 燃系圧痕を施文しているもの(第145図 - 304～312)

燃系圧痕は、器外面の口頸部のくびれ部や口唇部寄りに圧痕され、胴部及び底部には施文されず口頸部の一定の区画に限定される。燃系圧痕数は、1本のもの(304・305)、3本のもの(306～308)、4本のもの(309)がみられ、横位に巡らしており、3～4本のは等間隔に圧痕している。(309)は、地文にRLの縄文を施文後に圧痕し、(304・305)は無文帯と縄文の境に、(306・307)は、無文体に圧痕している。燃系圧痕の原体は、(309)がRLで他はすべてLRである。一方、地文縄文の原体は、(312)がLRで他はRLであり、燃系圧痕と地文縄文とでは原体使用を区別している。

形状は、口頸部が内反するものと、口頸部が外反するものの形状があり深鉢・鉢形を呈すると思われる。口唇部上面は、平坦で()形を呈する(304・305)と、指頭状による整形で波頭状を呈するものがみられる。器外面にスス状炭化物が付着しており焼成は不良である。

b 縄文を施文しているもの(第145図 - 313~332、第146図 - 333~359、第147図 - 360~370)
縄文を施文しているものは、折り返し口縁をもつものと、もたないものとに分かれる。

折り返し口縁をもつもの(第129図 - 76、第130図 - 77~80、第145図 - 313~332)

器形は、鉢形・深鉢形土器の2種の器形がみられる。鉢形土器(78)は、口頸部が外反し口唇部寄りが内反する。口唇部上面は、平坦に整形を行っており断面は口状を呈している。深鉢形は、(79)の口頸部がやや内反する形状で他の土器は口頸部が外反する形状である。口唇部の整形は、鉢形土器同様に平坦で口状形を呈する。

折り返し口縁は、一条の粘土帯を巡らして構成するが、段が明確なものと段が弱いものがある。折り返し口縁部には、縄文を施文するのは一般的であるが無文帯なもの(313~315)もみられ、体部にLR(313・314)、RL(315)の縄文を施文している。器表面に施文される縄文の原体は、各種の方法を用いて施文されている。折り返し口縁部と体部に同一の原体を用いるものは、無節Lを使用しているもの(338)、単節LR(319・320)、単節RL(321・323・324)であり、折り返し口縁部には横方向の回転、体部には斜・縦位回転で施文している。その他に2種の原体を用いるものは、折り返し口縁部にLR、体部にRLを施文するもの(80・325~329)と、折り返し口縁部にRL、体部にLRを施文するもの(77・330・332)がみられ回転方向は横位回転である。

縄文を施文しているもの(第130図 - 81、第131図 - 82~85、第132図 - 86~88)

縄文を施文しているものは、器形が深鉢形を呈するものが多い。形状は、口頸部の内反度が強いもの(81)と、口頸部の内反度が弱いものがあり、口頸部の内反度が弱い形状が主体を占める。口唇部の整形は、平坦で断面形が口状を呈するものが多い。(86)は断面形が∩形であるが量的に出土の割合は少ない。口縁は平口縁が主体を占めるが、ゆるやかな波形の波状口縁もみられる。器外面にスス状炭化物が多くみられ焼成は不良である。縄文の原体には、無節・単節・複節を使用しており単節の使用頻度は高い。

無節を使用しているもの(333~335)は、無節Lを用いて縦及び横回転を併用しているもののみみられる。

単節を使用しているもの

単節は、LRとRLを使用している。LRは横位方向に回転して斜行縄文を形成するもの(81・345~351)と、縦及び斜位方向に回転しているもの(337~338・340~343)がみられる。RLは、横位方向に回転しているもの(86・356・357・359)と、縦方向に回転しているもの(352~355)がみられる。口頸部の口唇部寄りには、結束の無い羽状縄文を施文している。この施文方法は、前期で記載した(折り返し口縁のもの)ものにみられた技法と類似している。LRを用いて回転方向を変えて羽状縄文を施文しているもの(84・360~369)、RLを用いて羽状縄文を

施文しているもの(364)、2種の原体を用いて羽状縄文を施文しているもので口唇部寄りにLR・体部にRLを施文しているもの(365~367)、口唇部寄りにRL、体部にLRを施文しているもの(83・368・369)がみられる。(363)は、口頸部を無文化している例である。LR・RLの使用の比率は明確に出していないが、本遺跡での使用はほぼ同程度の使用である。

複節を使用しているもの

複節の使用は、無節使用と同じく使用例は少ない。(370)の土器は斜行縄文の土器である。

C 網目状撚糸文を施文しているもの(第132図-89・第147図-371~380)

折り返し口縁をもつもの(371~376)

形状は、口頸部が内反し体部がやや張り出す深鉢形土器である。口唇部寄りには、幅1cmの粘土帯を巡らして折り返し口縁を呈する。口唇部の整形は、やや平坦に整形を行なっている。器外面には、網目状撚糸文を折り返し口縁部に横位方向・折り返し口縁部の下部に縦位方向に施文している。原体は、Lを使用しているもの(89)で、他はすべてRを用いている。器外面にはスス状炭化物の付着が多く焼成は不良である。

折り返し口縁をもたないもの(377~380)

形状及び口唇部の整形は、前記の折り返し口縁をもつ土器と似ている。網目状撚糸文は、口唇部から体部にかけて縦位方向に施文している。原体は、(89)はすべてRを用いている。器外面には、スス状炭化物の付着が多く焼成は不良である。

D 粘土帯を巡らしているもの(第129図-75)

形状は、口頸部がやや内反し体部下半が張り出す壺形土器である。口唇部は、平坦になでており断面が□状を呈する。文様施文の手順は、単節RLを用いて縦位方向に回転させ斜行縄文を施文後に胴部張り出し部のやや下位の位置に粘土帯を一条巡らしている。粘土帯は、上面を指頭でなでており、このなでは粘土帯の両脇及び底部寄りにも横位方向になでて調整を行なっている。底面には網代痕がみられる。器外面に黒斑がみられ焼成は良好である。

この様な文様構成を用いる土器は、本遺跡から1点出土したのみである。粘土帯の整形も他の粘土帯の技法と相違しており、北海道の余市式の粘土帯の技法と類似している面をもっている。このことから、余市式の影響を受けた土器ではないかと考えられる。

9類 切断蓋付土器(第132図-90~93)

切断蓋付土器は、遺構内から2点、遺構外から4点の形6点が出土している。ここでは、遺構外から出土した4点について記載する。

蓋部(90)

(90)は、切断面から口頸部にかけて内反し口縁部を欠損している。器外面には相対称して突起帯を有し、貫通孔がみられる。文様は突起部を囲む様に楕円形文様で2単位の文様構成であ

る。切断技法は、突きさしによって切り離しており、その際に生じた刻み痕を有する。器内外面には、赤色顔料を塗布している。

体部（91～93）

残存部位は、切断面から体部にかけて外反しており、(91)は小型の切断蓋付土器である。文様は、等間隔に横位に巡らした平行沈線のもの(91・93)と、縦位方向に蛇行する文様(92)を施文している。切断技法は、突きさしによる切り離し方法(92・93)とヘラ状工具による切り離し方法(91)の2種の切断方法を用いている。器内外面には、赤色顔料を塗布しており、(92)は二次火熱により黒色に変色している。

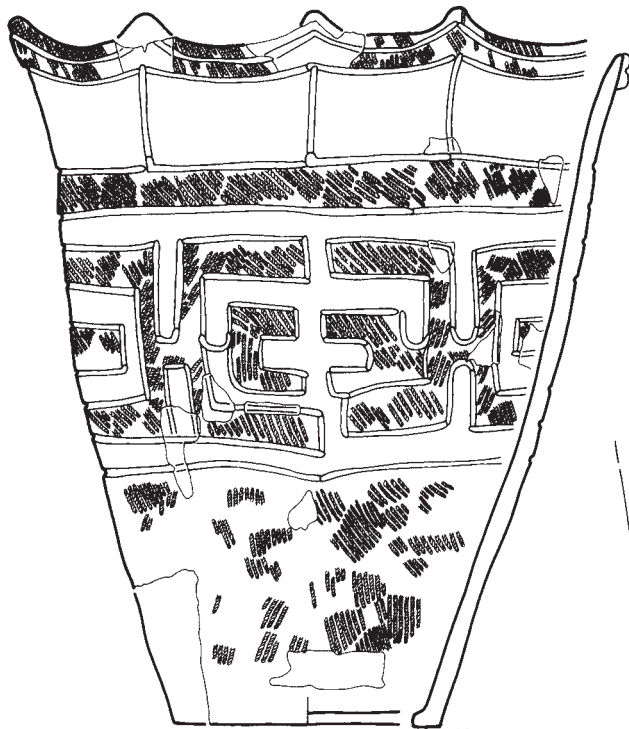
10類 縄文地に沈線を施文しているもの（第148図 - 381～398）

本類は、縄文地に沈線を施文しているものを一括として取り扱った。形状は、口頸部がやや内反する形状で、深鉢形が主体を占める。口縁は、平口縁(385・386)もみられるが、やや鋭利な波状を呈する波状口縁が多い。口唇部の整形は、平坦に整形を行っており、断面は口状を呈する。縄文地の使用原体は(396)が無節Lで、(386・392・393)が単節LRを使用し、他はRLを使用しており本類ではRLの使用が多い。

文様は、口唇部寄りに等間隔に2～3条の横位の沈線を巡らしており、波状口縁を有するものは、波形部は山形状の文様構成になる。様位沈線の下部には、渦巻が弱い縦位に蛇行する文様のもの(395～397)と、縦位・斜位を組み合わせたもの(398)がみられる。(397)は、波状口縁に短い粘土紐、下部にボタン状の粘土紐を貼り付けたものである。

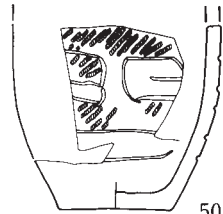
本類は、器厚が厚く色調が褐色をなしていることが特徴的である。

（成田滋彦）



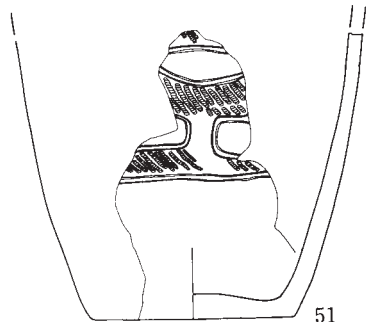
(DW-124 II a層)
 口径 33.1cm
 器高 37.8cm
 底径 (14.2)cm

49



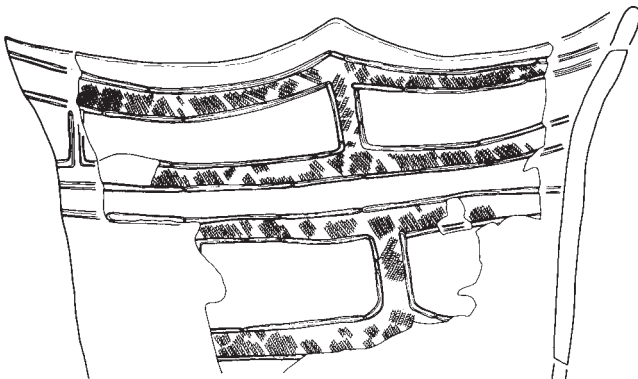
(DT-216 II a層)
 器高 (9.8)cm
 底径 (6.0)cm

50



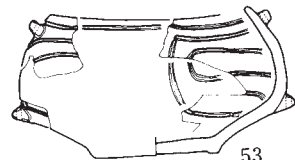
(ED-135 II a層)
 器高 (15.3)cm
 底径 (10.7)cm

51



(ED-135 II a層)
 口径 (33.9)cm
 器高 (20.0)cm

52

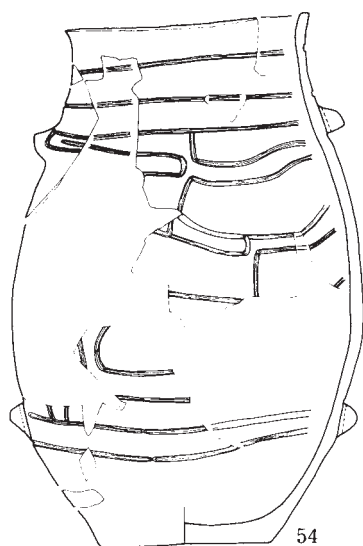


(DS-126 I b層)
 口径 10.6cm
 器高 7.2cm
 底径 6.6cm

53

第124図 第III群土器実測図(1)





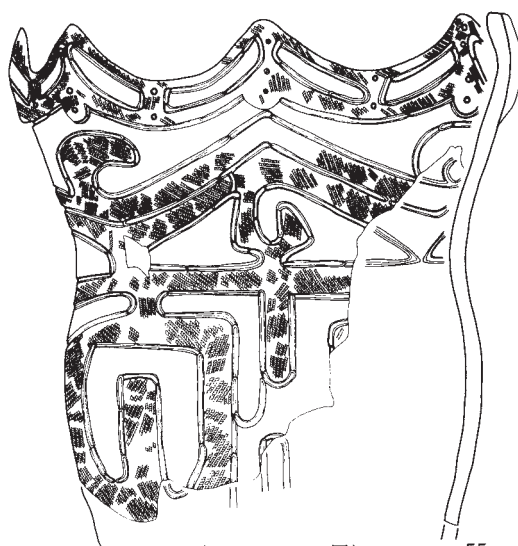
54

(EG-142・144IIb層)

口径 13.0cm

器高 27.5cm

底径 9.0cm

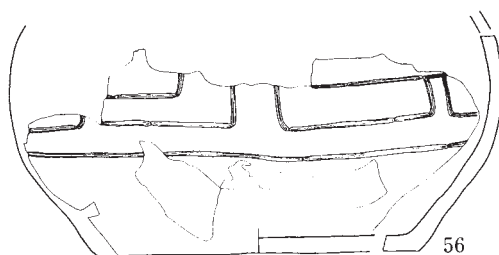


55

(DT-126IIa層)

口径 (25.8)cm

器高 (28.0)cm

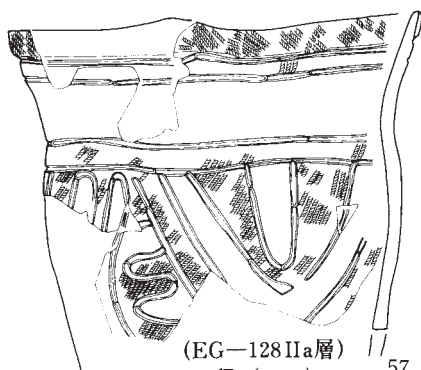


56

(DS-124I b層)

器高 (9.0)cm

底径 (17.0)cm

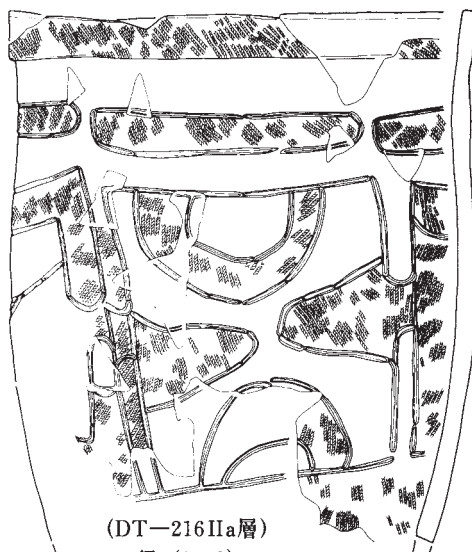


57

(EG-128IIa層)

口径 (22.0)cm

器高 (18.2)cm



58

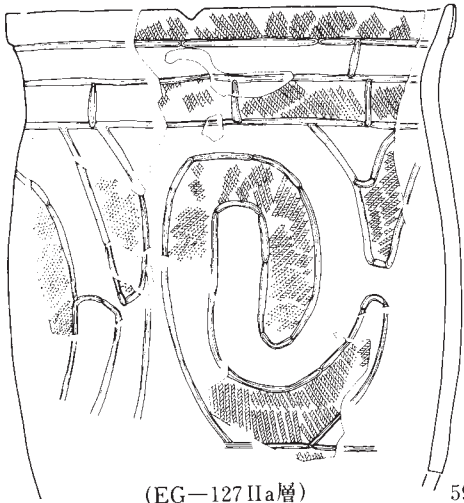
(DT-216IIa層)

口径 (25.0)cm

器高 (28.8)cm

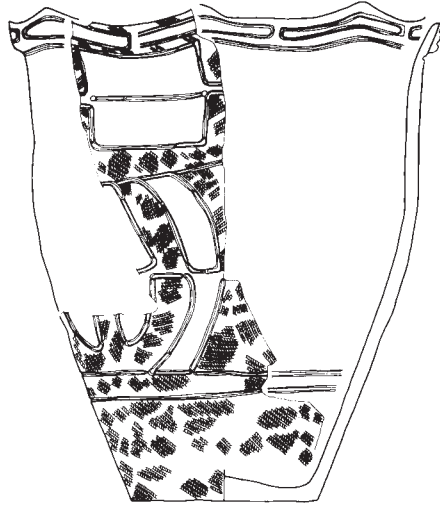
第125図 第三群土器実測図(2)





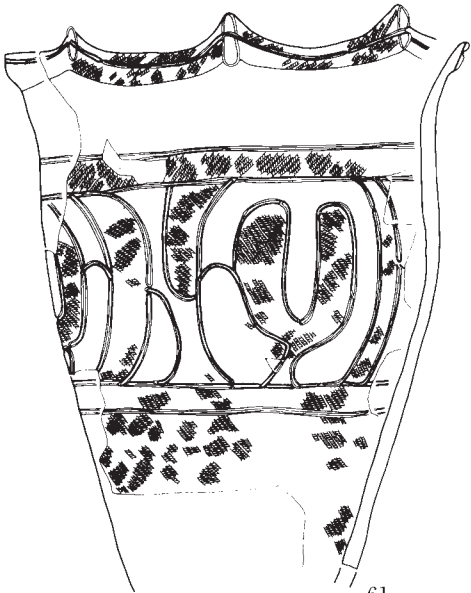
(EG-127 IIa層)
 口径 (24.0) cm
 器高 (26.0) cm

59



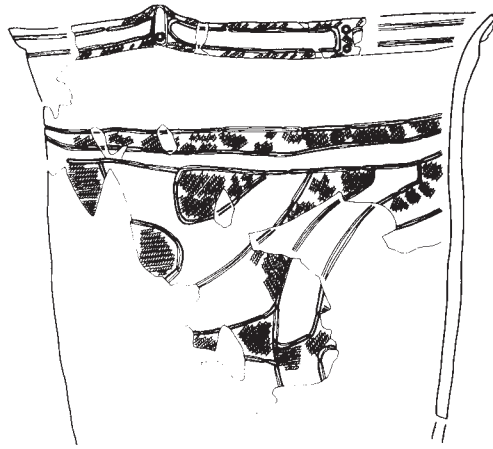
(EG-127 IIa層)
 口径 23.0 cm
 器高 25.7 cm
 底径 10.0 cm

60



(EE-149 IIa層)
 口径 24.7 cm
 器高 29.7 cm

61

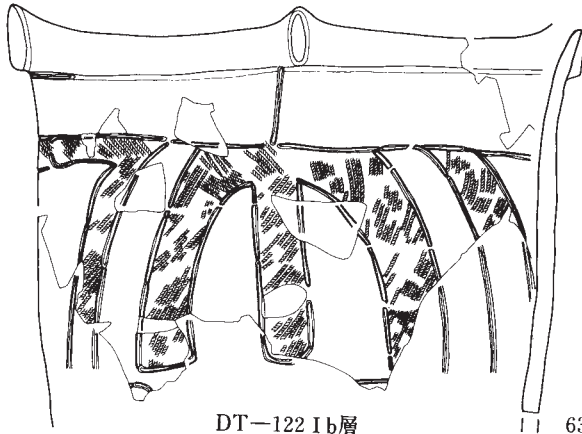


(DV-127 IIa層)
 口径 (25.8) cm
 器高 (21.2) cm

62

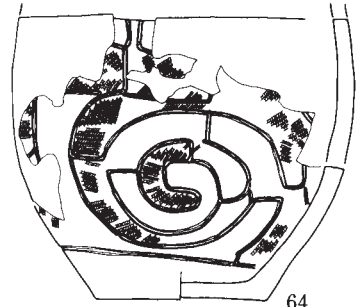
第126图 第三群土器実測図(3)





DT-122 Ib層
口径 (30.6)cm
器高 (22.5)cm

63



(EK-142 IIa層)
器高 (15.0)cm
底径 8.9cm

64

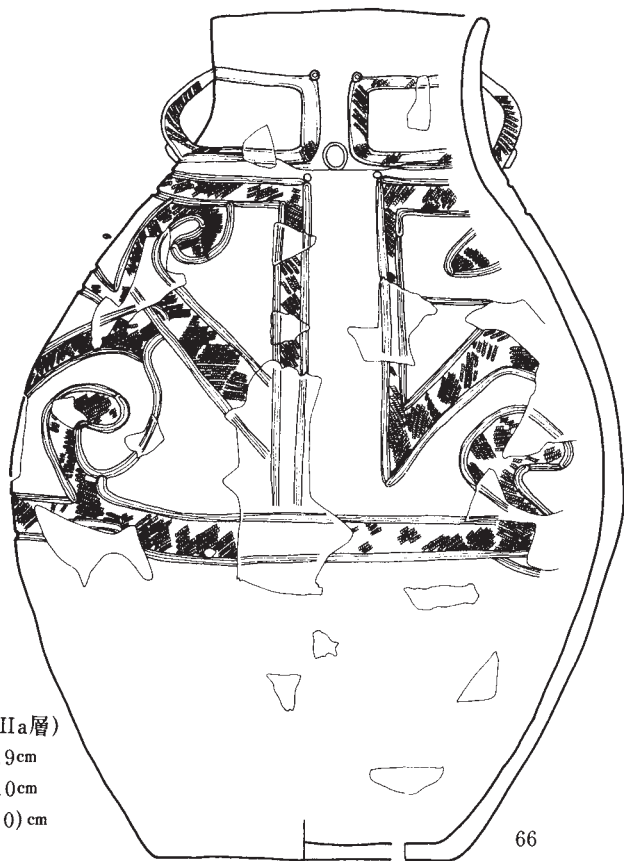


(DW-123 IIa層)
口径 41.8cm
器高 (51.8)cm

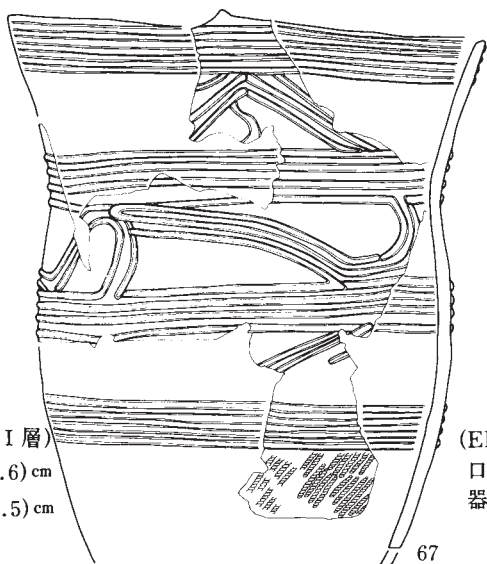
65



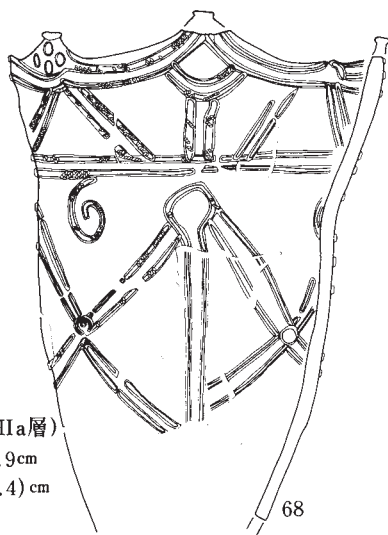
第127図 第Ⅲ群土器実測図(4)



(DT-126 IIa層)
 口径 14.9cm
 器高 45.0cm
 底径 (16.0)cm



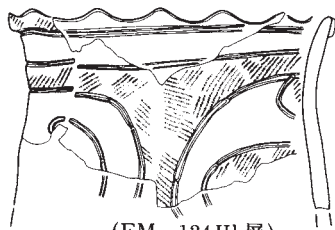
(EN145・
 EQ-142 I層)
 口径 (25.6)cm
 器高 (28.5)cm



(ED-144 IIa層)
 口径 19.9cm
 器高 (27.4)cm

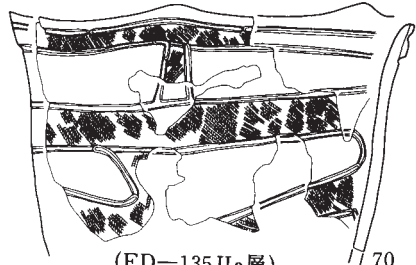


第128図 第三群土器実測図(5)



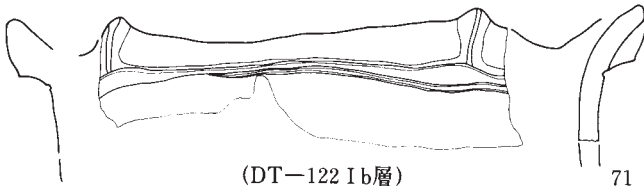
(EM-124 IIb層)
口径 17.4cm
器高 (11.5)cm

69



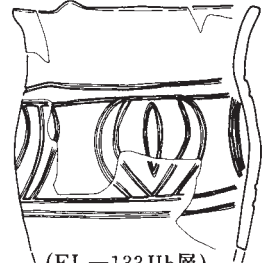
(ED-135 IIa層)
口径 (21.5)cm
器高 (12.4)cm

70



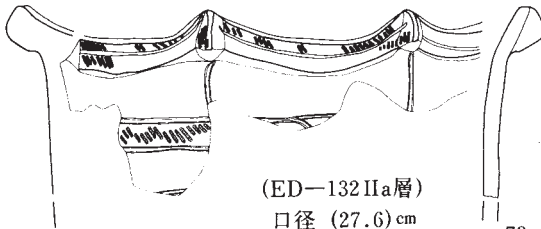
(DT-122 I b層)
口径 (34.0)cm
器高 (7.5)cm

71



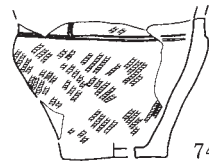
(EL-133 IIb層)
口径 (13.1)cm
器高 (13.5)cm

72



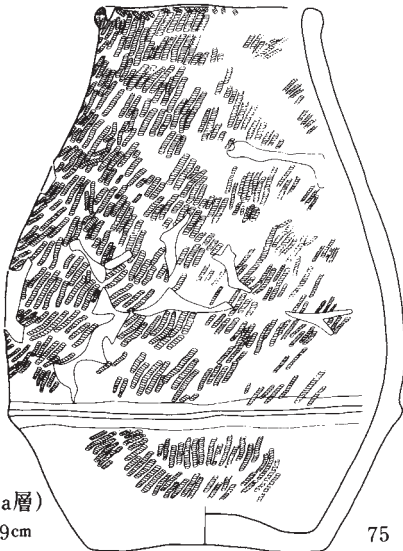
(ED-132 IIa層)
口径 (27.6)cm
器高 (11.3)cm

73



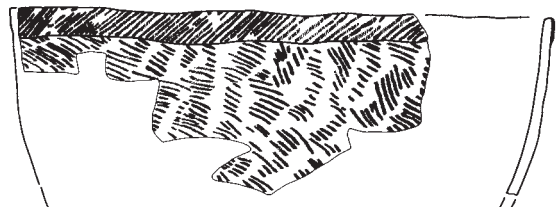
(EM-133 IIa層)
器高 (7.1)cm
底径 (5.6)cm

74



(DT-125 IIa層)
口径 11.9cm
器高 28.1cm
底径 12.0cm

75

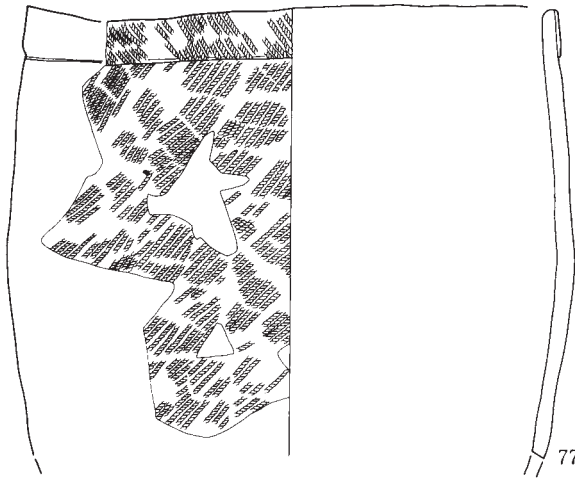


(EL-121 I層)
口径 (28.9)cm
器高 (10.8)cm

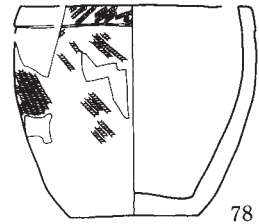
76

第129图 第III群土器実測図(6)

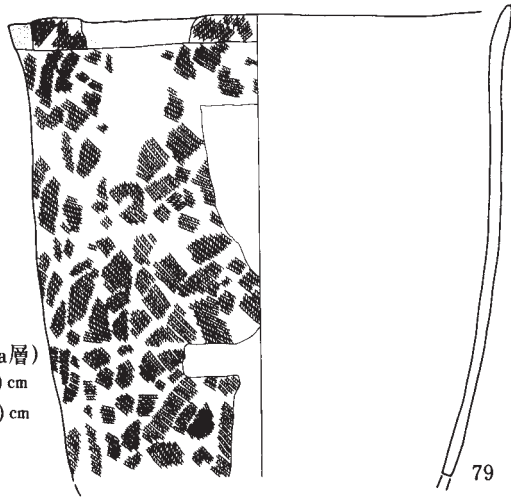




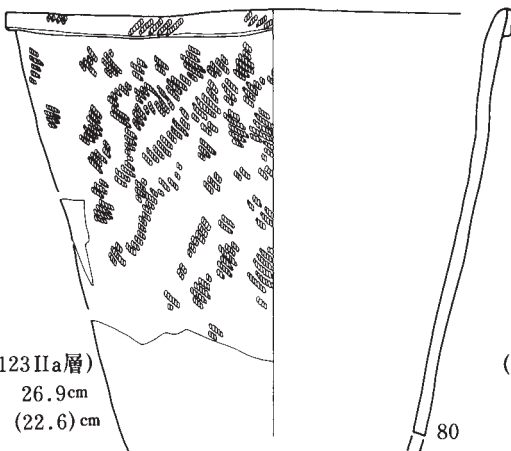
(DW-123 II a 層)
口径 (28.1) cm
器高 (24.7) cm



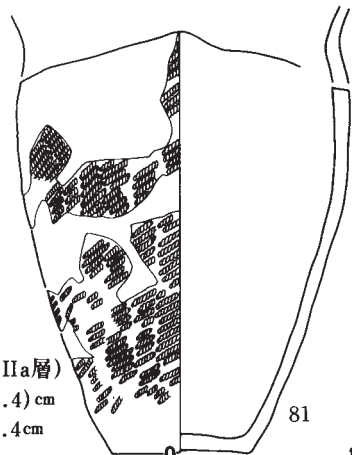
(EG-126 I b 層)
口径 12.1 cm
器高 11.1 cm
底径 6.8 cm



(DT-124 · 125 · 126 II a 層)
口径 (27.1) cm
器高 (23.2) cm

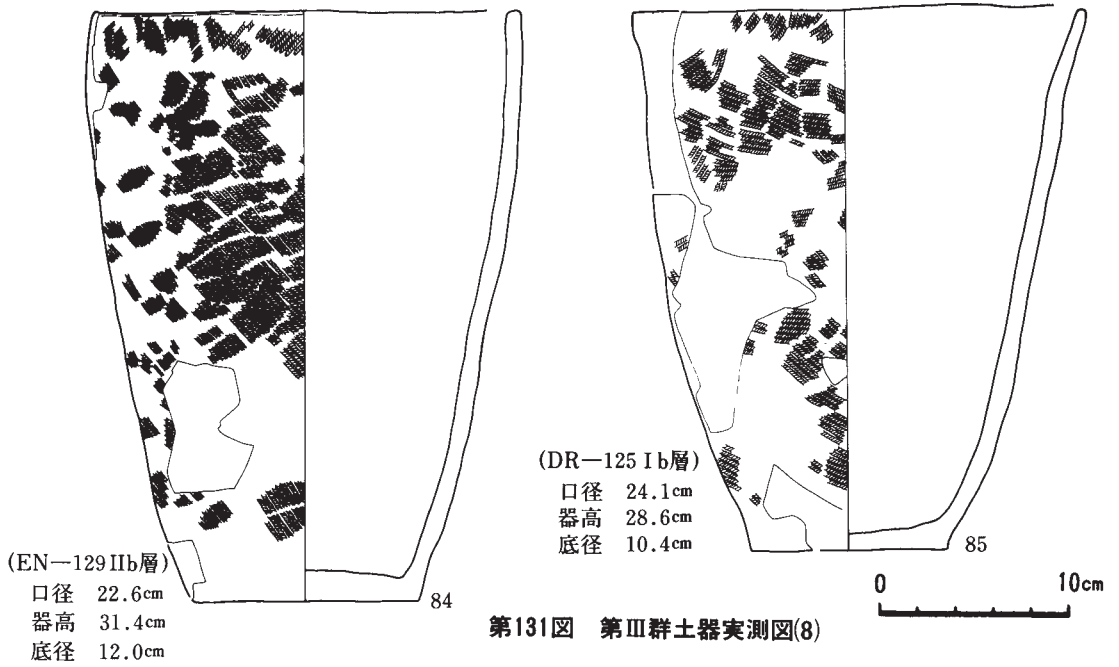
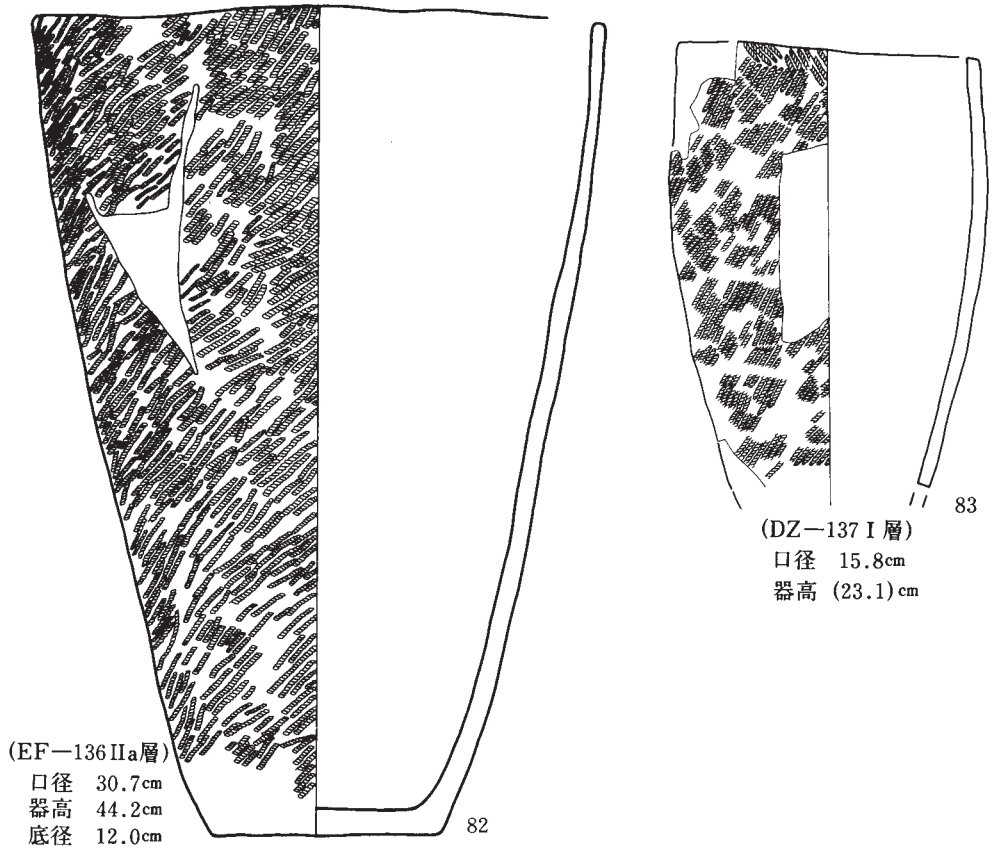


(DS-123 II a 層)
口径 26.9 cm
器高 (22.6) cm

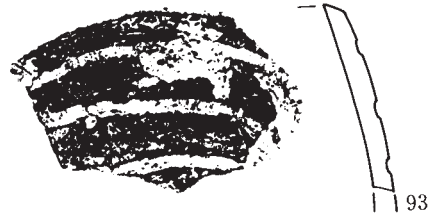
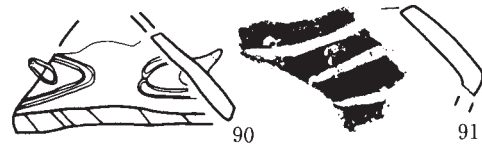
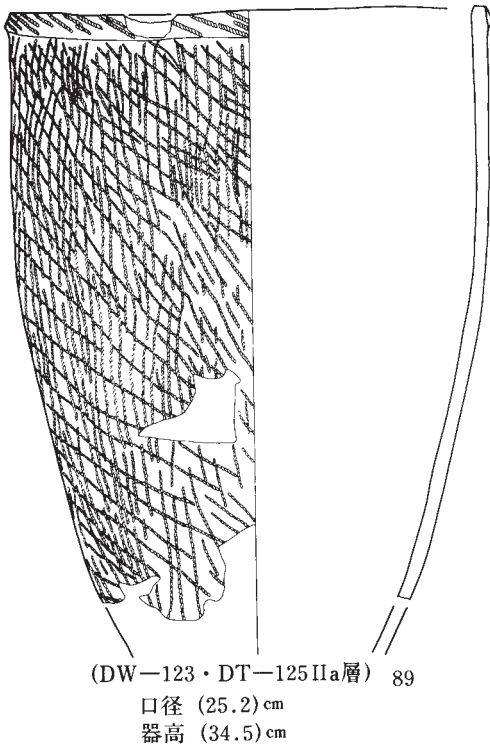
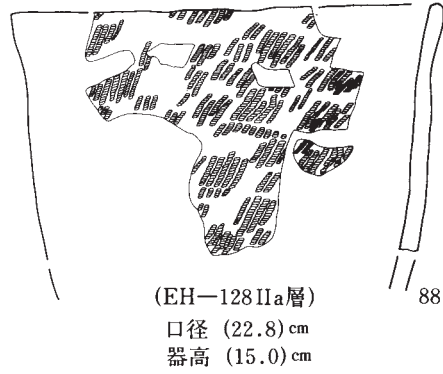
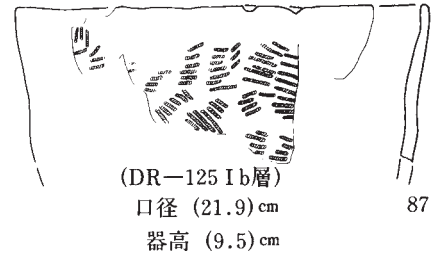
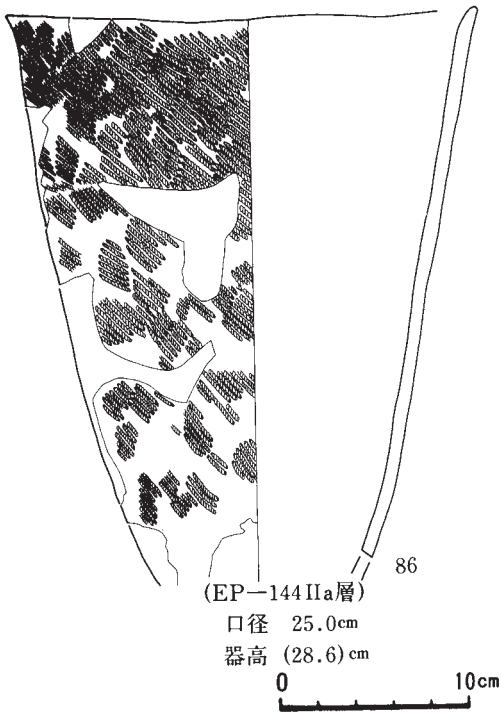


(EK-142 II a 層)
器高 (22.4) cm
底径 7.4 cm

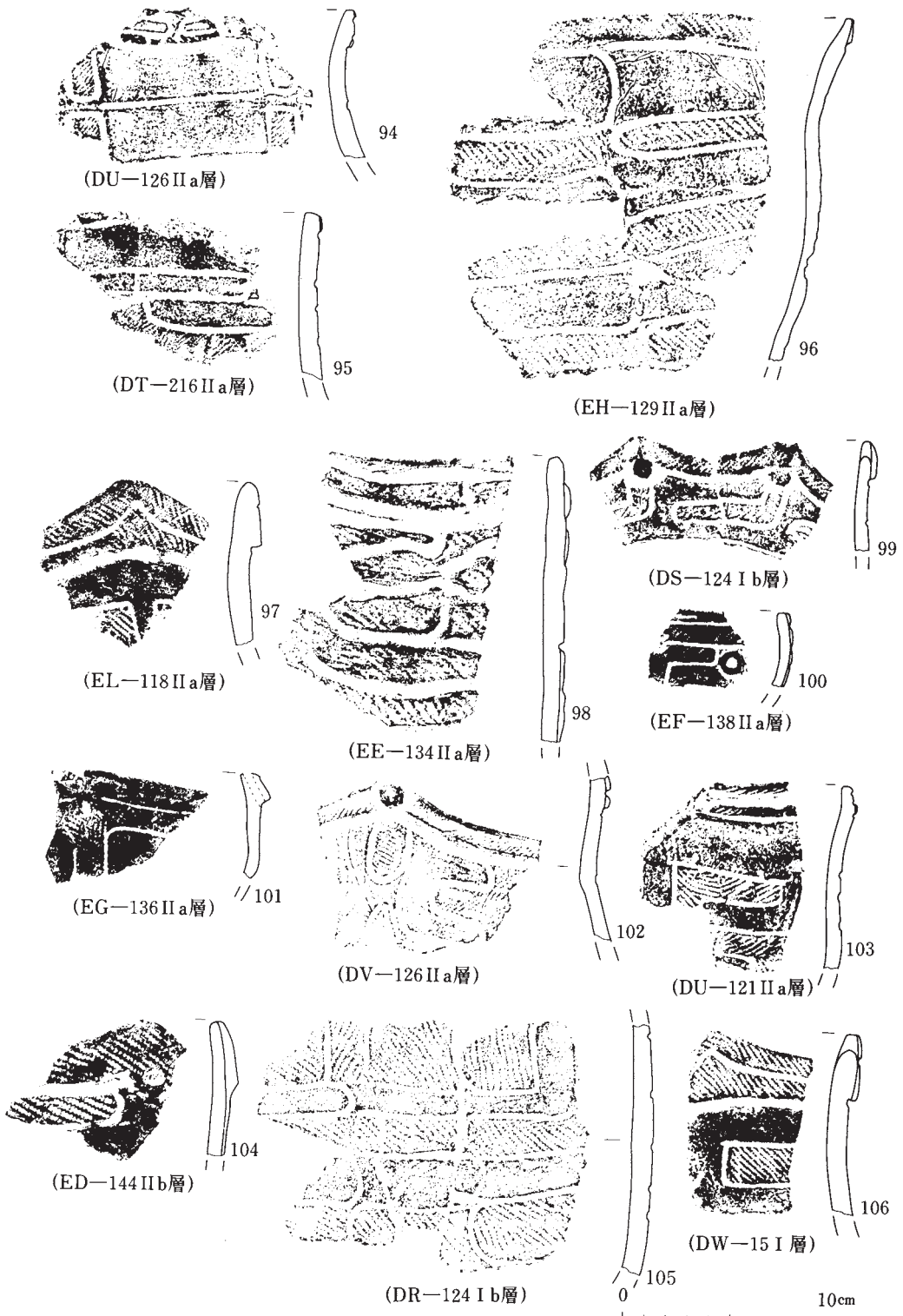
第130図 第III群土器実測図(7)



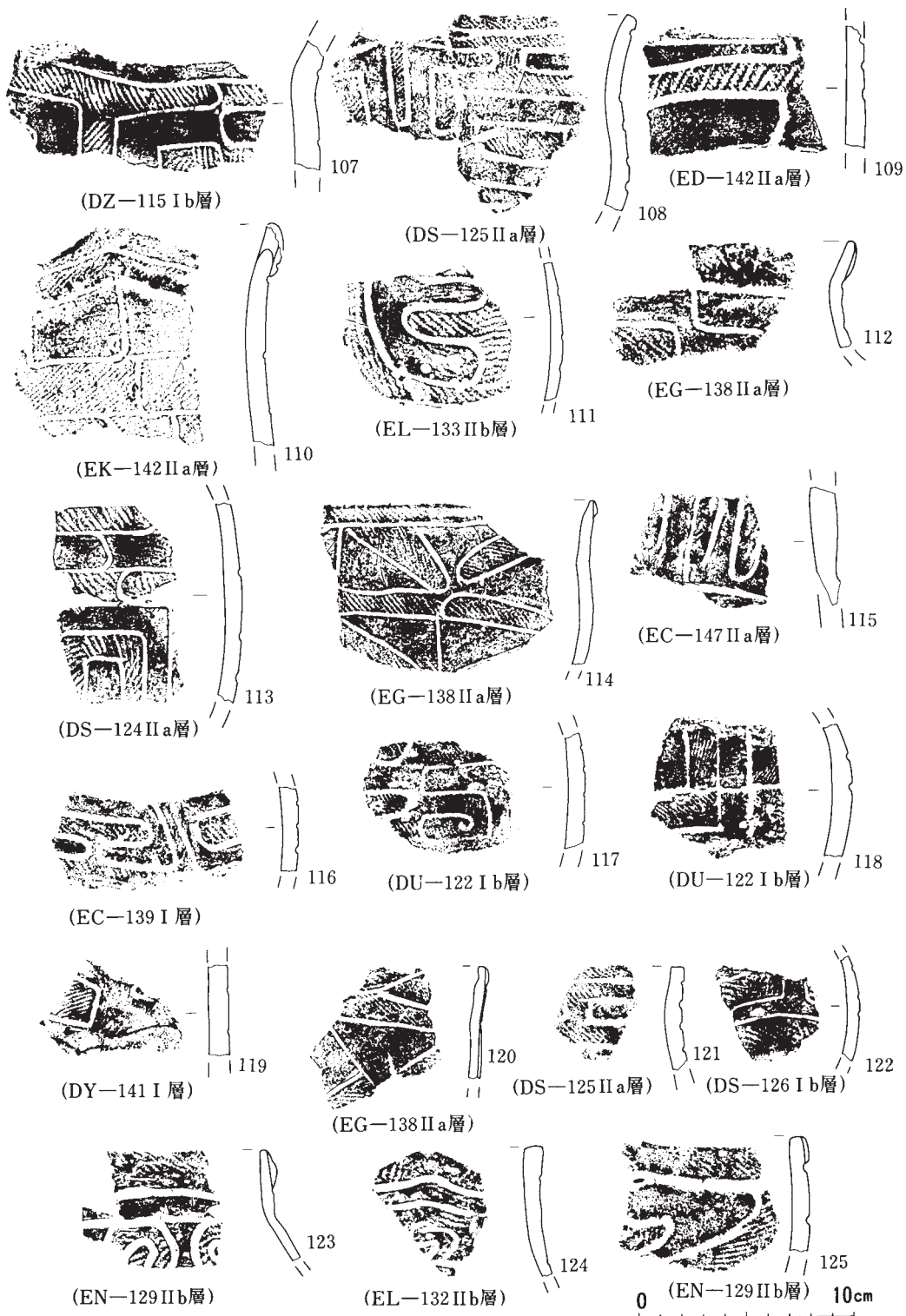
第131図 第三群土器実測図(8)



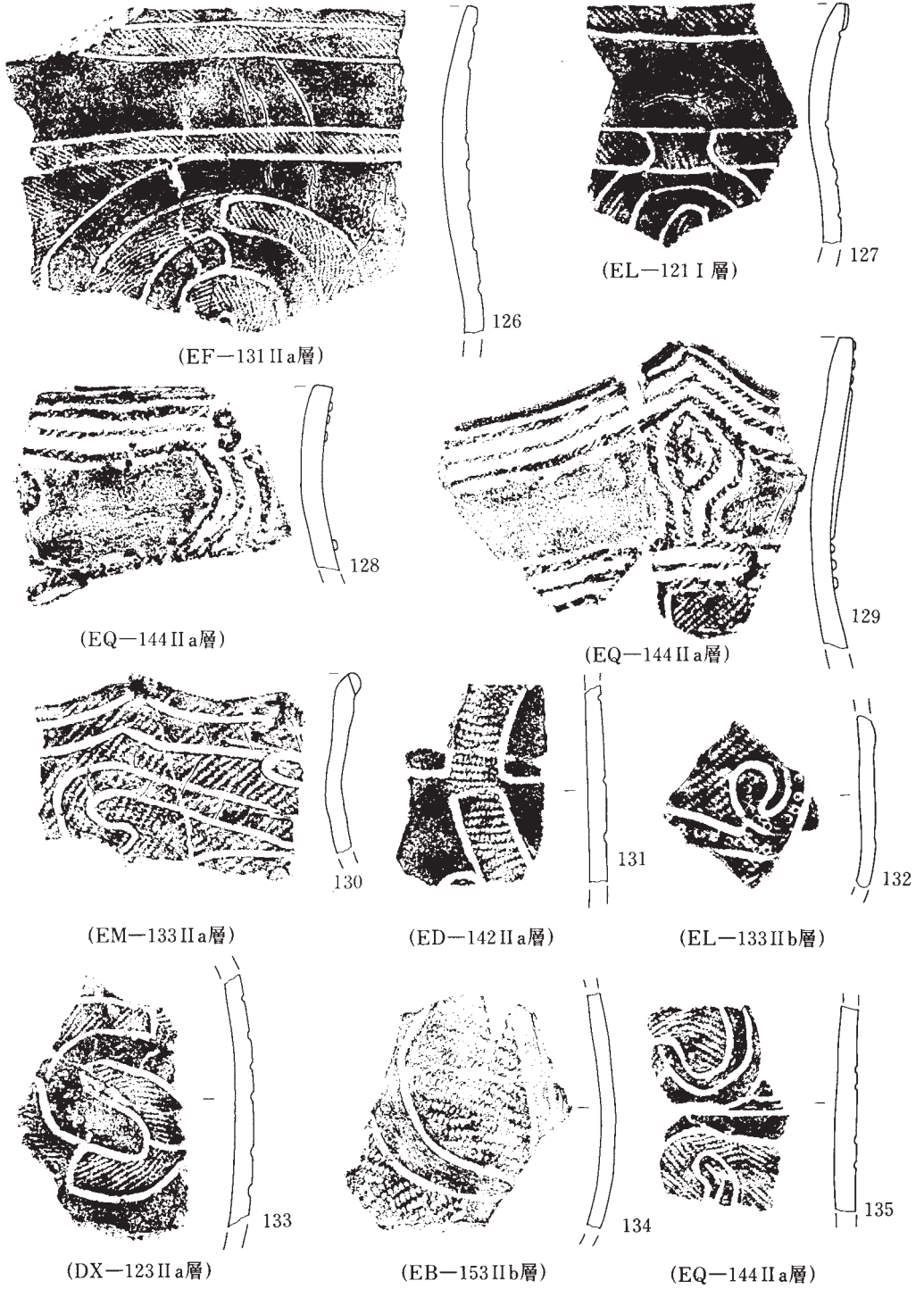
第132图 第三群土器実測图(9)



第133圖 第三群土器拓影圖(1)

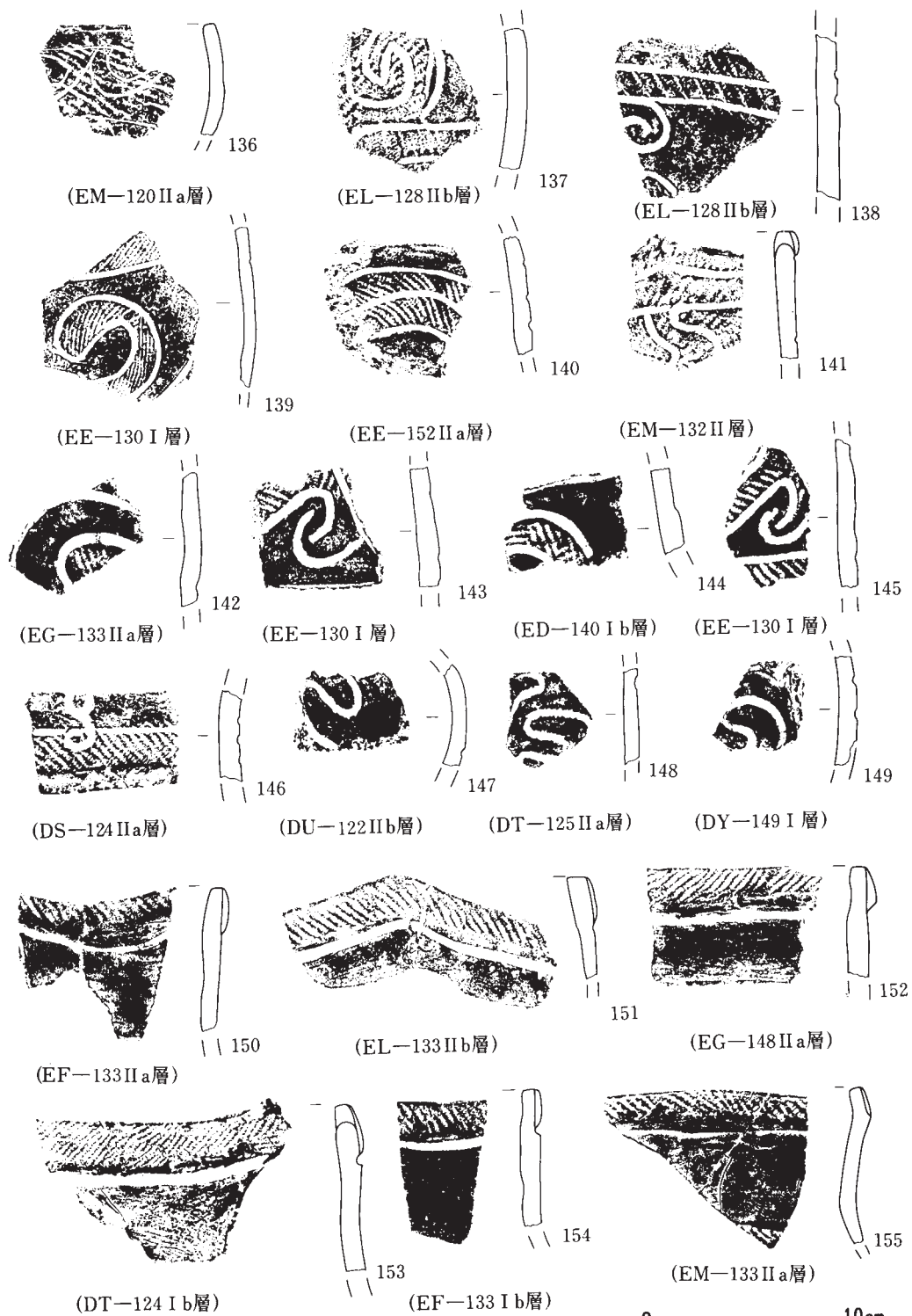


第134图 第III群土器拓影图(2)

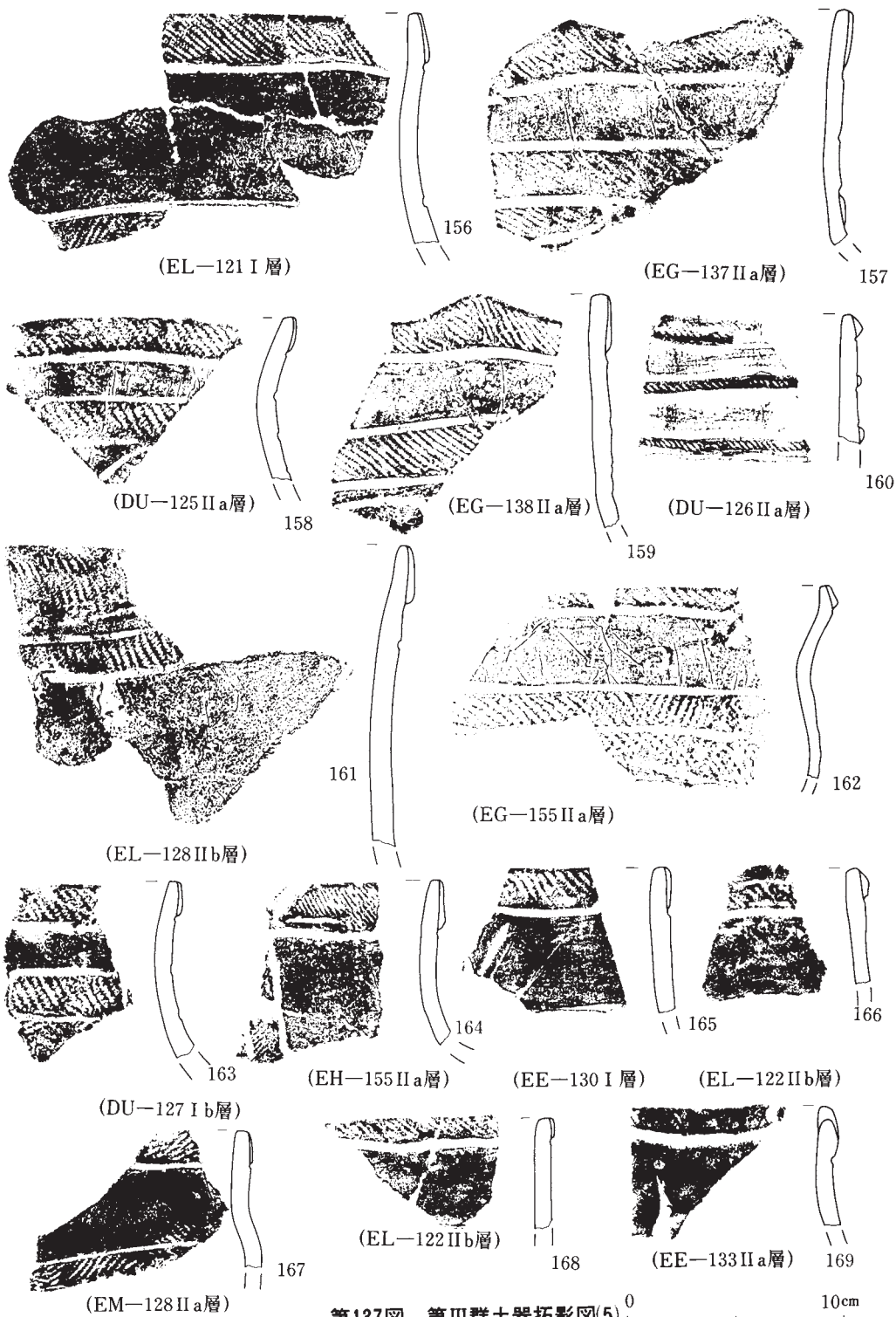


0 10cm

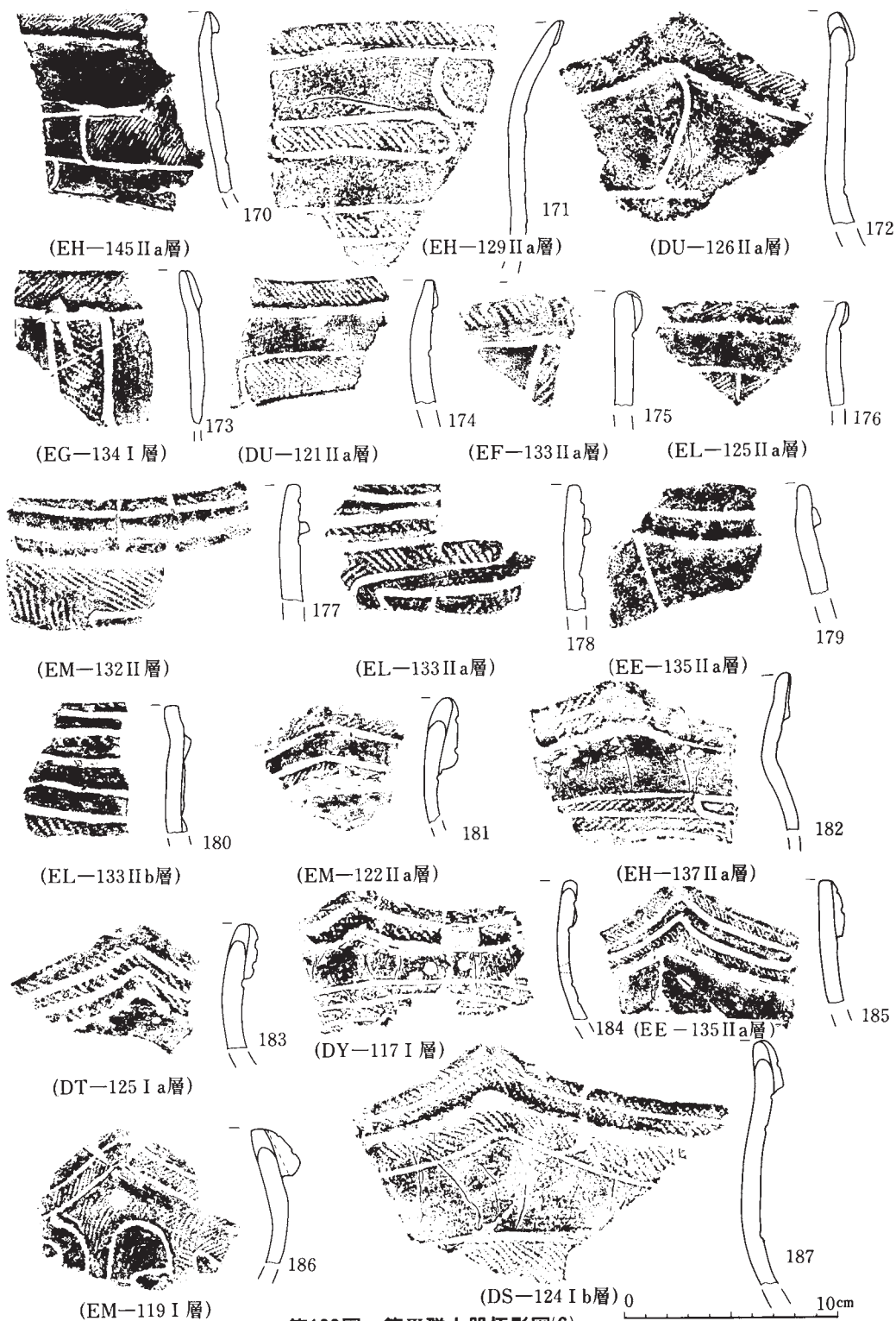
第135图 第三群土器拓影图(3)



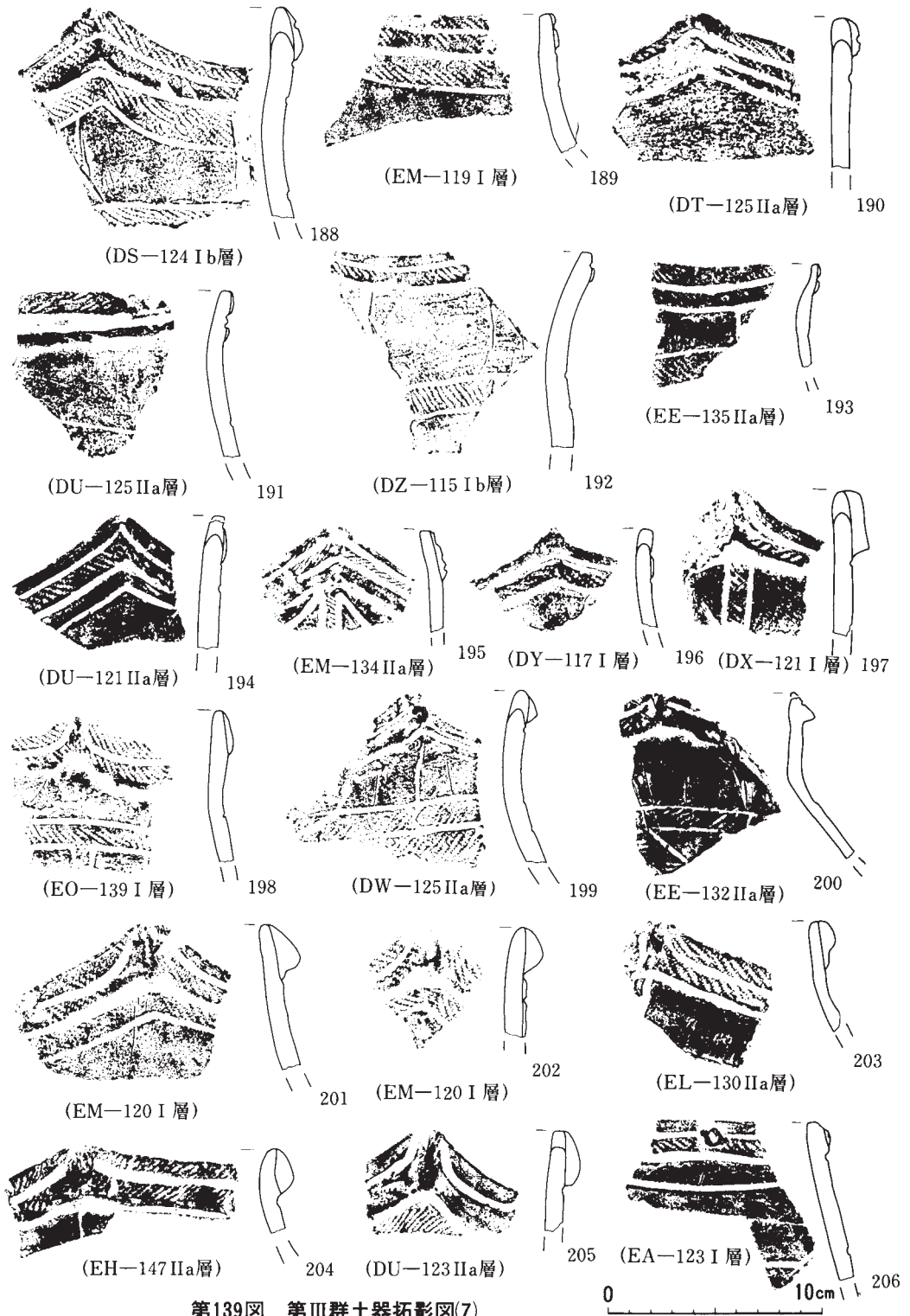
第136圖 第三群土器拓影圖(4)



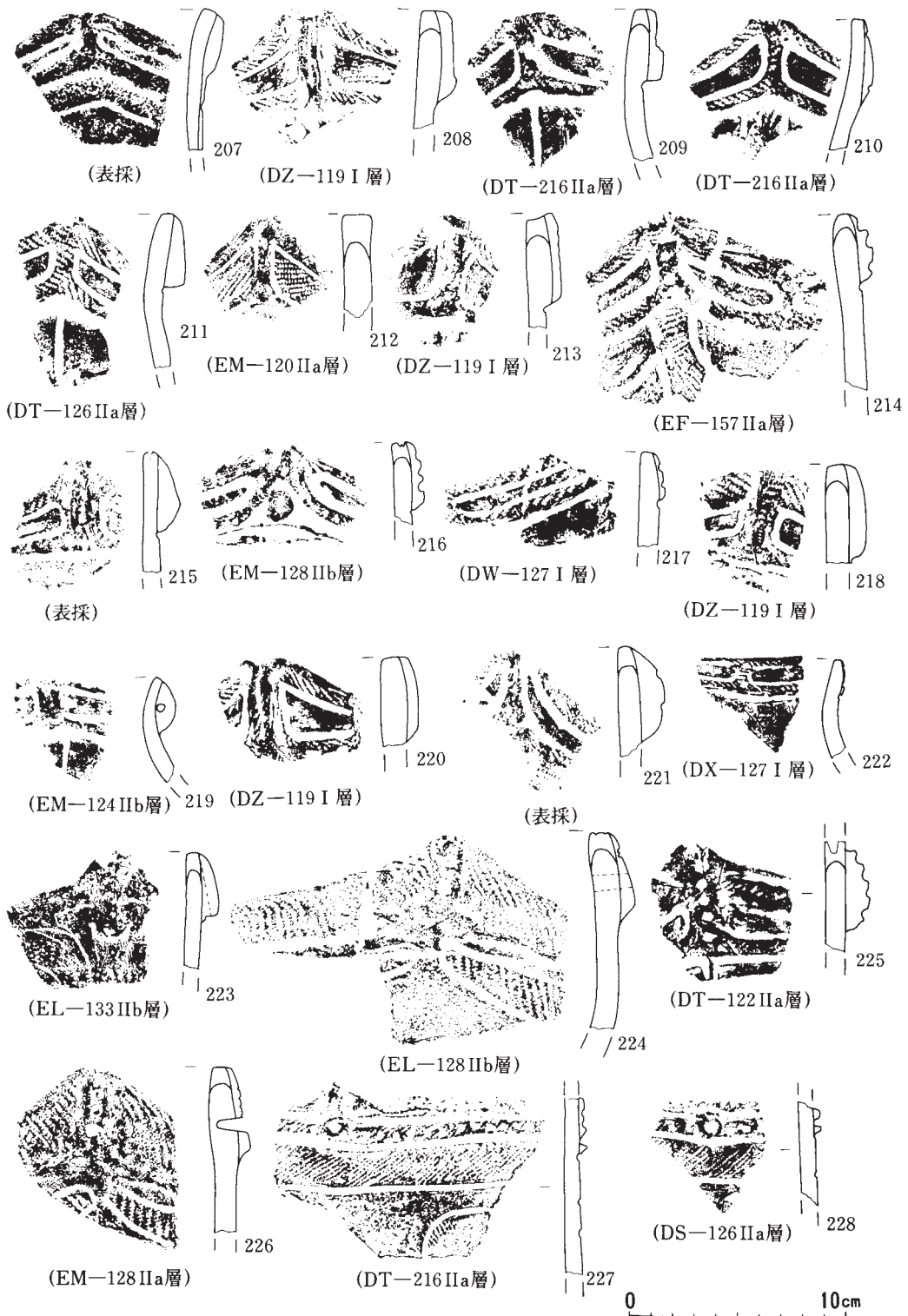
第137图 第三群土器拓影图(5)



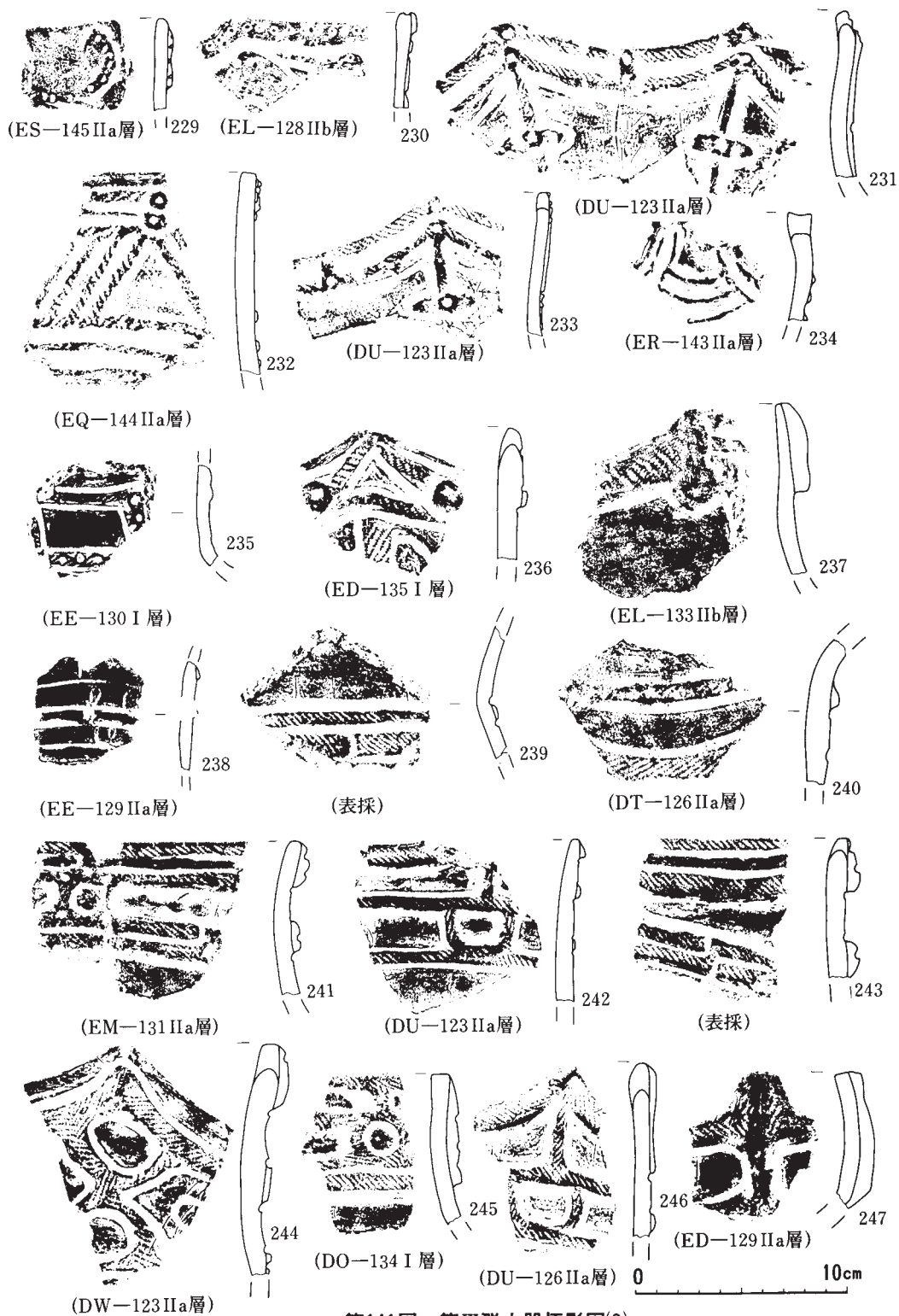
第138圖 第三群土器拓影圖(6)



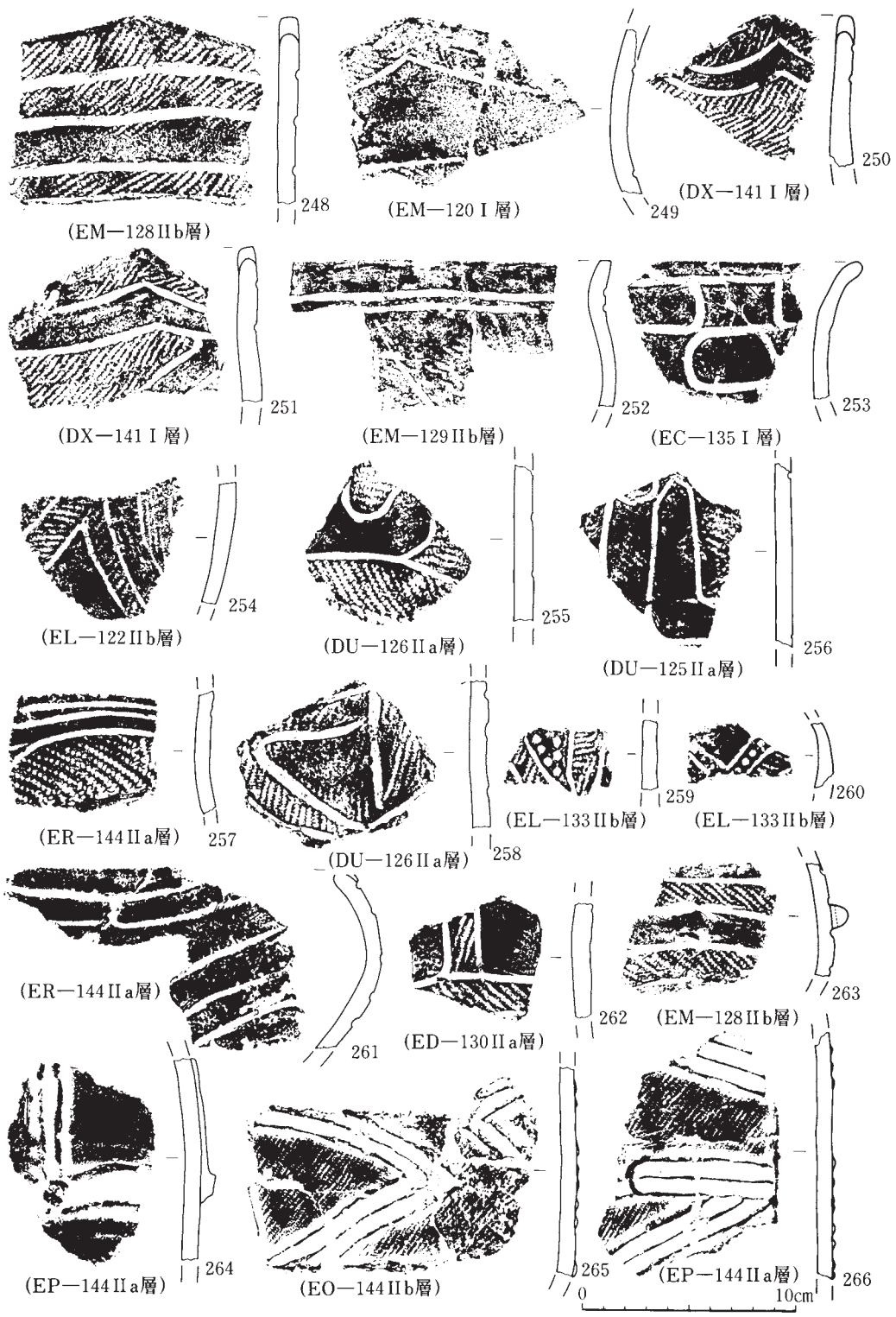
第139图 第三群土器拓影图(7)



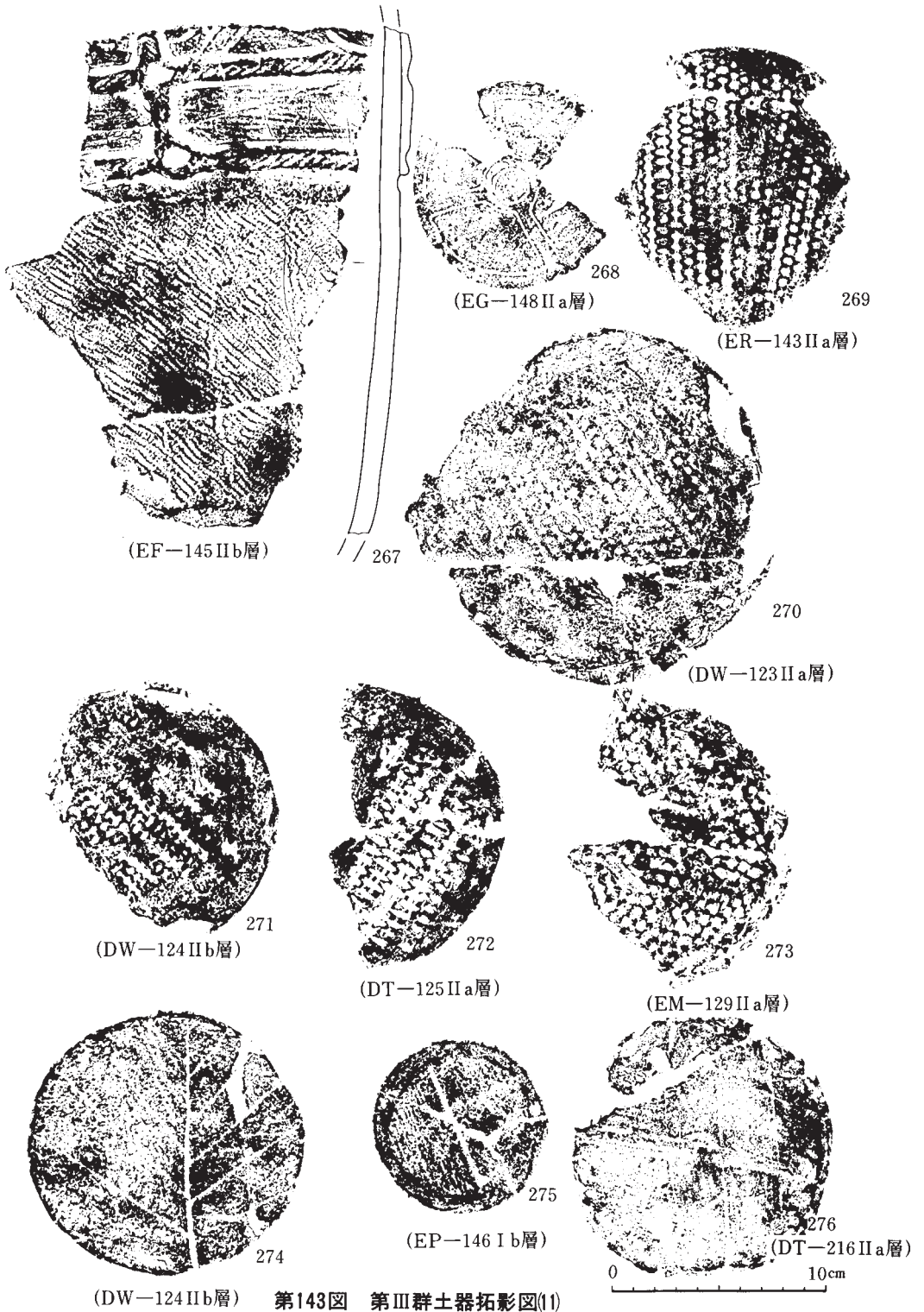
第140圖 第三群土器拓影圖(8)



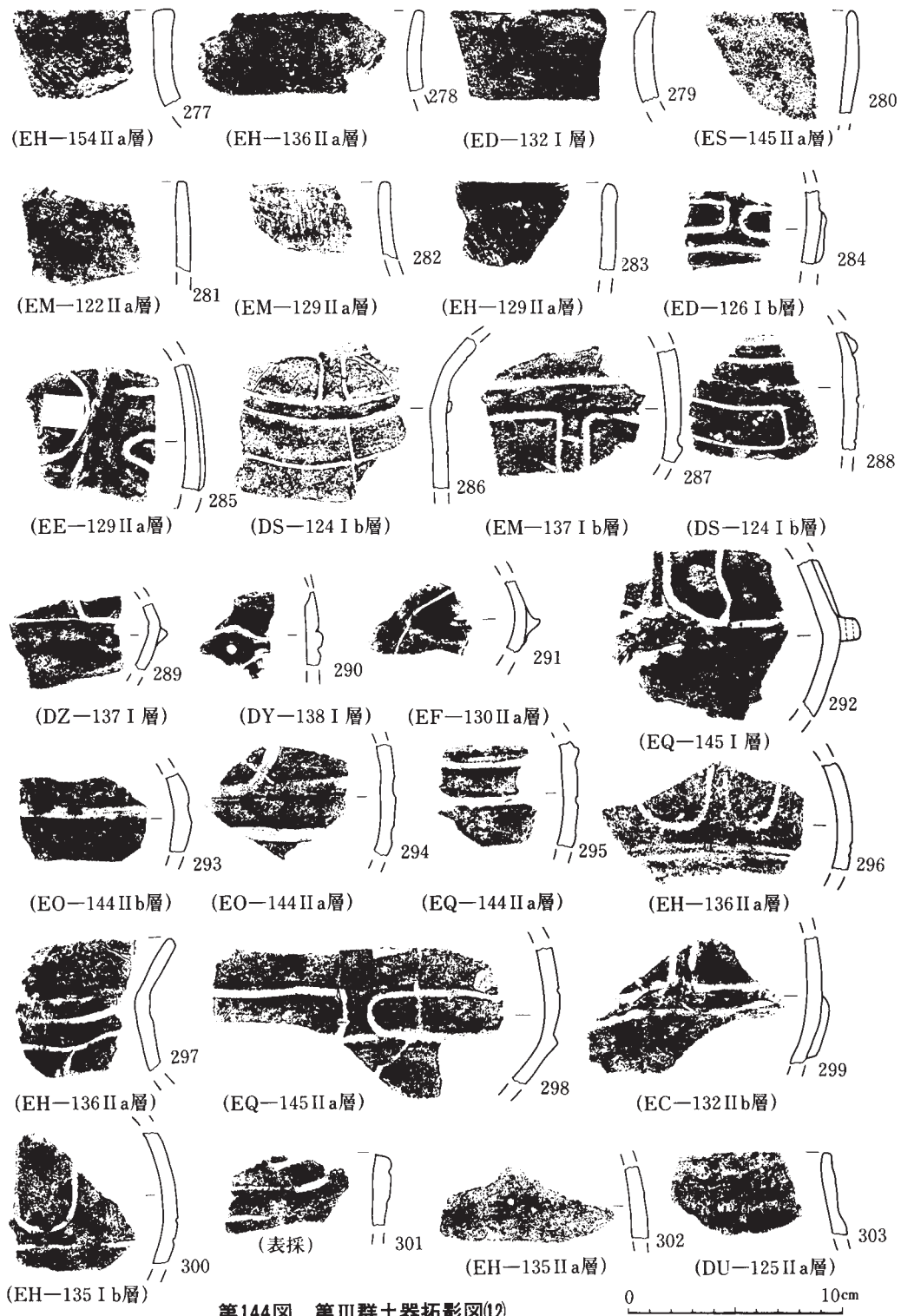
第141図 第三群土器拓影図(9)



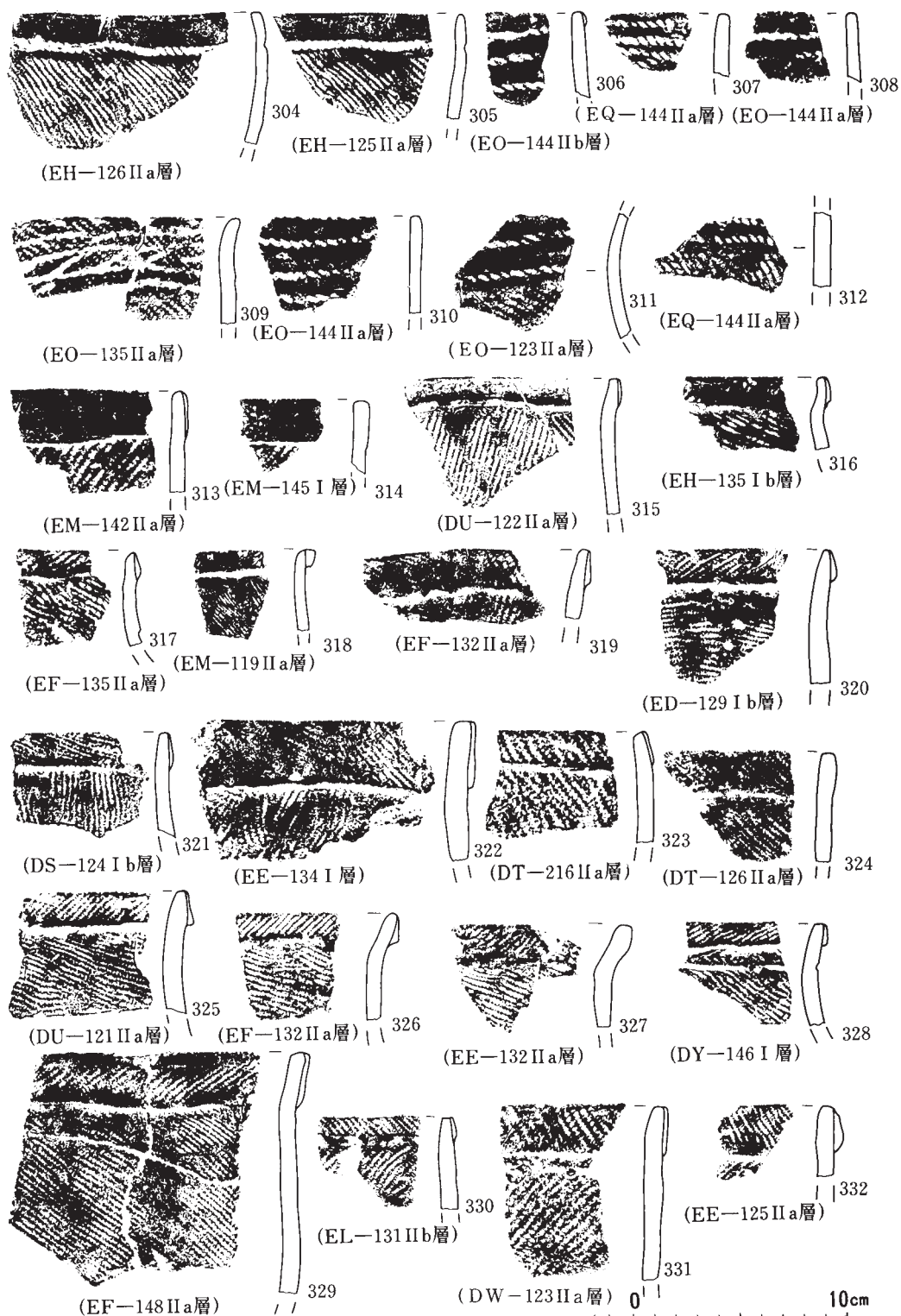
第142图 第三群土器拓影图(10)



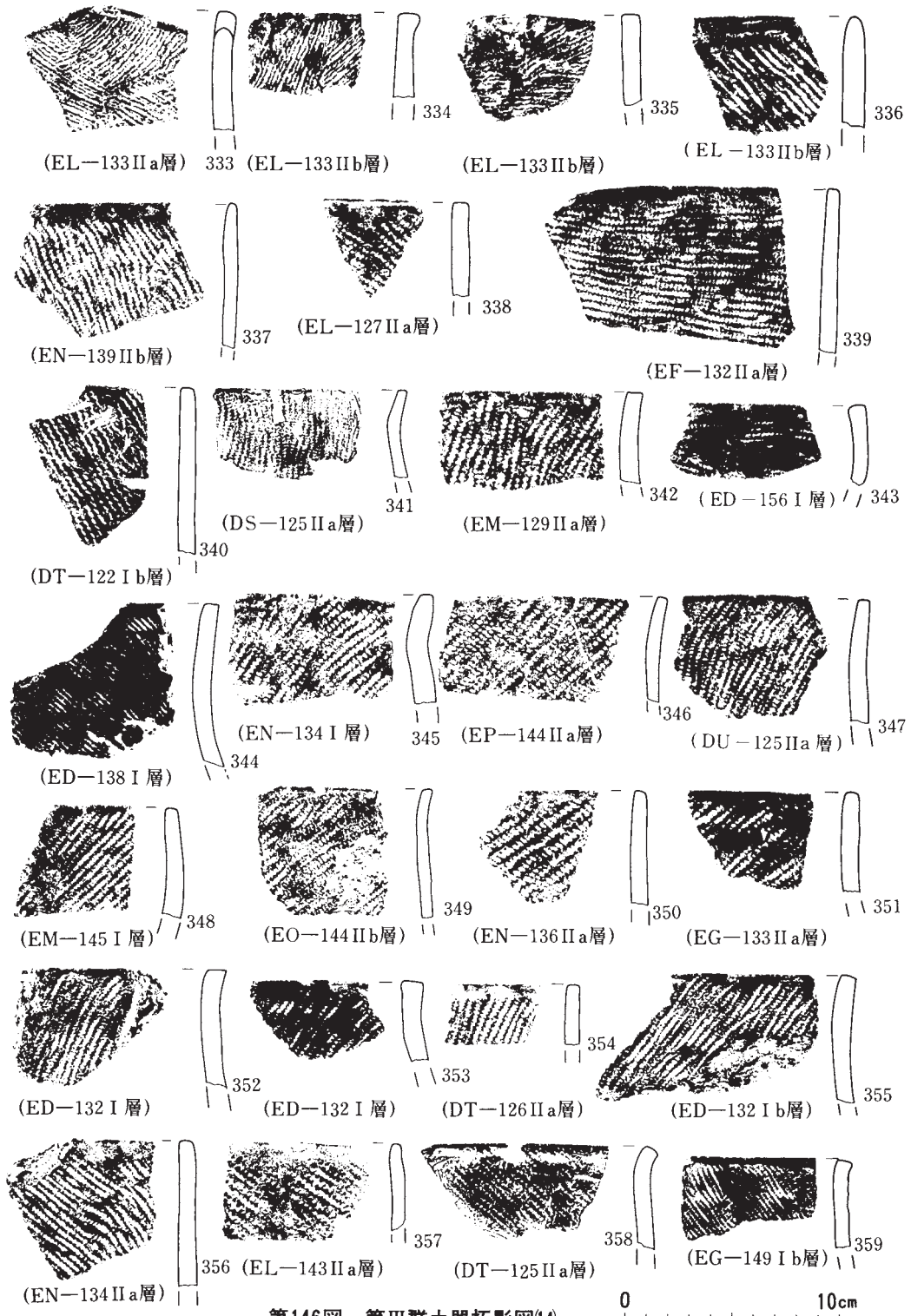
第143图 第三群土器拓影图(1)



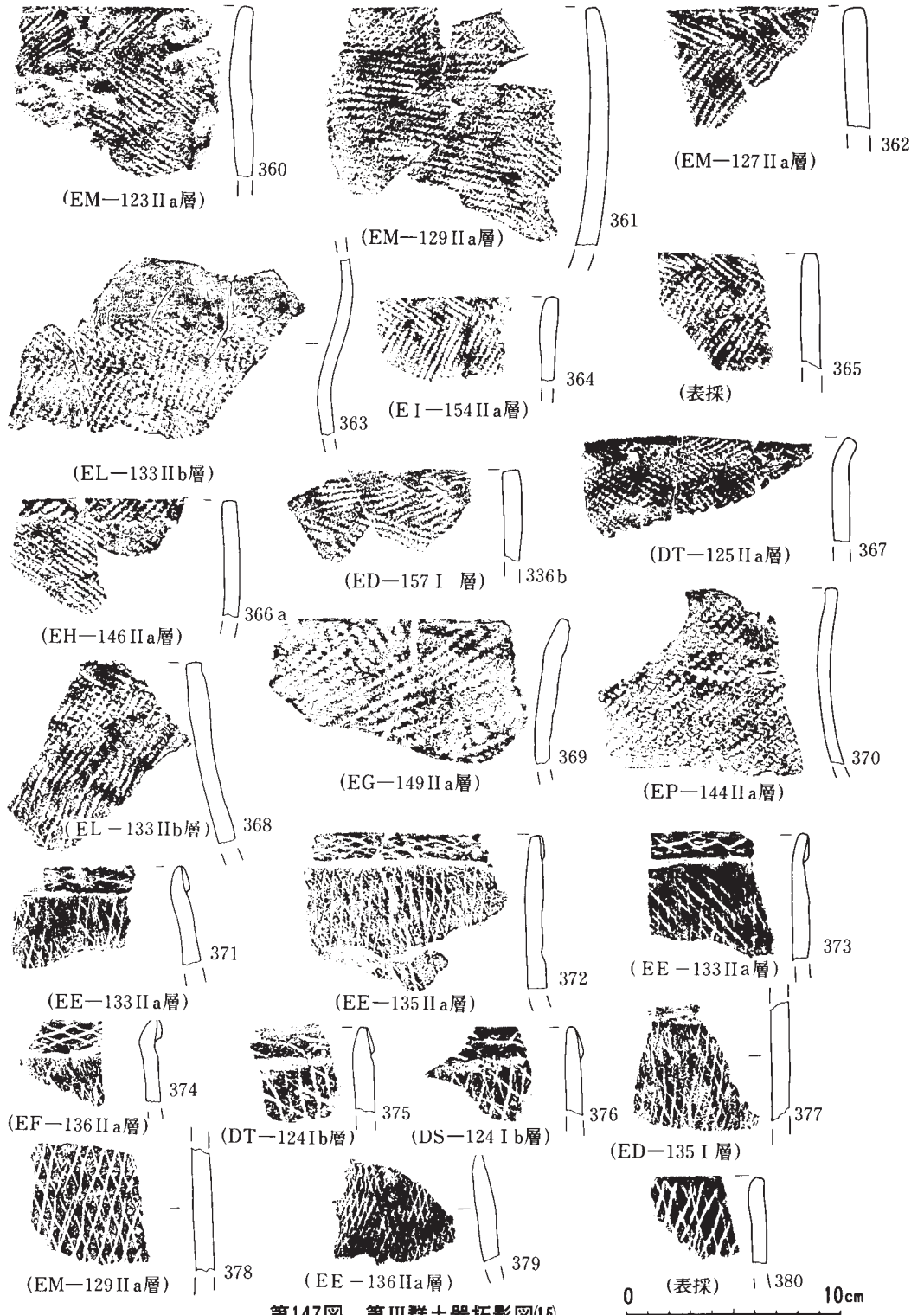
第144图 第三群土器拓影图(12)



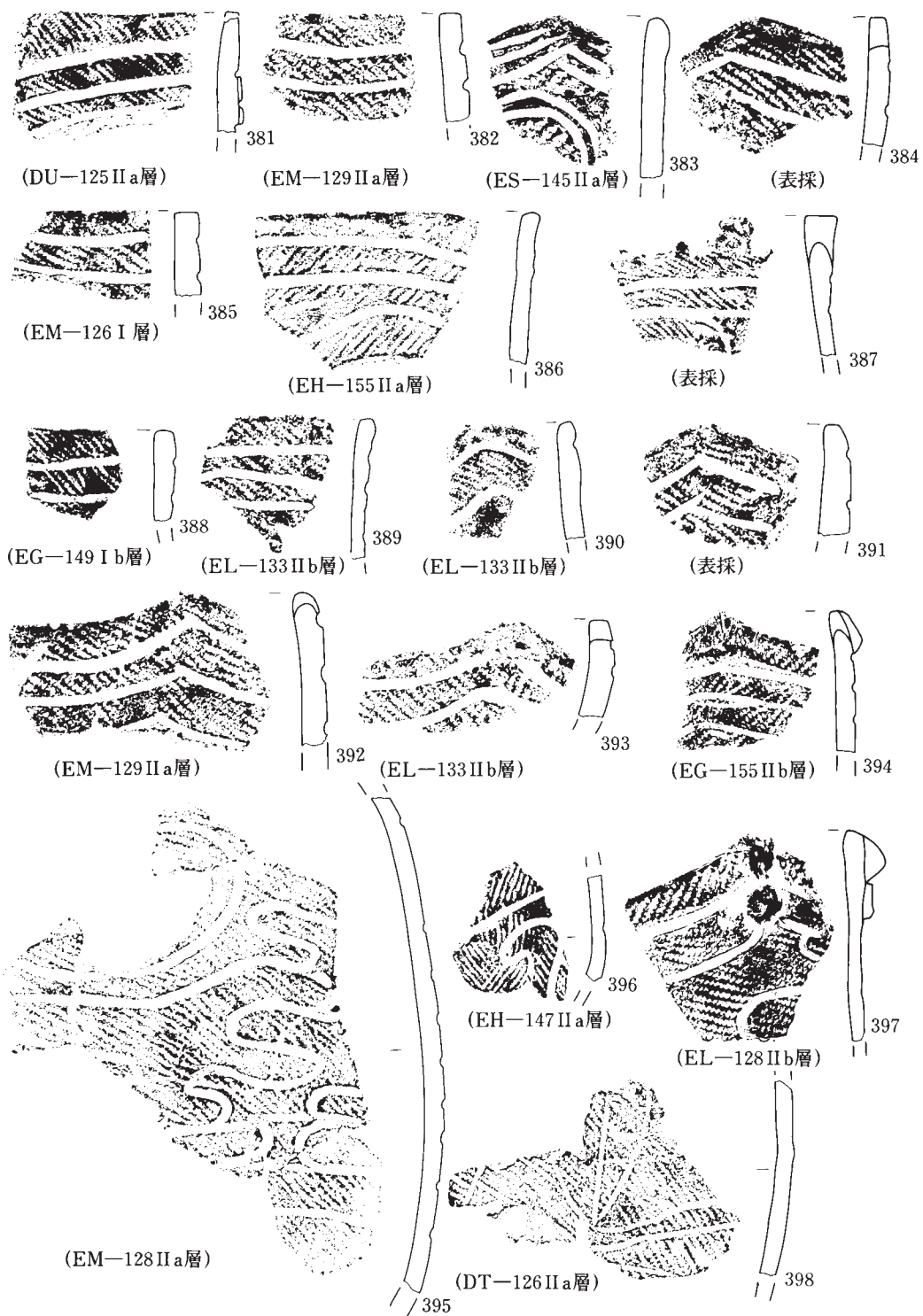
第145圖 第三群土器拓影圖(13)



第146图 第三群土器拓影图(14)



第147图 第III群土器拓影图(15)

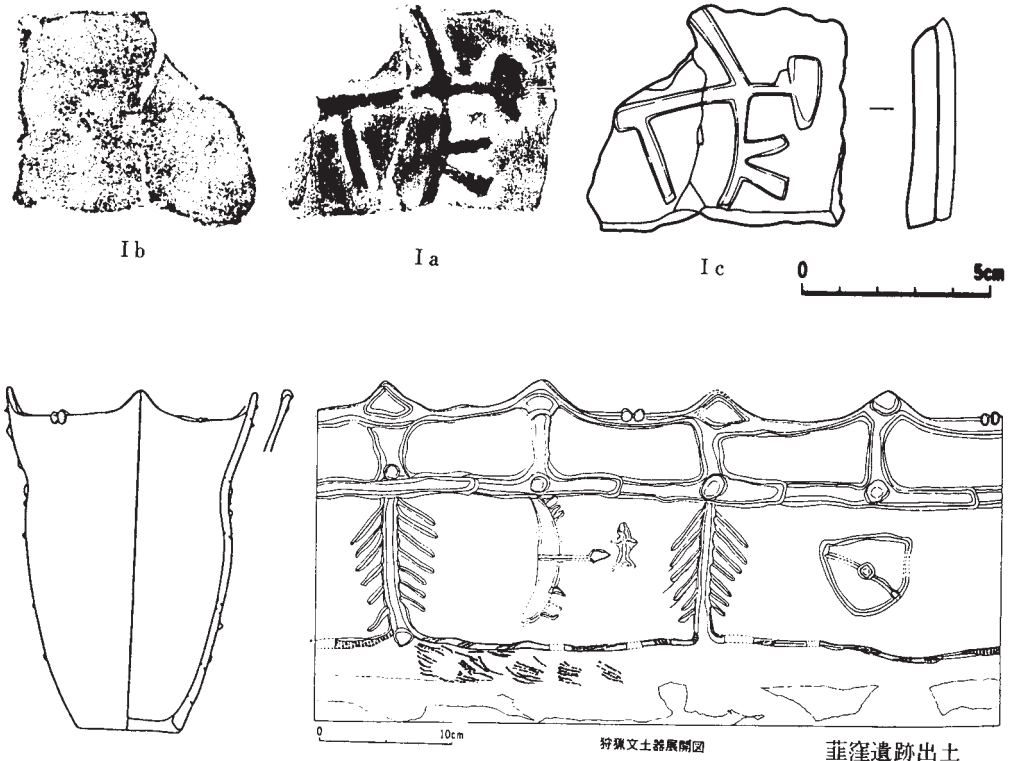


第148图 第三群土器拓影图(16)

狩猟文土器

第149図1は、調査地区中央にあたる第1号住居跡と第1号配石遺構の南方に位置するE D - 139グリッド第 層から出土した深鉢形若しくは小型甕棺形(把手付壺形)土器の胴部片である。色調は浅黄橙色で、堅緻な焼成である。文様は、粘土紐貼付け隆線手法によって弓矢、動物を表現しているようであるが、破片のため全体像は不明である。しかし本書の第 群土器に包括される土器である。

このような隆線貼付け技法によって弓矢、動物などを土器表面に表現した土器は、昭和57年度に青森県八戸市葦窪遺跡住居床面から出土し、狩猟文土器と名付けられた(県埋文84集:1984)本遺跡出土の第149図1の土器片は、狩猟文土器の文様と類似しているが多少相違点もある。葦窪の土器(第149図下)は、粘土紐の両側を念入りに押圧、研磨して、隆線は稜線状で、断面は三角形に近いが、本遺跡の土器片の隆線は粘土紐の丸味が幾分残って、断面は梯形状をなしている。また、葦窪の土器は、矢じりの前方に動物が貼付けられ、矢じりと動物の間に距離があって、動物を狙っている状況を示しているようであるが、本遺跡の文様は、矢が動物に命中してしまったかのように矢柄と動物(鳥?)が結合して、矢柄と動物が直交している点である。このような文様を施した土器は、最近県内で出土例が増加しており、昭和58年に調査された八



第149図 狩猟文土器

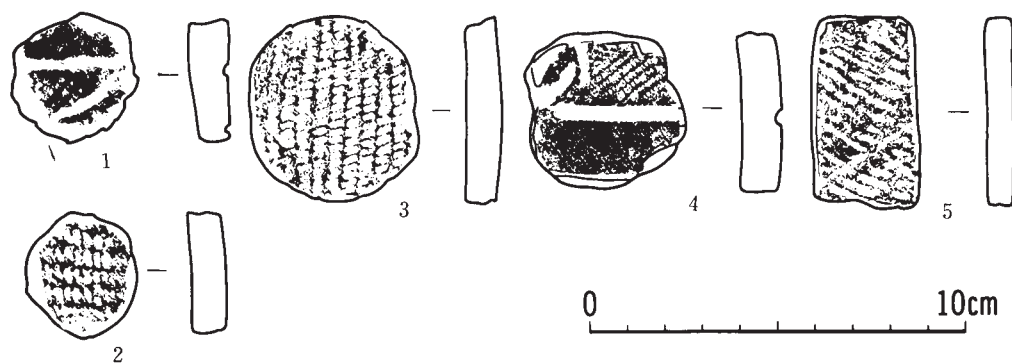
戸市丹後谷地遺跡(1)(2)第3号住居堆積土中から出土した波状口縁深鉢形土器片(八戸市埋文13集49頁:1984)、昭和59年に発掘された東津軽郡平館村間沢遺跡遺構外(K-15、層)出土の小型甕棺土器(把手付壺形)(県埋文95集:1986)に認められている。これらの土器の時期は、縄文中期末葉～後期初頭とみられているが、当時の豊猟祈願を土器の文様に具現した一資料として注目される。ただ本遺跡では石鏃の出土が極めて少ないことが気になる点である。(北林)

2 土製品

遺構外から出土した土製品は、円盤状土製品4点、長方形土製品1点、計5点である。

円盤状土製品

これについては、遺構内出土のものを含めて第8表円盤状土製品観察表、(第150図)(写真32)にまとめて図化、記載してある。



第150図 土製品実測図

第8表 円盤状土製品観察表

(単位: %・g)

| 挿図 番号 | 写真 番号 | 出土 グリッド遺構名 | 層 位 | 大きさ | | 重さ | 器形 部位 | 文様 | 色調 | その他 |
|-------------|----------|---------------|--------|-------|----|------|----------|---------------|------------|----------------|
| | | | | 長径×短径 | 厚さ | | | | | |
| 第150図 -1 | 32 | E C -136 | I層 | 33×32 | 9 | 11.5 | 深鉢胴 | 篋がき沈線 磨消縄文 | にぶい 黄 橙 | 側縁部の磨りなし |
| 第150図 -2 | 32 | E F -134 | I層 | 31×28 | 9 | 9.4 | 同 上 | R L横位 縄 文 | 赤 黒 | 同 上 |
| 第150図 -3 | 32 | D R -126 | I層 | 48×44 | 9 | 25.8 | 同 上 | R L縦位 縄 文 | 黒 褐 | 同 上 表面炭化物付着 |
| 第150図 -4 | 32 | E Q -144 | IIa層 | 40×39 | 11 | 19.8 | 同 上 | 篋がき沈線 磨消縄文 | 灰オリーブ | 側縁部に一部磨りあり |
| 第35図 | 32 | 第12号ピット | 2層 | 37×37 | 6 | 12.3 | 同 上 | 無 文 | 赤 褐 | 同 上 内面炭化物付着 |
| 第63図 | 32 | 第32号ピット | フク土 | 41×36 | 6 | 14.4 | 同 上 | 篋がき沈線 | にぶい褐 | 同 上 |
| 第22図 | | 第5号住居跡 | 床直 | 27×26 | 8 | 6.4 | 同 上 | R L斜位 縄 文 | 明黄褐 | 同 上 |

長方形土製品（第150図5、写真32）

調査地区中央東寄りに位置するEG - 149グリッド第 b層から出土した。同じグリッドには第20号フラスコ状ピットが、また、周辺には第2、10号住居跡、第25、26号ピットが分布している。長方形と仮称した土製品は、現長、5.0cm、幅2.7cm、厚さ0.7cmでLR無節を施文した土器片を利用したものである。長辺の両側縁は表面に向けて傾きをもって磨滅して、短辺の断面は梯形をなしている。両端を欠損しているため刻み目は残存していないが、土錘の可能性もあるため土製品の項に掲げた。

（北林）

3 石器・石製品（第151図～第175図・第9表）

石器・石製品は、遺物包含層から出土したものと、遺構内（住居跡・ピット・溝状ピット・焼土状遺構）から出土したものがあるが、その出土例は少ない。石器には、石鏃・石錐（ドリル）・石筥・石ヒ・不定形石器・磨製石斧・磨石・（磨・敲・凹石類）・敲石・礫器・石核・（砥石・石皿類）・円盤状石製品・有孔石製品がある。

第 群石器〔剥片石器〕

A類 石鏃（第151図 - 1・2）

石鏃は、遺物包含層から2点・遺構から2点の計4点の出土で少ない。

石鏃はすべて有茎石鏃である。基茎部が不明瞭で尖頭部及び側縁部が外湾しており、剥離調整は雑である。

B類 石錐（ドリル）（第151図 - 3～5）

石錐は遺物包含層から4点出土した。

4は、つまみ部と錐部の境界は明瞭であるが、つまみ部の調整は粗雑に、錐部は片面に丁寧な剥離調整を施している。3・5は、つまみ部と錐部が不明瞭であり全体的に剥離調整は粗雑である。

C類 石筥（第151図 - 6～11・第152図 - 12～21・第153図 - 22）

石筥は、遺物包含層から2点、遺構内から17点の計19点出土した。

本類は、形態から台形を有するもの・刃部が平坦なもの・刃部が丸みをもつものに分かれる。特に長径は5cm内でつまみを有するもの(6～10)は、刃部及び側縁部の剥離調整は丁寧に行われているが、一方、大形なもの(13～18)は剥離調整が荒いものが多い。

D類 石ヒ（第153図 - 23～27）

石ヒは遺物包含層から5点出土した。

石ヒは、形態はすべて縦長のもので、横長の石ヒは出土しなかった。(24～26)は先端部が幅狭で丸みを有し、剥離調整は丁寧に行われている。(24・26)ともに欠損品である。(23)は全体に剥離調整が雑で、未製品の石ヒと思われる。

E類 不定期石器(153図 - 28～32・第154図 - 33～42・第155図 - 43～55・第156図 - 56～68)

不定期石器は、遺構内から2点・遺構外から46点の計48点出土し、第 群石器の中で最も多く出土したものである。

本類は、形態・刃部等にみられる特徴によってスクレイパーとR・Uフレイクに分けた。

スクレイパー28～48は、縦長剥片を多く使用している。剥離調整は、片面の側縁部の一部に細かい剥離調整がみられる。削器として多く使用したと思われる。

Rフレイク・Uフレイクの属するもの49～68である。不整の縦形剥片を多く使用し、荒い剥離調整を施しており、側縁部及び刃部の一部に剥離調整がみられる。

第 群石器〔礫石器〕

F類 磨製石斧（第157図～第159図）

本類は、遺構外から3点・遺構内から42点が出土した。沖附2遺跡の磨製石斧の特徴として特に未製品の磨製石斧が多く、本類では磨製石斧の製作工程ごとに1～4類と分類を行なった。

F類 - 1 剥離調整のみのもの（第一工程）

F類 - 2 敲打調整を行なっているもの（第二工程）

F類 - 3 敲打調整及び一部に擦りがみられるもの（第三工程）

F類 - 4 刃部及び全体的に研磨を行なっているもの（第四工程）

F類 - 1（第157図 - 69・71）

本類は、剥離調整のみのもので、2点の出土である。(59)は刃部から側縁にかけて、(61)は両側縁の片面に荒い剥離調整を施し、他は自然面を残している。

F類 - 2（第157図 - 72～75）

本類は、全面に敲打痕がみられ基部のみのものである。基端部が丸みを有し、刃部にかけて広がる形状である。剥離調整は、側面及び表裏面に荒い剥離調整を残し、他は細かい敲打痕がみられる。

F類 - 3（第157図 - 70・76～79・第158図 - 80～92・第159図 - 93・94・96）

本類は、敲打調整及び一部に擦りがみられるもので、残存部形状から、(完形のもの)・(刃部のみのもの)・(基部のみのもの)に分けて記載する。

(完形のもの) 76～80・82～85

形状は、基部から刃部にかけてやや広がるもの(76・77・82)と、短冊形に近いタイプに分かれ、特に、(83・84)は細身の短冊形を呈している。刃縁部はすべて外湾する。(76・79・80)は、表面に荒い剥離調整と細かい敲打痕がみられ、裏面の全面に擦りがみらえるもので、(77・78)は刃部の一部に研磨がみられ、他の敲打されている。(83～85)は、基端部に荒い剥離調整と敲打痕が認められる。

(基部のみのもの) 88・89・92・94

形状は、基端が丸みを有し側縁にかけてやや広がるものである。(92)は表面に荒い剥離調整・裏面に擦りがみられる。(89・94)は表裏面に敲打痕を施し、裏面の側縁に敲打痕と擦りがみられる。

F類 - 4（第159図 - 95・97～110）

本類は、刃部のほかに全体的に研磨を行なっているもので、残存部形状から、(完形のもの)・(刃部のみのもの)・(基部のみのもの)に分けて記載する。

(完形のもの) 95・97～100・102～103

基部から刃部にかけて緩やかに広がる細身の形状を呈する。基端部には研磨を施し直線的であり、横断面は楕円形である。(97)は、5 cmと小さく、小型のノミに用いられたのではないかと思われる。(95)は、約44m離れた地点で接合した資料である。(98)は、側面に面取りがみられ、全面に擦痕の跡が認められるが、他の磨製石斧には擦痕の形跡はみられない。

(刃部のみのもの) 107・108・110

刃縁部は外湾しており、横断面は楕円形を呈するものが多い。刃部は両刃であり側面部の研磨は顕著でない。(107・110)は表面に敲打痕の痕跡がみられる。

(基部のみのもの) 110・104～106・109

基部から刃部にかけて緩やかに広がる細身の形態で、横断面はすべて楕円形を呈する。(102・103)は、基端部を研磨し直接的で、前記の(完形のもの)の形状と似ている。

G類 打製石斧(第160図 - 111～120・第161図 - 121～130・第162図 - 131～137)

打製石斧は、遺構内3点、遺物包含層から42点出土した。

長径8 cm未満の小型のものと大型のものに分かれるが、小型のものが多く出土した。側縁部が直線的な短冊形・側縁部が外反する楕円形・基部から刃部に広がる形状である。また、刃部寄りの側縁がえぐれるもの(120・135)もみられる。基端部は外湾し、丸みを有するものが多く、まれに鋭利なもの(131)もみられる。

剥離調整は、表面の周縁部に荒い剥離調整を施し、裏面に自然面を残すものが多く、主体を占める。(122)は、表面に荒い剥離調整を施した後細かい敲打を加えたものである。

H類 磨石(第163図 - 138～145)

磨石は、遺構内4点、遺物包含層から17点出土した。

形状は、円形にちかい楕円形(138・140・142・144)と長楕円形(130・141・143・145)の2種類がみられる。磨り面は、表裏面にはみられず周縁部に多くみられる。特に側縁部の片方に磨り面を有するものが多く、円形に近い楕円形の形状を呈する磨石が特徴的である。一方、長楕円形の磨石は、端部の片方のみ磨りがみられ、他の面には磨り面はみられない。

類 磨・敲・凹石類(第164図 - 146～151・第165図 - 152～158・第166図 - 159～166)

磨・敲・凹石類は、遺構内から3点・遺構外から25点の計28点出土した。

本類は、磨りと敲を組み合わせたもの、磨りと凹を組み合わせたもの、凹石のみのもののみがみられる。

磨と敲を組み合わせたもの(146～160・162)は、形状が楕円形を呈するものと、長楕円形の

もの(153・154)があり、楕円形の形状が主体を占める。磨り面は、両側縁部に多くみられ、(157)は周縁部にみられるものである。また、側縁部及び表裏面に荒い剥離調節を施し、(153)には端部に剥離調節と磨りがみられる。

磨りと凹を組み合わせた(161・163・165)は、側縁部がやや直線的な楕円形を呈する。磨り面は、側縁部にのみ施され表裏面にはみられない。凹部は、表裏のみにみられるもの(163・165)と、表裏面にみられるもの(161)がある。凹部は1孔及び2孔で凹部は浅い。

凹石のみのもの(164・166)は、楕円形を呈する。表面に凹部を有し、磨と凹を有するものと同様に凹部は浅い。

J類 敲石(第167図 - 167～176・第168図 - 177～186・第169図 - 187～196・第170図 - 197～204・第171図 - 205～212)

敲石は、遺構内から1点、遺構外から92点の計93点が出土し、本遺構中で最も多く出土している。

本類は、形状が円形・楕円形・長楕円形を呈しているが、円形の形状が多い。敲石は、チャートの礫を多く用いている。敲石には、敲打のみのもとの荒い剥離調節を施しているものとに分かれる。敲打のみみられるものは、端部にのみ施す例が多く、周縁にみられる(194)は量的に少ない。また、表裏面にみられるもの(170)もある。剥離調整後のものは、端部及び側縁部に剥離調節を施している。(187・191・193・195・204)は、剥離調整後に敲打を加えたものである。

K類 礫器(第172図 - 213～220)

本類は、前記の分類に該当し得ないものをK類礫器として取り扱った。遺構外から11点出土している。

(213・215・217)は、側面に荒い剥離調整を行なっているものである。(217)は両側縁部に(215)は側縁の一部に剥離調整を行なっている。これらは、石錐に用いられたと思われる。(214)は、円形で片面の周縁に剥離調整を行い、更に敲打を行なっており、他の部分は自然面を残している。敲石の要素を含んでいると思われる。(216・218・219)は、片面の端部に剥離調整を行ない、(220)は、両面の端部と片面の側縁部に剥離調整を行なっている。

L類 石核(第172図 - 221～224)

本類は、遺構外から6点出土した。

(221)は、両面の周縁帯に荒い剥離面があり中央部に自然面を残している。(222～224)は、縦長の剥片を用い、無作為に打点を設け剥離を行なっているものである。

M類 砥石・石皿類(第173図 - 225～230・第174図 - 231～239)

本類は、砥石・石皿をまとめたものである。遺構内から1点・遺構外から17点の計18点が出土した。

砥石は、(225～227)の3点である。(226)は長方形を呈し、長軸方向及び側縁部に研磨痕がみられる。(227)は短軸方向に研磨痕と擦磨がみられる。(226・227)ともに欠損品である。(225)は、方形を呈する自然石で、側面・周縁部に研磨がみられるが、それ程研磨に顕著ではない。

石皿は、(228・230)が台形の形状を呈し、接合しなかったが同一個体の可能性がある。凹部が浅く周縁部に立ちあがりをもち、下面には2個対の脚を有する。石質は凝配岩で非常にもろく、非実用品である。(229)は、周縁部に立ちあがりをもち、形状が舟計を呈する。片面に擦りがみられ、特に中央部は深い凹部をもつ。石皿は六つに分割されており、意識的に破損したと思われる。(231～233)は、扁平状の自然石をそのまま用いて使用したもので、片面に擦りがみられるものである。(233)は中央部に深い凹部をもち、(232)は周縁部に立ちあがりをもつ。(236～239)は、両面に擦りがみられ凹部は深い。(234・235)は片面に擦りがみられ凹部は浅い。(234～239)はすべて欠損品である。

第 群石器(石製品)

N類 円盤状石製品(第175図 - 240)

円盤状石製品は、遺構内1点、遺物包含層から1点出土した。薄手の板状の礫を両側から打ち欠いて円盤上にしている。表面に自然面を残し、裏面に擦りがみられる。

O類 有孔石製品(第175図 - 241～247)

有孔石製品は孔が貫通していない未製品をも含めて遺物包含層から7点出土した。

(241・242)は、硬玉製の垂飾用品と思われ、全体が研磨されており、特に両側面を丁寧に研磨している。形状は、全体的に丸みを有する方形で、両側から穿孔を行なっている。(244・246)は、自然石をそのまま用いた不整形の形状であり、穿孔の脇に貫通していない育孔がみられる。(245・247)は、形状が三角形を呈し、孔が貫通していない。(247)は周縁部を研磨している。

(成田滋彦)

第9表 遺構外出土石器一覧表

A類 石鏃

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|------|--------------|------|------|------|-----|----|----|----|
| No 1 | D U-126 IIa層 | 22 | 14 | 4 | 1.0 | B | A | |
| 2 | D T-126 IIa層 | 34 | 18 | 7 | 3.5 | " | " | |

B類 石錐（ドリル）

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|------|------------|------|------|------|--------|----|----|----|
| No 3 | E B-148 I層 | 50 | 12 | 11 | 2.6 | B | B | |
| 4 | D U-129 I層 | 40 | 19 | 12 | (6.2) | " | " | 欠損 |
| 5 | D Z-138 I層 | 28 | 11 | 5 | (1.0) | " | " | " |

C類 石ペラ

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|------|--------------|------|------|------|--------|----|----|----|
| No 6 | D Z-152 I層 | 40 | 31 | 10 | 9.5 | B | C | |
| 7 | D Z-140 I層 | 41 | 28 | 10 | 11.6 | " | " | |
| 8 | E N-139 I層 | 29 | 24 | 9 | 6.3 | " | " | |
| 9 | D Y-115 I層 | 37 | 23 | 7 | (7.1) | A | " | 欠損 |
| 10 | E N-139 I層 | 39 | 22 | 12 | 8.8 | B | " | |
| 11 | 表 採 | 34 | 21 | 12 | 9.2 | A | " | |
| 12 | E H-153 I層 | 53 | 33 | 12 | 21.7 | B | " | |
| 13 | E D-133 IIb層 | 61 | 50 | 15 | (41.7) | " | " | 欠損 |
| 14 | E D-136 Ib層 | 55 | 49 | 19 | 44.5 | " | " | |
| 15 | E O-135 IIb層 | 55 | 36 | 11 | (23.1) | " | " | 欠損 |
| 16 | 表 採 | 43 | 40 | 10 | (22.1) | " | " | " |
| 17 | E D-128 Ib層 | 67 | 46 | 14 | 35.4 | " | " | |
| 18 | E L-135 IIa層 | 61 | 44 | 14 | (38.7) | " | " | 欠損 |
| 19 | E M-137 IIb層 | 85 | 47 | 9 | (32.0) | " | " | " |
| 20 | E N-136 Ib層 | 75 | 68 | 17 | 70.0 | " | " | |
| 21 | E C-151 I層 | 39 | 29 | 11 | (13.4) | " | " | 欠損 |
| 22 | E O-132 IIb層 | 50 | 32 | 11 | 19.3 | " | " | |

D類 石ヒ

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|-------|--------------|------|------|------|--------|----|----|----|
| No 23 | D T-126 IIa層 | 68 | 31 | 12 | 17.1 | B | D | |
| 24 | D X-103 I層 | 56 | 27 | 6 | 6.9 | " | " | |
| 25 | D W-111 I層 | 53 | 24 | 6 | (8.7) | " | " | 欠損 |
| 26 | D U-126 IIa層 | 53 | 20 | 6 | 5.4 | " | " | |

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|------|--------------|------|-----|------|-----|----|----|----|
| № 27 | D V - 115 I層 | 78 | 15 | 7 | 9.1 | B | D | |

E類 不定形石器(1)

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|------|----------------|------|-----|------|--------|----|----|----|
| № 43 | E R - 127 IIb層 | 73 | 32 | 9 | 27.0 | B | E | |
| 44 | E D - 143 I層 | 49 | 35 | 13 | 17.0 | " | " | |
| 45 | E O - 135 IIa層 | 45 | 34 | 16 | 17.9 | " | " | |
| 46 | E N - 139 I層 | 50 | 43 | 13 | 26.2 | " | " | |
| 47 | D X - 141 I層 | 37 | 32 | 16 | 14.6 | " | " | |
| 48 | E N - 136 IIb層 | 53 | 54 | 10 | (34.2) | " | " | 欠損 |
| 49 | 表 採 | 32 | 17 | 10 | (6.0) | " | " | " |
| 50 | D T - 118 I層 | 58 | 21 | 13 | 19.0 | " | " | |
| 51 | E B - 136 I層 | 33 | 18 | 8 | 54.0 | " | " | |
| 52 | E G - 148 Ib層 | 38 | 24 | 13 | 11.9 | " | " | |
| 53 | E O - 135 IIa層 | 46 | 29 | 15 | 20.4 | " | " | |
| 54 | E M - 131 IIb層 | 23 | 29 | 6 | 2.5 | " | " | |
| 55 | E C - 136 I層 | 31 | 23 | 10 | 7.1 | " | " | |
| 56 | E F - 136 IIa層 | 65 | 42 | 23 | 58.4 | " | " | |
| 57 | D S - 126 Ib層 | 58 | 39 | 16 | 37.7 | " | " | |
| 58 | E N - 136 IIb層 | 35 | 45 | 11 | 20.2 | " | " | |
| 59 | D T - 126 IIa層 | 55 | 28 | 5 | 9.0 | A | " | |
| 60 | E M - 130 IIb層 | 68 | 39 | 21 | 39.4 | B | " | |
| 61 | D X - 121 I層 | 22 | 26 | 4 | 2.2 | A | " | |
| 62 | E N - 132 IIa層 | 34 | 23 | 11 | 6.6 | " | " | |
| 63 | E M - 137 Ib層 | 47 | 31 | 12 | 13.7 | B | " | |
| 64 | E D - 129 IIa層 | 35 | 20 | 8 | 3.5 | " | " | |
| 65 | E H - 144 IIa層 | 34 | 23 | 7 | 4.4 | " | " | |
| 66 | E A - 142 I層 | 44 | 24 | 12 | (17.2) | " | " | 欠損 |
| 67 | D U - 126 Ib層 | 30 | 23 | 7 | 3.7 | " | " | |
| 68 | E B - 136 I層 | 40 | 22 | 9 | 8.2 | " | " | |
| | D Z - 119 I層 | 46 | 36 | 20 | 36.1 | " | " | |
| | 表 採 | 31 | 32 | 7 | 5.3 | " | " | |
| | E E - 130 I層 | 22 | 16 | 5 | 1.9 | " | " | |
| | E A - 142 I層 | 38 | 31 | 20 | 18.6 | " | " | |
| | E G - 145 IIb層 | 29 | 21 | 8 | 5.4 | " | " | |
| | E A - 142 I層 | 31 | 25 | 11 | 7.4 | " | " | |
| | D Z - 127 I層 | 23 | 22 | 7 | 3.8 | A | " | |
| | E C - 140 I層 | 34 | 26 | 19 | 11.2 | B | " | |

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|----|----------------|------|------|------|--------|----|----|----|
| | E O - 135 IIa層 | 28 | 20 | 8 | 3.5 | B | E | |
| | E L - 135 IIa層 | 45 | 34 | 9 | 8.4 | " | " | |
| | E B - 136 I層 | 29 | 18 | 8 | 5.4 | " | " | |
| | E A - 141 I層 | 37 | 28 | 9 | 9.4 | " | " | |
| | E O - 136 Ib層 | 43 | 40 | 9 | (19.7) | " | " | 欠損 |
| | F N - 139 I層 | 40 | 43 | 8 | 12.7 | " | " | |
| | E M - 129 IIa層 | 43 | 37 | 11 | 17.8 | " | " | |
| | E O - 135 IIa層 | 36 | 37 | 17 | 16.6 | " | " | |
| | E R - 127 IIb層 | 31 | 24 | 10 | 6.7 | " | " | |
| | E C - 157 I層 | 39 | 21 | 7 | (5.6) | " | " | 欠損 |
| | E G - 148 IIa層 | 44 | 48 | 14 | 30.2 | " | " | |
| | E N - 134 IIa層 | 57 | 56 | 19 | 46.5 | " | " | |

F類 磨製石斧

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|-------|----------------|------|------|------|--------|----|----|----|
| No 69 | E F - 139 IIa層 | 131 | 51 | 35 | 370 | E | F | |
| 70 | E D - 136 IIb層 | 50 | 36 | 16 | (42) | K | " | 欠損 |
| 71 | D Y - 116 I層 | 53 | 32 | 11 | 33 | " | " | |
| 72 | D U - 127 IIa層 | 90 | 54 | 37 | (245) | G | " | 欠損 |
| 73 | E B - 137 I層 | 101 | 36 | 31 | (43) | L | " | " |
| 74 | D W - 115 I層 | 44 | 43 | 27 | (65) | M | " | " |
| 75 | E G - 156 IIa層 | 68 | 45 | 29 | (110) | L | " | " |
| 76 | D Y - 114 I層 | 122 | 54 | 37 | 453 | " | " | |
| 77 | D S - 121 Ib層 | 97 | 34 | 21 | 101 | " | " | |
| 78 | E A - 137 I層 | 93 | 41 | 25 | 160 | " | " | |
| 79 | E C - 139 I層 | 104 | 47 | 29 | 228 | " | " | |
| 80 | D V - 126 IIa層 | 155 | 69 | 43 | 805 | " | " | |
| 81 | E F - 155 IIa層 | 109 | 36 | 25 | (165) | " | " | 欠損 |
| 82 | D V - 126 IIa層 | 156 | 52 | 36 | 447 | " | " | |
| 83 | D U - 124 IIa層 | 92 | 38 | 25 | (148) | K | " | 欠損 |
| 84 | E B - 143 I層 | 74 | 40 | 26 | (116) | M | " | " |
| 85 | E L - 134 IIb層 | 46 | 35 | 18 | (43) | L | " | " |
| 86 | E H - 129 IIa層 | 56 | 57 | 34 | (143) | I | " | " |
| 87 | E L - 121 I層 | 68 | 45 | 28 | (120) | C | " | " |
| 88 | E L - 147 I層 | 57 | 41 | 29 | (88) | M | " | " |
| 89 | D V - 118 I層 | 74 | 46 | 26 | (121) | L | " | " |
| 90 | E N - 144 I層 | 63 | 41 | 28 | (107) | " | " | " |
| 91 | E D - 157 I層 | 51 | 40 | 24 | (90) | " | " | " |

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|-------|-------------------------------|------|------|------|--------|----|----|----|
| No 92 | E L - 119 I層 | 95 | 56 | 36 | (242) | I | F | 欠損 |
| 93 | E F - 133 IIa層 | 53 | 33 | 19 | (58) | L | " | " |
| 94 | E D - 141 I層 | 71 | 45 | 28 | (130) | " | " | " |
| 95 | D T - 124 Ib層 D Y - 117 I層 | 136 | 43 | 39 | (260) | " | " | |
| 96 | E G - 153 IIa層 | 57 | 51 | 28 | (112) | C | " | 欠損 |
| 97 | E C - 136 I層 | 42 | 14 | 8 | 9 | K | " | |
| 98 | D Z - 138 I層 | 82 | 33 | 16 | 76 | C | " | |
| 99 | E F - 123 IIa層 | 71 | 31 | 14 | (50) | L | " | 欠損 |
| 100 | E C - 135 I層 | 111 | 36 | 25 | 160 | M | " | |
| 101 | D Z - 138 I層 | 104 | 43 | 26 | (186) | C | " | 欠損 |
| 102 | D Z - 137 I層 | 103 | 37 | 23 | (147) | N | " | |
| 103 | E C - 136 I層 | 83 | 27 | 16 | 54 | M | " | |
| 104 | D T - 127 Ib層 | 35 | 31 | 24 | (33) | C | " | 欠損 |
| 105 | D V - 125 IIa層 | 58 | 43 | 30 | (83) | L | " | " |
| 106 | D U - 140 I層 | 28 | 27 | 12 | (14) | C | " | " |
| 107 | E F - 133 IIa層 | 57 | 39 | 22 | (72) | L | " | " |
| 108 | D V - 121 IIa層 | 60 | 38 | 25 | (81) | " | " | " |
| 109 | E G - 149 Ib層 | 52 | 38 | 25 | (71) | " | " | " |
| 110 | E S - 143 IIa層 | 36 | 44 | 21 | (47) | " | " | " |
| | D T - 123 IIa層 | 65 | 26 | 25 | (64) | " | " | " |
| | E G - 131 IIa層 | 46 | 31 | 20 | (28) | M | " | " |
| | E H - 131 IIa層 | 47 | 26 | 12 | (25) | " | " | " |
| | E L - 122 IIa層 | 26 | 38 | 14 | (23) | L | " | " |
| | D V - 127 IIb層 | 84 | 45 | 25 | (133) | M | " | " |
| | E F - 139 IIa層 | 61 | 22 | 19 | (17) | L | " | " |
| | E N - 129 IIb層 | 29 | 39 | 11 | (12) | M | " | " |
| | E O - 136 IIb層 | 26 | 44 | 13 | (15) | C | " | " |
| | D Z - 150 I層 | 39 | 31 | 5 | (4) | M | " | " |
| | E O - 144 IIb層 | 53 | 41 | 25 | (78) | C | " | " |

G類 打製石斧

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|----------------|------|------|------|-----|----|----|----|
| No 111 | E O - 133 IIb層 | 71 | 44 | 12 | 42 | B | G | |
| 112 | D S - 137 I層 | 71 | 41 | 14 | 62 | K | " | |
| 113 | D U - 136 I層 | 48 | 28 | 11 | 22 | G | " | |
| 114 | D U - 123 IIa層 | 64 | 41 | 22 | 80 | K | " | |
| 115 | E C - 135 I層 | 58 | 34 | 13 | 40 | I | " | |
| 116 | E C - 136 I層 | 71 | 32 | 22 | 60 | F | " | |

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|---------------|------|------|------|-----|----|----|----|
| No 117 | E A -139 I層 | 79 | 45 | 30 | 127 | I | G | |
| 118 | E A -141 I層 | 95 | 45 | 19 | 124 | N | " | |
| 119 | D V -126 Ib層 | 119 | 52 | 25 | 212 | M | " | |
| 120 | E N -129 IIb層 | 50 | 49 | 13 | 32 | B | " | |
| 121 | D Z -138 I層 | 53 | 33 | 14 | 32 | F | " | |
| 122 | D W -123 I層 | 69 | 43 | 23 | 90 | K | " | |
| 123 | E C -129 II層 | 70 | 41 | 12 | 55 | L | " | |
| 124 | D Z -140 I層 | 65 | 37 | 13 | 46 | N | " | |
| 125 | E N -148 IIb層 | 53 | 33 | 20 | 46 | I | " | |
| 126 | E C -158 I層 | 79 | 45 | 20 | 99 | G | " | |
| 127 | D Y -116 I層 | 69 | 40 | 17 | 65 | I | " | |
| 128 | E C -134 I層 | 52 | 27 | 11 | 24 | F | " | |
| 129 | D W -122 IIb層 | 87 | 42 | 21 | 94 | I | " | |
| 130 | 表 採 | 68 | 33 | 16 | 47 | F | " | |
| 131 | 表 採 | 125 | 70 | 35 | 424 | L | " | |
| 132 | D Z -152 I層 | 38 | 43 | 12 | 28 | F | " | 欠損 |
| 133 | E G -131 IIa層 | 62 | 36 | 17 | 41 | H | " | " |
| 134 | E E -145 IIa層 | 138 | 70 | 39 | 468 | I | " | |
| 135 | E L -123 IIa層 | 74 | 56 | 39 | 163 | G | " | |
| 136 | D Y -146 I層 | 91 | 61 | 35 | 251 | L | " | |
| 137 | E A -141 I層 | 47 | 29 | 14 | 23 | I | " | |
| | E A -140 I層 | 56 | 32 | 8 | 17 | F | " | |
| | D Z -136 IIa層 | 66 | 50 | 20 | 78 | I | " | |

H類 磨石

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|---------------|------|------|------|-----|----|----|----|
| No 138 | D Z -137 I層 | 96 | 65 | 27 | 550 | L | H | |
| 139 | E C -152 I層 | 63 | 39 | 13 | 50 | G | " | |
| 140 | E A -137 I層 | 107 | 68 | 50 | 570 | I | " | |
| 141 | E N -120 IIa層 | 118 | 43 | 17 | 150 | G | " | |
| 142 | E A -137 I層 | 110 | 76 | 47 | 680 | L | " | |
| 143 | E E -130 I層 | 91 | 32 | 23 | 100 | I | " | |
| 144 | D Z -137 I層 | 106 | 80 | 44 | 690 | M | " | |
| 145 | E H -124 IIa層 | 84 | 29 | 18 | 110 | G | " | |
| | D T -122 IIa層 | 103 | 68 | 32 | 430 | I | " | |
| | E C -136 I層 | 131 | 78 | 33 | 580 | G | " | |
| | E L -127 IIa層 | 115 | 86 | 43 | 650 | I | " | |
| | D V -124 IIa層 | 107 | 75 | 52 | 840 | I | " | |

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|----|-------------|------|------|------|--------|----|----|----|
| | EO-142 I層 | 95 | 71 | 30 | 300 | I | H | |
| | EH-156 IIa層 | 109 | 40 | 23 | 190 | " | " | |
| | EL-121 I層 | 113 | 71 | 32 | 480 | " | " | |
| | DZ-136 I層 | 122 | 78 | 49 | 500 | " | " | |
| | EN-136 IIb層 | 77 | 76 | 77 | (560) | F | " | |

I類 磨石+敲石+凹石

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|-------------|------|------|------|--------|----|----|----|
| No 146 | EB-149 I層 | 114 | 66 | 52 | 930 | I | I | |
| 147 | EL-120 I層 | 109 | 71 | 38 | 440 | " | " | |
| 148 | EA-146 I層 | 109 | 55 | 30 | 440 | " | " | |
| 149 | EB-154 I層 | 131 | 80 | 26 | 520 | " | " | |
| 150 | ED-136 IIa層 | 112 | 75 | 43 | 700 | " | " | |
| 151 | EG-148 IIa層 | 102 | 61 | 48 | 500 | " | " | |
| 152 | DU-118 I層 | 101 | 63 | 33 | 320 | " | " | |
| 153 | EB-136 I層 | 95 | 33 | 16 | 70 | K | " | |
| 154 | DX-121 I層 | 176 | 56 | 31 | 670 | J | " | |
| 155 | EO-148 I層 | 107 | 79 | 36 | 480 | " | " | |
| 156 | EM-149 Ib層 | 121 | 68 | 53 | 680 | I | " | |
| 157 | EF-146 IIa層 | 105 | 73 | 25 | 360 | " | " | |
| 158 | DV-120 I層 | 120 | 61 | 33 | 460 | " | " | |
| 159 | EL-138 I層 | 73 | 68 | 30 | 270 | L | " | |
| 160 | EA-143 I層 | 69 | 70 | 36 | (300) | I | " | 欠損 |
| 161 | EO-132 IIa層 | 94 | 59 | 32 | 220 | " | " | |
| 162 | EM-149 Ib層 | 129 | 72 | 40 | 510 | " | " | |
| 163 | EM-117 I層 | 130 | 73 | 25 | 360 | " | " | |
| 164 | EM-128 IIa層 | 98 | 49 | 42 | (240) | " | " | 欠損 |
| 165 | DV-117 I層 | 124 | 58 | 50 | 610 | " | " | |
| 166 | EQ-128 IIa層 | 98 | 49 | 42 | (230) | " | " | 欠損 |
| | DZ-137 I層 | 129 | 62 | 36 | 520 | " | " | |
| | DX-121 I層 | 138 | 77 | 58 | 870 | " | " | |
| | 表 採 | 93 | 64 | 40 | 46 | " | " | |
| | EH-149 IIa層 | 103 | 36 | 23 | 160 | J | " | |

J類 敲石

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|-------------|------|------|------|-----|----|----|----|
| No 167 | DZ-136 IIa層 | 62 | 51 | 50 | 220 | H | J | |
| 168 | EH-128 IIa層 | 61 | 62 | 46 | 210 | " | " | |

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|-------|----------------|------|------|------|-----|----|----|----|
| № 169 | E E - 124 IIa層 | 55 | 46 | 40 | 140 | H | J | |
| 170 | E N - 144 I層 | 66 | 55 | 50 | 270 | " | " | |
| 171 | E M - 128 IIa層 | 67 | 61 | 53 | 280 | " | " | |
| 172 | E N - 118 I層 | 55 | 50 | 43 | 170 | " | " | |
| 173 | E G - 133 IIa層 | 60 | 58 | 42 | 210 | " | " | |
| 174 | D X - 124 IIb層 | 52 | 58 | 33 | 130 | " | " | |
| 175 | D S - 124 IIa層 | 46 | 44 | 25 | 70 | " | " | |
| 176 | D Z - 119 I層 | 56 | 56 | 39 | 190 | " | " | |
| 177 | E G - 153 IIa層 | 54 | 50 | 38 | 150 | " | " | |
| 178 | E C - 151 I層 | 67 | 57 | 31 | 160 | " | " | |
| 179 | D R - 123 IIa層 | 59 | 44 | 23 | 90 | " | " | |
| 180 | E C - 134 I層 | 49 | 51 | 24 | 80 | " | " | |
| 181 | D V - 119 I層 | 57 | 58 | 33 | 160 | " | " | |
| 182 | E N - 131 IIa層 | 64 | 58 | 20 | 100 | J | " | |
| 183 | D W - 125 IIa層 | 63 | 66 | 48 | 290 | H | " | |
| 184 | E H - 127 IIa層 | 57 | 58 | 43 | 220 | " | " | |
| 185 | D X - 116 I層 | 54 | 41 | 33 | 110 | " | " | |
| 186 | D Y - 116 I層 | 60 | 52 | 42 | 190 | " | " | |
| 187 | D T - 120 I層 | 77 | 68 | 29 | 210 | " | " | |
| 188 | E N - 132 IIb層 | 44 | 44 | 34 | 100 | " | " | |
| 189 | E N - 137 IIb層 | 59 | 48 | 47 | 220 | " | " | |
| 190 | E N - 137 II層 | 74 | 43 | 32 | 150 | " | " | |
| 191 | E B - 153 I層 | 66 | 47 | 44 | 190 | " | " | |
| 192 | D U - 128 I層 | 59 | 43 | 41 | 170 | " | " | |
| 193 | E F - 138 IIa層 | 77 | 59 | 42 | 290 | " | " | |
| 194 | E F - 124 Ib層 | 50 | 49 | 43 | 130 | " | " | |
| 195 | E C - 132 I層 | 54 | 53 | 45 | 180 | " | " | |
| 196 | D U - 128 I層 | 76 | 58 | 41 | 240 | " | " | |
| 197 | E C - 140 I層 | 59 | 50 | 32 | 120 | " | " | |
| 198 | E N - 149 IIa層 | 81 | 59 | 31 | 250 | " | " | |
| 199 | E H - 135 IIa層 | 70 | 52 | 39 | 200 | " | " | |
| 200 | E E - 135 IIa層 | 83 | 54 | 44 | 270 | " | " | |
| 201 | E L - 121 IIa層 | 71 | 47 | 44 | 220 | J | " | |
| 202 | E A - 150 I層 | 79 | 71 | 40 | 290 | H | " | |
| 203 | E M - 127 I層 | 89 | 67 | 39 | 310 | " | " | |
| 204 | D X - 117 I層 | 70 | 76 | 45 | 330 | " | " | |
| 205 | E N - 134 Ib層 | 114 | 73 | 58 | 560 | J | " | |
| 206 | E D - 136 IIa層 | 119 | 63 | 43 | 490 | N | " | |

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|-------|----------------|------|-----|------|--------|----|----|----|
| № 207 | E G - 148 IIa層 | 88 | 67 | 38 | 350 | E | J | |
| 208 | E C - 154 I層 | 71 | 51 | 38 | 230 | H | " | |
| 209 | E O - 136 Ib層 | 93 | 51 | 35 | 250 | L | " | |
| 210 | E E - 153 IIa層 | 74 | 45 | 55 | 340 | H | " | |
| 211 | E H - 130 IIa層 | 81 | 77 | 49 | 390 | " | " | |
| 212 | D U - 130 I層 | 92 | 54 | 41 | 270 | " | " | |
| | D Z - 136 IIa層 | 90 | 79 | 53 | 570 | " | " | |
| | E G - 134 I層 | 55 | 59 | 41 | (150) | " | " | 欠損 |
| | E A - 142 I層 | 96 | 58 | 38 | (260) | " | " | " |
| | E G - 133 Ib層 | 53 | 40 | 31 | (70) | " | " | " |
| | D U - 128 I層 | 66 | 56 | 47 | 260 | " | " | " |
| | D U - 120 I層 | 69 | 45 | 33 | (80) | " | " | " |
| | E O - 134 IIa層 | 61 | 56 | 47 | 240 | " | " | |
| | E F - 154 IIa層 | 74 | 68 | 18 | (100) | " | " | 欠損 |
| | E H - 132 IIa層 | 56 | 49 | 26 | (70) | N | " | " |
| | E M - 121 I層 | 68 | 41 | 38 | (140) | H | " | " |
| | E C - 133 I層 | 69 | 62 | 27 | (160) | " | " | |
| | E M - 122 I層 | 70 | 71 | 55 | (400) | " | " | 欠損 |
| | E H - 145 IIa層 | 83 | 70 | 43 | 330 | " | " | |
| | E M - 120 IIa層 | 86 | 56 | 55 | 370 | " | " | |
| | E O - 120 IIa層 | 64 | 52 | 32 | (120) | " | " | 欠損 |
| | E O - 145 IIa層 | 70 | 70 | 63 | 450 | " | " | |
| | D V - 117 I層 | 54 | 45 | 30 | (90) | " | " | 欠損 |
| | E M - 119 IIa層 | 51 | 53 | 37 | (130) | " | " | " |
| | E R - 145 Ib層 | 47 | 64 | 45 | 230 | " | " | |
| | D W - 116 IIb層 | 70 | 67 | 48 | 300 | " | " | |
| | E A - 135 I層 | 87 | 59 | 39 | 300 | " | " | |
| | E A - 137 I層 | 81 | 60 | 39 | 280 | " | " | |
| | D U - 123 IIa層 | 89 | 71 | 59 | 480 | " | " | |
| | D Y - 118 I層 | 53 | 44 | 20 | (70) | " | " | |
| | E H - 136 Ib層 | 78 | 54 | 44 | (230) | " | " | 欠損 |
| | D X - 117 I層 | 74 | 62 | 54 | 650 | " | " | |
| | D W - 124 IIb層 | 52 | 69 | 39 | 240 | " | " | |
| | E L - 130 IIb層 | 70 | 52 | 45 | 220 | " | " | |
| | E C - 156 I層 | 65 | 58 | 54 | 290 | " | " | |
| | D Y - 142 I層 | 55 | 56 | 46 | 170 | " | " | |
| | E O - 130 IIb層 | 56 | 59 | 45 | 190 | " | " | |
| | E N - 117 I層 | 53 | 52 | 59 | (240) | " | " | 欠損 |

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|----|-------------|------|------|------|--------|----|----|----|
| | DZ-141 I層 | 75 | 56 | 36 | 210 | H | J | |
| | EC-139 I層 | 64 | 57 | 59 | 270 | " | " | |
| | DX-121 I層 | 72 | 54 | 51 | 260 | " | " | |
| | EM-146 I層 | 49 | 39 | 28 | (54) | " | " | 欠損 |
| | DZ-136 I層 | 41 | 28 | 12 | (16) | " | " | " |
| | ER-146 IIa層 | 44 | 29 | 18 | (25) | " | " | " |
| | EG-135 IIa層 | 111 | 71 | 39 | 420 | I | " | |
| | DT-123 IIa層 | 51 | 43 | 24 | (50) | H | " | 欠損 |
| | EC-139 I層 | 55 | 45 | 28 | (90) | " | " | " |
| | EG-142 IIa層 | 120 | 77 | 26 | (390) | " | " | " |
| | EE-130 IIa層 | 79 | 78 | 31 | (240) | J | " | " |
| | DV-117 I層 | 70 | 61 | 49 | 290 | H | " | |
| | DS-124 IIa層 | 70 | 41 | 34 | (100) | " | " | |
| | DS-123 Ib層 | 52 | 49 | 26 | 80 | " | " | |

K類 礫器

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|-------------|------|------|------|-----|----|----|----|
| Na 213 | DU-121 IIa層 | 84 | 55 | 22 | 200 | I | K | |
| 214 | EL-150 IIa層 | 83 | 74 | 41 | 320 | " | " | |
| 215 | DZ-152 I層 | 66 | 76 | 15 | 100 | " | " | |
| 216 | EG-130 IIa層 | 52 | 35 | 12 | 33 | " | " | |
| 217 | DT-132 IIa層 | 69 | 64 | 26 | 120 | " | " | |
| 218 | EO-136 Ib層 | 77 | 41 | 10 | 56 | " | " | |
| 219 | EA-125 I層 | 44 | 34 | 9 | 18 | C | " | |
| 220 | EA-124 I層 | 77 | 46 | 21 | 105 | F | " | |
| | ED-154 I層 | 46 | 42 | 13 | 35 | " | " | |
| | EA-136 Ib層 | 63 | 62 | 32 | 150 | H | " | |
| | EO-136 Ib層 | 85 | 36 | 31 | 134 | F | " | |

L類 石核(コア)

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|-------------|------|------|------|-----|----|----|----|
| Na 221 | EH-122 IIa層 | 119 | 141 | 67 | 900 | E | L | |
| 222 | ED-136 IIa層 | 71 | 37 | 31 | 71 | B | " | |
| 223 | DU-128 I層 | 54 | 53 | 38 | 142 | " | " | |
| 224 | EH-147 Ib層 | 59 | 45 | 35 | 93 | " | " | |
| | EG-133 IIa層 | 57 | 37 | 40 | 88 | A | " | |
| | EA-122 I層 | 44 | 36 | 23 | 36 | B | " | |

M類 砥石・石皿

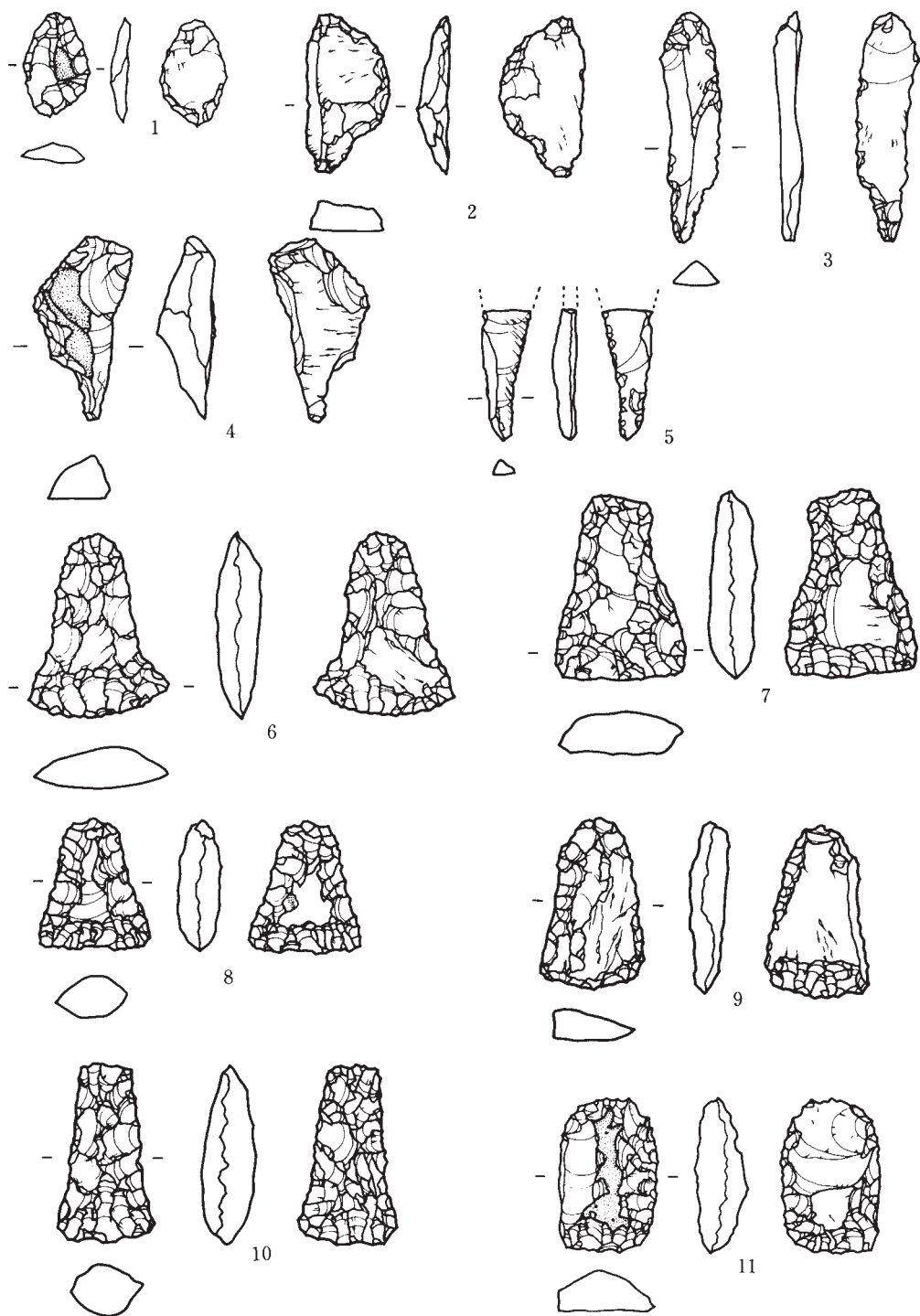
| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|-------------------------------|------|------|------|---------|----|----|----|
| No 225 | DW-124 I層 | 215 | 147 | 45 | 2,260 | G | M | |
| 226 | DY-116 I層 | 89 | 45 | 28 | (140) | " | " | 欠損 |
| 227 | EC-139 I層 | 120 | 82 | 37 | (410) | J | " | |
| 228 | EQ-151 IIa層 | 58 | 159 | 71 | 360 | E | " | 欠損 |
| 229 | DU-123 DU-124 Ib層 | 185 | 106 | 65 | (1,720) | I | " | " |
| 230 | EQ-144 I層 | 182 | 160 | 63 | 1,080 | E | " | " |
| 231 | EA-137 I層 | 240 | 158 | 55 | 3,320 | J | " | " |
| 232 | 表 採 | 224 | 200 | 40 | 2,760 | I | " | |
| 233 | DZ-136 IIa層 | 225 | 127 | 37 | 1,120 | J | " | |
| 234 | EE-140 Ib層 | 240 | 126 | 64 | (3,170) | E | " | 欠損 |
| 235 | EO-139 DZ-139 I・IIb層 I層 | 185 | 106 | 65 | (1,720) | I | " | " |
| 236 | EL-137 Ib層 | 133 | 85 | 61 | (840) | J | " | " |
| 237 | DZ-136 IIa層 | 117 | 85 | 59 | (400) | E | " | " |
| 238 | DX-124 IIb層 | 148 | 54 | 17 | (90) | G | " | " |
| 239 | DZ-136 I層 | 127 | 65 | 57 | (390) | J | " | " |
| | DU-124 I層 | 420 | 82 | 105 | 15,000 | I | " | |
| | DU-114 I層 | 118 | 55 | 12 | (96) | I | " | 欠損 |

N類 円盤状石製品

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|-------------|------|------|------|-----|----|----|----|
| No 240 | EM-119 IIa層 | 5.8 | 5.3 | 1.0 | 51 | D | N | |

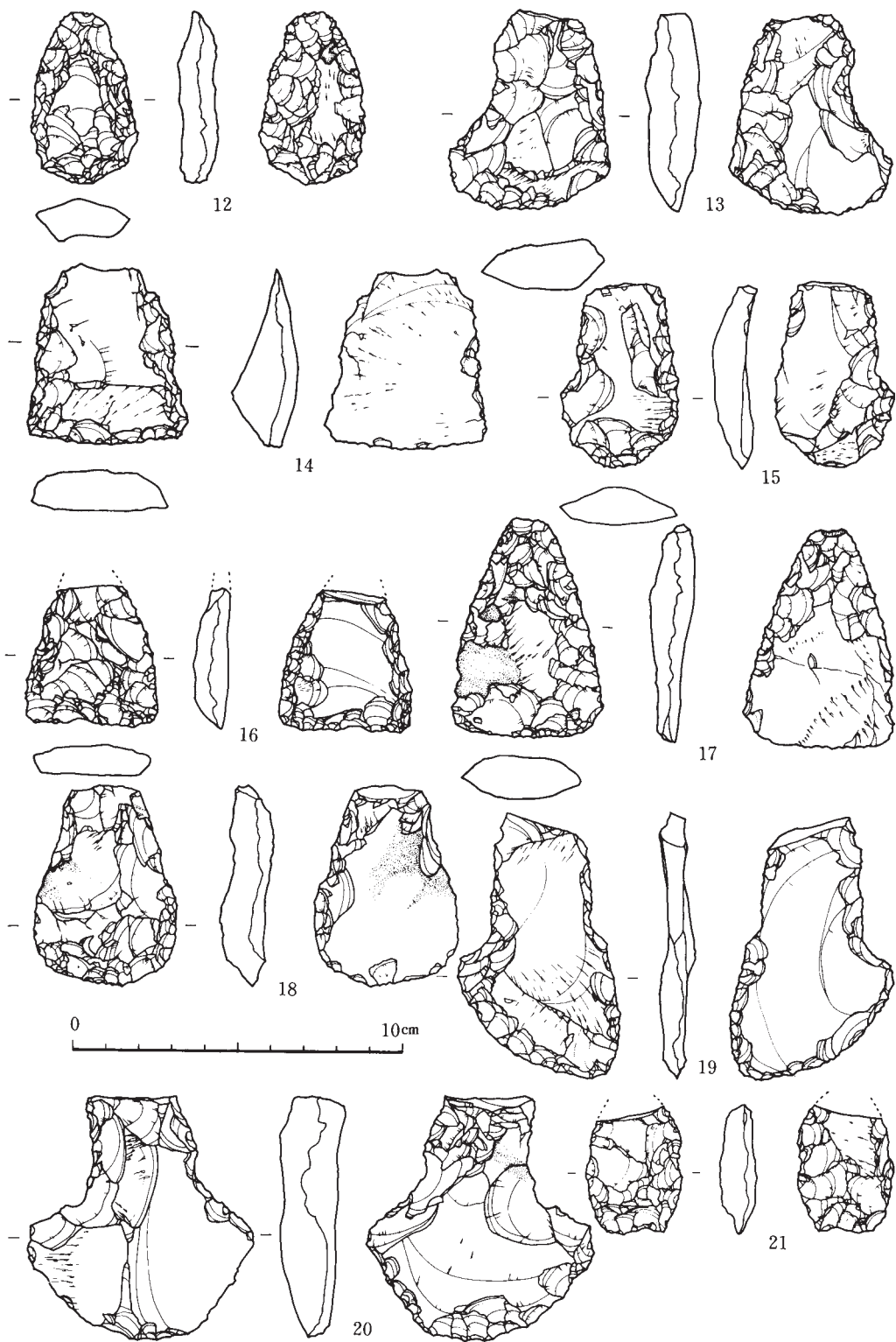
O類 有孔石製品

| 番号 | 出土位置 | 長さmm | 幅 mm | 厚さmm | 重量g | 石質 | 分類 | 備考 |
|--------|-------------|------|------|------|------|----|----|----|
| No 241 | EM-129 Ib層 | 29 | 19 | 7 | (7) | P | O | 欠損 |
| 242 | EB-136 I層 | 26 | 29 | 16 | 19 | P | " | |
| 243 | EC-143 I層 | 36 | 29 | 14 | 19 | B | " | |
| 244 | EG-144 Ib層 | 71 | 33 | 32 | 81 | G | " | |
| 245 | EA-140 I層 | 44 | 32 | 24 | (38) | A | " | 欠損 |
| 246 | DT-127 Ib層 | 44 | 20 | 20 | 14 | B | " | |
| 247 | EF-147 IIb層 | 109 | 61 | 29 | 81 | E | " | |

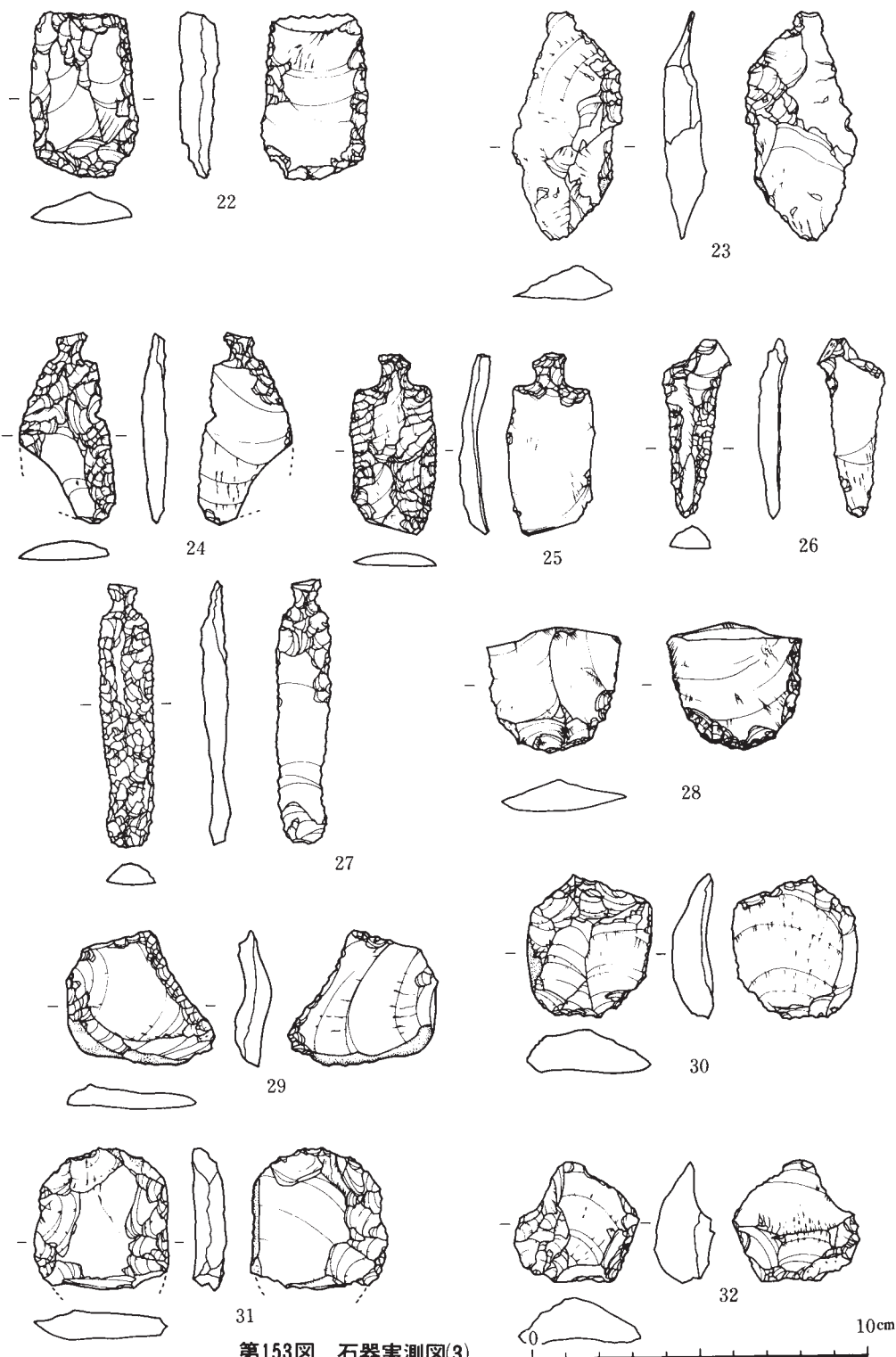


第151图 石器实测图(1)

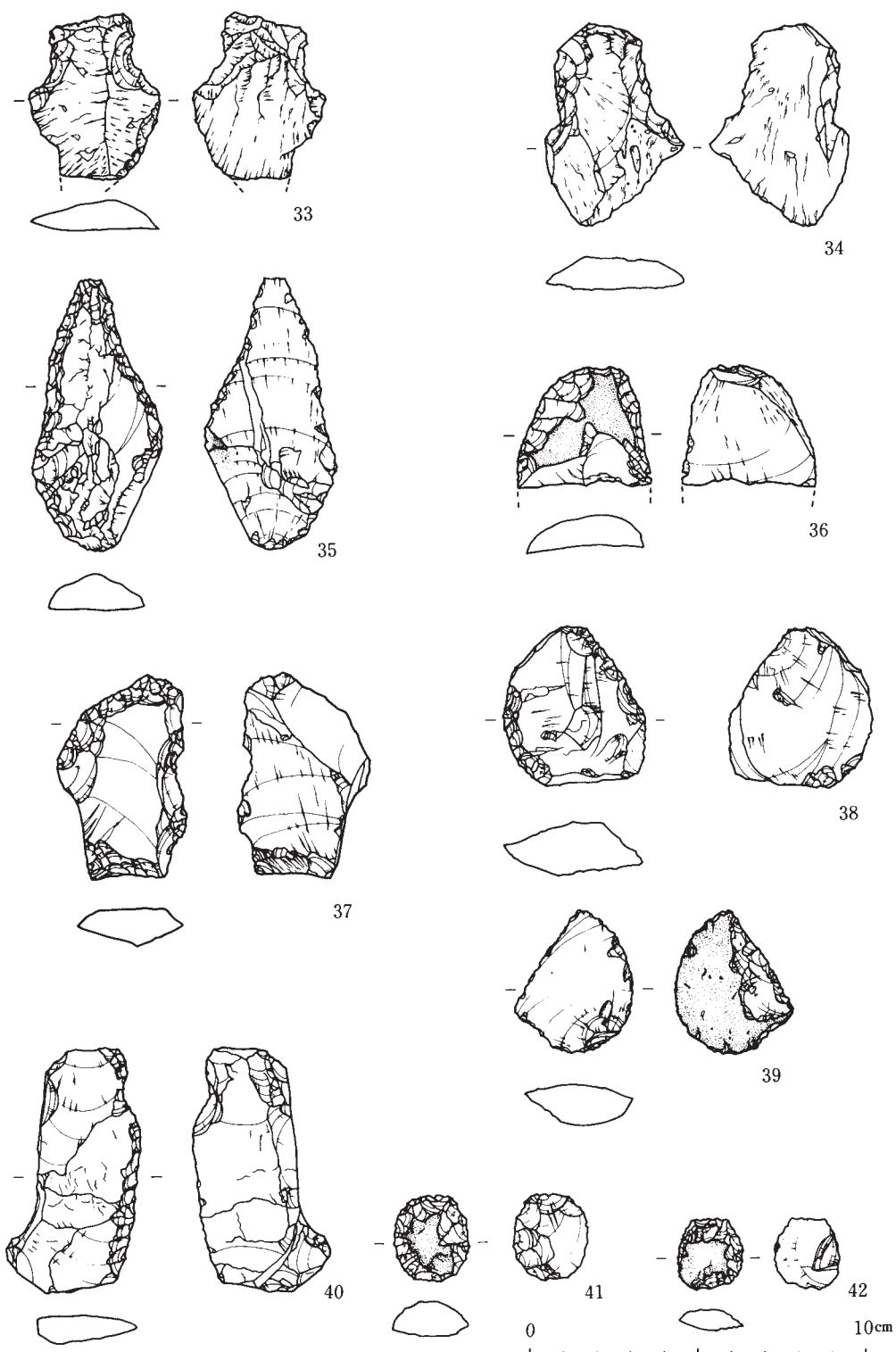
0 5cm



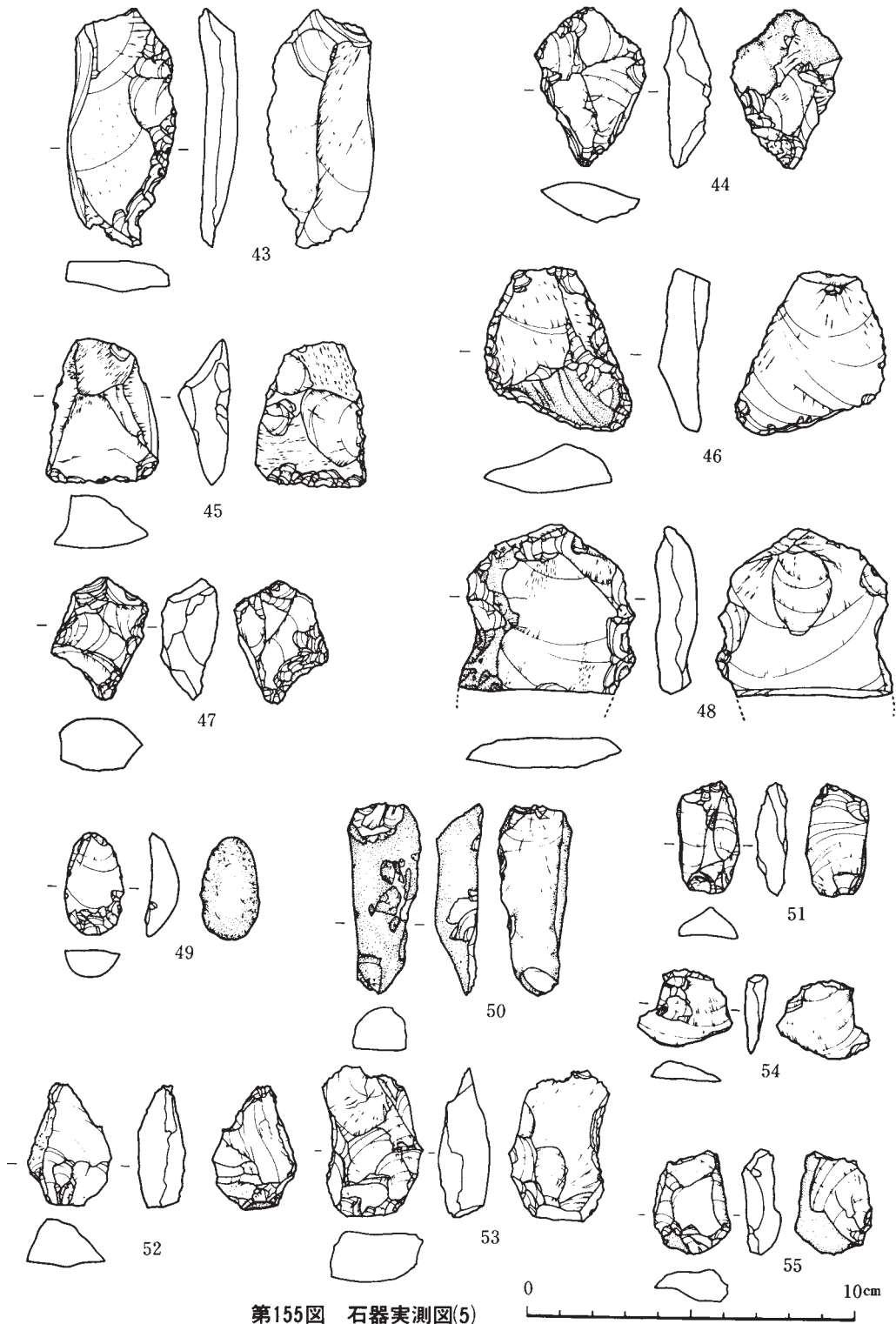
第152图 石器实测图(2)



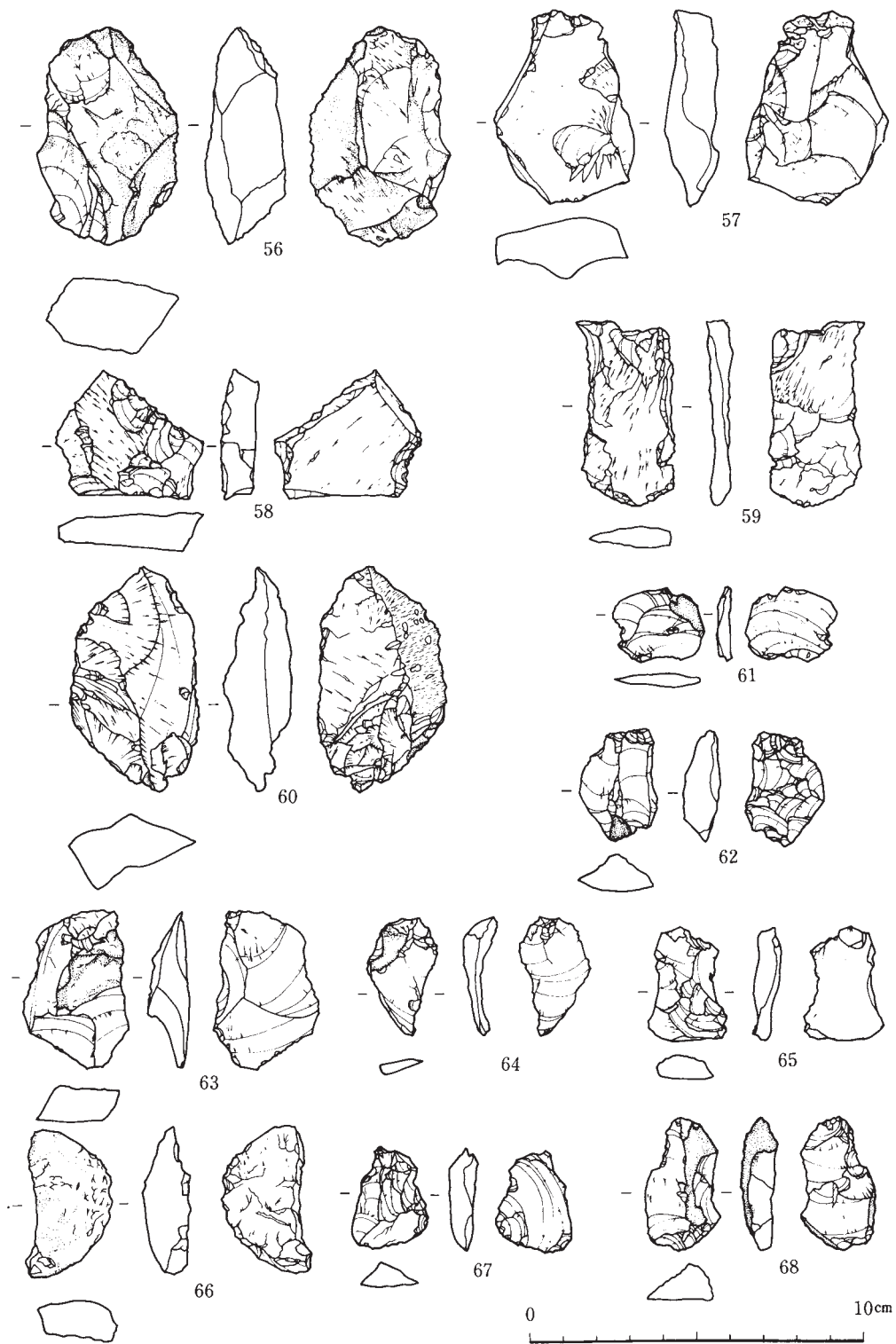
第153图 石器实测图(3)



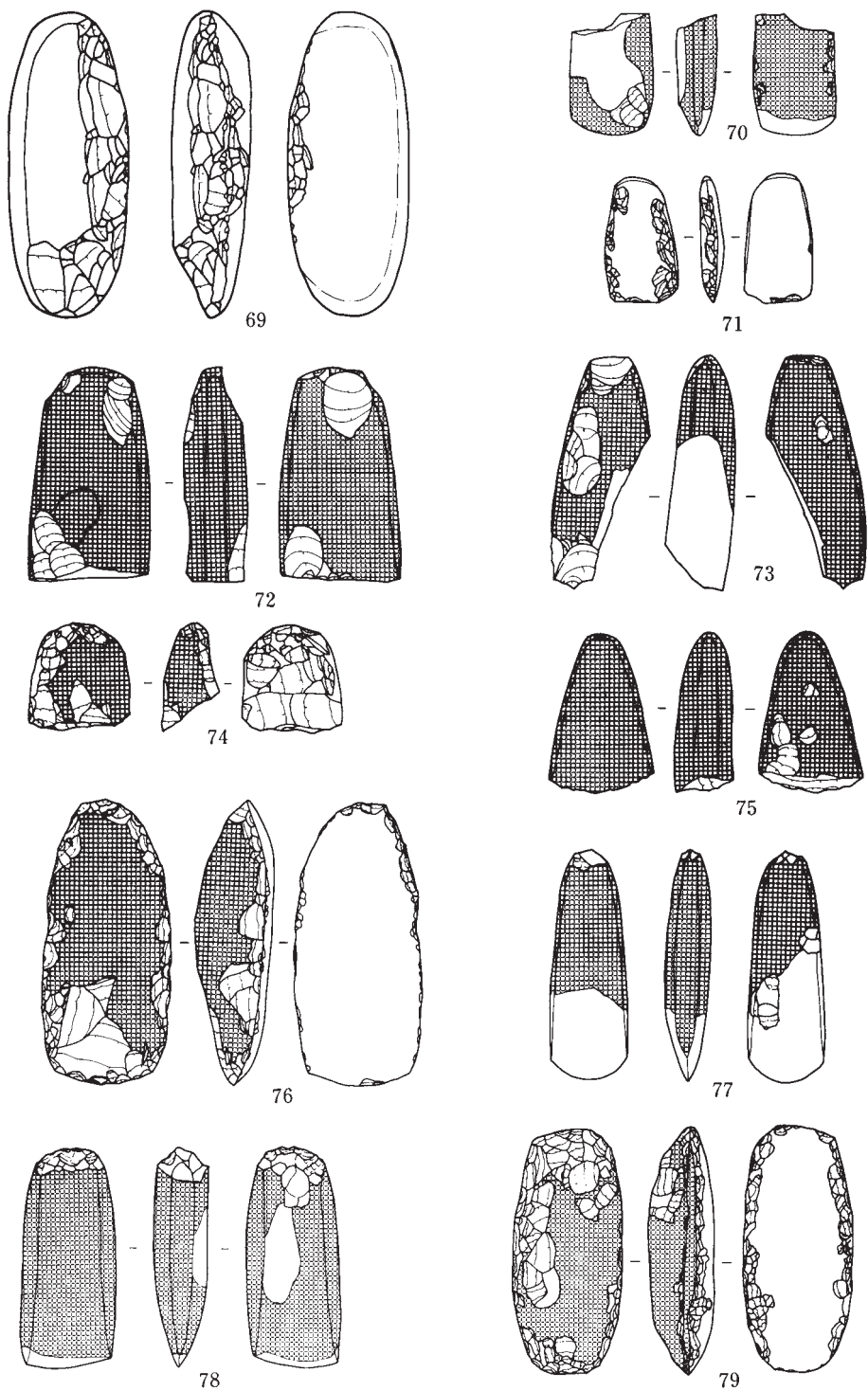
第154图 石器实测图(4)



第155图 石器实测图(5)

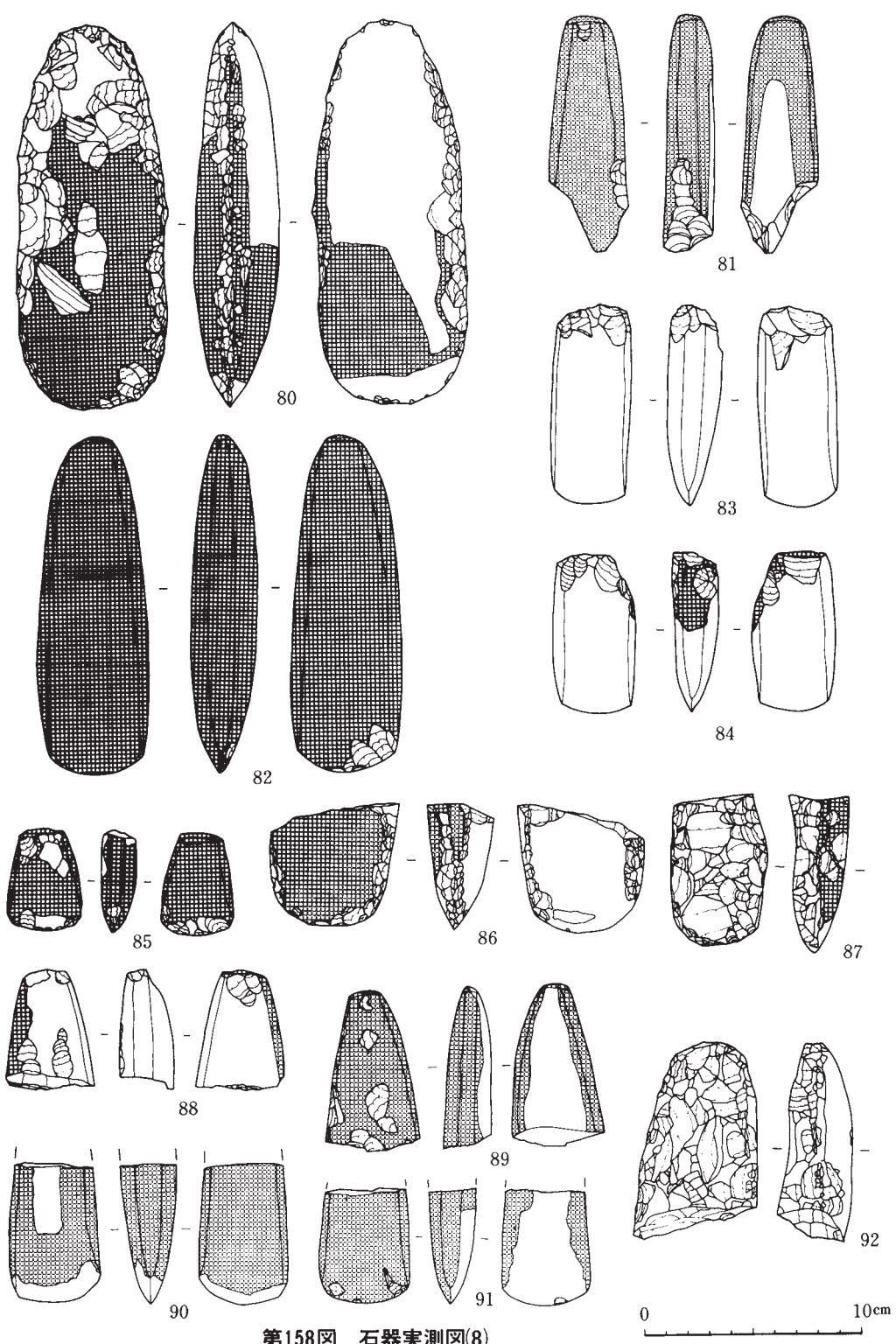


第156图 石器实测图(6)

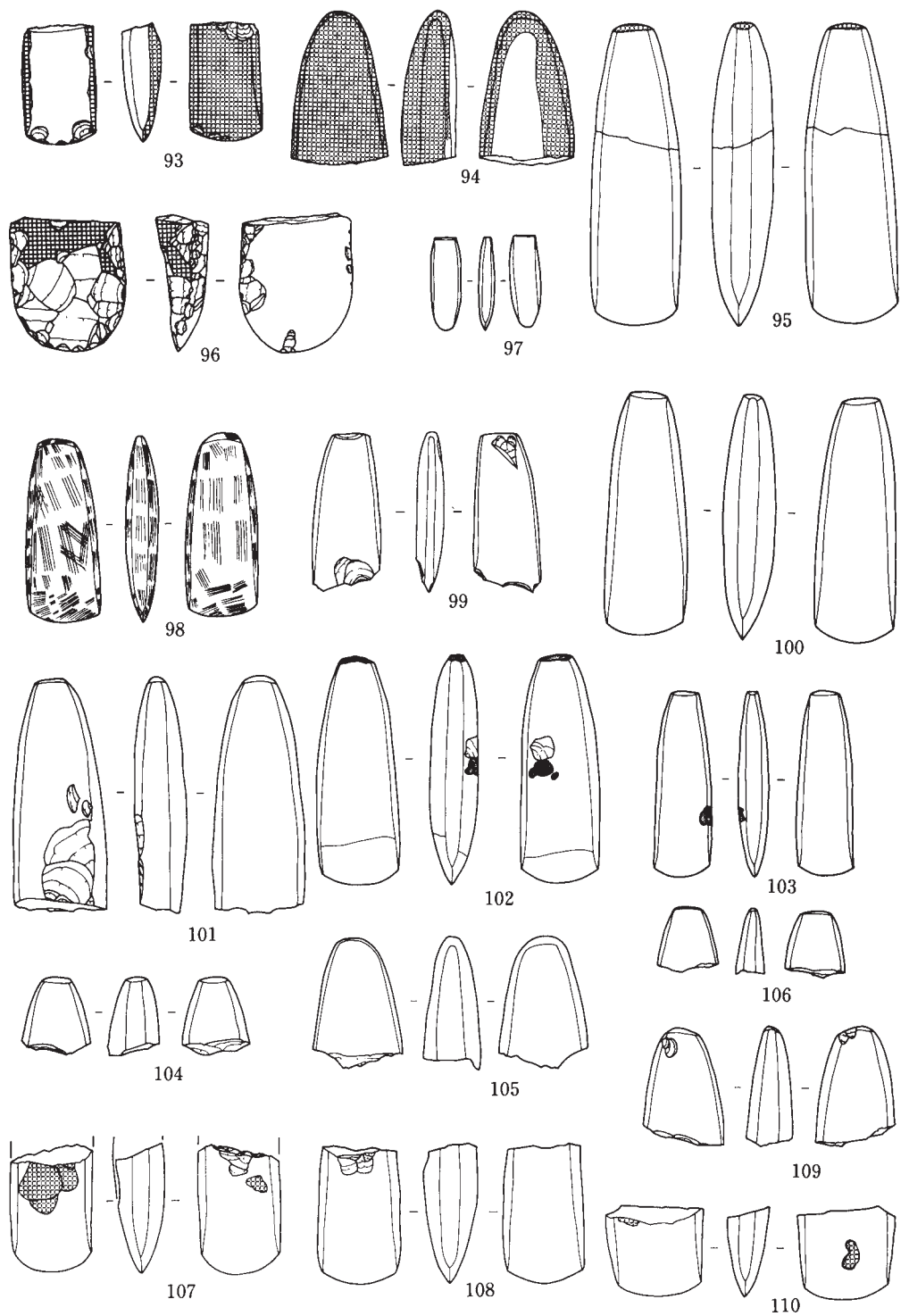


第157图 石器实测图(7)

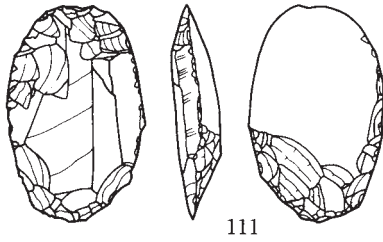
0 10cm



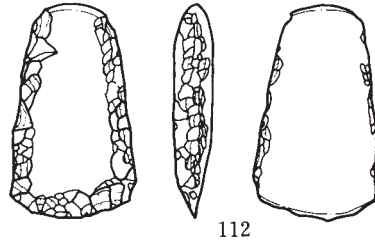
第158图 石器实测图(8)



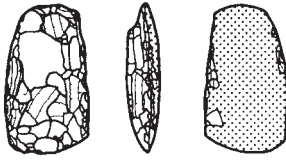
第159图 石器实测图(9)



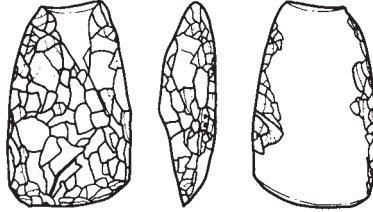
111



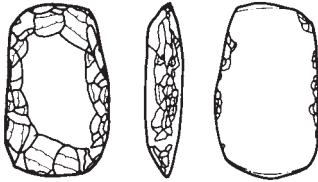
112



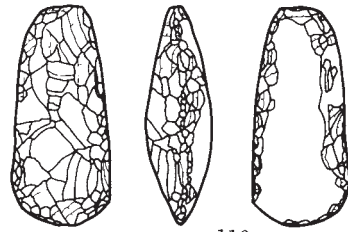
113



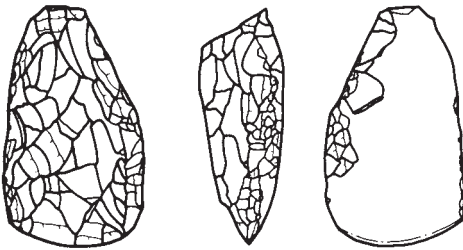
114



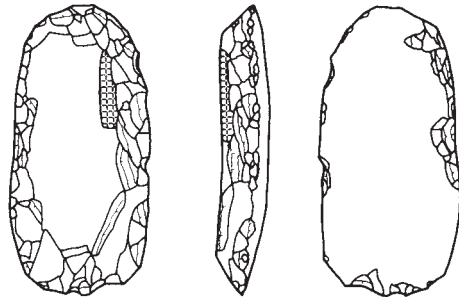
115



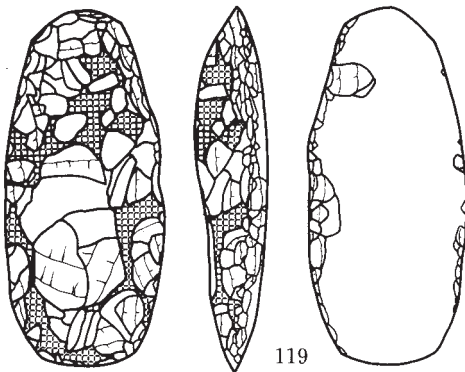
116



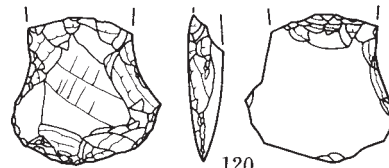
117



118



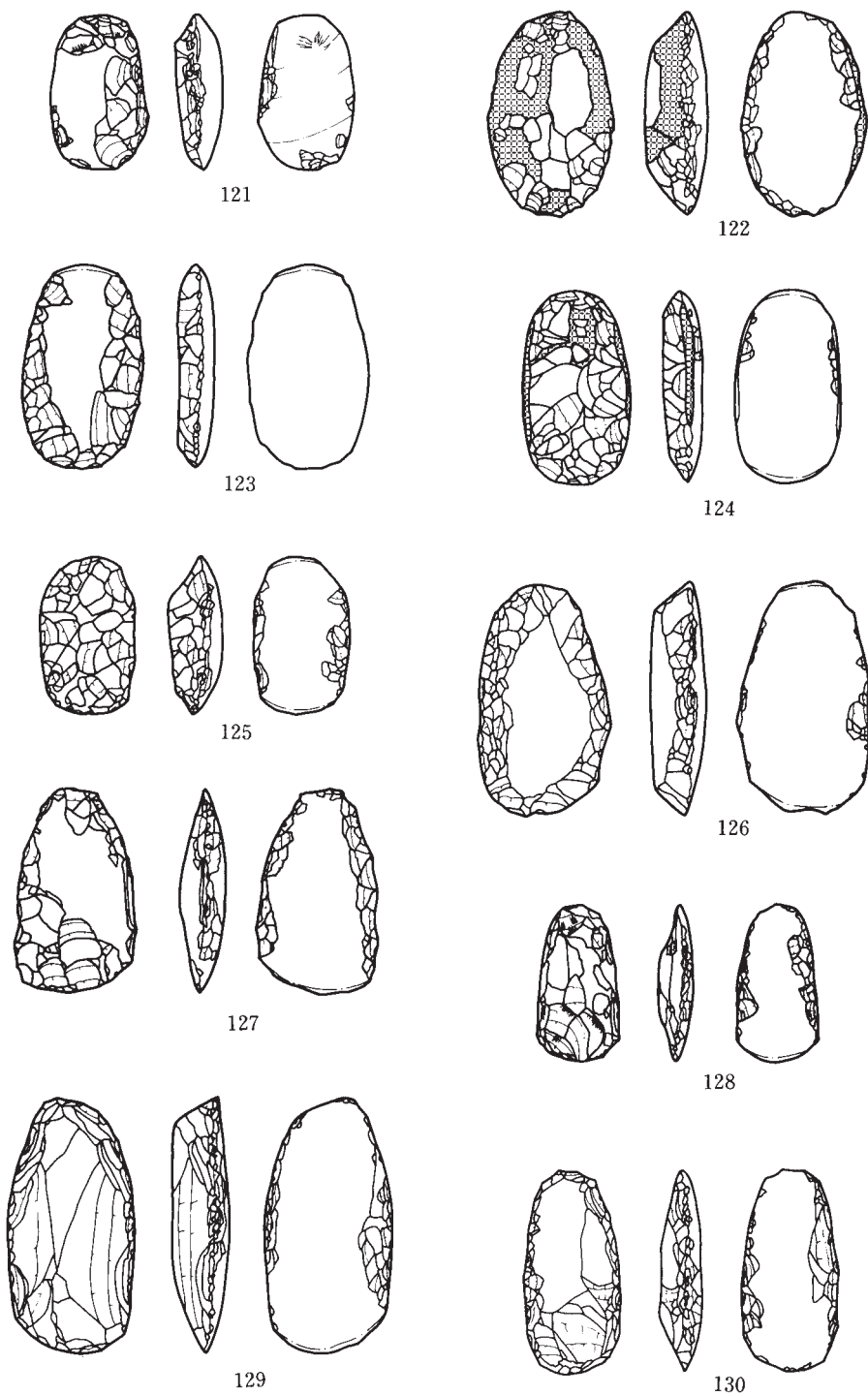
119



120

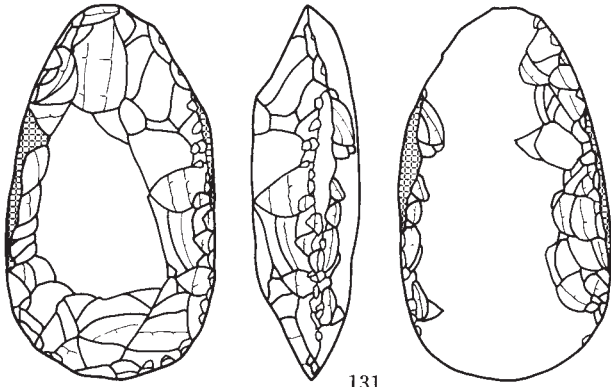
第160图 石器实测图(10)



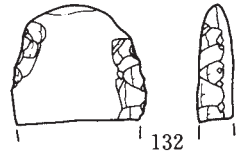


第161図 石器実測図(11)

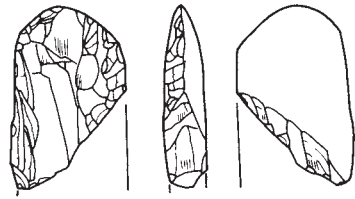




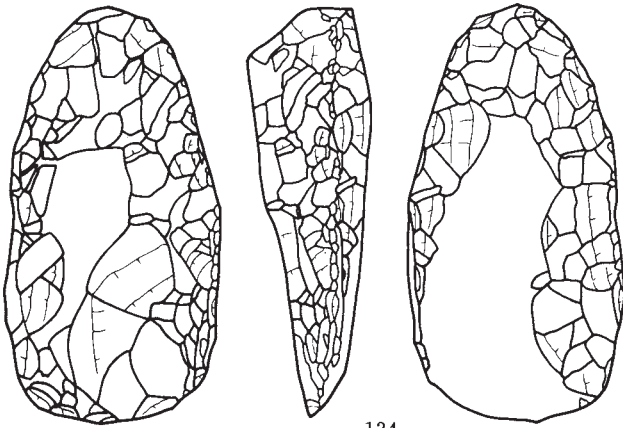
131



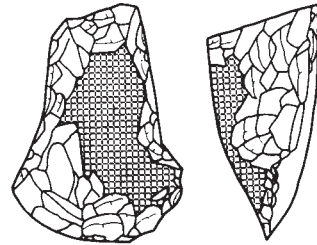
132



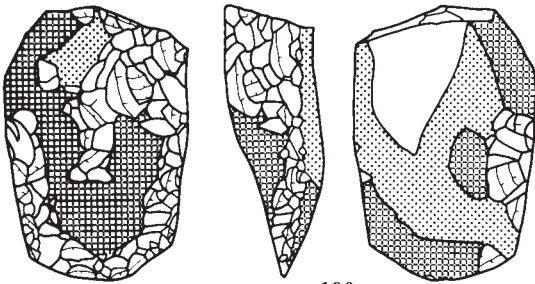
133



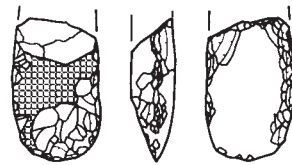
134



135



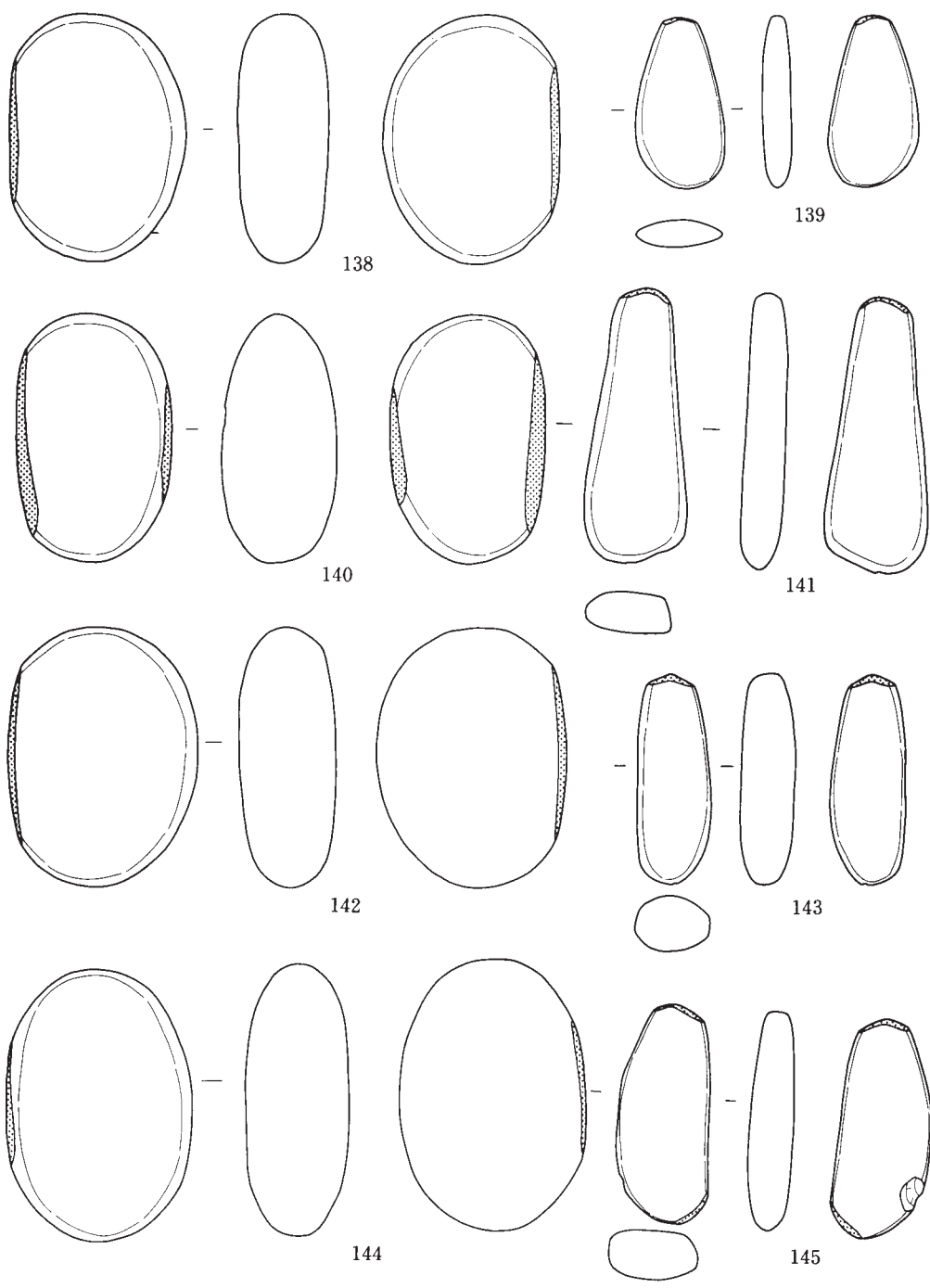
136



137

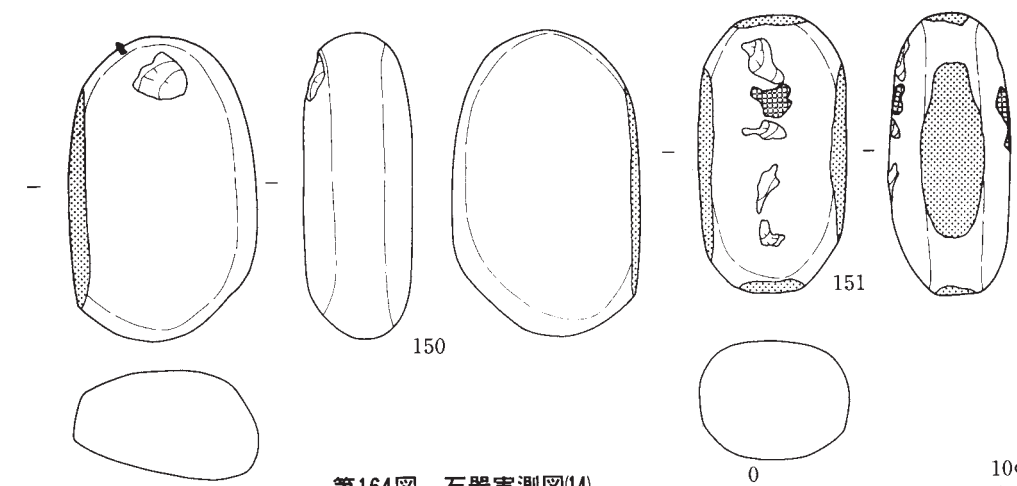
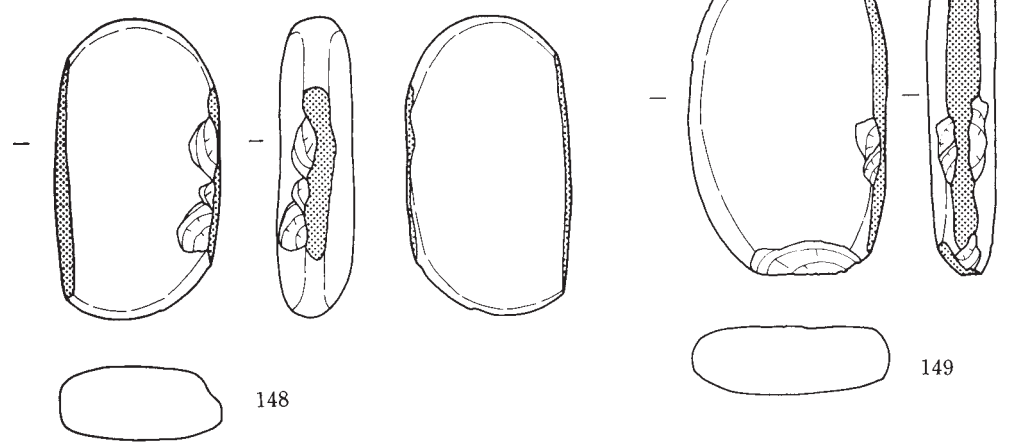
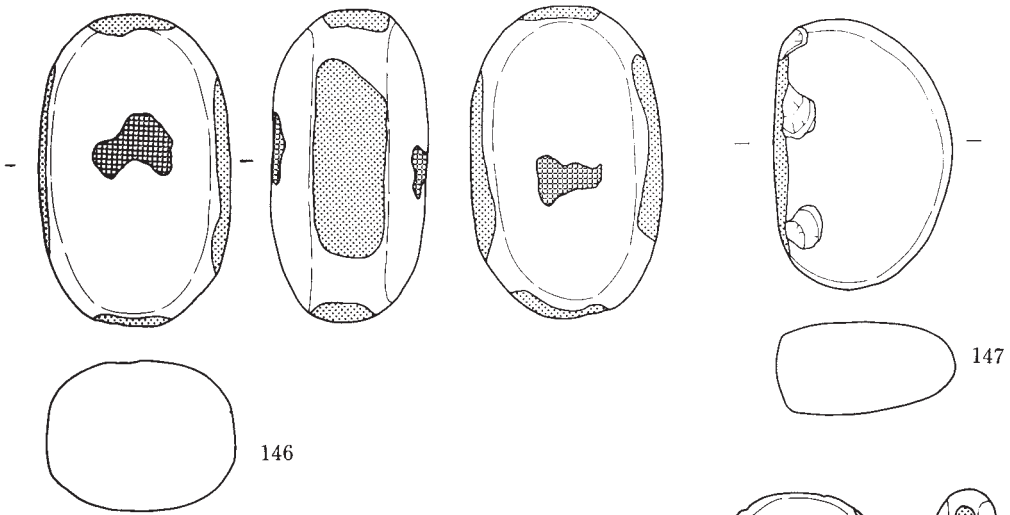
第162图 石器实测图(12)





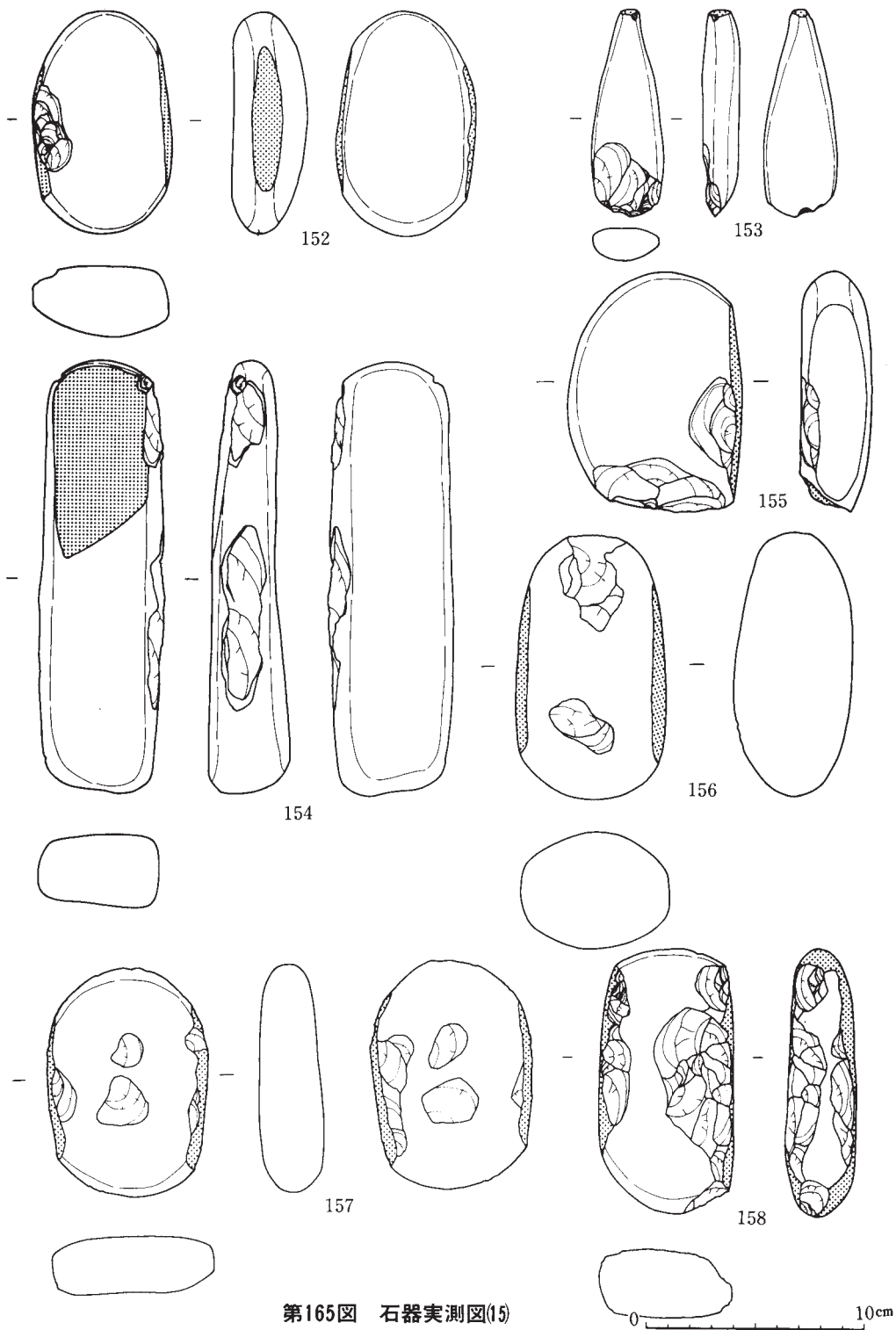
第163图 石器实测图(13)

0 10cm

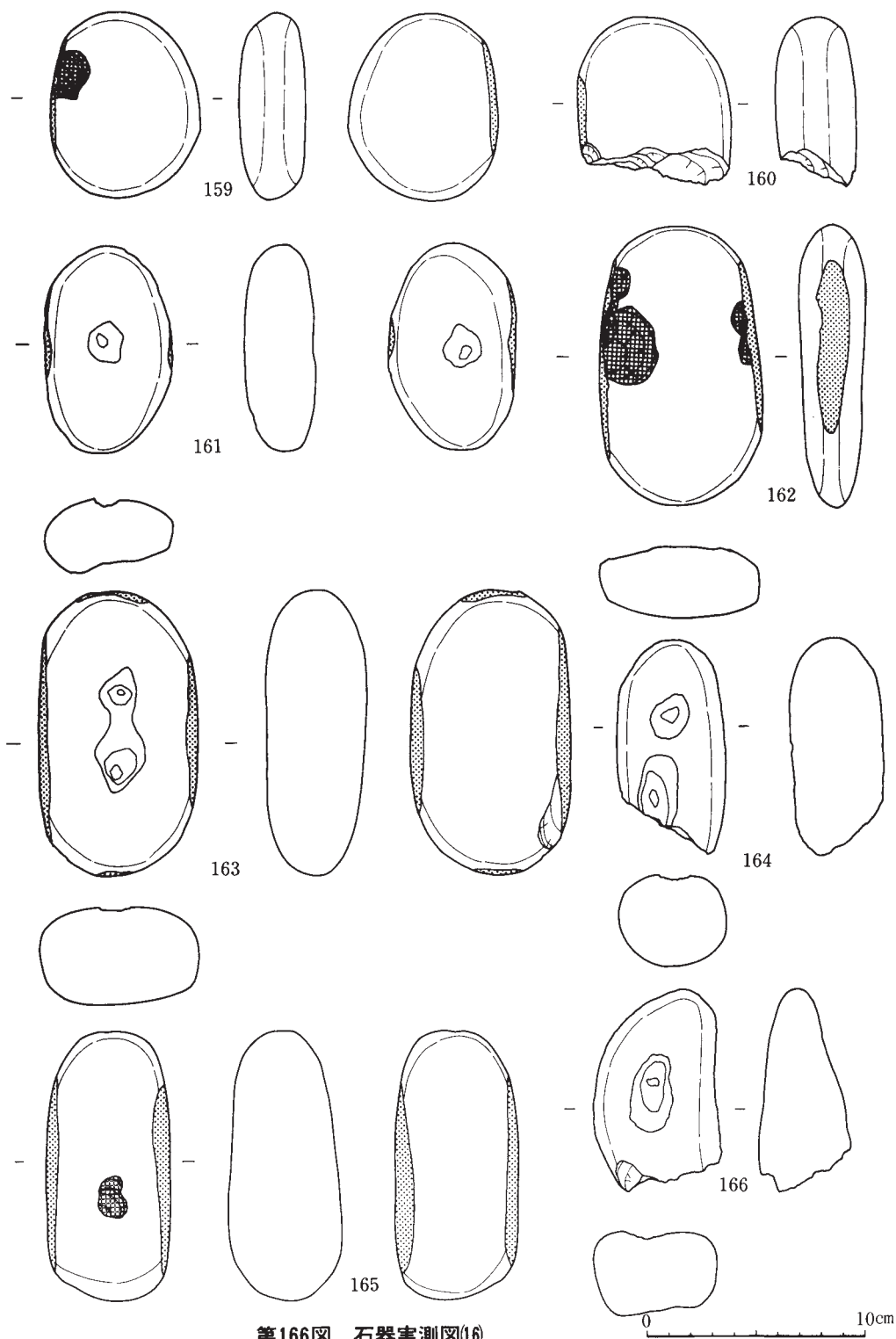


第164图 石器实测图(14)

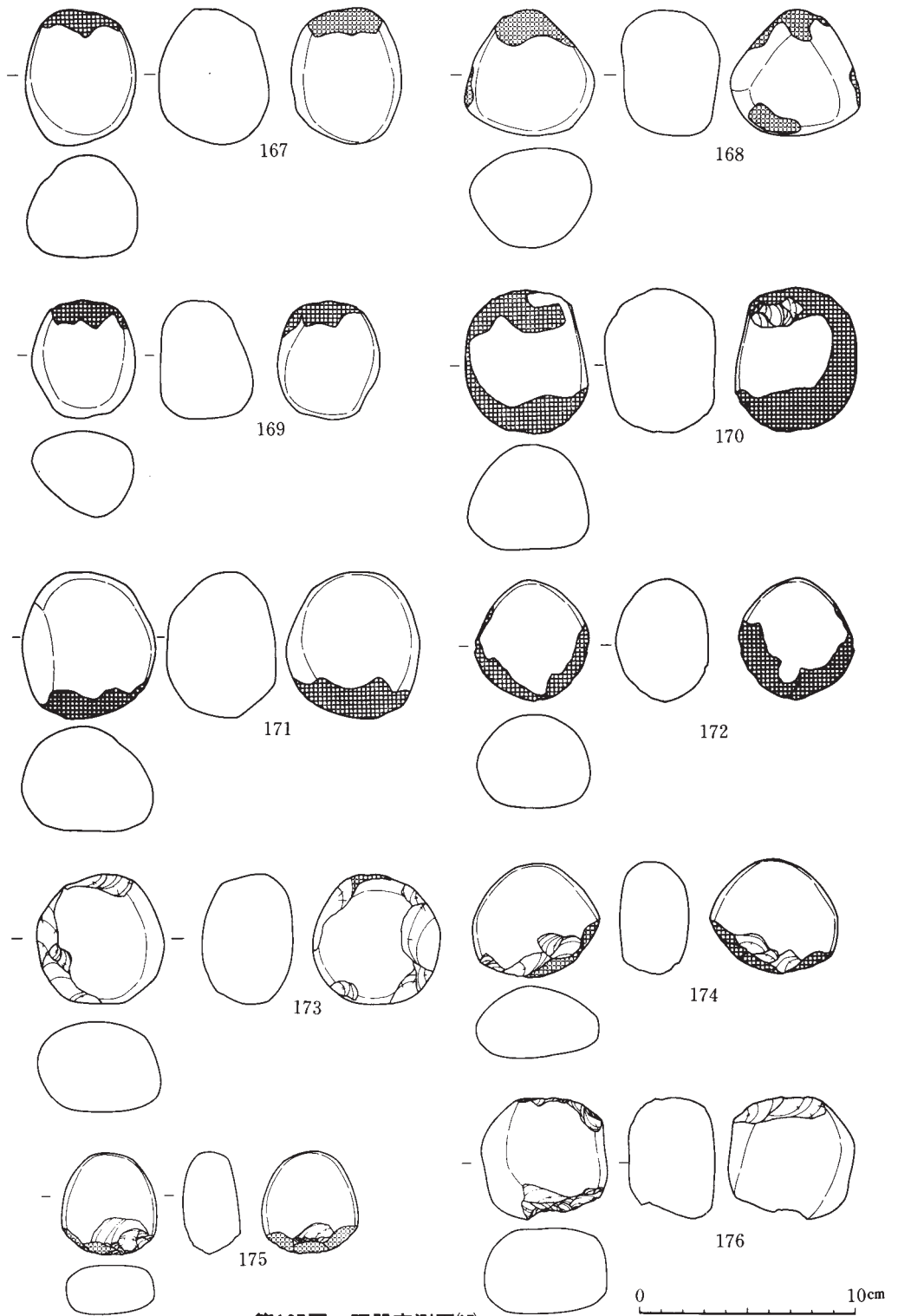
0 10cm



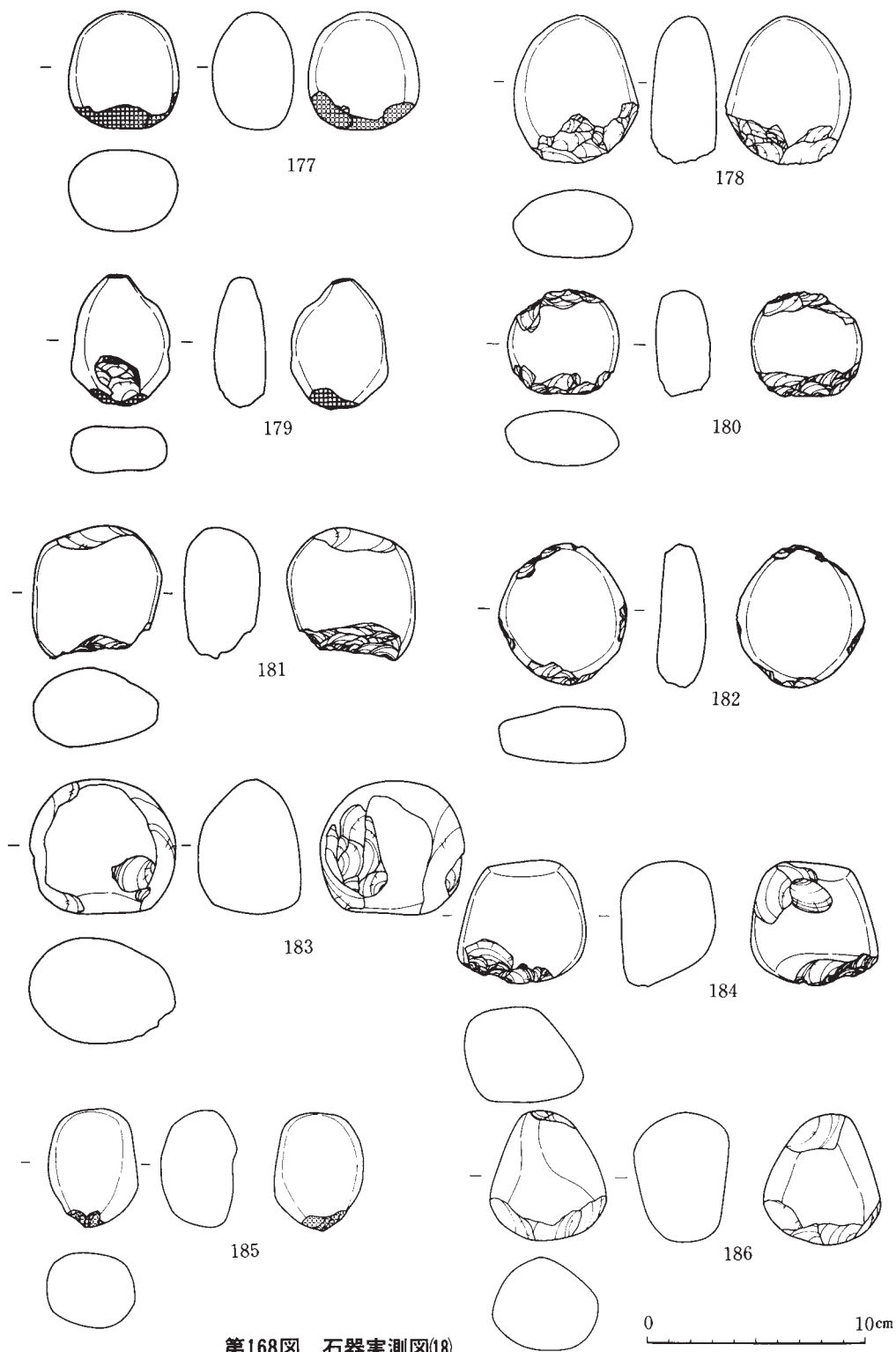
第165图 石器实测图(15)



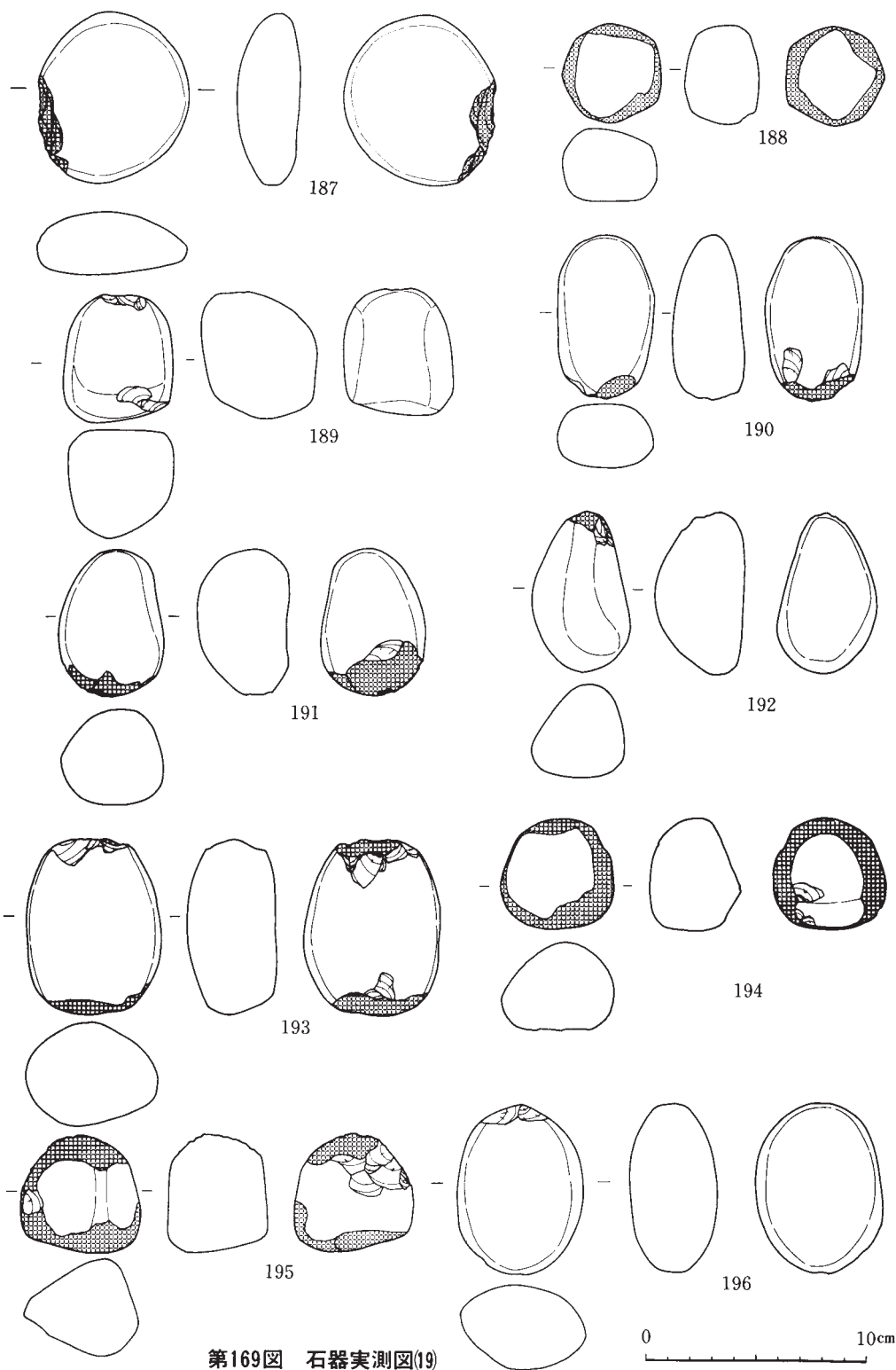
第166图 石器实测图(16)



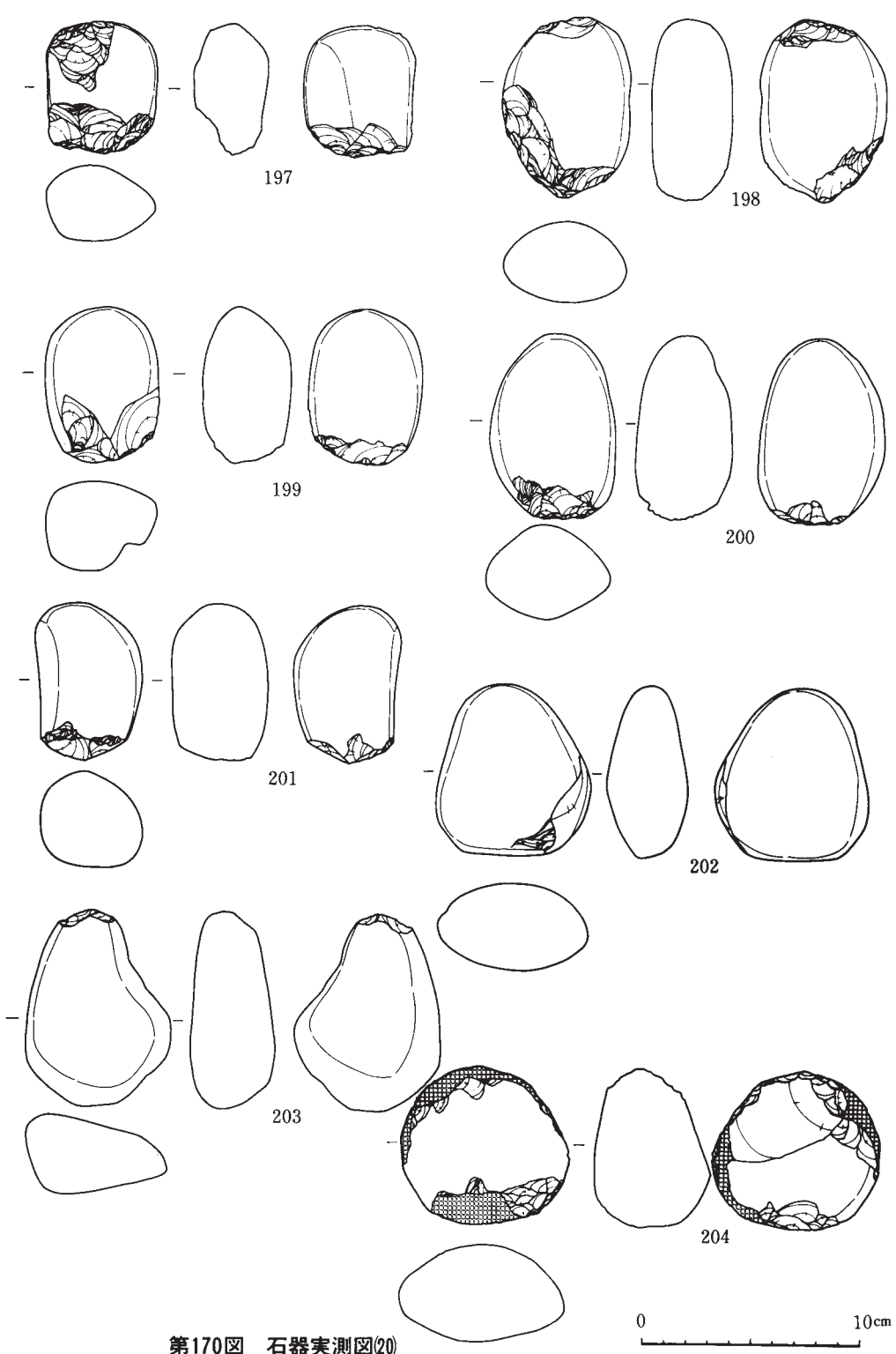
第167图 石器实测图(17)



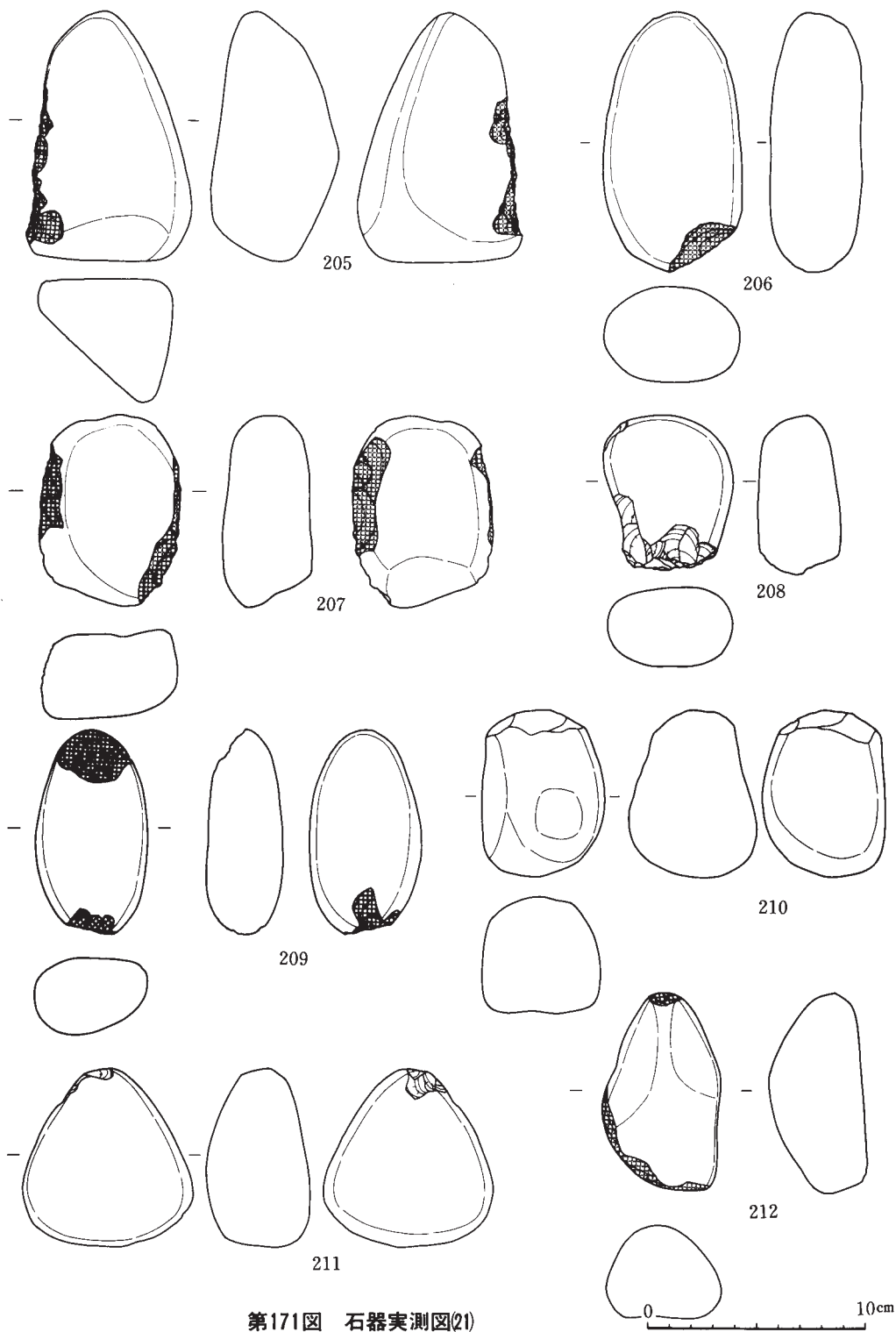
第168图 石器实测图(18)



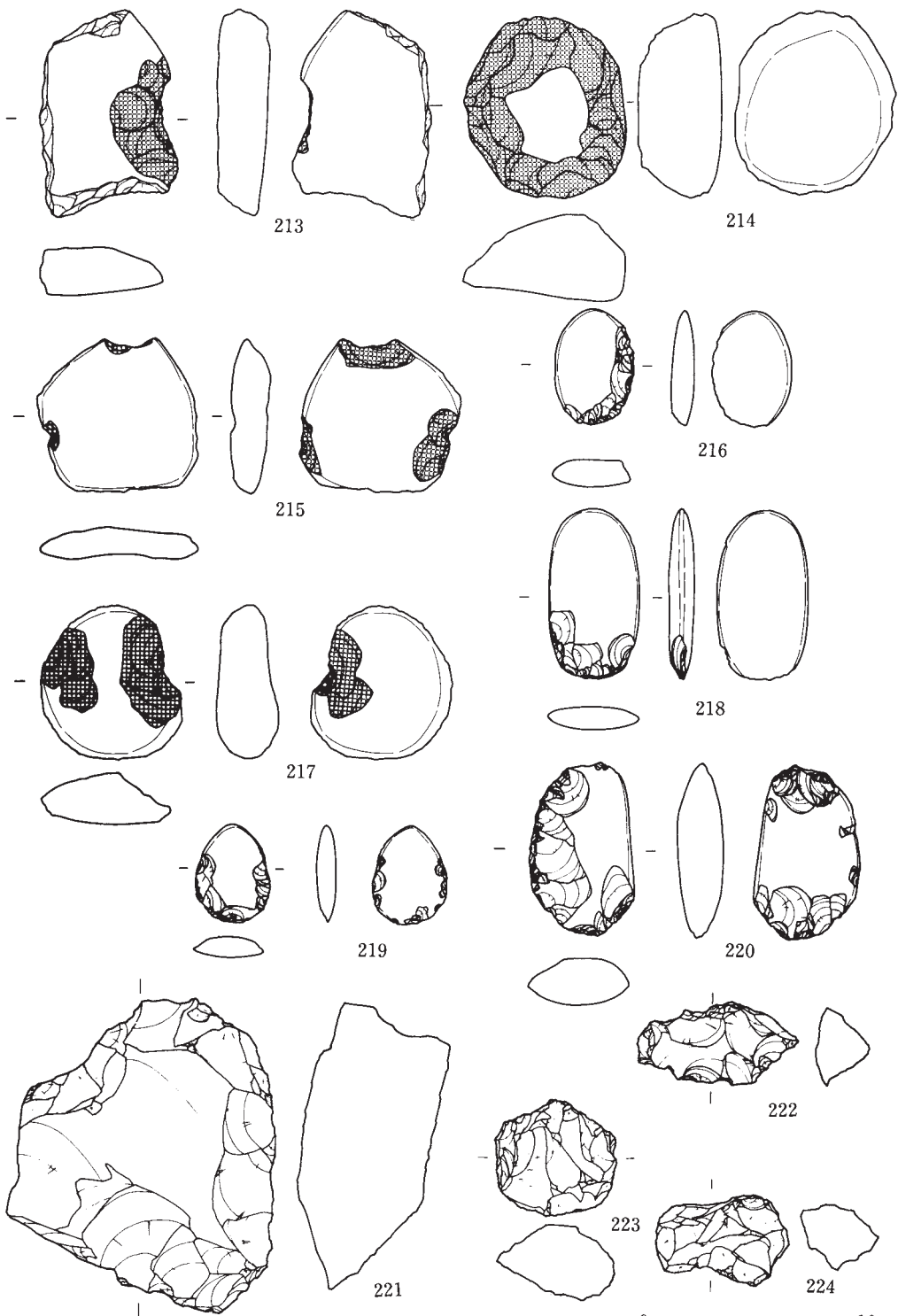
第169图 石器实测图(19)



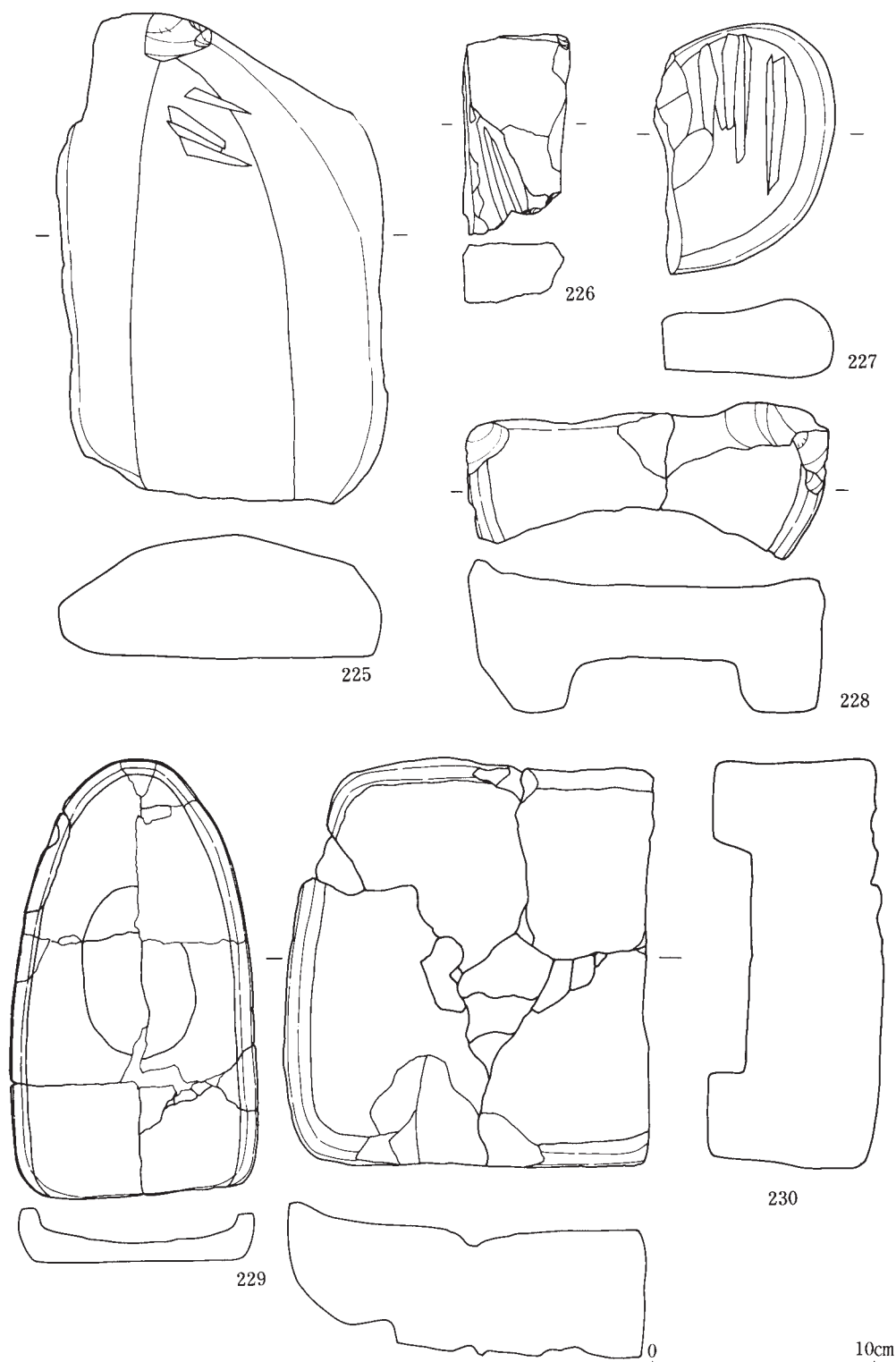
第170图 石器实测图(20)



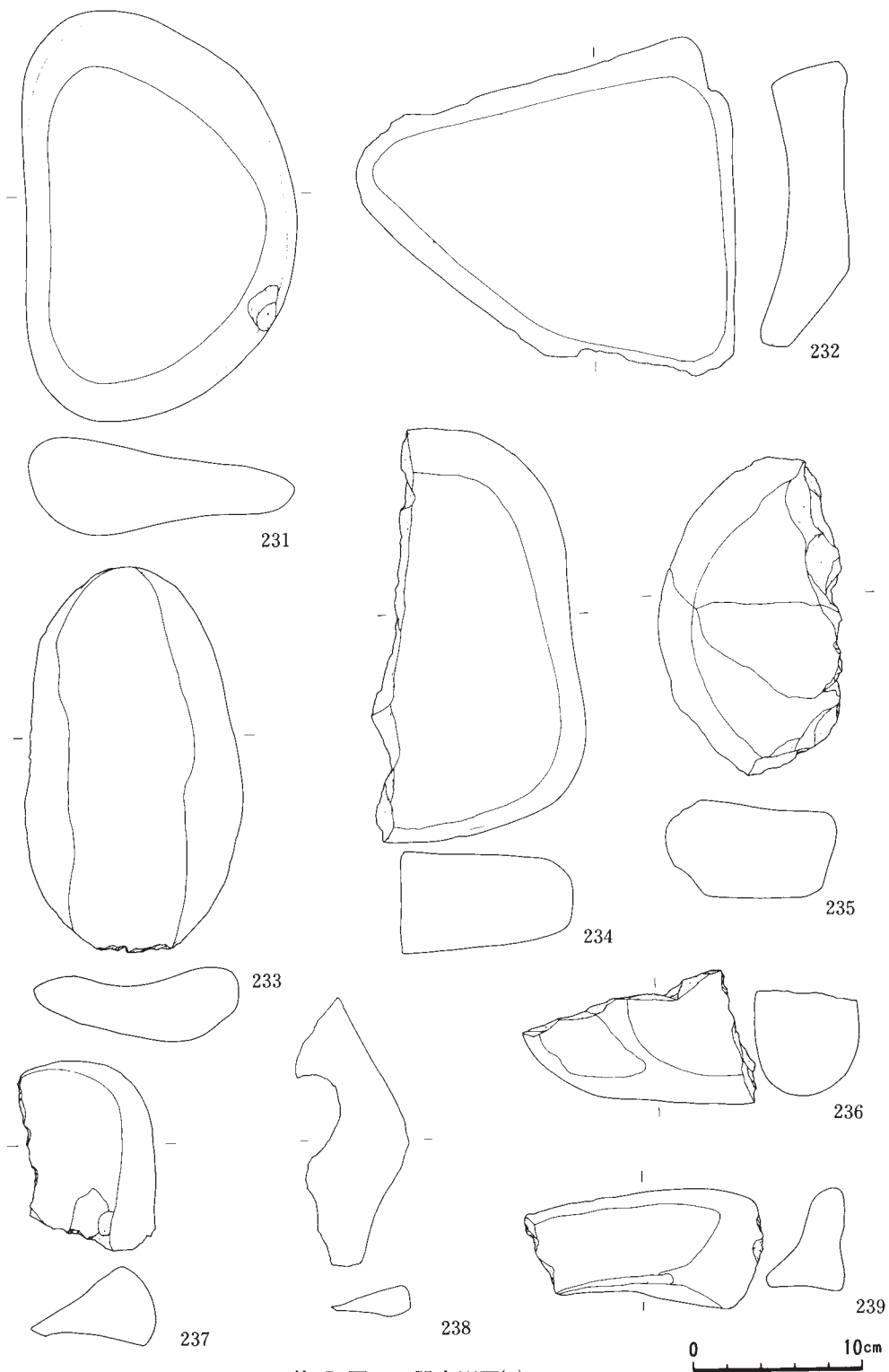
第171图 石器实测图(21)



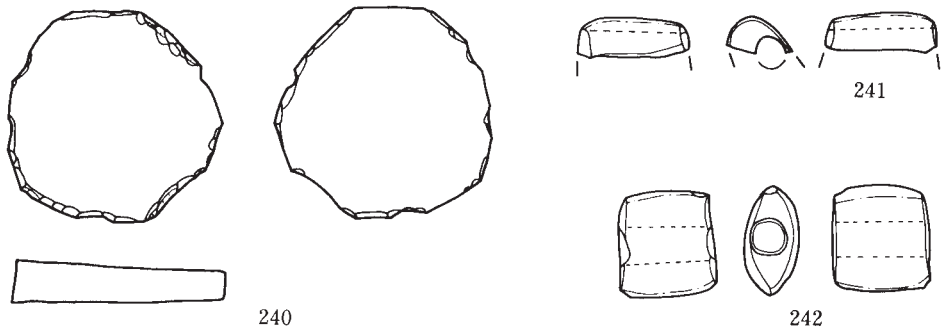
第172图 石器实测图(2)



第173図 石器実測図(23)



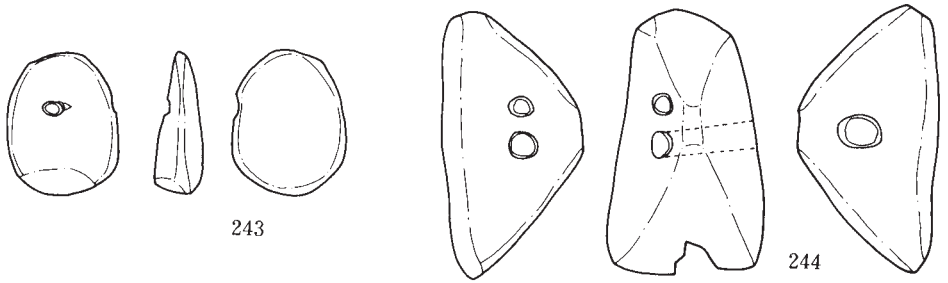
第174图 石器实测图(24)



240

241

242



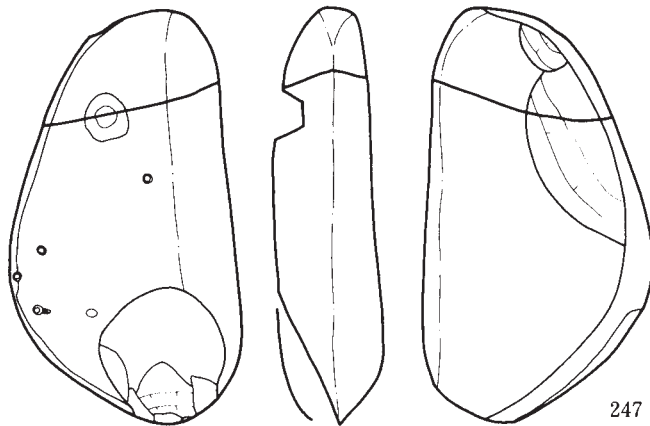
243

244



245

246



247

第175图 石器实测图(25)



第 章 考察とまとめ

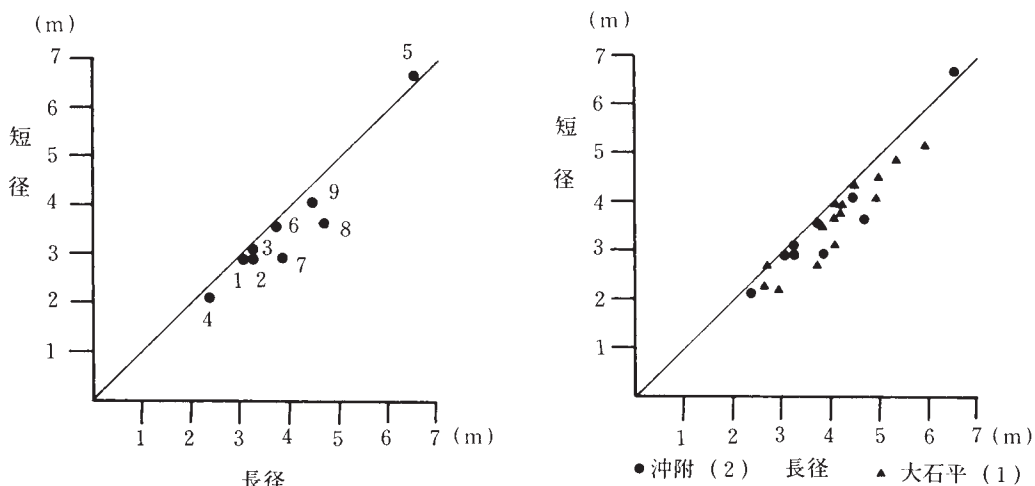
第 1 節 検出遺構

1 竪穴住居跡 (第176図・第10表)

今回検出した縄文の住居跡は総数10軒である。これらの住居跡を(平面形・規模)・(炉)・(構築年代)の項目別に分析していきたい。

平面形・規模

10軒の住居跡の平面形態は、プランを把握できなかった第10号竪穴住居跡を除き 9 軒について記載する。平面形は円形・不整円形・楕円形の三形態に分類できた。円形は、第 1 ~ 3・5・6・9 号竪穴住居跡の 6 軒で円形のプランはやや不整に近いタイプである。不整円形は第 4 号



第176図 住居跡規模比較図

竪穴住居跡の 1 軒、楕円形は第 7・8 号竪穴住居跡の 2 軒であり、本遺跡では円形の形態が主体を占める。

住居跡の規模は、最大の規模の第 5 号竪穴住居跡・最小の規模の第 4 号竪穴住居跡である。住居跡の長・短径の関係をまとめると三つのグループに分類できる。

- 1 Aグループ(長・短径が3.5m以内のもの)
第 1・2・3・4 号竪穴住居跡
- 2 Bグループ(長・短径が 5 m 以内のもの)
第 6・7・8・9 号竪穴住居跡

3 Cグループ(長・短径が5m以上のもの)

第5号竪穴住居跡

A～Cグループにおける住居跡の配置関係をみると、Aグループの小型の住居跡が北側の緩斜面に位置し、Bグループの中型・Cグループの大型住居跡が南側の台地平坦面に集中している。これらのことから、住居跡の規模により緩斜面と台地平坦面を考慮して二つに分離して配置している。

住居跡の規模については、大石平遺跡(県埋文90集:1985)の報告書で青森県の後期の住居跡の規模について十腰内式を中心として、十腰内式以前では長径4.5m以内の小・中型住居跡、十腰内式以降で長径5m以上の住居跡に変化し大型への傾向に移行すると記載した。しかし、本遺跡で検出した住居跡の長径6.6mの第5号竪穴住居跡の存在を考えると、集落内における住居跡の規模が小型・中型・大型住居跡と二つの規模が一つのグループとして存在しており、大石平遺跡の報告書を再検討すると本遺跡と同様な傾向がみられた。今後、縄文時代後期の住居跡については個々の住居跡の検討も必要であるが集落内における規模の面でも比較・検討が必要と思われる。

〔炉〕

本遺跡で検出した炉の形態は、地床炉・石組炉・石囲炉と三つの形態が分かれる。

地床炉.....第2・5・7・9号竪穴住居跡

石組炉.....第1・3・4号竪穴住居跡

石囲炉.....第5・6・8・10号竪穴住居跡

各々の炉の形態をみると、地床炉は床面を掘り込んで構築し、石組炉は2～4個の礫を用いて炉を構築しており、石組炉の構築は雑なつくりで堅固な構築ではない。また、形態はコ状を呈するものが主体を占める。石囲炉としたものは、炉石の抜き取り痕の配置から石囲炉としたものである。これらはすべて円形を呈する。第5号竪穴住居跡は、住居跡内に石囲炉と地床炉の2基の炉を有する住居跡である。青森県において縄文時代後期初頭～前半にかけての住居跡で2基の炉を有する住居跡の検出例はみられず特異な住居跡である。

炉の位置は、住居跡の中央部に位置するものと、中央部からやや南側に位置するものの二通りがみられ、地床炉を有するものは南側に片寄る傾向が強い。

他の本遺跡併行の住居跡の炉を比較すると、大木10式以降から十腰内式にかけては県内の住居跡の検出例は少ない、その中で中の沢西張遺跡(県埋文29集:1976)でコ状の石組炉、蛭沢遺跡(葛西:1979)で土器埋設炉、丹後谷地遺跡(八戸市埋文報13集:1985)でコ状石組炉・地床炉を検出している。このように地床炉・石組炉・石囲炉・土器埋設炉など種々の形態が存在する。しかし、現在のところ、縄文時代後期初頭～前半にかけての土器編年が明確でない

ために種々の炉の形態の変遷は不明である。現段階で言えるのは、大木10式の炉と比較した場合に大木10式期にみられた炉の位置の偏在が、後期初頭に至って中央部に移行している。炉は大木10式期で堅緻につくられたものが雑になり、各種の炉の形態が出現するという点については、指摘できると思われる。

(構築年代)

住居跡の構築年代については、遺物の共伴関係が明確でない第10号竪穴住居跡を除き9軒について記載する。

検出した9軒の内まとまって土器が出土した住居跡は、床面・床直から出土した第1・4・9号竪穴住居跡と、堆積土中からセットで出土した第2号竪穴住居跡の4軒である。他の5軒の住居跡については床面・床直の遺物が極端に少なく覆土中の土器も細片であった。また、住居跡と他の遺構の切り合いが少ないのも特徴の一つとしてあげられる。

竪穴住居跡内の出土土器は、すべて第 群土器で、縄文時代後期初頭から前半に及び竪穴住居跡に位置づけられることは、間違いない事実である。しかし、10軒の住居跡が一時期に10軒存在したとは考えられない。このことは、第5号竪穴住居跡と第7号竪穴住居跡が1m以内に位置しており、住居跡の構造から同時期に存在していたとは考えにくいからである。ここでは、あえて竪穴住居跡の時期を区分して記載することは混乱するため、竪穴住居跡の第1～4号竪穴住居跡から1・2類の磨消縄文の土器が多く出土し、第5～9号竪穴住居跡から沈線・粘土紐を施文した土器が多く出土したという点にとどめたいと思う。(成田滋彦)

第10表 縄文時代竪穴住居跡一覧表

| 住居跡番号 | 平面形 | 長径 | 短径 | 床面積 | 炉の位置・形態 | 施設・備考 |
|-----------|-------|--------|--------|----------|-------------------|---------------|
| 第1号竪穴住居跡 | 円形 | (3.1m) | 2.9m | (7.28㎡) | 中央部・石組炉 | |
| 第2号竪穴住居跡 | 円形 | 3.2m | (2.9m) | (7.48㎡) | 中央から南側・地床炉 | |
| 第3号竪穴住居跡 | 円形 | (3.3m) | 3.2m | (6.31㎡) | 南側寄り・石組炉 | |
| 第4号竪穴住居跡 | 不整形円形 | 2.4m | (2.1m) | (3.63㎡) | 中央部・石組炉 | |
| 第5号竪穴住居跡 | 円形 | 6.6m | 6.6m | (32.91㎡) | 中央部・石囲炉 南側・地床炉 | 不整形ピット、大型住居跡 |
| 第6号竪穴住居跡 | 円形 | 3.7m | 3.5m | (7.55㎡) | 南側・石囲炉 | |
| 第7号竪穴住居跡 | 楕円形 | 3.8m | 2.9m | 8.08㎡ | 中央から南側・地床炉 | 床面の中央部分が一段下がる |
| 第8号竪穴住居跡 | 楕円形 | 4.7m | 3.7m | 10.43㎡ | 南側・石囲炉 | |
| 第9号竪穴住居跡 | 円形 | 4.4m | (4.1m) | (14.51㎡) | 中央から西側・地床炉 | 楕円形ピット |
| 第10号竪穴住居跡 | (不明) | | | | 石囲炉 | (第3号焼土状遺構) |

2 ピ ッ ト

ピットと称した遺構は、52基検出した遺構数の約60%を占める。これらのピットは、竪穴住居跡、溝状ピット、埋設土器遺構、風倒木跡、農場造成時の抜根跡などを除外したピット状（土壇、小竪穴遺構など）の遺構を形状、規模等の区別を設けないまま一括してピットとしたため、この項では第11表ピット計測表にまとめた項目を中心として若干の分析を試みて、それらの傾向、特徴などを抽出してみたい。

ピットの落ち込みを確認した基本土層は、b層1基（2%）、a層15基（29%）、b層34基（65%）、層2基（4%）である。したがって、ピットの過半数はb～a層で確認され、層での確認は農耕用トラクターなどによって開口部が削平されたものであろう。また調査地区の大部分は圃場（耕作地）のため、耕作機械によって攪乱あるいは削平されて、本来のピット掘り込み層は不明になった類が多くみられるが、基本的にはb層下位からb層にかけてが縄文時代の遺物包含層であり、ピットの落ち込み確認土層がb～a層に集中していることは、これらのピットの時期を漠然としているが示すものである。

ピットが構築された標高は、ほぼ48～58mの間である。標高48mの低位置につくられたピットは1基（68号、2%）のみであるが、遺跡の最南端にある第6号住居跡と重複している。49mがなく、50mには2基（22、69号、4%）ある。これらの2基は、遺跡の南側斜面上に立地して、その西方には第5～9号住居跡（居住施設）が所在している。51、52mの標高にはピットは認められないが、53、54mには各1基（24、25号）がある。これらのピットは、55mの標高に構築された第20、25、26号ピットとグループをなして第2、3号住居（居住施設）の東側に立地している。55m台のピットは、ここのグループ以外に2基あるので、全体として5基（10%）となり、55mよりも低い位置にあるピット数からみると増加の傾向が認められる。ここのグループで注目されるピットは、第24号である。このピットは、住居跡と同規模の大型で、遺物も試掘調査の際出土したものと合わせると、住居跡並みに多いことである。56mになると21基（40%）の検出例があり、検出数では最大の標高である。その分布範囲は、53～55m台のピット群と隣接し、その北東側から調査地区中央付近とその北側に多く立地している。57m台のピットは、19基（37%）検出され、検出数では第2位を占めている。これらのピット群は、56m台のピット群の分布する調査地区中央とその西方へひろがって分布しているため、第1、4号住居（居住施設）から比較的遠距離にある。本遺跡では最高の標高である58m台には2基（32、64号）のピットが認められるが、50m台と同数で急減している。第32号は第4号住居の西側に位置し、また、64号は、本遺構の最西端にある。

要約すると、検出したピットの標高は、56、57mとその前後に77%以上が集中していることになる。この標高と住居群（居住施設）のそれと単純に比較すると、住居群の標高は48、49、

56mに各2軒、50、54、55mに各1軒が分布しているので、少なくとも、検出したピットの約40%（21基）は居住施設よりも高位置に、また、これら以外のピットも居住施設と同レベルの標高に 個々のピットと単独の住居との対比では下位に位置するピットも存在するが 構築されたことになる。ピットと居住施設の関係は、個々の場合よりも集落（居住・貯蔵・埋葬・祭祀・廃棄物処理・調理などの施設がまとまってある場所）におけるピット群の配置が重要視され、集落の領域、構成論に発展する問題点であるが、ここでは短絡的に本遺構が「馬の背状の鞍部から南斜面上」に立地し（本書第 章参照）その浸食斜面の谷頭に自然湧水地点が現存していることを重視したい。多くの居住施設が自然湧水地点から北東へ30～40mの近距離にある。一区間を独占的に占拠していることも一因であろう。ピットの用途、機能によってもその配置の立地条件は異なることは当然であるが、集落内のピット群は、その用途などによって定められた位置、場所があったことを、標高差によっても認知し得るであろう。

次に重複についてみてみたい。ピットとピットの切り合い（A類）とピットと別の遺構の場合（B類）がある。A類は4例（39 40号、43 47号、45 50号、56 57号、 印は、前者が後者を切り、前者が新しいことを示す、以下同じ）8基で、B類は2例（35 4号住居、6号住居 68号）2基である。このほか風倒木に切られたピットが1基（59号）1例あるので、重複のあったピット数は11基（21%）である。重複の割合は、その多少よりも切り合いが何を意味するのか判断することが問題となろう。同一領域内（遺跡）を永年あるいは断続的に集落として利用した遺跡は、遺構が重複する度合も当然多くなることは考えられる。また、集落跡で、あってもその集落がその時期の拠点集落か否かによっても重複の比率が異なるものと考えられる。例えば八戸市葎窪遺跡（県埋文84集：1984）では135基の遺構のうち63%に重複が認められ、そのなかに5基の遺構が重複した例も2例あった。また、上北郡六ヶ所村大石平遺跡の昭和58年発掘調査では、検出した411基以上のピット（土坑）のうち192基以上（約47%以上）が重複していた事例がある（県埋文90集：1985）。これらからみると、本遺跡のピットの重複例は少なく、葎窪、大石平の両遺跡は拠点集落、母村的な集落の例となるであろう。

形態上から平面と断面に区別して分類する（この分類には、不整形なものも含める）。

平面プランは、A類楕円形、B類円形、C類隅丸方形に大別するとA類34基（65%）、B類17基（33%）、C類1基（2%）となる（楕円形と円形の区別は、長短径の計測値がプラスマイナス10%以上の差があることとし、一部推定値のあるものも含めた）。

断面は、 類凸レンズ状、 類フラスコ状、 類バット状、 類漏斗状、 類不定形状（船底状×凸レンズ状、漏斗状×円筒状等、長短軸断面が不定、不揃いな類）、 類 字状、 類梯形（ 類の上半・開口部が削平された可能性もある）に区分して集計したところ、 類29基（55%）、 類13基（25%）、 類4基（8%）、 類2基（4%）、 類2基（4%）、 類（2%）、 類

1基(2%)となった。

これらの平面と断面の分類を組み合わせるとA類(楕円形ピット)の34基は、A類23基(67%)、A類5基(14%)、A類2基(5%)、A類2基(5%)、A類1基(3%)、A類1基(3%)、A類1基(3%)である。楕円形ピットの断面では凸レンズ状のものが最多、次いでフラスコ状である。B類(円形ピット)の17基は、B類5基(29%)、B類8基(47%)、B類2基(12%)、B類1基(6%)、B類、B類、B類なしで、A類よりも断面の変化は少ない。また、断面の最多はフラスコ状で、A類の断面順位と順位が逆転している。C類(隅丸方形ピット)の1基は、C類(バット状)のみである。

次は平面プランごとに規模について概観する。

A類(楕円形ピット)は、開口部径最小が62×37cm(15号)、同左最大267×(230)cm(24号)、200×170cm(60号)、坑底部径最小24×13cm(15号)、同左最大240×(200)cm(24号)、200×190cm(60号)、壁高(確認面からの深さ)最小8~15cm(27号)、同左最大130~110cm(42号)である。

B類(円形ピット)は、開口部径最小54×52cm(10号)、同左最大(346)×333cm(68号)、坑底部径最小30×20cm(10号)、同左最大(290)×264cm(68号)、壁高最小22cm(10号)、同左最大150cm(31号)である。なお、C類(隅丸方形)は1基(16号)だけで、規模は開口部径90×86cm、坑底部径73×64cm、壁高28~32cmである。ピットの規模は、前記の計測値内に収まる。

検出したピットは、平面プランは異なっても、一般に規模、容積が大型の類は、断面がフラスコ状をしたピットである。また、第24、68号ピットは、竪穴住居跡と同じ程度の規模を計測した。恐らくその用途は、小規模なピットとは異なると考えてよからう。

遺物の出土したピット

検出した52基のピットの中で遺物 縄文土器、石器、土製品、炭化物、自然礫 を伴出したピットは34基(65%)である。伴出した遺物の点数(炭化物、自然礫を除く)が10点以下17基(33%)、11~50点12基(23%)、51~100点3基(6%)、101~150点1基(2%)、151~200点なし、200点以上1基(2%)である。

遺物を伴出したピットの断面形態は、凸レンズ状15基(28%)、フラスコ状12基(23%)、バット状4基(8%)、字状、不定形状、漏斗状各1基(6%)である。

遺物が100点以上出土したピットの断面は、フラスコ状(第23、24、28、32号)で大型の類であるが、フラスコ状のピットであっても遺物をまったく伴出しなかったピット(第60号)もあるから速断はできない。また、完形、復原できた土器を伴出したピット(第23・24・28・51・61号)は、遺物の点数も多い。

出土遺物の種類で縄文土器と石器が共伴したピット(A類)は2基(4%)、縄文土器と土製品が伴出したピット(B類)2基(4%)、縄文土器のみが出土したピット(B類)30基(57%)

は述べられていないか、解明できなかったか、あるいは葬制もしくは祭祀遺構を想定（県埋文42集：1978）しているようである。

本遺跡における配石遺構と類似出土例を大雑把に比較検討してみたが、第1号配石遺構は、それを構成する自然礫の大きさ及び下部のピットの規模は他の類似例に比較すると全般に小型である。残存脂肪の分析も行わなかったし、また、人骨、副葬品等も出土しなかった。しかしながら本遺構のDT-126グリッドから復原されたやや小型の甕棺形土器（第128図、写真37-66）が出土したことと類似出土例にあげた配石遺構が積石塚土壌墓、配石墓の性格がすでに認められていることから第1号配石遺構は、縄文時代後期初頭の葬制・墓制と関連性の深い遺構であると考えてよからう。第2号配石遺構は、礫の配置が意図的な状態で配置されていなかったことと配石下部にピットが存在しなかったことなどから第1号配石遺構と同様の性格とは認め難い。祭祀遺構の可能性も考えられるが、その裏付けが乏しいので、ここでは礫群を使用して造営あるいは構築する遺構（配石遺構、住居の石囲炉）の前段階として礫を拾い集めて置いた一種の保管場所と考えておきたい。本遺構の周辺にある何軒かの住居跡の炉は石囲炉を使用し、第1号配石遺構の例もあることからいかなるものであろう。なお、本遺跡の北西にある弥栄平（4）遺跡から縄文後期の石棺墓と甕棺土器、また南西に所在する弥栄平（1）遺跡から人骨入り甕棺土器が出土したことがある（県埋文3集：1973）。（北林）

4 溝状ピット

溝状ピットは、4基検出した。検出遺構数の4.6%を占めるが、昭和53年度の試掘調査でA-11トレンチから1基検出されている。個々の溝状ピットの位置、確認土層、形状、規模、重複有無、覆土の区分、出土遺物などは第12表溝状ピット計測表にまとめた。

本遺跡から検出した溝状ピットは、台地斜面上に立地してその標高は54～57mである。これらの溝状ピットは重複がなく、平面形、断面は現在「溝状ピット」、「Tピット」、「陥し穴状遺構」等と呼称されている細長く深いピットと同様である。長軸方向は、第1、2号ピット（溝状を省略、以下同じ）がN-33、35度-E、第4、5号がN-64、70度-Wと2群に分けられ、その方向は約90度異なっている。第4、5号ピットは、同軸方向で東西に約11m離れて構築され、第2号ピットと第4号ピットは、南北方向に約69m離れている。また、第4号ピットと第1号ピットは、東西方向に約125m離れて、第4、5号ピットを除くと単独に構築されたピットとみられる。第4、5号ピットは、比較的近接して同軸方向にあるため規則性、同時性を暗示しているとも考えられるが、検出ピット数が限定されているため、いずれとも決め難い。

構造上特異なあるいは構造上欠陥があるとみられ溝状ピットは第5号ピットである。このピットはほかの3基のピットよりも40～70cm壁高が低い構造となっており、何らかの原因で通常の深さまで掘り下げないで、その作業を途中で放棄した「未完成の溝状ピット」の可能もある。

この種のピットは、通常ピット内に遺物を包含しないことが本来的のようであるが、本遺跡では4基検出(延では5基)したうちの2基(第1、4号ピット)から縄文土器片、円盤状土製品、フレイク、敲石などの遺物が出土したことは注目されよう。しかしこれらの出土遺物は、ピットの落ち込み確認面から覆土上部までに包含されていたことから、直接ピットの年代決定資料とはなり得ないとしても、出土土器片の分類(第 群土器)から構築年代を判断する手掛りを深めることができるであろう。

県内の溝状ピットは、昭和48年六ヶ所村発茶沢遺跡試掘調査(県埋文9集:1974)で検出されてから50数遺跡で約1282基検出されている。(第13表) 地域的にみると本遺跡を含めた県南地方・太平洋側にその98%(1262基)が分布している。ちなみに六ヶ所村内からは500基(38.9%)が検出されている。そのほか上北郡4基(0.3%)、南津軽郡8基(0.6%)、東津軽郡・青森市8基、下北郡45基(3.5%)、三戸郡21基(1.6%)、八戸市693基(54.3%)の分布となっている。溝状ピットの用途は、全国的に「おとし穴」説が有力で、その構築年代も縄文時代～歴史時代、特に前者の年代を想定している場合が多いようである。しかし、この種のピットのそれらについても断定できるところまでその研究は進展していないようである。(北林)

表12表 溝状ピット計測表

単位:cm

| No | 挿図 番号 | 写真 番号 | 遺構 番号 | 検 出 グリッド名 | 確認 土層 | 標高 m | 重 複 | 平面形 | 断 面 | | 長軸方向 | 開口部 長径×短径 | 抗底部 長径×短径 | 壁高 (深さ) | 覆 土 | 出土遺物 |
|----|--------------|----------|----------|--------------|----------|---------|--------|------|-----|----|---------|--------------|--------------|------------|--------|--------------------|
| | | | | | | | | | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 1 | 第115 116図 | 24 | 1 | EB・EC-151 | II a | 56.7 | なし | 長楕円 | 巾着状 | 撥状 | N-33°-E | 330×90 | 316×13 | 135~150 | 8 | 土器片、円盤状土製品、フレイク、敲石 |
| 2 | 第117図 | 24 | 2 | EP・EQ-116 | II a | 54.4 | なし | 長楕円 | 巾着状 | 撥状 | N-35°-E | 370×76 | 410×16 | 154~164 | 8 | なし |
| 3 | 第118図 | 24 | 4 | DY-114 | II b | 57.5 | なし | 隅丸長方 | 梯形 | 撥状 | N-64°-W | 335×60 | 396×20 | 145~154 | 8 | |
| 4 | 第119図 | 24 | 5 | DY-110.111 | II b | 57.7 | なし | 長楕円 | 梯形 | 撥状 | N-70°-W | 315×62 | 343×31 | 95×9.8 | 7 | なし |

表13表 青森県溝状ピット出土遺跡一覧表

| No | 遺跡名 | 所在地 | 出土数 | 調査面積 | 出土遺物年代 | 名称 | 調査年・調査別・備考(構築年代関係) | 文献 | 刊行年 |
|----|---------|---------|-----|-------------------|--------|-------|-----------------------|-------|-------|
| 1 | 発茶沢(2) | 上北郡六ヶ所村 | 3 | 364m ² | 縄文、平安 | 小竪穴遺跡 | 1973年、試掘調査 | 県埋文9集 | 1974年 |
| 2 | 発茶沢(3) | 〃 | 4 | 340 | 縄文、前後期 | 〃 | 1974年、試掘調査 | 〃 24集 | 1975年 |
| 3 | 千歳(13) | 〃 | 10 | 対象40,000 | 縄文、弥生 | 溝状ピット | 1974、1975年発掘調査 | 〃 27集 | 1976年 |
| 4 | 新納屋(1) | 〃 | 3 | 2,000 | 縄文、平安 | 〃 | 1975年、試掘調査 | 〃 28集 | 〃 |
| 5 | 古街道長根 | 三戸郡五戸町 | 2 | 1,200 | 縄文、奈良 | 〃 | 1975年、発掘調査(中取浮石層を切る) | 〃 29集 | 〃 |
| 6 | 近野(III) | 青 森 市 | 1 | 対象40,000 | 縄文、平安 | 〃 | 1975年、(溝状ピットを平安住居が切る) | 〃 33集 | 1977年 |
| 7 | 源常平 | 南津軽郡浪岡町 | 4 | 11,500 | 縄文、平安 | 〃 | 1976、発掘調査 | 〃 39集 | 1978年 |

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 出土数 | 調査面積 | 出土遺物年代 | 名称 | 調査年・調査別・備考(構築年代関係) | 文献 | 刊行年 |
|-----|---------------------|----------|-----|--------|----------------|-------|-------------------------------|-----------|---------|
| 8 | 104号 | 上北郡六ヶ所村 | 1 | 3,128 | 縄文、後期 | 溝状ピット | 1978年、試掘調査(遺跡名は現在沖附(2)) | 県埋文48集 | 1979年 |
| 9 | 長七谷地 1~8号 | 八戸市 | 75 | 5,927 | 縄文早、前期 | 〃 | 1978年、1号発掘(2~8号試掘調査分・合計) | 〃 51集 | 1979年 |
| 10 | 売場(Ⅰ、Ⅱ) | 八戸市 | 61 | 4,145 | 縄文、平安 | 〃 | 1978、1979年、発掘調査(売場Ⅲ-1982年) | 〃(93集) | (1985年) |
| 11 | 砂沢平 | 南津軽郡大鰐町 | 2 | 10,300 | 縄文、平安 | 土坑 | 1979年、発掘調査 | 〃 53集 | 1980年 |
| 12 | 大面 | 南津軽郡碓ヶ関村 | 2 | 13,500 | 縄文、弥生、平安 | 溝状土坑 | 〃 〃 | 〃 55集 | 〃 |
| 13 | 長七谷 地員塚 | 八戸市 | 101 | 12,400 | 縄文 | 溝状ピット | 1977、1978年発掘調査 | 〃 57集 | 〃 |
| 14 | 表館 | 上北郡六ヶ所村 | 15 | 19,854 | 縄文、平安 | 〃 | 1979年発掘調査 | 〃 61集 | 1981年 |
| 15 | 新納屋(2) | 〃 | 1 | 2,000 | 縄文、早期 | 〃 | 〃 | 〃 62集 | 〃 |
| 16 | 鷹架 | 〃 | 3 | 13,150 | 縄文、後期 | 〃 | 〃 | 〃 63集 | 〃 |
| 17 | 田ノ上 | 三戸郡南郷村 | 1 | 817 | 縄文 | 〃 | 〃 | 〃 65集 | 〃 |
| 18 | 発茶沢 | 上北郡六ヶ所村 | 437 | 49,870 | 縄文、平安 | 〃 | 1979、1980年、発掘調査(縄文後期か晩期のいずれか) | 〃 67集 | 1982年 |
| 19 | 山崎 | 東津軽郡今別町 | 7 | 17,900 | 縄文、前、中期 | 〃 | 1979~1981年、発掘調査 | 〃 68集 | 〃 |
| 20 | 三合山 | 三戸郡南郷村 | 1 | 3,500 | 縄文、晩期 | 〃 | 1980年、発掘調査 | 〃 69集 | 〃 |
| 21 | 石ノ窪 | 〃 | 6 | 4,000 | 〃 〃 | 〃 | 〃 | 〃 69集 | 〃 |
| 22 | 馬場瀬(2) | 〃 | 1 | 6,100 | 縄文後、晩期 | 〃 | 〃 | 〃 70集 | 〃 |
| 23 | 前坂下(1) | 下北郡東通村 | (8) | | 縄文 | 〃 | 1980年、試掘調査 | 〃 71集 | 〃 |
| 24 | 前坂下(3) (5.6.7.8) | 〃 | (8) | | 縄文、弥生 | 〃 | 〃 | 〃 71集 | 〃 |
| 25 | 長七谷 地2号 | 八戸市 | 58 | 3,500 | 縄文 | 〃 | 〃 | 八戸市埋文報 8集 | 〃 |
| 26 | 長七谷 地7号 | 〃 | 116 | 1,000 | 縄文(前期) | 〃 | 1980、1981年発掘調査 | 〃 8集 | 〃 |
| 27 | 長七谷 地8号 | 〃 | 25 | 10,900 | 縄文(前期) | 〃 | 1980、1981年発掘調査 | 〃 8集 | 〃 |
| 28 | 鴨平(1) | 南郷村、八戸市 | 7 | 12,800 | 縄文早、後、晩期 | 〃 | 〃 | 県埋文72集 | 1983年 |
| 29 | 鴨平(2) | 八戸市 | 6 | 9,700 | 縄文後、晩期 | 〃 | 1981年発掘調査 | 〃 73集 | 〃 |
| 30 | 長者森 | 〃 | 7 | 10,000 | 縄文後期 | 〃 | 〃 | 〃 74集 | 〃 |
| 31 | 前坂下(1) | 下北郡東通村 | 29 | 9,000 | 縄文早、前、 後、晩期 | 〃 | 〃 | 〃 75集 | 〃 |
| 32 | 鶉窪 | 八戸市 | 11 | 9,600 | 縄文各期、奈良 | 〃 | 1981年発掘調査縄文後、晩期と推定 | 〃 76集 | 〃 |
| 33 | 松原 | 上北郡上北町 | 4 | 1,200 | 縄文、奈良 | 〃 | 1981年発掘調査(円形のおとし穴15基前期未以前) | 〃 77集 | 〃 |
| 34 | 和野前山 | 八戸市 | 108 | 11,800 | 縄文、平安 | 〃 | 1981年 〃 | 〃 82集 | 1984年 |
| 35 | 昼巻沢 | 〃 | 9 | 7,700 | 縄文 | 〃 | 1982年 〃 | 〃 83集 | 〃 |
| 36 | 葎窪 | 〃 | 5 | 10,000 | 縄文中末~後初 | 〃 | 1981、1982年発掘調査 | 〃 84集 | 〃 |
| 37 | 白山平(2) | 〃 | 9 | 17,000 | 縄文後、晩期 | 〃 | 1982年発掘調査 | 〃 85集 | 〃 |

| No | 遺跡名 | 所在地 | 出土数 | 調査面積 | 出土遺物年代 | 名称 | 調査年・調査別・備考(構築年代関係) | 文献 | 刊行年 | |
|----|----------|---------|------|---------|----------|-------|---|------------|-------|--|
| 38 | 牛ヶ沢(3) | 八戸市 | 9 | 9,100 | 縄文中・後期 | 溝状ピット | 1982年発掘調査 | 県埋文86集 | 1984年 | |
| 39 | 牛ヶ窪(2) | 八戸市根城 | 7 | 550 | 縄文弥生・土師 | " | 1983年 " (範囲確認) | 八戸市埋文報13集 | " | |
| 40 | 古宮 | 八戸市沢里 | 3 | 300 | 縄文・土師 | " | " " (") | " | " | |
| 41 | 湯浅屋新田(1) | " | 2 | 400 | 縄文、早期 | " | " " (") | " | " | |
| 42 | " (2) | " | 3 | 1,500 | 土師 | " | " " (") | " | " | |
| 43 | 鳥木沢 | 八戸市田面木 | 1 | 700 | 縄文、土師 | " | " " (") | " | " | |
| 44 | 大石平(1) | 上北郡六ヶ所村 | 3 | 3,200 | 縄文早～晩期 | " | " " " | 県埋文90集 | 1985年 | |
| 45 | 表館II | " | 3 | 5,000 | 縄文早期 | " | " " " | " 91集 | " | |
| 46 | 古宮 | 八戸市沢里 | 4 | 1,800 | 縄文、平安 | " | " " " | " 92集 | " | |
| 47 | 石ノ窪(2) | 三戸郡南郷村 | 10 | 9,900 | 縄文晩期 | " | " " " | " 92集 | " | |
| 48 | 大タルミ | 八戸市 | 9 | 3,300 | 縄文 | " | 1981年試掘、1982年発掘 | " 93集 | " | |
| 49 | 売場(III) | " | 57 | 7,000 | 縄文早期平安 | " | 1982年発掘、(1979.1980.1984年発掘)縄文前期以降平安時代以前 | " 93集 | " | |
| 50 | 切田前谷地 | 十和田市 | 2 | 1,000 | 平安、中世 | " | 1984年発掘調査、2号覆土上部に白頭山と十和田 a 火山灰堆積 | 十和田市埋文報 4集 | " | |
| 51 | 弥栄平(1) | 上北郡六ヶ所村 | 1 | 3,510 | 縄文早～後期 | " | 1982年試掘調査(文化課) | 県埋文94集 | " | |
| 52 | 大石平(1) | " | 4 | 3,500 | 縄文中、後期弥生 | " | 1984年発掘調査 | " 97集 | 1986年 | |
| 53 | 沖附(2) | " | 4 | 約16,000 | 縄文後期主体 | " | " " " | " 101集 | " | |
| 54 | 発茶沢(2) | " | 9 | 3,200 | 縄文、江戸 | " | 1985年 " " | " 96集 | " | |
| 計 | | | 1282 | | | | | | | |

第2節 出土遺物

1 縄文土器

(1) 第 群土器（縄文時代前期）

本群土器は、文様施文の差異から3種に分類した。ここでは、1～3類の時期の問題について若干ふれたいと思う。

1類の(4・22)の撚糸圧痕を施文している土器は、長七谷地 群(県埋文57集:1980)に比定されると思われる。また、0段多条を施文している土器についても同様に比定されるものと思われる。本類で問題になるのは、(3)の口唇部が平坦で丸底を有する土器である。従来、本県の縄文時代前期の編年は、長七谷地 群 早稲田6類 芦野 群という変遷が考えられたが、熊谷(熊谷:1983)の論文では、芦野 群と早稲田6類とを逆転させた考え方である。一方、表館遺跡(県埋文91集:1984)を調査した三宅は、『…口唇上端が平坦なものは、和野前山第8群と同様、A群にあっても丸底ないし尖底土器が製作されていた可能性も考慮に入れる必要があると考えられる…。』と記載し、熊谷の意見に肯定的な立場をとっている。これらから、本県の縄文時代前期の編年はいまだ混沌とした状態であり、(3)の土器の位置付けも定かでない。

2類は、ループ文と竹管文(コンパス文はみられない)を多用している土器である。(2)の竹管文を用いて山形状に文様構成する土器は、六ヶ所村大石平(1)遺跡(県埋文90集:1985) 表館遺跡に出土例がみられる。従来の編年に比定すると芦野 群(名久井:1971) 表館式(佐藤:1961)に該当するものと思われる。

3類は横走する綾絡文を施文する土器を本類にまとめたものである。土器の特徴としては、色調が明るい橙色をなす土器が多いという点を除いて、内面のやや粗い調整等など1、2類の土器の特徴と類似している面が多い(40、50、46)の撚糸圧痕と綾絡文を組み合わせた土器については、(41)の長七谷池 群に比定されると思われる。しかし、本類がすべて長七谷池 群に比定されるとは思われない。この事は、(47)の土器が平坦を呈しており、器形的に丸底を主体とする長七谷池 群の範疇に含まれないからである。他の綾絡文の土器が出土した例では、六ヶ所村菟茶沢遺跡(青森県67集:1982)・表館遺跡(県埋文61集:1981)・鷹架遺跡(県埋文63集:1981)があるが、全体の器形は不明である。3遺跡共に時期的に大木2式及び東銘路 式と関連性があるのではないかと記載している。一方、全体の器形がわかるものは八戸市和野前山遺跡(県埋文82集:1984)から出土した第8群土器である。第8群の土器で横走する押し引き沈線と綾絡文が伴い、尖底を有する土器である。和野前山遺跡の土器を概観すると、綾絡文の使用に時期的な幅が考えられる。本報告書では、3類の時期の明言をさけ、土器製作上の観点から前期の1・2類のいずれかに該当するという点に止めたいと思う。

第 群土器（縄文時代中期）

本群土器は 1 片しか出土しなかった。また、縄文時代中期の遺構も検出されていない。文様施文の特徴から村越の円筒上層 a 式（村越：1974）に比定されるものと思われる。

（3）第 群土器（縄文時代後期）

第 群土器は、本遺跡の主体を占める土器で、遺構外の土器を用いて 1～10類に細分した。縄文時代後期初頭～前半期にかけてで、従来、県内での出土例が少なく、また、編年的位置づけも不明な土器であった。今回の発掘調査では、一括の土器が出土し、本遺跡の土器を主体にして検討したいと思う。

ア 遺構内のセット関係について（第177図）

住居跡・ピット内で土器のセットを把握できたものがあり記載する。なお、遺構内からの単独の完形土器及び細片のみ出土した遺構については除外した。

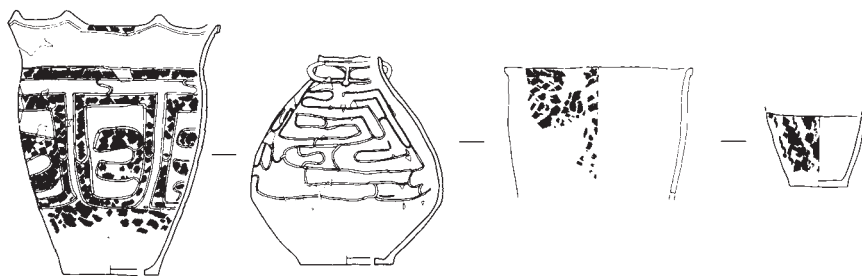
住居跡では、第 1・2・4・9号竪穴住居跡の 4 軒で土器がセットで出土している。第 1号竪穴住居跡の床面・床直からは、深鉢形 3 点・壺形土器 1 点が出土し、磨消縄文の土器は、第 1 類のコ状文様の土器が出土した。覆土から、渦巻文様を主体とした第 2 類の土器が出土している。この出土状況から第 1 類 第 2 類の変遷も考えられるが、第 2号竪穴住居跡（第13図 - 5・第14図 - 30）、第 4号竪穴住居跡（第19図 - 7・8）で第 1 類のコ状文様が出土し、第 2 類の渦巻文様と共伴して出土した。この例から一概に、第 1 類のコ状文様から第 2 類の渦巻文様への変遷とは考えられない。現段階では、第 1・2 類の差の時間差として捉えるかについては、判断できなかった。

沈線を施文の土器については、従来、沈線施文の土器について報告書の中で、すべて十腰内式（磯崎：1968）に編年してきた。しかし、本遺跡の第 1号竪穴住居跡・第23・28号ピットの共伴関係から磨消縄文系土器と沈線文系土器が伴い、沈線文系の土器をすべて十腰内式に編年を組み入れる事は誤りである。本遺跡での沈線文系土器の特徴としては、文様施文の本数が単数のものが多く、十腰内式にみられる副次的放様も施文されていない。文様の展開は、横位方向に展開せず縦位方向が多く、文様単位は 2 単位のものが多い。器形面では、壺形・浅鉢・切断蓋付土器に多く施文される。

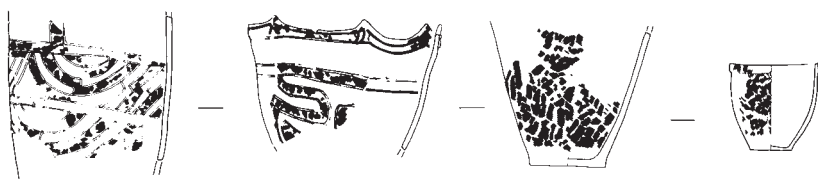
第 1・4・9号竪穴住居跡では、磨消・沈線施文の土器の他に深鉢・鉢形の第 8 類の粗製縄文土器を伴う。特に折り返し口縁をもつ土器が多くみられる。

イ 第 9 類 切断蓋付土器について（第178図）

第 9 類に分類した切断蓋付土器は、遺構内（第 7号住居跡・第28号ピット）から各々 1 点・遺構外から 4 点の計 6 点が出土した。特に住居跡の堆積土及びピット内の覆土（出土状態から切断蓋付土器をピット内に廃棄したというより、覆土内に埋納したと考えられる）から出土した



第1号竖穴住居跡・床面・床直

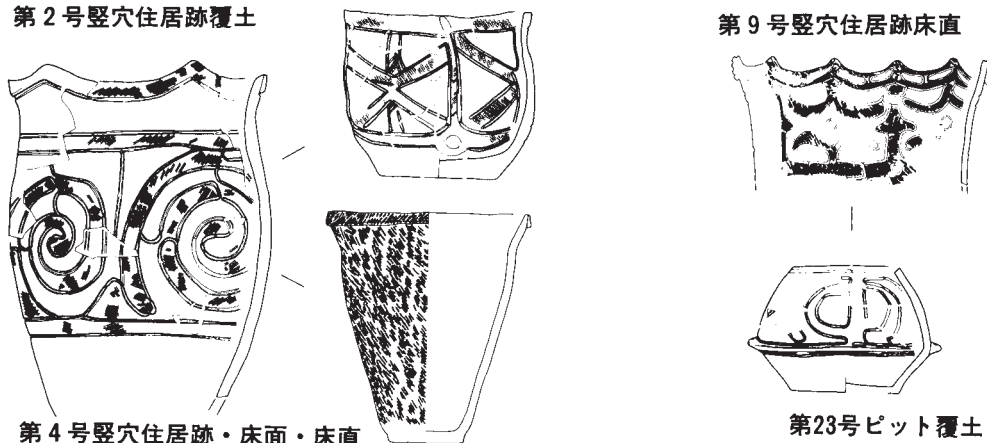


第1号竖穴住居跡覆土



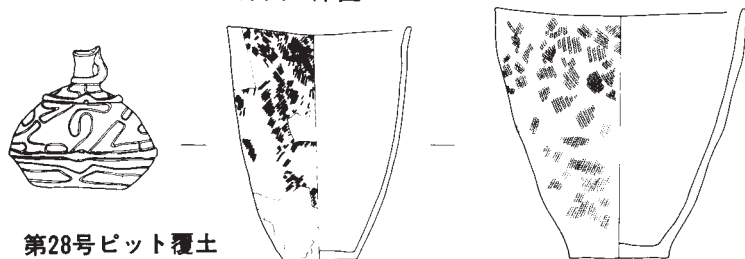
第2号竖穴住居跡覆土

第9号竖穴住居跡床直



第4号竖穴住居跡・床面・床直

第23号ピット覆土



第28号ピット覆土

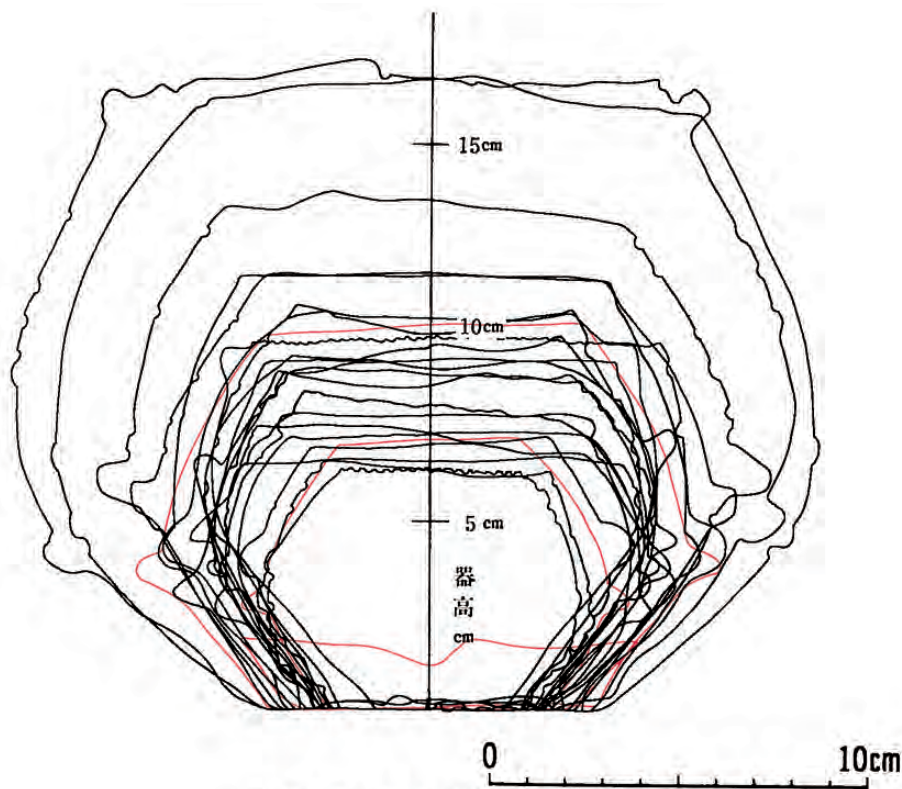
第177図 出土土器セット図

事は注目される。県内の切断蓋付土器の出土状態は、遺構外からの出土が多く遺構内からの出土例は、三内遺跡（県埋文22集：1975）の住居跡・尻高(4)遺跡（県埋文89集：1985）のピットの覆土からの出土のみで遺構内の出土例は極めて少ない。

切断蓋付土器の体部の器高は、10cm内外・最大幅15cm内外の小型なものが多く製作される。第178図は、出土した切断蓋付土器の体部のプロフィール図であるが、本遺跡も他の切断蓋付同様に小型なものが多い。

切断技法は、6点の内5点までが口頸部のくびれ部を切断しており、第28号ピットの切断蓋付土器が底部寄りの体部下半を切断している。体部下半を切断している県内の出土例は、六ヶ所村弥栄平(1)(県埋文3集：1973)・大石平(1)遺跡のみで出土しており、体部下半の切断例は少ない。県内では、六ヶ所村に集中しており、体部下半の切断方法に一つの地域性を有していると思われる。

切断蓋付土器の時期は、第28号ピットの他の共伴土器から第 群土器(1～8類)に相当し、縄文時代後期初頭～前半に位置づけられると思われる。切断蓋付土器は、縄文時代中期末葉(大木10式併行)が初現であり、三内稲荷林遺跡(青森県文：1968)出土の土器が相当すると思われる。縄文時代後期の時期に至ると数多くの切断蓋付土器が製作され、縄文時代後期初頭～



第178図 切断蓋付土器プロフィール

前半にかけて隆盛期を迎える。この期間においては、長者森遺跡（県埋文74集：1983）の様に大型の切断蓋付土器が製作される。後期前半の十腰内式に至っては、切断蓋付土器の出土例が減少し衰退期に入る。このことは、十腰内式出土の遺跡間で出土する遺跡と、出土しない遺跡差が顕著に表われる。その後、十腰内式以降において切断蓋付土器は製作されず消滅すると思われる。

ウ 本遺跡の位置と周辺遺跡との関連

本遺跡の位置は、尾駮沼と鷹架沼にはさまれた台地に位置している。この台地上には、南北4 km・東西4 kmの幅に縄文時代中期末葉（大木10式併行）～縄文時代後期前半（十腰内式）に至る遺跡が数多く存在する。その中で最近の発掘調査で縄文時代中期末葉～前半に至る土器編年に興味深い事実を提供した。発掘調査が行われた遺跡は、沖附^{注(1)}1遺跡・弥栄平^{注(1)}1遺跡（青森県教：1986）・弥栄平^{注(1)}3遺跡（県埋文9集：1974）・弥栄平^{注(1)}2遺跡（県埋文81集1984）・発茶沢^{注(1)}2遺跡（県埋文9集：1974）・弥栄平^{注(2)}4遺跡である。（遺跡の位置は第5図参照）特に弥栄平^{注(1)}1遺跡・弥栄平^{注(1)}2遺跡・沖附^{注(1)}1遺跡・発茶沢^{注(1)}2遺跡の4遺跡と本遺跡を含めて各遺跡内の出土土器を分析すると、5遺跡共に縄文時代中期末葉～後期前半の土器を出土しながらすべて遺跡内の土器様相が異なっている事実が指摘できる。この土器の様相の差異をどの様に捉えたいのだろうか、距離的に4 km以内という小範囲に収まる各々の遺跡位置で、地域性が強く発生したことや他地域からの影響で土器の様相に差異が生じたとは考えられない。土器の様相の差異は、縄文時代中期末葉～前半に至る過程での時期差のために各遺跡間の様相が異なるとしかいいきれない。しかし、今回は、調査した遺跡が未発表の資料が多くすべての遺跡の出土土器を詳細に分析することができなかった。しかし、本遺跡の第^{注(2)}群土器と六ヶ所地域の遺跡の土器の比較を今後行う必要があると思われる。

注(1) 青森県埋蔵文化調査センターが、昭和59年に発掘調査を行い昭和61年に報告書刊行
県埋文100集

注(2) 青森県埋蔵文化財調査センターが、昭和60年に発掘調査を行い昭和62年に報告書刊行の
予定

() 縄文時代後期初頭～前半の土器編年について

青森県の縄文時代初頭～前半の土器編年については、現段階では不明な点が多い。最近の研究で、不明であった縄文時代後期以前の縄文時代中期末葉の土器型式に関しては、大木10式併行土器（未命名型式土器）が存在することが判明した。（成田：1985）しかし、大木10式併行土器以降から後期の十腰内式に至る段階は、土器の変遷に混乱を生じている。（成田：1981・本間：1985）。本遺跡の第^{注(2)}群土器の位置づけも含めて、縄文時代後期初頭～前半の編年について青森県の資料を中心に検討したい。記載するにあたっては、四つに分類し、第1～4段階と

いう名称を用いた。

第1段階

本段階は、縄文時代後期初頭に位置づけられる土器である。第1段階の土器が出土した遺跡は、八戸市鶉窪遺跡(県埋文76集:1983)・葦窪遺跡(県埋文84集:1984)・丹後谷地遺跡(八戸市教:1984)・六ヶ所村鷹架沼竪穴遺跡(県埋文42集:1978)で、遺跡数は少なく県南地域に片寄っているが、各遺跡から出土した土器が縄文時代後期初頭のこの時期に該当すると思われる。土器の口縁部文様帯は、横位の粘土紐を巡らして文様区画帯を構成し、区画帯の内部に縦位の粘土紐を貼り付けている。粘土紐の上面には、縄文及び指頭圧痕が施文される。口頸部文様帯は、大木10式併行土器より広義な文様区画帯を構成する。(丹後谷地遺跡第5竪穴住居跡・鶉窪遺跡第4号竪穴住居跡出土土器) 体部文様帯は、体部に粘土紐で区画帯を構成し、区画帯の内部に波形文様を施文している。(葦窪遺跡第15号住居跡出土土器)この段階の体部文様は、資料が少なく釈然としないが、体部文様帯に区画帯を構成し始めるという特徴がみられる。

第2段階

第2段階に至っては、沖附(2)遺跡の第1群土器(1~9類)・五戸町中の沢西張遺跡(県埋文29集:1976)・青森市蛭沢遺跡(葛西:1979)の出土土器がこの時期に該当すると思われる。深鉢形土器では、口頸部文様帯と体部文様帯が明瞭に分離している。ただし、浅鉢・壺形では口頸部と体部文様区画帯が分離しないものもみられる。口頸部文様帯は、前段階の時期に比較してより広義な文様区画帯を構成し、口唇部寄りに粘土紐を巡らして折り返し口縁を形成するものが多い。また、折り返し口縁部には、縄文を施文後に横位の沈線を施文している。体部文様帯は、体部中央部に区画帯を構成しており、区画帯の内部にコ状文様及び卵形に近い大柄な渦巻文様を施文している。文様要素としては、磨消縄文・粘土紐・沈線等を用い磨消縄文を多く用いる。器形の面では、壺形・浅鉢形等が多く器形の分化が顕著となってくる時期である。中の沢西張遺跡第1号住居跡・蛭沢遺跡の第2・3群土器の一部を除く土器が該当すると思われる。本遺跡の第1号住居跡では、コ状文様から渦巻文様の変遷がみられたが、現段階においてコ状文様から渦巻文様に変遷するのは、資料が少ないために判断できない。

第3段階

本段階は、蛭沢遺跡第1群土器・弥栄平(2)遺跡(県埋文81集:1984)・川代遺跡(川内町:1981)と本遺跡の第1群10類土器で地文縄文に沈線を施文している土器が一つの型式と思われる。この段階の特徴としては、第2段階で発展した口頸部・体部の文様区画帯の分離が、本段階に至って少なくなり体部文様区画帯が発達する。文様要素としては、地文縄文に沈線が主体であるが、磨消縄文・粘土紐も用いられる。川代遺跡の例から、粘土紐は口縁部に多くアクセント的な要素に用いられ、前段階程に多くは用いられなくなる。第3段階の土器については、葛西氏

が蛭沢遺跡で第1群土器とし、より古い段階に位置づけているが、(葛西：1979) 中期末葉の大木10式併行土器や第4段階の十腰内式との関連で土器文様を比較すると、古期に位置づけられるとは考えられない。

第4段階

本段階は、従来いわれている十腰内式の土器で、沈線文を主体としている。他の文様要素として磨消縄文・粘土紐(口縁部に8の字状に貼り付ける)がみられる。葛西氏(葛西：1979)が、論文中で第2段階A種磨消縄文・B種沈線と分離しているが、A・B種は同一時期の所産である。沖附(1)遺跡の発掘調査では、沈線文が縦位方向に施文している土器が多く横位方向に展開するモチーフを保持していなかった。十腰内遺跡(磯崎他：1968)では、縦位及び横位の文様帯を保持しているために十腰内式期を細分する際の一つの混乱を生じた原因である。しかし、十腰内式の細分のメルクマールとして、沖附(1)遺跡・妻の神遺跡(県埋文30集：1976)の例から縦位及び横位の文様構成で細分できると思われる。

第1～4段階の変遷を、代表的な遺跡名を下記に例記した。また、北海道道南地域の編年と対比してみた。

(第1段階)

弥栄平(1)遺跡・鷹架沼竪穴遺跡・葦窪遺跡・鶉窪遺跡・丹後谷地遺跡 道南部(余市式^{註(1)})

(第2段階)

第1群土器1～9類・中の沢西張遺跡・蛭沢遺跡第2・3群土器 道南部(余市式?)

(第3段階)

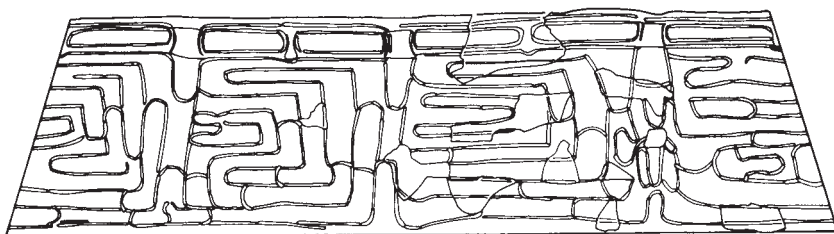
第1群土器10類・弥栄平(2)遺跡・川代遺跡・蛭沢遺跡第1群土器 道南部(湧元式)

(第4段階)

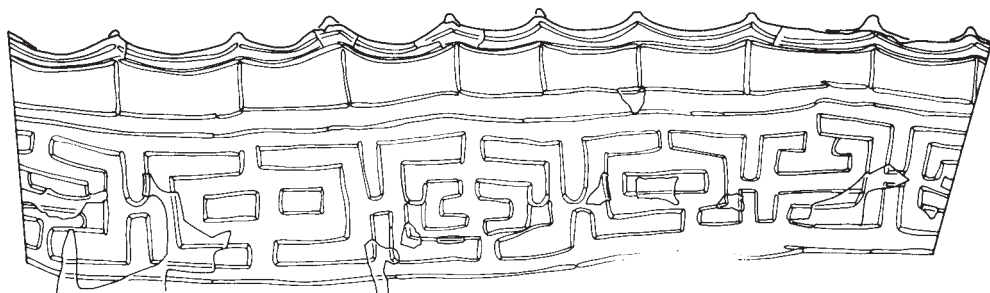
沖附(1)遺跡・大石平(1)遺跡・妻の神遺跡 道南部(トリサキ式)

以上の様に縄文時代後期初頭～前半にかけてを第1～4段階の変遷を簡単に記載した。今後、周辺地域との関連を吟味、検討する必要があると思われる。

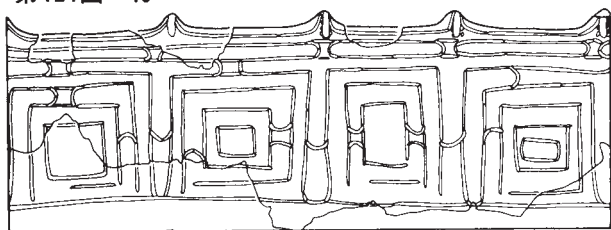
注(1) 北海道道南部の縄文時代後期編年は、今回の報告書中で森田氏(森田：1981)の編年を用いたが、高橋氏(高橋：1981)・鷹野氏(鷹野：1984)の批判もあり、また、本県の土器と比較した場合に第1・2段階の土器と余市式土器群に関して釈然としない面をもっている。(成田滋彦)



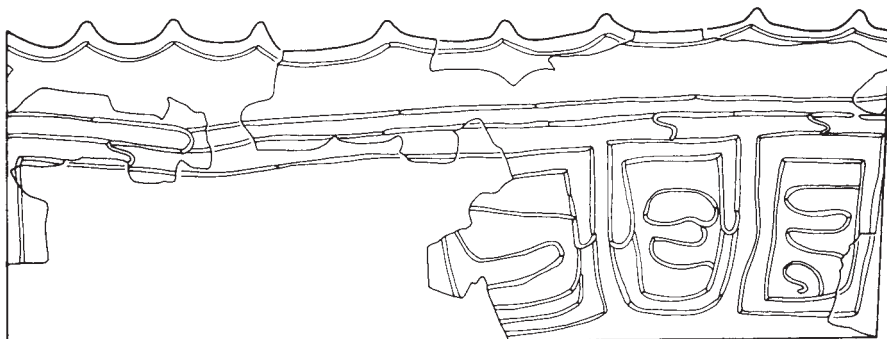
第9图-2



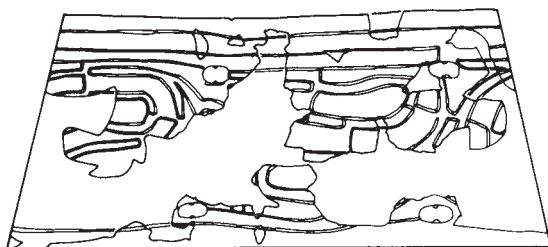
第124图-49



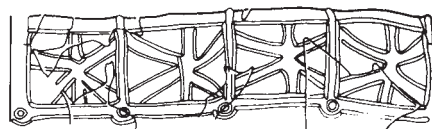
第49图-1



第9图-1

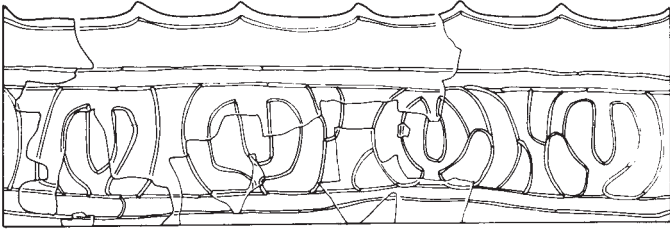


第125图-54

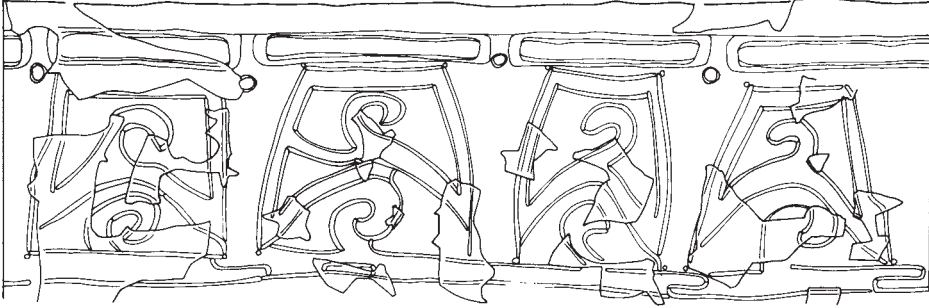


第19图-2

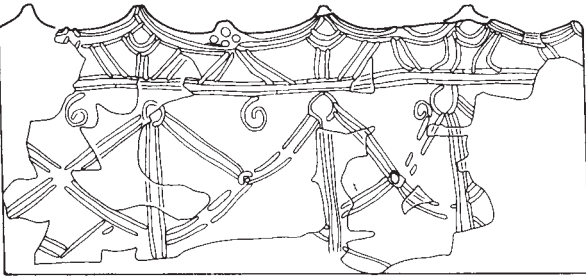
第179图 第Ⅲ群土器展開模式图(1)



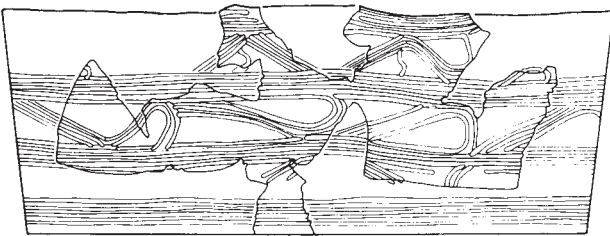
第126图—61



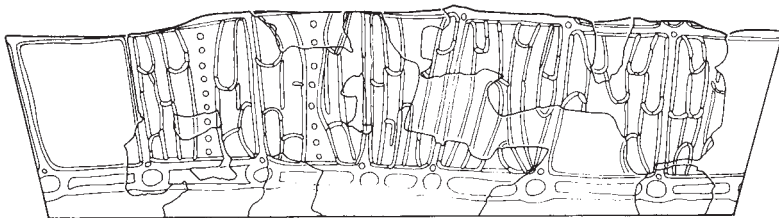
第128图—66



第128图—68

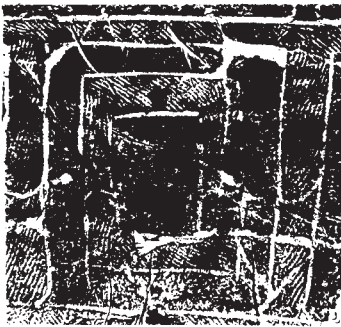


第128图—67



第24图—1

第180图 第Ⅲ群土器展開模式图(2)



第49图-1



第124图-49



第9图-1



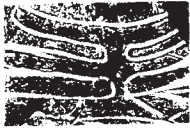
第9图-2



第125图-57



第19图-2



第126图-61



第128图-66



第129图-72



第127图-65

第181图 第Ⅲ群土器文様拓影图

2 土製品

出土した土製品は、遺構内（住居跡、ピット）3点、遺構外5点、計8点である。昭和53年度の試掘調査でも出土した記録は残っていない（県埋文48集：1978）。土製品の種類は、円盤状土製品7点、長方形状（仮称）土製品1点である。種類、点数とも同時期の遺跡と比較すると少ないことは、次の2遺跡の例をみると判然とする。葦窪遺跡では、靴形2、茸形2、動物11、鐸形2、円盤状7、有孔1、棒状1、土版1、土偶5、耳飾4、装身具1、その他1など11種類28点が出土した。また、大石平遺跡では、円盤状267、鐸形40、三角柱状形5、茸形5、靴形5、動物形4、船形1、土錘15、土偶5、耳飾6、装身具1、形状・名称等不明22等11種類以上379点が出土した。円盤状土製品の用途については定説がないようである。ここでは出土した土製品自体の本質的機能、用途の究明、出土例との比較検討も必要と考えるが、それよりも本遺跡の土製品の種類、点数が極めて少ない点に注目してみたい。土製品の多くは、即物的にその機能面、用途を判別できる遺物（道具）ではなく、多分に当時の信仰、祈り、呪術などの精神生活とは切り離して考えることのできない領域の道具である。その道具の種類、点数が共に少ないことは、これらを使用する施設が本遺跡には併設されていなかったとも仮定することができよう。大石平、葦窪などの遺跡と本遺跡とは、集落の機能、施設、性格の面で差異があって、前者のような母村的、拠点集落では、その分村的集落の祭祀、呪術的、習俗的行事も合同でとりおこなわれていたため、後者のような分村的集落では、それに必要な道具（土製品など）は必要なかったか、あるいは出土してもその種類、出土数も少ないのではなからうかと、短絡的に考えてみたが、今後は、さらにこのような事例が報告されていないか、母村的集落と分村的集落の関係をどのような遺物、遺構で見極め得るか、資料を蓄積してその要件を見出すことなどが課題であろう。（北林）

3 石器・石製品（第182・183図）

本遺跡で出土した石器総数は、遺構内（住居跡・ピット・焼土状遺構・溝状ピット）から21点・遺構外から320点の341点出土した。遺跡内の分布は、全体に分布しており東・西側グリッドで密度は薄く、中心部で石器分布の密度は濃い。（第182図）

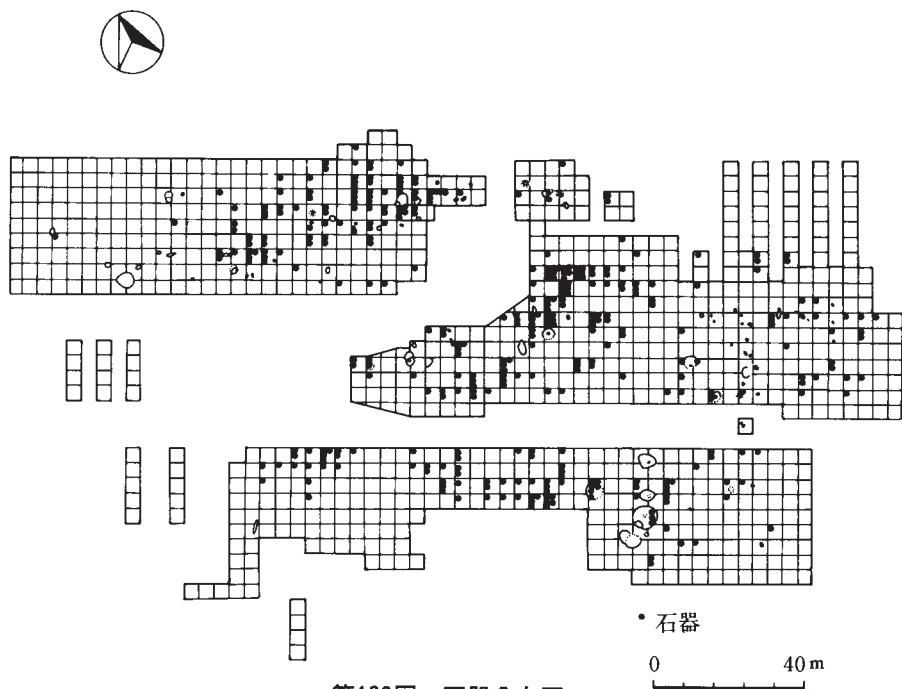
出土石器の特徴としては、第 群石器（剥片石器）の24％・第 群石器（礫石器）73％・第 群石器（石製品）3％と第 群石器の占める割合が多く、（第183図）特に第 群石器の狩猟に使われた石鏃の出土が少ないことと、第 群石器の敲石の出土が多いことも特徴としてあげられる。

F類の磨製石斧では、1～4類と分類し製作工程ごとに記載した。F-1類の剥離調整のみの段階では、石器の用途として使用したとは考えられないが、F-2・3類の敲打・剥離のみみられるものは、石器の用途として十分に使用できる形態であり、磨製石斧の中で敲打のもの

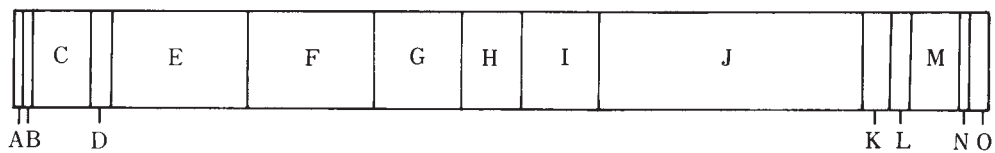
研磨のものとの石器使用及び用途の違いではないかと思われる。

本遺跡では、石器組成をみると第 群石器の比率が高く、今後、本遺跡をも含めて他遺跡の石器組成をも比較し、石器組成のあり方から縄文時代集落の生産形態を追求する必要があると思われる。

(成田滋彦)



第182図 石器分布図



第183図 石器組成グラフ図

第3節 まとめ

1 遺跡の立地

本遺跡は、下北半島の太平洋岸から約4km内陸に位置し、尾駮沼と鷹架沼の間に挟在する。標高47～56mの千歳段丘から下位の七鞍段丘へ連続する浸食斜面上に立地して、調査地区南端には自然湧水地点がある。本遺跡が所在する尾駮沼、鷹架沼などの湖沼群の周縁には、縄文時代から平安時代に至る多くの遺跡が発見されている。

なお、本遺跡は発掘調査が計画されるまでは104号遺跡と呼称されており昭和53年度に試掘調査が実施されたことがある。

2 遺跡の基本層序と出土遺物

遺跡の基本層序は、第1層暗褐色火山灰質粘土層まで掘り下げて6層に区分した。基本層序と出土遺物の関係は、原則的にはb層下位からa層にかけては縄文時代後期前半の土器が、またb層には縄文時代前期初頭の土器が包含されていた。遺構の多くは、層aか層bにおいて落ち込みを確認した。

3 検出遺構

調査地区から検出した遺構は、竪穴住居跡、土坑状ピット、焼土状遺構、溝状ピット、配石遺構、埋設土器遺構で合計87基である。これらの遺構のなかで時期を特定できる類は多くないが、遺構数とおよその時期を判断できる類は次のとおりである。

竪穴住居跡 10軒 平面プランは、円形、楕円形などであるが、円形が主流を占める。規模は、3.5m以下、3.5m以上5m以下、5m以上の長短径に区分して分類した。小型の住居跡(A群)4軒は、中・大型の住居跡5軒(B群、4軒、C群1軒)とは立地位置が異なって、前者は北側緩斜面に、また、後者は南側台地平坦地に造営された。住居内の炉は、地床炉、石組炉、石囲炉の三形態が認められ、うち1軒では石囲炉と地床炉を併用した形跡がある。住居跡出土の縄文土器は、いずれも本書で第1群とした土器群に含まれるもので、縄文時代後期初頭からその前半に及び時期に該当するが、第1群土器の分類からは、住居跡の変遷、新旧関係などを明確に把握できるまでに至らなかった。しかし、小規模な住居跡群(A群)では磨消縄文施文土器の出土が多く、また、中規模以上の住居跡群(B、C群)では、篋描沈線文に粘土紐貼付隆線文を添加した土器が多く出土したことから、この傾向がこの時期の土器編年と結び付くのか、見極めることが今後の課題となった。

ピット 52基 ピットの多くは住居よりも高位置から同一レベルに構築され、その機能、用途に応じて、立地場所が異なるようである。その用途、使用目的に関する具体的な物証は検出されなかったが、その使用目的は貯蔵、埋葬、埋甕、呪術、廃棄物処理などの施設とみなすことができる。その時期は、住居の造営期とほぼ同じ頃が多いとみてよい。

あろう。

焼土状遺構 17基 鍋底状に若干くぼんだ類とピット内に焼土が堆積した類の2形態に分けられ、8基から、第 群土器片が出土した。

溝状ピット 4基 用途について、従来の見解を、比定あるいは積極的に支持できるような検出例は認め得なかった。その時期は、出土土器の編年の分類から、本遺跡の集落よりも古いか、新しくみて同時期と考えられるが、決定的な資料には恵まれなかった。

配石遺構 2基 ピットを伴う1基は、これまで出土した配石墓に形態上類似して、その可能性を否定し難いが、いまひとつ物証が欠けている遺構である。ほかの1基は、遺存状況から、配石遺構を称するよりも必要な石材を集めておいた場所とも考えられる。その時期は、配石遺構周辺から出土した第 群土器が編年される頃と推定できよう。

埋設土器遺構 1基 明確な用途、性格は把握し得なかったが、その出土土器から、縄文後期初頭から前半にかけての遺構に比定できた。

4 出土遺物

出土した遺物は、縄文土器、土製品、石器、石製品に大別された。それらの時代、時期、特色などは次のとおりである。

縄文土器 第 ~ 群に大きく分類した後に細分した。

第 群土器は、1~3類に分けた。1類は、長七谷地 群、2類は、芦野 群、表館式、3類は、1類か2類のいずれかに該当する。これらは、縄文時代前期初頭の土器群で、復原された土器もある。

第 群土器は、破片1点だけである。縄文時代中期初頭の円筒上層a式に相当する土器である。

第 群土器は、本遺跡の主流を占める土器群である。1類から10類までに細分した。これまで県内の発掘調査による出土例は少ない土器群であり、その編年的位置付けも未開拓の土器群であるが、現時点では、縄文時代後期初頭から前半にかけての土器群 大木10式以後、十腰内 式(群)以前 であるが、未発表の発掘資料も多量に増加しているため、今後これらの土器群との比較、検討が必要である。現在、指摘できることは、本遺跡周辺に所在する縄文中期末葉~後期前半に編年される数遺跡では、該当土器の様相が遺跡ごとに異なる点である。次に注目されることは、切断蓋付土器が完形品1点を含めて、遺構内(2)、外(4)から6点出土したことである。この種の土器出土例は、主として東北地方で40数例をかぞえるが、その体部下半を切断する例は、六ヶ所村内の遺跡のみから出土しており、この点が特色の一つであり、注目される点でもある。

土製品 種類、出土数を、拠点的あるいは母村的集落の出土例と比較すると種類、点数とも非常に少ないことが注目され、このことから本遺跡には、土製品というある種の道具を使用する施設が付属されていなかったと仮定することもできようとした。

石器・石製品 遺構内(21)、外(320)から計341点出土した。出土した石器・石製品は、第 群から第 群に大別して、第 群は剥片石器、第 群は礫石器、第 群は石製品とした。それらの出土比率は、第 群石器24%、第 群石器73%、第 群 3 %である。第 群の敲石が多数出土して、第 群の石鏃が極めて少数であることが、本遺跡の石器の特色でもあり、また、集落における、あるいは一家族の生活に要する道具と生業の割合を示唆しているとも考えられるであろう。

5 今回の発掘調査の成果の概要は以上である。

(北林)

引用参考文献

(青森県教育委員会刊行の埋蔵文化財関係出版物は、第14表付録参照)

- 青森県文化 1968 青森県埋蔵文化財展 目録
財保護協会
- 秋元 信夫 1985 大湯環状列石周辺遺跡発掘報告書(1) 鹿角市文化財調査資料 29
- 磯崎・今井 1968 十腰内遺跡、岩木山 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書
- 大沼 忠春 1981 北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について 考古学雑誌66巻4号 日本考古学会
- 小山 正忠・竹原 秀雄, 1976 新版標準土色帳(5版)
- 葛西 励 1979 蛭沢遺跡、青森市蛭沢遺跡発掘調査団
- 葛西 励 1979 十腰内 式土器の編年的細分 北奥古代文化 11号
- 葛西 励他 1981 堀合 遺跡 平賀町埋蔵文化財調査報告書 9集
- 葛西 励 1983 縄文時代中期・後期・晩期(葬制の変遷) 青森県の考古学
- 加藤・小林・藤本編 1983 縄文文化の研究 9、縄文人の精神文化
- 川内 町 1981 川代・邪馬尻遺跡発掘調査報告書
- 教育委員会
- 熊谷 常正 1983 岩手県における縄文時代前期土器群の成立 岩手県立博物館研究報告1号
- 黒石市 1985 長坂 遺跡発掘調査報告書 黒石市埋蔵文化財調査報告書 3集
- 教育委員会
- 佐藤達夫他 1958 青森県上北郡早稲田貝塚 考古学雑誌43巻2号
- 佐藤達夫他 1961 六ヶ所村表館出土の土器 上北考古会誌2 上北考古会

- 鈴木 保彦 1984 集落の構成 季刊考古学 7号
- 鷹野 光行 1984 縄文時代後半期 北海道考古学 20輯 北海道考古学会
- 高橋 正勝 1981 北海道南部の土器 縄文文化の研究 縄文土器 4巻 雄山閣出版
- 高橋・葛西 1983 木戸口遺跡 平賀町埋蔵文化財調査報告書 12集
- 名久井文明 1971 青森県芦野遺跡の土器群について 考古学雑誌57巻2号
- 成田 滋彦 1981 青森の後期の土器 縄文文化の研究 縄文土器 4巻 雄山閣出版
- 成田 滋彦 1985 東北地方北部の大木10式土器の周辺 奥南 3号 奥南考古学会(八戸)
- 八戸市 1984 丹後谷地遺跡(1)(2) 八戸市新都市埋蔵文化財発掘調査報告書 八戸市埋
教育委員会 文報13集
- 本間 宏 1985 東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態 よねしろ考古 1号
よねしろ考古学会
- 水野 正好 1984 ストーンサークルの意義 季刊考古学 9号
- 村越 潔 1974 円筒土器文化
- 森田 知忠 1981 後期 - 北海道 縄文土器大成3 講談社

付録

第14表 青森県教育委員会埋蔵文化財関係刊行物一覧表

| 刊行年月 | 集 | 報 告 書 名 | 遺 跡 名・備 考 |
|------|----|---|---------------------------------|
| 37 | 2 | 青森県遺跡地名表(1) | (刊行年は昭和元号)、(→変更を示す) |
| 38 | 3 | 青森県遺跡地名表(2) | |
| 39 | 3 | 青森県遺跡地名表(3) | |
| 37 | 3 | 青森県二ッ森貝塚発掘調査概要 | |
| 48 | 3 | 1 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査報告書 | |
| 47 | 4 | 2 青函トンネル資材運搬専用道路建設予定地内緊急遺跡分布調査概報 | |
| 48 | 3 | 3 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概要 報 | 表館1)、発茶沢1)、原原種農場1)→弥栄平1)に変更 |
| 48 | 3 | 4 昭和47年度東北縦貫自動車道埋蔵文化財分布試掘調査報告書 | 鳥海山、富山、永泉寺、牡丹平南 |
| 48 | 3 | 5 国道280号線道跡改良工事(今別バイパス)関係埋蔵文化財試掘調査報告書 | 五郎兵衛山、西田、浜名A、浜名 |
| 47 | 3 | 6 東北新幹線関係遺跡分布調査報告書(津軽半島) | |
| 48 | 3 | 7 中平遺跡発掘調査報告書 | (青函トンネル関係) |
| 49 | 2 | 8 昭和48年度東北縦貫自動車道埋蔵文化財分布試掘調査報告書 | 砂沢平、大平、高館、松元、杉の沢、源常平、羽黒平、熊沢 |
| 49 | 3 | 9 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 弥栄平(3)、発茶沢(2)、富ノ沢(2)、弥栄平(3)→(4) |
| 49 | 3 | 10 むつ小川原開発に伴う新住区予定地内埋蔵文化財分布試掘調査報告書 | 千歳(2)、千歳(7)、千歳(13) |
| 49 | 3 | 11 小栗山地区遺跡発掘調査報告書 | 沢部I、天王沢、沢部II(弘前南部地区農道予定地区内) |
| 49 | 3 | 12 近野遺跡(I)発掘調査調査報告書 | (県営運動公園建設関係) |
| 49 | 3 | 13 今別町浜名遺跡、中宇田遺跡、西田遺跡、五郎兵衛山遺跡、五所川原市原子溜池遺跡群発掘調査報告書 | (今別B.P.関係) |
| 49 | 3 | 14 亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書 | |
| 49 | 3 | 15 富山遺跡、永泉寺遺跡調査略報 | (東北縦貫道関係) |
| 49 | 3 | 16 三厩村中の平遺跡発掘調査略報 | (青函トンネル関係) |
| 49 | 12 | 17 建設省五戸バイパス関係発掘調査概報 | (五戸町中沢西張遺跡) |
| 49 | 12 | 18 むつ小川原開発に伴う新住区予定地内千歳遺跡③発掘調査略報 | |
| 50 | 1 | 19 東北縦貫自動車道関係遺跡分布試掘報告書 | 程森、古館、大面、永野、鳥海山 |
| 49 | 12 | 20 中里町大沢内溜池遺跡発掘調査報告書 | |
| 50 | 1 | 21 富山遺跡、永泉寺遺跡発掘調査報告書 | (東北縦貫自動車道・県営ほ場整備関係埋蔵文化財発掘調査) |
| 50 | 3 | 22 近野遺跡発掘調査報告書(II) | (県営運動公園関係) |
| 50 | 2 | 23 土井3号遺跡発掘調査報告書 | (幡竜橋架替工事による発掘調査) |
| 50 | 3 | 24 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 睦栄(1)、発茶沢(3)、大石平、富の沢(2) |
| 50 | 2 | 25 中の平遺跡発掘調査報告書 | (青函トンネル専用道路関係) |
| 51 | 3 | 26 黒石市牡丹平南遺跡、浅瀬石遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |

| 刊行年月 | 集 | 報 告 書 名 | 遺 跡 名・備 考 | |
|------|---|---------|---------------------------------|--|
| 51 | 3 | 27 | 千歳遺跡(13)発掘調査報告書 | (むつ小川原・新住区関係) |
| 51 | 3 | 28 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 弥栄平(2)、弥栄平(4)、新納屋(1)(弥栄平(2)→(3)、(4)→(5)) |
| 51 | 3 | 29 | 五戸町中沢西張遺跡、古街道長根遺跡 | (一般国道4号五戸バイパス) |
| 51 | 3 | 30 | 白山堂遺跡、妻の神遺跡発掘調査報告書 | |
| 51 | 3 | 31 | 泉山遺跡発掘調査報告書 | (一般国道柳引、上名久井、三戸線道路) |
| 52 | 3 | 32 | 鳥海山遺跡発掘調査報告書 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 52 | 3 | 33 | 近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書 | (県営運動公園建設関係) |
| 52 | 3 | 34 | 水木沢遺跡発掘調査報告書 | (一般国道279号線道路改良) |
| 52 | 3 | 35 | 石上神社遺跡発掘調査報告書 | (ほ場整備関係) |
| 52 | 3 | 36 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 幸畑(1)、幸畑(4)、幸畑(6) |
| 53 | 3 | 37 | 青森市三内遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 53 | 3 | 38 | 熊沢遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 53 | 3 | 39 | 源常平遺跡発掘調査報告書 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 53 | 3 | 40 | 高館遺跡発掘調査報告書 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 53 | 3 | 41 | 三内沢部遺跡発掘調査報告書 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 53 | 3 | 42 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 表館(1)、105号、弥栄平、室ノ久保(3)、鷹架沼登穴、新納屋(2)、幸畑(3)、陸栄(8)、(00(弥栄平→弥栄平(2))、105号→発茶沢(2)) |
| 53 | 3 | 43 | 下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告書 | (遺跡名は第71集参照) |
| 54 | 3 | 44 | 羽黒平遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 54 | 3 | 45 | 杉の沢遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 54 | 3 | 46 | 松元遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 54 | 3 | 47 | 近野遺跡(Ⅳ) | (運動公園関係) |
| 54 | 3 | 48 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | 100号→上尾駿(2)、家ノ前→家ノ前(1)、100号→沖附(1)、104号→沖附(2) |
| 54 | 3 | 49 | 細越遺跡 | (ほ場整備関係) |
| 54 | 3 | 50 | むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 | (臨港道路関係事前調査)、発茶沢(1)、表館(2) |
| 54 | 3 | 51 | 桔梗野工業団地造成に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書 | 八戸市長七谷地1～8号遺跡 |
| 55 | 3 | 52 | 大平遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 55 | 3 | 53 | 砂沢平遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 55 | 3 | 54 | 碓ヶ関村古館遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 55 | 3 | 55 | 大面遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 55 | 3 | 56 | 永野遺跡 | (東北縦貫自動車道関係) |
| 55 | 3 | 57 | 長七谷地遺跡 | (桔梗野工業団地関係) |
| 55 | 3 | 58 | 神明町遺跡 | |

| 刊行年月 | 集 | 報 告 書 名 | 遺 跡 名・備 考 |
|------|---|---------------------------|--|
| 55 | 3 | 59 板留(2)遺跡 | |
| 55 | 3 | 60 五輪堂遺跡 | |
| 56 | 3 | 61 表館遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 56 | 3 | 62 新納屋遺跡(2) | (むつ小川原関係) |
| 56 | 3 | 63 鷹架遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 56 | 3 | 64 外長根(1)、前平(2)遺跡 | (八戸平原関係) |
| 56 | 3 | 65 志民(2)、田ノ上遺跡 | (八戸平原関係) |
| 57 | 3 | 66 野辺地町明前遺跡 | (東北電力、送電線) |
| 57 | 3 | 67 発茶沢遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 57 | 3 | 68 山崎遺跡 | (今別バイパス関係) |
| 57 | 3 | 69 右エ門次郎窪、三合山、石ノ窪遺跡 | (東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅰ) |
| 57 | 3 | 70 馬場瀬(1)、(2)遺跡 | (東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅱ) |
| 57 | 3 | 71 下北地点原子力発電建設予定地内試掘調査 | 銅谷(1)、(2)、(3)、前坂下(1)~(3)、南通、見知川山、浜通、アイヌ野 |
| 58 | 3 | 72 鴨平(1)遺跡 | (東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅲ) |
| 58 | 3 | 73 鴨平(2)遺跡 | (東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅳ) |
| 58 | 3 | 74 長者森遺跡 | (東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅴ) |
| 58 | 3 | 75 銅谷(1)、南通、前坂下(1)遺跡 | (下北原発関係) |
| 58 | 3 | 76 鶉窪遺跡 | (八戸環状線関係) |
| 58 | 3 | 77 松原、陣場川原、槻ノ木遺跡 | (一般農道) |
| 58 | 3 | 78 垂柳遺跡発掘調査概報 | (一般国道102号線道路改良) |
| 59 | 3 | 79 一ノ渡遺跡 | (浅瀬石川ダム関係) |
| 59 | 3 | 80 浜通遺跡 | (下北原発関係) |
| 59 | 3 | 81 弥栄平(2)遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 59 | 3 | 82 和野前山遺跡 | (八戸環状線関係) |
| 59 | 3 | 83 昼巻沢遺跡 | (東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅵ) |
| 59 | 3 | 84 菲窪遺跡 | (東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅶ) |
| 59 | 3 | 85 白山平(2)遺跡 | (東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅷ) |
| 59 | 3 | 86 牛ヶ沢(2)遺跡 | (東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅸ) |
| 59 | 3 | 87 朝日山遺跡 | (文化課) 青森市 |
| 60 | 3 | 88 垂柳遺跡 | (一般国道102号線道路改良) |
| 60 | 3 | 89 尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書 | (今津バイパス関係) |
| 60 | 3 | 90 大石平遺跡 | (むつ小川原関係) |
| 60 | 3 | 91 表館遺跡Ⅱ | (むつ小川原関係) |

| 刊行年月 | 集 | 報 告 書 名 | 遺 跡 名・備 考 |
|------|---|---------------------------------------|---|
| 60 | 3 | 92 石ノ窪(1)・石ノ窪(2)・古宮遺跡発掘調査報告書 | (東北縦貫自動車道八戸線関係X) |
| 60 | 3 | 93 売場遺跡発掘調査報告書、大タルミ遺跡発掘調査報告書 | (八戸環状線関係) |
| 60 | 3 | 94 国道338号線(鷹架大橋)橋梁整備事業に係る埋蔵文化財試掘調査報告書 | 幸畑7)、鷹架沼登穴、弥栄平(1)・(3)遺跡(文化課、昭和56、57年試掘調査) |
| 61 | 3 | 95 今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書 | (国道280号線今津B P関係) |
| 61 | 3 | 96 発 茶 沢 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書 | (むつ小川原道路関係) |
| 61 | 3 | 97 大石平(1)(2)遺跡 " " | (むつ小川原関係) |
| 61 | 3 | 98 弥栄平(1)遺跡 " " | (むつ小川原道路関係) |
| 61 | 3 | 99 独 狐 遺 跡 " " | |
| 61 | 3 | 100 沖 附 (1) 遺 跡 " " | (むつ小川原関係) |
| 61 | 3 | 101 沖 附 (2) 遺 跡 " " | (") |
| 62 | 3 | 弥栄平(4)遺跡 " " | (") |

写真図版



(調査地区東側) (S↓)
調査開始



調査地区中央↓南側防風林 (NW↓)



調査地区西側↓東側防風林

写真1 遺跡近景(1)



右 南側防風林・第1号住居跡(E↓)



右 南側防風林の調査(S↓)

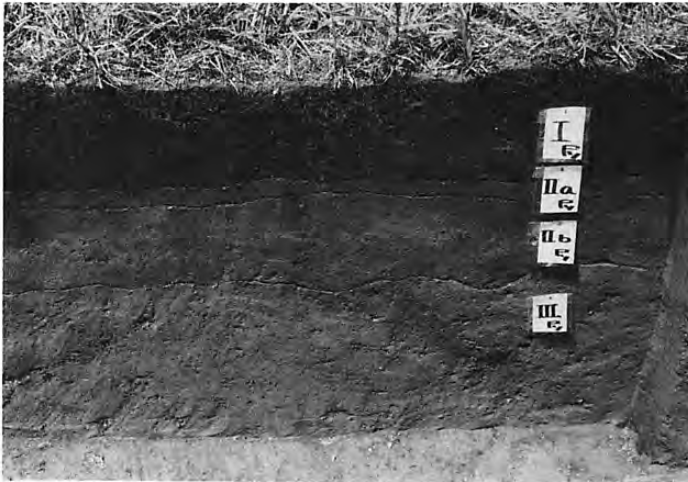
左 第10号住居跡・農道(W↓)



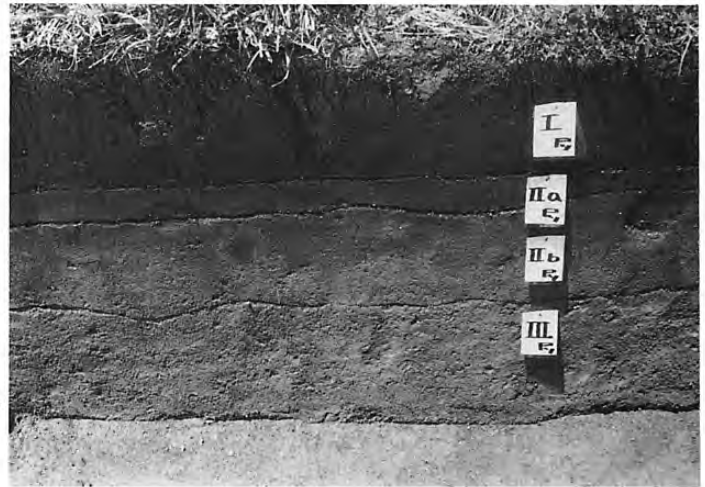
左 西側防風林付近(W↓)



写真2 遺跡近景(2)



EG-135ライン
(E→)



EG-135ライン
(E→)



EG-135ライン
(E→)

写真3 EG-135ライン土層堆積状況



写真4 遺構外遺物出土状況



第1号竖穴住居跡 (W→)



第1号竖穴住居跡 (W→)



第1号竖穴住居跡炉 (S→)



第1号竖穴住居跡炉 (S→)



第1号竖穴住居跡炉掘り方 (S→)



第1号竖穴住居跡 (W→)



第2号竖穴住居跡 (E→)



第2号竖穴住居跡 (S→)

写真5 縄文時代竖穴住居跡(1)



第3号竖穴住居跡 (S→)



第3号竖穴住居跡遺物出土状況 (S→)



第3号竖穴住居跡炉 (E→)



第3号竖穴住居跡炉 (N→)



第3号竖穴住居跡 (W→)



第3号竖穴住居跡 (S→)



第4号竖穴住居跡 (E→)



第4号竖穴住居跡 (N→)

写真6 縄文時代竖穴住居跡(2)



第4号竖穴住居跡 (N→)



第4号竖穴住居跡 (N→)



第5号竖穴住居跡 (S→)



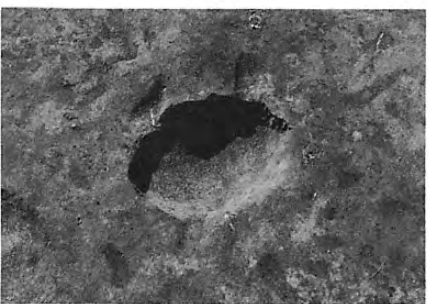
第5号竖穴住居跡 (S→)



第5号竖穴住居跡1号炉 (W→)



第5号竖穴住居跡1号炉 (W→)



第5号竖穴住居跡2号炉 (N→)



第5号竖穴住居跡第1号ピット (S→)

写真7 縄文時代竖穴住居跡(3)



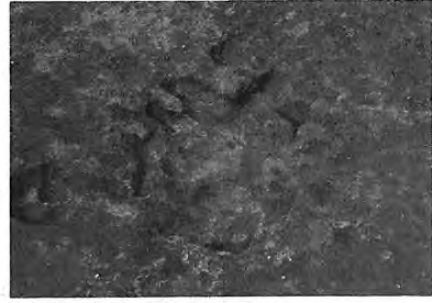
第6号竖穴住居跡 (S→)



第6号竖穴住居跡 (E→)



第6号竖穴住居跡 (S→)



第6号竖穴住居跡炉 (S→)



第6号竖穴住居跡 (E→)



第7号竖穴住居跡炉 (N→)



第7号竖穴住居跡 (N→)



第7号竖穴住居跡炉 (N→)

写真8 縄文時代竖穴住居跡(4)



第 8 号竖穴住居跡 (S→)



第 8 号竖穴住居跡 (S→)



第 8 号竖穴住居跡炉 (E→)



第 8 号竖穴住居跡炉 (E→)



第 9 号竖穴住居跡 (N→)



第 9 号竖穴住居跡炉 (S→)



第 9 号竖穴住居跡 (N→)

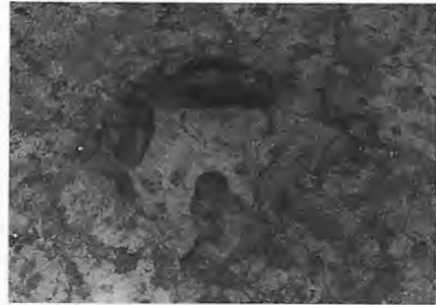


第 9 号竖穴住居跡土器出土状况 (S→)

写真 9 縄文時代竖穴住居跡(5)



第10号竖穴住居跡炉 (W→)



第10号竖穴住居跡炉 (N→)



第5・7・8号竖穴住居跡 (S→)



第5～8号竖穴住居跡 (S→)



第5～7号竖穴住居跡 (W→)



第5・6号竖穴住居跡 (W→)



第5～7号竖穴住居跡 (N→)



第5～7号竖穴住居跡 (N→)

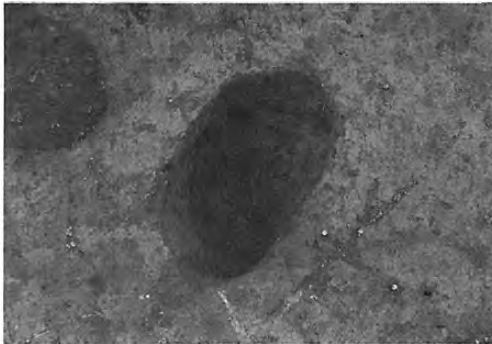
写真10 縄文時代竖穴住居跡(6)



第11号完掘 (N→)



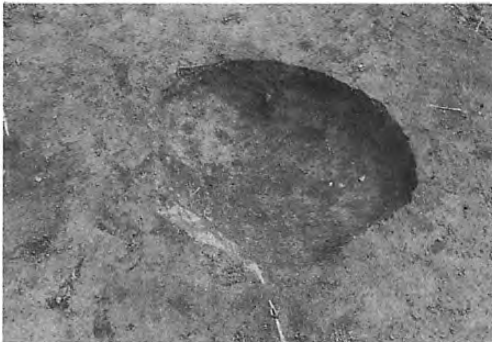
第12号完掘 (S→)



第15号完掘 (S→)



第16号土層断面 (E→)



第18号完掘 (S→)



第20号土層断面 (W→)



第20号完掘 (W→)



第21号完掘 (S→)

写真11 第11号～第21号ピット(1)



第22号土層断面 (N→)



第23号土層断面 (W→)



第23号土層断面 (W→)



第23号遺物出土状況 (W→)



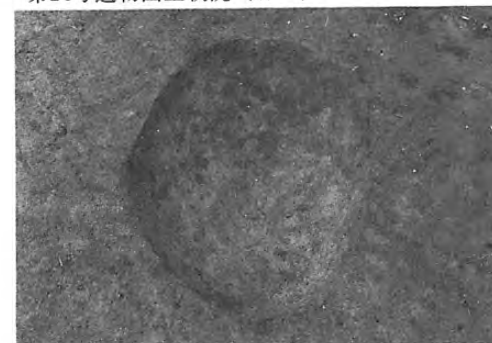
第24号遺物出土状況 (E→)



第24号遺物出土状況 (W→)



第25号土層断面 (N→)

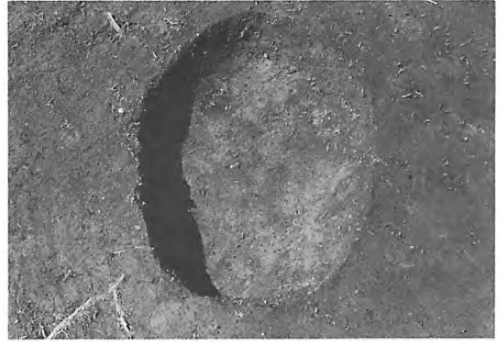


第26号完掘 (W→)

写真12 第22号～第26号ピット(2)



第26号土層断面 (W→)



第27号完掘 (N→)



第28号土層断面 (S→)



第28号完掘 (S→)



第29号土層断面 (S→)



第29号完掘 (S→)



第30号土層断面 (S→)



第30号完掘 (S→)

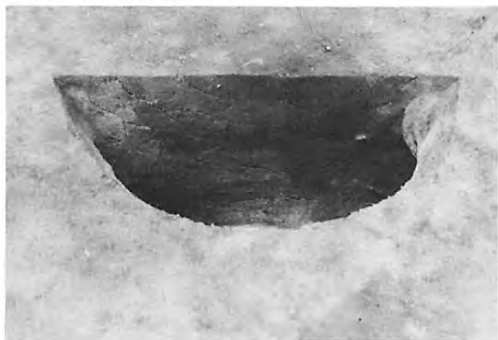
写真13 第26号～第30号ピット(3)



第31号土層断面 (E→)



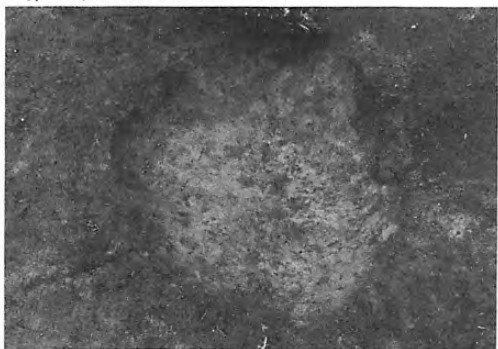
第31号完掘 (N→)



第32号土層断面 (E→)



第32号完掘 (E→)



第35号完掘 (E→)



第37号完掘 (S→)



第38号遺物出土状況 (E→)



第39・40号完掘 (S→)

写真14 第31号～第40号ピット(4)



第41号完掘 (E→)



第42号土層断面 (E→)



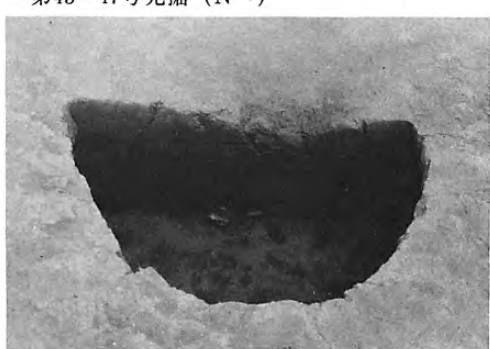
第42号完掘 (N→)



第43・47号完掘 (N→)



第44号完掘 (N→)



第45号土層断面 (S→)



第45号完掘 (N→)



第46号土層断面 (N→)

写真15 第41号～第46号ピット(5)



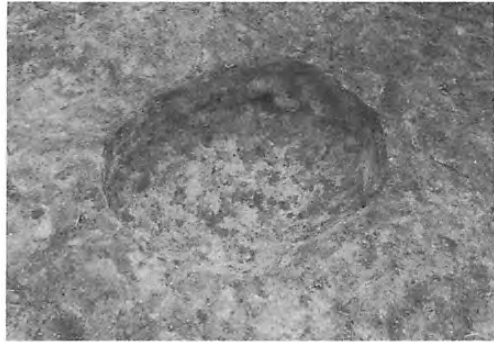
第46号完掘 (S→)



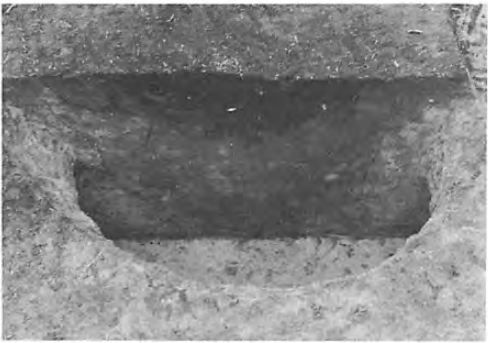
第48号土層断面 (N→)



第45・50号完掘 (S→)



第51号完掘 (W→)



第52号土層断面 (S→)



第52号完掘 (S→)



第53号土層断面 (S→)

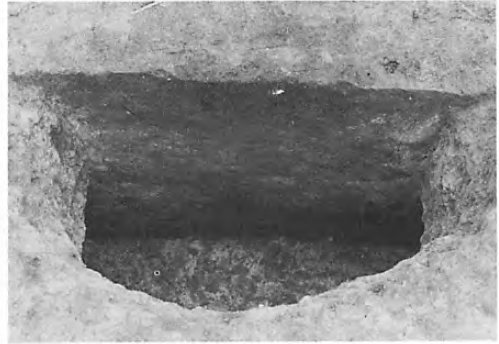


第53号完掘 (E→)

写真16 第46号～第53号ピット(6)



第54号完掘 (N→)



第54号土層断面 (S→)



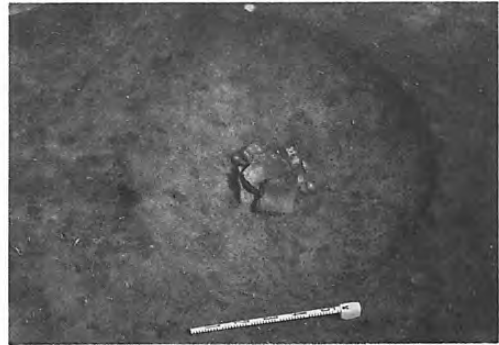
第55号土層断面 (S→)



第55号完掘 (S→)



第56・57号完掘 (N→)



第58号完掘 (E→)



第59号完掘 (S→)



第59号土層断面 (S→)

写真17 第54号～第59号ピット(7)



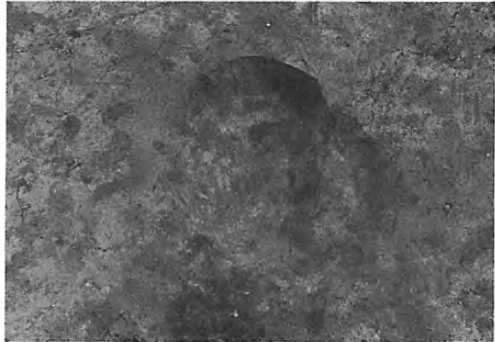
第60号完掘 (S→)



第60号土層断面 (S→)



第61号遺物出土状況 (S→)



第61号完掘 (W→)



第62号土層断面 (S→)



第62号完掘 (S→)



第67号土層断面 (W→)

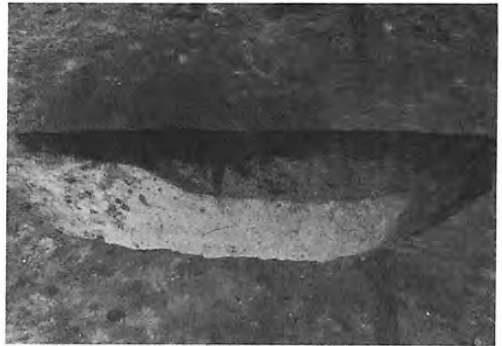


第63号土層断面 (S→)

写真18 第60号～第63号ピット(8)



第64号完掘 (S→)



第64号土層断面 (S→)



第65号完掘 (W→)



第65号土層断面 (S→)



第67号完掘 (N→)



第67号土層断面 (W→)



第68号完掘 (右 第6号住居跡 S→)



第69号完掘 (N→)

写真19 第64号～第69号ピット(9)



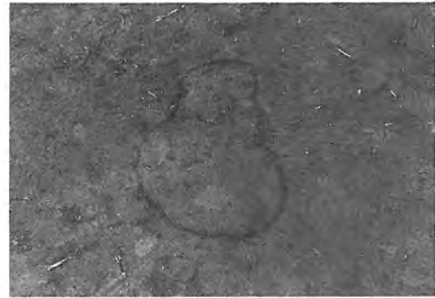
第1号烧土状遺構 (S→)



第2号烧土状遺構 (S→)



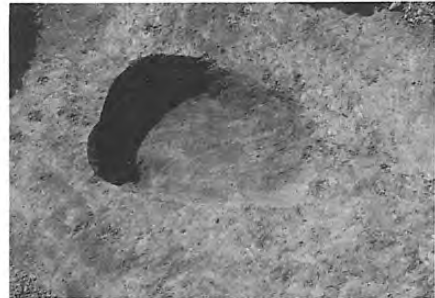
第4号烧土状遺構 (E→)



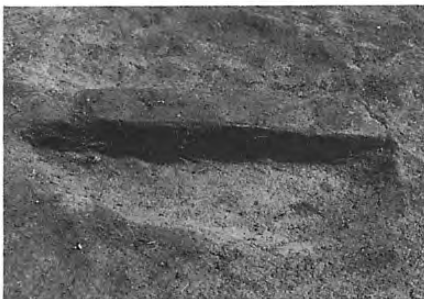
第5号烧土状遺構 (N→)



第6号烧土状遺構 (E→)



第7号烧土状遺構 (E→)



第8号烧土状遺構 (S→)



第9号烧土状遺構 (S→)

写真20 烧土状遺構(1)



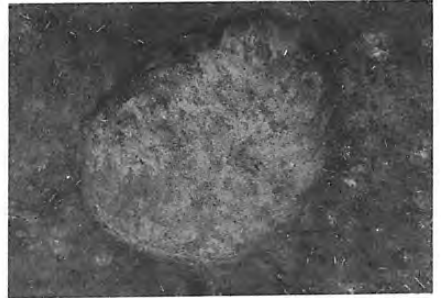
第10号烧土状遺構 (E→)



第11号烧土状遺構 (E→)



第12号烧土状遺構 (W→)



第13号烧土状遺構 (E→)



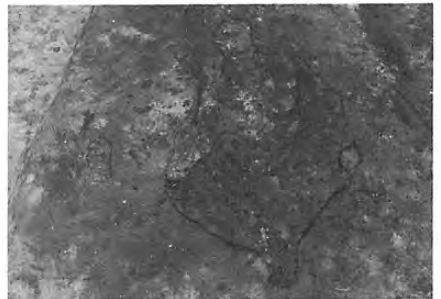
第14号烧土状遺構 (S→)



第15号烧土状遺構 (S→)



第16号烧土状遺構 (W→)



第17号烧土状遺構 (W→)



第19号烧土状遺構 (S→)



第18号烧土状遺構 (N→)

写真21 烧土状遺構(2)



同左 土層断面 (W ↓)

第一号配石遺構確認 (W ↓)



第二号配石遺構完掘 (S ↓)

第一号配石遺構完掘 (N ↓)

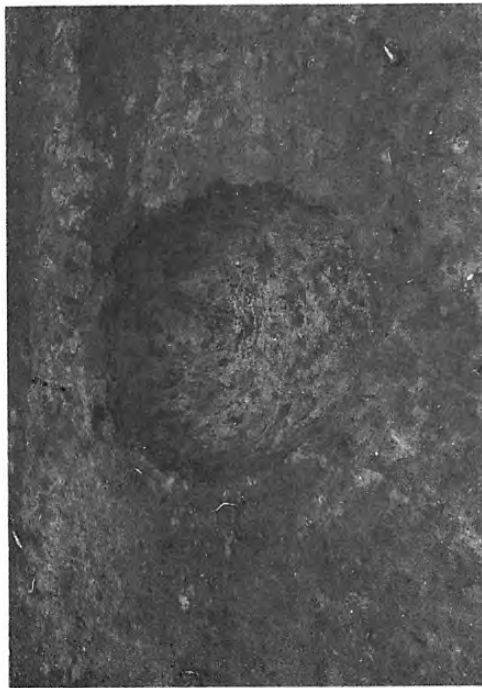
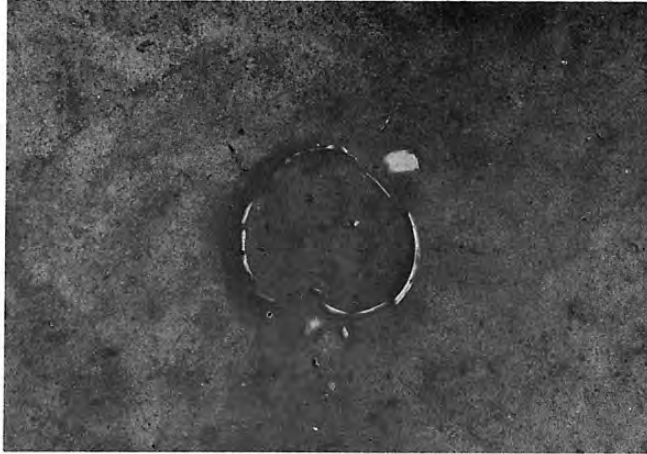


写真22 第1・2号配石遺構



確認 (S→)

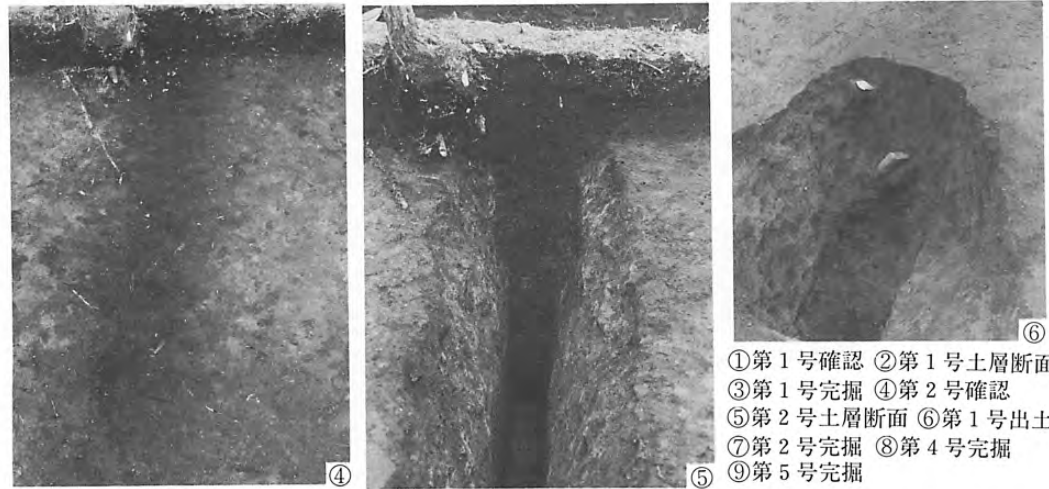
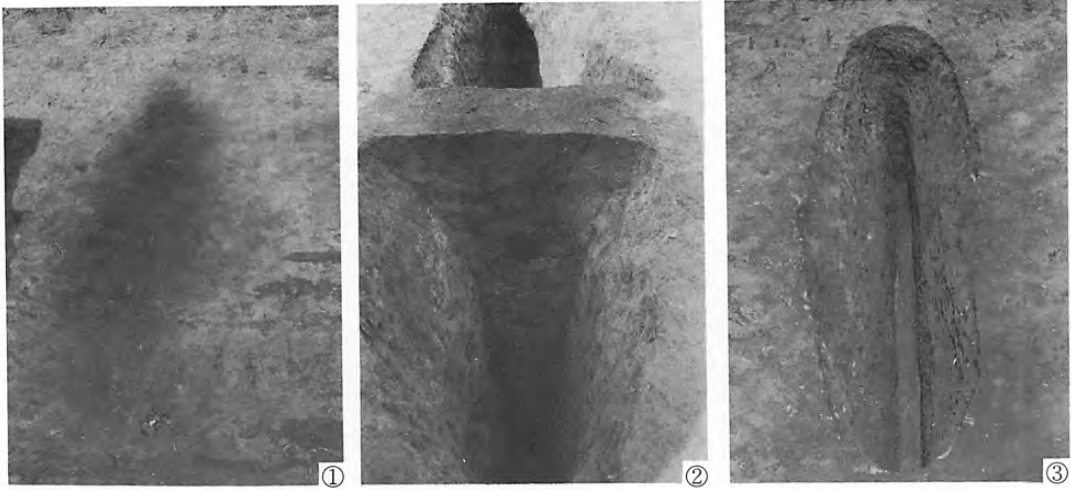


断面 (W→)



掘り方 (W→)

写真23 埋設土器遺構



①第1号確認 ②第1号土層断面
 ③第1号完掘 ④第2号確認
 ⑤第2号土層断面 ⑥第1号出土遺物
 ⑦第2号完掘 ⑧第4号完掘
 ⑨第5号完掘

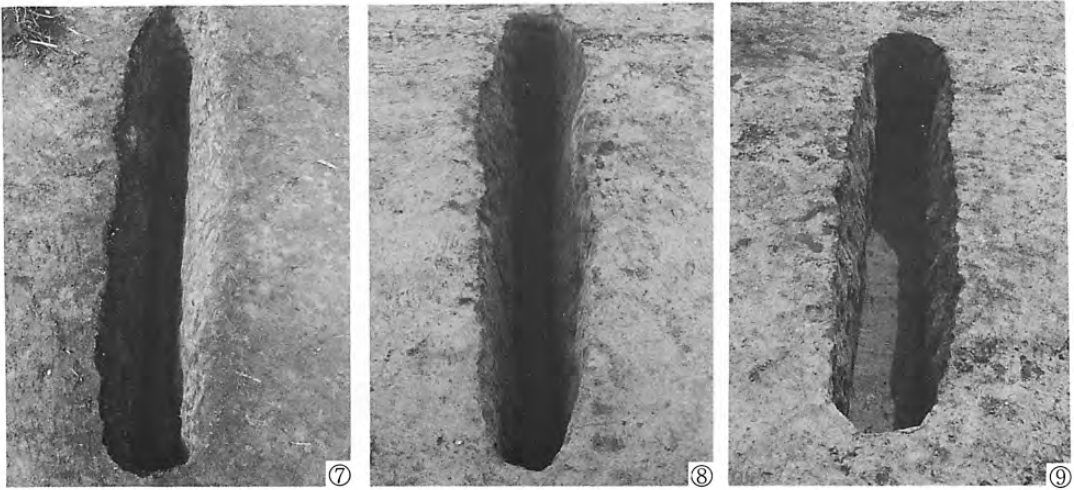


写真24 第1～第5号溝状ピット

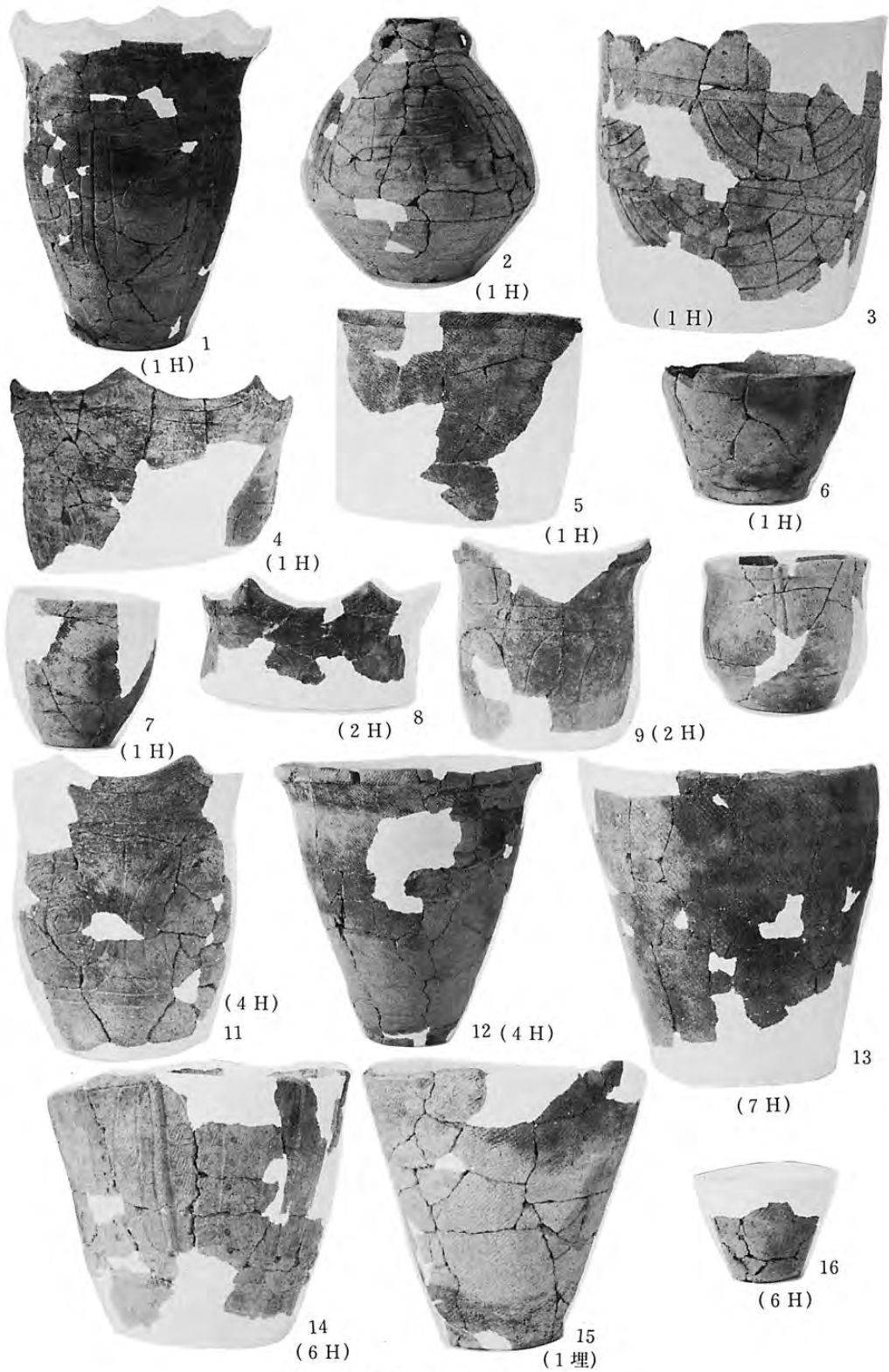


写真25 遺構内出土土器(1)

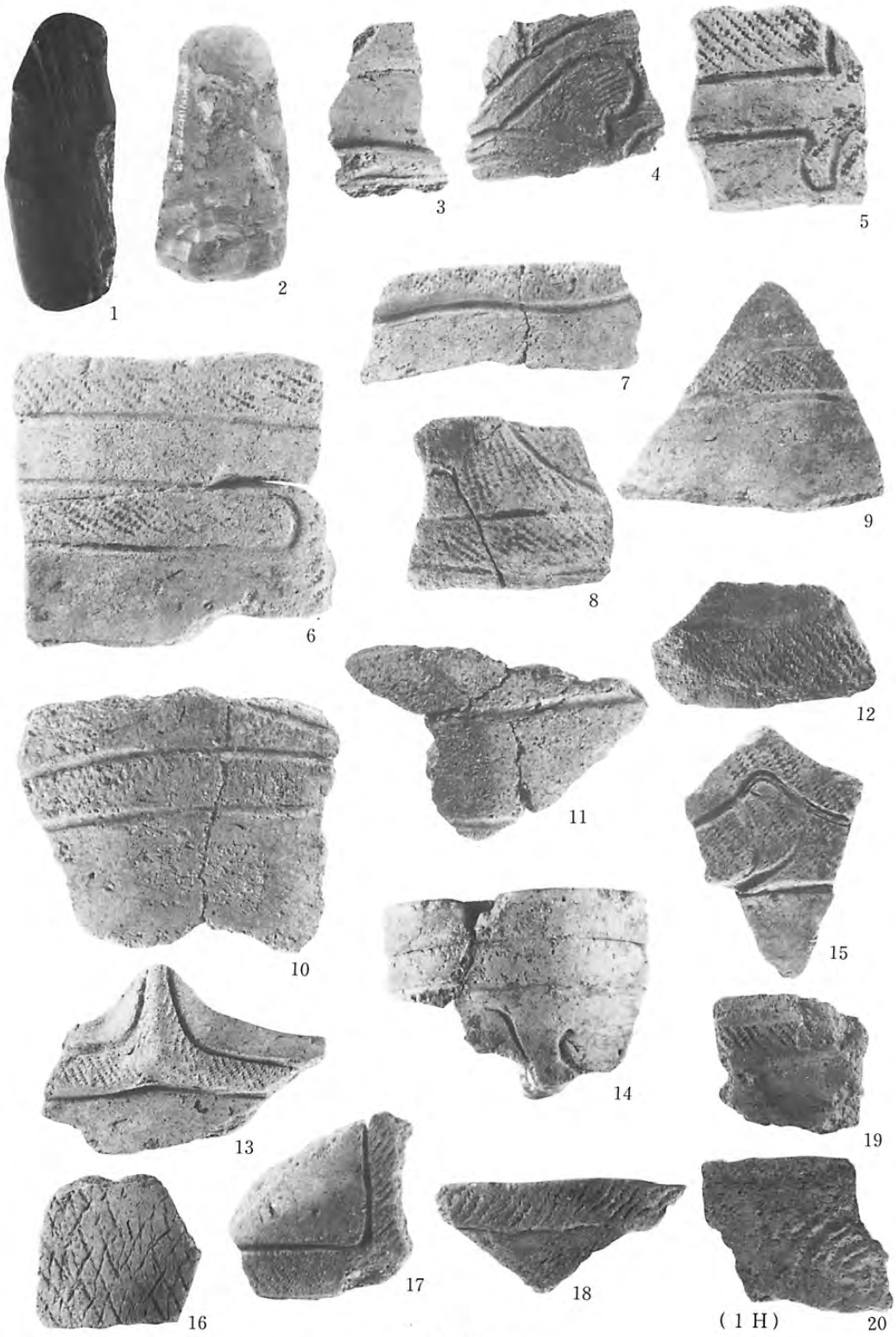


写真26 遺構内出土土器(2)

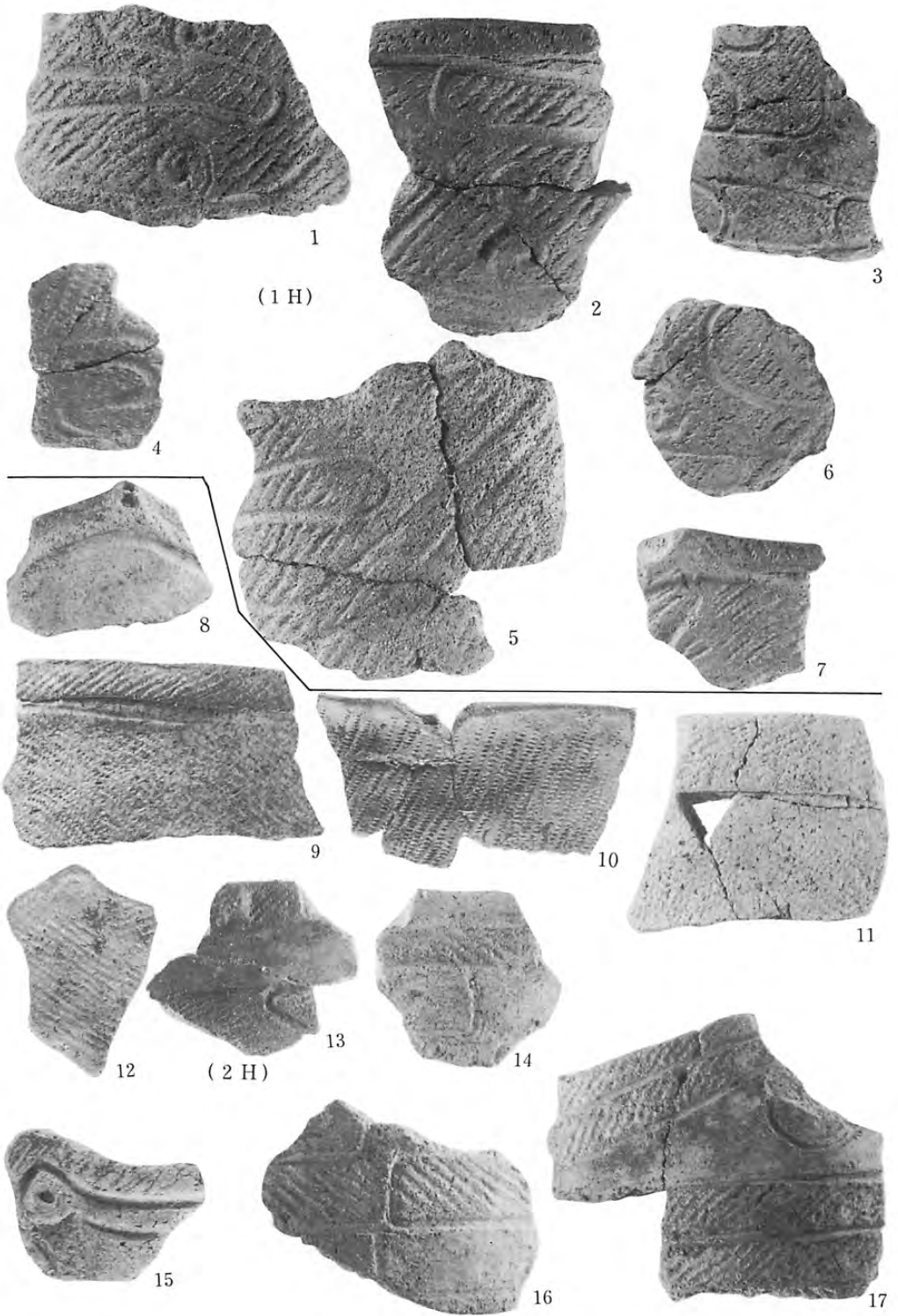


写真27 遺構内出土土器(3)

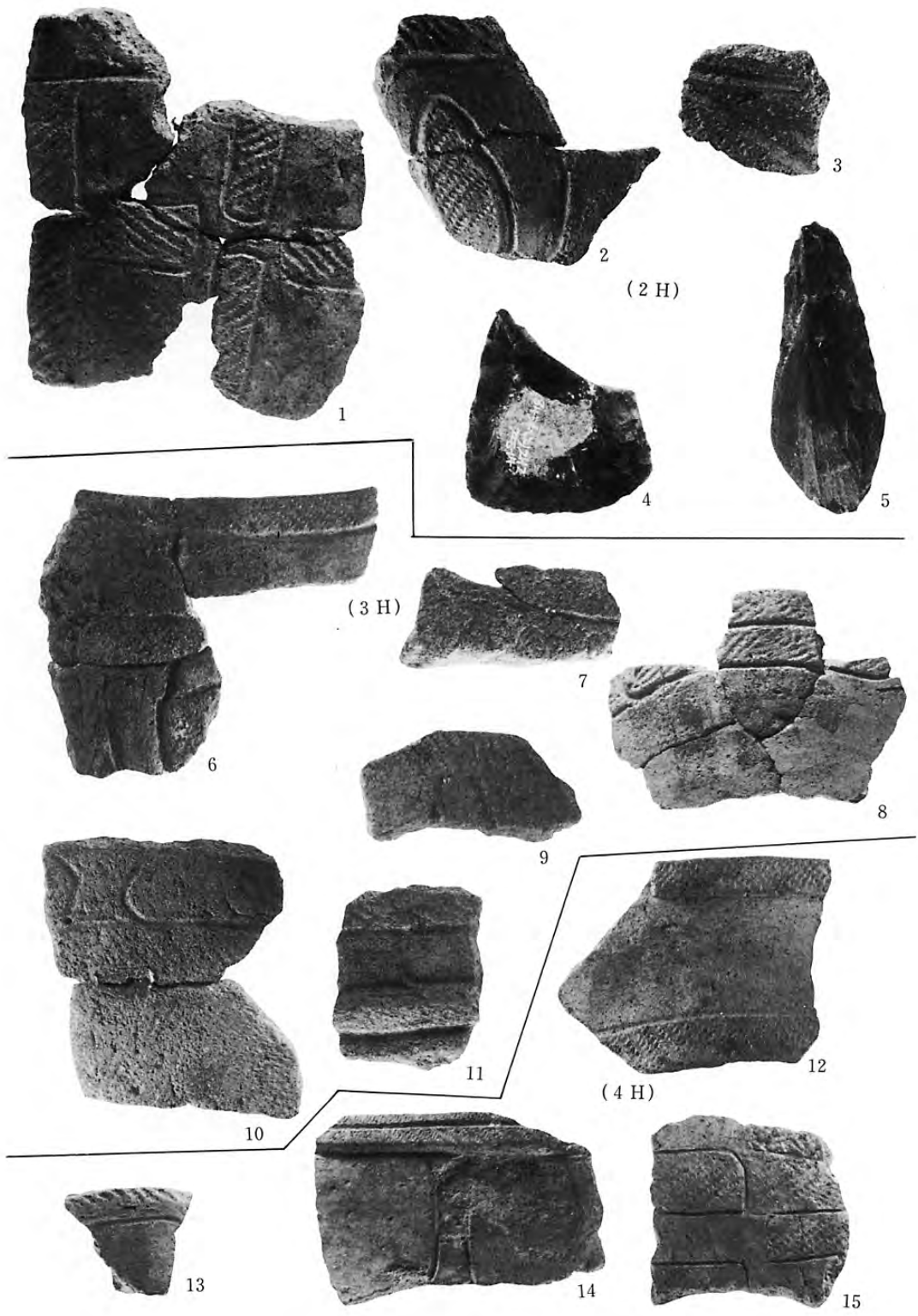


写真28 遺構内出土土器(4)

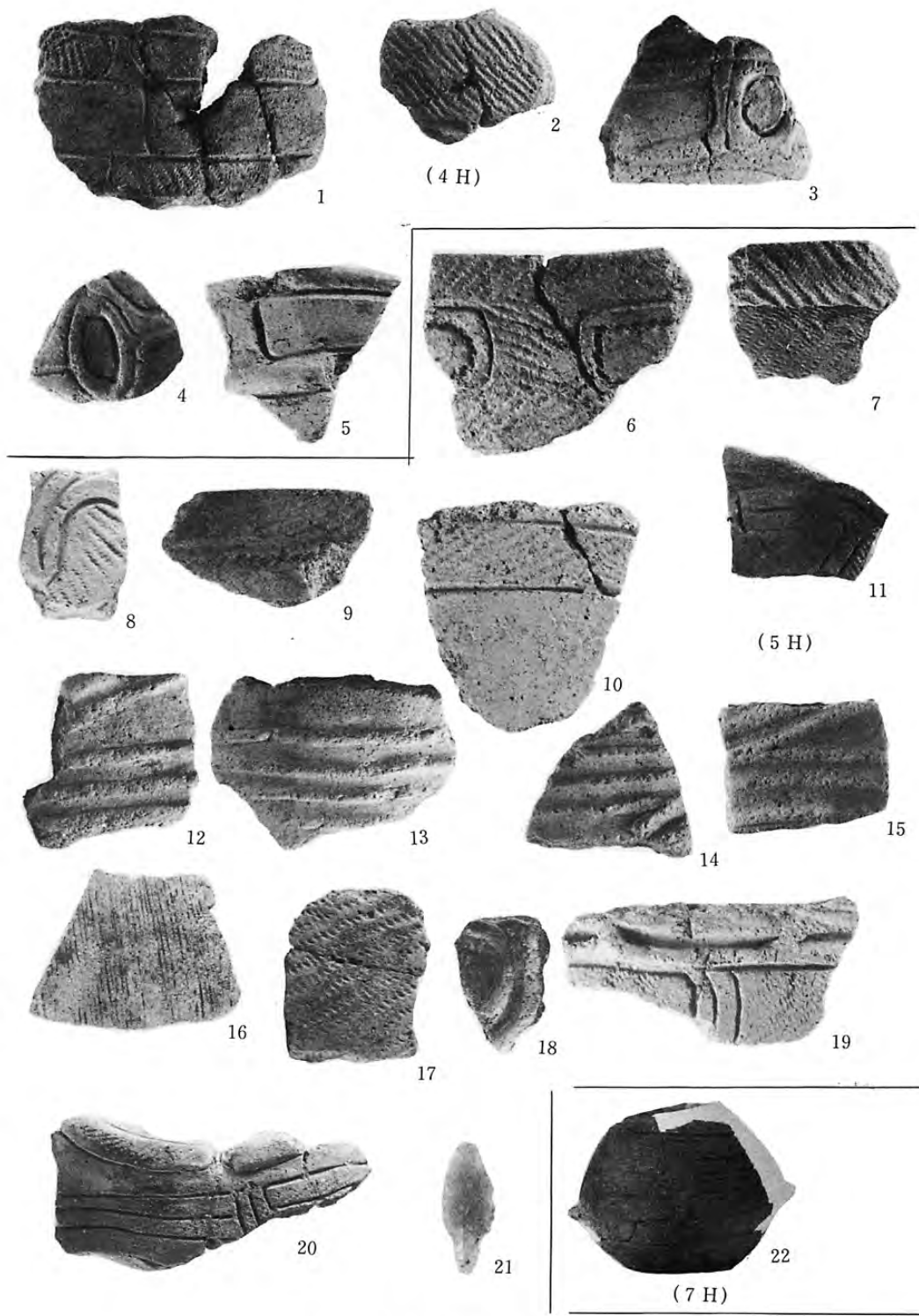


写真29 遺構内出土土器(5)

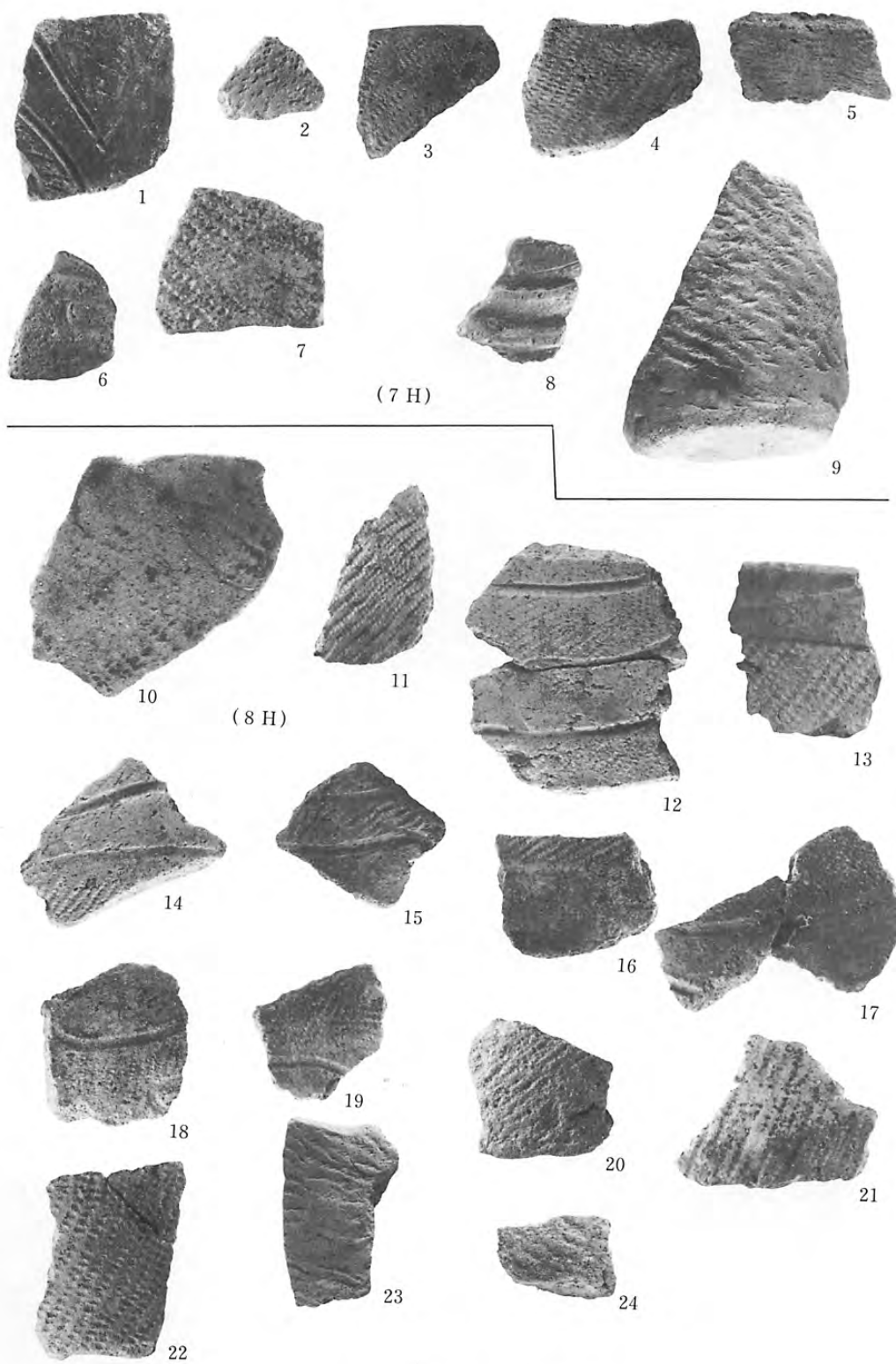


写真30 遺構内出土土器(6)

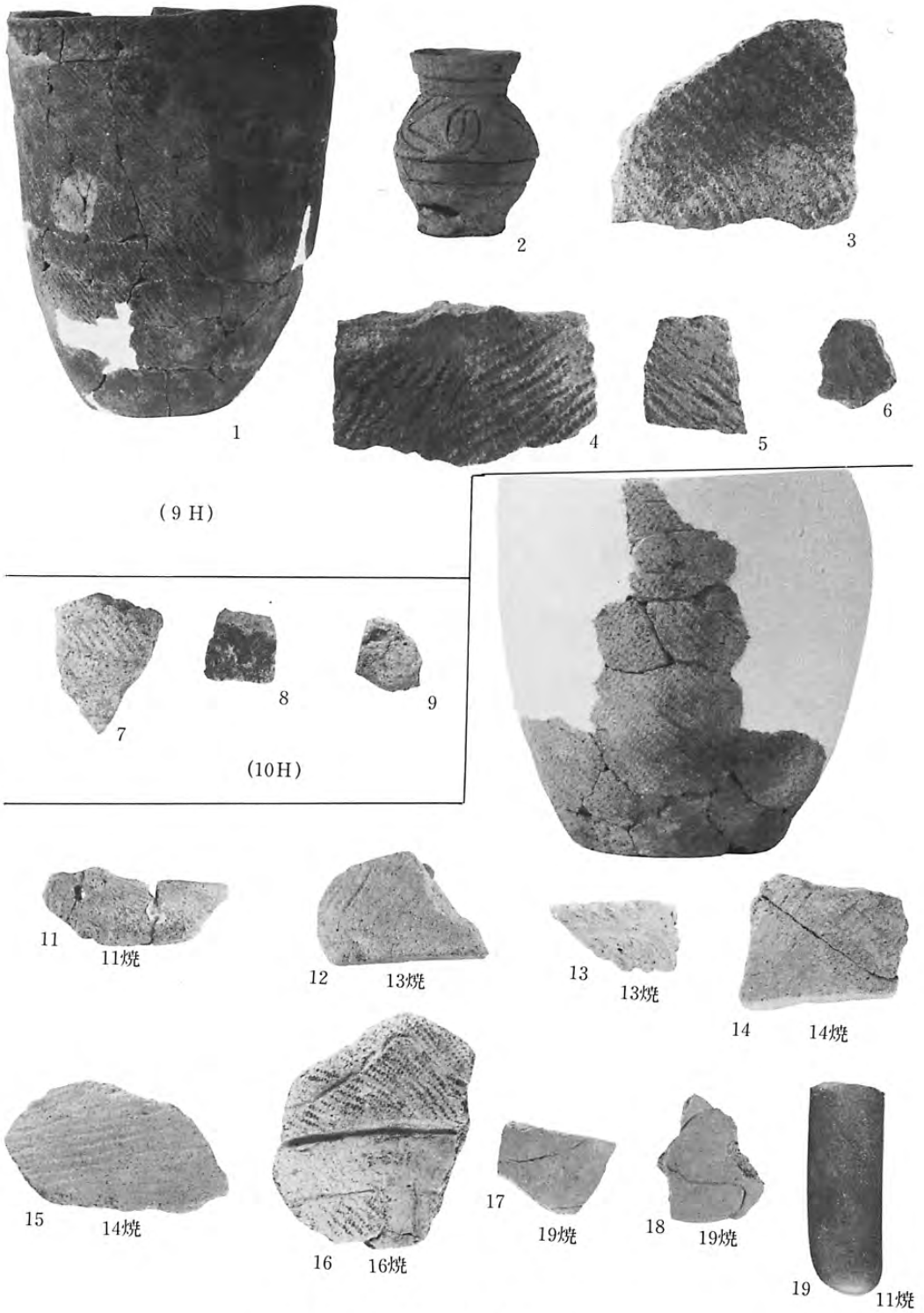


写真31 遺構内出土土器(7)



(47図23号-3)



(48図23号-1)



(49図24号-1)



(54図28号-3)



(54図28号-2)



(62図32号-1)



(62図32号-2)



(62図32号-4)



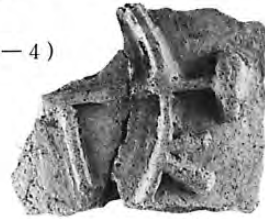
(39図40号-1)



(95図61号-1)



(35図12号)



(149図-1)



(63図32号)



(150図-1)



(150図-2)



(150図-3)



(150図-4)



(150図-5)

写真32 ピット出土遺物・遺構外出土土製品

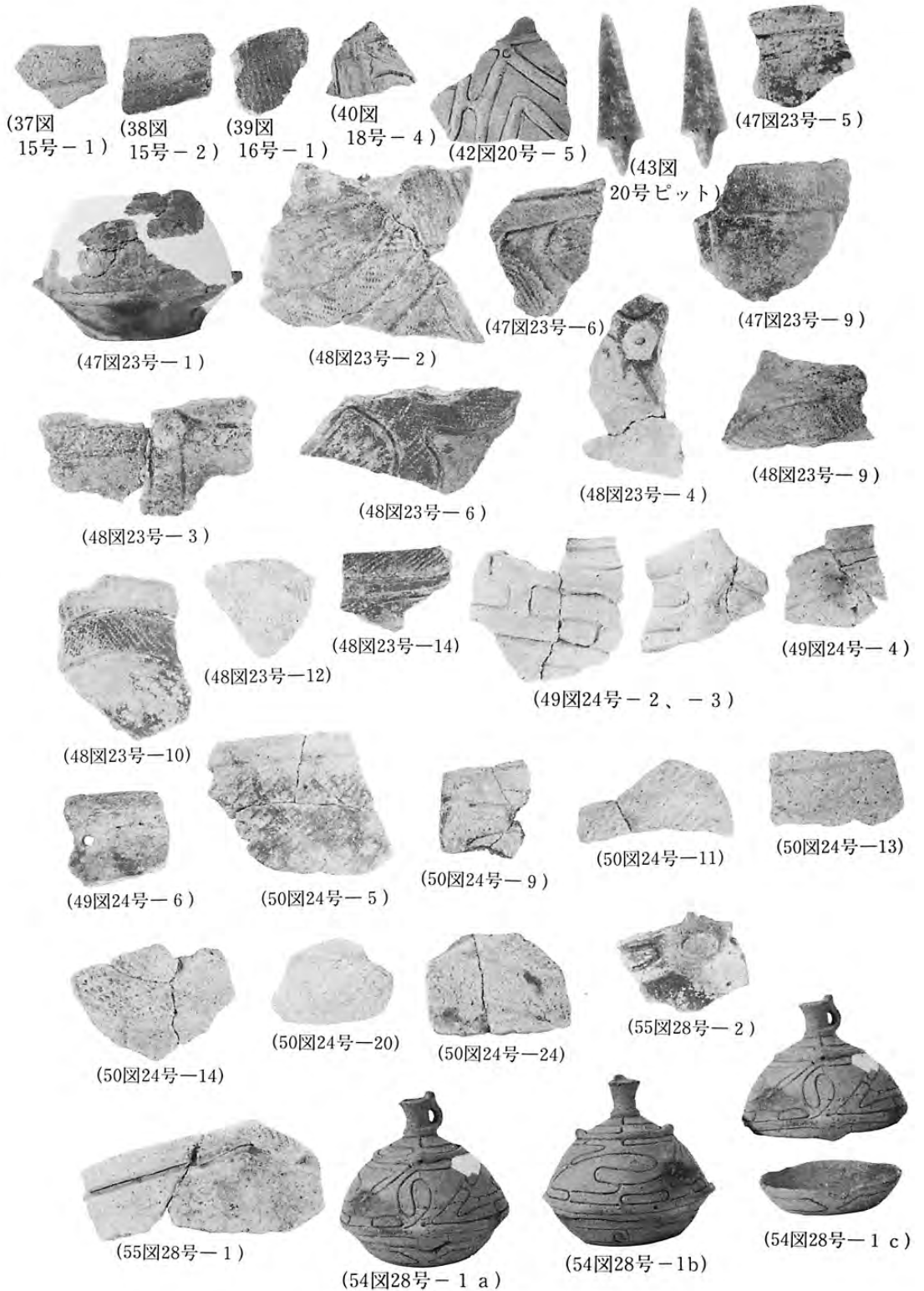


写真33 ピット出土遺物(2)

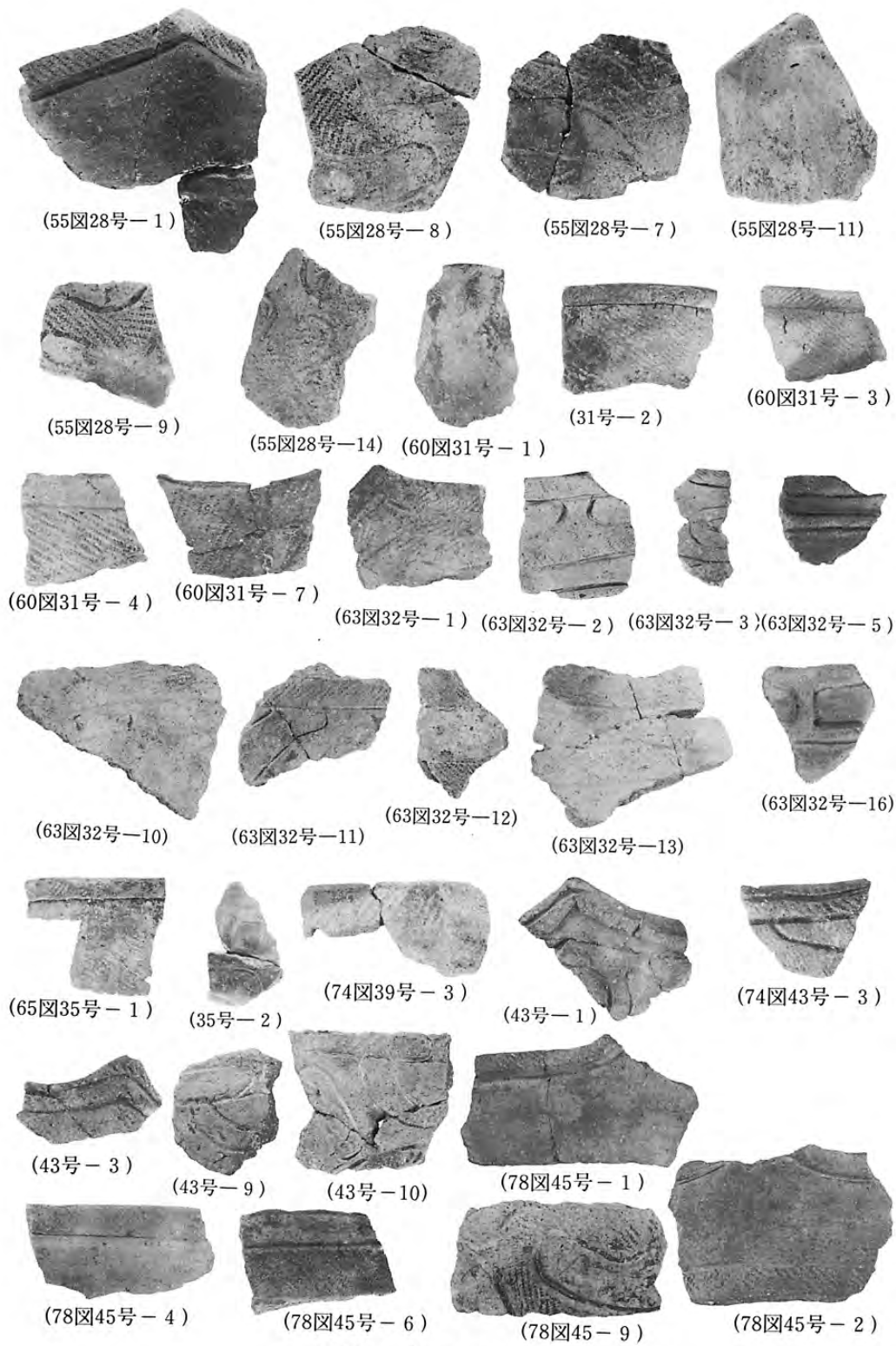


写真34 ピット出土遺物(3)

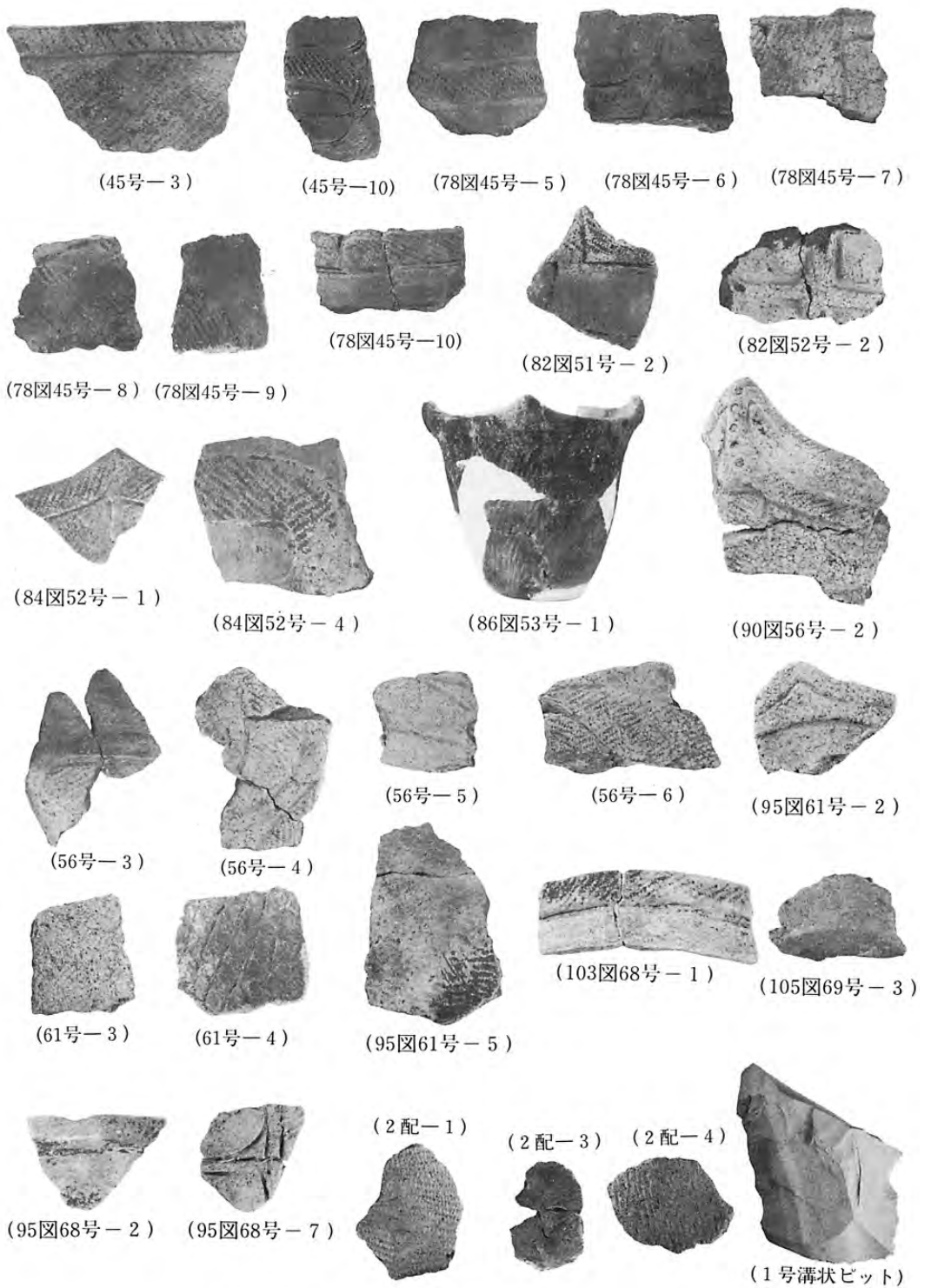


写真35 ピット・配石遺構出土遺物



写真36 第 I・III群土器

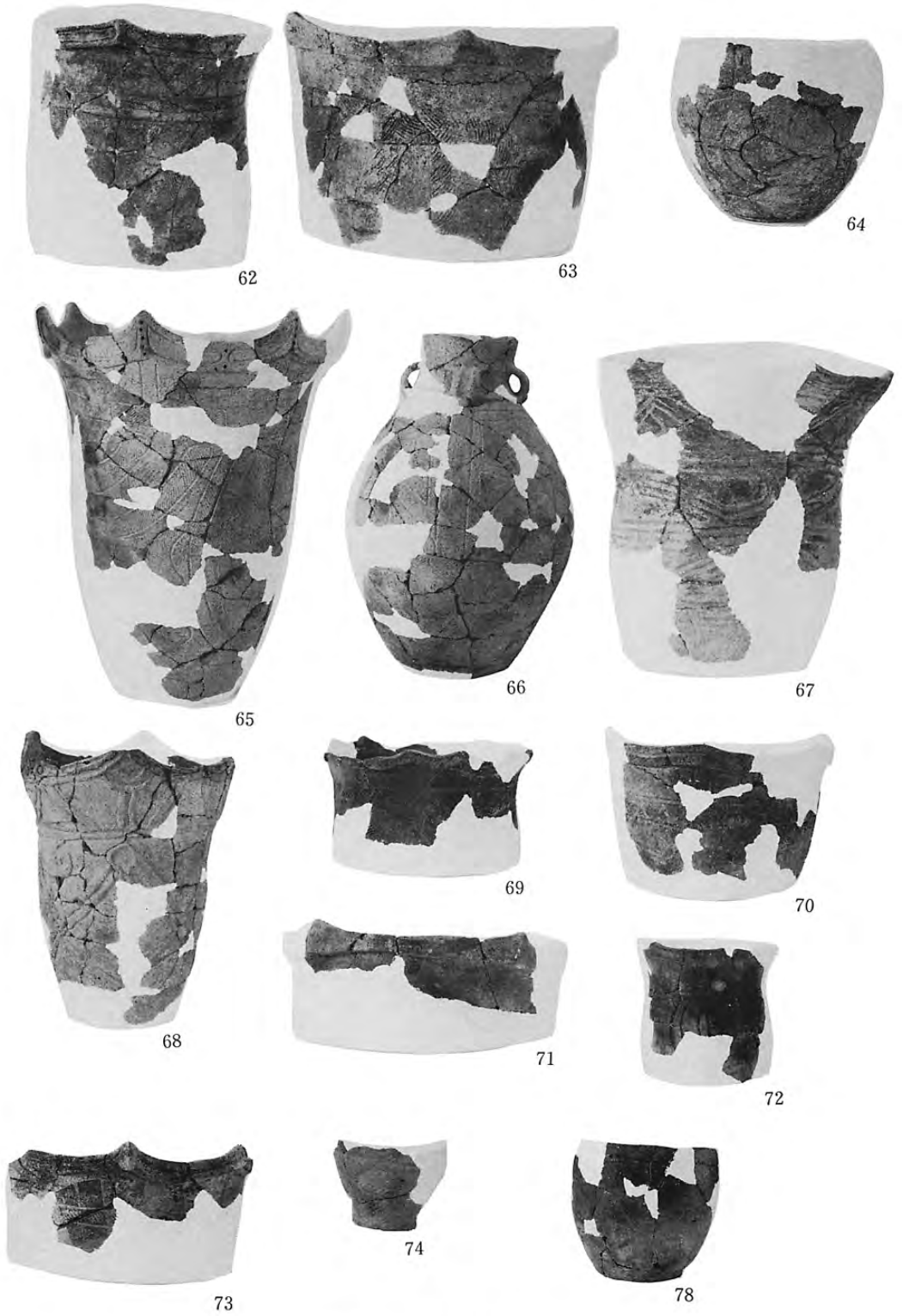


写真37 第Ⅲ群土器(1)



75



77



79



80



81



82



83



85



86



89



87



88

写真38 第Ⅲ群土器(2)

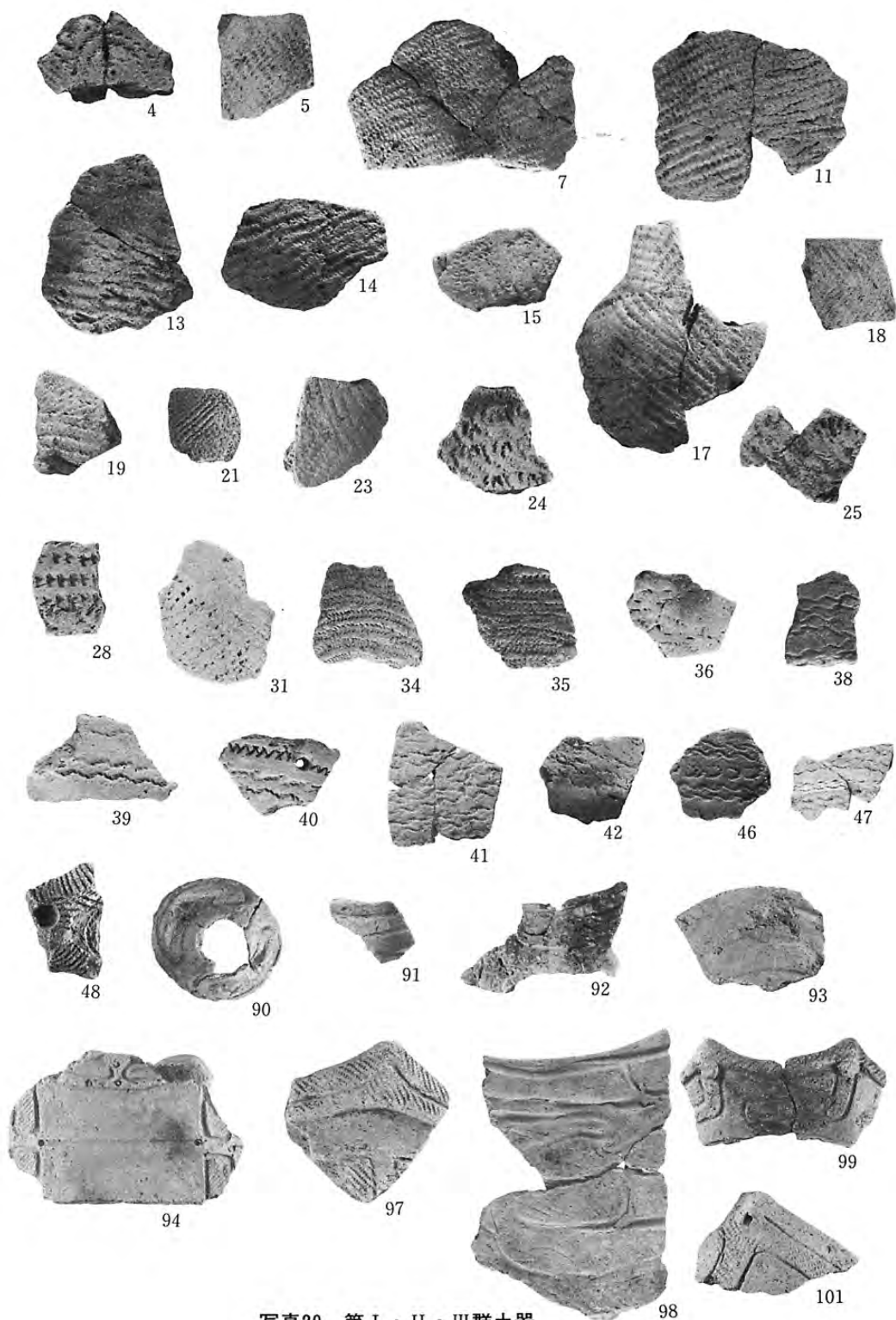


写真39 第I・II・III群土器

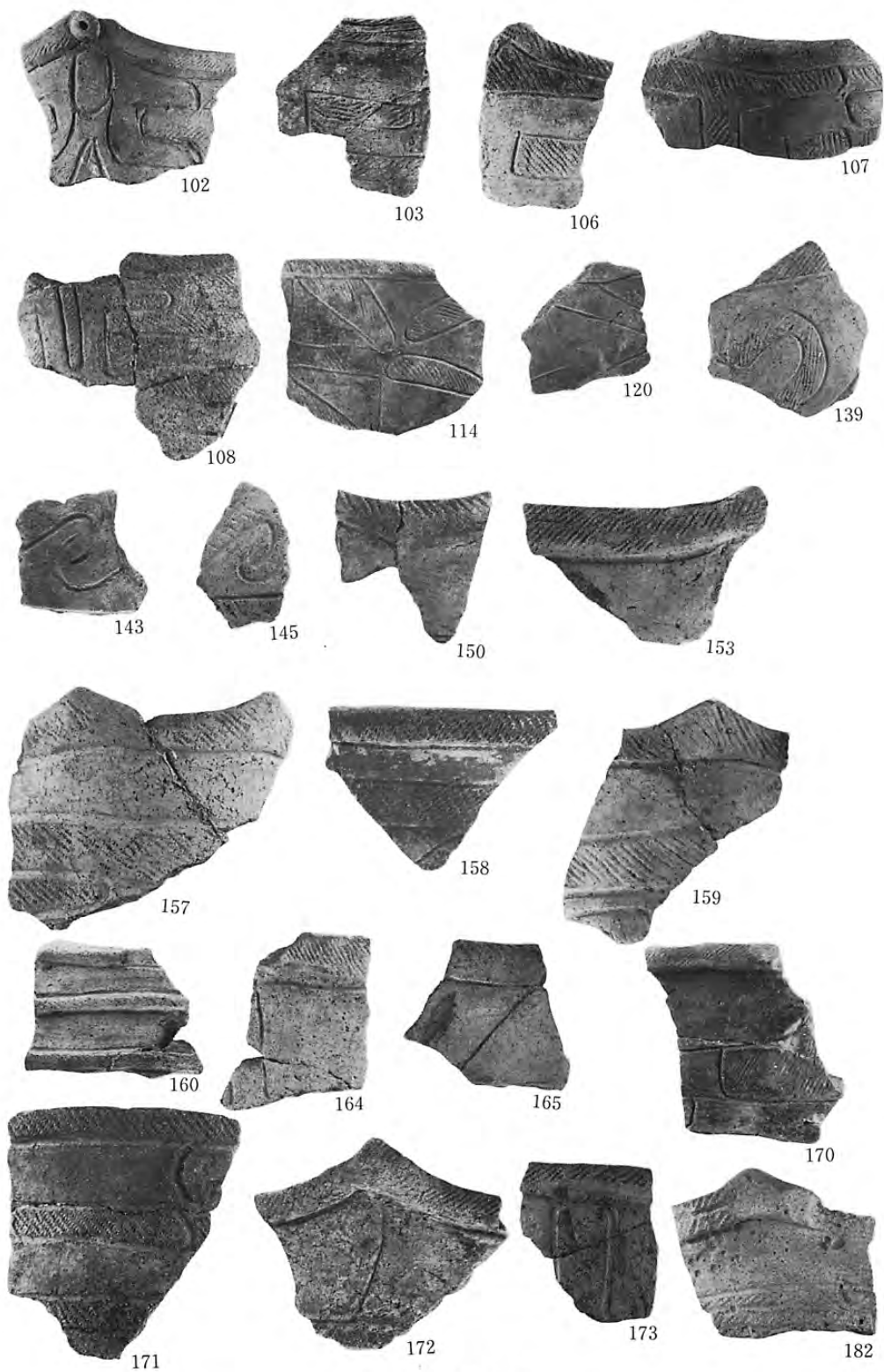


写真40 第III群土器(3)

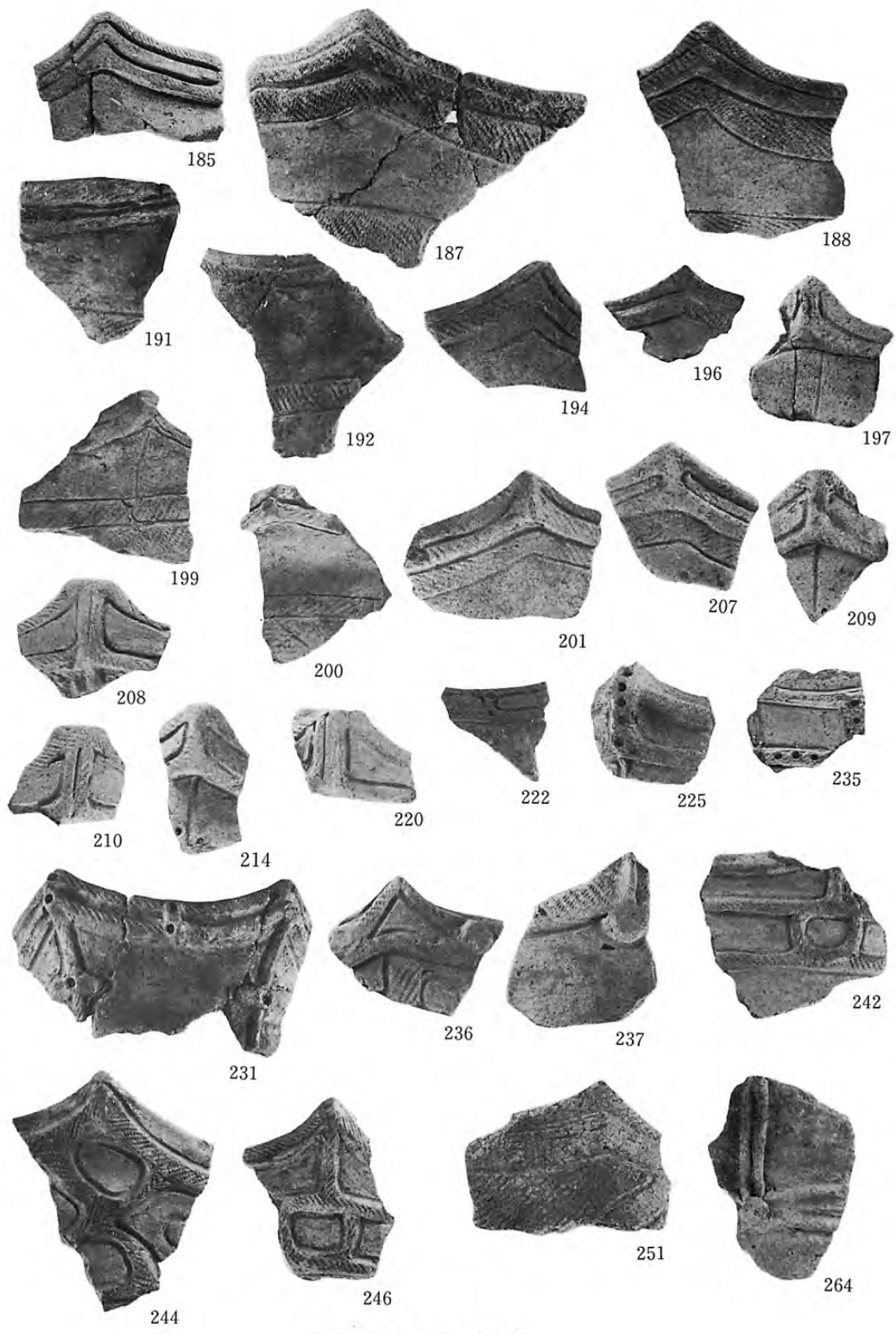


写真41 第三群土器(4)

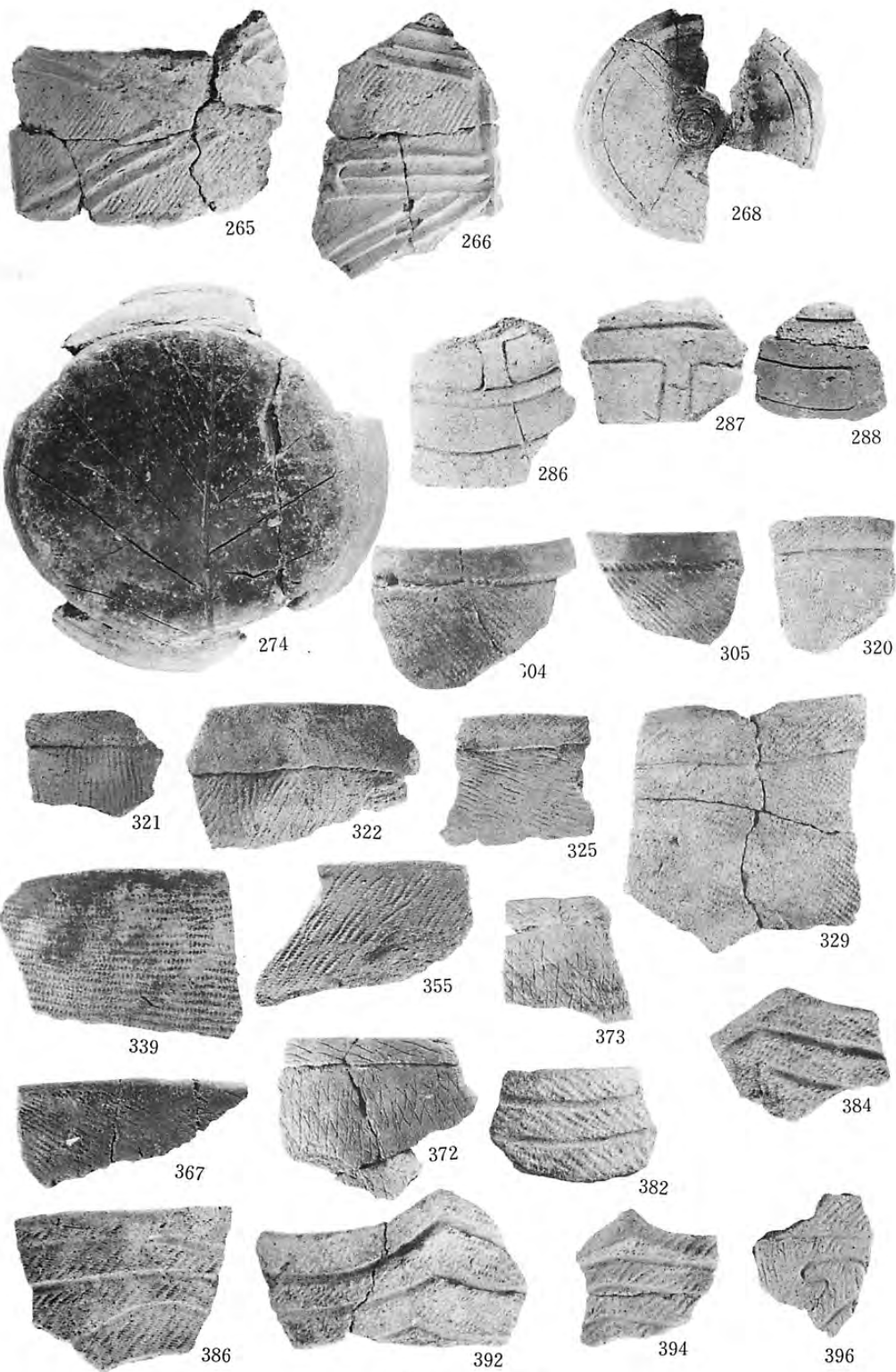


写真42 第三群土器(5)

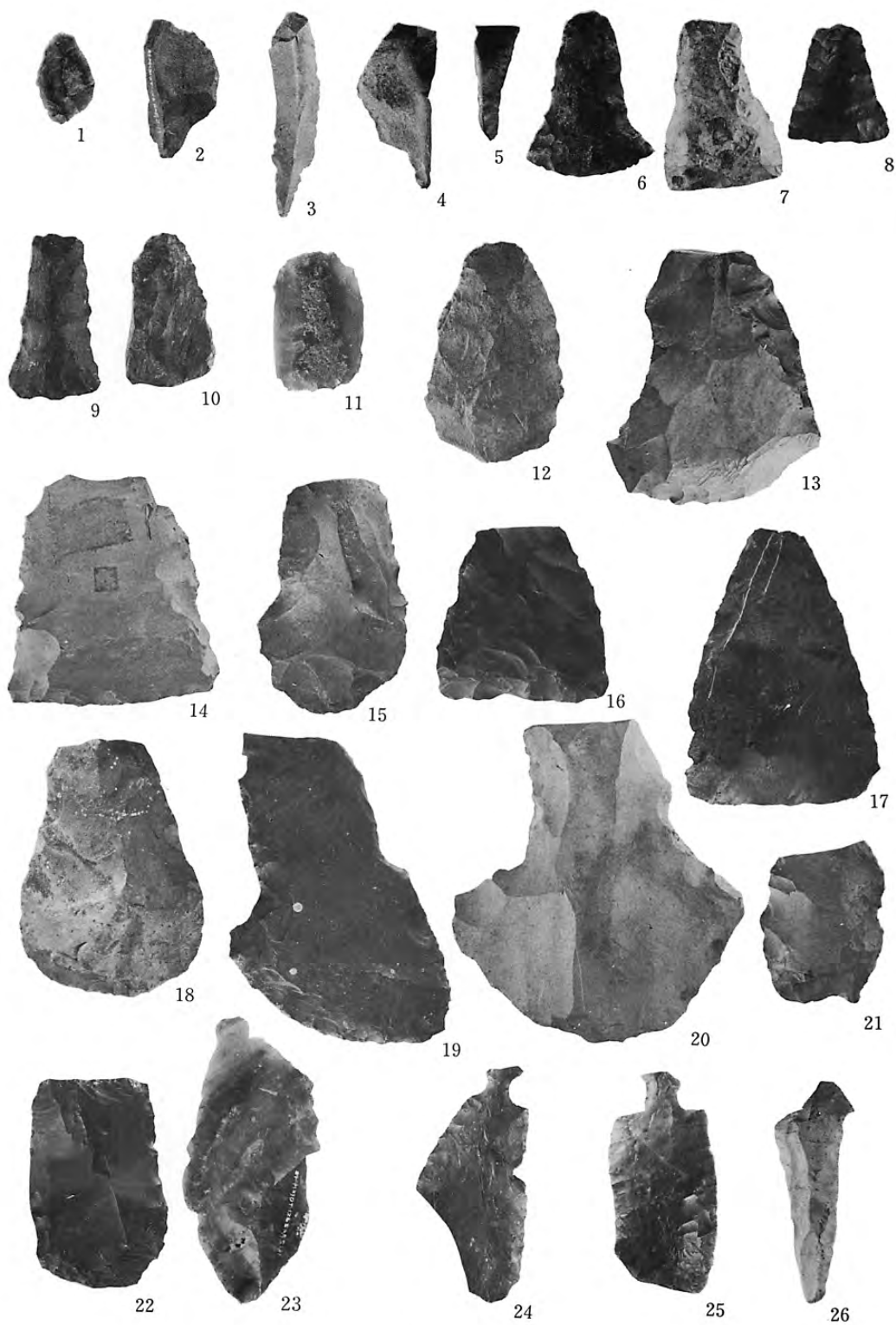


写真43 石器(1)

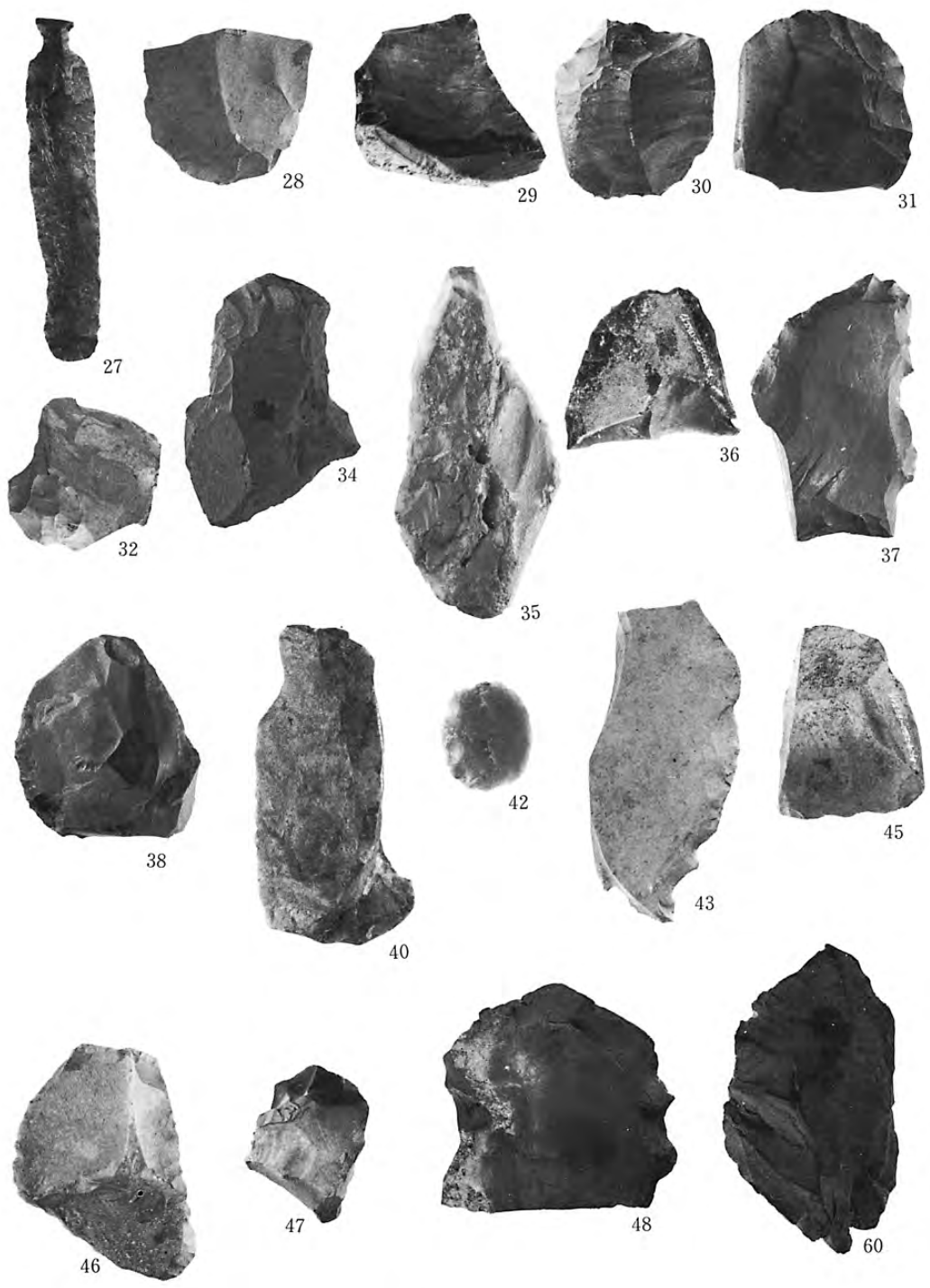


写真44 石器(2)

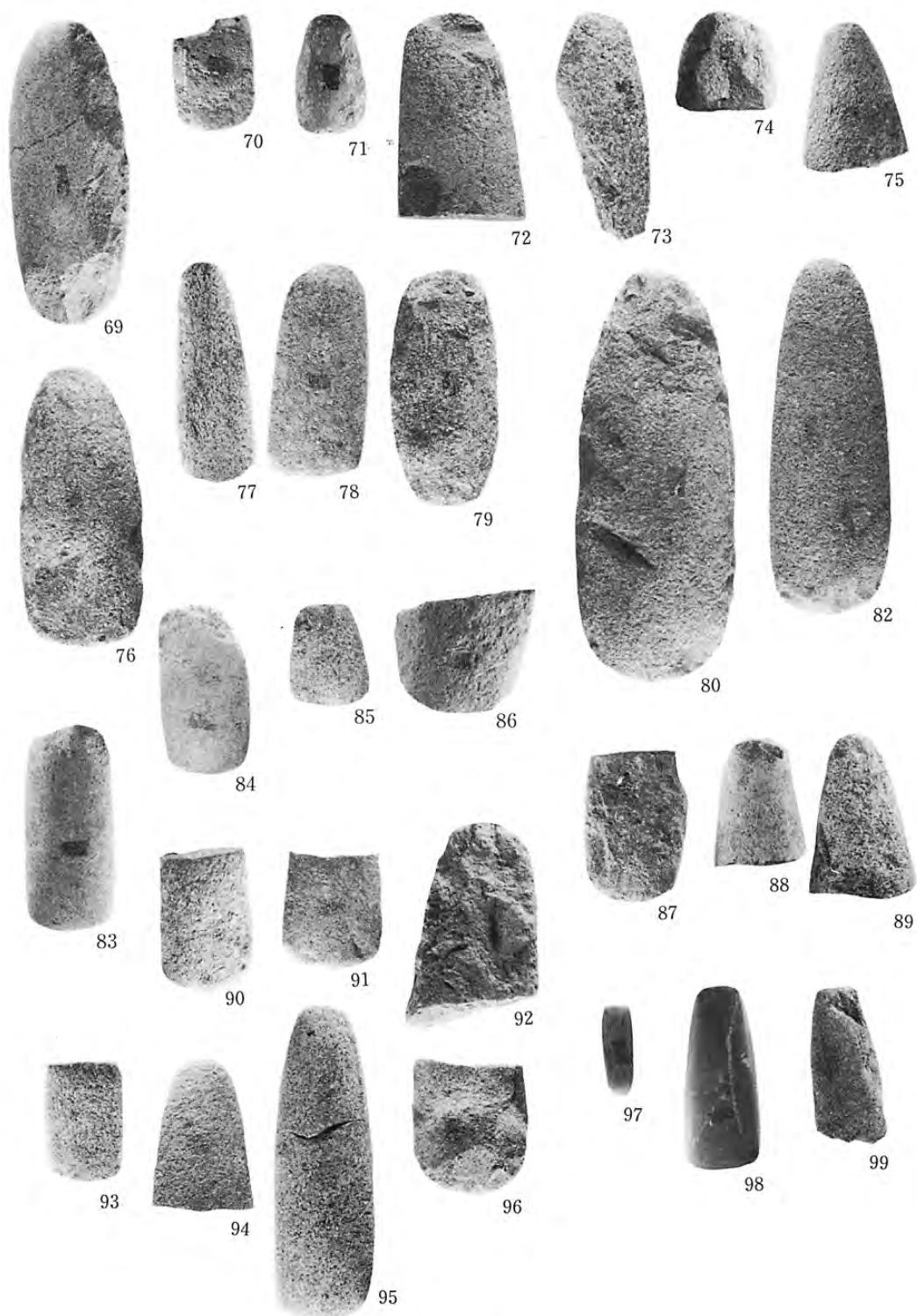


写真45 石器(3)

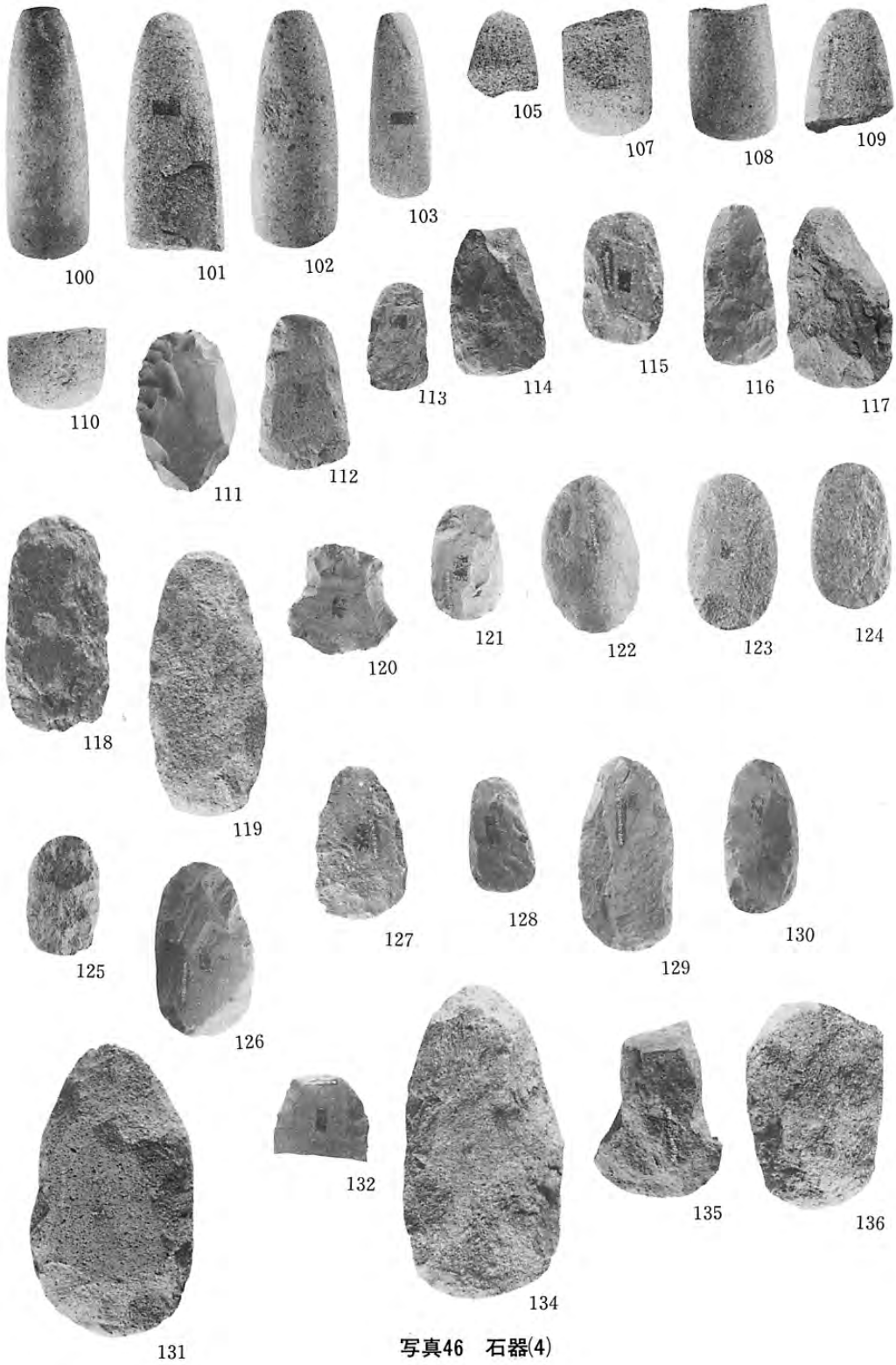


写真46 石器(4)



写真47 石器(5)

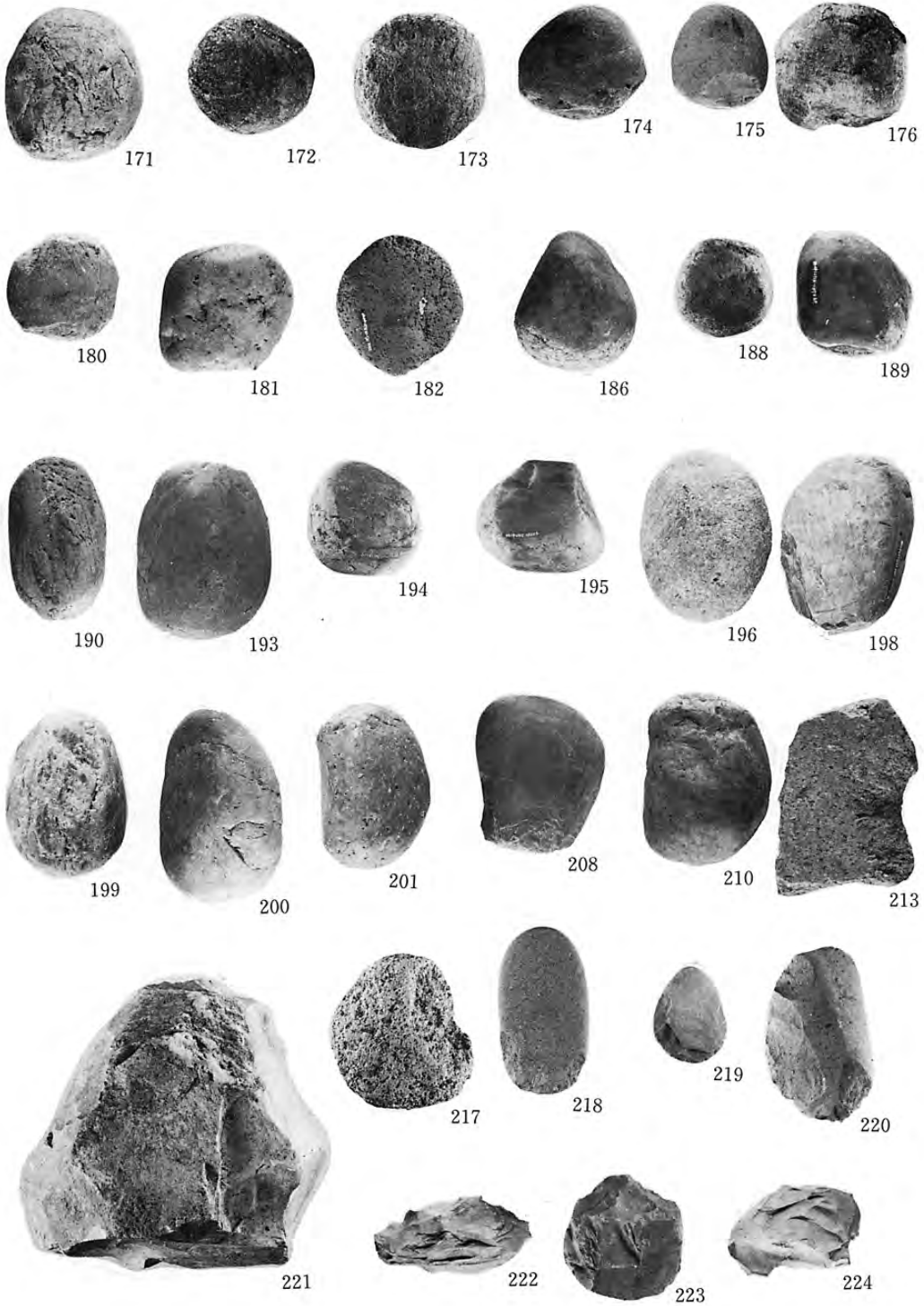


写真48 石器(6)



225



226



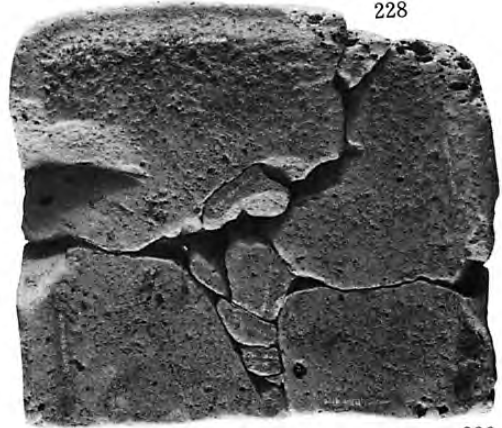
227



228



229



230



231



写真49 石器(7)

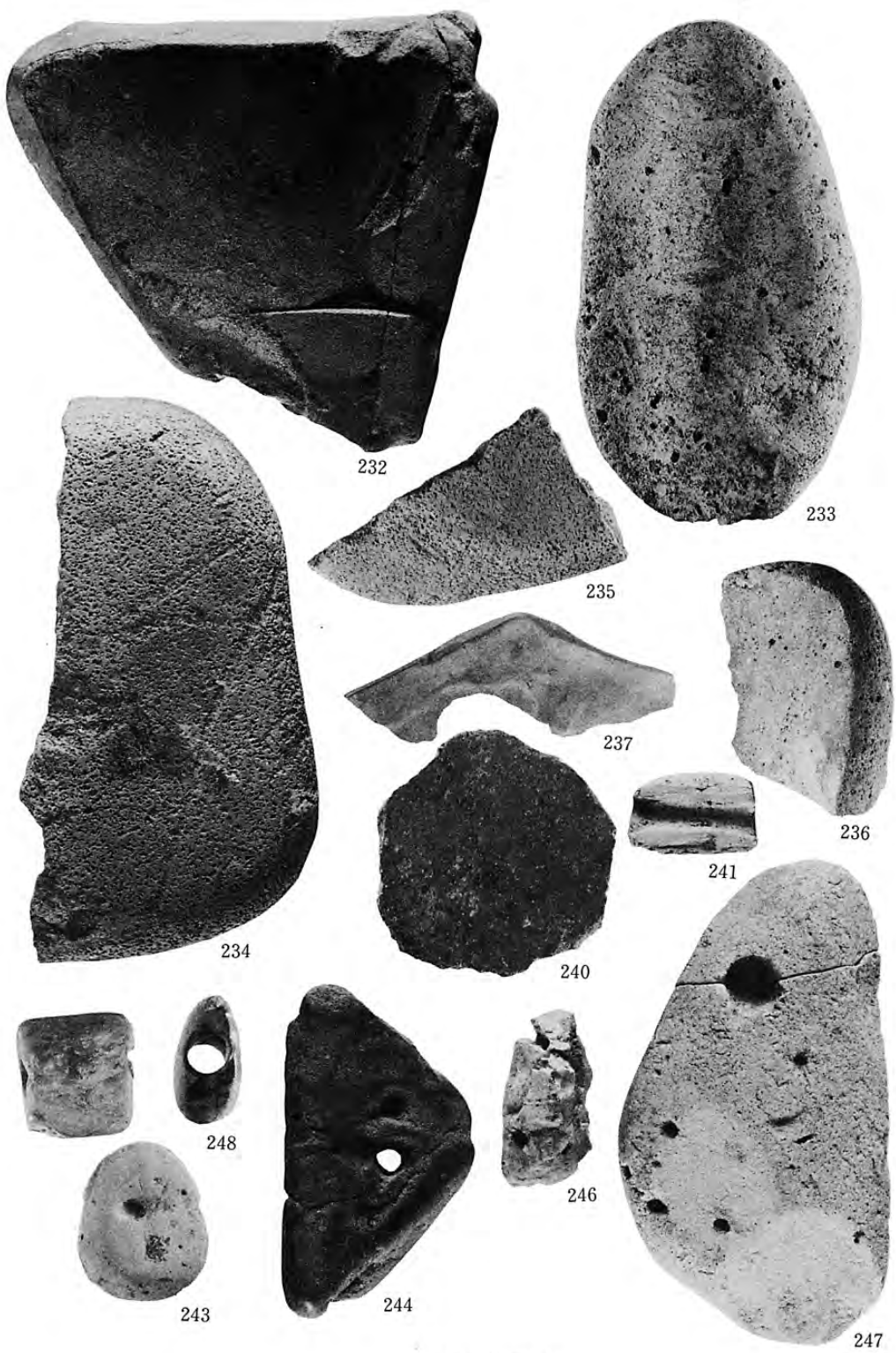


写真50 石器(8)

青森県埋蔵文化財調査報告書第101集

沖附(2)遺跡発掘調査報告書

—むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書—

発行日 昭和61年3月31日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒030 青森市大字新城字天田内152-15

印刷所 伊藤印刷株式会社

〒030 青森市合浦一丁目10-2
